

茨城県教育財団文化財調査報告Ⅷ

南守谷地区土地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書

昭和 56 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

南守谷地区土地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書

乙子遺跡
北今城遺跡
大日遺跡
座庄内遺跡
篠根入・仲原遺跡
鈴塚B・C遺跡
鈴塚古墳群
今城遺跡

南守谷地区土地区画整理事業地内
埋蔵文化財調査報告書正誤表

頁	行	誤	正
目次	下から 1	第3章	第3節
3	6	2分	二分
53	3	上り	上がり
59	下から 2	堅い	硬い
91	下から 4	未調整	未調整
168	下から 6	輪積線	輪積痕
214	4	未調整	未調整
248		11, 6号土壤土層解説	1, 6号土壤土層解説
249		鈴塚B 1号上漉土層解説	鈴塚B 1号土壤土層解説
279		18号土塊実測図	18号土壤実測図
309		16号溝土層解説	6号溝土層解説
313		21, 25~29号土壤土層解説	21, 25~26号土壤土層解説
482		(ぬけ)	篠根入仲原遺跡第18(1~3), 19(4)号住居址出土遺物(縮尺不同)
549		写75, 今城遺跡第3号住居址遺物No49	写75, 今城遺跡第3号住居址遺物No 4, 9

序

日本住宅公団による南守谷地区土地区画整理事業は、時代の要請にもとづくものであります。一方、地域開発と文化財の保護をどのように調和させるかが大切になっております。

このような時、開発地内に埋蔵文化財の包蔵地が含まれていることがわかり、財團法人茨城県教育財団が、日本住宅公団から埋蔵文化財発掘調査事業の委託をうけ、昭和52、53、54年度の3か年度にわたって、乙子遺跡ほか8遺跡の調査を実施いたしました。

この調査により、多くの新しい資料を発掘し、郷土の歴史の解明に貴重な成果をあげることができました。

この冊子は、3か年度にわたる南守谷地区土地区画整理事業区域内の埋蔵文化財発掘調査報告書として執筆・編集したものです。この報告書が上梓されるまで種々御協力いただいた日本住宅公団、守谷町教育委員会、地元関係者及び御指導いただいた茨城県教育庁文化課の各位に対し、心から感謝を申し上げます。

おわりに、本書が学術研究の資料としてはもとより、教育資料としても広く活用されることを希望してやみません。

昭和56年3月

財團法人 茨城県教育財団

理事長 竹内藤男

例　　言

1. 本書は、財団法人茨城県教育財団が、日本住宅公団の委託を受けて実施した「南守谷地区土地区画整理事業地区の埋蔵文化財発掘調査」の報告である。
2. 調査は、茨城県教育委員会の指導のもとに、財団法人茨城県教育財団調査課が実施した。
3. 本書には、昭和52年度から54年度にかけて実施した調査結果をあわせて掲載した。
4. 発掘調査後の出土品整理、報告書作成は、当教育財団調査課が実施した。
5. 昭和52～55年度の南守谷地区土地区画整理事業地区内の発掘調査に関する組織は、次のとおりである。

理　事　長	竹内藤男	(茨城県知事)
副理事長	大金新一 古橋靖	(茨城県教育長、昭和52年4月～54年6月) (茨城県教育長、昭和54年7月～)
常務理事	川野辺四郎	(昭和52年4月～)
事務局長	大内秀夫 小林義久	(昭和52年4月～55年3月) (昭和55年4月～)
課　　合　　長	川俣吉之助 大原博	(昭和52年4月～55年3月) (昭和55年4月～)
企画管理班長	坪秀雄	(昭和54年4月～)
企画管理班	川崎嶽 鈴木三郎 栗田孝志	(昭和52年4月～54年3月) (昭和52年4月～) (昭和53年4月～)
調　　査　　第　　1　　班	能島清光 佐藤正好 中沢時宗 青木義夫 和田雄次	(昭和52年、53年度班長) (昭和52年度調査、昭和53年度整理・執筆) (昭和53年度調査、昭和54年度整理・執筆) (昭和54年度班長) (昭和54年度調査、昭和55年度整理・執筆)
整　理　班	高根信和	(昭和55年度班長)

6. 本書に用いたレベル値は、海拔高であり、地形図は、日本住宅公団のExpressplanをトレスしたものである。
7. 本文中、各遺跡の番号を伴う表現には次のような記号を用いた。

S A - 横列, S I - 住居址, S K - 土壙, S D - 溝,

8. 発掘調査にあたっては、茨城県教育委員会、日本住宅公団、守谷町教育委員会、地元協力員等の御協力を得、鈴木洋一、鰐淵和彦氏及び、茨城大学生に多大な援助をいただき、文末であるが謝意を述べたい。

目 次

序

例 言

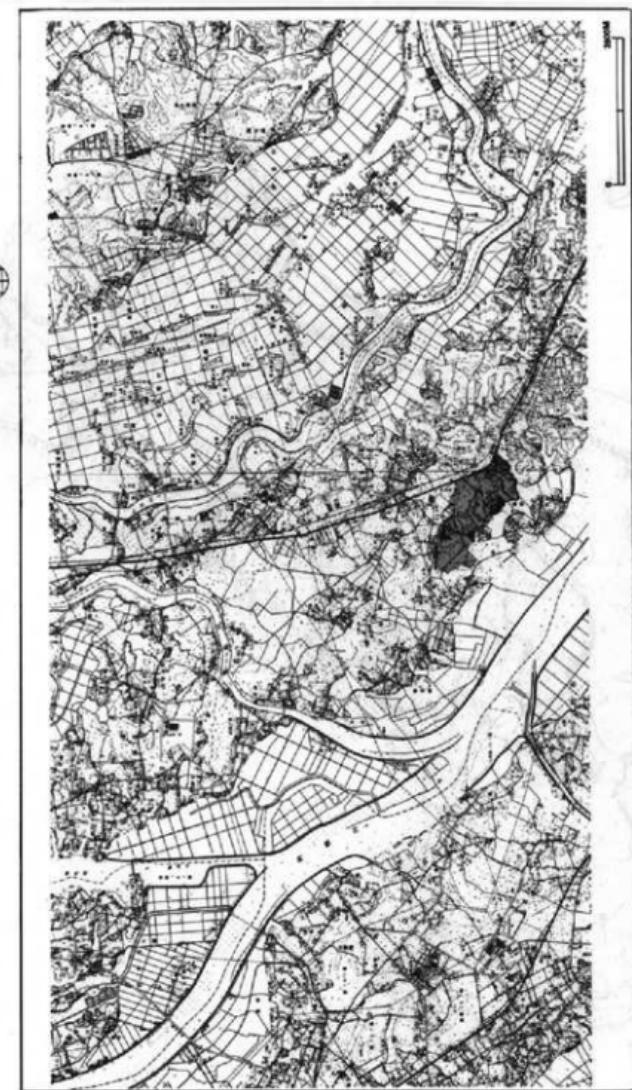
目 次

図 版

第1章 調査経緯	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査方法について	5
第4章 乙子遺跡	5
第1節 調査の経過	5
第2節 遺構と遺物	9
1. 遺 構	9
2. 遺 物	25
第5章 北今城遺跡	33
第1節 調査の経過	33
第2節 遺構と遺物	39
1. 遺 構	39
2. 遺 物	75
第3節 まとめ	102
1. 石製模造品について	102
2. 住居址・土壤について	106
3. 出土遺物について	107
4. 考 察	108
第6章 大日遺跡	113
第1節 調査の経過	113
第2節 遺構と遺物	113
1. 遺 構	113
2. 遺 物	135
第3章 まとめ	167

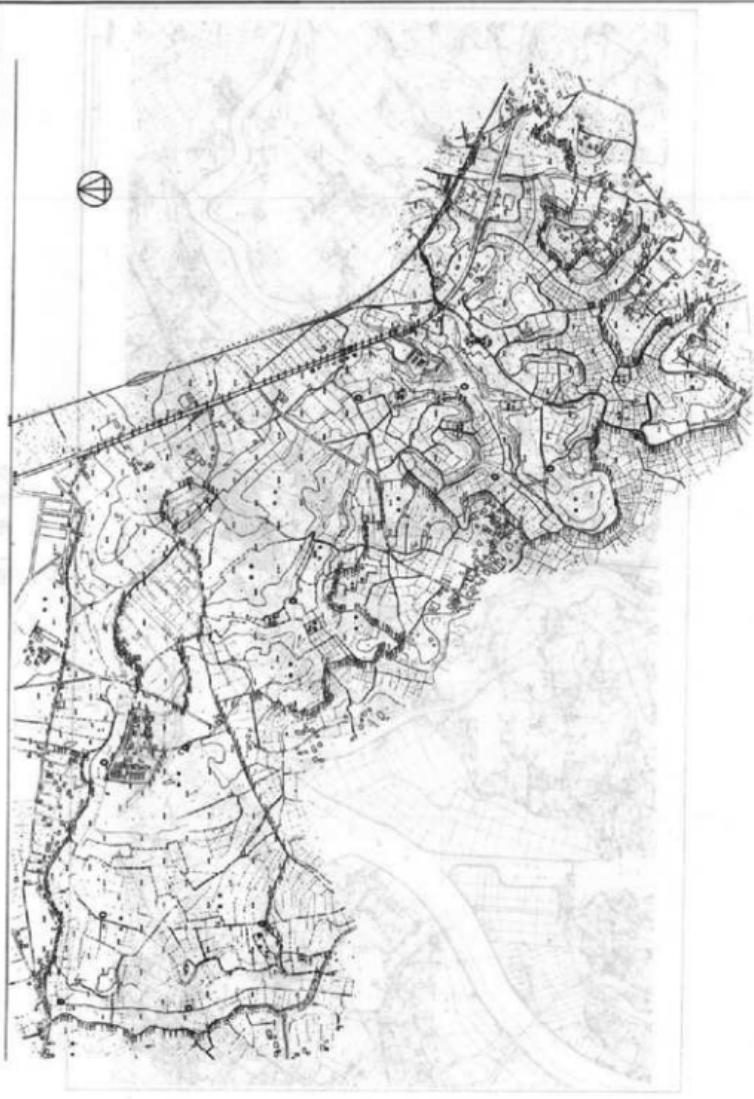
第7章 岸庄内遺跡	170
第1節 調査の経過	170
第2節 遺構と遺物	170
1. 遺構	170
2. 遺物	173
第3節 まとめ	173
第8章 篠根入・仲原遺跡	174
第1節 調査の経過	177
第2節 遺構と遺物	180
1. 遺構	180
2. 遺物	207
第3節 まとめ	238
第9章 鈴塚B・C遺跡	241
第1節 調査の経過	241
第2節 遺構と遺物	241
1. 遺構	241
2. 遺物	247
第3節 まとめ	252
第10章 鈴塚古墳群	254
第1節 調査の経過	254
第2節 遺構と遺物	254
1. 遺構	254
2. 遺物	257
第3節 まとめ	258
第11章 今城遺跡	263
第1節 調査の経過	263
第2節 遺構と遺物	265
1. 遺構	265
2. 遺物	318
第3節 まとめ	372

圖1 南守谷



④

图2 南宁谷地区土质调查地区



(表1参照)

図3 南寧谷地区土地区画整理事業地内における運動分布状況図



第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

日本住宅公団が行う土地区画整理事業は、茨城県北相馬郡守谷町大字守谷、高野、大柏、鈴塚及び乙子にまたがる約160.7haに及ぶ地域である。

ここに教育施設、商業行政センター、集合住宅、供給処理施設、公園緑地の整備等を基とし、人口21,000人の新住宅市街地を建設しようとする大規模な開発計画である。

このため、日本住宅公団と茨城県教育委員会は埋蔵文化財の取扱いについて数次にわたり協議を重ね、鈴塚古墳群の一部を緑地として保存する事を決定したが、守谷町教育委員会から要望のていた今城遺跡については、茨城県教育委員会、日本住宅公団及び、守谷町教育委員会が協議を重ねその結果今城遺跡の一部、3,000m²を現状保存緑地とし他は、記録保存の措置をとる事で合意した。

茨城県教育委員会は、この埋蔵文化財発掘調査について昭和52年度に発足した、財團法人茨城県教育財団を指定した。これにより当教育財団は、昭和52年4月1日付けて日本住宅公団との間で南守谷地区上地区区画整理事業の施行に伴う埋蔵文化財発掘調査及び出土品の整理、報告書刊行に関する覚書並びに委託契約を締結し、日本住宅公団常総開発事務所と調査担当者が協議を重ね施行計画を基に調査を進める事に相なった。

第2節 調査遺跡

南守谷地区土地区画整理事業地域内における発掘調査の遺跡と年度別は次表のとおりである。

年 度	遺 跡 名	番 号	地 番	面 積
昭和52年度	北今城遺跡	D-2・3	守谷町大字高野字北今城773・783外	7,507m ²
	乙子遺跡	D-4	守谷町大字乙子字柿の沢542外	16,983m ²
昭和53年度	大日遺跡	A	守谷町鈴塚大日223外 守谷町高野字五十塚1529	12,759m ²
	座庄内遺跡	B-1	守谷町大柏字庄内1241	3,741m ²
	蘇根入遺跡	C-1	守谷町字守谷蘇根入甲3117	1,551m ²
	仲原遺跡	C-2	守谷町字守谷蘇根入3105	1,996m ²
		C-3	守谷町大字高野字仲原895	1,993m ²
	北今城遺跡	C-4	守谷町大字高野字仲原908外	396m ²
		C-5	守谷町大字高野字仲原911外	4,758m ²
昭和54年度	鈴塚遺跡	D-1	守谷町大字高野字北今城783外	10,037m ²
		B	守谷町高野字瓜代2110	2,277m ²
	今城遺跡	C	守谷町鈴塚字久保441	5,230m ²
		E	守谷町高野字南今城1024外 (3,000m ² 保存)	6,309m ²
	鈴塚古墳群	F	守谷町大字鈴塚字五十塚	12,550m ² (2,738m ² 保存)

表1 南守谷地区土地区画整理事業地域内の年度別発掘調査遺跡

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

守谷町は茨城県の南部に位置し、東は取手市、北は水海道市と隣接し、南と西は利根川を挟んで千葉県柏市、野田市と接している。また、鬼怒川が南下して利根川と合流し、北東は小貝川を挟んで谷和原村に接している。このように、守谷町は西・南・北東の三方面を川に挟まれたかたちになっている。

この中に、北部からの猿島、北相馬台地が伸び、その周辺部は台地と低地が樹枝状に入りくみ、複雑な地形となっている。

この台地を概走している主要国道294号線と関東鉄道常総線とが、台地を東西に2分したかたちになっている。

近年、開発がさかんに行なわれているが、それは西側においてさかんで、計画されているのが国道の西側、南部の取手市側より行われている。

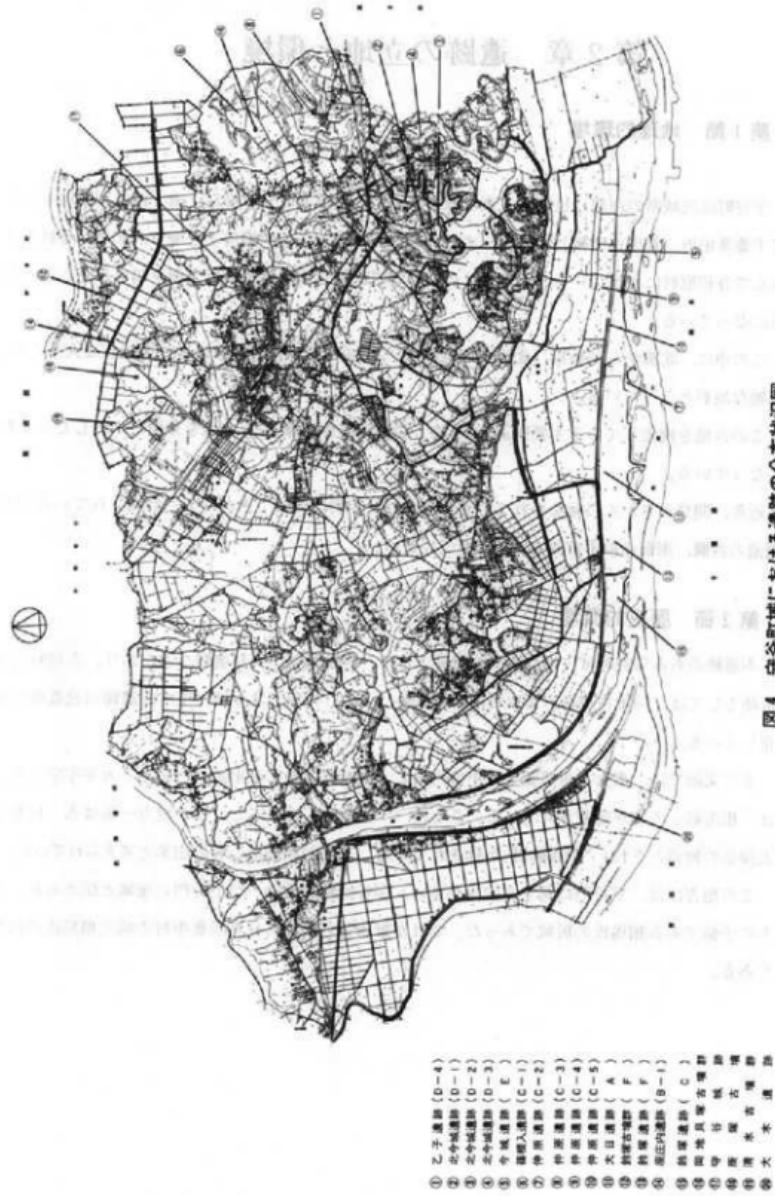
第2節 歴史的環境

本遺跡のある守谷町は、縄文時代の遺跡として、同地貝塚、大日遺跡などがあり、古墳時代の遺跡としては、同地古墳群、清水古墳群のほか、大木、仲原、北今城、岸庄内遺跡の包蔵地が分布している。

また文献では、東大寺所傳養老五年の戸籍に「倉麻群」の名が始め、同じく天平宝字六年には「相馬郡」の名が記載されている。さらに、「神鳳抄」によると、この地方一帯は古く伊勢卓太神皇の神領とされ、「相馬御厨」と称されていた。これが相馬郡の名の由来と考えられている。

この地方には、平将門に関する伝説が多い。守谷城跡もその一つで将門の築城と伝えられ、後その子孫である相馬氏の居城であった。これが野馬追いで知られる陸奥中村の城主相馬氏の祖先である。

図4 守谷町域における道路の分布状況図



第3章 調査方法について

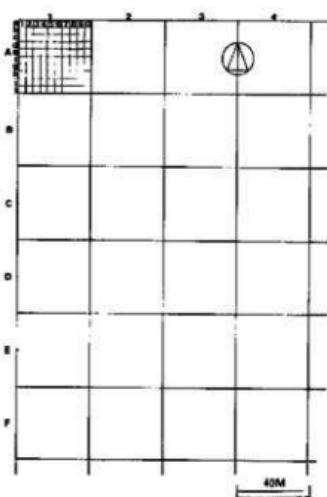


図5 グリッドの呼称方法概念図

調査区グリッド設定は、調査対象区域内に設定されている日本住宅公団杭（公團所有、二等多角点）を基準として定め、真北線上にX軸、東西にY軸の40m四方の大調査区を設定し、さらにその大調査区内を4m四方の 小調査区に分割した。調査遺跡内グリッド設定は全てこの様に定めた。

また、グリッド名称は、大調査区において北から南へ、アルファベットで、A, B, C……西から東へ数字で、1, 2, 3……と表現し、小調査区においても北から南へ、a, b, c……jと小文字で表わし、西から東へ、1~0の数字で表現し、大調査区内において100ヶの小調査区をもうけ、調査区名称を、A-1, a-1, A-1, b-1, B-1, a-1, の様に表わした。

また調査区においても、全体面積の遺構確認調査、遺構検出、拡張、遺構調査、遺物に同じくても分層調査を実施した。

第4章 乙子遺跡

遺跡は、守谷町大字乙子字柿ノ沢542外に位置し、台地東側に立地する。台地北側は浅い谷地形を呈している。遺跡中心部の標高は、21.20mで水田面との比高は、1.2mであり、谷をはさんで西側に位置する北今城遺跡と対峙している。

第1節 調査の経過

本遺跡の発掘調査は、昭和52年6月1日より12月22日であった。

先ず、遺跡の概要を把握する為に、グリッド調査を実施し、遺構の検出確認をした。

その結果は、後述する、住居址9軒、土壙6基、溝状遺構1基が検出された。

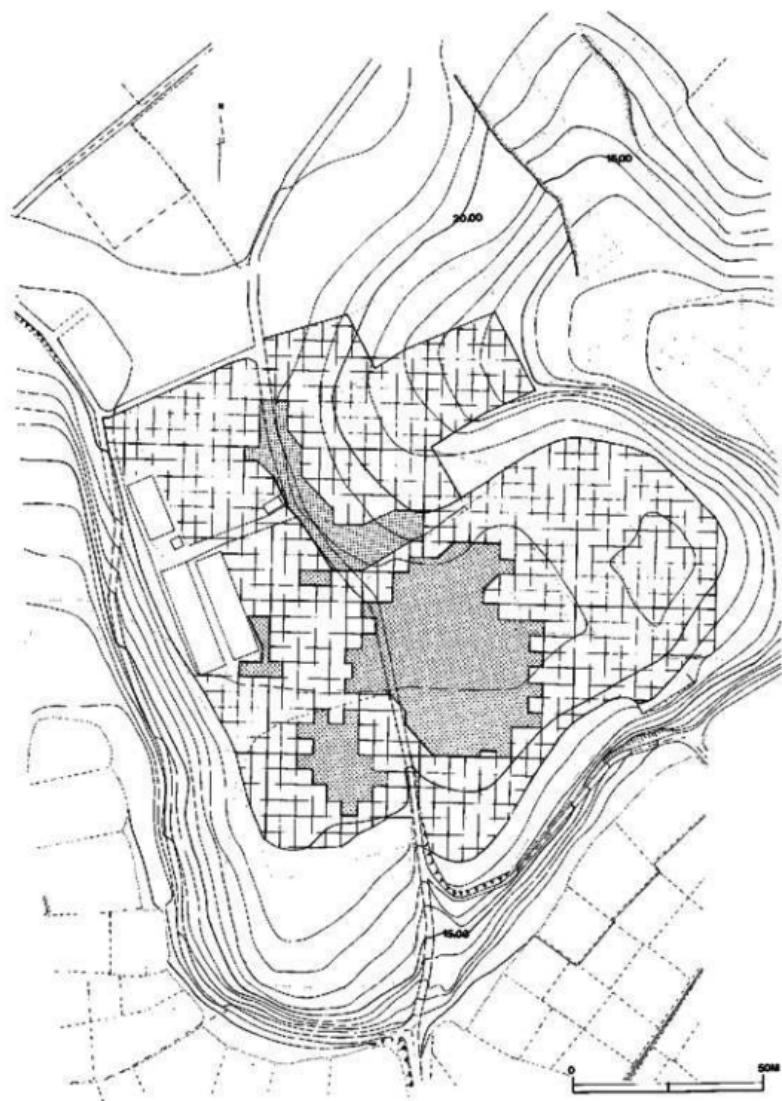


図6 乙子遺跡グリッド配置図
(調査区域)

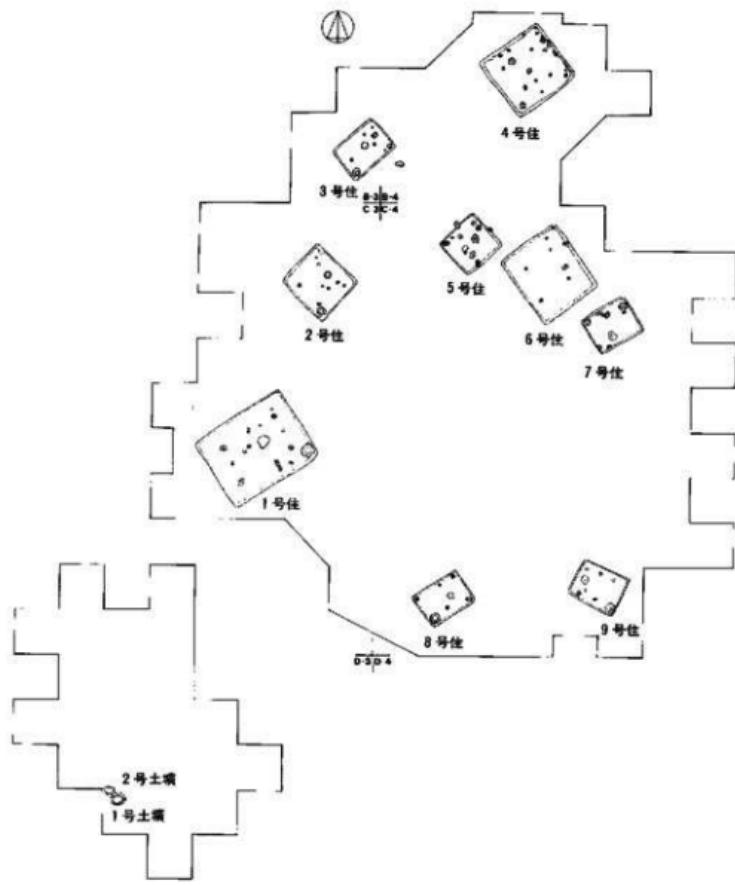
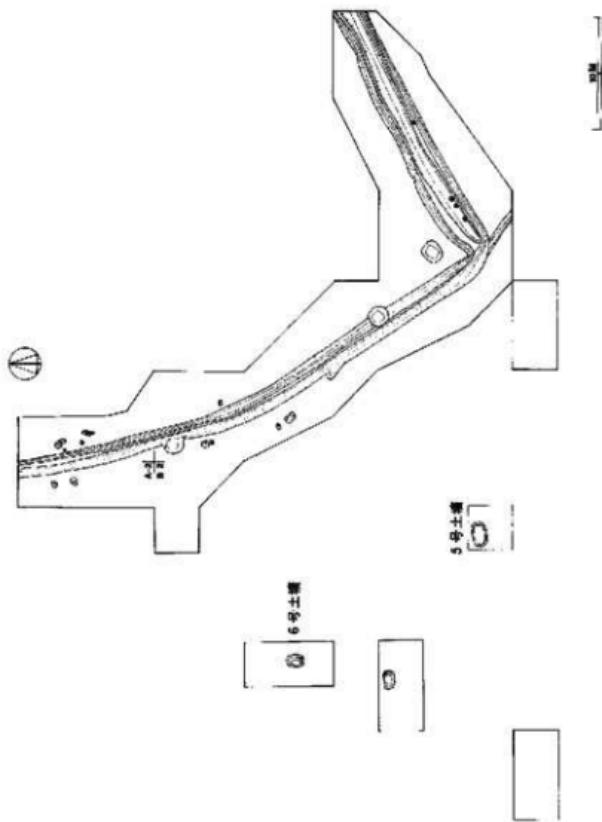


图7 乙子遗址(D-4)遗构探出状况图

圖 8 乙子遺跡 (D-4) 遺構檢出狀況圖



以下、月別に調査経過を記してゆきたい。

- 6月 調査区域内の清掃及び調査区設定のための杭打ちを実施し、南守谷住宅公園、基準杭を基とし真北線上に基準杭を求めてX軸、Y軸を設定した。
- 7月～8月 調査前、全般を撮影し、調査区全域に対して発掘調査を実施した。遺跡東側地区に堅穴住居地、土壙等の遺構が検出され、遺物が濃密に伴出していた。
- 9月～10月 乙子遺跡内検出遺構は、住居址9軒、土壙6基を数え、遺跡北側部分に溝状遺構が検出された。各遺構の調査、平面図、断面図作成作業を実施し、溝状遺構の調査を継続した。
- 11月～12月 乙子遺跡内検出遺構の測量、写真撮影を継続し、北今城遺跡の調査準備に入る。12月22日をもって、乙子遺跡の発掘調査を終了した。

第2節 遺構と遺物

1 遺構

(1) 住居址

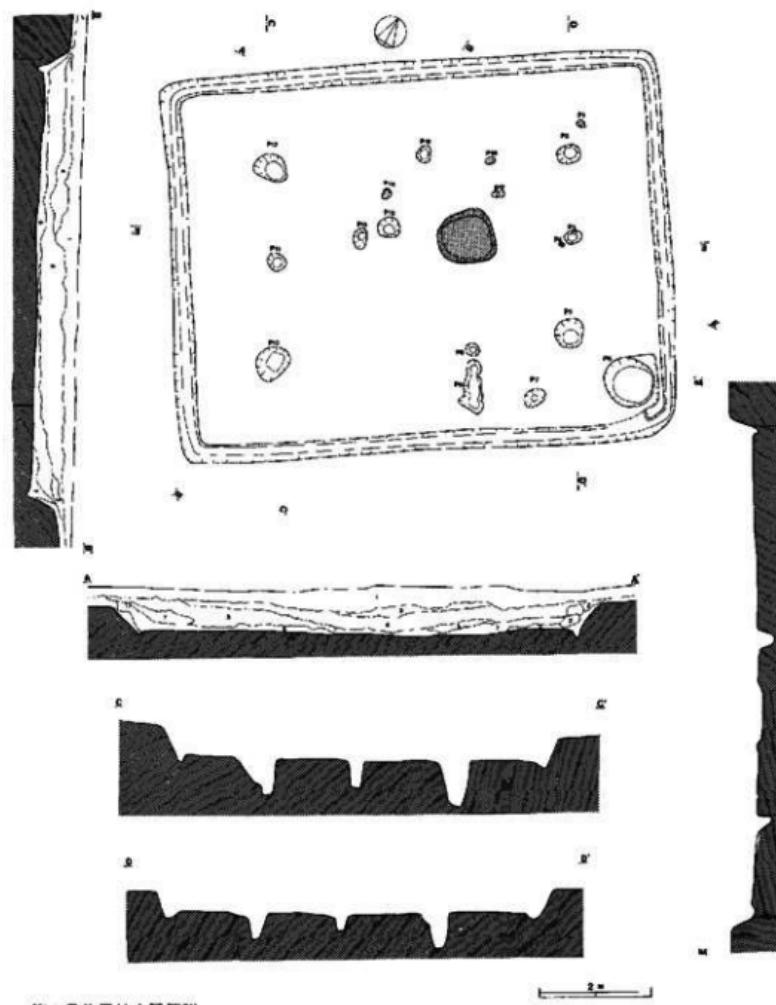
第1号住居址(図9)

東西に袖長8.93m×6.85mを測り長方形を呈する大型の住居址である。主軸方向、N 57°E、調査区、C-3、d、e、f-7・8・9区に位置し、床面のレベルはほとんど変らずよく踏み固められておりが付近がとくに固い。壁は直立であり、立ち上がりがしっかりしており壁溝は一周している。壁高は50cmを計る。

炉は住居址中央よりやや西側に寄った位置にあり、Pitは18本検出されたがそのうちの方形に並んでいる4本(P₂・P₅・P₁₀・P₁₂)が主柱穴と思われる。東壁下コーナーに貯蔵穴(P₆)がある。0.90m×0.90m程度の方形である。内部からは、少量の土器片が出土したにすぎない。遺物は、球形土器・堆積土器・複形土器・壺形土器・手捏土器・土玉・有孔円板・刻形品が出上している。

第2号住居址(図10)

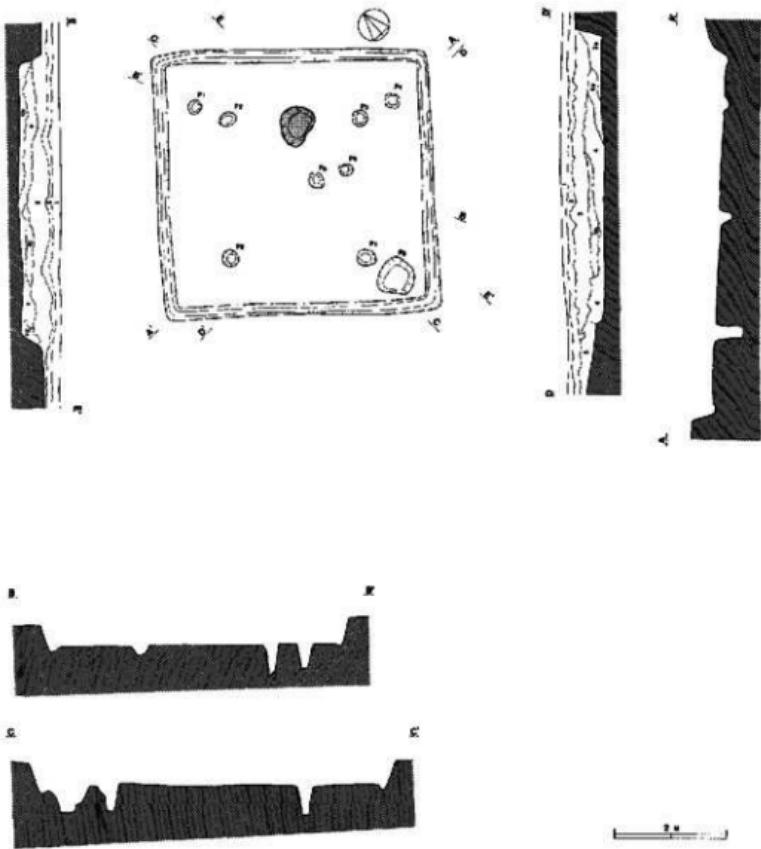
東西に袖長5.41m×4.70mを測る長方形のプランを呈する住居址である。主軸方向N-44°-E、調査区、C-3、a-8・9・0、b-9・0区、1号住居址北側に位置する。壁はほぼ直立であり、立ち上がりがしっかりしているが西側壁に一部傾斜面がみられる。壁溝は一周している。床面レベルは、東側部分が高いが、よく踏み固められている。炉は住居址中央よりやや北側に寄った位置にある。Pitは8本検出されたが、P₂・P₃・P₇・P₈が主柱穴と思われる。南壁下コーナーに貯蔵穴がある。0.60m×0.60m程度の方形を呈している。遺物は、土器片が少數出たが、網片のため図示する事が出来なかった。石製模造品類として、有孔円板・白玉・石塊が出土している。



第1号住居址土層解説

- 1 表土
- 2 黒色土
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土（少量の焼土粒子含む）
- 5 焼褐色土（焼土粒子を多量に含む）
- 6 茶褐色土
- 7 棕色土

図8 乙子遺跡 1号住居址



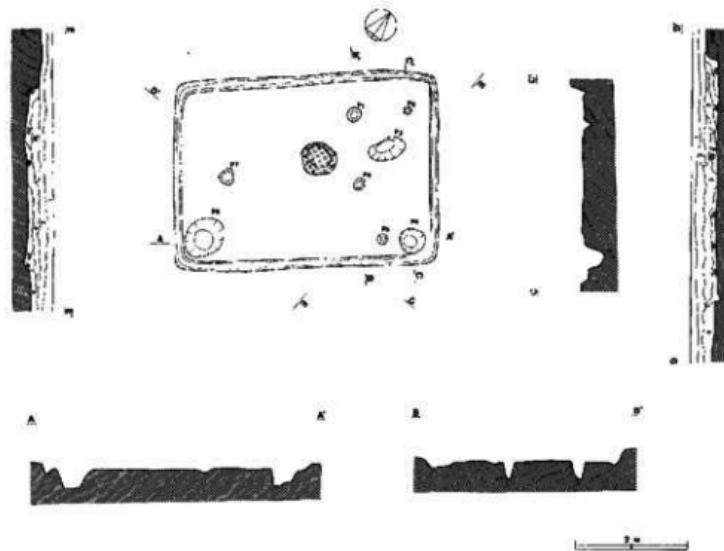
第2号住居址土層解説

- 1 灰土
- 2 水色土
- 3 黒褐色土（少量の焼土粒子、ロームブロック含む）
- 3 a 黒褐色土
- 3 b 黑褐色土
- 4 黑褐色土
- 4 b 水色土

図10 乙子遺跡2号住居址

第3号住居址(図11)

東西に軸長4.72m×3.40mを測る長方形を呈する住居址である。主軸方向N 50° E。調査区、B - 3, i - 9 + 0, j - 0, B - 4, i - 1, j - 1区に位置し、2号住居址北側。住居址床面は、東側部分においてわずかであるが高くなっているがほとんど変らずよく踏み固められている。壁はやや傾斜をもち立ち上がっておりしっかりしている。Pitは計8本検出されたが、東壁コーナー下、南壁下にPitがみられるが貯蔵穴かは不明。址は住居址ほぼ中央の位置にある。遺物は、環形土器、壺形土器、漿形土器、白玉などが出土している。



第3号住居址土層解説

- 1 灰土
- 2 黒色土
- 3 黒褐色土（ローム粒子含む）
- 3-a 増殖土
- 3-b 増殖土
- 4 黒褐色土（ローム粒子、木炭を含む）
- 5 棕色土（部分的にロームブロック含む）

図11 乙子遺跡3号住居址

第4号住居址(図12)

乙子遺跡北端に位置し、東西に軸長6.20m×6.00mを測り長方形を呈する住居址である。主軸方向、N 55° E。調査区、B-4, g-3・4・5, i-4区に位置し、床面レベルはほとんど変らずよく踏み固められているが、本住居址東側部分は、根株によるカク乱が著しく明確でない部分がある。敷溝は一層しており、壁高は0.40mを測る。か庇は、住居址中央よりやや西に寄った位置にあった。Pitは24本検出されたが、東側壁、北側壁下に16本のPitが検出され、根株によるカク乱の部分もある。主柱穴は、その内の方形に並んでいる、P₂, P₅, P₆, P₁₅と黒わかる。南壁コーナードに(P₁)貯藏穴と思われるPitがあり、0.70m×0.80m程の橢円形を呈する。遺物は、环形土器、壺形土器、甕形土器などが出土している。

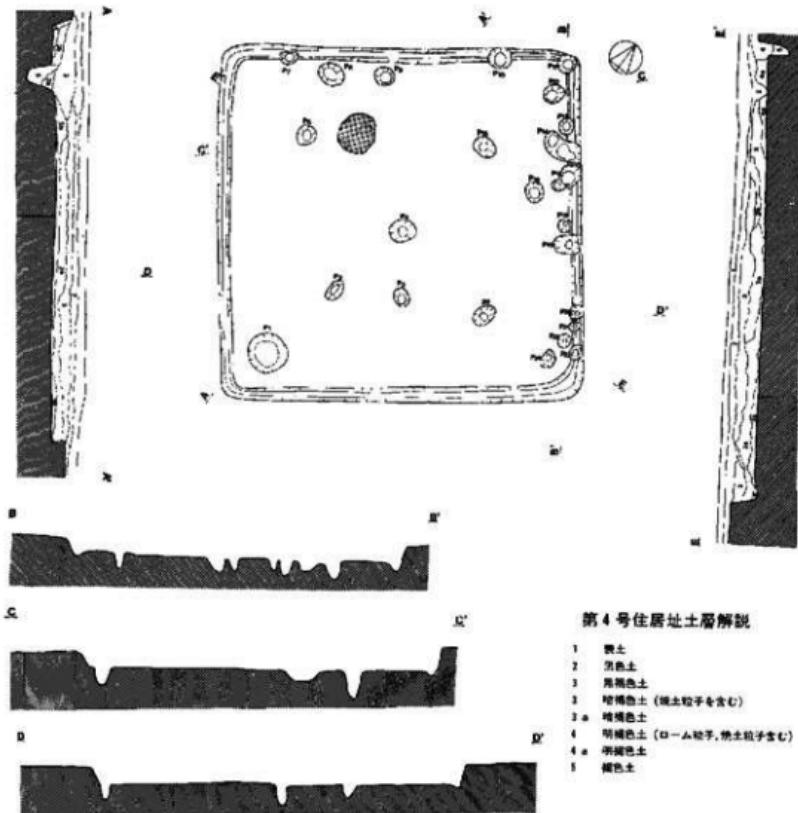
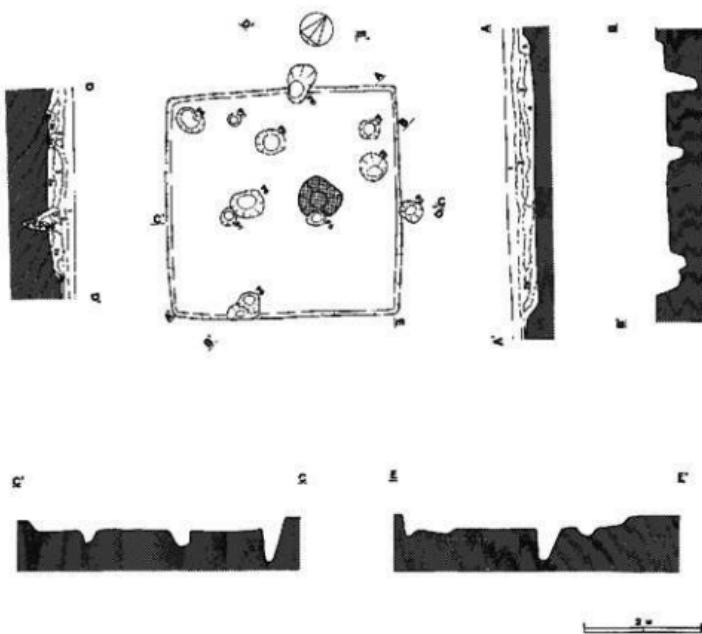


図12 乙子遺跡4号住居址

第5号住居址(図13)

4号住居址南側に位置し、南北に軸長4.39m×4.28mを測る方形の住居址である。主軸方向N45°→Eを呈する。調査区、C-4、a、b-2・3区に位置し、住居址床面のシベルはほとんど変らずよく踏み固められている。壁は床面より垂直に立ち上がり、しっかりしており壁高は0.20mを測る。炉は住居址のはば中央の位置にあった。Pitは、11本検出され、深さは、ほぼ0.50m×0.70mを測る。遺物は、表形土器、环形土器、壺形土器、十五、有孔円板などが出土している。



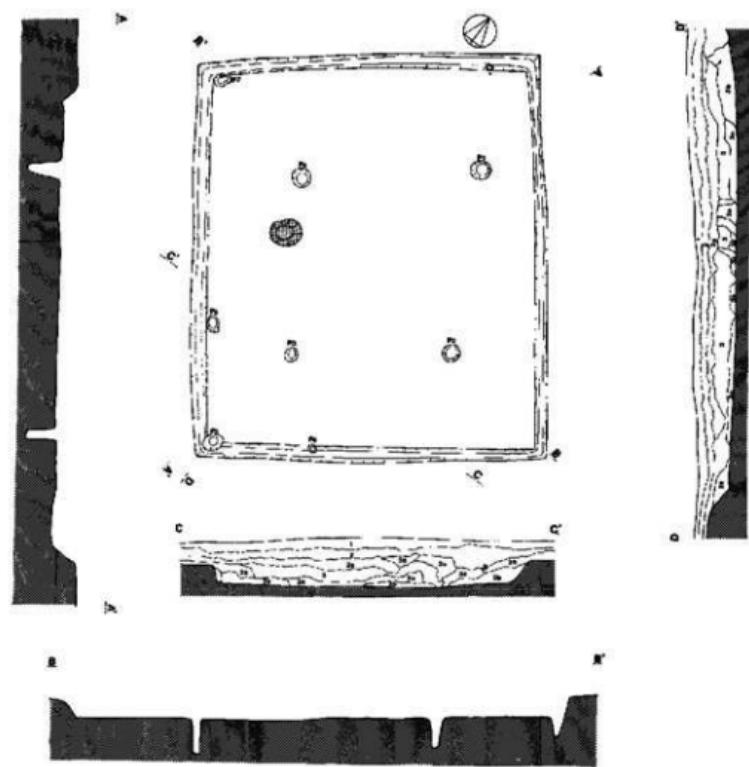
第5号住居址土層解説

- 1 表土
- 1' 茶色土（洗土粒子を含む）
- 1'' 黒褐色土（洗土粒子を多量に含む）
- 1''' 黑褐色土
- 2 茶褐色土（塊土。木炭粒子を含む）

図13 乙子遺跡5号住居址

第6号住居址(図14)

乙子遺跡5号住居址東側に位置し、ほぼ南北に軸長をもち6.95m×6.05mを測る長方形の住居址である。主軸方向N-40°-Wを呈する。調査区、C-1, a-4・5, b-3・4・5, c-4・5区に位置し住居址床面のレベルはほとんど変らずよく踏み固められている。壁は、やや傾斜をもしながら立ち上がっており壁溝も一周している。坑は住居址中央よりやや西側に寄った位置にあり、Pitは8本検出されたが、そのうちの方形に並んでいる4本(P_1 ・ P_2 ・ P_3 ・ P_4)が主柱穴と思われる。出土遺物は、菱形土器、有孔円板、剣形品、砥石などが出土している。



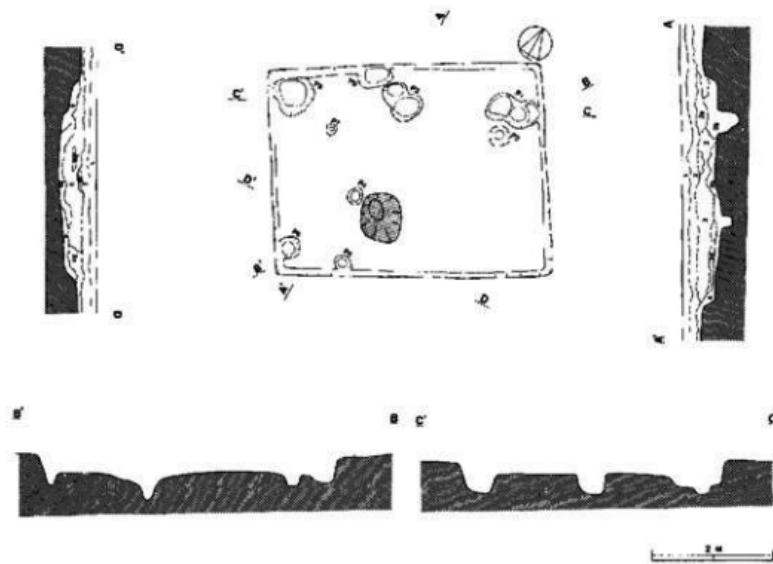
第6号住居址土層解説

1	表土	3	褐褐色土(泥土、木炭粒子を含む)
2	黒色土(ローム粒子を含む)	3 a	褐褐色土
2 a	黒色土	3 b	褐色土

図14 乙子遺跡6号住居址

第7号住居址(図15)

乙子遺跡東側に位置し、東西に軸長4.56m×3.50mを測る長方形の住居址である。主軸方向N 63° Eを呈する。本住居址は、調査区、C・4、c、d-5・6区に位置し、住居址の床面レベルは東側部分に若干の傾斜をもつがよく踏み固められている。壁は、並直な立ち上がりを示しておりしっかりしている。扉は、住居址中央部よりやや東側に寄った位置にあった。Pitは9本検出されたが、その内の西壁コーナー下に位置するP₆は、貯蔵穴と思われる。0.60m×0.70m程度の方形で深さ1.00mである。遺物は、獣形土器、有孔円板などが出土している。



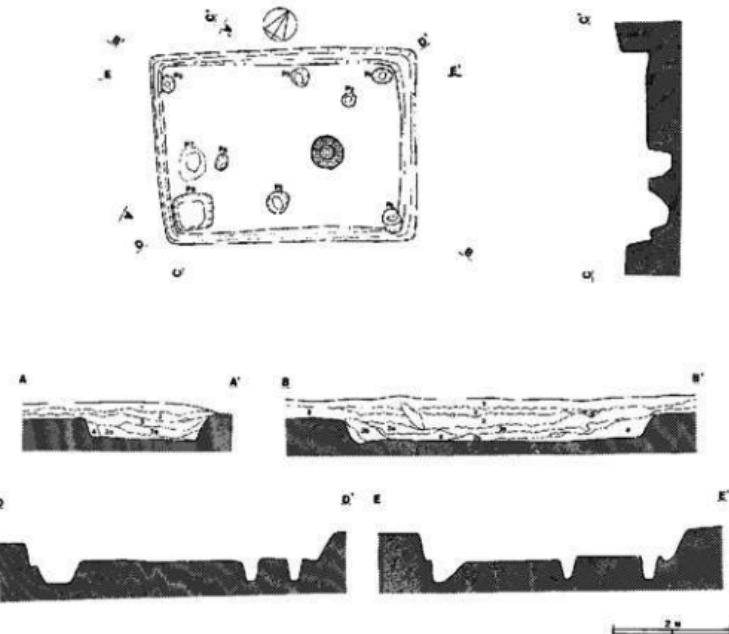
第7号住居址土層解説

- 1 黒土
- 2 暗色土
- 3 黒褐色土（部分的にロームブロック、塊土
粒子を含む）
- 3 a 黑褐色土
- 3 b 塙褐色土（泥土粒子を多量に含む）
- 4 褐色土（ロームブロック含む）

図15 乙子遺跡7号住居址

第8号住居址(図16)

乙子遺跡南端部に位置し、東西に幅長4.43m×3.28mを測る長方形の住居址である。主軸方向N-60°-Eを呈する。調査区、C-4, i-1・2・3, j-2・3区に位置し、床面のレベルは、ほとんど変わらない。壁はやや傾斜をもち立ち上がり、しっかりしている。壁溝は一周しており、壁高は0.50mを測る。Pitは、9本検出されたがそのうち兩壁コーナー下Pitは蓄藏穴と思われる。0.65m×0.70m, 深さ0.70m程の方形を呈する。貯藏穴内部からの出土遺物はない。遺物は、菱形土器、勾玉などが出土している。



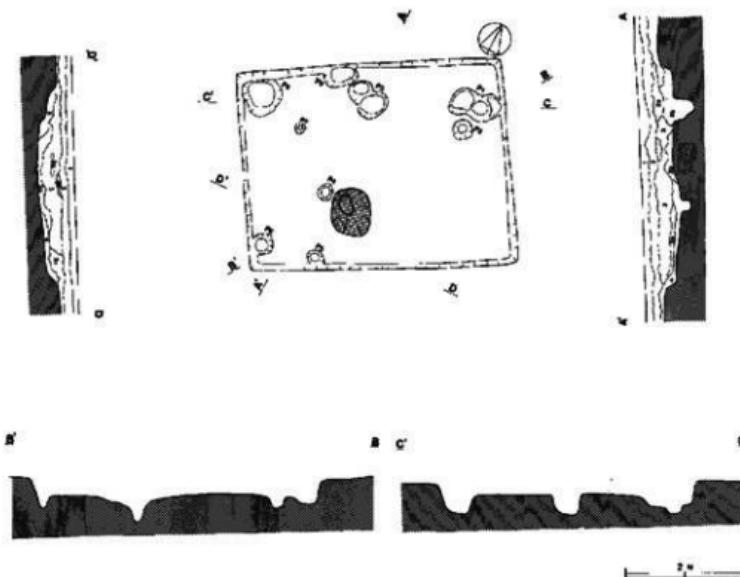
第8号住居址土層解説

- 1 黄土
- 2 黑色土
- 3 黑褐色土
- 4 黑褐色土（ローム粒子、燒土粒子を含む）
- 5 黑褐色土（燒土粒子を多量に含む）
- 6 燃灰土

図16 乙子遺跡8号住居址

第8号住居址(図17)

8号住居址東側に位置し、東西に軸長4.53m×3.51mを測る長方形の住居址である。主軸方向N-64°-Wを呈する。調査区、C-4, g, h-5・6, i-6区に位置し、住居址床面レベルはほとんど変らずよく踏み固められている。壁はやや傾斜をもちながら立ち上がりを示しており壁溝は一周している。壁高は0.40mを測る。炉は、住居址中央に位置し、Pitは9本検出されそのうち6本が主柱穴と思われる。本住居址出土遺物は、高環形土器、壺形土器、勾玉、白玉などが出土している。



第9号住居址土層解説

- 1 黒土
- 2 茶色土
- 3 黒褐色土 (部分的に、ローム粒子不含む)
- 3 a 黒褐色土
- 3 b 黒褐色土 (部分的に焼土ブロック、焼土
粒子を含む)
- 4 棕色土

図17 乙子遺跡8号住居址

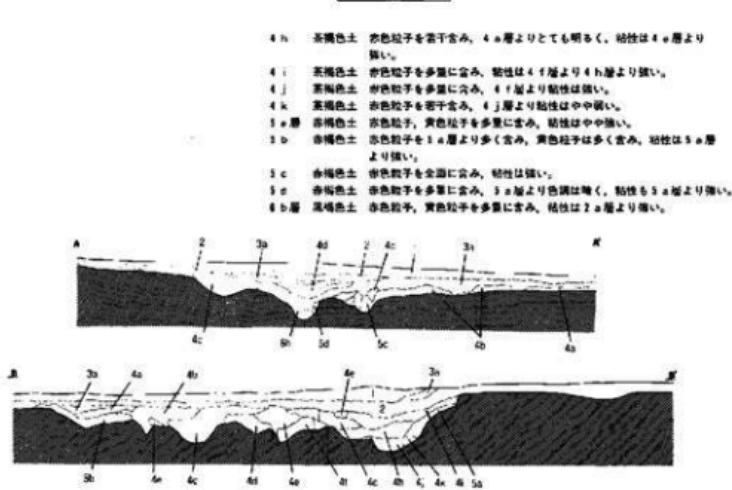
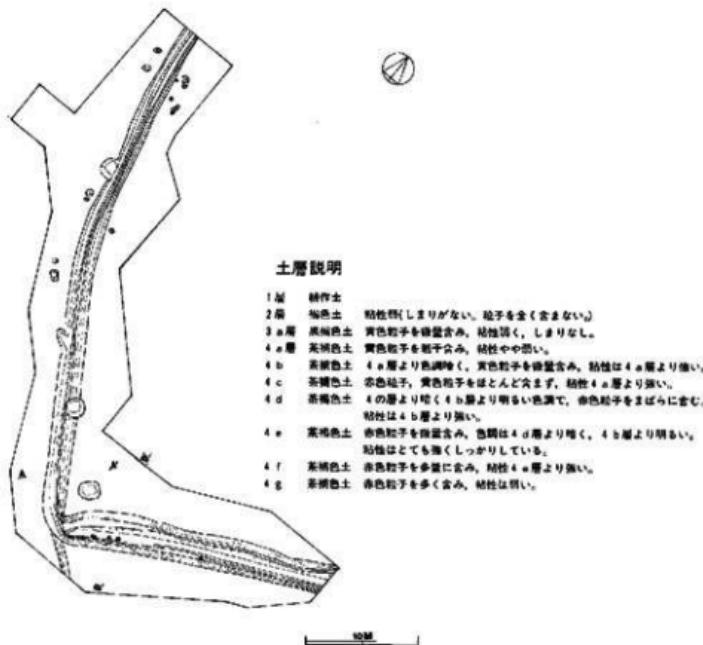


図18 乙子遺跡溝状

(2) 溝状造構(図18)

乙子遺跡北側に位置し、東側谷頭に向かって平行の状態で検出された。形状は、ほぼ南北に走り、一部が農道にかかるため幅が確認できなかった部分もあったが、現状から規定すると約3mになる。プラン確認の溝は、断面がきれいな逆梯形で、左右対称の整った造構である。底面は、平坦で、幅約1m、上面の幅が、現存部で、2~3m、南にいくにしたがって細くなっているが、底面の平坦部幅は、かわらない。壁面は、約45°の角度で、直線的に立ち上がる。内部は、上面に黒褐色土、下面に茶褐色粘土質混りがつまっているが締りはない。底面レベルは、地形傾斜にあわせて南にいくにしたがってやや下がっている。遺物はみられず、時期判別になる資料の出土がないが、近世の溝と思われる。

(3) 土壙

第1号土壙(図19)

プランは長軸1.30m×短軸1.15mのほぼ円形を呈し、プラン確認面からの深さは、0.25mを測る。壁面は急傾斜をなして立ち上がる。壁面底面には、幅5~10cm程の厚さで粘土がはりつけてある。長軸方向N-50°-Eを示す。土壙内からの出土遺物は検出されなかった。

第2号土壙(図19)

1号土壙西側に位置し、プランは、長軸、0.85m×短軸、0.75mの楕円形を呈し、プラン確認面からの深さは0.20mを測る。壁面は東側はゆるい傾斜を示すが、西側において急傾斜をなして立ち上がる。長軸方向、N-55°-Wを示す。土壙内からの遺物の検出はされなかった。

第3号土壙(図20)

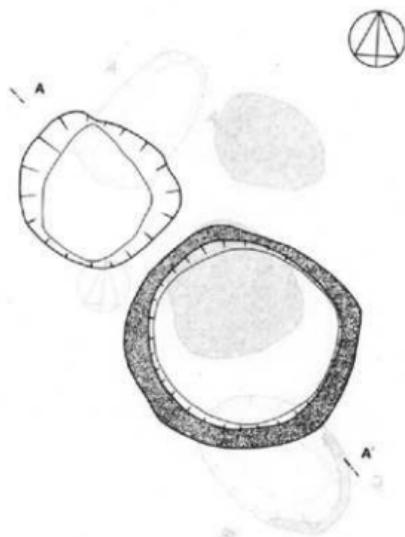
プランは長軸0.90m×短軸0.6mの楕円形を呈しプラン確認面からの深さは、0.10mを測る。壁面はゆるい傾斜を示し立ち上がる。本土壙は、1号土壙同様、西側壁面、底面の一部にかけて、5cm程の厚さで粘土がはりつけてある。主軸方向N-60°-E、土壙内からの出土遺物は検出されなかった。

第4号土壙(図20)

3号土壙北側に位置し、プランは長軸0.82m×短軸0.45mの楕円形を呈し、プラン確認面からの深さは、0.10mを測る。壁面は、ゆるい傾斜をなして立ち上がる。長軸方向、N-35°-Wを示す。土壙内からの出土遺物は検出されなかった。

第5号土壙(図21)

プランは長軸2.25m×短軸1.40mの楕円形を呈し、プラン確認面からの深さは、0.40mを測る。壁面は急傾斜をなして立ち上がる。壁面底面には、幅6cm程の厚さで粘土がはりつけてあるが東側一部分にみられない箇所がある。主軸方向、N-15°-Eを呈す。土壙内からの出土遺物は検出されなかった。



1M

1M

图19 乙子造跡第1・2号土壤

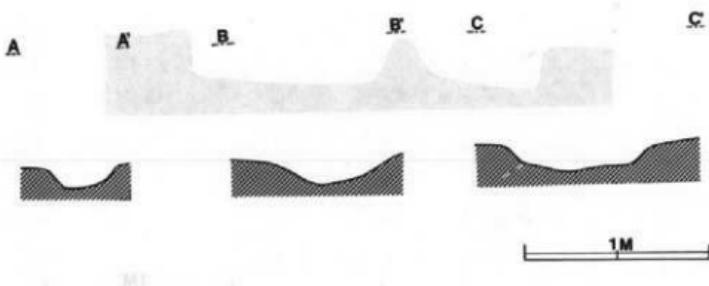
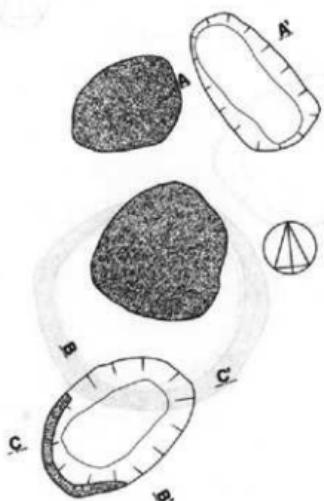


图20 乙子遗址第3·4号土壤

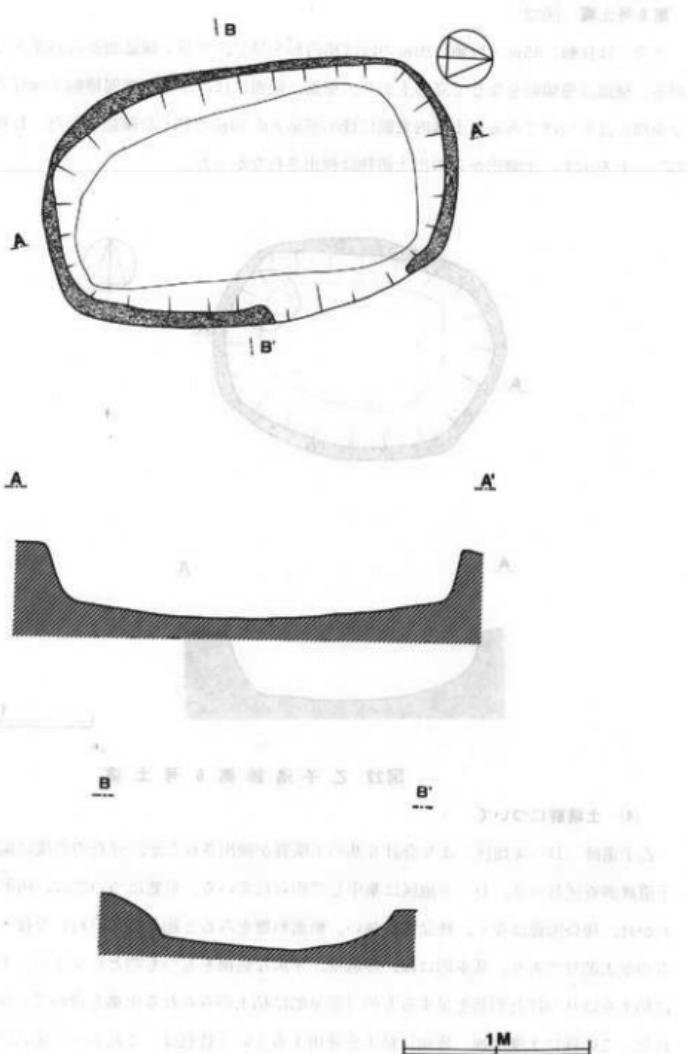


図21 乙子遺跡第5号土壙

第6号土壙（図22）

プランは長軸1.55m×短軸1.20mのはば楕円形を呈し、プラン確認面からの深さは、0.38mを測る。壁面は急傾斜をなして立ち上がり、壁面、底面には、1号土壙同様幅6cm程の厚さで粘土が全周しはりつけである。土壙内東側に径0.35m×0.30mのPitが確認された。長軸方向、N-75°-Eを示す。土壙内からの出土遺物は検出されなかった。

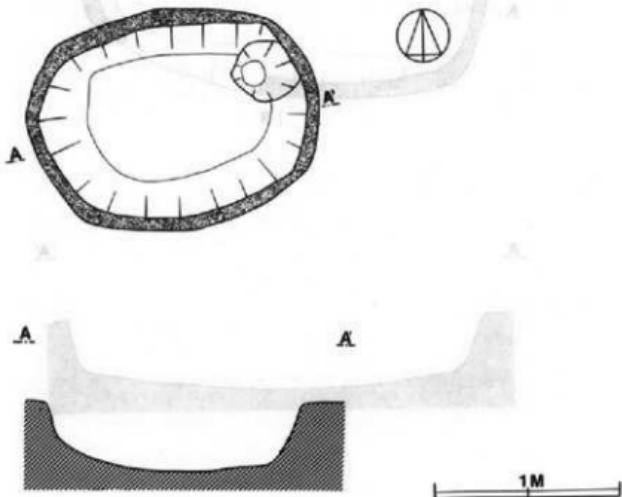


図22 乙子遺跡第6号土壙

(4) 土壙群について

乙子遺跡（D-4地区）より合計6基の土壙群が検出されたが、分布の密度に偏差があり、乙子遺跡調査区B-2、D-3地区に集中して作られている。形態については、円形と椭円形とにわかれ、複合関係ではなく、独立性が強い。断面形態をみると絶じてていねいな掘り方をしているものが大部分であり、基本的には、垂直壁、平坦な底面をもつものとしてよい。土壙壁面・底面に粘土をはりつけた形状を呈するもの（部分的に粘土のみられる土壙も含めて）が、4基検出された。この様に土壙壁面、底面に粘土を使用するという特色は、これらが一定の区域に集中して作られ、しかもある規則、傾向をもっているものと思われる。土壙群の中で、3号・4号間に幅0.70m×0.70m、0.50m×0.50mの粘土塊の出土が2ヶ所みられ、この粘土塊を使用し土壙壁面・底面に使用したものか、これらの類似例の検出、存在を調べるとともに、各土壙の時期判定の決定的な類例は皆無であり、今後検討を要する問題点と思われる。

2 遺物

(1) 石製品

有孔円板 (図23 No.1・2, No.9, No.33・34, No.38・39)

(No.1・2) 第1号住居址出土、淡青緑色の滑石製で、片面に細かい剝離面が残る。(No.9) 第2号住居址出土、斜辺は丸味をもつ。表裏とも粗い条痕が残る。(No.33・34) 第4号住居址出土、平たく削った板石を円形にカットし、天井部に研磨の痕がみられ、表面は整形のため擦痕が残り磨かれていない。(No.38・39) 第6号住居址出土、片面に細かい剝離面と磨かれている。

石製未製品 (図23-3・4・5・10・11・12・13)

(No.3・4・5) 第1号住居址出土、平たく削った板石を円形にカットし、天井部に研磨の痕がみられる。表裏両面の中央部に打ちかきの跡がある。

剝形品 (図23-6・37)

(No.6) 第1号住居址出土、(No.37) 第5号住居址出土、表裏ともに平坦、刃部表面も丸い。銀白色、滑石製。

勾玉 (図23-40・41・48)

(No.40) 第8号住居址出土、やや粗製で整形の棱が残るが全体に丸味をもって形をよく残す。上下とも同様でまっすぐ穿孔される。濃緑色、硬玉製。(No.41) 第9号住居址出土、整形の棱が残り、表裏とも平坦、上下とも同様でまっすぐ穿孔される。濃緑色、滑石製。(No.48) 乙子遺跡内出土、粗雑であるが、C字形を呈しておる。蛇紋岩製の偏平な勾玉で穿孔は一方方向より行われており未製品。

臼玉 (図23, No.14-32・42・47・49)

(No.14-28) 第2号住居址出土、No.14-17は、丁寧なつくりで側面を磨き、やや丸味をもつ。No.18-28は細かい研磨痕の棱が残り粗製である。No.27・28は、穿孔は途中まで一度あけまた位置をずらしてあけなおしている。滑石製。(No.42-47) 第9号住居址出土、「丁寧なつくりで側面を磨きやや丸味をもつ。滑石製。(No.49) 乙子遺跡内出土、縄文式時代遺物と思われる。硬玉製。

(2) 土製品

土玉 (図23-7・35)

(No.7) 第1号住居址出土、完形品であるが、中央部に孔を持ち口縁部と思われる部分に欠損がみられる。円球部というよりもやや楕円形に近く器面もやや凹凸を持つ。胎上、焼成とも良好である。重さ20g。

(No.35) 第4号住居址出土、完形品であり、胎土、焼成は良好であり、色調は褐色を呈す。中央部に孔を持ち、片面から穿孔されているが、孔を中心として凹凸がはげしくはほとんど整形されていない。

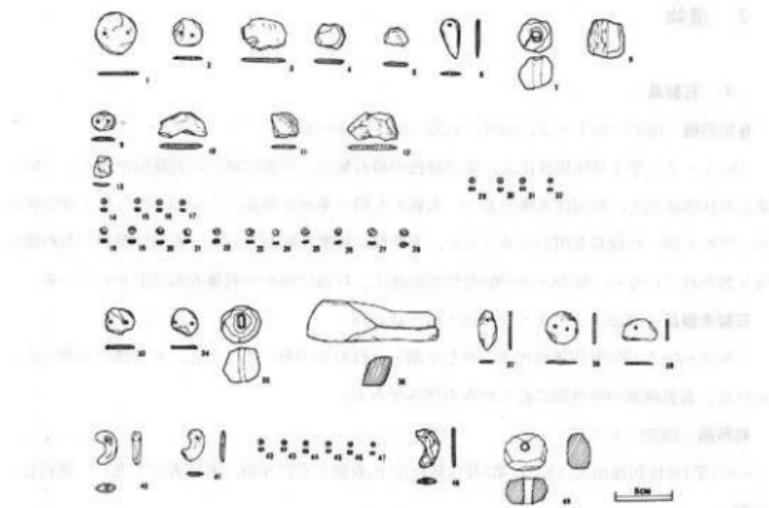


图23 乙子造跡出土石製模造品

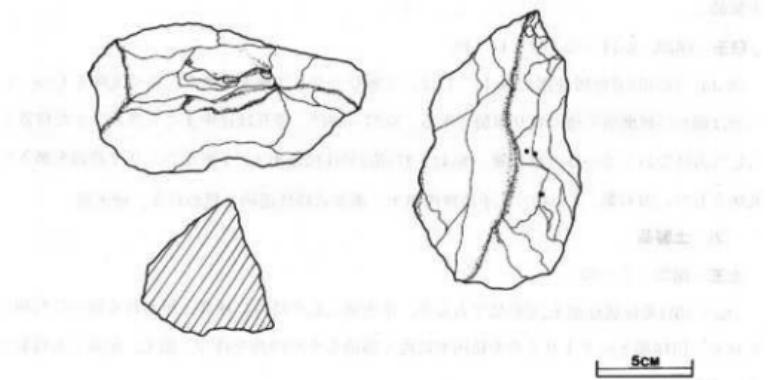


图24 乙子造跡出土滑石

手捏土器（図23-8）第1号住居址出土。口径2.5cm、高さ3.3cm、内面に指圧痕残る。口縁丸くおさめ、やや肥厚、胎土、焼成良、黄褐色。

砥石（図23-36）第5号住居址出土。

黄色凝灰質岩でやや軟質。現存長、11.6cm、重さ10.5g、3側面に長袖に対して平行するよう使用痕があり、表面はやや彎曲して滑沢、かなり砸ぎ減りしている。

滑石（図24）

第2号住居址床面出土滑石である。剝離は棱を境として遠心的な方向に施され、穿孔の痕跡が6ヶ所観察される。

（3）土器

第1号住居址内出土土器（図25-1・2・3）

1. 豊形上器、器高23.5cm。

形態の特徴として、口縁部「く」の字に外反し先端で更に聞く。球形で胸中位が最も張る。平底やや肥厚し面はやや窪む。

手法の特徴

口縁部、横なで、外面・肩部以下へラけずり、横位。内面、頸部指頭による押圧調整、肩部以下なで。

色調、赤褐色、焼成良。

2. 埋形土器、現存高、8.4cm。

形態の特徴

頸部以下が残り、肩部やや張る。偏平な丸底。

手法の特徴

外外面部上位横なで、体下半部と底部横へラけずり、内面指頭によるなで、胸部に輪積痕。

3. 高環形土器、口径、15.7cm。

形態の特徴、直線的に開き、先端細くなる。底部の境に水平に伸びた突帯あり、突帯の上面はやや下る。

手法の特徴、外面、坏部、及び突帯横なで、底部付近なで、突帶上部へラ押え、内面粗れ整形不明。色調、赤褐色。

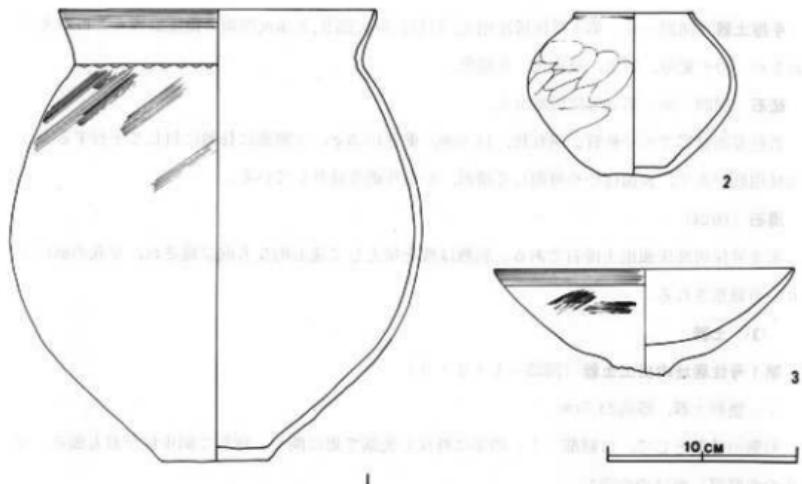


図25 乙子遺跡、1号住居地出土遺物

第2号住居址内出土土器(図26-1)

1. 豹形土器、底径、5.8cm、頸部以下現残。

形態の特徴、口縁部欠損、体部球形で胴部中位が最も張る。平底やや肥厚し内面はやや窪めぎみ。

手法の特徴、外面けずり、胴中位と全体に荒い擦痕。

色調、橙褐色、焼成良。

第3号住居址内出土土器(図26-2~9)

2. 豹形土器、口径、14cm、器高、27cm、完形。

形態の特徴として、口縁部やや肥厚し、「く」の字に外反、先端で更に開く。

手法の特徴として、口縁部横なで、外面、肩部以下へラけずり横位、内面、頭部指頭による押圧調整。肩部以下なで。底部へラなで。

色調、茶褐色、焼成良。

3. 豹形土器、口径、14.5cm、胸部以下なし。

形態の特徴として、口縁部「く」の字に外反し、先端で更に開く。頭部内面、外面に稜あり、体部はほぼ球形。

手法の特徴として、口縁部横なで、外面、肩部僅かにハケ目、胸部丁寧ななで。内面体部、輪積痕、ヘラ製形具による製形痕、色調、茶褐色。

4. 楕形土器、現存口径、6.7cm、器高、8.0cm、底径、1cm。

形態の特徴として、口縁部僅かに内傾。底部やや上げ底、器肉厚い。

手法の特徴として手捏風のつくり。外面全体なで、内面横けずり。全体に凹凸あり、内外面輪積痕。色調、暗褐色、焼成良。

5. 梗形土器、口径、14.8cm、器高、9.7cm、底径4cm。

形態の特徴として、口縁部外傾し、底部やや上げ底、器肉厚い。

手法の特徴として、口縁部横なで、頸部に棱あり。外面、肩部なで、底部へラけずり。

色調、暗褐色。焼成良。

6. 梗形土器、口径、13.2cm、器高、5.6cm。

形態の特徴として、口縁部内反しながら立ち上がる。器内はほぼ均一。

手法の特徴として、口縁部、横なで、外面、肩部なで、底部へラけずり、色調褐色、焼成良。

7. 梗形土器、口径、13.5cm、器高、5.8cm。

形態の特徴、口縁部わずかに外反する。器内はほぼ均一。

手法の特徴として、口縁部、横なで、外面、底部なで、色調、暗褐色、焼成良。

8. 梗形土器、口径、14.5cm、器高、6.5cm。

形態の特徴として、口縁部内反しながら立ち上がる。器内はほぼ均一。

手法の特徴として、口縁部横なで、外面、なで底面へラけずりなし、焼成良、色調、褐色、胎土は細かい。

9. 梗形土器、口径、13.7cm、器高、5.9cm。

形態の特徴として、わずかに内反しながら立ち上がり、器内はほぼ均一。

手法の特徴として、口縁部横なで、外面肩部なで、底部へラけずり。肩部へラけずり。色調、褐色、焼成良、胎土細かい。

第4号住居址出土土器（図27-1）

1. 梗形土器、口径、13.5cm、器高、7cm。

形態の特徴、口縁部外反しながら立ち上がる。器内はほぼ均一。

手法の特徴、口縁部横なで、外面、肩部へラけずり。底部、へラけずり。色調、褐色、胎土細かい。焼成良。

第7号住居址出土土器（図27-2）

2. 梗形土器、口径、18.5cm、器高、14.5cm、底径、6.8cm。

形態の特徴、口縁部小さく肥厚し外反する。頸部はくびれ、胴部は球形を呈し、底部は平底。

手法の特徴は、口縁部横なで、体部外面、粗いなで、内面、口縁下部横へラなで。頸部、指頭压痕、体部、輪積痕、下牛なで、底部へラなで、器面凹凸、色調、暗褐色。

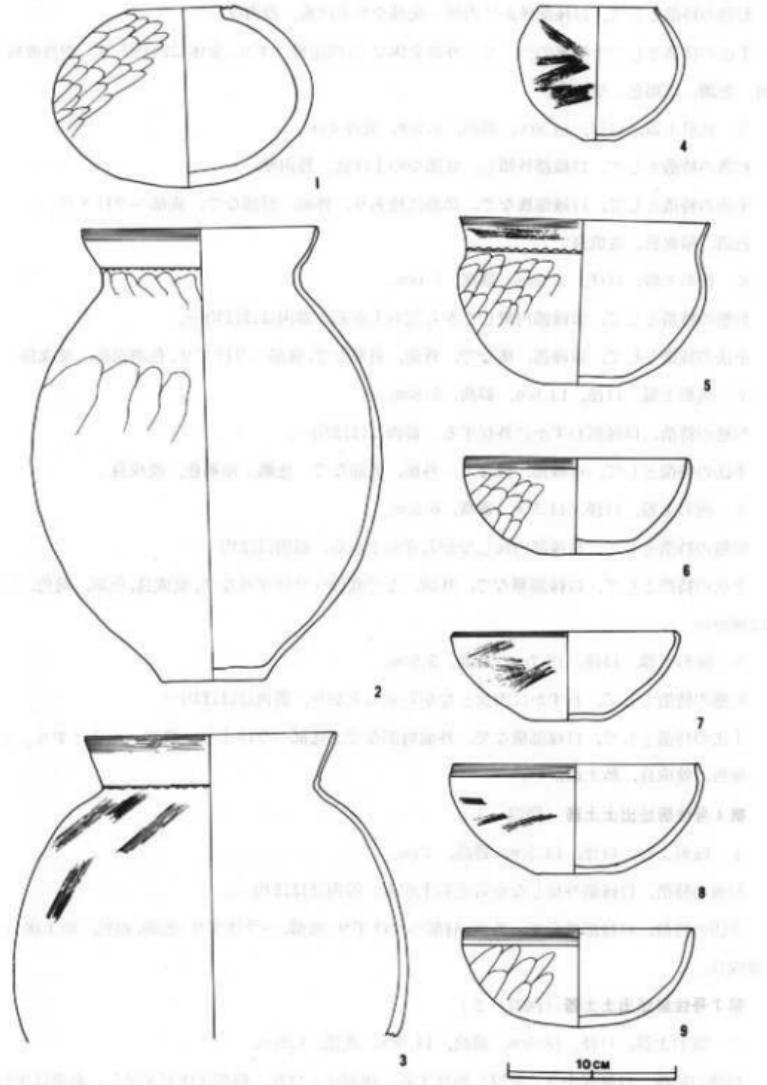


图26 乙子遗址 2号·3号住居址出土遗物

第9号住居址出土土器(図28-1・2・3・4)

1. 裂形土器、口径、18.2cm。

形態の特徴、口縁部「く」の字に外反し、頸部内面に棱あり、体部あまり張らない球形を呈する。

手法の特徴、口縁部横なで、体部外面、縱へラなで、僅かにハケ目痕あり。内面、頸部、指頭押圧痕、輪積痕。胸部、ヘラけずりがみられる。色調、茶褐色、焼成良。

2. 高环形土器、口径17.9cm。

形態の特徴、環部のみである。口縁部と体部と底部の境に稜あり。各々の面が反り気味に開く。

手法の特徴、内外面とも横なで、器面粗く、色調、橙褐色、焼成良。

3. 狹形土器、口径、15.0cm。

形態の特徴、胸部以下欠損、裂形瓶、口縁部「く」の字に外反し頸部内面棱あり。胸部上半に張りをもち、長胴型。

手法の特徴、口縁部横なで、体部外面、ハケ目状のなで。色調、赤褐色、焼成良。

4. 増形土器

形態の特徴、口縁部欠損、胸部より「く」の字に外反する。胸部中央部に丸みをもち、偏平な丸底。

手法の特徴、外面体部、ヘラけずり、内面指頭によるなで。

色調、赤褐色、焼成、胎土良。

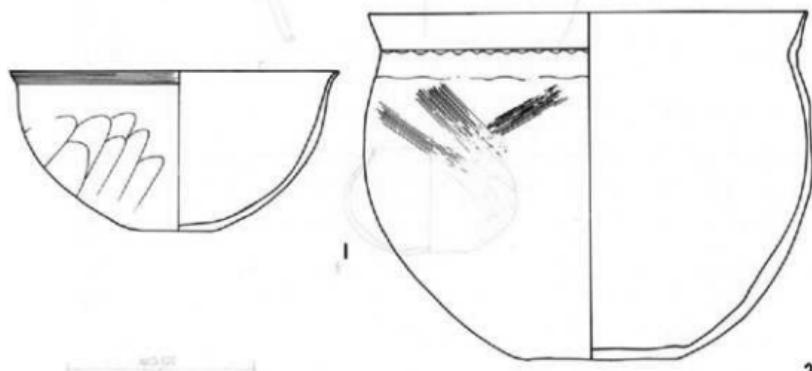
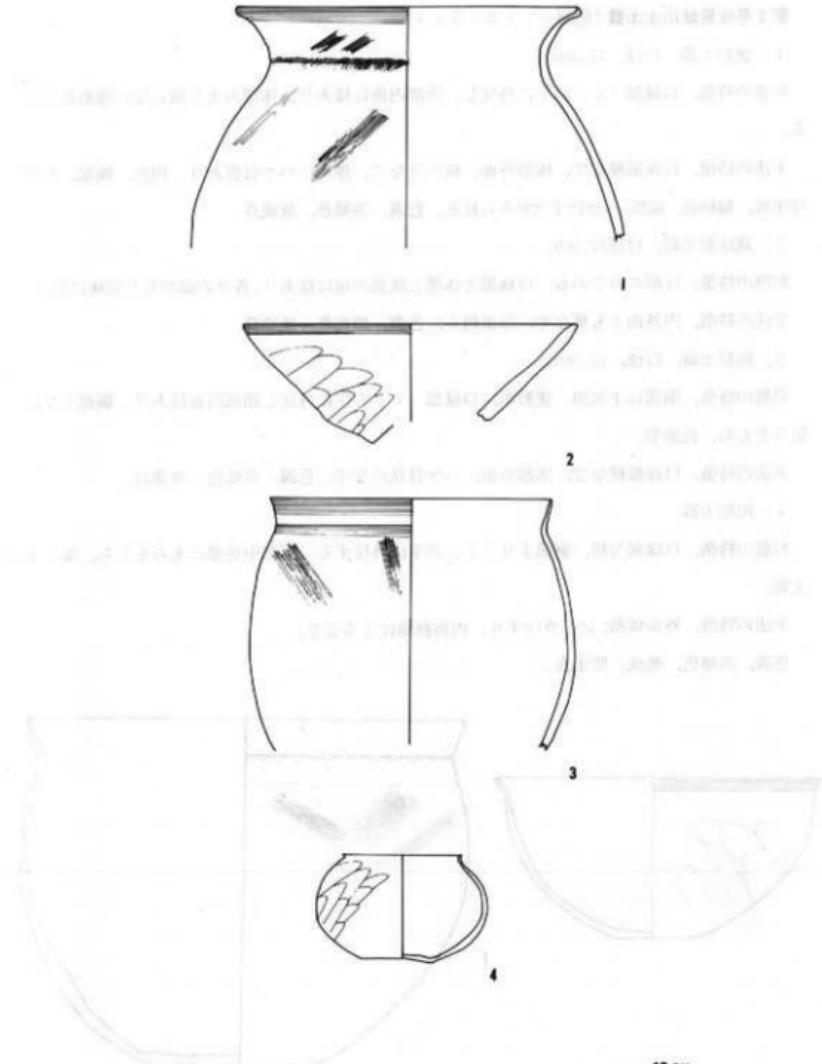


図27 乙子遺跡 4号住・7号住居地出土遺物



附圖28 乙子遺跡9號住居地出土遺物

第5章 北今城遺跡

遺跡は、守谷町大字高野字北今城773、783外に位置し、乙子遺跡西側台地上に立地し、台地北側は支谷が入り込み南側は概に工事により削減している。

遺跡は、3区に別れているが、同一台地上に形成されていたものが、工事用道路設置により台地が分断されている。遺跡中心部の標高は20.31mで水田面との比高は12mであり、谷をはさんで東側に位置する乙子遺跡、北側に位置する仲原遺跡・藤根入遺跡と対峙しており、同台地上には、今城遺跡がある。

第1節 調査の経過

本遺跡の発掘調査は、昭和52年11月より昭和53年3月31日迄の予定で開始したが、当初の予定昭和53年3月31日迄は調査を終了させることができず継続調査として実施した。

更に北今城遺跡は、遺構検出調査時に於いて新たに6,700m²を追加調査面積として加えた。

以下月別に調査経過を記してゆきたい。

○11月～12月 北今城遺跡(D-1～D-3)清掃及び写真撮影を実施し、北今城遺跡において設定したX軸、Y軸を平行移動し、調査区を設定した。

○1月～2月 調査区全域に対して確認調査を実施し、竪穴住居址等の遺構が検出され遺構内精査を実施する。遺構調査は、第1号住居址より第13号住居址迄を行った。更に遺跡西側より周溝墓の検出がみられ、調査を実施した。

○3月 13軒の竪穴住居址、周溝墓等の平面図、断面図作成作業を行い、北今城遺跡、乙子遺跡の航空写真撮影を実施し、終了し、D-1地区の調査は、昭和53年度継続調査とした。昭和52年度検出調査遺構は、住居址13軒方形周溝墓1基である。

○4月 中旬より調査開始。D-2地区の第14号住居址の精査、実測、写真撮影等を進める。下旬よりD-2地区と並行してD-1地区的調査を行う。第15・16・19・21号住居址の精査を進めるうち、D-1地区的いずれの住居址もカマドを有することが判明する。第16号住居址より多数の土丘、第19号住居址より多量の鉄滓が出土する。

○5月 D-2地区の調査はほぼ終了する。第15・16・19・21号住居址の実測、写真撮影を進める。第19号住居址は工房址であることが判明する。カマドの実測に手間どる。なお、一部作業員は上旬より大口遺跡の表土剥除作業に移る。

○6月 上旬より第17・18・20号住居址の精査に入り、逐次実測、写真撮影を行う。中旬からは22・23・24号住居址、第1・2号土壤の精査に入る。第23号住居址のカマド付近より多数の完形土

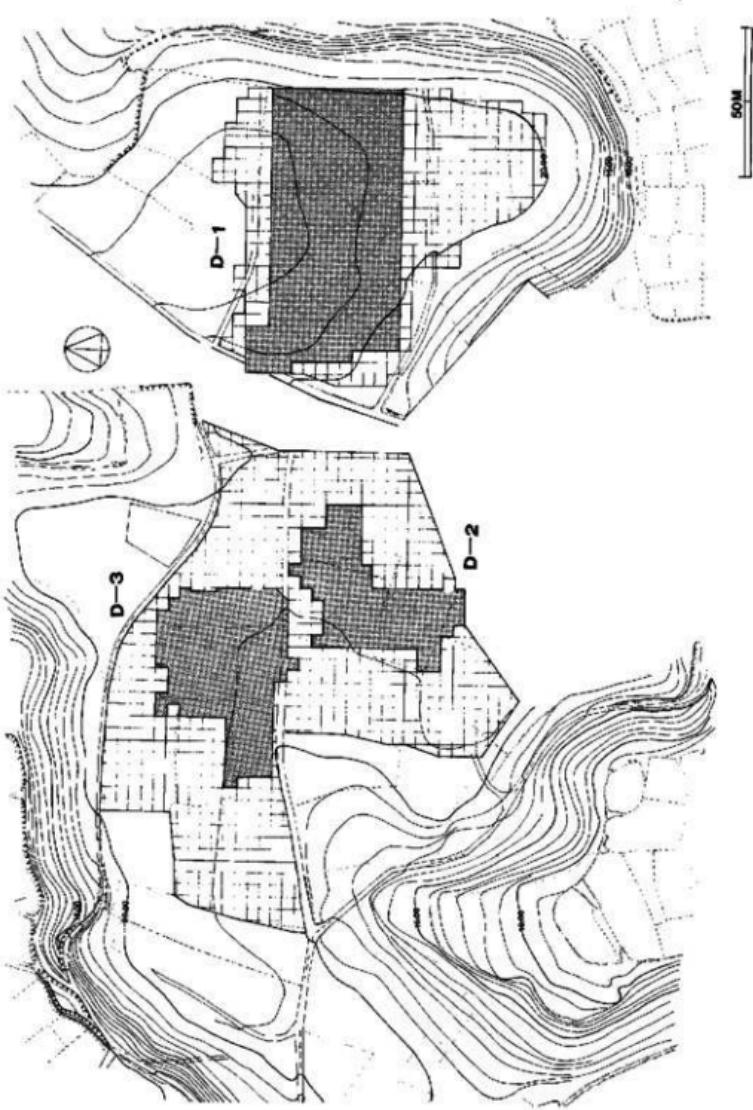


図29 北今城遺跡地形図とグリッド配置図

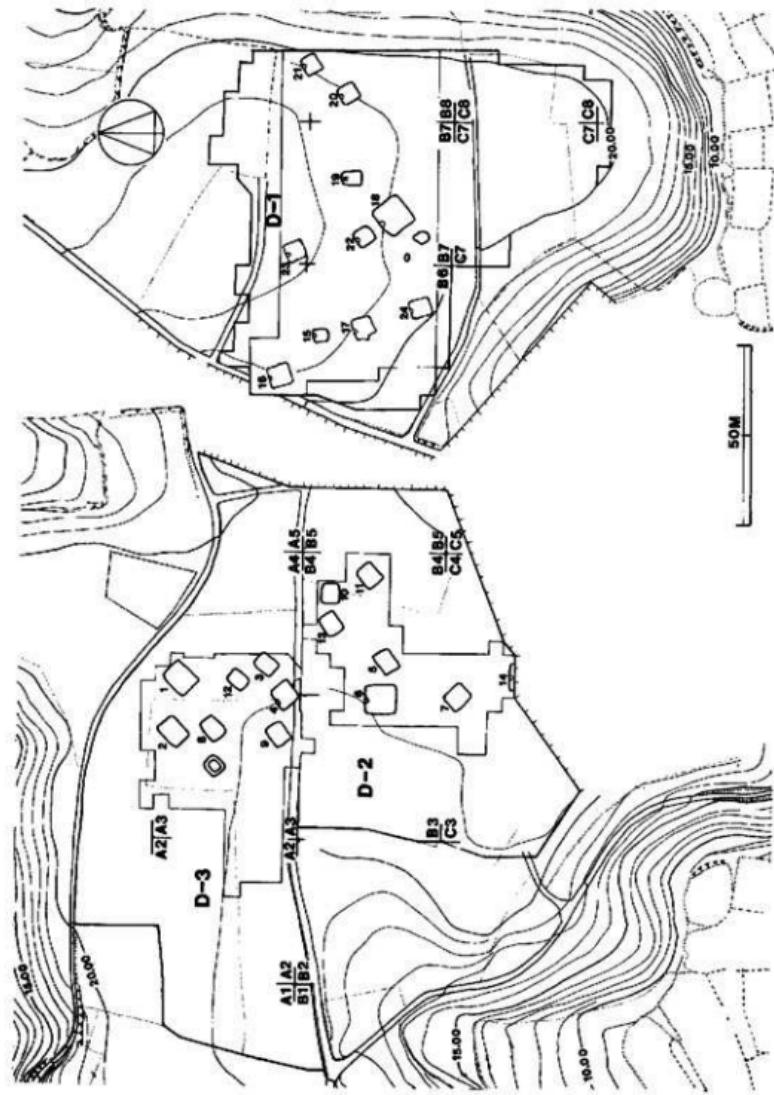


図38 北今城遺跡全体図

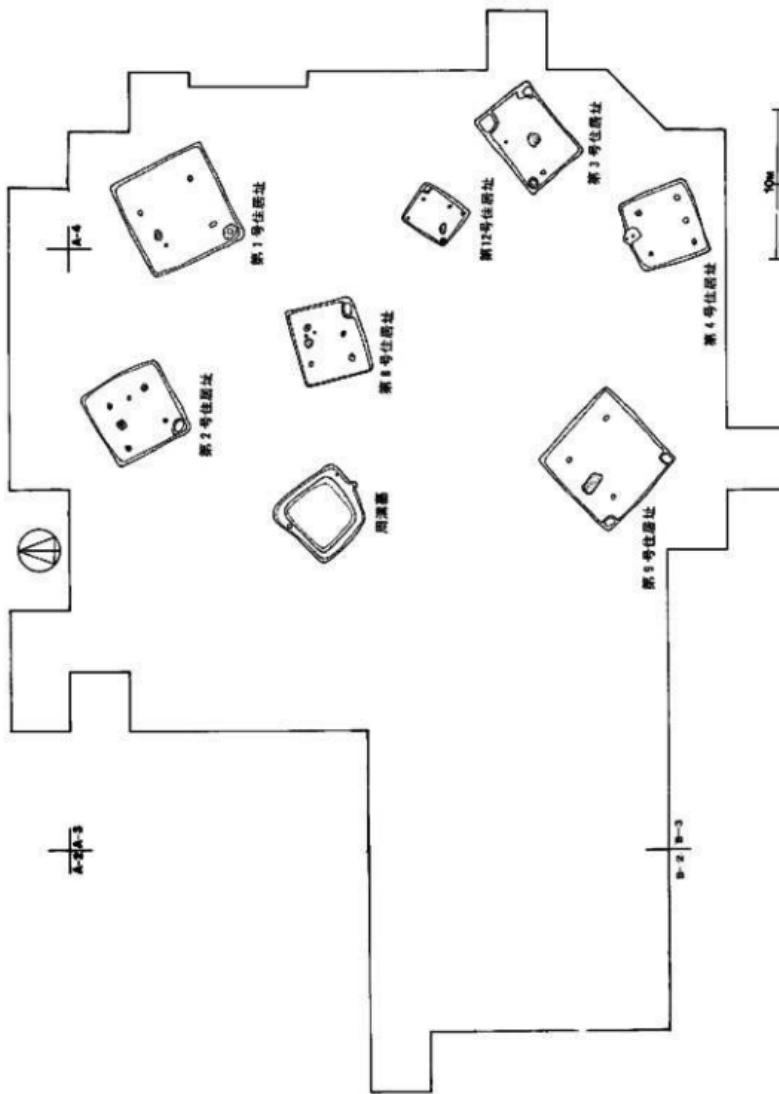


图31 北今城道路(D-2)遗物配图

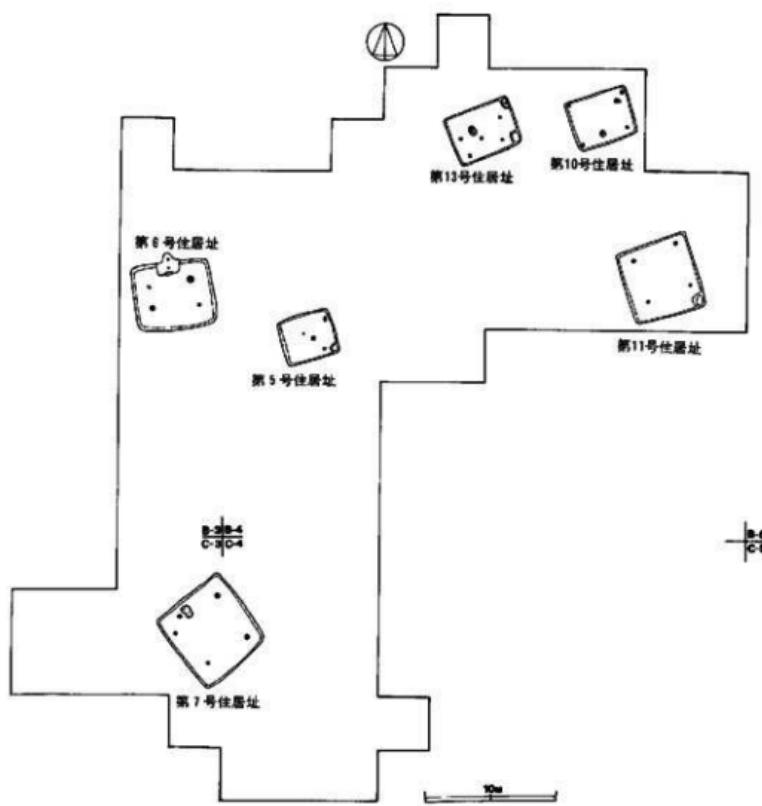


图32 北今城遗址(D-2) 造構配置図

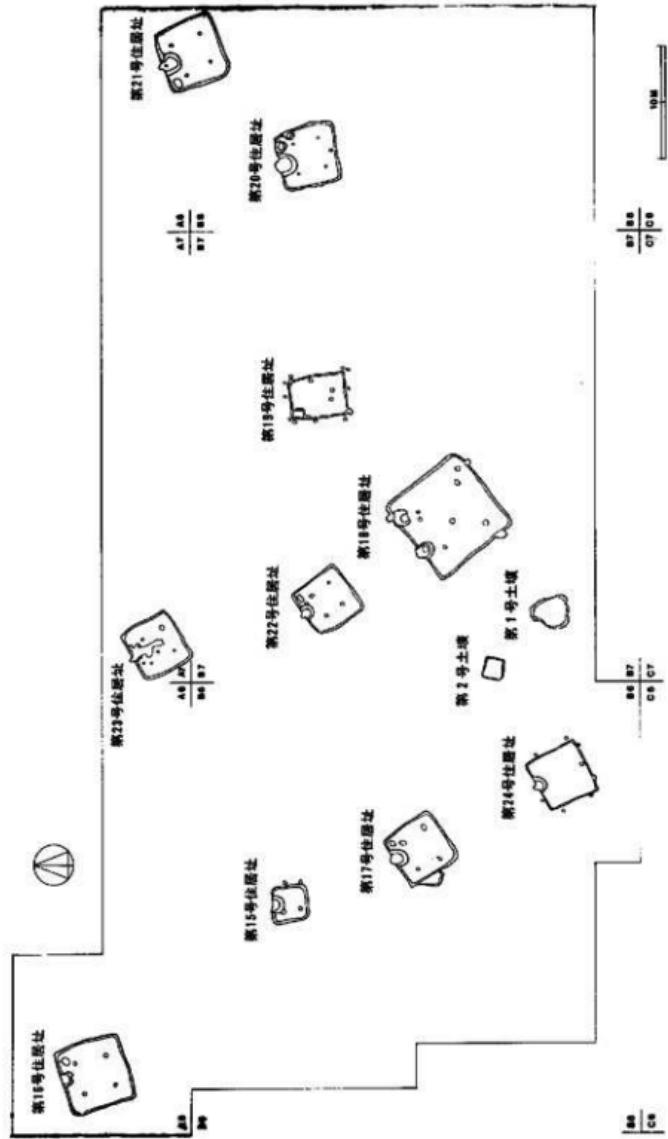


图21 选样配置图(D-1地区)

器が出上する。なお、上旬より半力を大口遺跡の表土排除におき、下旬には雨天が多く発生が停滞する。

○7月 上旬に第22・23・24号住居址、第1・2号土塗の実測、写真撮影を終了する。ひき続き重機により残土移動を実施し、遺跡全体写真撮影を行う。中旬に北今遺跡の調査を完了する。

第2節 遺構と遺物

1 遺構

検出された遺構は住居址24軒、方形周溝墓1基、土壙2基である。

(1) 住居址

第1号住居址(図34)

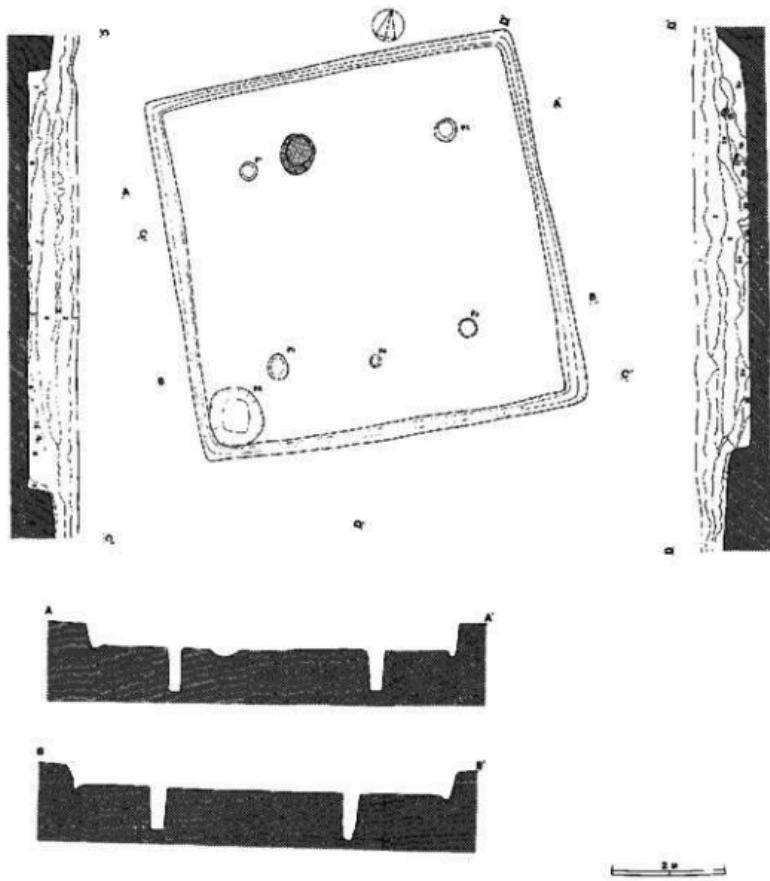
北今城遺跡、D-2地区東側に位置し、東西に軸長6.82m×6.75mを測り主軸方向N-64°Eを呈する方形の住居址である。調査区、A-3, b, c-0, A-4, a, b, c-1・2区に位置し、床面のレベルはほとんど変らずよく踏み固められている。壁は垂直に立ち上がり、しっかりとしている。壁溝は一周しており壁高は50cmを計る。炉は、住居址中央よりやや北側にあった。Pitは、計6本検出されたが、そのうちの方形に並んでいる4本(P₁, P₂, P₃, P₄)が主柱穴と思われる。また住居址南壁下コーナーに貯蔵穴があり、1.00m×1.00m程度の方形を呈している。内部からの出土遺物は、高環形土器、土玉などが出土している。

第2号住居址(図35)

1号住居址西側に位置し、南北に軸長、5.55m×5.44mを測り、主軸方向N-28°Wを呈する方形の住居址である。調査区、A-3, a-7・8, b-7・8・9, c-8区に位置し、床面レベルはほとんど変らずよく踏み固められている。壁は垂直であり、立ち上がりがしっかりとしており、壁溝は一周している。壁高40cmを測る。炉は住居址中央よりやや北側に位置し検出された。Pitは計6本検出されたが、P₁, P₂, P₄, P₅が本住居址主柱穴と思われる。南壁下コーナーに方形の貯蔵穴があり、(P₆)0.95m×0.75mを呈し、内部からは、粘土塊が多量に出土した。粘土をおさめたPit(貯蔵穴)と考えられる。遺物は、壺形土器、高環形土器、楕円形土器、石鏡などが出土している。本住居址より石製模造品の未製品の他に原石、削り屑が出土している。

第3号住居址(図36)

東西に軸長6.08m×4.50mを測り、主軸方向N-40°Eを呈する長方形の住居址である。調査区、A-4, g-2・3, h-1・2・3, i-2・3区に位置し、床面レベルはほとんど変らずよく踏み固められている。壁は、やや傾斜をもち立ち上がりはしっかりとおり、壁溝は、

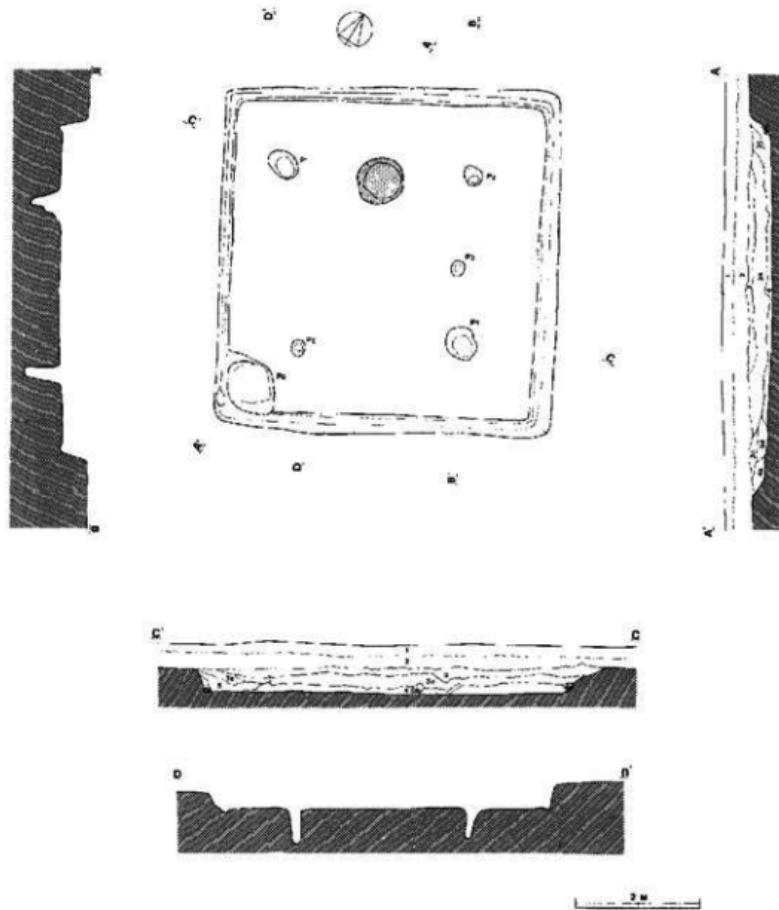


北今城遺跡

第1号住居址土層解説

- 1 黄土
- 2 黒色土
- 3 黒褐色土
- 3-a 黒褐色土（部分的にロームブロック含む）
- 3-b 黒褐色土（ローム、焼土粒子を含む）
- 3-c 黒褐色土（燒土、木炭粒子を含む）
- 4 混乱
- 5 噴褐色土
- 7 領色土（ロームブロック含む）

図34 第1号住居址

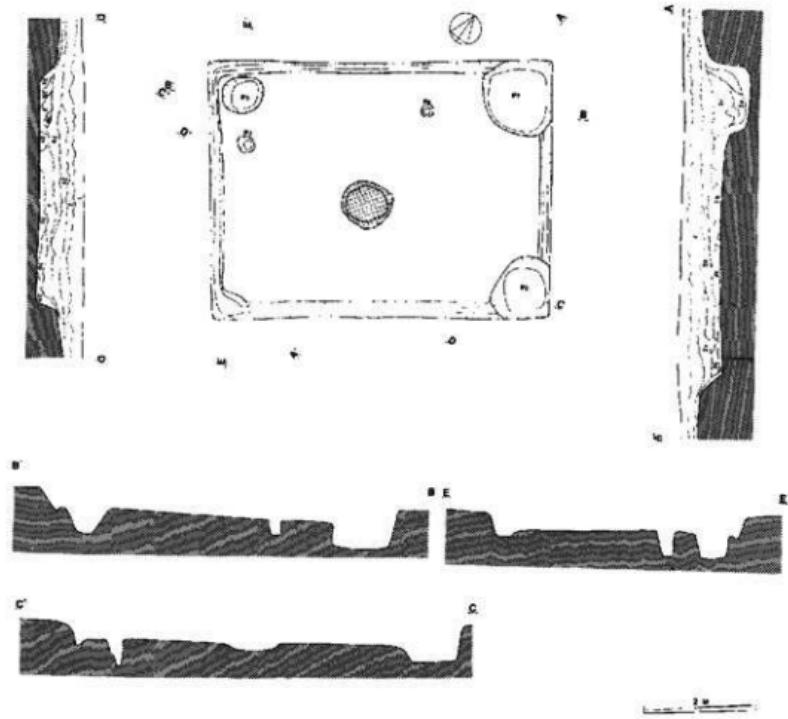


第2号住居址土層解説

- 1 黄土
- 2 黑色土
- 3 黑褐色土（ローム粒子含む）
- 3 a 黑褐色土（ローム、塊土粒子含む）
- 3 b 黑褐色土（块土、粒子多量に含む）
- 4 灰褐色土
- 4 a 灰色土

図35 第2号住居址

周している。壁高は30cmを計る。炉は住居址中央に寄った位置で検出された。Pitは計5本検出されたが、各コーナー壁下に3本のPitがみられ、各Pitは80cm程度の深さである。出土遺物は、壺形土器、高壺形土器、白玉などが出土している。



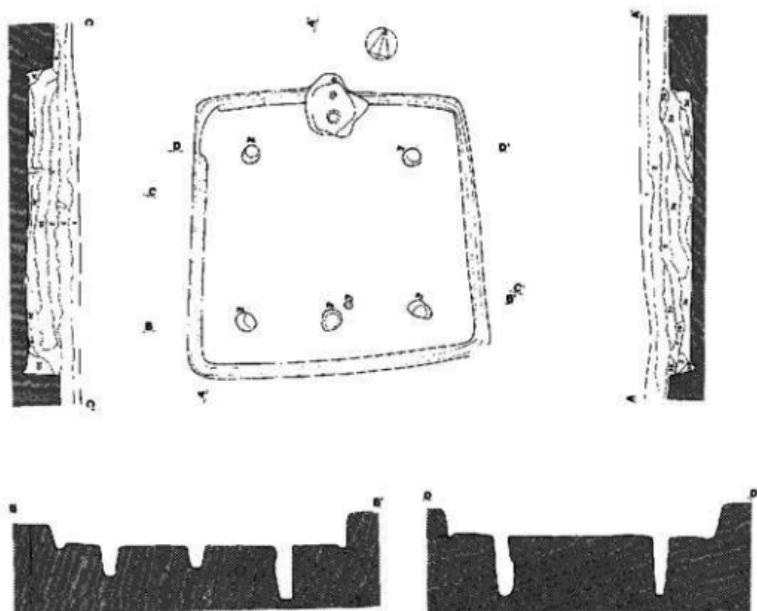
第3号住居址土層解説

- 1 表土
- 2 黒色土
- 2 a 黒色土（ローム粒子、焼土粒子を含む）
- 2 b 黒色土（部分的にロームブロック含む）
- 2 c 黒色土
- 3 a 黑褐色土（ローム粒子、焼土を部分的に含む）
- 3 b 黑褐色土
- 3 c 黑褐色土

図36 第3号住居址

第4号住居址(図37)

第3号住居址南側に位置し、南北に軸長、 $5.33m \times 5.44m$ を測り主軸方向、N-21°-Wを呈する方形の住居址である。調査区、A-3, j-0, A-4, j-0, B-3, a-10区に位置し、床面のレベルは、ほとんど変らずよく踏み固められている。壁は垂直に立ち上がり、しっかりしており、壁溝は西壁下コーナー部分において検出されないが、ほぼ一周している。本住居址北側にカマドが検出され、全て粘土、少量の砂によって構築されており、比較的よく保存されている。煙道は、壁をやや斜めに掘って壁外に出ており、焚口は、かなりくづれているが位置は確認出来た。カマド周辺にはかなりの出土遺物がみられた。Pitは計6本検出されたが、そのうち方形に並ぶ4本(P₁, P₂, P₅, P₆)が主柱穴と思われる。4本の各柱穴はオーバーハング(5cm程)している。住居址内出土遺物は、環形土器、蝶形土器などが出土している。



第4号住居址土層解説

- 1 黄土
- 2 黑褐色土
- 3 黑褐色土(ローム枕子、焼土粒子含む)
- 3 a 黑褐色土(ロームブロック、焼土含む)
- 3 b 黑褐色土(ロームブロック含む)
- 3 c 黑褐色土

2m

図37 第4号住居址

第4号住居址カマド(図38)

カマドの保存状態は非常に良好なものであった。袖部輪郭は、粘土と若干の砂により構築されており、カマドの長さ、1.30m、幅1.15m、焚口部幅、0.45mである。掘り方は、燃焼部を台形状にし、焚口部が半円形を呈している。煙道部の長さは、0.35mを測り40°の傾斜で立ち上がる。両袖部には肩部が設けられ、煙道部が壁外へ突き出す形態をなす。カマドからは、土師器類、瓶、壺が出土した。

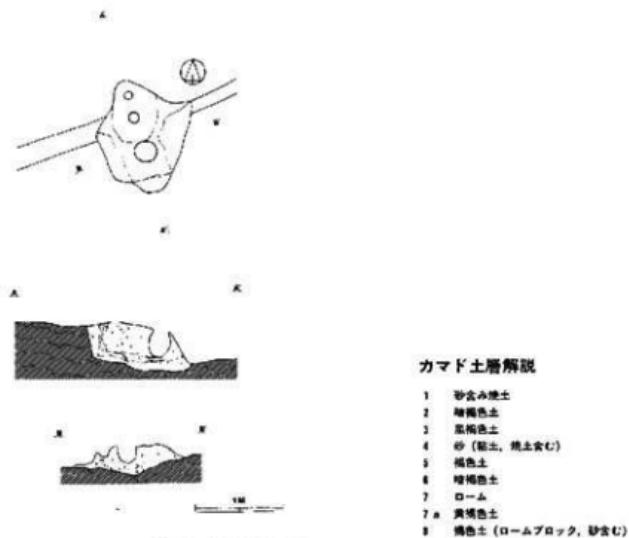


図38 第4号住居址カマド

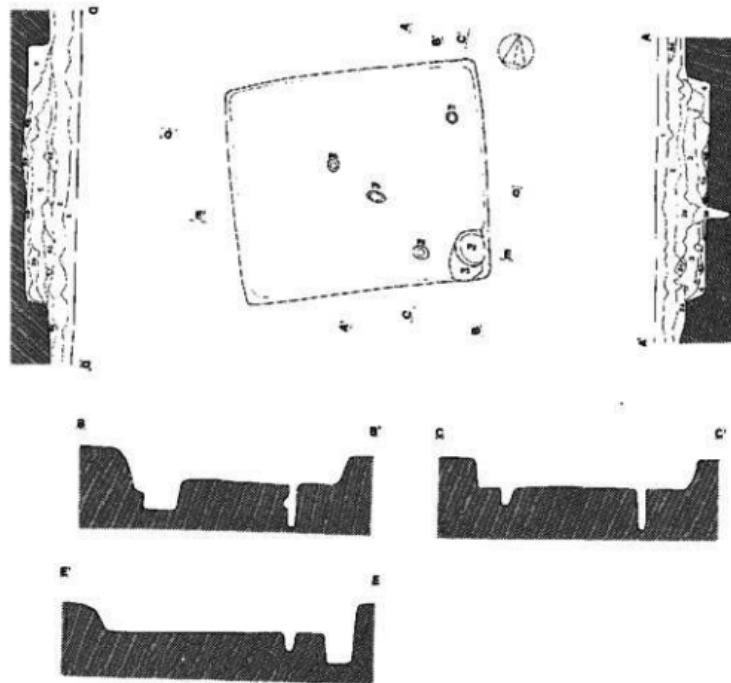
第5号住居址(図39)

D-2地区中央部に位置し、東西に軸長4.13m×3.54mを測り、主軸方向、N-68°-Eを呈する隅丸方形の住居址である。調査区、B-4、f、g-2・3区に位置し、住居址床面のレベルはほとんど変らずよく踏み固められている。壁は垂直であり立ち上がりもしっかりしている。壁高は40cmを計り、壁溝は検出されない。炉は、住居址中央に位置している。Pitは計6本検出され、東壁下コーナーに位置するP₂は、貯蔵穴と思われる。貯蔵穴内出土遺物はない。本住居址出土遺物は、土師器が少量出土したが、細片のため図示する事が出来なかった。

第6号住居址(図40)

D-2地区西側端に位置し、南北に軸長6.74m×5.93mを測り、主軸方向、N-9°-Eを呈する方形の住居址である。調査区、B-3、e、f、g-9・0区に位置し、住居址床面のレベルはほとんど変らずよく踏み固められている。壁は垂直に立ち上がりをみせており、しっかりし

ており壁高は80cmを計り、壁溝は一周している。本住居址は第4号住居址同様カマドを有する。カマドは、すべて粘土、砂で構築されており、比較的保存状態がよい。煙道は、壁をやや斜めに掘っているが、壁外にはほとんど出でていない。本住居址内Pitは計4本検出されたがすべて主柱穴と思われる。住居址出土遺物は、須恵器、土師器が少量出土した。



第5号住居址土層解説

- | | |
|-----|------------------|
| 1 | 表土 |
| 2 | 黒色土 |
| 2 a | 黑色土 |
| 3 | 黒褐色土 |
| 3 a | 黒褐色土 |
| 4 | 暗褐色土 (ロームブロック含む) |
| 4 a | 暗褐色土 |
| 4 b | 暗褐色土 |

2m

図39 第5号住居址

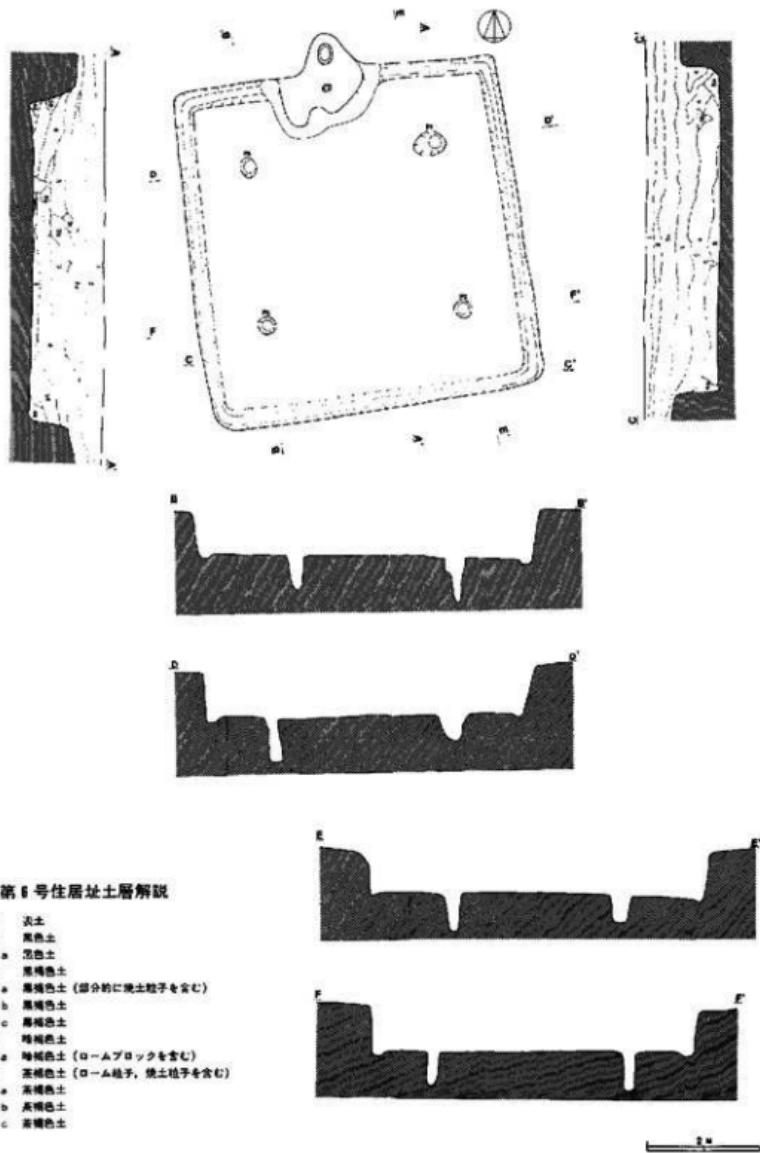


図40 第6号住居址

第6号住居址カマド（図41）

カマドの保存状態は、第4号住居址ほど良好でなくかなり崩れていた。袖部輪郭は、粘土と砂により構築されており、カマドの長さ2m、幅1.40m、焚口部幅70cmである。掘り方は、燃焼部を古形上にし、焚口部が半円形を呈し、内側にわづかに粘土塊がみられた。標準部の長さは、0.80mを測り、40度の傾斜で立ち上がり。両袖部には肩部が設けられておるが明確ではない。

第7号住居址（図42）

D-2地区南端に位置し、南北に軸長、6.49m×6.37mを測り、主軸方向、N-49°-Eを呈する方形の住居址である。調査区、C-3、a-0、b-0・9、c-4、a、b、c-1区に位置し、住居址床面のレベルはほとんど変らずよく踏み固められている。壁は垂直に立ち上がり、しっかりとしている。壁高は50cmを測り、壁溝は一周している。炉は、住居址中央部よりやや北側に寄った位置にあった。Pitは、計6本検出されたが、そのうちの方形に並んでいる4本のPit（P₁・P₂・P₃・P₆）が主柱穴と思われる。住居址内出土遺物は、壺形土器・甕形土器・砥石などが出土している。

第8号住居址（図43）

D-2地区、第1号住居址西側に位置し、東西に軸長5.10m×5.08mを測り、主軸方向、N-78°-Eを呈する方形の住居址である。調査区、A-3、d、c-8・9・0、f-9区に位置し住居址床面のレベルは、東側より西側にかけてわづかに傾斜をもつがよく踏み固められており、壁溝は、東壁、北壁の一部分に検出された。壁は垂直に立ち上がりしっかりとしており壁高40cmを計れる。炉は、住居址の中央よりやや北側寄りの位置にあった。Pitは、7本検出されたが、P₁・P₃・P₅・P₇が主柱穴と思われる。P₅は西側にオーバーハングしている。P₆は貯蔵穴と思われる。0.90m×1.10m、深さ0.80mを測り方形である。貯蔵穴内出土遺物はない。遺物は、高環形土器・甕形土器などが出土している。

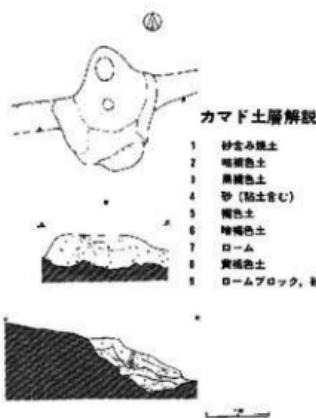
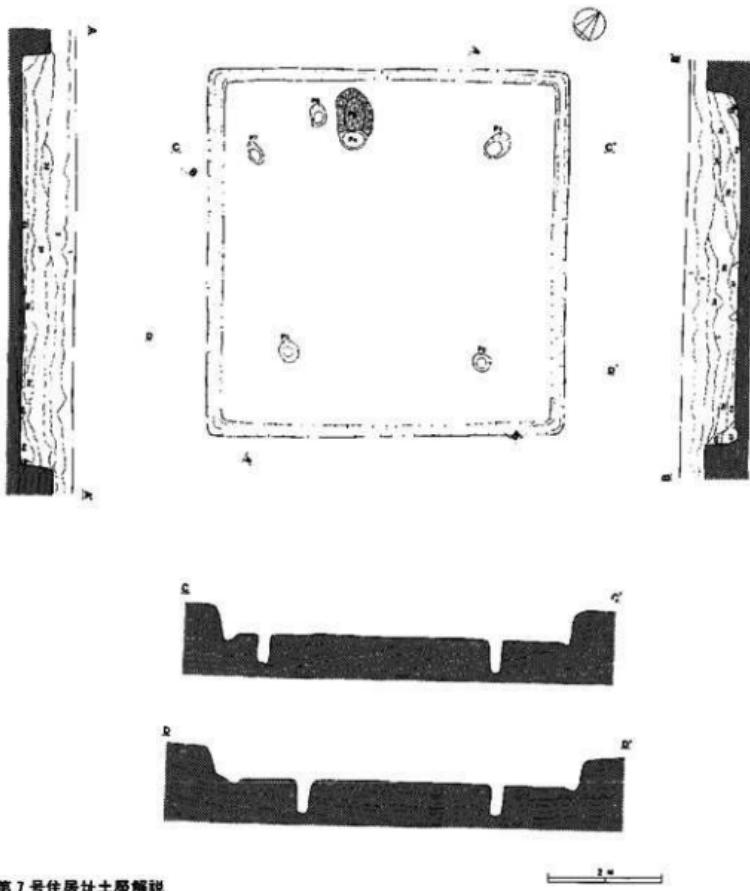


図41 第6号住居址カマド

第9号住居址（図44）

D-2地区南端に位置し、東西に軸長7.06m×6.73mを測り、主軸方向、N-44°-Wを呈する方形の住居址である。調査区、A-3、b-7、i-6・7・8、j-6・7・8区、B-3、a-7区に位置し、住居址床面のレベルは、ほとんど変らずよく踏み固められている。壁は、やや傾斜をもった立ち上がりを示しており、住居址西側は、壁高が低く、東側部分の方が高い。壁

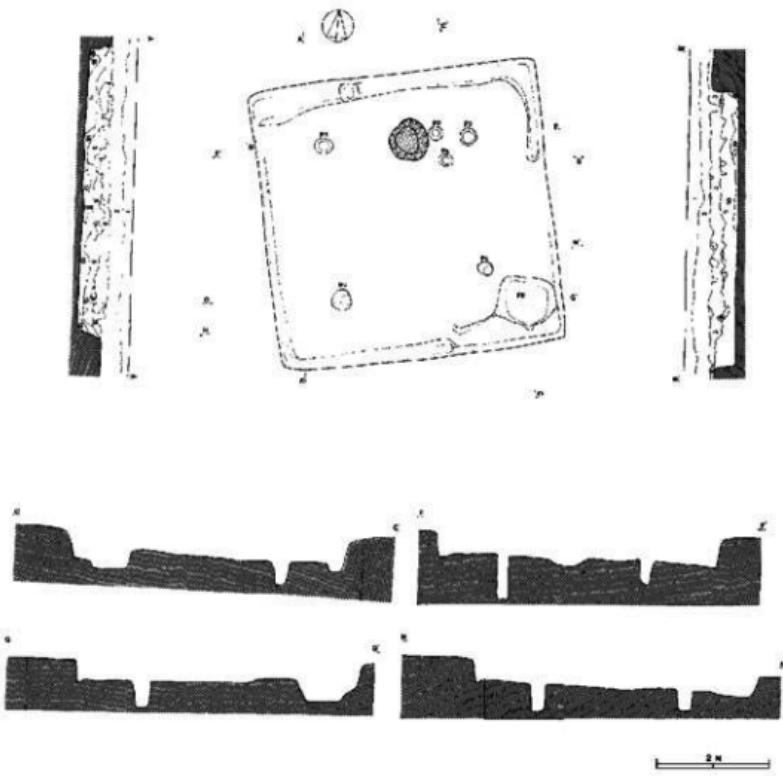


第7号住居址土層解説

- 1 黄土
- 2 黒色土
- 3 噴流熱土
- 3 a 黒褐色土（ローム粒子，燒土粒子を含む）
- 3 b 黒褐色土（ローム粒子，燒土粒子を含む）
- 3 c 黒褐色土
- 3 d 黒褐色土
- 4 a 噴流色土
- 4 d 噴流熱土
- 4 c 噴流色土
- 4 d 噴流色土（ロームブロックを含む）
- 4 e 噴流色土（ローム粒子を含み，部分的にロームブロックが含まれる）

2 m

図42 第7号住居址

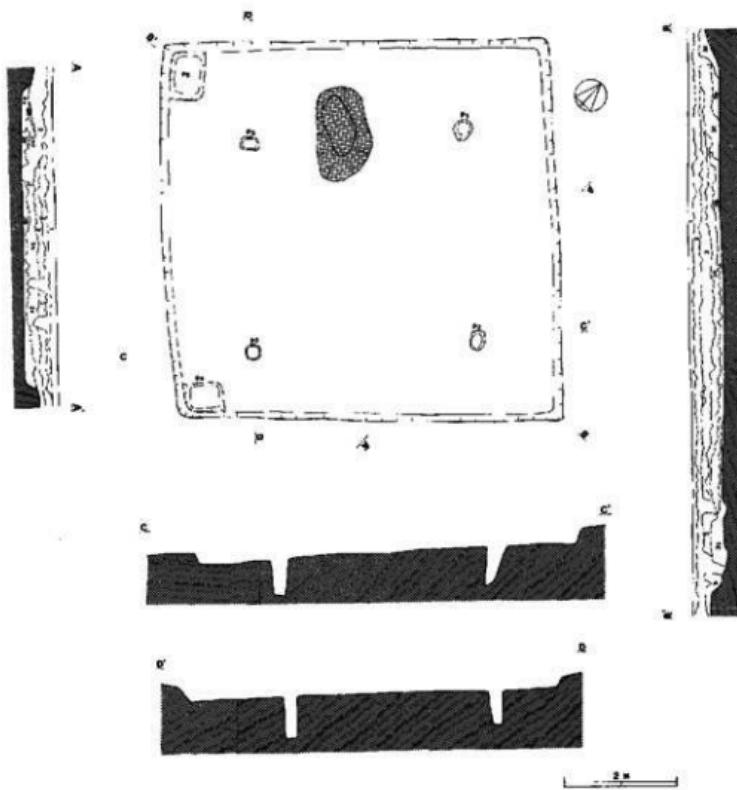


第8号住居址土層解説

- 1 黒土
- 2 黒色土
- 3 黒色土
- 4 黒褐色土 (ローム粒子含む)
- 5 黒褐色土 (ローム粒子、部分的に焼土粒子含む)
- 6 黑褐色土
- 7 黑褐色土
- 8 喀褐色土 (ロームブロックを若干含む)
- 9 喀褐色土
- 10 喀褐色土 (ローム粒子、焼土含む)
- 11 喀褐色土
- 12 喀褐色土
- 13 喀褐色土 (ロームブロック含む)
- 14 喀褐色土 (ロームブロック、成土粒子含む)
- 15 喀褐色土 (ロームブロック、泥土含む)
- 16 喀褐色土 (焼土、木炭片含む)
- 17 喀褐色土
- 18 棕色土

図43 第8号住居址

高は30cmを計り吹溝はみられず、炉は住居址中央よりやや北側部分に位置している。Pitは計6本検出され、方形に並んでいる4本が(P₁・P₂・P₃・P₄)主柱穴と思われる。南壁、西壁コーナー下にPitがみられ、P₆は貯藏穴と思われる。0.60m×0.80mの方形を呈する。住居址内出土遺物は、変形土器・甑・土製軽鉢車・有孔円板などが出土している。



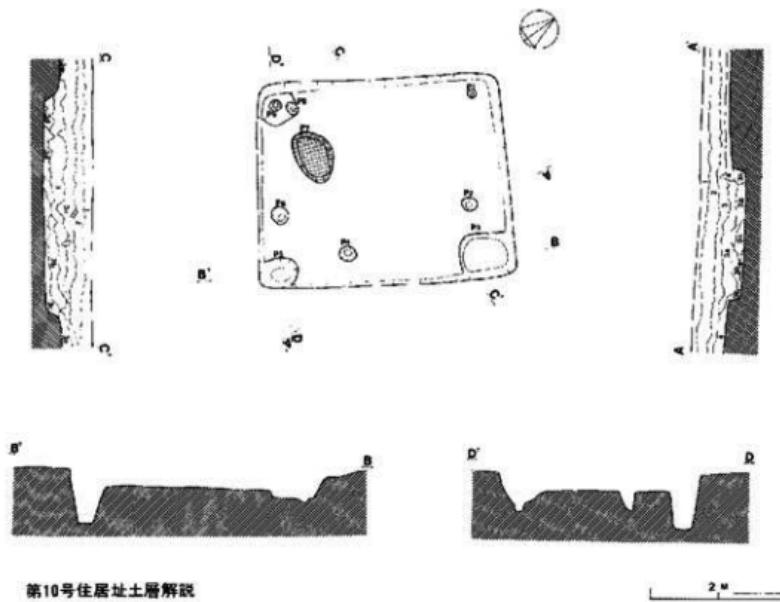
第8号住居址土層解説

- 1 灰土
- 2 黑色土
- 3 黑褐色土（ローム粒子、燒土粒子を含む）
- 3a 黑褐色土
- 3b 黑褐色土（ロームブロック、燒土粒子を含む）
- 3c 黑褐色土
- 4a 烧褐色土
- 5 烧褐色土

図44 第8号住居址

第10号住居址(図45)

D-2地区東端に位置し、東西に軸長4.70m×4.02mを測り、主軸方向、N-69° Eを呈する長方形の住居址である。調査区、B-4, b, c-7・8区に位置し、住居址床面レベルはほとんど変らずよく踏み固められている。壁は、わづかに傾斜をもつ立ち上がりをみせており、しっかりしている。壁高30cmを測り、壁溝は検出されず。かは住居址中央よりやや東側に位置している。本住居址Pitは5本検出されたが、各コーナー周辺に位置し、方形に並んでいる4本(P₁・P₂・P₄・P₅)が主柱穴と思われる。住居址出土遺物は、埴形土器・砾石などが出されている。



第10号住居址土層解説

- | | |
|-----|-----------------------|
| 1 | 薄土 |
| 2 | 黒色土（ローム粒子を含む） |
| 2 a | 黒色土 |
| 2 b | 黒色土（ローム粒子、焼土粒子を含む） |
| 2 c | 黒色土 |
| 3 | 黄褐色土（ロームブロック、焼土粒子を含む） |
| 3 a | 黄褐色土 |
| 4 | 暗褐色土（ローム粒子含む） |
| 4 a | 暗褐色土 |
| 4 b | 暗褐色土 |
| 4 c | 暗褐色土 |

図45 第10号住居址

第11号住居址（図46）

D-2地区東端に位置し、南北に軸長5.72m×5.60mを測り、主軸方向、N-19°-Wを呈する長方形の住居址である。調査区、B-4、e、f-8、9・0区に位置し、住居址床面のレベルはほとんど変らずよく踏み固められている。壁は垂直であり、立ち上がりがしっかりしており、壁高は30cmを測り、壁溝は一周している。かは検出されず。住居址内Pitは計5本検出され、主柱穴は、方形に並んでいる4本（P₁・P₂・P₄・P₅）と思われる。東壁コーナー下（P₃）は貯蔵穴と思われる。0.90m×0.74m程の長方形を呈し、深さ50cmである。貯蔵穴内部からの出土遺物はない。住居址出土遺物は、獣形土器・紡錘車（石製）などが出土している。

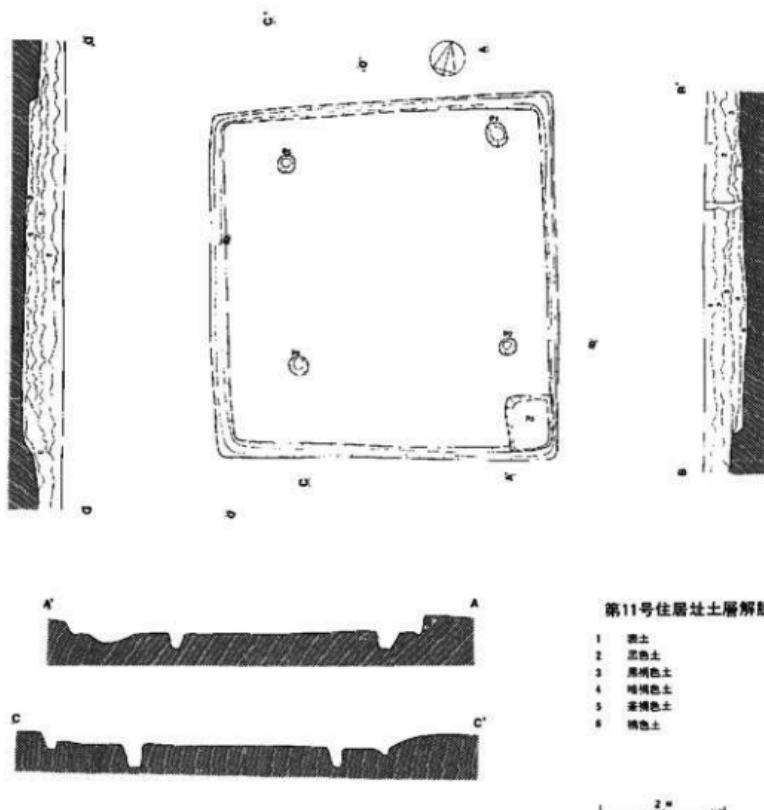
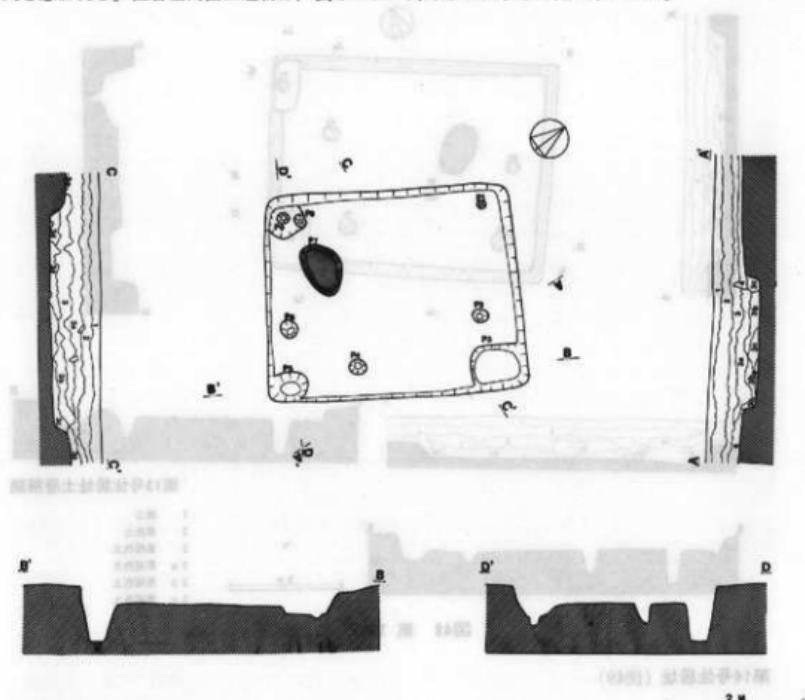


図46 第11号住居址

第12号住居址（図47）

（右図）住居址平面図

D-E地区、3号住居址北側に位置し、東西に軸長3.75m×3.05mを測り、主軸方向、N=32°-Eを呈する長方形の住居址である。調査区、A-4、f、g-1・2区に位置し、床面のレベルはほとんど変らずよく踏み固められている。壁は垂直な立ち上りを示しており壁面はしっかりしている。壁高30cmを測るが壁溝はない。炉は、住居址中央より西側の位置にあった。住居址内Pitは、計8本検出されたが、各コーナー下に並ぶPit、P₁・P₂・P₅・P₉が本住居址主柱穴と思われる。住居址内出土遺物は、菱形土器・高環形土器などが出土している。



第12号住居址土層解説

- 1 表土
 - 2 黄色土
 - 3 黑褐色土
 - 3 a 黑褐色土（ロームブロックまむ）多くはレッドブロック下に存在する。これは赤土層の上に黒褐色土層が堆積する事が多い。
 - 3 b 黑褐色土
 - 3 c 黑褐色土
- （右図）住居址断面図

図47 第12号住居址

第13号住居址（図48）

D-2地区北端部に位置し、東西に幅長5.00m×3.83mを測り、主軸方向、N-68° 一二を呈する長方形の住居址である。調査区、B-4、b、c-5・6区に位置し、住居址床面のレベルはほとんど変らずよく踏み固められている。壁は垂直であり、壁面はしっかりしている。壁高は30cmを測り壁溝は一周している。炉は住居址中心部よりやや西側に寄った位置にあった。住居址Pitは計7本検出されたが、そのうちのP₂・P₃・P₆・P₈が主柱穴と思われる。

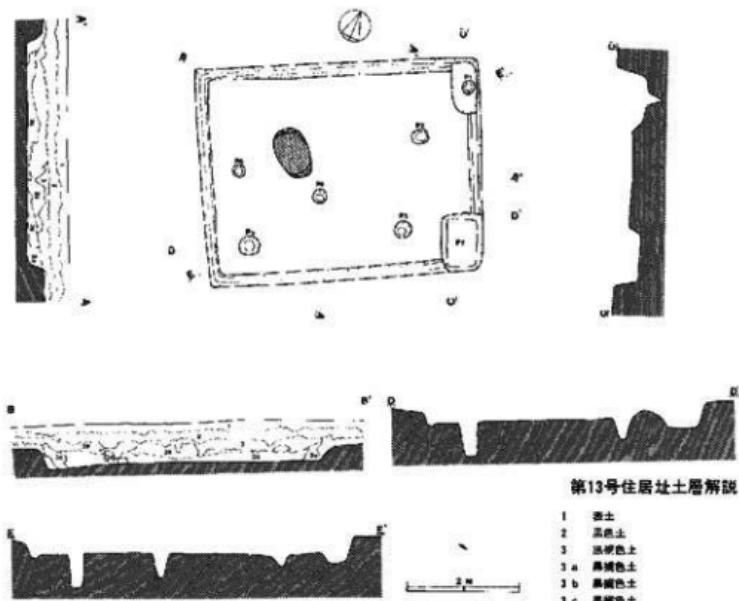
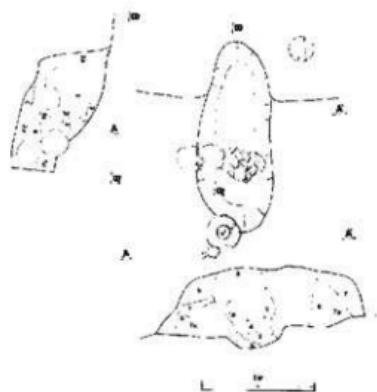
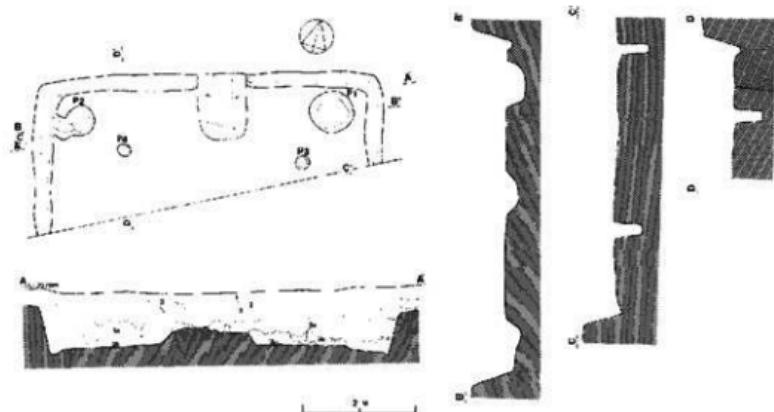


図48 第13号住居址

第14号住居址（図49）

本址はC4e₃・C4e₄・C4f₃・C4f₄に確認され、D-2地区の最南端に位置する。カッティング面に検出されたため、本址の南の部分約4%ほどけずり取られて壊滅している。主軸方向はN-17°-Wで正確な規模はつかめないが、1辺6.0mであり、おそらく方形の平面形を呈するものであろう。壁はほぼ垂直に立ちあかり、壁高は約60cmを測る。壁溝は幅20~30cm、深さ約10cmで周囲していると思われる。床はロームであり、ほぼ平坦で固く踏みかためられている。カマドは北壁のはば中央に付設され、全長160cm、幅95cmで20cmほど床面を掘り込み、60cmほど壁を切り込んでいる。ピットはP1~P4が確認され、P3・P4が主柱穴、P1が貯藏穴と思われる。



第14号住居址土層解説

- 1 黒褐色土で砂質粘土
- 2 灰褐色土
- 3 残積土上
- 3 a 黑褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 3 b 黑褐色土で赤褐色の粒子を含む。
- 3 c 黑褐色土でローム粒子を含む。
- 4 賞積褐色土

カマド土層解説

- 1 にぶい褐色土で砂質粘土
- 1 a にぶい褐色土で角十粒子を含む
砂質粘土
- 2 残積土上
- 2 a 残積土上で燒土を含む。
- 3 黑褐色土
- 4 喬色一で焼土を含む。
- 5 棕褐色土でソフトラム
- 6 賞積褐色土で黄粘土ブロックを含む。
- 7 燃灰土
- 7 a 褐色土で燒土粒子を含む。

図49 第14号住居址・カマド実測図

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	8 0	7 6	3 4	貯藏穴
P 2	5 5	5 0	2 8	
P 3	2 5	2 3	5 0	主柱穴
P 4	2 6	2 1	5 0	"

覆土はほぼ自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主である。遺物は長刷の楔形土器や空形土器が出土している。

第15号住居址（図50）

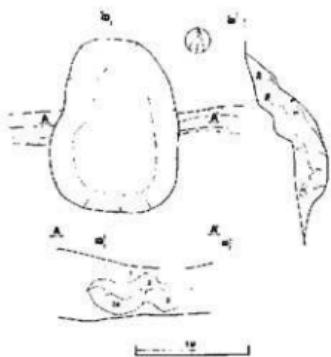
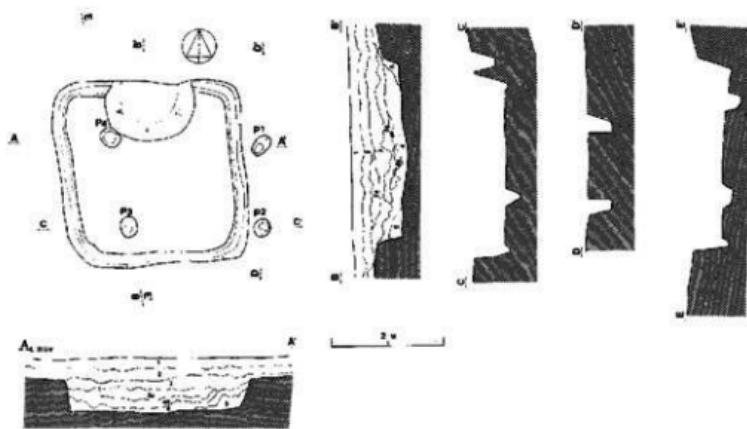
本址はB 6 bs・B 6 bs・C 6 cs・C 6 csに確認され、D-1地区の西で17号住居址の北、16号住居址の南東に位置する。主軸方向はN-6°-Wで、一辺が3.3mほどの隅丸方形の平面形を呈する。壁はいく分外傾して立ちあがり、壁高は約50cmを測る。壁溝は幅約25cm、深さ10cmで全周している。床はほぼ平坦で、よく踏み固められている。カマドは北壁の中央に付設され、全長150cm、幅120cmほどで、床を20cmほど掘り込み壁を65cmほど切り込んでいる。ピットはP 1～P 4が確認され、P 3とP 4が堅穴内に、P 1・P 2が堅穴外にある。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	4 0	2 5	4 5	主柱穴
P 2	3 1	2 8	4 4	"
P 3	3 6	3 0	2 8	"
P 4	4 0	3 2	2 5	"

覆土は自然堆積の状態を示し、上層が黒褐色土、下層がローム粒子を含む明褐色土である。遺物は少なく楔形土器や空形土器が出土している。

第16号住居址（図51）

本址はA 6 gz・A 6 hi・A 6 hz・A 6 hs・A 6 ii・A 6 iz・A 6 iisに確認され、D-1地区の最北西にあり、15号住居址の北西に位置する。主軸方向はN-18°-Wで、一辺が6.0mほどの方形の平面形を呈する。北壁中央部から西壁中央部にかけて農道がかかってカク乱をうけており、壁の立ちあがりは不明瞭で壁高は20cmほどである。東壁と南壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は約40cmを測る。壁溝は幅15～20cm、深さ約10cmで全周している。床はほぼ平坦で硬い。カマドは北壁中央部に付設されているが、カク乱をうけているため正確な規模はつかめないが、幅約1mで10cmほど床を掘り込んでいる。ピットはP 1～P 5が確認され、P 1～P 4が主柱穴、P 5が貯藏穴であろう。



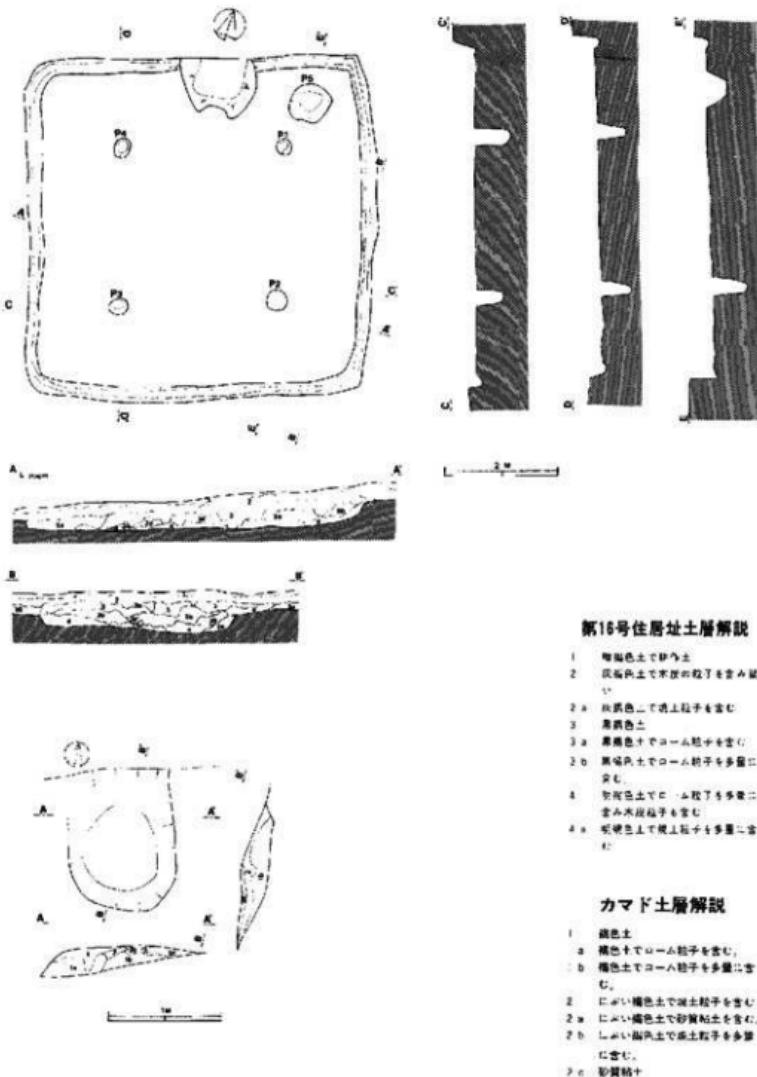
第15号住居址土層解説

- 1 單褐色土で耕作土
- 2 褐褐色土で塊土の粒子や木炭の粒子を含む。
- 2 a 褐褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 3 単褐色土
- 3 a 黑褐色土で粘土粒子やローム粒子を多量に含む。
- 4 明褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 4 a 明褐色土上でローム粒子を多量に含む。
- 5 棕褐色土でローム粒子を多量に含む。

カマド土層解説

- 1 黄褐色土でしまりが多い。
- 2 黄褐色土で木炭の粒子を多量に含む。
- 3 棕褐色土
- 3 a 棕褐色土で木炭の粒子を含む。

図50 第15号住居址・カマド実測図



第16号住居址土層解説

- 1 墓塚色土で砂土
- 2 黒褐色土で木炭の粒子を含む
シ
- 2-a 黒褐色土で透水粒子を含む
- 3 黑褐色土
- 3-a 黑褐色土でローム粒子を含む
- 2-b 黑褐色土でローム粒子を多量に
含む
- 4 黑褐色土でシーム粒子を多量に
含み木炭粒子を含む
- 4-a 黑褐色土で透水粒子を多量に含む

カマド土層解説

- 1 黒色土
- a 黑色土でローム粒子を含む
- b 黑色土でコーム粒子を多量に含む
- 2 にふい褐色土で炭土粒子を含む
- 2-a にふい褐色土で砂質粘土を含む
- 2-b にふい褐色土で粘土粒子を多量に含む
- 2-c 砂質粘土

図51 第16号住居址・カマド実測図

ビット番号	長 径 cm	短 径 cm	深 さ cm	備 考
P 1	3 0	2 8	5 3	主柱穴
P 2	3 7	3 5	6 3	"
P 3	3 1	3 0	6 5	"
P 4	3 6	2 7	5 4	"
P 5	7 5	6 5	3 8	貯蔵穴

覆土はほぼ自然堆積の状態を呈し、上層が黒褐色土、下層は明褐色土である。遺物は雙形土器、椭形土器ほか南壁中央部付近で土玉が22個出土している。

第17号住居址（図52）

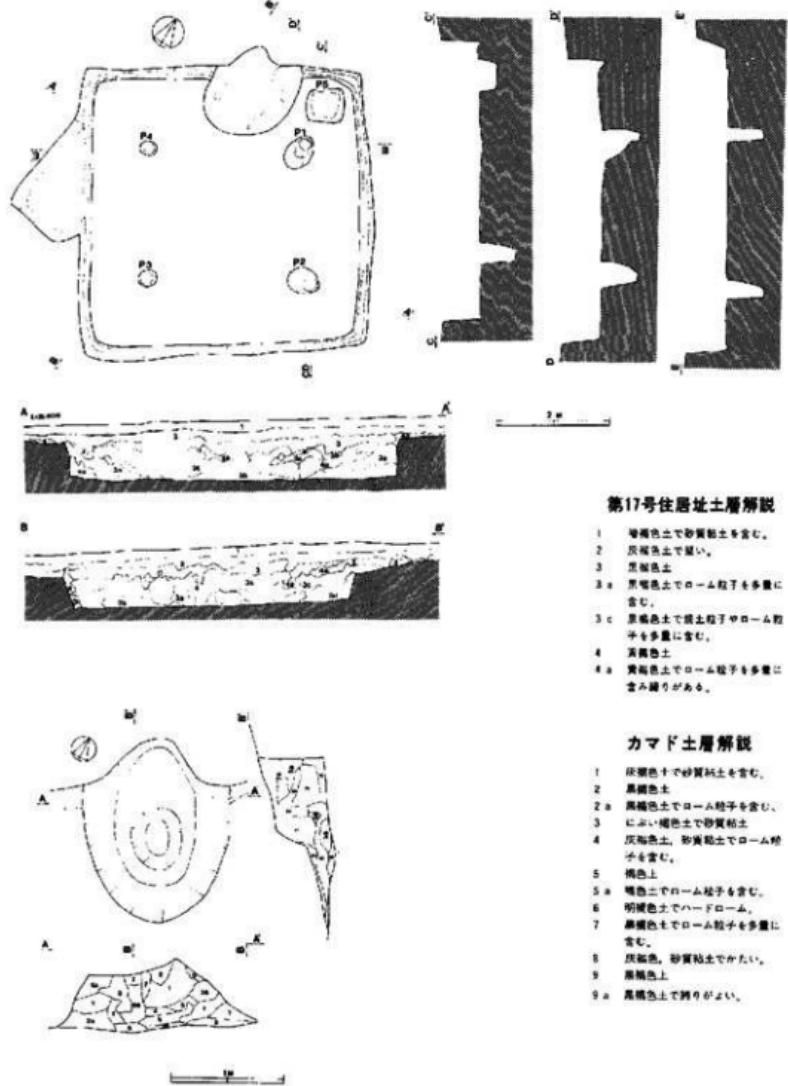
本址はB 6 e₆・B 6 e₇・B 6 f₆・B 6 f₇・B 6 f₈に確認され、15号住居址の南、22号住居址の西に位置する。主軸方向はN-32.5°-Wで、長径5.2m、短径5.0mの方形の平面形を呈する。西壁が1.4mほど張り出しているが後世のカク乱である。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は約70cmを測る。壁溝は幅約15cm、深さ5~10cmで全周している。床はほぼ平坦で硬い。カマドは北壁中央部に付設され、全長160cm、幅130cmほどで、床面を約15cm掘り込み、壁を約50cm切り込んでいる。ビットはP 1~P 5が確認され、P 1~P 4が主柱穴、P 5が貯蔵穴であろう。

ビット番号	長 径 cm	短 径 cm	深 さ cm	備 考
P 1	6 5	4 5	6 4	主柱穴
P 2	6 0	4 5	6 5	"
P 3	3 8	2 9	3 5	"
P 4	3 0	2 5	6 5	"
P 5	6 5	5 6	3 0	貯蔵穴

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主である。遺物は少なく、不形土器、壺形土器が出土している。

第18号住居址（図53）

本址はB 7 e₁・B 7 e₃・B 7 f₃・B 7 f₄・B 7 f₅・B 7 g₃・B 7 g₄・B 7 g₅・B 7 h₄に確認され、22号住居址の南東に隣接し、D-1地区のほぼ中央で南寄りに位置する。主軸方向はN-38°-Wで、長径8.4m、短径8.2mの方形の平面形を呈し、D-1地区最大の規模をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約50cmを測る。壁溝は幅20~30cm、深さ約10cmで全周している。床はロームであり、平坦で堅い。カマド（図54）は北壁中央部よりやや西寄りに付設され、全長190cm、幅130cmを測り、床面を約15cm掘り込み、壁を50cmほど切り込んでいる。ビッ



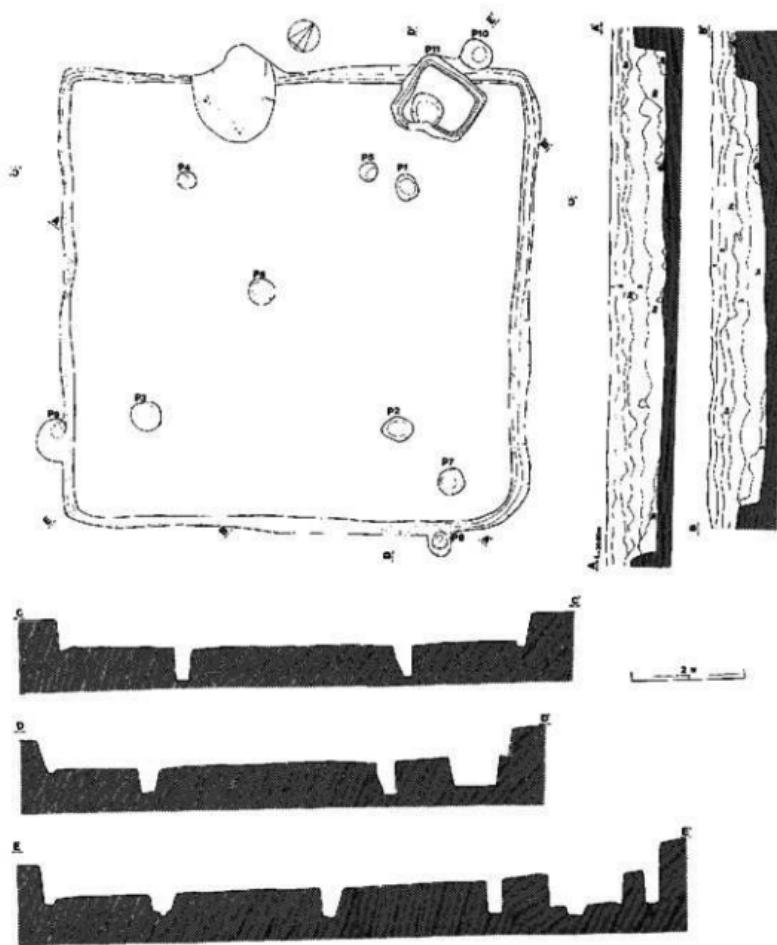
第17号住居址土層解説

- 1 黒褐色土で砂質粘土を含む。
- 2 灰褐色土で黒い。
- 3 黒褐色土。
- 3 a 黒褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 3 c 黑褐色土で成土母子やローム粒子を少量に含む。
- 4 黑褐色土。
- 4 a 黄褐色土でローム粒子を多量に含み繊維がある。

カマド土層解説

- 1 底面土で砂質粘土を含む。
- 2 黒褐色土。
- 2 a 黒褐色土でローム粒子を含む、にふい褐色土で砂質粘土。
- 4 灰褐色土。砂質粘土でローム粒子を含む。
- 5 棕色土。
- 5 a 棕色土でローム粒子を含む。
- 6 明褐色土でハードローム。
- 7 黑褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 8 灰褐色、砂質粘土でかたい。
- 9 黑褐色土。
- 9 a 黑褐色土で持りがよい。

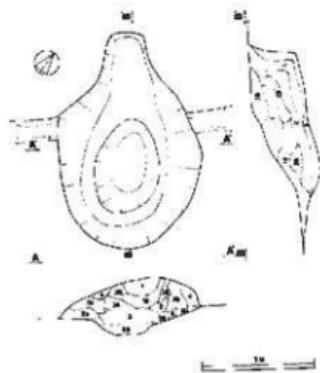
図52 第17号住居址・カマド実測図



第18号住居址土層解説

- 1 暗褐色土で耕作土。
- 2 暗褐色土。
- 2 a 暗褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 3 黒褐色土。
- 3 a 布用土でローム粒子を含む。
- 3 b 黑褐色土で其褐色土粒子を多量に含む。

図53 第18号住居址実測図



第18号住居址カマド土層解説

- 1 黒色土
- 1-a 棕褐色で砂質粘土粒子と焼土
粒子を含む。
- 2 黄褐色土
- 2-a 砂質灰土焼土粒子を含む。
- 3-a に赤い褐色土。砂質粘土で底
土粒子を多量に含む。
- 3-b に赤い褐色土。砂質粘土で赤
褐色土粒子や焼土を多量に含
む。
- 3-c に赤い褐色土。砂質粘土で堅
い。
- 4 黑褐色で砂質粘土を含む。
- 5 明褐色土
- 5-a 砂質灰土で焼土粒子を多量に
含む。

図54 第18号住居址・カマド

トはP1～P11が確認され、P1～P4が主柱穴であり、P11が貯蔵穴であると思われる。

ピット番号	長 径 cm	短 径 cm	深 さ cm	備 考
P 1	4.9	3.9	5.3	主柱穴
P 2	5.7	4.2	4.0	#
P 3	5.4	5.0	3.9	#
P 4	3.2	2.8	5.7	#
P 5	3.2	3.0	5.9	
P 6	4.7	4.5	5.7	
P 7	4.8	4.5	3.7	
P 8	4.2	4.0	1.4	
P 9	7.8	5.0	1.4	
P 10	5.6	5.0	5.8	
P 11	14.4	12.5	7.2	貯蔵穴

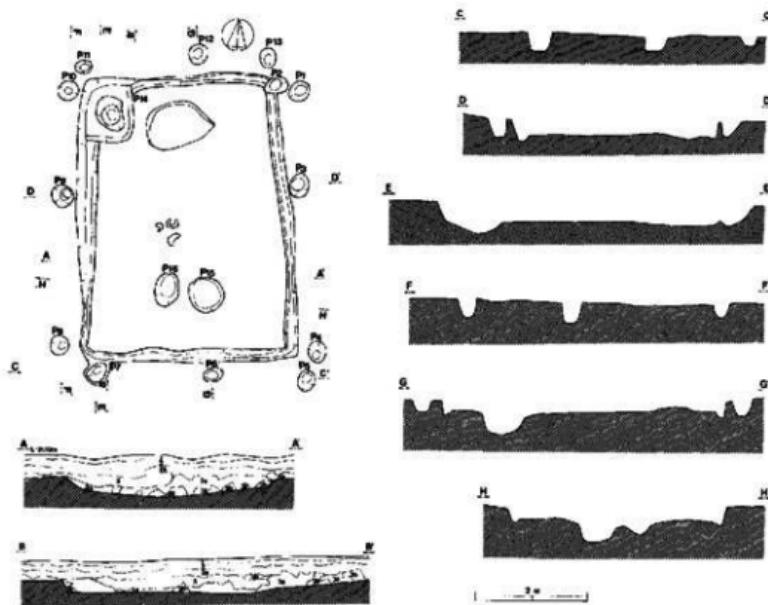
覆土はほぼ自然堆積の状態を呈し、黒褐色土が主である。遺物は少なく、环形土器、高环形土器、鍛先等が出土している。

第19号住居址（図55）

本址はB7cc・B7cc・B7dc・B7dcに確認され、22号住居址の東に位置する。半袖方向はN-7.5°-Wで、長径5.0m、短径3.8mの方形の平面形を呈す。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高15~20cmを測る。壁溝は幅20~30cm、深さ約10cmで全周している。床はロームであり、硬い。カマドは北壁寄りの床にあり、北向きで馬蹄形状に高さ10cm、幅10~15cmの粘土でかこった全長約90cm、幅1mほどの規模をもち、天井部は不明である。内部には焼土が充満していた。その中央に支脚にしたものと思われる粗製のコップ型の土器が倒立させてあった。また住居址の中央部に焼土がみられ焼けた粘土塊が残っており、これは炉址と思われる。ピットはP1~P16が確認され、P1~P14は堅穴外で壁に沿ってみられる。

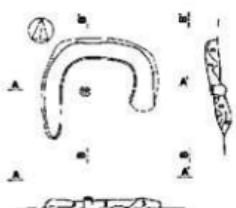
ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	3 6	3 4	3 0	
P 2	4 2	2 7	4 3	
P 3	4 3	3 2	2 3	
P 4	3 7	3 0	4 2	
P 5	3 5	3 0	3 6	
P 6	3 5	2 1	2 4	
P 7	5 0	4 0	3 7	
P 8	3 4	2 9	2 7	
P 9	4 2	3 5	3 8	
P 10	3 6	3 5	3 3	
P 11	3 1	2 2	3 0	
P 12	3 5	3 2	2 9	
P 13	3 5	2 6	2 3	
P 14	1 1 4	9 4	2 0	
P 15	6 5	5 8	3 3	
P 16	6 0	4 0	2 2	

覆土は自然地積の状態を呈し、黒褐色土が土である。遺物はコップ型の土器と羽口片のほか、P15・P16と中央のが土から多量の鐵滓が出土している。



第19号住居址土層解説

1. 灰褐色土で耕作土
2. 灰褐色土
- 2 a. 灰褐色土で砂土の粒子や土の粒子を多量に含む。
3. 黑褐色土
- 3 a. 灰褐色土で粘土の粒子やローム粒子を含む。
- 3 b. 黑褐色土で黄褐色土の粒子を多量に含む。



カマド土層解説

1. 黑褐色土で木炭の粒子を含む。
2. 灰褐色土で大粒な燃土粒子を多量に含みもらい。
3. 黑褐色土で大粒な木炭の粒子を含み、硬い。

図55 第19号住居址・カマド実測図

第20号住居址（図56）

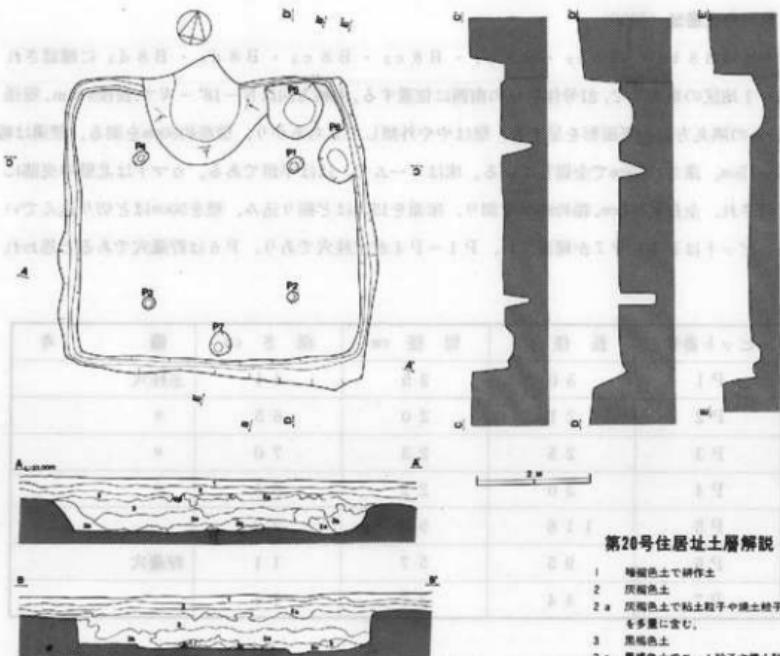
本址はB 8 b₂・B 8 b₃・B 8 c₁・B 8 c₂・B 8 c₃・B 8 d₂・B 8 d₃に確認され、D-1地区の東沿りで、21号住居址の南西に位置する。主軸方向はN-18°-Wで、長径5.6m、短径5.4mの隅丸方形の平面形を呈する。壁はやや外傾して立ちあがり、壁高約60cmを測る。壁溝は幅10~15cm、深さ約10cmで全周している。床はロームで、ほぼ平坦である。カマドは北壁中央部に付設され、全長約160cm、幅約85cmを測り、床面を15cmほど掘り込み、壁を50cmほど切り込んでいる。ピットはP 1~P 7が確認され、P 1~P 4が主柱穴であり、P 6は貯蔵穴であると思われる。

ピット番号	長 径 cm	短 径 cm	深 さ cm	備 考
P 1	3 0	2 5	4 4	主柱穴
P 2	2 1	2 0	6 5	〃
P 3	2 5	2 3	7 0	〃
P 4	3 0	2 2	5 4	〃
P 5	1 1 6	9 2	2 5	
P 6	9 5	5 7	1 1	貯蔵穴
P 7	4 4	3 7	1 4	

覆土はほぼ自然堆積の状態を示し、黒褐色土が土である。遺物は変形土器、土製支脚が出土している。

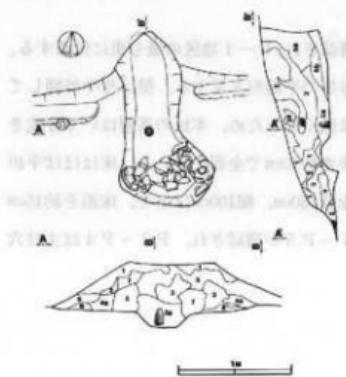
第21号住居址（図57）

本址はA 8 j₁・A 8 j₂・B 8 a₄・B 8 a₅に確認され、D-1地区の最も東に位置する。主軸方向はN-22°-Wで、長径6.0m、短径5.6mの方形の平面形を呈する。壁はやや外傾して立ちあがり、壁高約50cmを測るが、D-1地区的東側は低くなるため、本址の東側はいく分流されており、壁高は約10cmである。壁溝は幅15~20cm、深さ約10cmで全周している。床はほぼ平坦で、ロームである。カマドは北壁中央部に付設され、全長130cm、幅100cmほどで、床面を約15cm掘り込み、壁を30cmほど切り込んでいる。ピットはP 1~P 5が確認され、P 1~P 4は主柱穴であり、P 5は貯蔵穴と思われる。



第20号住居址土層解説

- 1 黒褐色土で耕作土
- 2 黒褐色土
- 2 a 灰褐色土で粘土粒子や焼土粒子を多量に含む。
- 3 黑褐色土
- 3 a 黑褐色土でローム粒子や焼土粒子を含む。
- 3 b 黑褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 3 c 黑褐色土で赤褐色土の粒子を多量に含む。



カマド土層解説

- 1 黑褐色土で砂質粘土
- 2 褐色土
- 3 灰褐色土の砂質粘土でしまりがある。
- 3 a 次褐色土で焼土粒子を多量に含む。
- 4 褐色土
- 4 a 粘土で焼土粒子を含む。
- 5 赤褐色土で焼土粒子を多量に含みかたい。
- 6 灰褐色土でかたい。
- 6 a 灰褐色土で赤褐色土のブロックを多量に含む。
- 6 b 烧土でローム粒子を多量に含む。
- 7 黑褐色土で砂質粘土を多量に含む。

図56 第20号住居址・カマド実測図



図57 第21号住居址・カマド実測図

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	3.6	2.8	7.0	主柱穴
P 2	3.1	2.1	3.8	"
P 3	3.3	2.3	4.5	"
P 4	3.2	2.6	3.0	"
P 5	9.0	7.0	3.3	貯藏穴

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主である。遺物は环形土器が多く、他は鉢が出土している。

第22号住居址（図58）

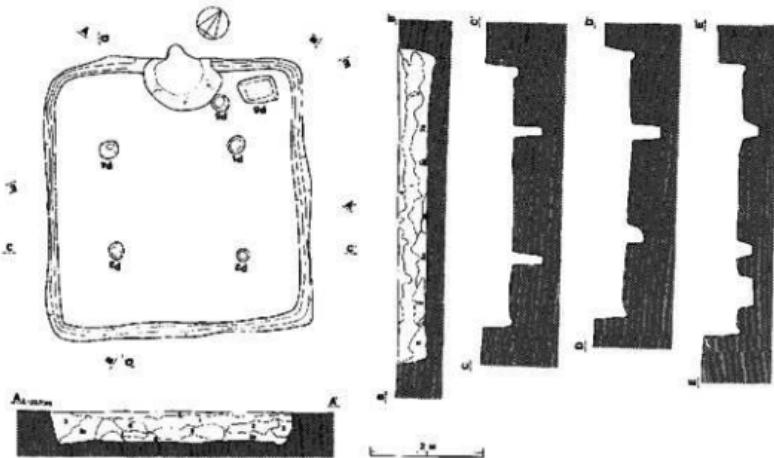
本址はB 7 c₂・B 7 c₃・B 7 d₂・B 7 d₃に確認され、D-1地区のはば中央に位置し、18号住居址の北西に隣接する。主軸方向はN-35°-Wで、長径5.0m、短径4.6mの方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は約50cmを測る。壁溝は幅15~20cm、深さ約10cmで全周している。床はロームで、ほぼ平坦をなす。カマドは北壁中央部に付設され、全長120cm、幅80cmほどで、床面を約10mm掘り込み、壁を20cmほど切り込んでいる。ピットはP 1~P 6が確認され、P 1~P 4が主柱穴であり、P 6は貯蔵穴と思われる。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	3.5	2.8	6.2	主柱穴
P 2	2.3	2.2	5.0	"
P 3	3.0	2.6	5.4	"
P 4	3.5	3.1	3.0	"
P 5	3.4	2.9	2.9	
P 6	6.8	5.0	2.9	貯蔵穴

覆土はほぼ自然堆積の状態を呈し、褐色土、黒褐色土が主である。遺物は雙形土器、环形土器、橢形土器が出上している。

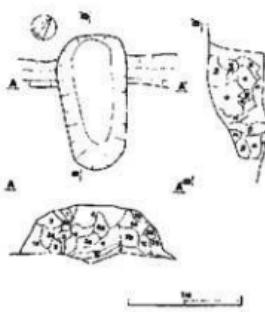
第23号住居址（図59）

本址はA 7 i₁・A 7 i₂・A 7 j₁・A 7 j₂に確認され、22号住居址のはば北に位置する。主軸方向はN-28.5°-Wで、長径5.1m、短径4.8mの隅丸方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は約50cmを測る。壁溝は幅約20cm、深さ約10cmで全周している。床はロームであり、ほぼ平川で硬い。カマドは北壁中央部に付設され、全長120cm、幅90cmほどで、床面を約20cm掘り込み、壁を約30cm切り込んでいる。ピットはP 1~P 8があり、P 1~P 4は主柱穴と



第22号住居址土層解説

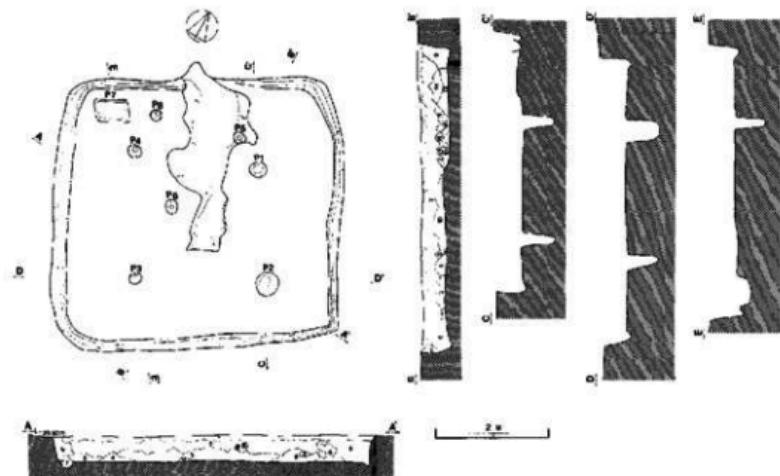
- 1 黒褐色土
- 2 緑色土
- 2 a 褐色土でコーム粒子を含む。
- 3 黄褐色土
- 4 黒褐色土で粘土粒子を多量に含む。
- 5 黄褐色土
- 5 a 褐褐色土で灰土粒子を含む。
- 6 黑褐色土で砂質粘土と灰土粒子を含み堅い。
- 7 にふい褐色土の砂質粘土でかたい。
- 8 黄褐色土



カマド土層解説

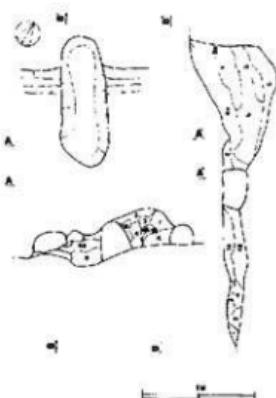
- 1 褐色土
- 1 a 黑褐色土で砂質粘土粒子を含む。
- 1 b 黑褐色土。砂質粘土で粘土粒子を含む。
- 1 c 黑褐色土で大粒の粘土粒子を含む。
- 2 にふい褐色土で砂質粘土を含む。
- 2 a にふい褐色土で砂質粘土で灰土粒子を含む。
- 2 b にふい褐色の砂質粘土
- 3 黄褐色土で硬い。
- 3 a 黄褐色土で砂質粘土を含む。
- 4 黑褐色土で粘土粒子を含む。
- 5 黑褐色土で大粒の粘土粒子を含む。
- 6 緑色の粘土
- 5 x 褐色土で燒土粒子を含む

図58 第22号住居址・カマド実測図



第23号住居址土層解説

- 1 黄色土
- 2 黄褐色土
- 3 黄褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 4 黄褐色土で粘土粒子を含む。
- 5 黄褐色土で赤褐色土粒子を多量に含む。
- 6 灰褐色土
- 7 灰褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 8 灰褐色土で赤褐色土粒子を含む。
- 9 黑褐色土
- 10 黑褐色土
- 11 黄褐色土で粘土粒子を含む。
- 12 黄褐色土
- 13 黄褐色土で赤褐色土粒子を含む。



カマド土層解説

- 1 黑褐色土
- 2 黑褐色土で炭土粒子を含む。
- 3 黑褐色土でローム粒子を多量に含み混じ。
- 4 にぶい黑褐色土の砂質粘土で堅い。
- 4 a 黑褐色土で粘土粒子を含む。
- 5 明褐色土で燒土粒子や粘土粒子を多量に含む。
- 6 黑褐色土で灰土粒子を多量に含む。
- 7 灰褐色土
- 8 黑褐色土で堅い。
- 8 a 黄褐色土

図59 第23号住居址・カマド実測図

思われる。P 8 は貯蔵穴と思われる。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	3 0	2 8	5 3	柱穴
P 2	4 1	3 9	5 9	〃
P 3	2 5	1 8	6 1	〃
P 4	2 5	2 2	5 3	〃
P 5	2 5	1 9	6 0	
P 6	2 5	2 0	5 0	
P 7	7 2	4 0	2 0	
P 8	2 1	2 0	5 5	貯蔵穴

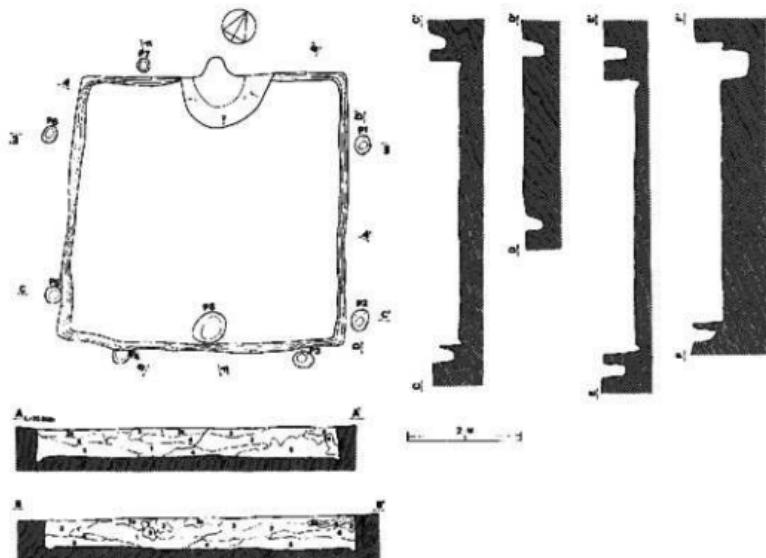
覆土はほぼ自然堆積の状態を示し、暗褐色土、黄褐色土が主である。遺物は环形土器が多く、その他鉢形土器、瓢形土器、菱形土器等が出土している。

第24号住居址(図60)

本址はB 6 hs・B 6 hs・B 6 is・B 6 isに確認され、17号住居址のはば南に位置する。主軸方向はN-25.5°--Wで、長径5.0m、短径4.8mの方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は約60cmを測る。壁溝は幅10~15cm、深さ約10cmで全周している。床はロームで平坦をなし、よく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設され、全長120cm、幅70cmほどで、床面を約10cm掘り込み、壁を約30cm切り込んでいる。ピットはP 1~P 8があり、P 1~P 7は壁穴外にあり、P 8 は貯蔵穴と思われる。

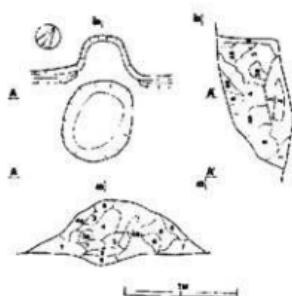
ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	3 5	2 5	4 3	
P 2	3 8	2 7	2 8	
P 3	3 6	2 4	3 5	
P 4	3 7	2 3	2 3	
P 5	3 0	2 6	3 5	
P 6	3 0	2 5	3 9	
P 7	2 5	2 1	4 0	
P 8	6 3	5 2	4 5	貯蔵穴

覆土は自然堆積の状態を呈し、褐色土が主である。遺物は少なく、环形土器が出土している。



第24号住居址土層解説

- 1 黒褐色土
- 2 棕色土
- 2-a 棕色土で砂質粘土を含む。
- 3 明褐色土
- 4 深褐色土でローム粒子を含む。
- 5 棕色土
- 5-a 棕色土でローム粒子を含む。
- 6 黑褐色土で燒土粒子を含む。



カマド土層解説

- 1 明褐色土
- 2 灰褐色土で粘土粒子を多量に含む。
- 3 灰褐色土
- 3-a 灰褐色土で燒土粒子を多量に含む壁。
- 4 棕色土で砂質粘土
- 4-a 棕色土の砂質粘土で壁。
- 5 黑褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 6 にぶい褐色土の砂質粘土で壁。
- 7 棕褐色土
- 8 黑褐色土
- 9 Hard ローム

図60 第24号住居址・カマド実測図

(2) 周溝墓 (図61)

北今城遺跡調査区、A-3区に位置し、全形は、方形を呈し、周溝は、隅丸方形のプランをもち、大きさは、東西5.48m、南北5.20m、溝の幅は、50~70cmを割りコーナーで1.00mを測る地点もある。主軸方向、N-39°-W。溝底は、平らで、中央にかけて深く、いわゆる舟底形を呈している。周溝・北・南・東側コーナー、中央部にPitが検出。溝中の土層は、最下層に暗褐色土にロームブロック、穀子が混った茶褐色土が堆積し、その上に黒色土がある。北今城遺跡立地においての周溝墓の検出は調査区域内、集落西側に位置する。集落形態、規模の点からみても単独の墓域としては多少なりとも疑問を感じる。北今城遺跡の集落、墓域の性格にも多くの問題がある。遺物は楕形土器が周溝覆土より出土している。

注 原始墓制研究-5- 方形周溝墓研究 その5- 原始墓制研究会 1977年

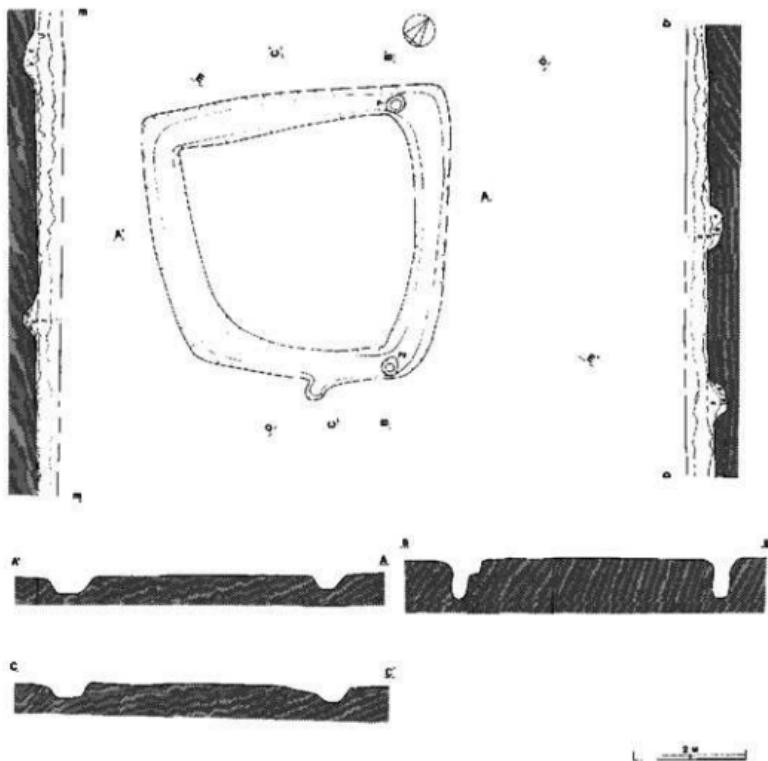
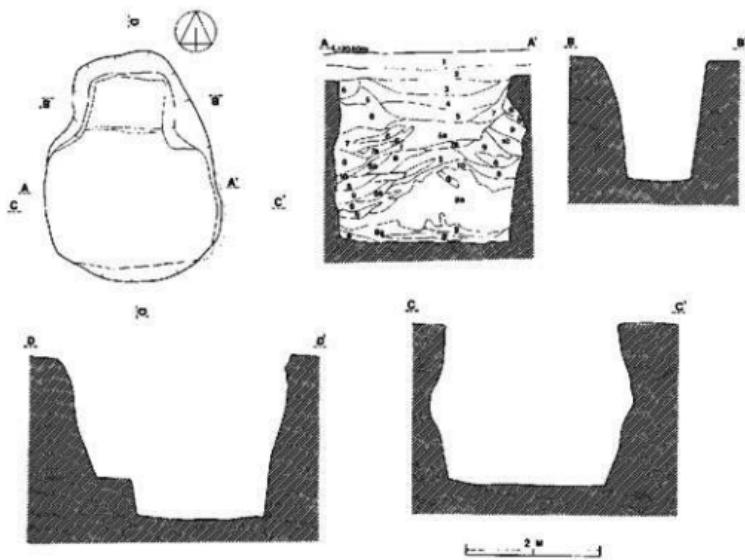
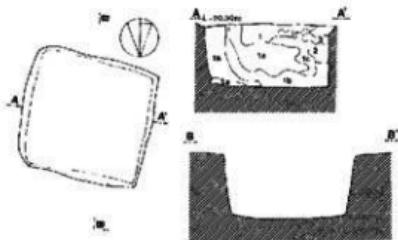


図61 周溝墓



第1号土壤土層解説

- 1 暗褐色土
- 2 黑褐色土
- 3 褐褐色土
- 4 紫色土でローム粒子混入
- 5 黑褐色土
- 5 a 紫色土でローム粒子わずかに混入。
- 6 に紫土色土でソフトローム。
- 7 黄褐色土。
- 7 a 黄褐色土でソフトロームのプロック状塊。
- 8 紫色土でソフトローム。
- 8 a 紫色土でソフトローム。
- 9 明黄色土で黄褐色土層。
- 10 墓場。



第2号土壤・土層解説

- 1 暗褐色土
- 1 a 墓場土でローム粒子を含む。
- 1 b 墓場土でローム粒子を多量に含む。
- 1 c 暗褐色でローム粒子をわずかに含む。
- 2 黑褐色土。
- 2 a 黑褐色土で木炭の粒子を含む。
- 3 墓場土。

図62 第1・2号土壤実測図

(3) 土壙

第1号土壙(図62)

本址はB7h2・B7h3・B7i2・B7i3に確認され、第18号住居址と第24号住居址の中間で、第2号土壙の南東に位置する。主軸方向はN-6.5°-Wで、平面形は長径3.4m、短径2.6mの不定規円形を呈す。遺構検査面からの深さは約2.4mであるが、床面に段差があり、北側は深さ約1.8mで幅1.6mほどである。また、南側は壁が内擣して立ちあがり地下式壙の様相を呈する。覆土は人為的に埋めもどされたと思われる状態を示し、遺物は出土していない。

第2号土壙(図62)

本址はB7g1に確認され、第18号住居址と第24号住居址の中間で、第1号土壙の北西に位置する。主軸方向はN-76°-Wで、平面形は長径2.0m、短径1.8mの方形を呈す。遺構確認面からの深さは0.9mで、壁はほぼ直立して立ちあがり、床面は平坦で硬質のものである。覆土は軟質のものである。遺物は出土していない。

2 遺物

(1) 石製品

石鎌(図63、5)

北今城遺跡第2号住居址出土。無柄石鎌で、いわいに向面加工され、周辺は鋸歯状に調整されており、比較的粗稚な加工でかなりの厚味をもっている。石鎌は柄部の一部が欠損している。石材はチャートである。

有孔円板(図63、7・13)

(No.7) 第9号住居址出土。平たく割った板石を円形にカットし、上側面部に研磨痕の痕がみられる。表裏向面の中央部に研磨痕が残り、穿孔の痕跡が残っている。

(No.13) 北今城遺跡(D-2池区)出土。長方形を呈し、短辺は丸味をもつ。表裏とも研磨痕の粗い条痕が残っている。

紡錘車(図63、8)第11号住居址出土。

裁頭円錐状で大型であり、断面は台形に近い形をしている。中央の穴は直径7cmである。表面には整形のための多数の擦痕がある。石質は、蛇紋岩である。

臼玉(図63、9~12)第13号住居址出土。

丁寧なつくりで側面を磨き、やや丸味をもつ。細かい研磨痕の棱が残る。

礫石(図63、14)第10号住居址出土。

黄色凝灰質砂岩でやや軟質、4面すべて使用痕があり、表面はかなり彎曲して滑沢、かなり

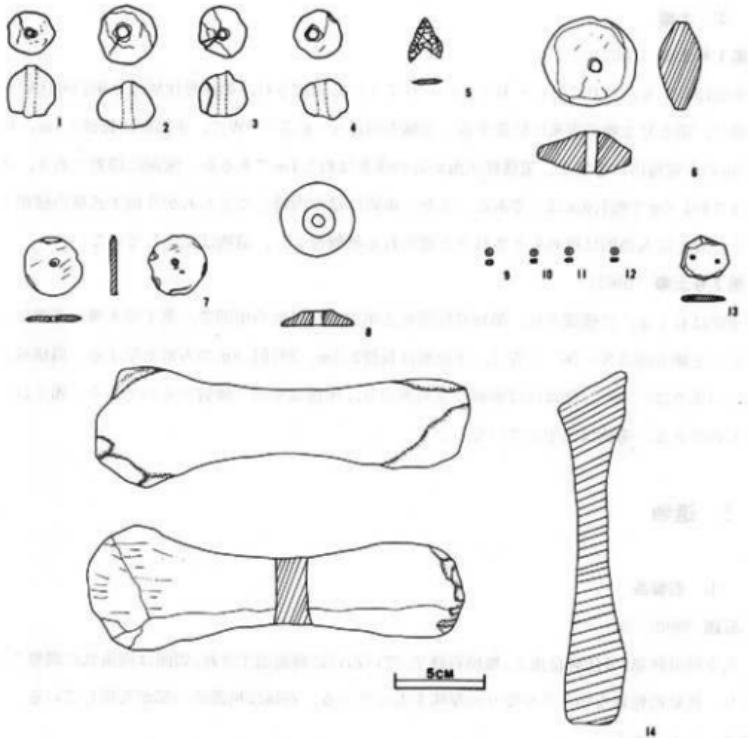


図63 石製模造品及び石製品

引き減りしている。

(2) 土製品

紡錘車（図63、6）第9号住居址出土。

円形の土製品である。胎土は砂粒を含む、焼成は良いが表面はやや粗雑である。

土玉（図63、1～4）第1号住居址出土。

完形品であり、胎土、焼成は良好であり、色調は褐色を呈す。中央部に孔を持ち、片側から穿孔されている。中央、口縁部と思われる部分に欠損がみられ、円球状というよりもやや楕円形に近く、器面もやや凹凸を持つ。

（図71、5～26）第16号住居址出土。

5～26はいずれも南壁中央部付近の床面から集中して出土した土玉である。ほとんどが手捏ねのための指頭痕や指なでによる整形がみられる。色調はにぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

第16号住居址出土土器計測表

番号	長さcm	直径cm	口徑cm	重量g	番号	長さcm	直径cm	口徑cm	重量g
5	2.5	3.0	0.5	19	16	2.6	3.4	0.5	23
6	2.2	3.2	0.6	21	17	2.5	3.2	0.5	22
7	2.3	3.1	0.6	21	18	2.6	3.3	0.6~1.5	20
8	2.7	3.0	0.5	22	19	2.6	3.1	0.5	19
9	2.5	3.0	0.7	20	20	2.6	2.7	0.5	20
10	2.8	2.9	0.6	21	21	2.7	3.1	0.4	22
11	3.0	3.4	0.7	26	22	2.9	3.1	0.4	28
12	2.6	3.0	0.7	19	23	3.0	3.2	0.4	25
13	2.8	3.2	0.6	23	24	2.6	3.0	0.5	20
14	3.0	3.5	0.6	27	25	3.1	3.4	0.8	30
15	3.0	3.1	0.4	25	26	2.9	3.4	0.6	27

支脚 (図72-6) 第18号住居址出土。

6はカマド内から出土した支脚で、現高12.0cmを測る。円錐形状をなす。指による整形がなされ指頭圧痕が残る。

色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。

羽口 (図73-4) 第19号住居址出土。

4は北側の炉址付近の床面から出土したフイゴ羽口片で、現存最大長15.5cm、直径7.5cmの筒形をなし、直径2.5cmの孔が貫通している。先端部に溶解した鉄が付着し、気泡孔が無数に残る。火熱を受け部分的に変色している。色調は表面がよい橙色や褐灰色、内部は橙色を呈す。

支脚 (図73-9) 第20号住居址出土。

9はカマド内から出土した支脚で現高13.2cm、最大幅9.0cmを測る。指による整形がなされ、上面と底面が平坦である。色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。

(3) 鉄製品

鋤先 (図72-7) 第18号住居址出土。

7は西コーナー付近の床面に近い覆土中から出土した鋤先で、現存最大長6.4cm、最大幅12.2cmを測る。幅の広いU字形をなす。溝はV字形を呈し、深さ7mmを測る。腐食が著しい。

その他 (写75) 第19号住居址出土。

中央部の炉址とP5・P16から鉄滓が394片出土している。

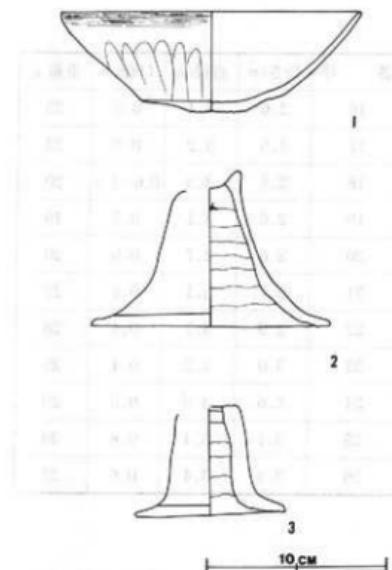


図64 第1号住居址出土遺物

(4) 土器

第1号住居址内出土土器 (図64, 1~3)

1. 高环形土器

口径, 16.4cm。形態の特徴, 壁部のみ。口縁部と体部と底部の境に稜あり。各々の面が反り気味に開く。

手法の特徴, 内外面とも口縁部横なで, 器面粗く, 焼成もろい。色調は橙褐色を呈している。

2. 高环形土器

脚部残存, 手法の特徴, 外面ヘラ磨き, 内面絞り目痕, 輪積痕がみられる。焼成良。

3. 高环形土器

脚部残存, 手法の特徴, 外面ヘラ磨き, 内面絞り目痕, 輪積痕がみられる。焼成良, 色調, 橙褐色を呈している。

第2号作居址内出土土器 (図65, 1~5)

1. 高环形土器, 脚径, 11.6cm。

形態の特徴, 脚部, 底部のみ残存。直線的に大きく「ハ」の字形に開く。裾部水平に近く横に開く。

手法の特徴, 外面, 脚部全面にヘラ磨き, 下端から裾部にかけて横なで。内面, 輪積痕, 接合部けずり良く, 絞り目痕を消す。裾部横なで, 色調, 赤褐色, 烧成良。

2. 梭形土器, 口径8.5cm, 器高4.7cm, 底径4cm。

形態の特徴, 口縁部は直線的な立ち上がりを示し, やや外反する。底部やや上げ底。器肉厚い。

手法の特徴, 手づくり風の作りであり, 外面全体なで。内面, 横けずりがみられ, 全体に凹凸を呈し, 内外面に輪積痕がみられる。色調, 暗褐色, 烧成良。

3. 梭形土器, 口径, 8.5cm, 器高5cm, 底径4.2cm。

形態の特徴, 口縁部直線的な立ち上がりを呈し, 底部やや上げ底を呈し, 器肉厚い。

手法の特徴, 手捏風のつくりで, 口縁部横なで, 外面全体になでがみられ, 全体に凹凸あり, 内外面に輪積痕がみられる。色調, 暗褐色, 烧成良。

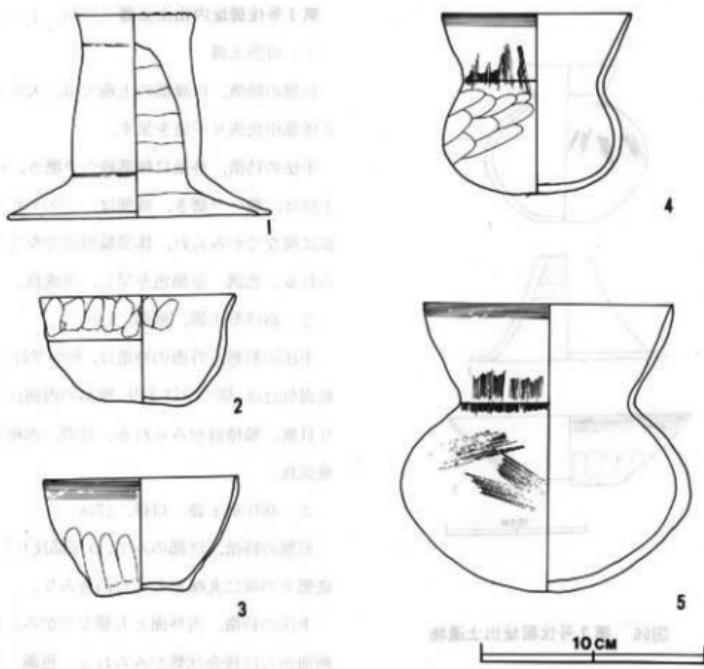


図65 第2号住居址出土遺物

4. 増形土器、口径、8.4cm、器高8.0cm、底径、2.8cm。二重丸みを有する増形土器、直線的基部の上位に、口縁部が大きく外反し、直線的に立ち上がり、頸部、外面するどく折れ、内面丸味をもち体部偏球状を呈し中位がふくらむ。

手法の特徴、口縁部横なで、外面、体部上半になでがみられ、底部、胴部はへラけずり。内面は、体部をなで、胴下半を指なでを実施している。色調、赤褐色、焼成良。

5. 増形土器、口径、11.0cm、器高、12.7cm、底径、3cm。二重丸みを有する増形土器、直線的基部の上位に、口縁部が大きく直線的に開き、安定する。頸部の外面鋭く折れ、内面の面取り。体部は、やや偏平中位でふくよかな丸味、底部は、平底氣味な丸底である。

手法の特徴、外面の口縁から体部まで「なで」がみられ、底部、下半部へラけずり。色調、黒褐色、焼成良。

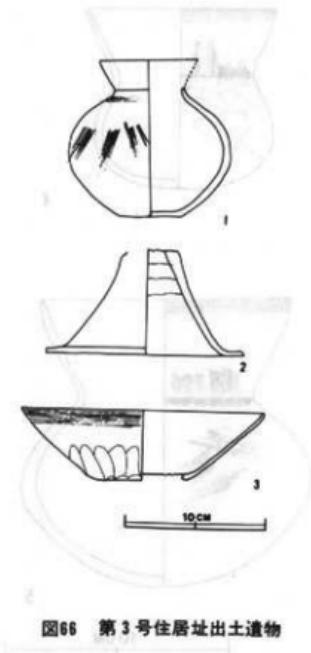


図66 第3号住居址出土遺物

第3号住居址内出土土器（図66、1～3）

1. 壺形土器

形態の特徴、口縁部の上端欠損。大きく開き体部中央張り平底を呈す。

手法の特徴、外面口縁部縦へラ磨き、体部上位は、横へラ磨き、底部は、へラけずり。内面は縦なでがみられ、体部輪積痕なでがみられる。色調、赤褐色を呈し、焼成良。

2. 高环形土器、裾部、14cm。

手法の形態、外面の特徴は、縦へラけずり、底面付近は、横へラけずり。脚部の内面は、絞り目痕、輪積痕がみられる。色調、赤褐色、焼成良。

3. 高环形土器、口径、17cm。

形態の特徴、壺部のみで、口縁部反り気味、底部との境に丸味をもった凸帯あり。

手法の特徴、内外面とも横なでがみられ、断面からは接合状態がみられる。色調、暗褐色を呈し、焼成良。

第4号住居址内出土土器（図67、1～12）

1. 壺形土器、口径、13cm、器高、4.1cm。

形態の特徴、口縁部の一部を欠くがほぼ完形、口縁部下の稜の張り出しが明確である。

手法の特徴、口縁部横なでをほどこし、外面、肩部なで、底部、へラけずりがみられる。色調、褐色、焼成良。

2. 壺形土器、口径、13cm、器高、5cm。

形態の特徴、やや薄い器内、内面屈曲緩やかで、口縁部下の稜の張り出しが明確であるが、軟質磨滅目立つ。

手法の特徴、外面なで、へラけずりで丁寧、内面なで、平滑、色調、赤褐色、焼成良。

3. 壺形土器、口径、15.1cm、器高、11cm、底径5.5cm。

形態の特徴、口縁部大きく外反して開く。体部はあまり張らない。

手法の特徴、外面、口縁部横なで、体部、へラけずり後になで。内面、全体にへラなでがみられる。色調、暗褐色、焼成良。

4. 坎形土器、口径、14.3cm、器高、4.6cm。

形態の特徴、口縁部わづかに内側しながら立ち上がる。器肉、ほぼ均一。

手法の特徴、口縁部横なで、外面肩部なで、底部へラけずり。色調、褐色、焼成良。

5. 坎形土器、口径、13.4cm、器高4.3cm。

形態の特徴、形態整い、整形丁寧であり、口縁部若干内傾し、弱い段をもち、立ち上がり、内面屈曲し、低い、外面後は腹部丸い。

手法の特徴、なでは丁寧、外面へラけずり丁寧で細かい。色調、赤褐色、焼成良。

6. 坎形土器、口径、14cm、器高、5cm。

形態の特徴、口縁部やや外反し、段はゆるやかな棱線、底部中央やや厚い。

手法の特徴、外面へラけずり、内面なで滑沢、棱は肩部のみ明瞭。色調、赤褐色、焼成良。

7. 外形土器、口径、14cm、器高、8.9cm、底径3.5cm。

形態の特徴、口縁部わづかに外反し、厚手、整形椎で磨滅目立つ。

手法の特徴、口縁部横なで、外面、縦へラけずりであるが、磨滅で後不明。色調、淡黄褐色、焼成不良。

8. 坎形土器、口径、12.7cm、器高、5cm。

形態の特徴、口縁部わづかであるが内傾し、弱い段をもち、立ち上がる。

手法の特徴、なで丁寧、口縁部、体部なで、外面けずりは丁寧で細かい。色調、茶褐色。

9. 坎形土器、口径、12.4cm、器高、3.5cm。

形態の特徴、形態整い整形丁寧。口縁部内傾し弱い段をもち、立ち上がり、内面屈曲鋭く段張り出す。

手法の特徴、内面なで、外面へラけずり、後明瞭で曲面を保つ。色調、褐色、焼成良。

10. 坎形土器、口径、13.7cm、器高、4.1cm。

形態整い整形丁寧、立ち上がり内傾し、口縁部横なで、へラけずり丁寧、焼成良。

11. 坎形土器、口径、13.4cm、器高、3.7cm。

丁寧な整形であり、立ち上がり内傾、内面なで、口縁部横なで、外面へラけずり下半斜へラけずり。色調、暗褐色、焼成良。

12. 坎形土器、口径、12.5cm、器高、4cm。

丁寧な整形であり、口縁部内傾し弱い段をもち、立ち上がる。口縁部横なで、内面なで、下半斜へラけずりがみられる。色調、褐色、焼成良。

第5号住居址出土土器（図68、1）

1. 坎形土器、口径、8.4cm、器高、3cm、底径、3cm。

形態の特徴、整形椎であり、小さなへラけずりで整形し、底部、内外凹凸目立つ。

手法の特徴、口縁部強い横なで、下半へラけずり↓、色調、褐色、胎土良、焼成良。

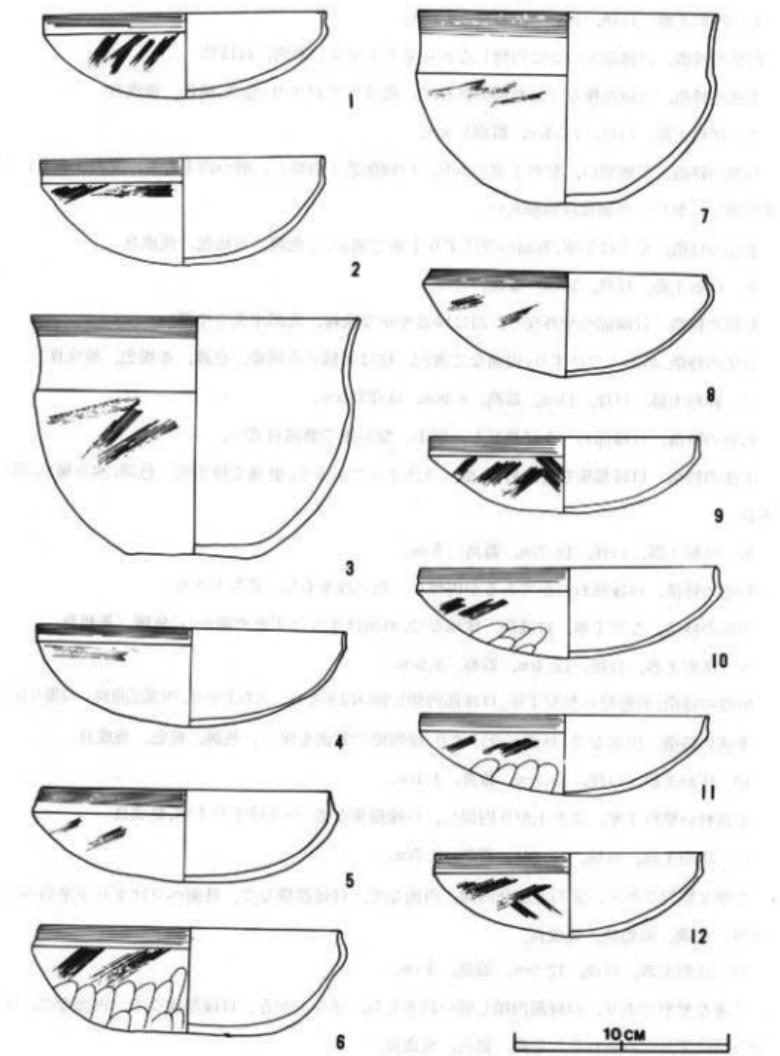


圖67 第4號住居址出土遺物
1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 磁土土器

第7号住居址出土土器(図68、2~5)

2. 土器、口径、12.8cm、器高、15cm、底径、4.2cm。

形態の特徴、口縁部やや内側しながら開く。頸部はくびれ、内面稜あり。体部は、全体に角ばり中位が張る。底部はやや上げ底。

手法の特徴、口縁部、横なで、外面頸部は細かな縦なで斜なでがみられ、体部縦なで。底部へかけずり後輕いなで。内面は、頸部指項調整がみられ全面なで、色調、黒褐色、焼成良。

3. 土器、口径、11.5cm、器高、14.5cm、底径、4.7cm。

形態の特徴、頸部は屈曲し、体部はまろやか。厚い平底を呈して上げ底。

手法の特徴、口縁部、外面体部はなで。頸部は細かな縦なで、内面頸部に輪積痕、なでがみられる。色調、暗褐色、焼成良。

4. 土器、口径、8.8cm、器高、14.3cm、底径、4.1cm。

形態の特徴、口縁部、わづかに外反し、頸部に棱あり。肩部張り、底部は平底で若干上げ底を呈する。

手法の特徴、口縁部、横なで、外面、頸部はへラ押え体部なで。器面凹凸あり。色調、茶褐色、胎土、砂含み、焼成良。

5. 土器、口径、9.9cm、器高、8cm、底径、4.3cm。

形態の特徴、口縁部短かく外反し、頸部は丸味があり、体部は球形で器内は薄い。

手法の特徴、口縁部横なで、体部外面、頸部に縦なで、内面に輪積痕がみられる。色調、赤褐色、焼成良。

第9号住居址出土土器(図69、1)

1. 土器、口径、13cm、器高、6.2cm。

形態の特徴、口縁部直線的な立ち上がりを呈し底部はやや丸底で厚い。

手法の特徴、外面全体にへラけずり、なで、内面は横けずり、口縁部横なで。全体に凹凸あり、内外面にわづかに輪積痕がみられる。色調、赤褐色、焼成良。

第10号住居址出土土器(図69、2)

2. 土器、口径、10cm、器高、9cm、底径、3cm。

形態の特徴、口縁部は最大径であり、体部は中位が張り、底部周辺から急に偏平となる。底部は厚手で突出し気味でやや上げ底。

手法の特徴、口縁部横なで、外部は体部にへラによる面取り後横なで。底部へラけずり。色調、赤褐色、焼成良。

第12号住居址出土土器(図69、3~4)

3. 土器、口径、15cm、器高、23.3cm、底径、5.5cm。

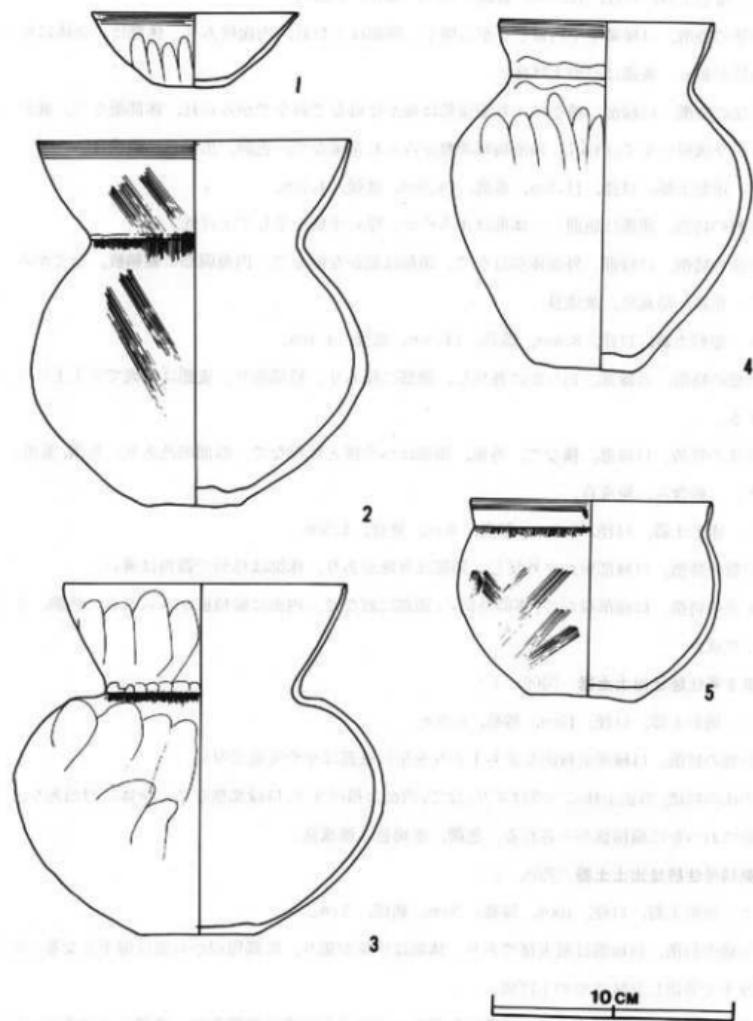


图68 第5号·7号住居址出土遗物

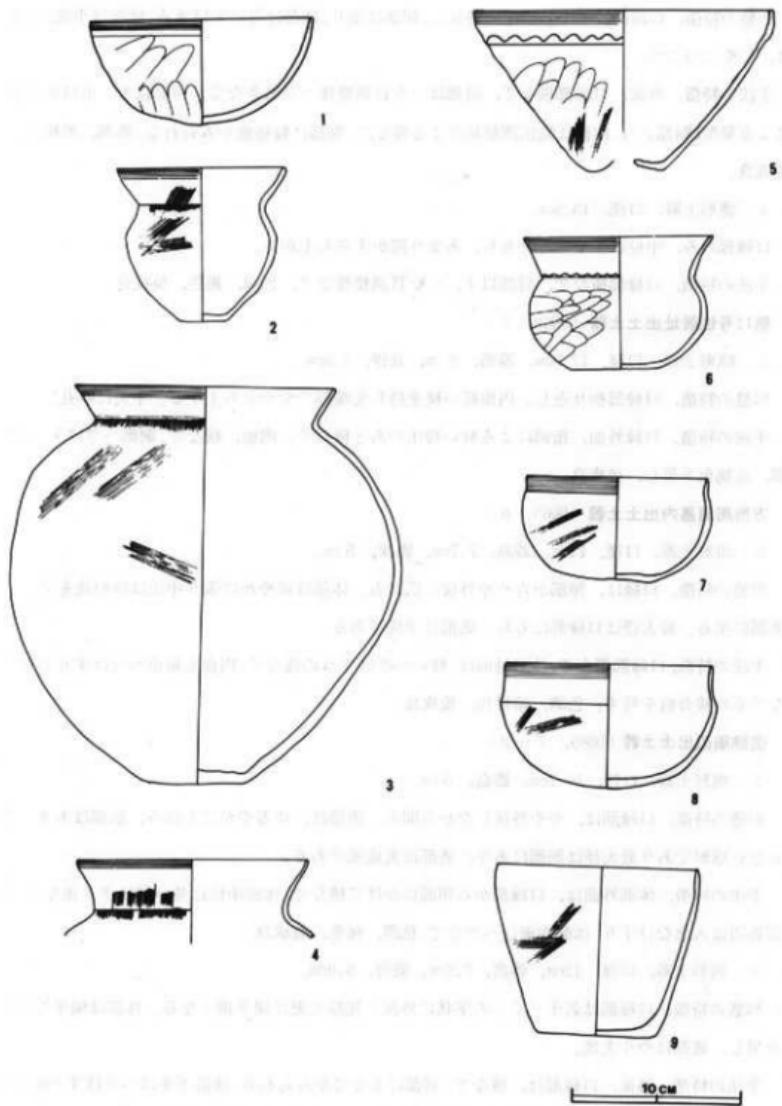


图69 第9号10号12号13号遗迹周边出土遗物

形態の特徴、口縁部、「く」の字に外反し、肩部は張り、底部は急につはまる。底部は平底、器面は、ややごつごつ。

手法の特徴、外面、口縁部横なで、肩部はハケ目調整後へラ磨きなで。頭部以下、木口状工具による整形、胸部△、内面は輪広調整具による横なで。胸部に輪積痕がみられる。色調、黒褐色、焼成良。

4. 豊形土器、口径、13.5cm。

口縁部のみ、中位にふくらみをもち、あまり開かず立ち上がる。

手法の特徴、口縁部横なで、肩部以下、ハケ目調整後なで、色調、褐色、焼成良。

第13号住居址出土土器（図69、5）

5. 甑形土器、口径、17.5cm、器高、9cm、底径、4.5cm。

形態の特徴、口縁部折り返し、内面緩い棱を持ち先端部でやや立ち上がる。中央に穿孔。

手法の特徴、口縁外面、指頭による軽い押圧のあと横なで。内面、横なで。底部へラけずり。色調、赤褐色を呈し、焼成良。

方形周溝墓内出土土器（図69、6）

6. 増形土器、口径、11cm、器高、7.7cm、底径、5cm。

形態の特徴、口縁は、頭部からやや外反し広がる。体部は緩やかに張り中位は球形状を呈し、底部に至る。最大径は口縁部にもち、底部は平底である。

手法の特徴、口縁部横なで、体部外面は、軽いへラけずりの後なで、内面も横位へラけずりの後でなでるが接合痕を残す。色調、暗褐色、焼成良。

遺跡周辺出土土器（図69、7～9）

7. 楕形土器、口径、10.7cm、器高、6cm。

形態の特徴、口縁部は、やや外反しながら聞く。頭部は、ゆるやかにくぼみ、胸部はあまり張らない球形であり最大径は胸部にあり、底部は丸底風である。

手法の特徴、体部外面は、口縁部から頭部にかけて横なで、体部中位は荒い横けずり後なで。底部周辺は人念なけずり、体部内面はへラなで。色調、褐色、焼成良。

8. 楕形土器、口径、12cm、器高、7.2cm、底径、5.9cm。

形態の特徴、口縁部は若干「く」の字状に外反し先端で更に開き細くなる。体部は偏平な球形を呈し、底部はやや丸底。

手法の特徴、外面、口縁部は、横なで。肩部にもなでがみられる。体部下半はへラけずり後なで、体部内面、へラによるなで、体部上位に輪積痕が残る。色調、赤褐色、焼成良。

9. コップ状土器、口径、11.9cm、器高、10cm、底径、7cm。

小型で、無骨なつくりで一見手捏風。口縁部、体部外面は荒いけずりがみられる。底部周辺は、

切り落とし整形痕がみられ、口縁部は直線的に立ち上がり薄い。内面は、輪積のうえからなでがみられる。焼成不良、色調、黒褐色を呈す。

第14号住居址内出土遺物（図70、1～6）

1はカマド内から出土した變形土器の完形である。口径20.4cm、器高33.0cm、底径8.0cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、口脣部にわずかに段を有する。頭部に棱をもつ。

器外面は口辺部から頭部にかけて横なで整形がみられ、胴部は縱位のヘラけずり整形がなされている。胴部下位には煤の付着がみられる。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はヘラなで整形である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂礫を多量に含む。焼成は良好である。

2は1と同様にカマド内から出土した長嗣の變形土器で底部を欠損している。口径18.1cm、最大径20.2cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、肥厚である。頭部に棱をもつ。

器外面は口辺部から頭部にかけて横なで整形がみられ、胴部は縱位のヘラけずり整形がみられる。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は縱位のヘラなで整形がみられる。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂礫を多量に含む。焼成は良好である。

3は1・2同様カマド内から出土した長嗣の變形土器で底部を欠損している。口径18.3cm、最大径21.3cmを測る。

口縁部は丸味をもって外反し、頭部に棱をもち、胴部中位に最大径をもつ。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は縱位のヘラけずり整形で、底部付近はヘラ整形がみられる。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はヘラなで整形がみられる。

色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂礫を多く含む。焼成は良好である。

4は1・2・3同様カマド内から出土した長嗣の變形土器で底部を欠損している。口径19.5cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、口脣部に段をもち、頭部に棱をもつ。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は縱位のヘラけずり整形がみられる。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はヘラなで整形である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂礫を多く含む。焼成は良好である。

5はカマドの左側床面から出土した环形土器の完形である。口径13.3cm、器高4.3cmを測る。口縁部はやや内傾し、底部との境に棱をもつ。丸底である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、底部は横位のヘラけずり整形がみられる。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、底部はヘラ磨きがなされている。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂礫、スコリアを含む。焼成は良好である。

6はカマドの前の床面から出土した変形土器で胴部中位以下を欠損している。口径19.8cmを測

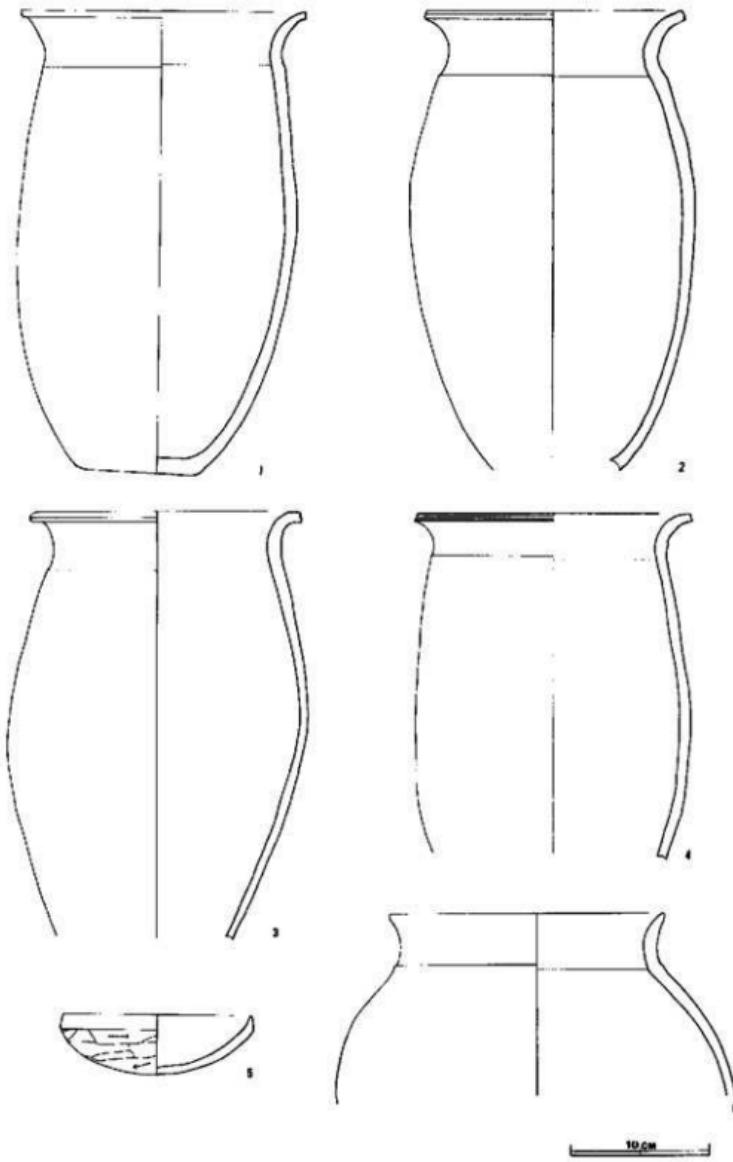


图70 第14号住居址出土造物

る。口縁部は丸味をもって外反し肥厚であり、腹部は大きく張る。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は輻位のヘラけずり整形がなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はヘラなで整形がなされている。

色調は明褐色を呈し、胎土中に砂粒を多く含む。焼成は良好である。

第15号住居址内出土遺物（図71、1～2）

1はカマドの右側の床面から出土した椀形土器の完形である。口径11.2cm、器高7.2cmを測る。口縁部はやや内彎し、口縁部と胴部は同様な丸味をもって接続し、平底で内面は棱を有し器内薄くなる。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はヘラけずり整形がみられる。底部には、木の葉压痕がみられる。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はなで整形がみられる。

色調は明褐色を呈し、胎土中に砂礫を含む。焼成は良好である。

2もカマド右側の床面から出土した椀形土器である。口径13.5cm、器高4.1cmを測る。口縁部は直線的に開き、平底である。

器外面はロクロなで整形がみられ、底部はロクロけずりがなされている。

器内面はロクロなで整形である。

色調は明赤灰色を呈し、焼成は良好である。

第16号住居址内出土遺物（図71、3～4）

3はカマド付近の床面から出土した小型の椀形土器で底部の一部を欠損している。口径10.0cm、器高3.7cmを測る。全体が球形の一部のような形をなし丸底である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、底部はヘラけずり整形がみられる。

器内面は摩滅がはげしくはっきりしない。

色調は黒褐色土を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

4は貯蔵穴内から出土した變形土器で胴部中位以下を欠損している。口径17.3cmを測る。口縁部はいく分内傾し、先端部が丸味をもって外反する。胴部は張りなく筒状であり、全体に厚手である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は輻位と斜位のヘラけずり整形がなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はヘラなで整形がみられる。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂礫を含む。焼成はやや軟弱である。

第17号住居址内出土遺物（図72、1～3）

1はカマド内から出土した変形土器で胴部中位以上を欠損している。底径8.3cmを測る。胴部は大きく張り、やや上げ底である。

器外面は摩滅のため整形は不明である。器内面はなで整形がみられ輪積痕が残る。

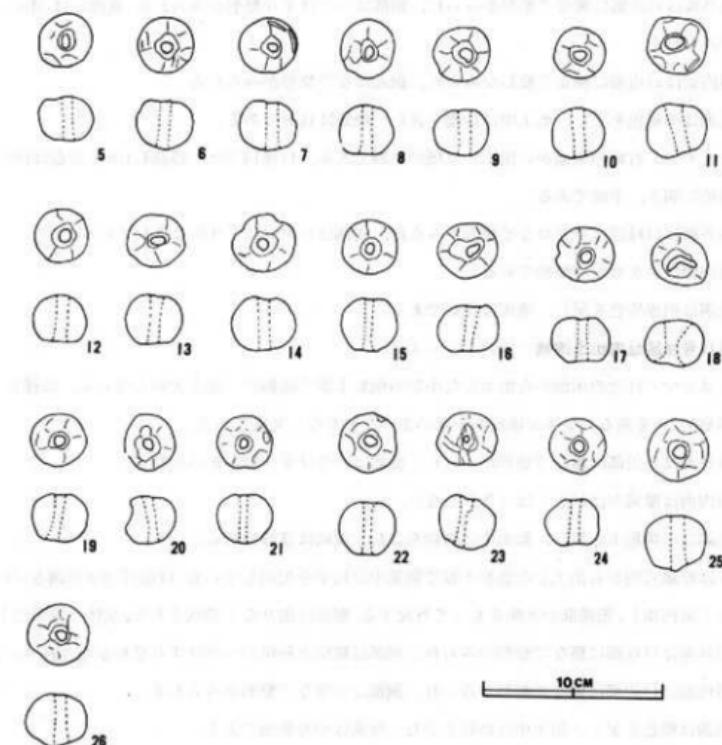
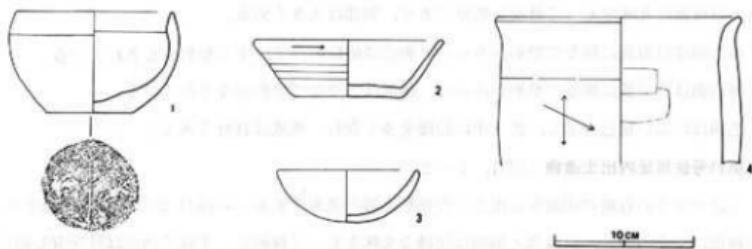


圖71 第15·16號住居址出土遺物

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂礫を多量に含む。焼成は普通である。

2は東壁付近よりやや北寄りの床面から出土した环形土器の完形である。口径12.6cm、器高4.4cmを測る。口縁部は内傾し、底部との境に棱をもち丸底である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、底部はけずり整形がなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、底部ではなで整形がみられる。

色調は灰白色を呈し、胎土中にスコリアを含む。焼成は良好である。

3は2と同位置から出土した环形土器ではば完形である。口径12.7cm、器高4.0cmを測る。口縁部はやや内傾し、底部との境に棱がある。丸底である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、底部はけずり後へラ磨き整形がなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、底部はなで整形である。

色調は黒色を呈し、胎土中にスコリアを含む。焼成は良好である。

第18号住居址内出土遺物(図72、4~5)

1は北東コーナー付近の床面から出土した环形土器ではば完形である。口径13.5cm、器高3.9cmを測る。口縁部はやや内傾し、底部との境に棱がある。丸底である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、底部は横位のヘラけずり整形がなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、底部はなで整形である。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂礫、スコリアを含む。焼成は良好である。

5は本址中央部よりやや南寄りの床面直上から出土した高环形土器で、脚部を欠損している。口径14.6cmを測る。環部は内壁気味に開き、口縁部は丸味をもって外反し、底部との境に棱がある。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、底部は縱位のヘラけずり整形がみられる。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、底部はなでた後へラ磨きがなされている。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は堅く良好である。

第19号住居址内出土遺物(図73、1~3)

1は北側の炉址の中央に倒立して出土したコップ型の土器で、おそらく支脚として用いられたものであろう。口径9.8cm、器高11.3cm、底径7.5cmを測る。全体に粗製で、口縁部はいく分外傾するが、ゆがみが大きく波状をなしている。脚部は内壁気味であり、平底である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、脚部は未調整で輪積痕が顕著に残る。底部には木葉圧痕がみられる。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、脚部は未調整で輪積痕が残る。

色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

2は北側の炉址付近の床面から出土した1と同じコップ型の土器である。口径9.6cm、器高10.5cm、底径6.5cmを測る。器形、調整、胎土、焼成とも1とほとんど同じである。

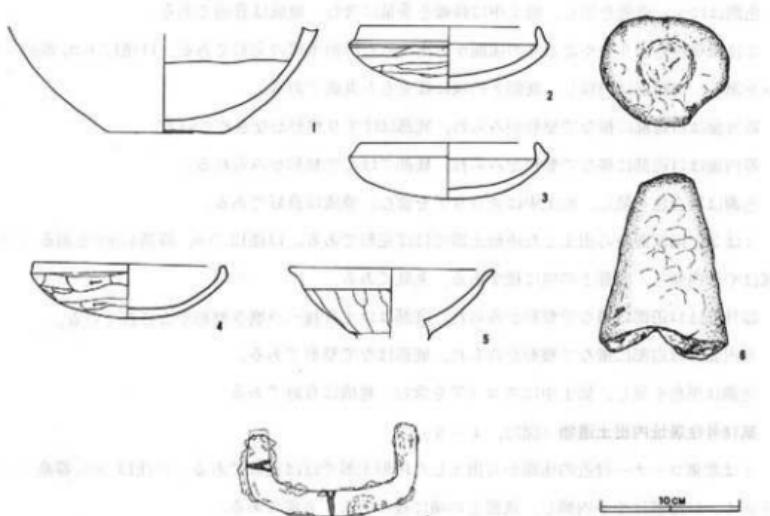


図72 第17・18号住居址出土遺物

色調はにじみる褐色を呈す。径13.4cm、高さ10.5cmの土器で、内面の砂砾を多く含む。

3は北側の炉址と東壁の中間の覆土から出土したコップ型の土器である。口径8.1cm、器高6.9cm、底径6.0cmを測る。器形、調整、胎土、色調とも1・2と同じである。

第20号住居址内出土遺物（図73、5～8）

5はカマド内から出土した變形土器の完形である。口径21.2cm、器高27.3cm、最大径21.5cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、頭部には稜がある。胴部はいく分張り、底部はわずかに突出する。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は縦位のヘラけずり、底部付近は横位のヘラけずり整形がなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はヘラなで整形である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂砾を多量に含む。焼成は良好である。

6は5と同じくカマド内から出土した變形土器で胴部以下を欠損している。口径22.0cmを測る。口縁部はやや丸味をもち大きく外反する。

器外面、器内面とも口辺部で横なで整形がみられ、胴部は摩減のため不明である。

色調はにじみる褐色を呈し、胎土中に砂砾を多量に含む。焼成はやや軟弱である。

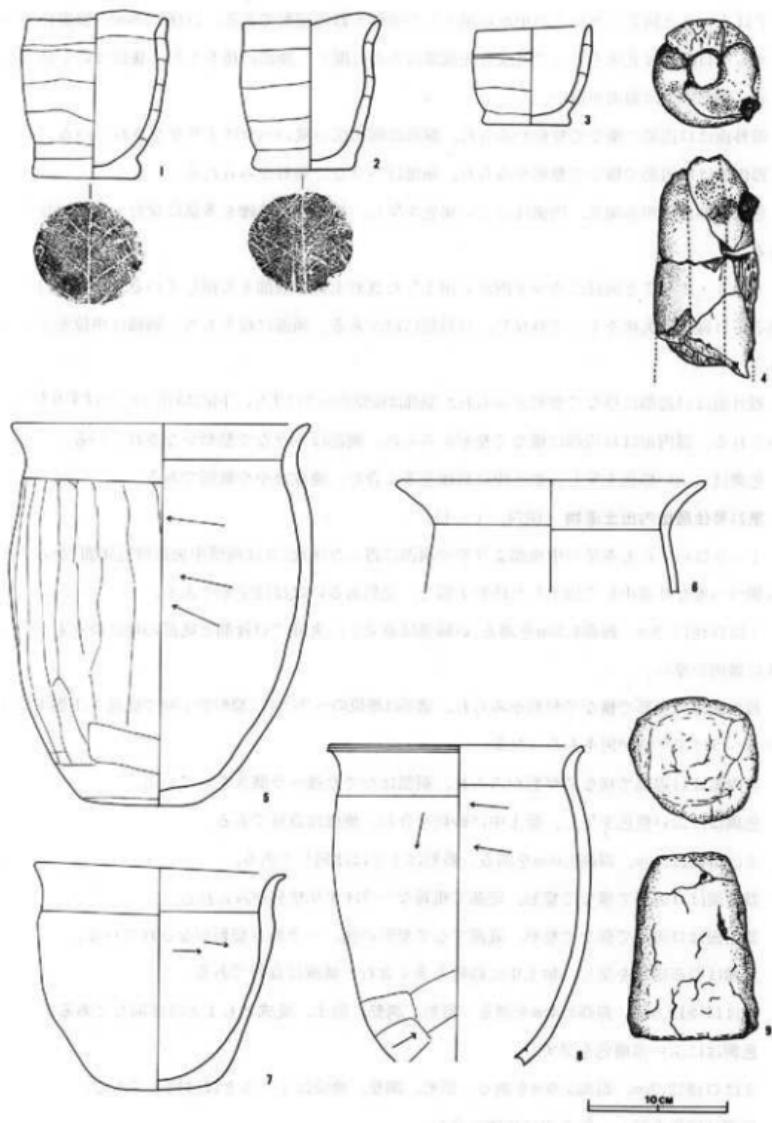


图73 第19·20号住居址出土遗物

7は5・6と同じくカマドの中から出土した壺形土器の完形である。口径17.8cm、器高15.9cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し先端部はさらに開く。頸部に棱をもち、底部はいく分突出する。胴部中位は器肉が薄い。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部は幅の広い丸いへラけずりがなされている。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はへラなで整形がみられる。

色調は外面は明赤褐色、内面にはぶい褐色を呈し、胎土中に砂礫を多量に含む。焼成は良好である。

8は5・6・7と同様にカマド内から出土した壺形土器で底部を欠損している。口径18.1cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、口唇部に段がある。頸部に棱をもち、胴部は中位が少し張る。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部は縦位のへラけずり、下位は斜位のへラけずり整形がみられる。器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はへラなで整形がなされている。

色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に砂礫を多く含む。焼成はやや軟弱である。

第21号住居址内出土遺物（図74、1～11）

1～9はいずれも本址の中央部よりやや南西に寄った床面（3は南壁中央部付近床面）から2・3個づつ重なり集中して出土した壺形土器で、完形あるいはほぼ完形である。

1は口径13.2cm、器高4.5cmを測る。口縁部は直立し、丸底で口縁部と底部の境に棱をもつ。全体に器肉が厚い。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、底部は横位のへラけずり整形で4回で底部を1周する方形のへラけずり痕が何本もみられる。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はなでた後へラ磨きをしている。

色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に砂礫を含む。焼成は良好である。

2は口径12.1cm、器高5.0cmを測る。器形は1とはほぼ同じである。

器外面は口辺部で横なで整形、底部で粗雑なへラけずり整形がみられる。

器内面は口辺部で横なで整形、底部でなで整形の後、へラ磨き整形がなされている。

色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂礫を多く含む。焼成は良好である。

3は口径12.9cm、器高4.4cmを測る。器形、調整、胎土、焼成とも1とはほぼ同じである。

色調はにぶい赤褐色を呈す。

4は口径12.2cm、器高3.6cmを測る。器形、調整、焼成は1・3とはほぼ同じである。

色調は褐色を呈し、胎土中に砂礫を含む。

5は口径12.2cm、器高3.7cmを測る。器形、調整、胎土、焼成は1・3とはほぼ同じであるが、器肉は薄い。

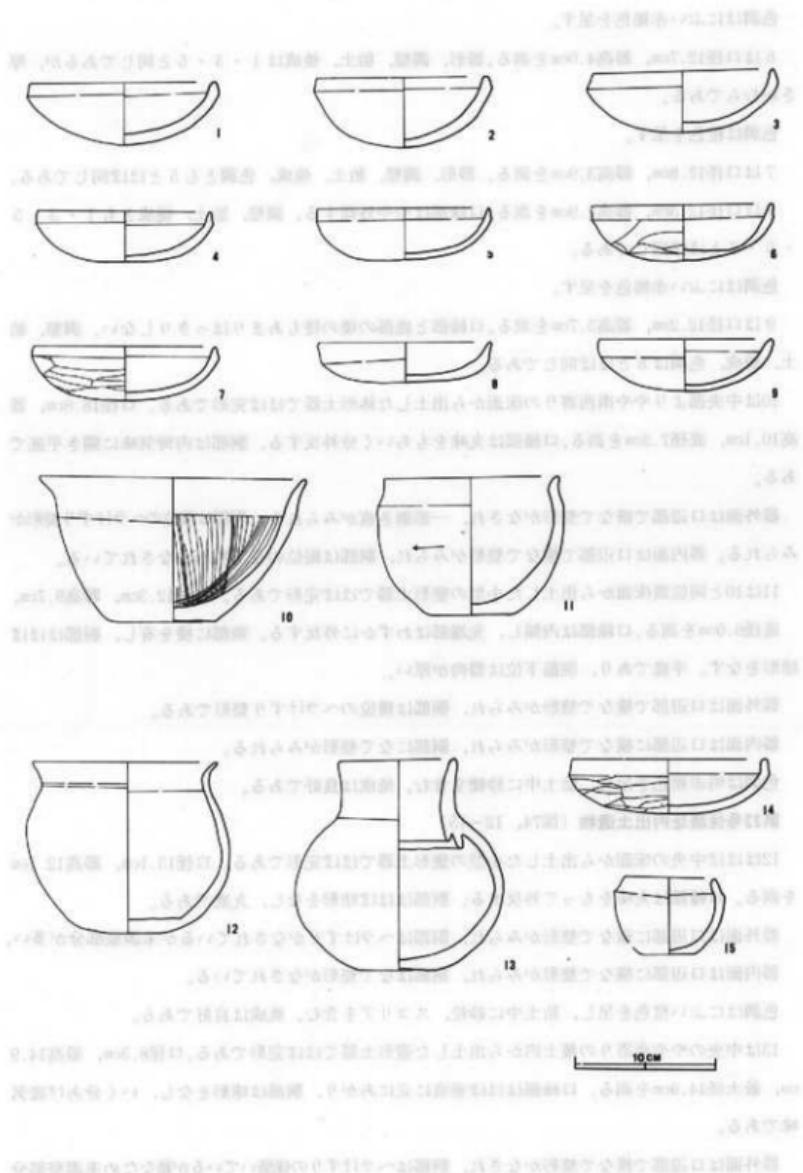


図74 第21・22号住居址出土遺物

・ハサニ・遺物

色調はにぶい赤褐色を呈す。

6は口径12.7cm、器高4.0cmを測る。器形、調整、胎土、焼成は1・3・5と同じであるが、厚さがむらである。

色調は橙色を呈す。

7は口径12.8cm、器高3.9cmを測る。器形、調整、胎土、焼成、色調とも5とはほぼ同じである。

8は口径12.3cm、器高2.9cmを測る。口縁部はやや外傾する。調整、胎土、焼成とも1・3・5・6・7とはほぼ同じである。

色調はにぶい赤褐色を呈す。

9は口径12.2cm、器高3.7cmを測る。口縁部と底部の境の棱もあまりはっきりしない。調整、胎土、焼成、色調は8とはほぼ同じである。

10は中央部よりやや南西寄りの床面から出土した鉢形土器ではほぼ完形である。口径18.8cm、器高10.1cm、底径7.3cmを測る。口縁部は丸味をもちいく分外反する。胴部は内凹気味に開き平底である。

器外面は口辺部で横なで整形がなされ、一部磨き痕がみられる。胴部は横位のへラけずり整形がみられる。器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部は縦位のなで整形がなされている。

11は10と同位置床面から出土した小型の鉢形土器ではほぼ完形である。口径12.3cm、器高9.7cm、底径6.0cmを測る。口縁部は内傾し、先端部はわずかに外反する。頭部に棱を有し、胴部はほぼ球形をなす。平底であり、胴部下位は器肉が厚い。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部は横位のへラけずり整形である。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部になで整形がみられる。

色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂礫を含む。焼成は良好である。

第22号住居址内出土遺物（図74、12～15）

12はほぼ中央の床面から出土した小型の鉢形土器ではほぼ完形である。口径13.1cm、器高12.1cmを測る。口縁部は丸味をもって外反する。胴部はほぼ球形をなし、丸底である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はへラけずりがなされているが未調整部分が多い、器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はなで整形がなされている。

色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

13は中央のやや東寄りの覆土内から出土した鉢形土器ではほぼ完形である。口径8.3cm、器高14.9cm、最大径14.9cmを測る。口縁部はほぼ垂直に立にあがり、胴部は球形をなし、いく分あげ底気味である。

器外面は口辺部で横なで整形がなされ、胴部はへラけずりの後磨いているが畠なため未調整部分が残っている。

器内面は口辺部、胴部ともなで整形がみられ、颈部に接合時の胎土が余分に残っている。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂礫を含む。焼成は良好である。

14は北コーナー付近の覆土から出土した环形土器ではば完形である。口径13.7cm、器高3.8cmを測る。口縁部はほぼ垂直に立ちあがり、底部との境に明瞭な稜をもつ、丸底である。

器外面は口辺部でなで整形の後、ヘラ磨きがなされ、底部は横位のヘラけずりがみられる。

器内面は口辺部、胴部ともなで整形の後ヘラ磨きがなされている。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂礫、スコリアを含む。焼成は良好である。

15はカマド左の覆土から出土した梳形土器で完形である。口径6.4cm、器高5.4cmを測る。口縁部は内傾し胴部との境に稜をもち、平底である。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はヘラけずり整形である。

器内面は口辺部は横なで整形がみられ、胴部はなで整形である。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂礫を少し含む。焼成は良好である。

第23号住居址内出土遺物(図75、1~16・図76、17~25)

1~13はいずれもカマド付近の床面から出土した环形土器であり、完形またはば完形である。5・6が重なり、7・8・9が重なって出土している。

器形、整形、焼成、胎土、色調は1~13まではば同じである。口縁部はほぼ垂直に立ちあがり、底部との境に明瞭な稜をもつ。丸底である。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、底部はヘラけずり整形がなされている。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、底部はなでた後ヘラ磨き整形がなされている。

色調は橙色またはにぶい橙色を呈し、胎土中には砂粒、砂礫、スコリア等を含む。焼成はいずれも良好である。

1は口径12.4cm、器高4.5cmを測る。

2は口径13.9cm、器高4.3cmを測る。

3は口径12.0cm、器高4.0cmを測る。

4は口径13.8cm、器高4.6cmを測る。

5は口径13.5cm、器高4.7cmを測る。

6は口径13.6cm、器高4.6cmを測る。

7は口径13.2cm、器高4.5cmを測る。

8は口径13.6cm、器高4.6cmを測る。

9は口径13.0cm、器高4.3cmを測る。

10は口径13.7cm、器高4.8cmを測る。

11は口径13.0cm、器高3.9cmを測る。

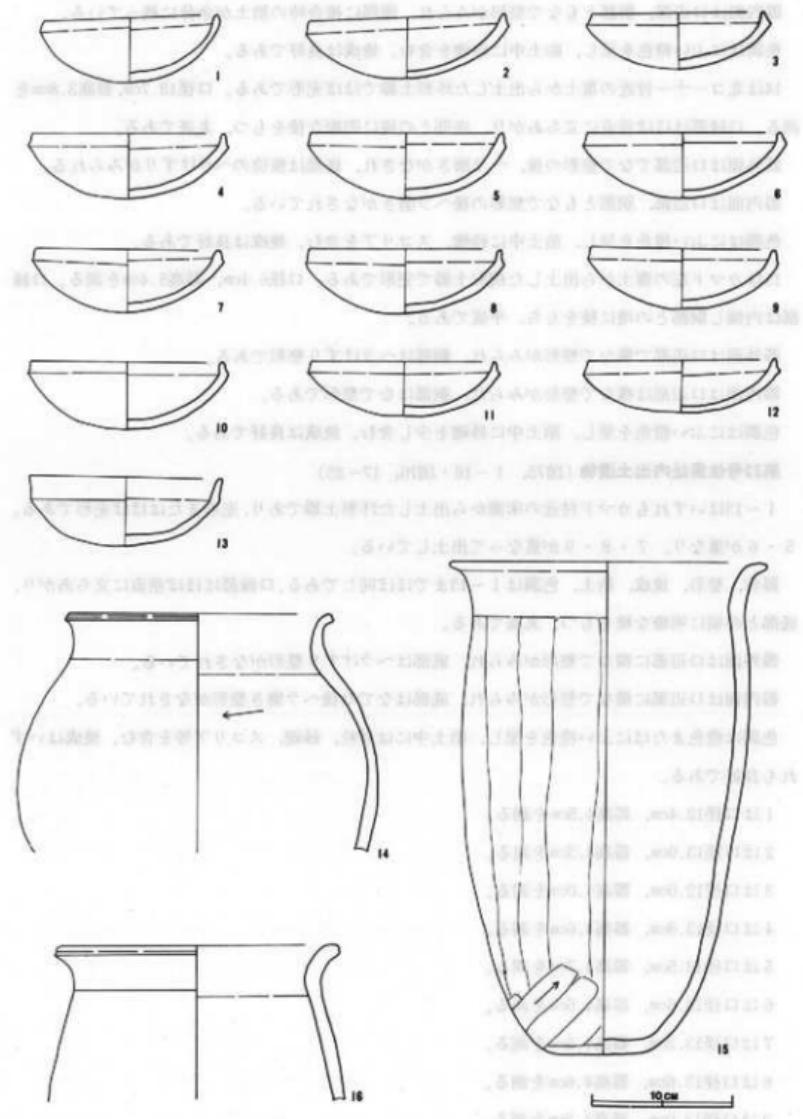


图75 第23号住居址出土遗物

12は口径13.3cm、器高3.6cmを測る。

13は口径13.7cm、器高4.9cmを測る。

14はカマド内から出土した變形土器で胴部下位以下を欠損している。口径18.6cm、最大径25.6cmを測る。口縁部はやや内傾し、丸味をもって外反する。口唇部に段を有す。胴部は大きく張る。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部は縱位のへうけずり整形がなされている。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成はやや軟弱である。

15は14と同じくカマド内から出土した長胴の變形土器ではば完形である。口径22.5cm、器高は34.8cmを測る。口縁部は外傾しながら立ちあがり、先端部は丸味をもって大きく外反する。胴部はほとんど張りをみせず、平底である。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部は縱位のへうけずりで底部付近は斜位のへうけずりである。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はへうなで整形である。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂砾を含む。焼成は普通である。

16はカマド内から出土した變形土器で胴部中位以下を欠損している。口径20.0cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、口唇部に段を有す。胴部はあまり張らない。

器外面、器内面とも整形は15とはば同じである。

色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に砂砾を含む。焼成はやや軟弱である。

17はカマド右側の床面から出土した變形土器で底部を欠損している。口径20.3cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、口唇部に段を有す。胴部はほとんど張りをみせない。

器外面、器内面とも整形は15・16と同じである。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂砾を含む。焼成はやや軟弱である。

18はカマド付近の床面から出土した鉢形土器で完形である。口径13.3cm、器高10.7cmを測る。

口縁部は丸味をもって外反する。胴部は球形に近く、平底である。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部は縱位のへうけずりで下位は横位のへうけずりである。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はなで整形である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

19はカマド付近の床面から出土した鉢形土器ではば完形である。口径11.7cm、器高12.2cmを測る。口縁部は少くわざかに開く。胴部はほぼ球状をなし、平底である。

器外面は口辺部に横なで整形がなされ、胴部は難なげずりがみられる。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は摩滅して不明である。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は普通である。

20は19と同じくカマド付近床面から出土した鉢形土器ではば完形である。口径11.0cm、器高11.0cmを測る。器形は19とはば同じであるが、頸部に棱を有す。

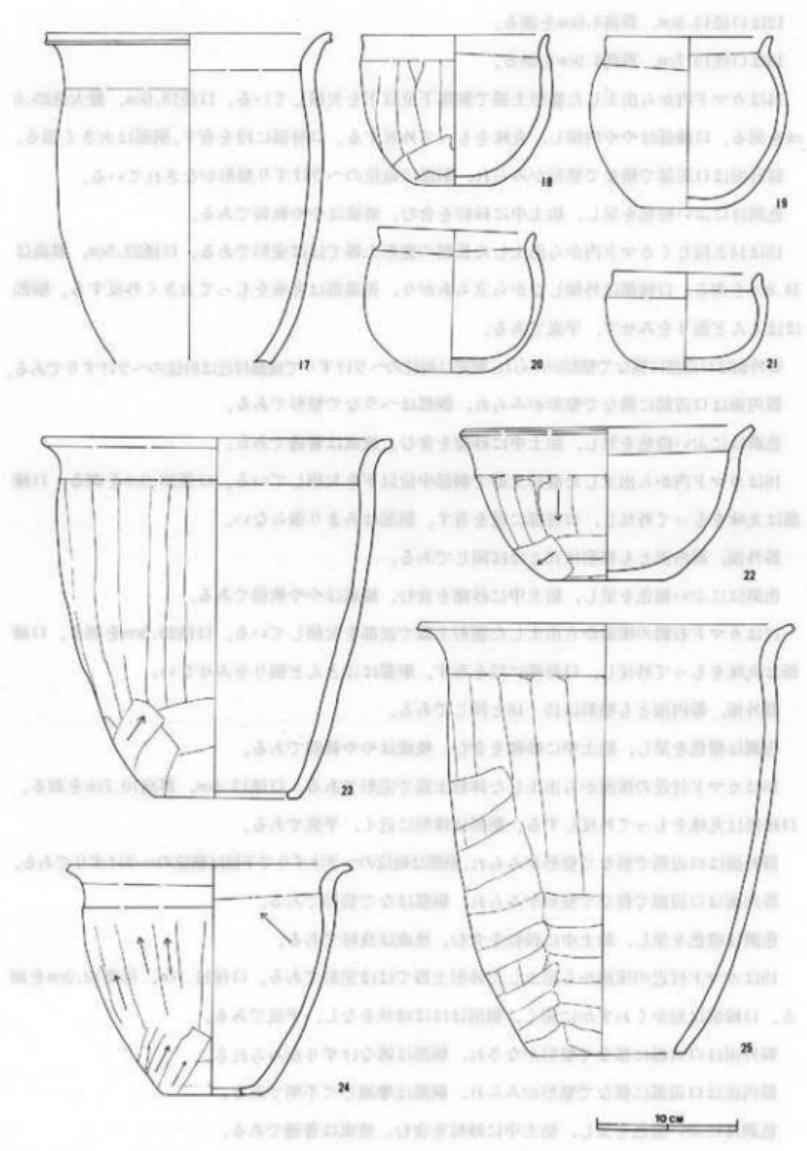


図76 第23号住居址出土遺物(2)

器外面、器内面とも整形は19と同じであり、胴部内面はなで整形である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂礫を含む。焼成は良好である。

21は東壁中央付近の床面から出土した楕形上器の完形である。口径10.6cm、器高6.9cmを測る。

口縁部はほぼ垂直に立ちあがり、頸部に棱を有す。平底である。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部は横位のヘラ磨きがなされている

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はなでた後磨いている。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂礫、スコリアを含む。焼成は良好である。

22は中央部より東壁寄りの床面から出土した鉢形土器ではば完形である。口径20.5cm、器高10.9

cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、頸部に棱を有す。胴部は内輪気味で平底である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は横位のヘラけずりかなされ、下位は斜位のヘラけずりがなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は縦位のヘラ磨きがなされている。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂礫を含む。焼成は良好である。

23はカマド内から出土した楕形上器ではば完形である。口径24.8cm、器高25.6cm、底径10.4cmを測る。口縁部は丸味をもって大きく外反し、胴部はほとんど張らない。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部は縦位のヘラけずりで下位は横位、斜位のけずりがなされている。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部は縦位のヘラ磨きである。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂礫、スコリアを含む。焼成は良好である。

24はカマド付近の床面から出土した楕形土器の完形である。口径20.0cm、器高16.4cm、底径7.0cmを測る。器形は23とはば同じで、口唇部に段をもち頸部に明瞭な棱を有し、底部に直径3.5cmの穿孔がみられる。整形、色調、胎土、焼成ともほとんど23と同じである。

25は中央部より南西コーナー寄りの床面から出土した楕形上器のほぼ完形である。口径26.4cm、器高30.7cm、底径10.7cmを測る。器形、整形、色調、焼成とも23とはば同じで、23よりやや長脚である。胎土中に砂礫、スコリアを含む。

第24号住居址内出土遺物（図77、1～3）

1は西壁中央部よりやや北寄りの床面から出土した环形土器ではば完形である。口径12.4cm、器高は4.7cmを測る。口縁部はやや内傾し、底部との境に明瞭な棱を有す。丸底である。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、底部は横位のヘラけずりがなされている。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、底部はなで整形である。

色調はにふい褐色を呈し、砂礫を多量に含む。焼成は良好である。

2は1と同位置で出土した环形土器で完形である。口径13.2cm、器高4.5cmを測る。器形、整形、

焼成とも1とはほぼ同じであり、口縁部は1より短い。

色調はにじむ橙色を呈し、胎土中にスコリアを含む。

3はカマド内から出土した环形土器で完形である。口径13.1cm、器高3.6cmを測る。口縁部は直立する。整形、色調、胎土、焼成とも1とはほぼ同じである。



図77 第24号住居址出土遺物

第3節まとめ

1. 石製模造品について

昭和52年度、南守谷地区土地区画整理事業地内調査遺跡からの石製模造品の出土遺構は、乙子遺跡（住居址8軒）、北今城遺跡（13軒）であり、伴出遺物にも各住居址に多少異なりがみられる。

各住居址は、五領制後半より～和泉式期に位置し、主に、劍形品、勾玉、双孔円板、白玉、円板が検出され、これまでかなりの石製模造品が各住居址より出土している。

石製模造品出土例として、祭祀遺跡、住居址からの二通りの例に大別される。

住居址出土の問題として、五領期においては支配集団（註1）の独占物であった、劍形品、玉、鏡の出土の点である。

劍、玉、鏡が模造品であれ、堅穴住居址から出土はじめる事は、支配集団の独占物としてたり得なくなつた何らかの背影があったものと考えられる事と、またひとつの画期であると思う。

祭祀遺跡の場合は、山岳を祭祀の対象とし、また、製塙、あるいは漁業に従事した遺跡を対象とした場合も考えられる。

以上の事項より、南守谷、乙子遺跡堅穴住居址よりの出土遺物を考えると、単に独占物ではありえず、小規模な集落内各遺構（住居址）より出土している事がみられる。住居址群（註2）の中に一軒あるいは、二軒存在すること、住居址群を構成する堅穴数が多い場合には、石製模造品を出土する住居址は二軒存在することが多い。このことから、その住居址群は、二家父長制的

世帯共同体から構成されていたのではないかと考えた。)

石製模造品は、支配集団の独占物ではありえず、また、支配集団、大集落にとってかわり小単位の集落形成へと変遷がみられ、乙子遺跡、北今城遺跡においてもこの様な現象がみられる。

乙子遺跡、1号住居址は、当遺跡最大の住居址であり、出土遺物においても、双孔円板、劍形品、手摺ねじ器がみられ、他の住居址と伴出遺物がとなる。規模、出土例などの点から本住居址の集落内での位置、重要性が、問題となってくる。

第2号住居址出土遺物をみてみると、原石剥片、未完成品がかなりの数出土しており、本住居址は、集落内での工房址の存在であったと思われる。(原石は滑石。)

以上の事項を鑑み、各住居址出土遺物をみると、比較的プランは、小住居址が多く、小単位の集落内にて支配集団的社会背景に何らかの変化があったものと考えられる。

茨城県内より検出された石製模造品の遺跡は次の通りである。(図79)。

中管野遺跡(註3)、尾島神社境内遺跡(註4)、中道遺跡(註3)、道光寺遺跡(註3)、野瓜鹿島神社周辺遺跡(註3)、森戸遺跡(註3)、北着祭祀遺跡(註3)、前浦祭祀遺跡(註3)、関の台祭祀遺跡(註3)、曲松遺跡(註3)、金井戸遺跡(註3)、烏山遺跡(註5)、八幡ノ上遺跡(註3)、立野遺跡(註3)、鶴止遺跡(註6)、鳩遺跡(註7)

引用文献

註1 高橋一夫 原始古代社会研究 和泉・鬼高郡の諸問題 昭和52年

註2 高橋一夫 原始古代社会研究 鬼高郡の諸問題 昭和52年

註3 大塚初重 茨城県史料・考古資料編、古墳時代 昭和49年

註4 亀井正道 「国学院雑誌」59-7、昭和33年

註5 茨城県住宅供給公社、「上浦市烏山遺跡群」昭和50年3月

註6・7は、瓦吹堅氏の御教示による。

乙子遺跡出土の石製模造品一覧

| No | 出土遺構 | 直 径 | 孔 径 | 厚 さ | 重 さ | 備 考 |
|----|-------|-------|-----|------|-----|-----|
| 1 | 1号住居址 | 3.6cm | 1mm | 2 mm | 6 g | 完形 |
| 2 | " | 2.6cm | 1mm | 2 mm | 5 g | " |
| 3 | " | 4 cm | | 3 mm | 6 g | 未製品 |
| 4 | " | 2.6cm | | 4 mm | 3 g | " |

| No | 出土遺構 | 直 径 | 孔 径 | 厚 さ | 重 さ | 備 考 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-----|
| 5 | 1号住居址 | 2.2cm | | 3 mm | 2 g | 未製品 |
| 6 | " | 2.6cm | 2 mm | 2.5mm | 4 g | 完 形 |
| 7 | " | 2.9cm | 8 mm | | 20 g | " |
| 8 | 2号住居址 | 2.1cm | 2 mm | 3 mm | 9 g | " |
| 9 | " | 3.8cm | | 4 mm | 6 g | 未製品 |
| 10 | " | 2.2cm | | 2 mm | 2 g | " |
| 11 | " | 4.4cm | | 3 mm | 5 g | " |
| 12 | " | 1.5cm | | 2 mm | 1 g | " |
| 13 | " | 5 mm | 2 mm | 2.5mm | | 完 形 |
| 14 | " | 5 mm | 1.5mm | 3 mm | | " |
| 15 | " | 4.5mm | 1.5mm | 2.5mm | | " |
| 16 | " | 5 mm | 2 mm | 2 mm | | " |
| 17 | " | 6 mm | 1 mm | 3 mm | | 未製品 |
| 18 | " | 6.5mm | 1 mm | 3 mm | | " |
| 19 | " | 6.5mm | 1 mm | 2 mm | | " |
| 20 | " | 5.5mm | 1 mm | 3 mm | | " |
| 21 | " | 7 mm | 1 mm | 3 mm | | " |
| 22 | " | 6.5mm | 1 mm | 2 mm | | " |
| 23 | " | 5 mm | 1.5mm | 1.5mm | | " |
| 24 | " | 6.5mm | 1 mm | 2 mm | | " |
| 25 | " | 6 mm | 1.5mm | 2 mm | | " |
| 26 | " | 7 mm | 1 mm | 2 mm | | " |
| 27 | " | 7 mm | 1 mm | 4 mm | | " |
| 28 | 3号住居址 | 5 mm | 2 mm | 3 mm | | 完 形 |
| 29 | " | 5 mm | 2 mm | 3 mm | | " |
| 30 | " | 5 mm | 2 mm | 3 mm | | " |
| 31 | " | 4 mm | 2 mm | 2.5mm | | " |
| 32 | 4号住居址 | 2.5cm | 2 mm | 3 mm | 3 g | " |
| 33 | " | 2.3cm | 2 mm | 2 mm | 3 g | " |
| 34 | " | 3.5cm | 4 mm | | 2.5 g | " |

| No. | 出土遺構 | 直 径 | 孔 径 | 厚 さ | 重 さ | 備 考 |
|-----|---------|-------|-------|-------|------|-----|
| 35 | 5号住居址 | 1.3cm | 1.5mm | 2 mm | 3 g | 完形 |
| 36 | " | 2.7cm | 2 mm | 2 mm | 5 g | " |
| 37 | " | 2.5cm | 1 mm | 2 mm | 1 g | 未製品 |
| 38 | 8号住居址 | 1.8cm | 2 mm | 7 mm | 8 g | 完形 |
| 39 | 9号住居址 | 1.5cm | 1 mm | 3 mm | 4 g | " |
| 40 | " | 5 mm | 1 mm | 3 mm | | " |
| 41 | " | 4 mm | 2 mm | 3 mm | | " |
| 42 | " | 4.5mm | 1.5mm | 2.5mm | | " |
| 43 | " | 4.5mm | 1.5mm | 2 mm | | " |
| 44 | " | 4 mm | 1.5mm | 3 mm | | " |
| 45 | " | 3 mm | 1 mm | 2 mm | | " |
| 46 | map | 1.7cm | 2 mm | 2 mm | 5 g | 表採 |
| 47 | c-3・f-3 | 3.6cm | 6 mm | 2.3cm | 50 g | 表採 |

北今城遺跡出土の石製模造品一覧

| No. | 出土遺構 | 直 径 | 孔 径 | 厚 さ | 重 さ | 備 考 |
|-----|---------|-------|-------|-------|------|--------|
| 1 | 1号住居址 | 2.6mm | 3 mm | 2.6mm | 2.5g | 完形 |
| 2 | " | 3.1mm | 6 mm | 3.1mm | 2.2g | " |
| 3 | " | 2.6mm | 4 mm | 2.6mm | 1.1g | " |
| 4 | " | 2.6mm | 6 mm | 2.6mm | 1.1g | " |
| 5 | 9号住居址 | 5.1mm | 6.5mm | 2.3mm | 5 g | " |
| 6 | " | 3.2cm | 2 mm | 3 mm | 7 g | 未製品 |
| 7 | 11号住居址 | 4 cm | 7 cm | 7.5mm | 17 g | 完形 |
| 8 | 13号住居址 | 4 mm | 1 mm | 2 mm | | " |
| 9 | " | 4 mm | 1 mm | 2 mm | | " |
| 10 | " | 4 mm | 1 mm | 1.5mm | | " |
| 11 | " | 4 mm | 1.3mm | 2 mm | | " |
| 12 | a-3・c-3 | 2.6mm | 1 mm | 3 mm | | 完形(表採) |

2. 住居跡 (14~24号)・土壤について

ここでは昭和53年度に調査した住居址11軒、土壤2基について述べることにする。

| 遺構番号 | 形態 | 規模 (m) | 主軸方向 | 備考 |
|------|------|---------|------------|------------|
| 14 | 方形 | 6.0×? | N-17° -W | カマド・壁溝 |
| 15 | 隅丸方形 | 3.3×3.3 | N-6° -W | カマド・壁溝 |
| 16 | 方形 | 6.0×6.0 | N-18° -W | カマド・貯蔵穴・壁溝 |
| 17 | 方形 | 5.2×5.0 | N-32.5° -W | カマド・貯蔵穴・壁溝 |
| 18 | 方形 | 8.4×8.2 | N-38° -W | カマド・貯蔵穴・壁溝 |
| 19 | 方形 | 5.0×3.8 | N-7.5° -W | カマド・貯蔵穴・壁溝 |
| 20 | 隅丸方形 | 5.6×5.4 | N-18° -W | カマド・貯蔵穴・壁溝 |
| 21 | 方形 | 6.0×5.6 | N-22° -W | カマド・貯蔵穴・壁溝 |
| 22 | 方形 | 5.0×4.6 | N-35° -W | カマド・貯蔵穴・壁溝 |
| 23 | 隅丸方形 | 5.1×4.8 | N-28.5° -W | カマド・貯蔵穴・壁溝 |
| 24 | 方形 | 5.0×4.8 | N-25.5° -W | カマド・貯蔵穴・壁溝 |

住居址はいずれも方形（あるいは隅丸方形）を呈し複合はない。壁溝が全周し、また北壁中央にカマドの左右いずれかに貯蔵穴を有するものがほとんどである。主軸方向もN-6° ~38° -Wで、ほぼ一定しており、大差はみられない。

規模は最小の第15号住居址で3.3m×3.3m、最大の第18号住居址で8.4m×8.2mであるが、ほとんどが1辺5~6mのものである。壁の立ちあがりがよく、床面もよく踏み固められており、全般的に遺存状態は良好である。またいずれの住居址も壁溝を有し、平均して幅15~20cm、深さ10cmほどで全周している。

柱穴は床面の中央を中心として、ほぼ対角線上に4本の主柱穴を配しているものが多い（16・17・18・20・21・22・23号）が、竪穴外に柱穴のみられるもの（15・19・24号）もある。

貯蔵穴はカマドの右側にあるもの（16・17・18・20・22号）とカマドの左側にあるもの（21・23号）とがある。

カマドは火床に多量の焼上がみられ、火床は住居址の床面をわずかに掘り窪めている。カマドの構築にあたっては、北壁のはば中央部を半円形に穿ち、粘土を用いて左右の袖を作り出し、天井部も覆っているものが大部分であるが、構築時に袖部や天井部に變形土器を芯として補強し、その上を粘土で固めより耐久性のあるカマドを作っているものが一部にみられる。第14号・20号住居址のカマドは左右両袖の芯に變形土器を倒立させ、左右の變形土器の底部から2個の變形土器を横にしてつなぎ天井部を形作っている。14号の場合は図70 1~4の變形土器を使用し、3を左

袖、4を右袖の芯として倒立させ、1の口縁部を右に向けて横にし、その底部と2の口縁部をつないで天井部の芯を作っている(図49)。20号住居址の場合は4個の変形土器は破碎されて出土したが、出土状態から上器を芯に用いたことは明らかである(図56)。

以上の住居址とは異なるものに19号がある。他の住居址と比べ南北に長い長方形アランを旱している。壁内に柱穴ではなく、壁外に14の柱穴が壁に沿ってほぼ規則的に配列されている。また床面中央部に炉址、北寄りにカマドがあり、中央部の炉址とP15とP16から394片もの鉄滓が出土しており、付近からフイゴ羽口片と思われる土製品が出土していることなどからして、鍛冶工房址と思われる。

土壙は2基あるが、いずれも遺物がなく時期、性格等は不明であるが、第1号土壙はその形態から地下式壙と思われる。

遺物は変形土器、壺形土器、環形土器、鉢形土器、鉢形土器等が出土し、ほかに土製品(土玉、支脚、フイゴ羽口)、鉄製品(鋸先)が出土している。これらの遺物の中で量的に多いのは環形土器、変形土器である。

環形土器はいずれも器外面、器内面とも口縁部は横なで整形、底部外面はへらけずり、底部内面はへら磨き整形がなされている。この中で口縁部がほぼ直立し、底部との境に稜を有するものが大部分であるが、その他わずかであるが口縁部が内傾するものと外傾するものがある。器高は3~5cmに集中し、口径は12~14cmのもののがほとんどである。

壺形土器は長胴で、最大幅がほぼ胴部中位にあるものが多く平底である。口縁部は丸味をもって外反し器外面、器内面とも横なで整形がみられ、胴部は粗い縦位のけずりがなされ、胴部内面はへらなで整形である。多くが2次焼成を受けており、底部付近はレンガ状を呈している。

壺形土器は少なく、球形を呈する大型のものである。

鉢形土器は器高に比べ口径が大きく平底で、胴部は内凹し、口縁部は丸味をもって外反する。

高環形土器は1点だけ出土している。口部はゆるく内凹して立ちあがり、口縁部でいく分外反する。脚部は欠損しているが、接合痕により脚部は太めであることがうかがえる。

鉢形土器は大小2種が出土し、口縁部は丸味をもって外反し、胴部は底部から内凹気味に開いて立ちあがる。孔は底部全体を穿ったものと底部の縁をいく分残しているものがある。

以上の少ない遺構、遺物によって編年することは非常に早計であるが、鬼高後期にとらえておきたい。

3. 出土遺物について

今回の調査により、乙子遺跡、北今城遺跡(D-2・3地区)からは、それぞれ良好な状態で遺物が出土しており、尖削したのは、個体であり、今回の報告書に記載した。

これらの出土遺物については、遺構との関係、出土状態から見る時多少なりとも変化がみられ

る。遺物の遺構への流れ込み、埋設状態の時間差なども一つの問題要因と思える。

各遺構の出土遺物にも古いものと、新しい要相を示すものとがあり、同一時期、同一型式で呼唱する事には難点があるので、ここでは各個々の遺構の時期を記したい。

乙子遺跡より計9軒の住居址が検出され、和泉期から、鬼高期内半に位置する。

4. 考察

昭和52年度、南守谷地区土地区画整理事業地内発掘調査は、乙子遺跡（D-4地区）、北今城遺跡の一部（D-2・3地区）を実施した。当遺跡は、北相馬台地の東南縁の台地上に広がる集落跡である。今年度の調査区域は、集落跡の形態や先後関係を全て把握し明確になし得なかった事は漸愧に耐えない次第である。調査に関しても、調査期間、面積等の諸問題点があった。

集落の主体をなすものは、古墳時代前期～中期、五箇期～和泉期～鬼高期内半である。

(1) 石製模造品、カマドについて

乙子遺跡、北今城遺跡について特記すべき事項は、石製模造品の出土である。乙子遺跡、2号住居址より、各種の製品、半製品、未製品の他にけずり屑や原石が出土しており、当住居址が、祭祀用具、生活用具としての滑石製品、工房址を兼ねていたことは、けずり屑や原石、石の存在から疑い難い。2号住居址に於いて製造し、乙子遺跡、北今城遺跡集落に供給していたものと思われる。

カマドは、乙子遺跡に於いては検出されず、北今城遺跡に於いて2軒の住居址より検出確認調査された。カマドは、住居址の壁や床をほとんど掘りくぼめず、粘質土、砂のみで構築するもので住居址外に大きく張り出さないものが多い。またカマド焼成に際し、土器を埋置し、支脚としては、利用されておらず、現在迄の所、当遺跡周辺でのカマドの調査報告例はみあたらず。今後南守谷地区内の調査によって類例、資料が提示されるものと思われる所以今後の剣討としたい。

住居址構造については、ほぼ正方形に近く、貯蔵穴、カマドを有し、4本主柱穴で、構成要素は、前段階の貯蔵穴、炉址を有し、4本主柱穴と多少なりと変化を示している。炉址→カマドへの移り変わりである。しかし住居形態には大差なく小形化と思われる。この様な変化は居住人員の減少を反映しているものか否かは今後の南守谷地区内調査による資料追求で明確にし、検討をくわえたい。

(2) 方形周溝墓について

今回調査した北今城遺跡から、一軒の方形周溝墓が検出され、調査をした。

調査区、西側から検出されたが、調査面積の関係上、一軒だけの調査に終り、これ以上の追求は困難をきたし出来なかった。

この方形周溝墓は、溝が一周しており隅丸を呈し、溝中に2ヶ所のPitが確認された。

乙子遺跡、北今城遺跡は、時期的にも、内容的にもよく似た遺跡ということが出来るが今後の資料提示し、検討をしたい。

方形周溝墓研究に於いて墓制としての一形式の調査は、東京都向原遺跡であり、現在迄の所、南・西関東を中心に発見例が増加し、東・北関東に於いても増加傾向がみられる。

茨城県内に於いては、「小野崎城址」(註1)が調査され、方形周溝墓が1基調査された。ついで、「津田天神山遺跡」(註2)、「金井戸遺跡」(註3)、「須和間遺跡」が調査され、須和間遺跡より4基の方形周溝墓が検出調査された。ついで、「花室遺跡」(註5)、「向井原遺跡」(註6)、(円形、方形周溝墓、5基調査)、「赤塚古墳群」(註7)、「下高場遺跡」(註8)、が調査され、各遺跡からの報告がみられる。

また、方形周溝墓に対しての問題点もいくつかあり、須和間遺跡報告書報文中に、茂木雅博氏は、6号墳の資料を提示し、時期判断を、「弥生時代後期初頭としたが、土器の検討をくわえた結果により、弥生時代後期末と判断し訂正し、また単なる埋葬施設とするのではなく、むしろ、祭祀遺跡として把握され得る事を指摘し、方形周溝墓を全て「墓」として位置づけず溝状遺構を周溝墓として片づけてしまう現状を批判し、今後の周溝墓の調査に於いての問題提議を示した。

また、川崎純徳氏は、報文中に、周溝墓をとりあげ、「方形周溝墓を持つ南関東系の侵入者によって常総地方の古代の基盤が形成されていった」とし「方形周溝墓は、そのまま古式古墳につながらず、一区切りあい別個である」と述べ、茨城県内の周溝墓は、「五領I式期から和泉期」まで下降するのではないかと記している。

金井戸遺跡出土方形周溝墓は、出土遺物から五領期末から和泉期初頭に位置し、向井原遺跡に於いても、数基の、円・方形周溝墓が出土し、方形周溝墓が、五領II式期の住居址を切って築造されており、切り合ひ関係から古墳時代中頃と思われる。

以上の事項より、茨城県内における周溝墓は、そのほとんどが、現在までのところ、古墳時代前期～中期に比定される。

また、方・周溝墓形状についても、低墳丘を有するものと、有しないものが検出されており、今後、墳丘に關しても調査、研究が実施されなければならない。

また、集落との関係にも今後、問題追求されなければならない、北今城遺跡においても、今後、南守谷地区での古墳時代の集落を整理し検討をくわえたい。

註1 茨城県立常陸太田一高史学部報「史考」19号、昭和 年

註2 「勝田市埋蔵文化財調査報告書」 勝田市教育委員会 昭和50年

註3 日立市教育委員会 昭和42年～昭和43年発掘調査

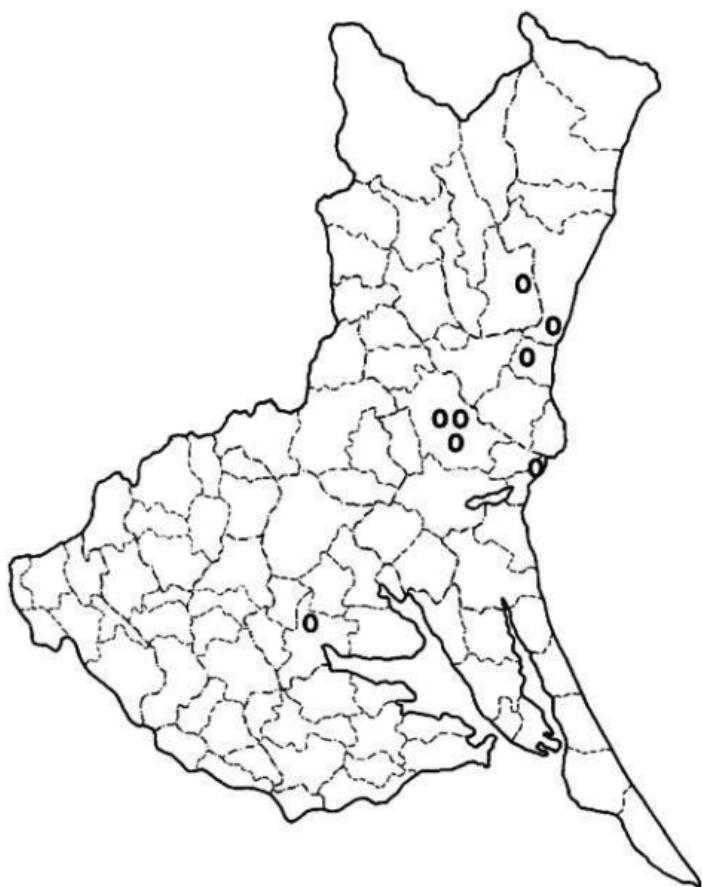


図78 茨城県内における周溝墓出土地



図79 茨城県内における石製模造品出土地
○⇒五箇期遺跡 × ⇒石製模造品出土地

- 註4 茂木雅博 「須和間古墳」茨城県資料・考古資料編 昭和49年
- 註5 「花室城跡発掘調査報告書」茨城県教育委員会 昭和 年
- 註6 水戸市教育委員会 「向井原発掘調査報告書」 昭和49年
- 註7 伊東重敏 「赤塚古墳群」茨城県資料・考古資料編、古墳時代 昭和49年
- 註8 「勝田市埋蔵文化財分布調査報告書」 勝田市教育委員会 昭和50年

第6章 大日遺跡

大日遺跡は、守谷町大字鉢塚字大口222外19筆と同大字高野字五十塚1529に所在し、東と西側を谷津川の開けた小支谷が入りくみ南へ張り出した標高20~21mを測る台地上にある。調査面積は12,759m²で南北面の雑地を除いてほとんどが畠地である。周辺には北西約300mに鉢塚古墳群、西方約400mに鉢塚B遺跡がある。「大日」の地名は付近に大日如来の祠があったことによる。

第1節 調査の経過

- 昭和53年4月 下旬より除草と焼却をしグリッド設定に入る。
- 昭和53年5月 上旬より表土排除作業を進める。各グリッドより多数の縄文土器片が出土し、縄文時代の遺構を想定し、慎重に調査を進める。下旬になって土師式土器片が出土する。
- 昭和53年6月 ひき続き表土排除を進め遺構の確認調査をする。地表より平均50cm表土を排除し7軒の方形プランの住居址を確認する。下旬までにはほぼ25%の表土排除が終了する。北今城遺跡より作業員を投入したが、下旬は雨天が多く作業が停滞する。
- 昭和53年7月 ひき続き遺構確認調査を進める。連日の晴天のため土色判別に苦しむ水を打ちながら慎重に調査を継続し、方形プランの住居址3軒、隅丸長方形プランの住居址1軒を確認する。
- 昭和53年8月 遺構確認調査の折に各グリッド傍に置いた残土の移動を行う。連日の猛暑と乾燥しきった土ばかりの中での作業は難行する。上旬より遺構周辺の拡張作業に入り、並行して遺構確認調査を進める。E2より隅丸長方形プランの住居址2軒が確認される。
- 昭和53年9月 降雨を期待してひき続き遺構周辺の拡張作業を行い、また遺構確認調査を進めたが確認されなかった。
- 昭和53年10月 各住居址の精査に入る。並行して遺構確認調査を進め、既に確認済みの13軒の住居址以外に遺構は存在しないことが判明する。当初予想した縄文時代の住居址は1軒にとどまり、弥生時代の住居址2軒、古墳時代の住居址10軒が確認された。各住居址とも遺存状態は良好であり、逐次精査、実測、写真撮影を行う。第6・9住居址より完形またはほぼ完形の高環形土器と壺形土器、壺形土器が集中して出土する。
- 昭和53年11月 ひき続き、各住居址の精査、実測、写真撮影を行い、中旬に終了、下旬に重機による残土移動を実施する。遺跡全体写真を撮影し調査を完了する。

第2節 遺構と遺物

1. 遺構

本遺跡で検出された遺構は住居址13軒である。西と東とを小支谷にはさまれ南に突き出した台

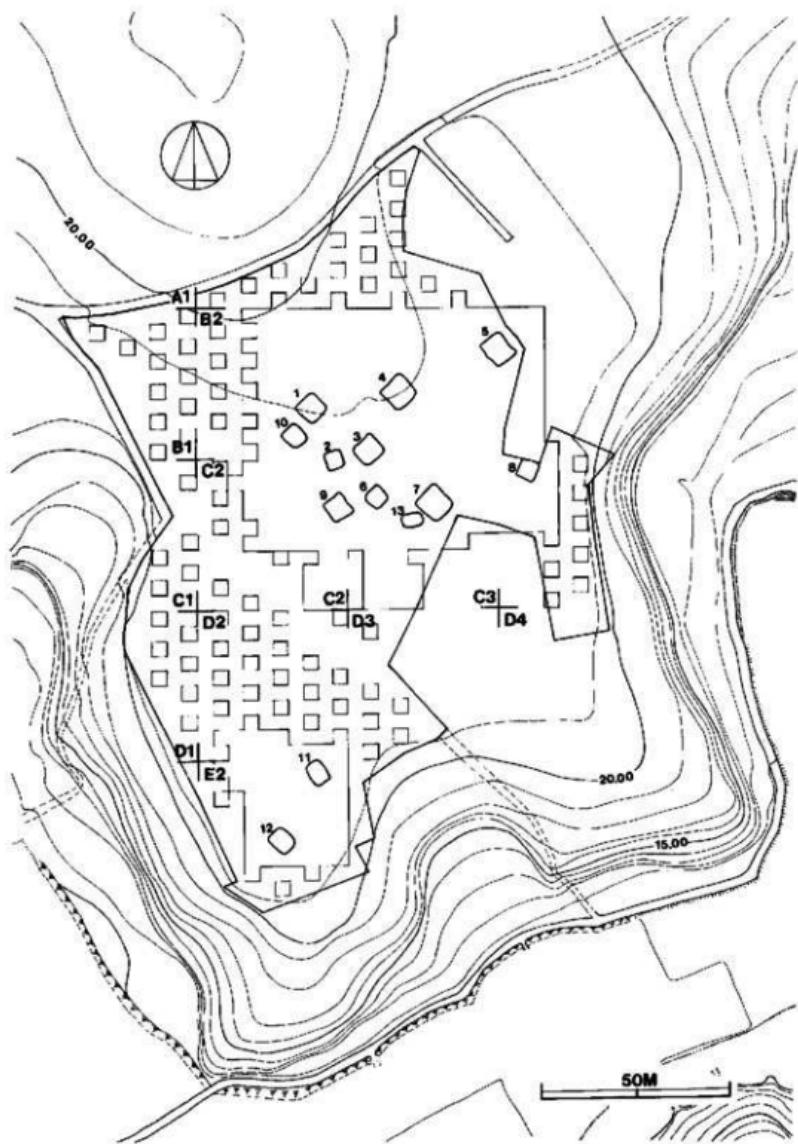


図80 大日造跡全体図

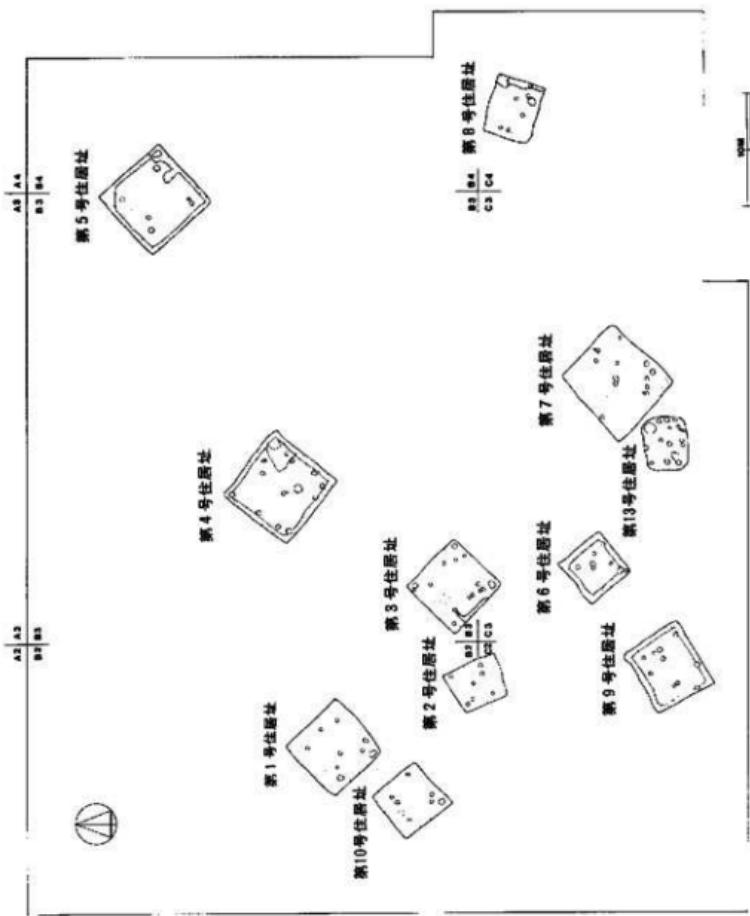


图81 逮捕配置图(1)

地のほぼ中央に集中して11軒、その台地の南端に2軒がみられ、いずれも単独で検出され複合はない。時期は縄文～古墳時代までである。

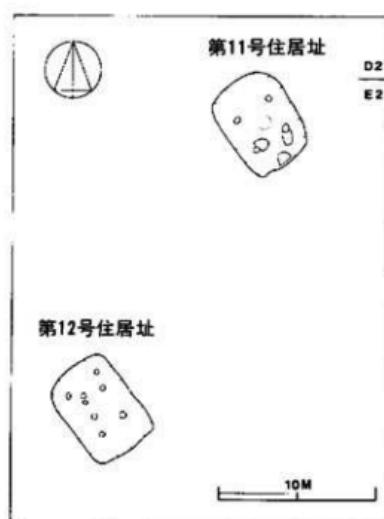


図82 造構配置図(2)

第1号住居址(図83)

本址はB2g7・B2g8・B2g9・B2h7・B2h8・B2h9・B2i8に確認され、10号住居址の北東に隣接し、4号住居址の西に位置する。主軸方向はN-43.5°Wで、長径6.2m、短径6.1mほどの方形の平面形を呈する。

壁はいく分外傾して立ちあがり、壁高は15～20cmを測る。壁溝はない。床はロームであり、ほぼ平坦で柔かいものである。炉址は北西壁寄りの中央に位置し、長径70cm、短径60cmほどの楕円形の平面形を呈し、10cmほど掘り込まれている。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。

ピットはP1～P9まで確認され、P1・P2・P3・P4は主柱穴、P9は貯蔵穴と思われる。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 30 | 25 | 24 | 主柱穴 |
| P 2 | 35 | 24 | 25 | # |
| P 3 | 40 | 30 | 28 | # |
| P 4 | 52 | 33 | 87 | # |
| P 5 | 32 | 21 | 41 | |
| P 6 | 40 | 30 | 62 | |
| P 7 | 25 | 20 | 31 | |
| P 8 | 50 | 34 | 81 | |
| P 9 | 78 | 45 | 33 | 貯蔵穴 |

段上は自然堆積の状態を示し、上層は黒褐色土で下層はソフトロームである。遺物は高環形土器、壺形土器が出土している。

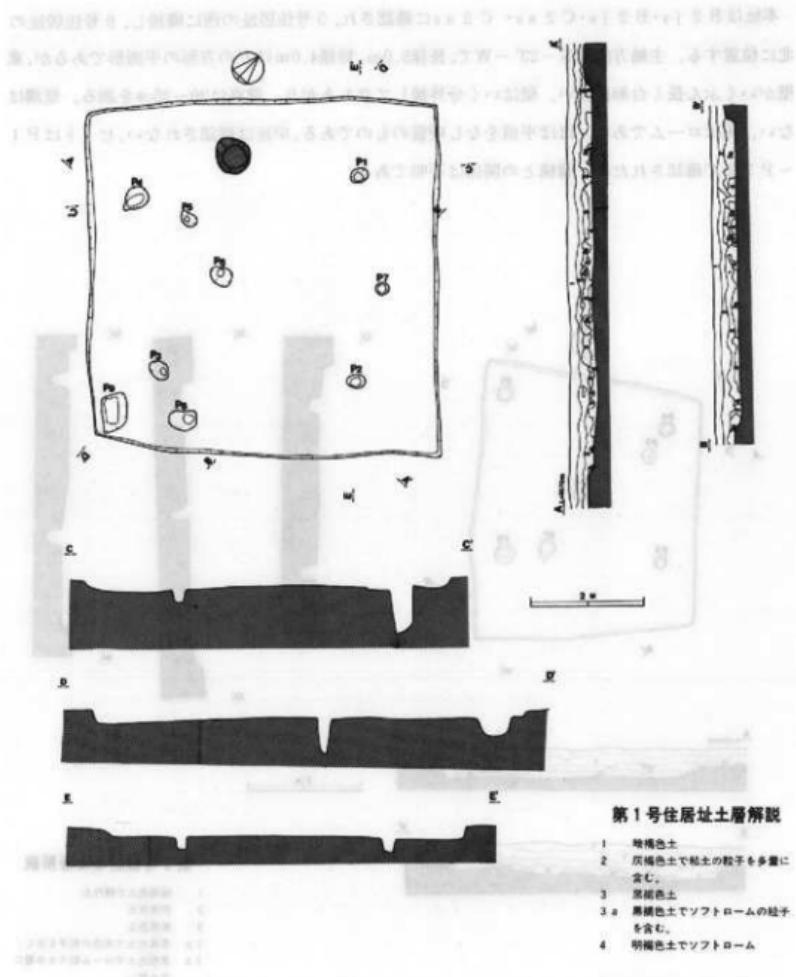
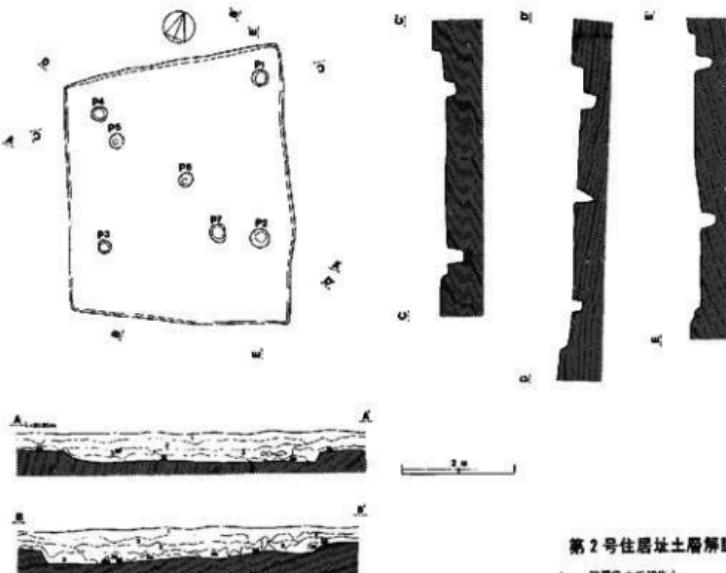


図83 第1号住居址実測図

第2号住居址(図84)

本址はB2jo・B2jo・C2ag・C2aoに確認され、3号住居址の西に隣接し、9号住居址の北に位置する。主軸方向はN-23°-Wで、長径5.0m、短径4.0mほどの方形の平面形であるが、東壁がいくぶん長く台形に近い。壁はいく分外傾して立ちあがり、壁高は20-25cmを測る。壁溝はない。床はロームであり、ほぼ平坦をなし硬質のものである。炉址は確認されない。ピットはP1-P7まで確認されたが、遺構との関係は不明である。



第2号住居址土層解説

- 1 増殖色土で作成土
- 2 灰褐色土
- 3 黑褐色土
- 3 a 黑褐色土で木炭の粒子を含む。
- 3 b 黑褐色土でローム粒子を多量に含み堅い。

図84 第2号住居址実測図

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|----|
| P 1 | 30 | 28 | 30 | |
| P 2 | 34 | 33 | 28 | |
| P 3 | 25 | 22 | 20 | |
| P 4 | 29 | 26 | 21 | |
| P 5 | 31 | 23 | 41 | |
| P 6 | 26 | 22 | 33 | |
| P 7 | 35 | 26 | 12 | |

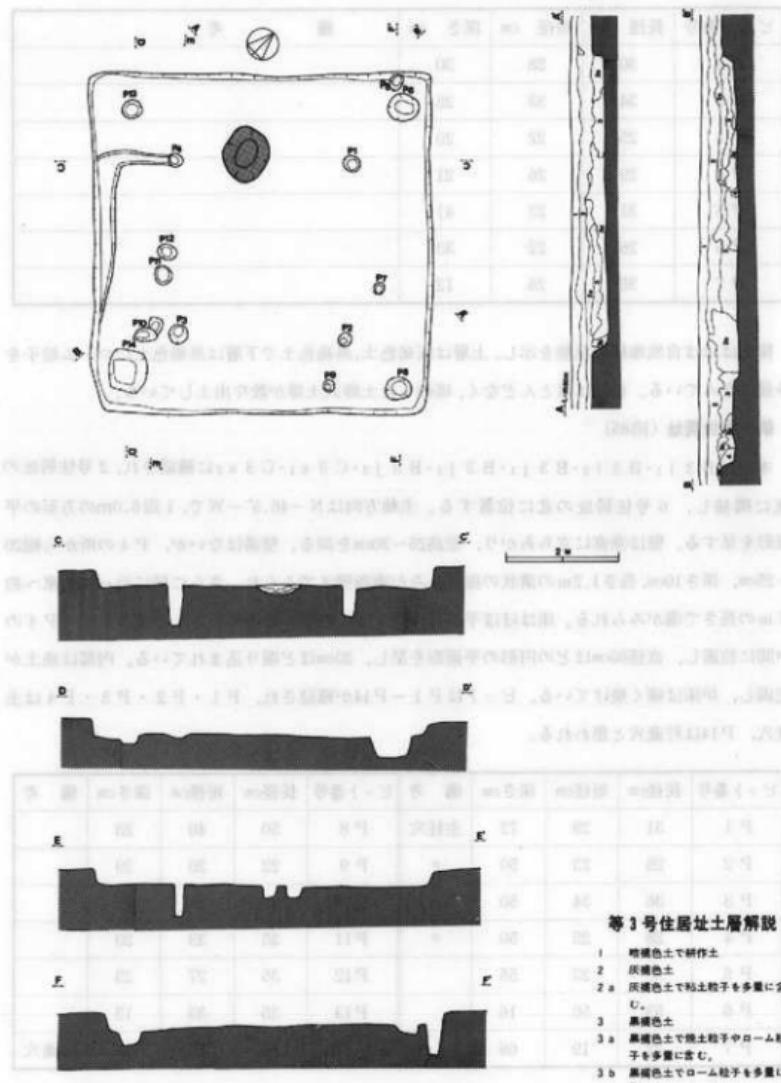
覆土はほぼ自然堆積の状態を示し、上層は灰褐色土、黒褐色土で下層は黒褐色土にローム粒子を多量に含んでいる。遺物はほとんどなく、破砕した土師式土器が数片出土している。

第3号住居址(図85)

本址はB 3 i₁・B 3 i₂・B 3 j₁・B 3 j₂・B 3 j₃・C 3 a₁・C 3 a₂に確認され、2号住居址の東に隣接し、6号住居址の北に位置する。主軸方向はN 46.5°-Wで、1辺6.0mの方形の平面形を呈する。壁は垂直に立ちあがり、壁高25~30cmを測る。壁溝はないが、P 4の所から幅20~25cm、深さ10cm、長さ1.2mの溝状の掘り込みが南西壁までみられ、さらに壁に沿って南東へ約3mの長さで溝がみられる。床はほぼ平坦で、ロームの硬質のものである。炉址はP 1~P 4の中間に位置し、直径80cmほどの円形の平面形を呈し、20cmほど掘り込まれている。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP 1~P 14が確認され、P 1・P 2・P 3・P 4は支柱穴、P 14は貯蔵穴と思われる。

| ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 | ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 |
|-------|------|------|------|-----|-------|------|------|------|-----|
| P 1 | 31 | 29 | 72 | 支柱穴 | P 8 | 50 | 40 | 23 | |
| P 2 | 25 | 23 | 50 | " | P 9 | 22 | 20 | 29 | |
| P 3 | 36 | 34 | 50 | " | P 10 | 45 | 25 | 22 | |
| P 4 | 28 | 25 | 50 | " | P 11 | 35 | 33 | 20 | |
| P 5 | 30 | 23 | 55 | | P 12 | 35 | 27 | 23 | |
| P 6 | 53 | 50 | 16 | | P 13 | 35 | 33 | 13 | |
| P 7 | 22 | 19 | 68 | | P 14 | 85 | 80 | 34 | 貯蔵穴 |

覆土は自然堆積の状態を示し、上層は黒褐色土で下層はソフトロームである。遺物は壺形土器、高环形土器が出土している。



等 3 号住居址土層解説

- 1 増殖色土で耕作土
- 2 広域色土
- 2 a 広域色土で粘土粒子を多量に含む。
- 3 黒褐色土
- 3 a 黒褐色土で焼土粒子やローム粒子を多量に含む。
- 3 b 黒褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 4 明褐色土でソフトローム

図85 第3号住居址実測図

第4号住居址（図86）

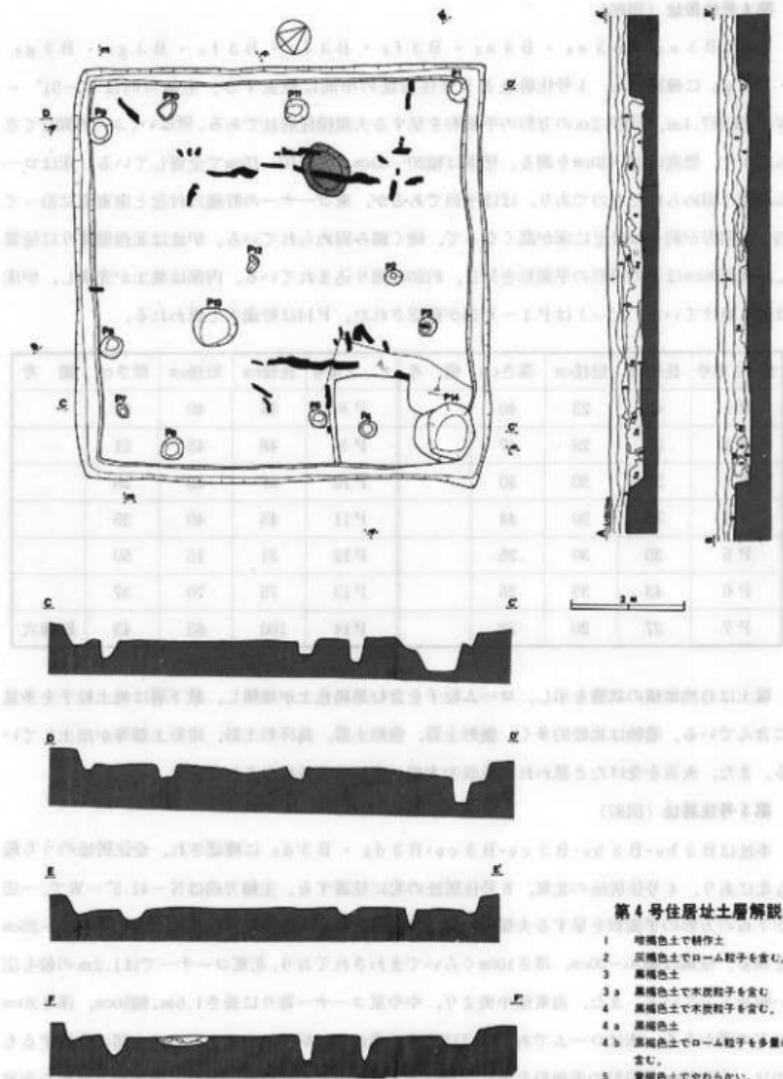
本址はB3cs・B3c4・B3cs・B3f3・B3f4・B3fs・B3ga・B3g4・B3gsに確認され、1号住居址と5号住居址の中間に位置する。主軸方向はN-51°-Wで、長径7.4m、短径7.2mの方形の平面形を呈する大規模住居址である。壁はいくぶん外傾して立ちあがり、壁高は25~30cmを測る。壁溝は幅20~30cm、深さ10~15cmで全周している。床はロームの踏み固められたものであり、ほぼ平坦であるが、東コーナーの貯蔵穴付近と南東壁に沿って約2m四方が約6cmほどに床が高くなっている。硬く踏み固められている。炉址は北西壁寄りに位置し、直径90cmの円形の平面形を呈し、約20cm掘り込まれている。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP1~P14が確認された。P14は貯蔵穴と思われる。

| ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 添さcm | 備考 | ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 |
|-------|------|------|------|----|-------|------|------|------|-----|
| P 1 | 42 | 23 | 40 | | P 8 | 45 | 40 | 15 | |
| P 2 | 30 | 28 | 47 | | P 9 | 48 | 45 | 21 | |
| P 3 | 35 | 30 | 40 | | P 10 | 37 | 28 | 28 | |
| P 4 | 32 | 30 | 44 | | P 11 | 45 | 40 | 35 | |
| P 5 | 35 | 30 | 25 | | P 12 | 31 | 15 | 50 | |
| P 6 | 43 | 39 | 25 | | P 13 | 75 | 70 | 37 | |
| P 7 | 27 | 20 | 32 | | P 14 | 100 | 83 | 43 | 貯蔵穴 |

遺土は自然堆積の状態を示し、ローム粒子を含む黒褐色土が堆積し、最下層は焼土粒子を多量に含んでいる。遺物は比較的多く、縦形土器、竪形土器、高环形土器、壺形土器等が出土している。また、火災を受けたと思われ、柱状の木炭が床面に多数検出されている。

第5号住居址（図87）

本址はB3b9・B3b10・B3cs・B3c9・B3d9・B3d10に確認され、全住居址のうち最も北にあり、4号住居址の北東、8号住居址の北に位置する。主軸方向はN-41.5°-Wで、辺が7mの方形の平面形を呈する大規模住居址である。壁はやや外傾して立ちあがり、壁高20~25cmを測る。壁溝は幅10~20cm、深さ10cmぐらいでまわされており、北東コーナーでは1.2mの最も広い幅をもっている。また、南東壁中央より、やや東コーナー寄りに長さ1.6m、幅50cm、深さ20cmほどの溝がある。床はロームであり、ほぼ平坦で柔かい。炉址はP4とP1の中間に位置するものは、直径80cmの円形の平面形を呈し、15cmほど掘り込まれている。また、中央部よりやや南東壁寄りに位置するものは、直径40cmほどの円形の平面形を呈し、10cmほど掘り込まれている。いずれも内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP1~P7が確認され、P1・P2・P3・P4が主柱穴、P7が貯蔵穴と思われる。



第4号住居址土層解説

- 1 黒褐色土で耕作土
- 2 黒褐色土でローム粒子を含む。
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土で木炭粒子を含む。
- 4-a 黒褐色土
- 4-b 黒褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 5 黄褐色土でやわらかい。
- 6 黄褐色土で木炭粒子や鐵粒子を多量に含む。

図86 第4号住居址実測図

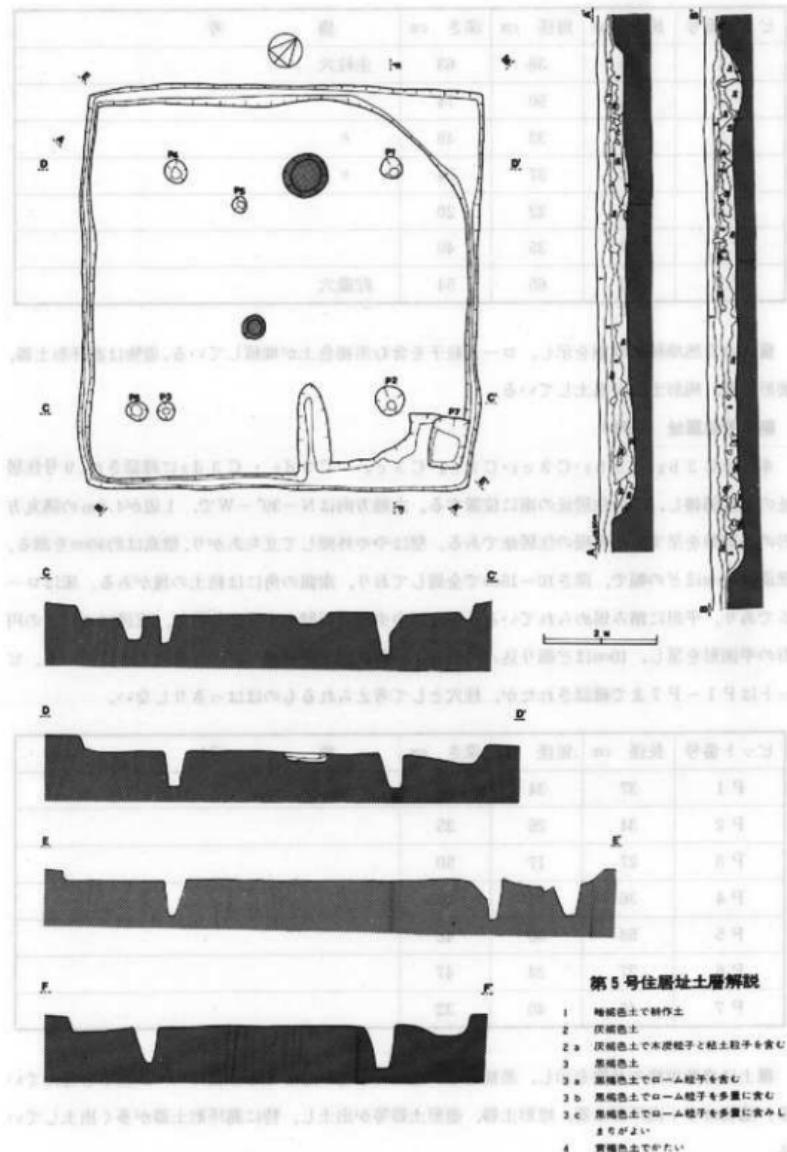


図87 第5号住居址実測図

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 40 | 38 | 63 | 主柱穴 |
| P 2 | 52 | 50 | 74 | " |
| P 3 | 32 | 33 | 49 | " |
| P 4 | 42 | 37 | 64 | " |
| P 5 | 30 | 22 | 20 | |
| P 6 | 39 | 35 | 40 | |
| P 7 | 110 | 65 | 54 | 貯蔵穴 |

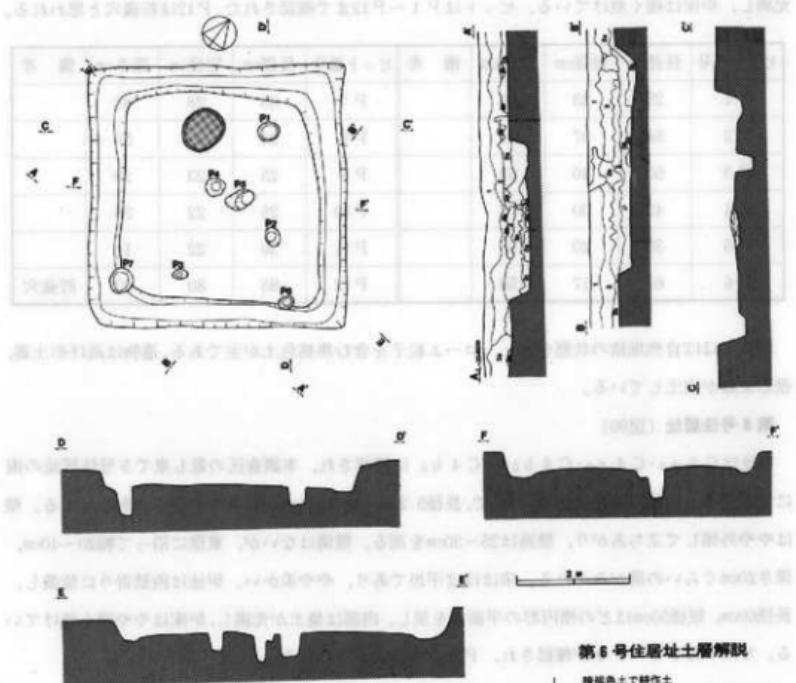
覆土は自然堆積の状態を示し、ローム粒子を含む黒褐色土が堆積している。遺物は高環形土器、壺形土器、楕円形土器が出土している。

第6号住居址(図88)

本址はC 3 b₂・C 3 b₃・C 3 c₁・C 3 c₂・C 3 c₃・C 3 d₂・C 3 d₃に確認され、9号住居址の東に隣接し、3号住居址の南に位置する。主軸方向はN-39°-Wで、1辺が4.6mの隅丸方形の平面形を呈する中規模の住居址である。壁はやや外傾して立ちあがり、壁高は約40cmを測る。壁溝は40cmほどの幅で、深さ10~15cmで全周しており、両側の角には粘土の塊がある。床はロームであり、平坦に踏み固められている。炉址は中央部北西壁の中間に位置し、直径80cmほどの円形の平塗形を呈し、10cmほど掘り込んでいる。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP 1~P 7まで確認されたが、柱穴として考えられるものははっきりしない。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|----|
| P 1 | 37 | 34 | 32 | |
| P 2 | 34 | 26 | 35 | |
| P 3 | 27 | 17 | 50 | |
| P 4 | 36 | 34 | 45 | |
| P 5 | 53 | 30 | 48 | |
| P 6 | 27 | 24 | 47 | |
| P 7 | 46 | 40 | 32 | |

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主体で下層になるほど多量にローム粒子を含んでいる。遺物は多く高環形土器、壺形土器、楕円形土器等が出土し、特に高環形土器が多く出土している。



第6号住居址土層解説

- 1 黒褐色土で耕作土
- 2 黒褐色土
- 2 a 黒褐色土で黒褐色土粒子を多量に含む。
- 2 b 黒褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 3 黑褐色土
- 3 a 黑褐色土でローム粒子を含む。
- 3 b 黒褐色土でしまりがよい。
- 3 c 黒褐色土でローム粒子を多量に含み堅い。

図88 第6号住居址実測図

第7号住居址 (図89)

本址はC 3 b₆・C 3 b₇・C 3 c₅・C 3 c₆・C 3 c₇・C 3 c₈・C 3 d₅・C 3 d₆・C 3 d₇・C 3 d₈・C 3 e₆・C 3 e₇に確認され、13号住居址の北東に隣接し、6号住居址の東に位置する。主軸方向はN-46.5°-Wで、長径7.6m、短径7.3mの方形の平面形を呈する。耕作によるカク乱をうけているため、壁の立ちあがりはあまりよくなく、壁高10cm前後であるが本来の規模ではないと思われる。壁溝は確認されない。床はロームであり、ほぼ平坦でやや柔かい。炉址は本住居址中央部と北西壁との中間に位置し、直径70cmほどの円形の平面形を呈し内部は焼土が

充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP1～P12まで確認された。P12は貯蔵穴と思われる。

| ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 | ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 |
|-------|------|------|------|----|-------|------|------|------|-----|
| P 1 | 25 | 23 | 18 | | P 7 | 33 | 28 | 68 | |
| P 2 | 54 | 37 | 39 | | P 8 | 94 | 34 | 50 | |
| P 3 | 50 | 40 | 52 | | P 9 | 25 | 23 | 28 | |
| P 4 | 42 | 30 | 73 | | P 10 | 25 | 22 | 25 | |
| P 5 | 35 | 20 | 55 | | P 11 | 30 | 22 | 15 | |
| P 6 | 61 | 17 | 58 | | P 12 | 93 | 80 | 22 | 貯蔵穴 |

覆土はほぼ自然堆積の状態を示し、ローム粒子を含む黒褐色土が主である。遺物は高环形土器、壺形土器が出土している。

第8号住居址(図90)

本址はC4a₂・C4a₃・C4b₂・C4b₃に確認され、本調査区の最も東で5号住居址の南に位置する。主軸方向はN-74°-Eで、長径5.2m、短径4.4mの隅丸方形の平面形を呈する。壁はやや外傾して立ちあがり、壁高は25～30cmを測る。壁構はないが、東壁に沿って幅20～40cm、深さ20cmぐらいの溝がみられる。床はほぼ平坦であり、やや柔かい。炉址は西壁寄りに位置し、長径60cm、短径50cmほどの裕円形の平面形を呈し、内部は焼土が充満し、炉床はやや硬く焼けている。ピットはP1～P9が確認され、P9は貯蔵穴と思われる。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 24 | 21 | 29 | |
| P 2 | 27 | 26 | 18 | |
| P 3 | 16 | 13 | 28 | |
| P 4 | 38 | 30 | 44 | |
| P 5 | 25 | 20 | 48 | |
| P 6 | 22 | 21 | 25 | |
| P 7 | 74 | 68 | 31 | |
| P 8 | 32 | 24 | 40 | |
| P 9 | 112 | 98 | 16 | 貯蔵穴 |

覆土はほぼ自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主である。遺物は少ないが壺形土器が出土している。

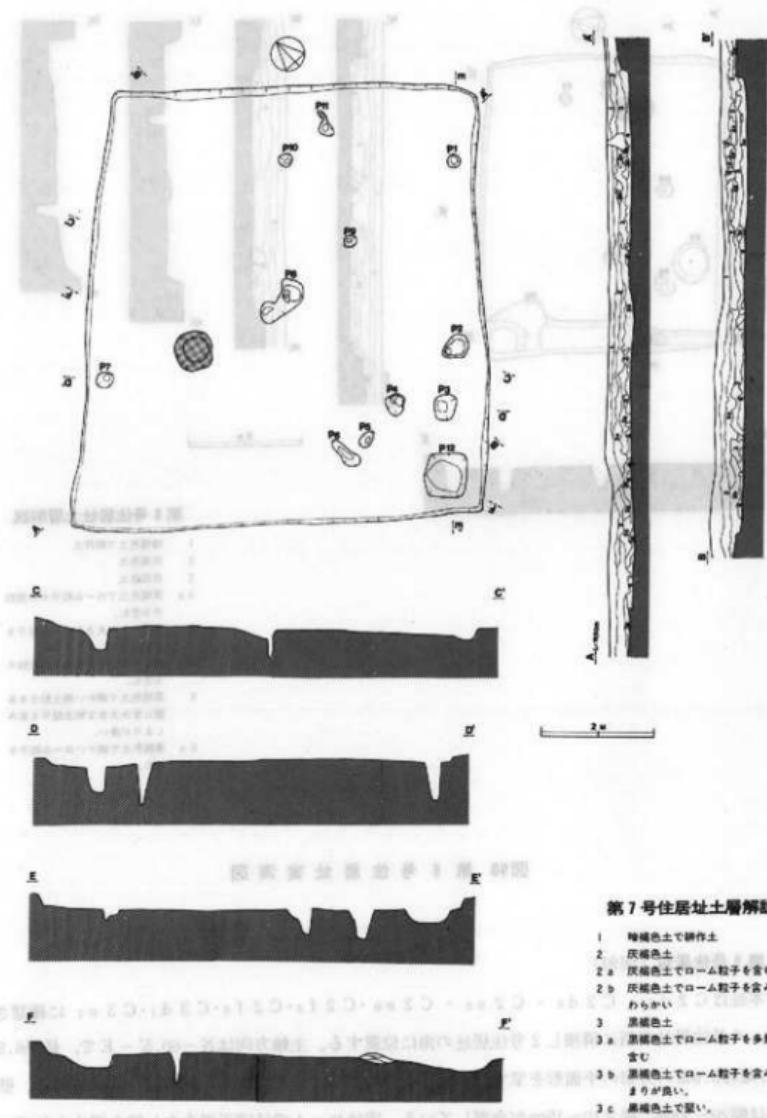
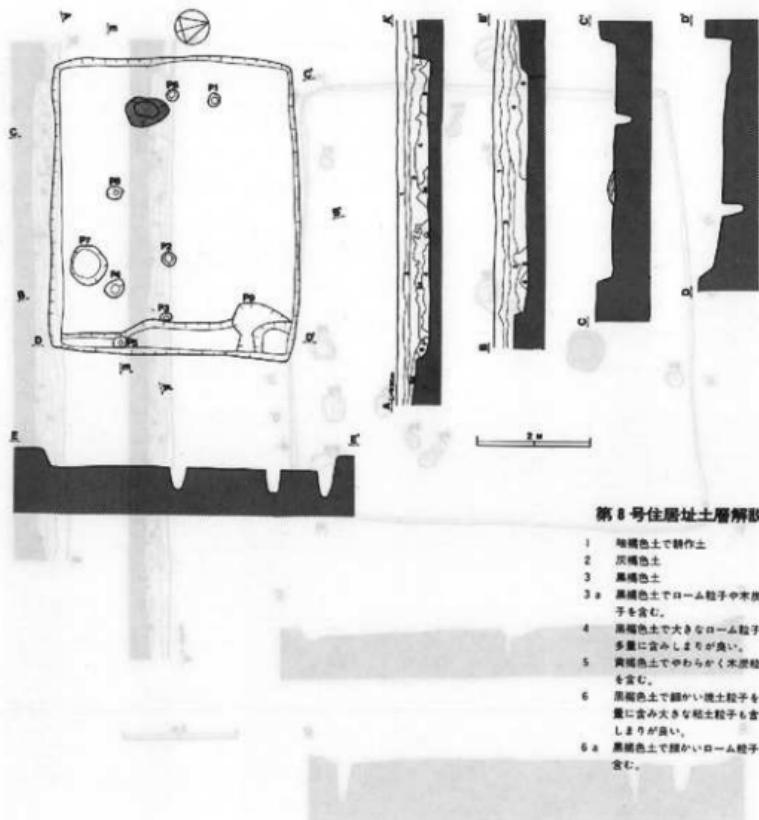


図89 第7号住居址実測図



第8号住居址土層解説

- 1 黒褐色土で耕作土
- 2 灰褐色土
- 3 黑褐色土
- 3a 黑褐色土でローム粒子や木炭粒子を含む。
- 4 黑褐色土で大きなローム粒子を多量に含みしまだが良い。
- 5 黄褐色土でやわらかく木炭粒子を含む。
- 6 黑褐色土で細かい壤土粒子を多量に含み大きな粘土粒子も含みしまだが良い。
- 6a 黑褐色土で細かいローム粒子を含む。

図90 第8号住居址実測図

調査地図の印字用

主軸方向: N-E

第9号住居址(図91)

本址はC2d₉・C2d₈・C2e₉・C2e₈・C2f₉・C2f₈・C3d₁・C3e₁に確認され、6号住居址の西に隣接し2号住居址の南に位置する。主軸方向はN-60.5°-Eで、長径6.5m、短径5.6mの方形の平面形を呈する。壁はやや外傾して立ちあがり、壁高25~30cmを測る。壁溝は幅20~30cm、深さ10~15cmが全周している。床はロームではば平坦をなし踏み固められている。炉址は見あたらない。ピットはP1~P12まで確認され、P1・P2・P3・P4は主柱穴と思われる。

調査地図の印字用

| ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 | ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 |
|-------|------|------|------|-----|-------|------|------|------|----|
| P 1 | 40 | 37 | 18 | 主柱穴 | P 7 | 35 | 30 | 24 | |
| P 2 | 50 | 45 | 61 | " | P 8 | 95 | 76 | 31 | |
| P 3 | 56 | 50 | 14 | " | P 9 | 38 | 32 | 60 | |
| P 4 | 37 | 27 | 57 | " | P 10 | 37 | 25 | 61 | |
| P 5 | 27 | 20 | 25 | | P 11 | 33 | 20 | 22 | |
| P 6 | 48 | 42 | 56 | | P 12 | 40 | 35 | 32 | |

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主で最下層はソフトロームである。遺物は非常に多く、高環形土器、壺形土器、甕形土器、罐形土器等が出土し、特に高環形土器が多く出土している。

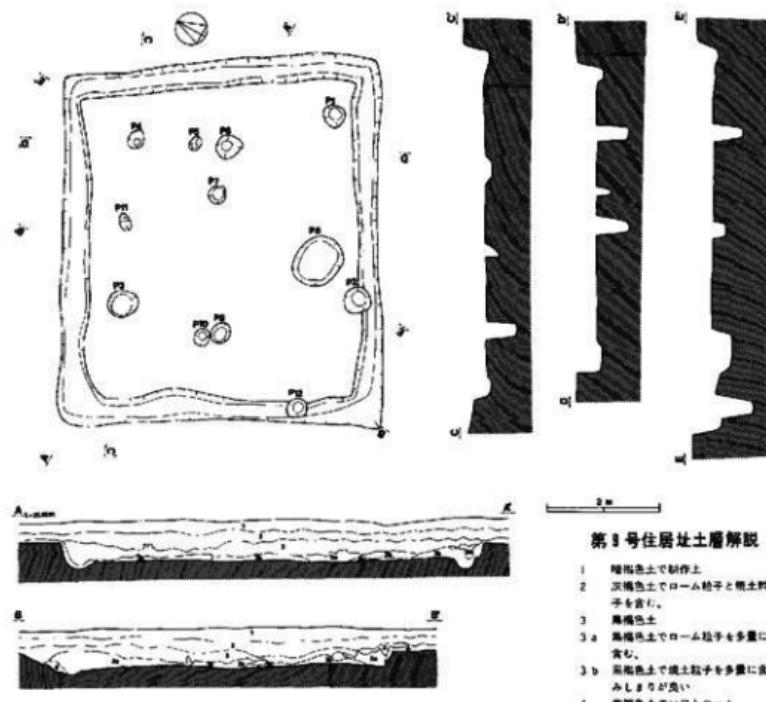


図81 第9号住居址実測図

第10号住居址（図92）

本址はB 2 h₇・B 2 i₆・B 2 i₇・B 2 i₈・B 2 j₇に確認され、1号住居址の南西に隣接している。主軸方向はN-39°-Wで、長径5.3m、短径5.0mの方形の平面形を呈する。壁は外傾して立ちあがり、壁溝は約20cmを測る。壁高は幅10~15cm、深さ10cmほどで周囲している。床はほぼ平坦で柔かい。炉址はP 4とP 5の中間に位置し、直径70cmほどの円形の平面形を呈し、内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP 1~P 7まで確認され、P 1・P 2・P 3・P 4は主柱穴、P 7は貯蔵穴と思われる。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 31 | 24 | 75 | 主柱穴 |
| P 2 | 27 | 16 | 65 | " |
| P 3 | 34 | 30 | 77 | " |
| P 4 | 34 | 24 | 47 | " |
| P 5 | 39 | 34 | 47 | |
| P 6 | 36 | 33 | 58 | |
| P 7 | 66 | 59 | 56 | 貯蔵穴 |

覆土は自然堆積の状態を示し、ローム粒子を含む黒褐色土が主である。遺物はほとんどなく、すべて破碎した土師式土器細片である。

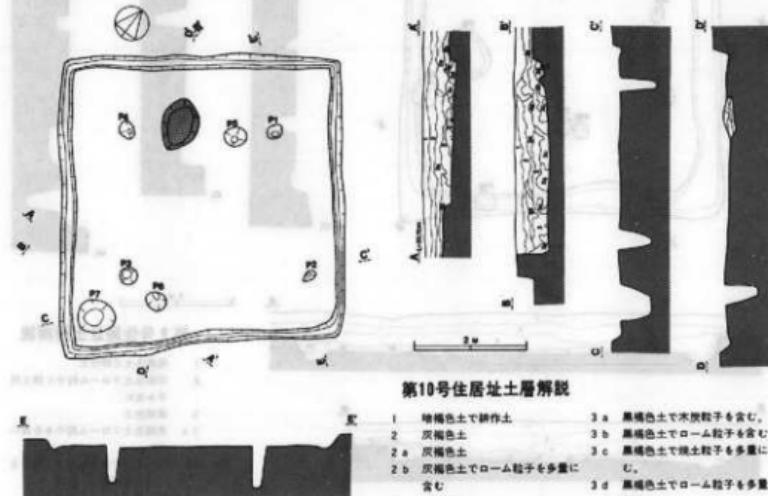


図92 第10号住居址実測図

第11号住居址（図93）

(483) 住居址

本址は D 2 j e · D 2 j g · E 2 a s · E 2 a g · E 2 b s · E 2 b g に確認され、本調査区の南寄りにあり、12号住居址の北東に位置する。主軸方向は N - 33° - W で、長径6.2m、短径4.4mほどの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はやや外傾して立ちあがり、壁高は20~30cmを測る。壁溝はない。床はほぼ平坦で柔かい。炉址は住居のほぼ中央部に位置し、直径80cmほどの円形の平面形を呈し、20cmほど掘り込んでいる。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットは P 1 ~ P 7 まで確認され、P 1 · P 2 · P 3 · P 4 は主柱穴、P 7 は貯蔵穴と思われる。

| ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 | ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 |
|-------|------|------|------|-----|-------|------|------|------|-----|
| P 1 | 47 | 38 | 64 | 主柱穴 | P 5 | 95 | 68 | 14 | |
| P 2 | 52 | 35 | 50 | " | P 6 | 85 | 74 | 18 | |
| P 3 | 46 | 35 | 60 | " | P 7 | 100 | 85 | 11 | 貯蔵穴 |
| P 4 | 45 | 33 | 61 | " | | | | | |

覆土は自然堆積の状態を示し、上層は黒褐色土で下層は褐色土である。遺物は芽生式土器片が出土している。

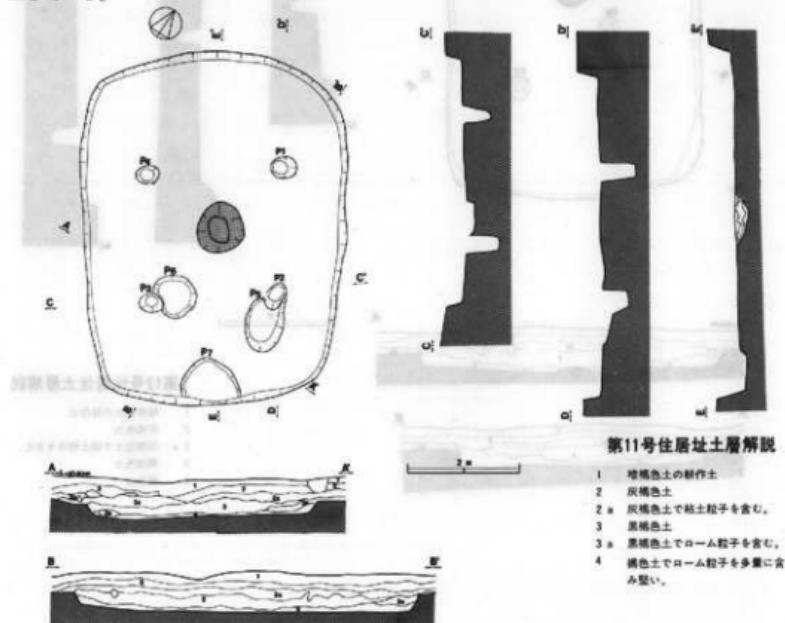


図93 第11号住居址実測図

第12号住居址（図94）

(66版) 郡山分野町南

本址は E 2 e₅・E 2 e₆・E 2 f₅・E 2 f₆・E 2 f₇・E 2 g₆に確認され、11号住居址の南西に位置する。主軸方向は N-37°-Wで、長径6.4m、短径4.4mほどの隅丸長方形の平面形を呈する。壁は外傾して立ちあがり、壁高は約30cmを測る。壁溝はない。床はほぼ平坦で、やや柔かい。炉址は住居のはば中央に位置し、直径70cmほどの円形の平面形を呈し、10cmほど掘り込んでいる。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットは P 1-P 8まで確認され、P 1・P 2・P 3・P 4は主柱穴と思われる。

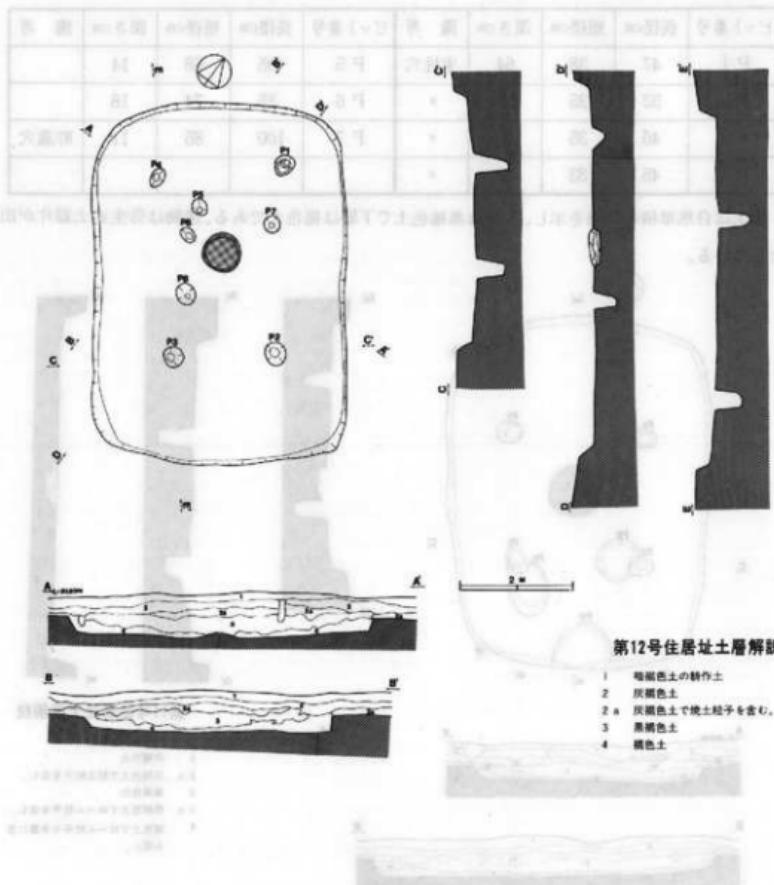


図94 第12号住居址実測図

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 40 | 34 | 22 | 主柱穴 |
| P 2 | 40 | 35 | 62 | # |
| P 3 | 37 | 34 | 56 | # |
| P 4 | 40 | 38 | 47 | # |
| P 5 | 30 | 26 | 33 | |
| P 6 | 28 | 22 | 41 | |
| P 7 | 31 | 30 | 29 | |
| P 8 | 38 | 32 | 44 | |

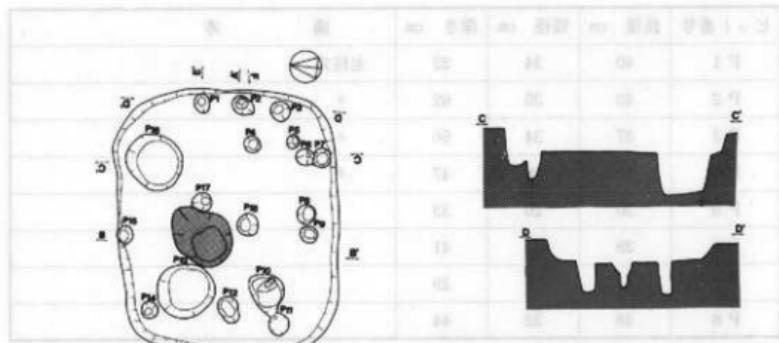
覆土は自然堆積の状態を示し、上層は黒褐色土で下層は褐色土である。遺物は弥生式土器片が出土している。

第13号住居址(図95)

本址はC 3 d₄・C 3 d₅・C 3 e₄・C 3 e₅に確認され、7号住居址の南西に位置する。主軸方向はN-83°-Eで、長径4.6m、短径4.0mほどの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は約30cmを測る。壁溝はない。床はやや硬い。炉址は中央部のやや北寄りに位置し、直径80cmほどの円形の平面形を呈し、40cm位の深さで掘り込んでいる。ピットはP 1～P 18が確認された。

| ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 | ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 |
|-------|------|------|------|----|-------|------|------|------|----|
| P 1 | 34 | 29 | 57 | | P 10 | 77 | 58 | 76 | |
| P 2 | 42 | 32 | 43 | | P 11 | 42 | 36 | 42 | |
| P 3 | 35 | 35 | 54 | | P 12 | 49 | 35 | 38 | |
| P 4 | 30 | 30 | 17 | | P 13 | 102 | 100 | 82 | |
| P 5 | 25 | 22 | 14 | | P 14 | 31 | 30 | 60 | |
| P 6 | 32 | 27 | 49 | | P 15 | 35 | 25 | 30 | |
| P 7 | 36 | 32 | 65 | | P 16 | 105 | 97 | 74 | |
| P 8 | 35 | 33 | 23 | | P 17 | 35 | 35 | 35 | |
| P 9 | 34 | 27 | 20 | | P 18 | 41 | 36 | 20 | |

覆土は自然堆積の状態を示し、ローム粒子を含む黒褐色土が土である。遺物は縄文式土器片が出土している。



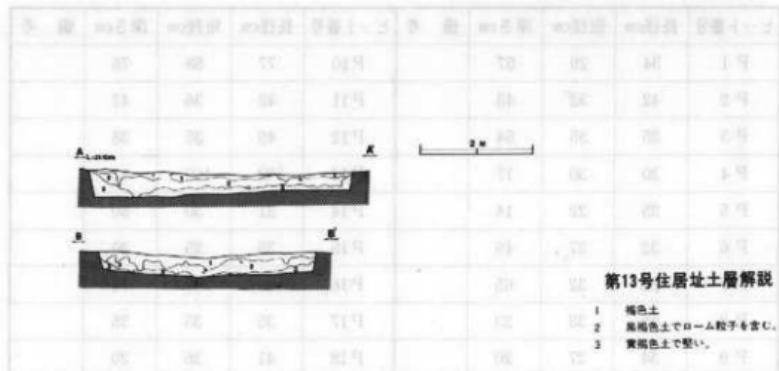
地表以上40cm處に、土器の破片が散在する。下部は褐色の砂質粘土で、上部は褐色の土である。

主な構造物は、柱跡、火葬場跡、土器の破片等である。

柱跡は、直径約1mの円形の構造で、土器の破片が散在する。

火葬場跡は、柱跡の間に位置する、土器の破片が散在する。

土器の破片は、主に陶器の片断である。



第13号住居址土層解説

地表以上40cm處に、土器の破片が散在する。下部は褐色の砂質粘土で、上部は褐色の土である。

図95 第13号住居址実測図

2. 遺物

(1) 住居址出土遺物

第1号住居址内出土遺物 (図96, 1~5)

本址からの出土遺物はそれほどなく、すべて土師式土器である。

1は本址中央部よりやや北西寄りの覆上中から出土した小型の壺形土器ではば完形である。口径12.3cm、器高13.7cm、最大径13.8cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、胴部はほぼ球形をなし、いくぶんあげ底である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部、底部はへラけずり整形である。

器内面は口辺部に横位のへラけずり整形がみられ、胴部はへラなで整形がなされている。

色調は橙色を呈し、胎土中には砂粒を含む。焼成は良好である。

2は北東壁中央部付近の床面から出土した壺形土器で胴部中位以上を欠損している。底径4.5cmを測る。胴部は内凹しながら立ちあがり、底部中央にくぼみがある。

器外面は未調整である。器内面はへラなで整形がみられる。

色調はにぶい褐色を呈し、胎土中にスコリアを含む。焼成は普通である。

3は北西壁中央部付近の床面から壺部と脚部が別に出土した高環形土器ではば完形である。口径16.3cm、器高13.7cm、幅径11.6cmを測る。口縁部は直線的に開き、底部との境に稜をもつ。脚部はいく分内凹気味に開き、裾部は「ハ」の字状に大きく開く。

器外面は口辺部から脚部にかけてけずった後、縱位のへラ磨き整形がみられる。裾部は斜位のへラ磨きがなされ、先端部は横なで整形がみられる。

器内面は脚部全体に4本で一周する磨き痕が何本もみられる。脚部は雑なで整形がみられ、輪積痕が残る。裾部は横なで整形である。

4は中央部よりやや北西壁寄りの覆上中から出土した高環形土器で壺部を欠損している。幅径14.5cmを測る。脚部から裾部にかけてラッパ状に開く。

器外面は脚部から裾部にかけて縱位のへラ磨きがなされ、裾部先端は横なで整形がみられる。

器内面は脚部は未調整で輪積痕が残り、裾部はへラなで整形、先端部は横なで整形がみられる。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は普通である。

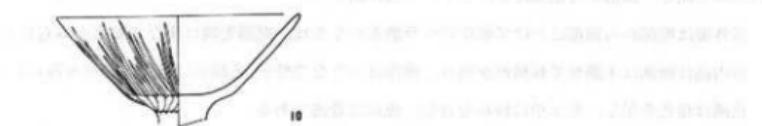
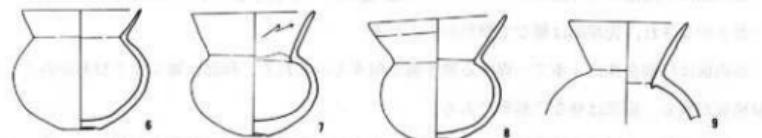
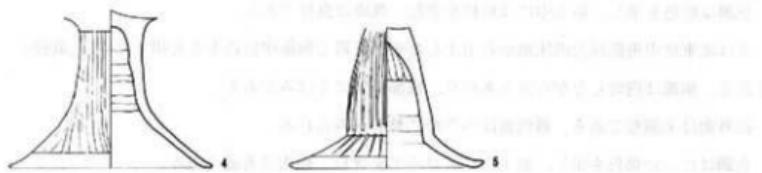
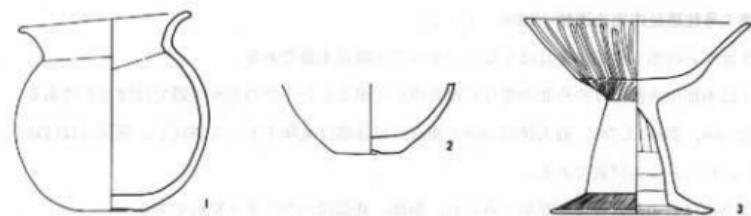
5は北西壁中央部付近の床面から出土した高環形土器で杯部を欠損している。幅径14.0cmを測る。脚部は下位が少し張り、裾部は大きく「ハ」の字状に開く。先端部はいく分あがり気味である。

器外面は脚部、裾部とともに縱位のへラ磨き整形がなされ、先端部は横なで整形がみられる。

器内面は脚部でへラなで整形がなされているが輪積痕が残る。裾部は横なで整形である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

柳葉出土器物



10 cm

圖 96 第 1、3 號住居址出土遺物

第2号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物はほとんどなく、すべて破壊した土師式土器の細片である。

第3号住居址内出土遺物(図96、6~10)

本址からの出土遺物はそれほど多くなく、いずれも土師式土器である。

6は南コーナー付近の床面から出土した壺形土器で完形である。口径8.4cm、器高8.5cmを測る。

口縁部は「く」の字状に外反する。胴部は扁平な球形をなし、いく分あげ底である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はヘラけずりがなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はなで整形である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

7は東コーナー部の覆土内から出土した壺形土器で完形である。口径8.7cm、器高8.7cmを測る。

口縁部は「く」の字状に開き、胴部は扁平な球形をなし、小さいあげ底である。

器外面は口辺部でなでた後に縦位のヘラ磨きがなされ、胴部はヘラけずりである。

器内面は口辺部にヘラ磨きがなされ、胴部はなで整形である。

色調はにほい橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

8は南コーナー付近の床面から出土した壺形土器で完形である。口径9.8cm、器高8.7cmを測る。

口縁部は「く」の字状に大きく開き、胴部はほぼ球形をなし、小さいあげ底である。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、頸部付近はヘラけずりである。胴部は横位のヘラけずりである。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はなで整形である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

9は北東壁中央付近の覆土中から出土した壺形土器で頸部中位以下を欠損している。口径8.4cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、胴部は大きく張る。

器外面、器内面とも1とは同じ整形であり、胴部の上部をくり抜き、口縁部を接合している。

色調はにほい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

10は南コーナー付近の覆土中から出土した高環形土器で脚部を欠損している。口径17.5cmを測る。口縁部は直線的に開き、底部との境に棱をもつ。

器外面は口唇部付近に横なで整形、以下底部まで縦位のヘラ磨きがなされている。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、底部はヘラなで整形である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

第4号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物は比較的多く、いずれも土師式土器である。その他に土製品、石製品が出土している。

土器（図97、1～7・図98、8～9）

1は中央部より北寄りの床面から出土した大型の蓑形土器で胴部を多く欠損している。口径34.1cm、器高36.6cm、底径8.3cm、最大径43.6cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、胴部は大きく張る。胴部中位に最大径がある。胴部下位で急に閉じ、底部は器形の割に小さく上げ底である。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、頸部付近にハケ目整形がなされている。胴部はヘラけずり整形である。

器内面は口辺部はなで整形であり、胴部は摩滅しており不明である。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は普通である。

2は東コーナーの貯蔵穴上から出土した蓑形土器で底部を欠損している。口径14.7cmを測る、口縁部はほぼ垂直に立ちあがり、先端部で丸味をもって外反する。胴部はほぼ球形をなす。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はヘラけずりがなされている。全体に煤が付着する。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はへらなで整形である。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

3は2と同じく東コーナーの貯蔵穴上から出土した蓑形土器で胴部下位と底部を欠損している。口径17.0cm、最大径24.2cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、先端部は更に外反する。胴部はほぼ球形をなす。

器外面は口辺部でなでた後へラ磨きがなされ、頸部にヘラを押しあてた痕がある。胴部にはヘラけずり整形がなされている。胴部全体に煤が付着している。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はへらなで整形がなされている。

色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

4は2・3と同じく貯蔵穴上から出土した蓑形土器で底部を欠損している。口径14.4cm、最大径22.0cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、先端部は更に外反する。胴部は2・3と比べ長削である。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、頸部にヘラを押しあてた痕がある。胴部はヘラけずりの後磨いている。全体に煤が付着している。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はへらなでがなされている。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

5は北コーナーの乱土中から出土した蓑形土器で口縁部を欠損している。底径3.0cm、最大径9.2cmを測る。胴部は扁平な球形をなし、いく分あげ底である。

器外面はけずった後へラ磨き整形がなされている。器内面は摩滅しており不明である。

色調は黒色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

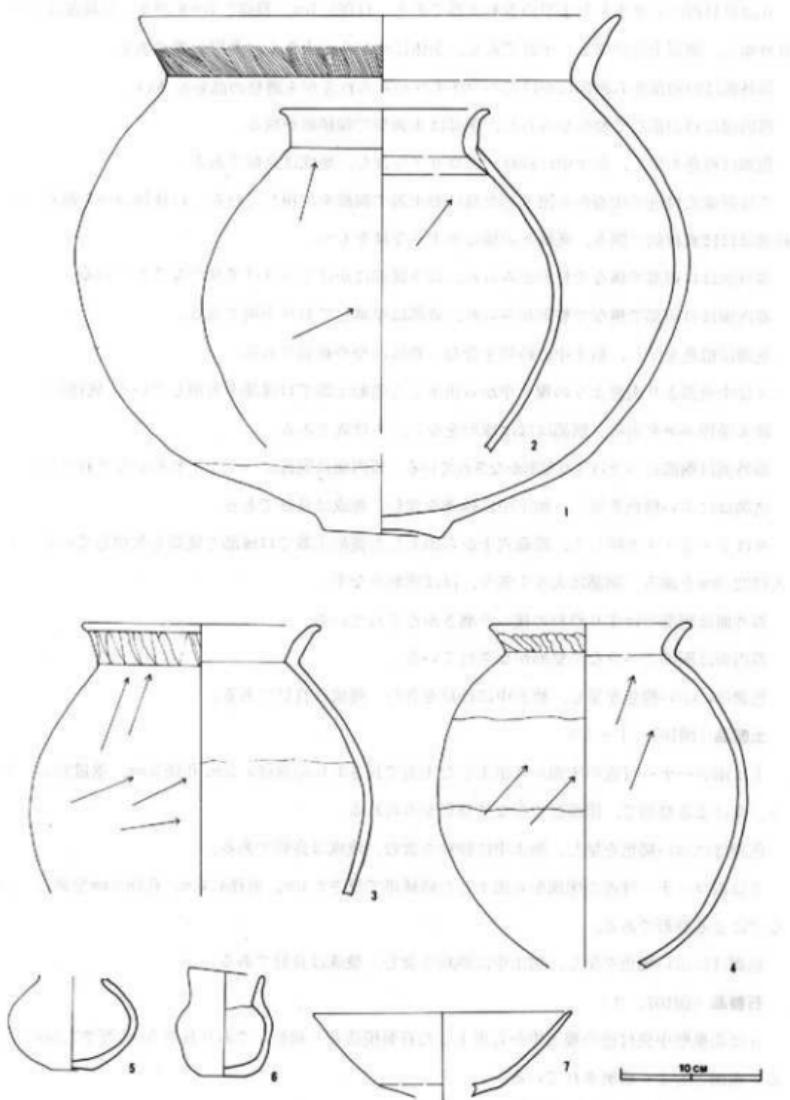


图97 第4号住居址出土遗物

6はP11内から出土した小型の壺形土器である。口径5.4cm、器高7.4cmを測る。口縁部はいく分外傾し、胴部上位が張る。平底である。全体にゆがみが大きく、手捏ね風である。

器外面は口辺部から胴部にかけてへラけずりがみられるが未調整の部分が多い。

器内面は口辺部など整形がみられ、胴部は未調整で輪横痕が残る。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

7は貯藏穴付近の床面から出土した高杯形土器で脚部を欠損している。口径18.4cmを測る。口縁部はほぼ直線的に開き、底部との境にかすかな棱をもつ。

器外面は口辺部で横など整形がみられ、以下底部にかけてへラけずりがなされている。

器内面は口辺部で横など整形がみられ、底部は摩滅しており不明である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成はやや軟弱である。

8は中央部より南東よりの覆土中から出土した壺形土器で口縁部を欠損している。底径5.3cm、最大径19.8cmを測る。胴部はほぼ球形をなし、あげ度である。

器外面は胴部にへラけずり整形がなされている。器内面は胴部にへラなど整形がなされている。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂礫を含む。焼成は良好である。

9は2・3・4と同じく、貯藏穴上から出土した壺形土器で口縁部と底部を欠損している。最大径22.8cmを測る。胴部は大きく張り、ほぼ球形をなす。

器外面は胴部でへラけずり整形の後へラ磨きがなされている。

器内面は胴部でへラなど整形がなされている。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

土製品（図107、1・2）

1は南コーナー付近の床面から出土した土玉で長さ3.1cm、直徑3.2cm、孔径5mm、重量32gである。指による整形で、指頭痕や指など整形がみられる。

色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

2は西コーナー付近の床面から出土した紡錘車で厚さ2.1cm、直徑4.4cm、孔径3mmを測る。指などによる整形である。

色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

石製品（図107、3）

3は北東壁中央付近の覆土中から出土した石製模造品（劍形）であり長さ5cm、厚さ7.5cmを測る。両面ともよく研磨されている。

第5号住居址内出土遺物（図98、10～16）

本址から出土遺物は少なく、いずれも土師式土器である。

10は北コーナー部の覆土中から出土した高杯形土器で脚部を欠損している。口径17.4cmを測る。

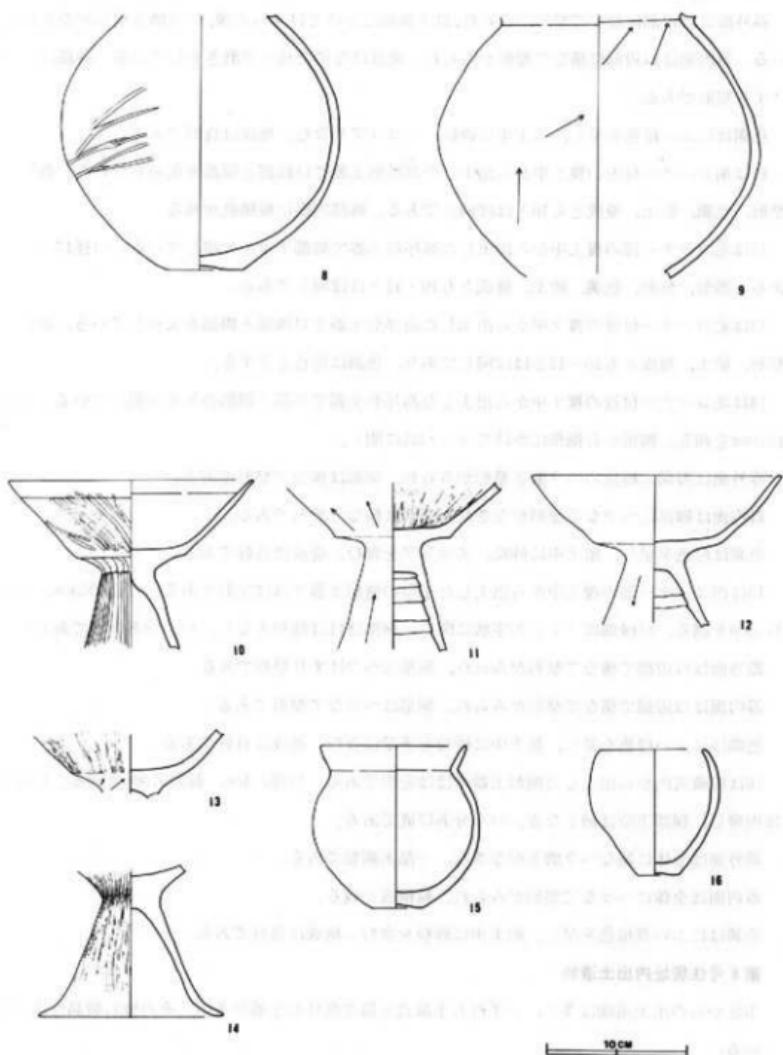


图98 第4·5号住居址出土遗物

口縁部は直線的に開き、底部との境に稜をもつ。脚部は直線的に開く。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、以下脚部にかけてけずった後、ヘラ磨き整形がなされている。器内面は口辺部に横なで整形がみられ、底部はなでた後ヘラ磨きをしている。脚部はヘラけずり整形である。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

11は南コーナー付近の覆土中から出土した高環形土器で口縁部と脚部を欠損している。器形、整形、色調、胎土、焼成とも10とほぼ同じである。脚部内面に輪積痕が残る。

12は北コーナー一部の覆土中から出土した高環形土器で脚部下半を欠損している。口径17.8cmを測る。器形、整形、色調、胎土、焼成とも10・11とはほぼ同じである。

13は北コーナー付近の覆土中から出土した高環形土器で口縁部と脚部を欠損している。器形、整形、胎土、焼成とも10~12とほぼ同じであり、色調は橙色を呈する。

14は北コーナー付近の覆土中から出土した高環形土器で脚部と脚部の1/2を欠損している。器高13.0cmを測る。脚部から脚部にかけてラッパ状に開く。

器外面は脚部に縦位のヘラ磨き整形がみられ、脚部は横なで整形である。

器内面は脚部にヘラなで整形がなされ、脚部は横なで整形である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

15は西コーナー部の覆土中から出土した小型の袋形土器ではほぼ完形である。口径10.3cm、器高11.5cmを測る。口縁部は「く」の字状に開く。脚部はほぼ球形をなし、いく分あげ底である。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、脚部はヘラけずり整形である。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、脚部はヘラなで整形である。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を多量に含む。焼成は良好である。

16は貯蔵穴内から出土した碗形土器ではほぼ完形である。口径7.4cm、器高9.0cmを測る。口縁部は内凹し、脚部下位は細くなる。いく分あげ底である。

器外面は全体に縦なヘラ磨きがなされ、一部未調整である。

器内面は全体にヘラなで整形がみられ、輪積痕が残る。

色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

第6号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物は多く、いずれも上師式土器で高環形土器が多い。その他石製品が出土している。

土器(図99、1~14・図100、15~20)

1は北西壁中央付近の覆土中から出土した壺形土器で底部を欠損している。口径16.7cm、最大径24.5cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、脚部はほぼ球形をなす。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はヘラけずり整形がなされている。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はヘラなで整形である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

2は中央部より北西壁寄りの床面から出土した壺形土器で胴部下位以下を欠損している。口径14.6cm、最大径23.6cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、胴部中位は大きく張る。

器外面は口辺部で横なで整形がなされ、胴部はけずった後ヘラ磨きがなされている。

器内面は口辺部で横なで整形、胴部はヘラけずり整形がなされているが輪積痕が残る。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

3は南西壁中央付近の床面から出土した壺形土器で完形である。口径15.3cm、器高22.0cm、底径5.5cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、胴部はほぼ球形をなす。あげ底である。

整形、胎上、焼成とも1とはほぼ同じであり、色調はにぶい橙色を呈す。

4は南コーナー付近の覆土中から出土した壺形土器で口縁部と胴部を欠損している。底径3.1cm、最大径14.2cmを測る。胴部はほぼ球形をなし、あげ底である。

器外面は胴部にヘラ磨きがなされているが下位は摩滅して不明である。

器内面は胴部にヘラなで整形がみられる。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂礫を含む。焼成は良好である。

5は南西壁中央付近の床面から出土した小型の壺形土器ではほぼ完形である。口径11.0cm、器高9.8cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、胴部はほぼ球形をなす。いく分あげ底である。

器外面は口辺部で横なで整形、胴部はヘラけずり整形がみられる。

器内面は口辺部で横なで整形、胴部はなで整形がなされている。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

6は中央部より南東壁寄りの覆土中から出土した小型の壺形土器ではほぼ完形である。口径12.7cm、器高13.0cmを測る。器形は5とはほぼ同じで、底部中央に直径1cmの焼成前の穿孔がみられる。

器外面、器内面とも5とはほぼ同じ整形がみられるが、頭部外面にヘラを押しあてた痕があり、口縁内面に輪積痕が残る。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

7は中央より南西壁寄りの床面から出土した椀形土器ではほぼ完形である。口径10.3cm、器高8.8cmを測る。口縁部は内彎し、いく分あげ底である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はヘラけずりがなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はヘラなで整形である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂礫、スコリアを含む。焼成は良好である。

8は中央よりやや南西寄りの床面から出土した椀形土器ではほぼ完形である。口径10.5cm、器高

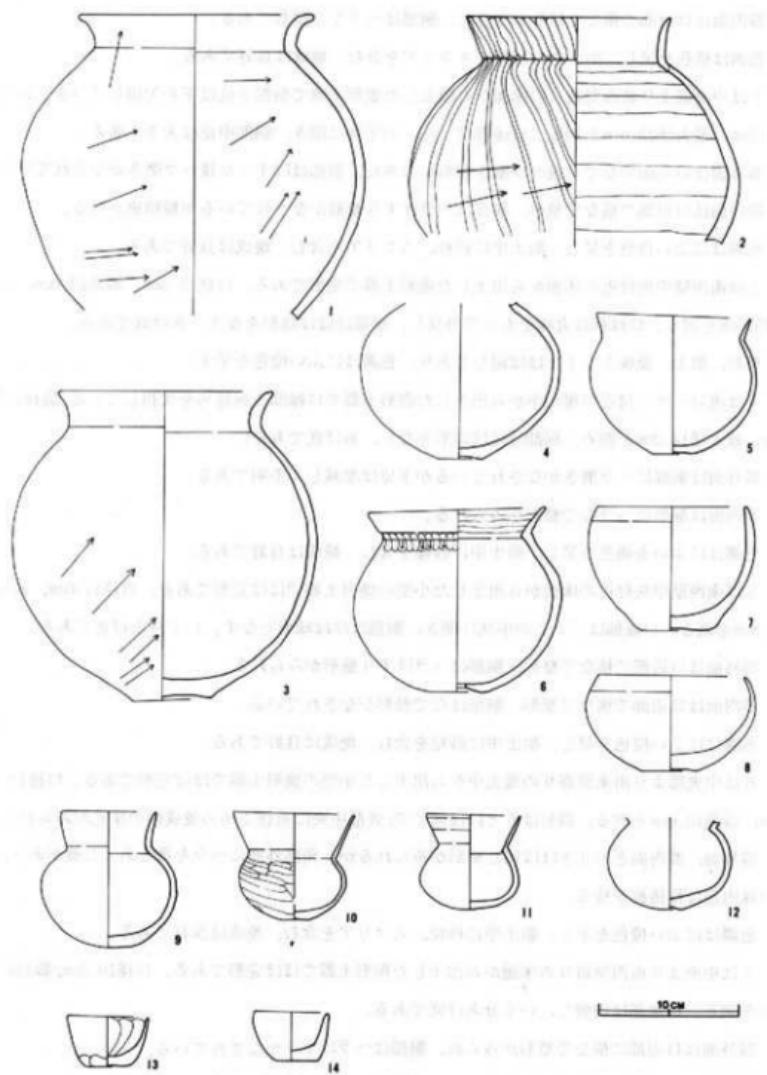


图99 第6号住居址出土遗物(1) (引自《新石器时代遗址》)

6.8cmを測る。口縁部は内凹し、いく分あげ底である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ胴部はヘラ磨き整形である。

器内面は口辺、脚部ともなでた後磨いている。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

9は中央部より南東壁寄りの床面から出土した壺形土器で完形である。口径6.7cm、器高9.7cmを測る。口縁部は「く」の字に開き、胴部はやや扁平な球状をなす。丸底である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はヘラけずり整形がなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はなで整形である。

色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

以下10・11・12とも壺形土器で器形、整形、胎土、色調、焼成ともほぼ同じである。

10は南コーナー付近の覆土中から出土し、口径8.7cm、器高7.6cmを測る。

11は中央部よりやや北寄りに出土し、口径6.7cm、器高6.7cmを測る。口辺内面に丹彩がなされている。

12は北コーナーの覆土中から出土し、口縁部を欠損し、小さなあげ底である。

13は南コーナーの覆土中から出土した手捏ね上器で口径5.9cm、器高3.6cmを測る。コップ状を呈し、いく分あげ底である。

器外面はヘラけずり整形がみられ。器内面は指頭圧痕が残る。

色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

14は13と同地点から出土した手捏ね上器で口径5.3cm、器高3.5cmを測る。器形、整形、胎土、焼成とも13とはほぼ同じで色調はにぶい棕色を呈する。

15は南西壁中央付近の床面から出土した高環形土器で完形である。口径17.6cm、器高15.0cm、裾径12.6cmを測る。口縁部は直線的に大きく開き、底部との境に棱を有す。脚部は張り、裾部は「ハ」の字状に大きく開く。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、以下裾部までけずった後に縦位あるいは斜位のヘラ磨きがなされている。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、底部はヘラ磨き整形。脚部、杯部はなで整形がなされている。

色調は棕色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

16は北西壁寄りの床面から出土した高環形土器で杯部を殆ど欠損している。口径17.8cm、器高15.4cm、裾径13.7cmを測る。器形、整形、胎土、焼成は15とはほぼ同じである。色調は明赤褐色を呈す。

17は南西壁中央付近の床面から出土した高環形土器ではほぼ完形である。口径17.0cm、器高16.7

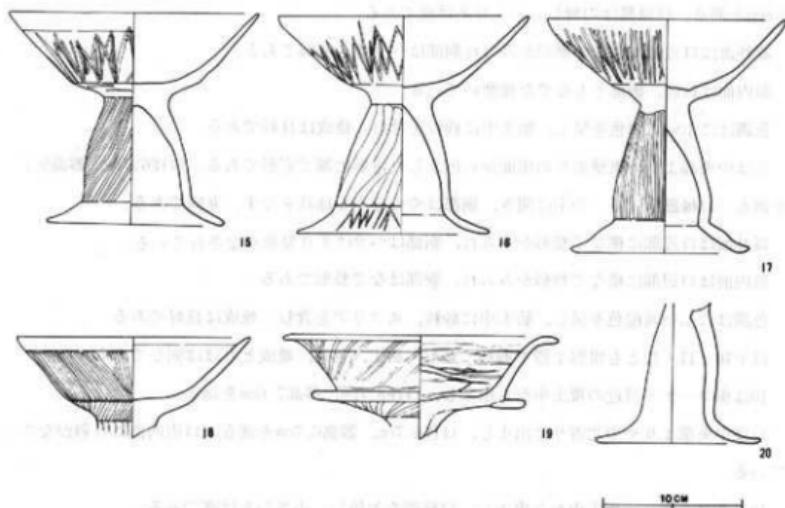


図100 第6号住居址出土遺物(2)

cm、裾径12.8cmを測る。器形は15・16とはほぼ同じであるが、脚部はいく分15・16より細く、裾部先端がいく分もち上がり気味である。整形、色調、胎土、焼成とも15とほぼ同じである。

18は南西壁中央付近の床面から出土した高環形土器で脚部を欠損する。口径16.5cmを測る。器形、整形、胎土、焼成とも15と同じである。

19は北西壁中央部付近の床面上から出土した高環形土器で脚部を欠損する。口径19.7cmを測る。口縁部は直線的に開き、先端部は丸味をもって大きく外反する。底部との境に水平にのびる舌状の凸帯を有す。底部は大きく、底部外面中央部に接合のため脚部にはめ込んだ突出部を残す。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、以下へラ磨きがなされている。底部は脚部とのつけ根から放射状にていねいなへラ磨き整形がなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、底部はけずった後にへラ磨き整形を行なっている。

色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

20は南コーナーの覆土中から出土した高環形土器で坏部を欠損している。裾径11.8cmを測る。脚部はいく分傾き、比較的細い。裾部はラッパ状に外反する。

器外面は脚部でへラけずり整形がみられ、裾部は横なで整形である。

器内面は脚部、裾部ともなで整形がみられる。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

石製品（図107、4）

4は東コーナー付近の覆土中から出土した小型の磨製石斧で最大長4.4cm、最大厚0.9cmを測る。楔形を呈し、両側面を面取りしている。器面の整形は全体を美麗に研磨している。

第7号住居址内出土遺物（図101、1～7）

本址からの出土遺物は少なく、いずれも土師式土器であるが、すべて破壊されており覆土中から出土している。

1は北東壁中央部付近の覆土中から出土した壺形土器で胴部を欠損している。口径13.7cm、最大径19.8cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はほぼ球形をなす。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はヘラけずり整形がなされ煤が付着している。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はヘラなで整形である。

色調はにぶい橙色を呈し、砂粒を多量に含む。焼成は良好である。

2・3も1と同じ地点から出土した壺形土器で、器形、整形ともほば同じで胴部は煤の付着もみられる。

2は口縁部と胴部を欠損し、口径17.5cmを測る。色調は浅黄色を呈す。

3は胴部下位以下を欠損し、口径14.0cm、最大径19.0cmを測る。腹部にヘラあて痕や指頭痕が残り、色調はにぶい橙色を呈す。

4は中央部より南コーナー寄りの覆土中から出土した壺形土器で口縁部を欠損する。最大径9.0cmを測る。胴部は扁平な球形をなし、あげ底である。

器外面は胴部にヘラけずり整形がみられる。器内面は胴部になで整形がみられる。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂礫を含む。焼成は良好である。

5は中央部より東コーナー寄りの覆土中から出土した高環形土器で环部を欠損する。口径19.0cmを測る。口縁部はいく分内側気味に開き、底部との境に棱を有す。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、以下底部にかけて未調整である。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、底部はなで整形がなされているが一部摩滅している。色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成はやや軟弱である。

6は南コーナーの覆土中から出土した高環形土器で环部を欠損する。口径13.8cmを測る。胴部から環部にかけてラッパ状に開き、先端部がいく分立ち上がる。

器外面は環部に縱位のヘラ磨きがみられ、環部は横なで整形である。

器内面は環部に未調整で輪積痕が顕著に残る。環部は横なで整形である。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

7は北東壁中央部付近の覆土中から出土した高環形土器で环部を欠損する。口径16.7cmを測る。

器形、輪形、胎土とも6とはば同じである。色調は橙色を呈し、焼成は普通である。

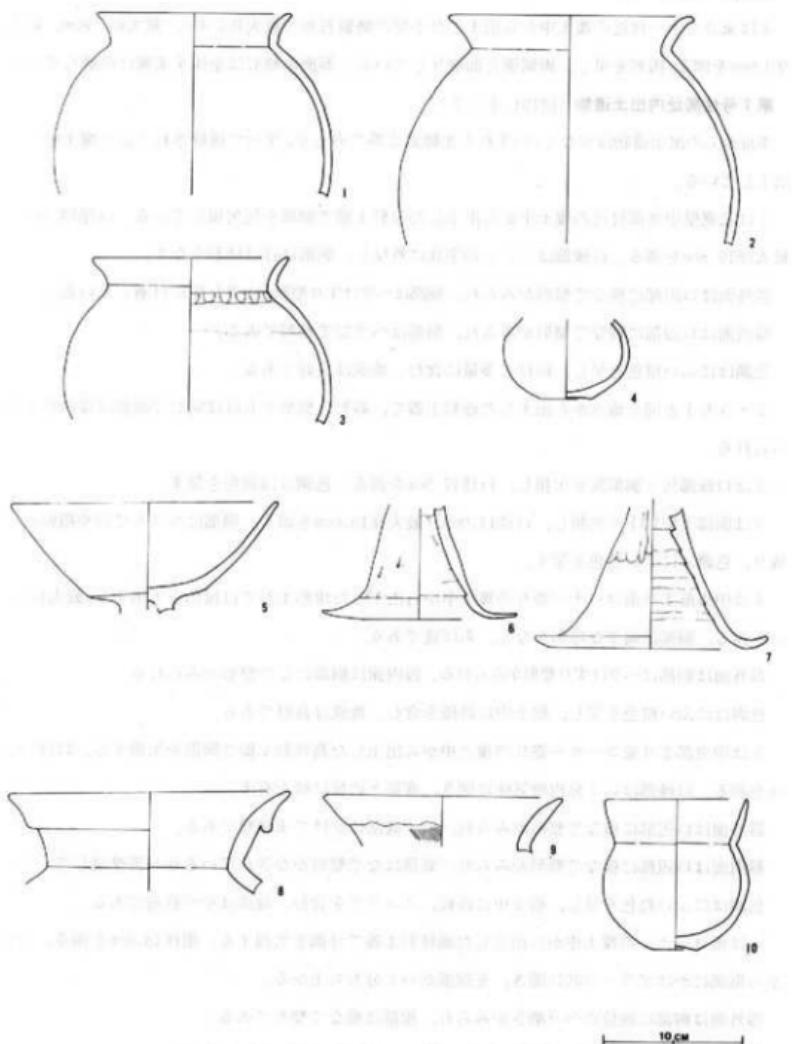


图101 第7·8号住居址出土遗物

第8号住居址内出土遺物(図101, 8~10)

本址からの出土遺物はほとんどなく、いずれも土師式上器である。

8は中央部よりやや西寄りの床面から出土した壺形土器で口縁部のみ遺存している。口径20.0cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、折り返しの複合口縁をなす。

器外面は複合部に横なで整形がみられ、頸部付近はへラけずりがなされている。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、頸部付近はなでた後へラ磨きがなされている。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

9は西壁中央部付近の覆土中から出土した壺形土器で口縁部のみ遺存している。口径17.1cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、折り返し痕が残る。

器外面は口辺部に横なでがみられ、頸部付近はけずりであるか部分的にハケ目がみられる。

器内面は口辺部に横なで、頸部付近はへラけずりである。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

10は南西コーナーの覆土中から出土した小型の壺形土器ではば完形である。口径10.1cm、器高10.2cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、胴部はほぼ球形をなす。あげ底である。

器外面は口辺部に横なでがみられ、頸部付近に一部ハケ目がみられる。胴部はへラけずりである。

器内面は口辺部で横なでがみられ、胴部はへラなでである。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

第9号住居址内出土遺物(図102, 1~7・図103, 8~19・図104, 20~22・図107, 5)

本址からの出土遺物は非常に多く、いずれも土師式上器で特に高環形土器が多い。完形遺物が多く、大部分北西壁中央部付近の床面または床面直上から出土している。

1は北西壁中央部付近の床面直上から出土した大型の壺形土器ではば完形である。口径18.5cm、器高29.2cm、底部8.0cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、先端部は更に外反する。胴部はやや棟長の球形をなし、あげ底である。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部は縦位のへラけずり整形がなされている。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部もへラけずり整形がなされている。

色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中に砂砾、スコリアを含む。焼成は良好である。

2・3は1と同じ地点から出土した壺形土器でどちらもほぼ完形である。器形、整形、焼成とも1とはば同じである。

2は口径15.8cm、器高26.0cm、底径6.2cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。

3は口径16.2cm、器高25.5cm、底径7.7cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土中に砂砾、スコリアを含む。

4は北西壁下の西コーナー寄りの床面直上から、5は中央部より東寄りの床面から出土した壺

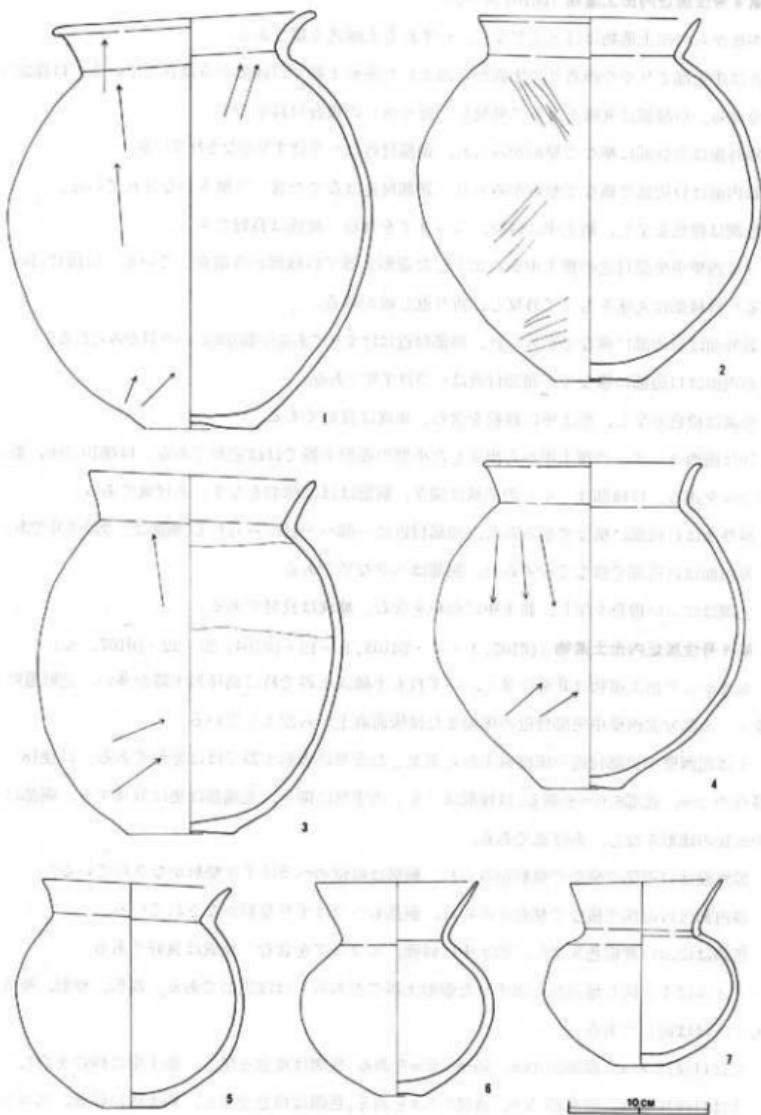


图102 第9号住居址出土遗物(1)

形土器でどちらもほぼ完形である。

器形、整形、焼成とも1とほぼ同じである。4は口径15.5cm、器高23.2cm、底径6.0cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。5は口径13.5cm、器高16.0cm、底径4.0cmを測る。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。

6は北西壁中央部付近の床面直上から出土した堆形土器で口縁部の火を欠損している。口径11.5cm、器高15.2cm、底径3.0cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、胴部中位は大きく張る。あげ底である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、頸部から底部にかけへラけずりがなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はヘラなで整形である。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

7は6と同地点から出土した堆形土器でほぼ完形である。口径10.9cm、器高13.0cmを測る。器形、焼成とも6とほぼ同じである。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、頸部から胴部中位にかけてへラ磨きがなされている。

器内面は口辺部でヘラ磨き整形がみられ、胴部はヘラなで整形である。

色調は褐色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。

8は北東壁中央部付近の覆土上中から出土し口縁部を欠損しているが、6・7から考えて堆形土器と思われる。器形、整形、胎土、焼成とも6とほぼ同じである。色調はにぶい橙色を呈する。

9は中央部よりやや東寄りの床面直上から出土した堆形土器でほぼ完形である。口径9.2cm、器高8.1cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、胴部は扁平な球形をなす。

整形は6・8とほぼ同じであるが、器外面、器内面とも全体に丹彩がなされている。

色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

10は南東壁の東コーナー寄り付近の床面から出土した楕形土器でほぼ完形である。口径11.6cm、器高6.2cmを測る。口縁部は内側し、あげ底である。

器外面、器内面とも口辺部に横なで整形がみられ、胴部はヘラ磨きがなされている。

色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

11は東コーナー付近の床面から出土した楕形土器でほぼ完形である。口径12.2cm、器高6.9cmを測る。器形、胎土、色調、焼成とも10とはほぼ同じである。

器外面は口辺部に横なで整形、胴部はヘラけずり整形がみられる。

器内面は口辺部に横なで整形、胴部はなで整形である。

12~22はいずれも高環形土器で、12・14・15・17・18・20~22は北西壁中央部付近の床面直上からまとまって出土し、13は南西壁の西コーナー寄り付近、16・19は北東壁中央部付近のそれぞれ床面直上から出土している。12~17と20~22はほぼ完形で、18は脚部、19は脚部を欠損して

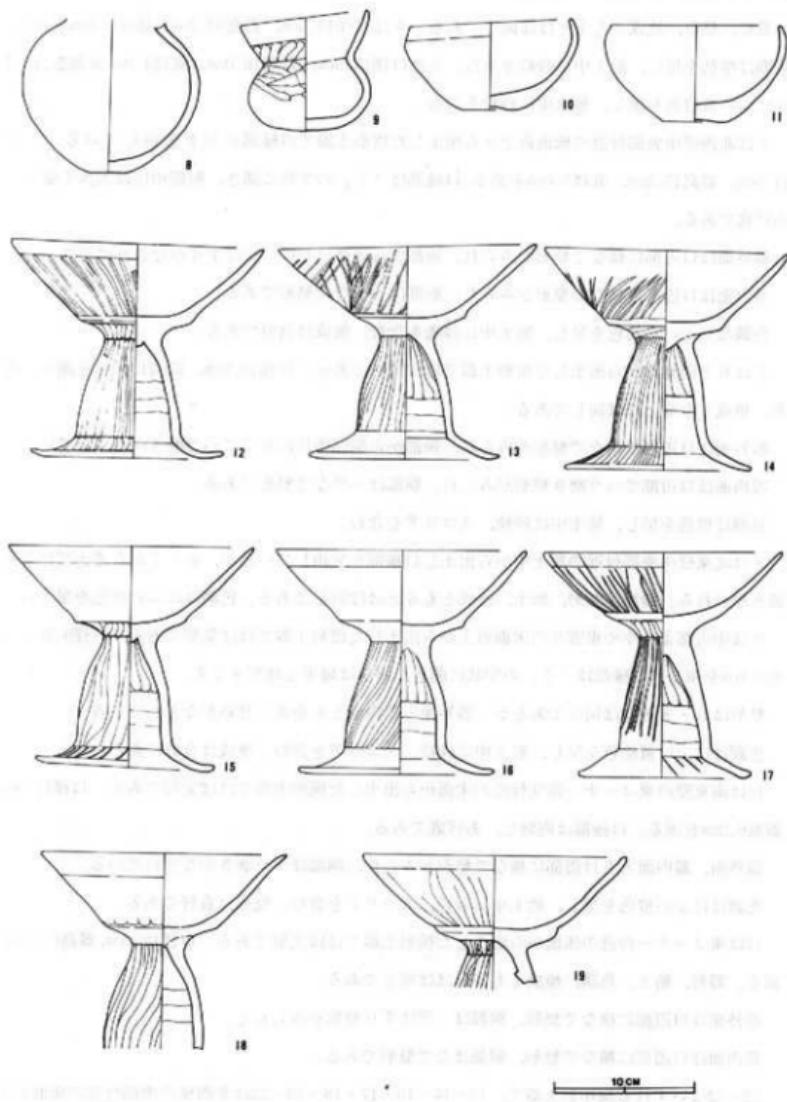


图103 第9号住居址出土遗物(2)

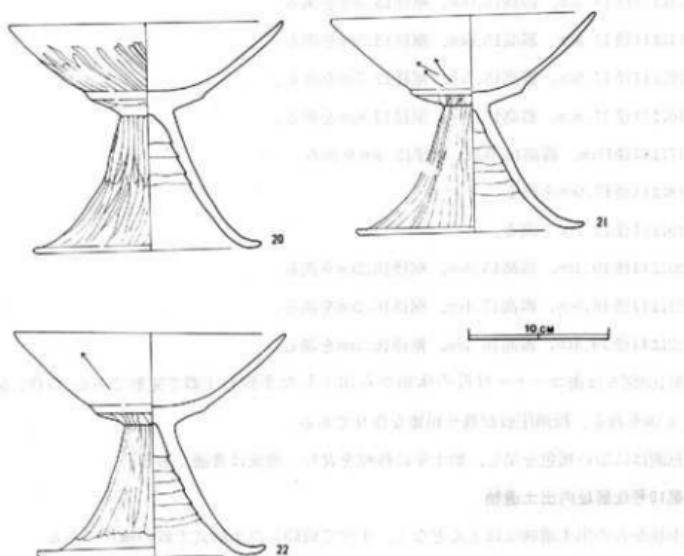


図104 第9号住居址出土遺物(3)

器形はいずれも口縁部が直線的に大きく開き、底部付近でわずかにくびれ、底部との境に稜を有す。12~18は脚部が大きく張り、裾部は「ハ」の字状に大きく開き、先端部はいく分もち上がる。20~22は脚部から裾部にかけて大きくラッパ状に開き先端部はわずかに立ち上がる。形状、色調、胎土、焼成ともほとんど差がない。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、以下裾部までけずった後にヘラ磨き整形がなされ、接付近で横位、口縁部で縦位、斜位、底部で縦位、脚部で縦位、斜位(16と18)、裾部で縦位、放射状(15)にヘラ磨きされている。裾部先端は横なで整形がみられる。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、底部はけずった後になで整形あるいはヘラ磨き整形がなされている。底部中央に接合のため脚部にはめ込んだ突出部が残る(12~18)。脚部には輪積痕が顕著に残っている。裾部はなで整形である。

色調は橙あるいはにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

- 12は口径18cm、器高15.2cm、幅径13.7cmを測る。
13は口径18.3cm、器高15.0cm、幅径13.5cmを測る。
14は口径17.3cm、器高15.6cm、幅径13.3cmを測る。
15は口径17.5cm、器高15.7cm、幅径12.7cmを測る。
16は口径17.8cm、器高15.9cm、幅径13.8cmを測る。
17は口径17cm、器高16.0cm、幅径12.3cmを測る。
18は口径17.6cmを測る。
19は口径18.7cmを測る。

- 20は口径19.4cm、器高15.9cm、幅径16.2cmを測る。
21は口径18.9cm、器高15.4cm、幅径16.2cmを測る。
22は口径19.4cm、器高16.1cm、幅径16.1cmを測る。

第103図5は南コ--ナ--付近の床面から出土した手捏ね土器で完形である。口径2.5cm、器高2.8cmを測る。指頭圧痕が残り粗雑な作りである。

色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は普通である。

第10号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物はほとんどなく、すべて破片した土師式土器の縁片である。

第11号住居址内出土遺物(図105、1~25)

本址からの出土遺物は少なく、弥生式土器が主体をなす。

1は複合口縁で無文である。2~5は頸部片で2は半截竹管状工具によって施文されている。3~5はクシ描文で4は鉛垂状文、4は波状文である。6~8は壺形上器の口縁部片かと思われる複合口縁である。6・7は複合部に縄文を施文し、頸部に3本歯のクシ描文で鉛垂状文を配している。9は3本歯のクシ描文で無文と縄文帯を区画している。11~25はいずれも縄文が施文された胴部片である。11はL R R, 12はR Lの単節縄文であり、13~25はいずれも附加条縄文である。ほとんどが焼成は良好で、胎土中には砂粒を含み、色調はにぶい橙色やにぶい黄橙色を呈する。

第12号住居址内出土遺物(図105、26~34)

本址からの出土遺物はほとんどなく、わずかに弥生式土器が出土している。

26は半截竹管文が施文され、27は3本歯によるクシ描文とその下部に縄文がみられる。28~33はいずれも縄文が施された胴部片である。28・29はR Lの単節縄文で、30~33は附加条縄文である。34は摩滅しており縄文がはっきりしない。焼成はそれほど良くなく、胎土中には砂粒を多く含み、色調はにぶい褐色や褐灰色を呈するものが多い。

第13号住居址内出土遺物(図106、1~25)

本址からの出土遺物は少なく、すべて縄文式土器で後期初頭の土器群を中心としている。ほと

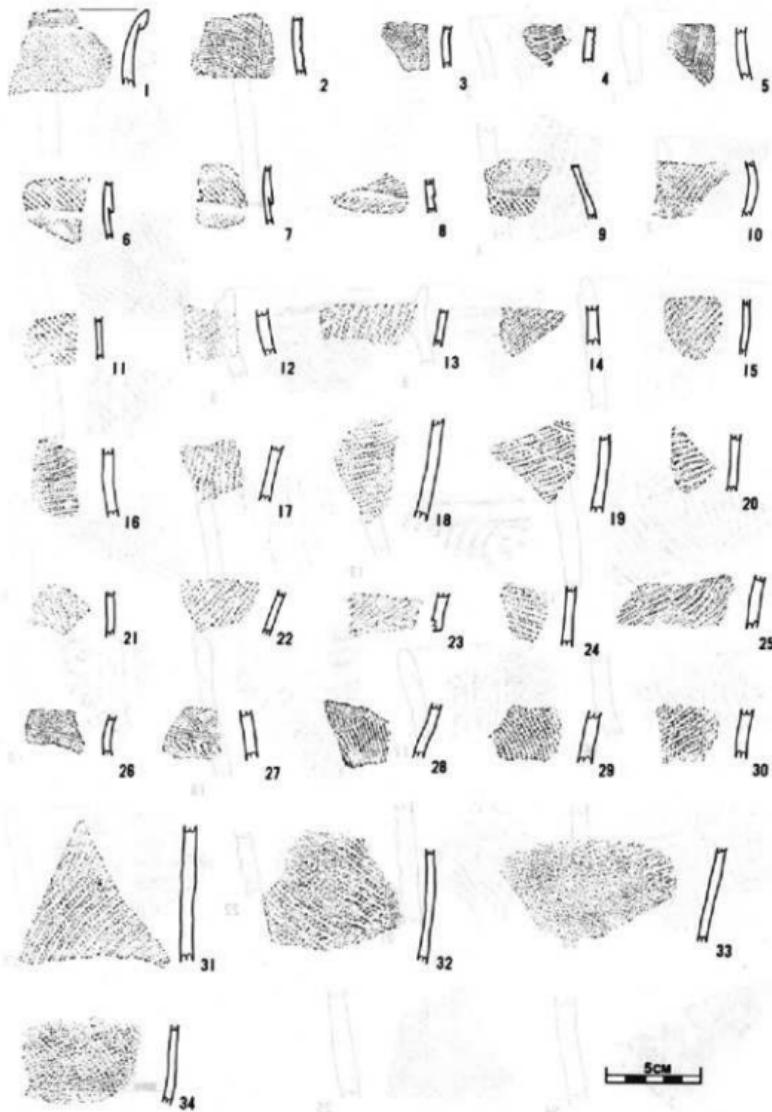


图105 第11·12号住居址出土遗物

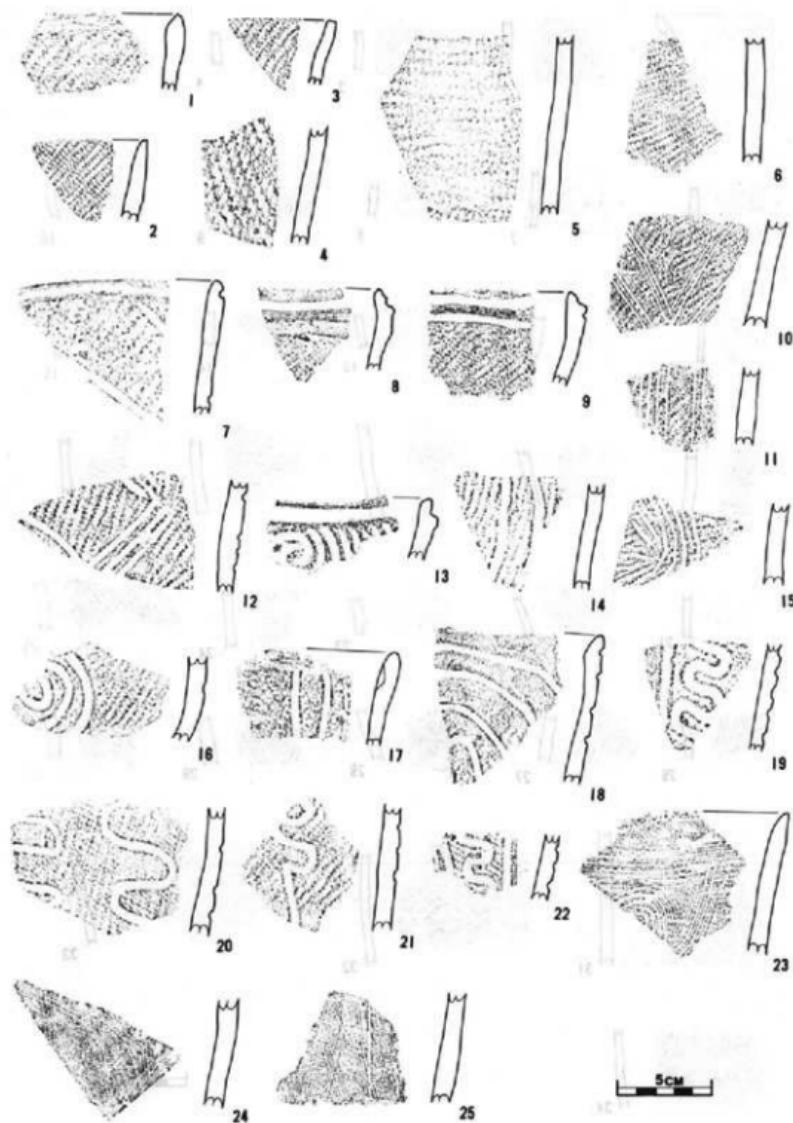


图106 第13号住居址出土遗物

などが深鉢形土器である。

1類 (図106, 1~6)

縄文を唯一の文様とするものを本類とした。1~3はL_R^Rの口縁部片、4はR_L^L、5・6はL_R^Rの胴部片である。いずれも焼成は良好で、胎土中には砂粒を含む。色調はにぶい橙色を呈するものが多い。

2類 (図106, 7~22)

縄文を地文とし、沈線により文様構成するものを本類とした。いずれも焼成は良好であり、胎土中には砂粒、スコリア等を含む。色調はにぶい橙色を呈するものが多い。

a. (7~12)

直線的な沈線により文様構成するもので、7~9は口縁部に沿って先の丸い棒状工具による太い沈線を横走させている。10・11は半截竹管による文様である。

b. (13~22)

曲線的な沈線により文様構成するもので、いずれも比較的太い沈線が施文されている。13・16は溝巻文、19・22は沈線を蛇行させている。

3類 (図106, 23~25)

無文地にクシ彫文が施文されているものを本類とした。2・3は口縁に沿ってクシ彫文を横位に配し、その下部に曲線的な文様を施文している。いずれも焼成は良好で、胎土中には砂粒を含み、色調はにぶい橙色を呈する。

(2) グリット出土遺物

各グリッドから出土した遺物はいずれも縄文式土器であり、後期初頭の土器群を中心としている。

1類 (図108, 1~22・図107, 6)

縄文を唯一の文様とするものを本類とした。

図108の1~6はいずれもR_L^Lの口縁部片、7~13はT_R^Rの口縁部片である。14・15・17はL_R^R、16はR_L^Lの胴部片である。18・19・21・22は附加条的な縄文がみられ、18・19・20は羽状縄文である。色調はにぶい橙色やにぶい褐色を呈するものが多く、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

図107の6はC 3 f: のII層から出土した鉢形土器ではほぼ完形である。口径17.5cm、器高11.1cm、底径7.0cmを測る。口縁部は大きく開き、胴部にいく分くびれがある。半底である。

器外面は底部付近を除き全体に縄文L_R^Rが施文され、器内面は横位のけずりがみられる。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂礫を含む。焼成は普通である。

2類 (図109, 図110, 図111)

縄文を地文とし、沈線で文様構成するものを本類とした。

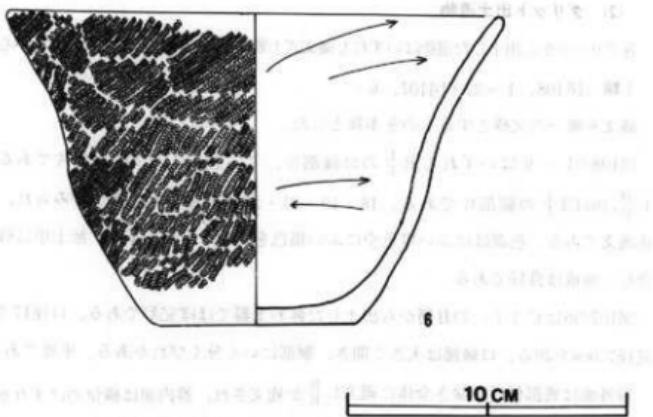
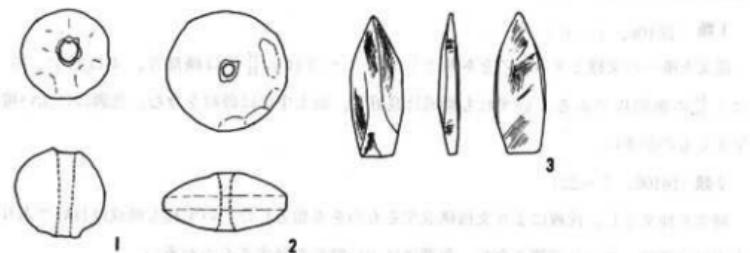


図107 第4・6・9号住居址及びグリット出土遺物(1)

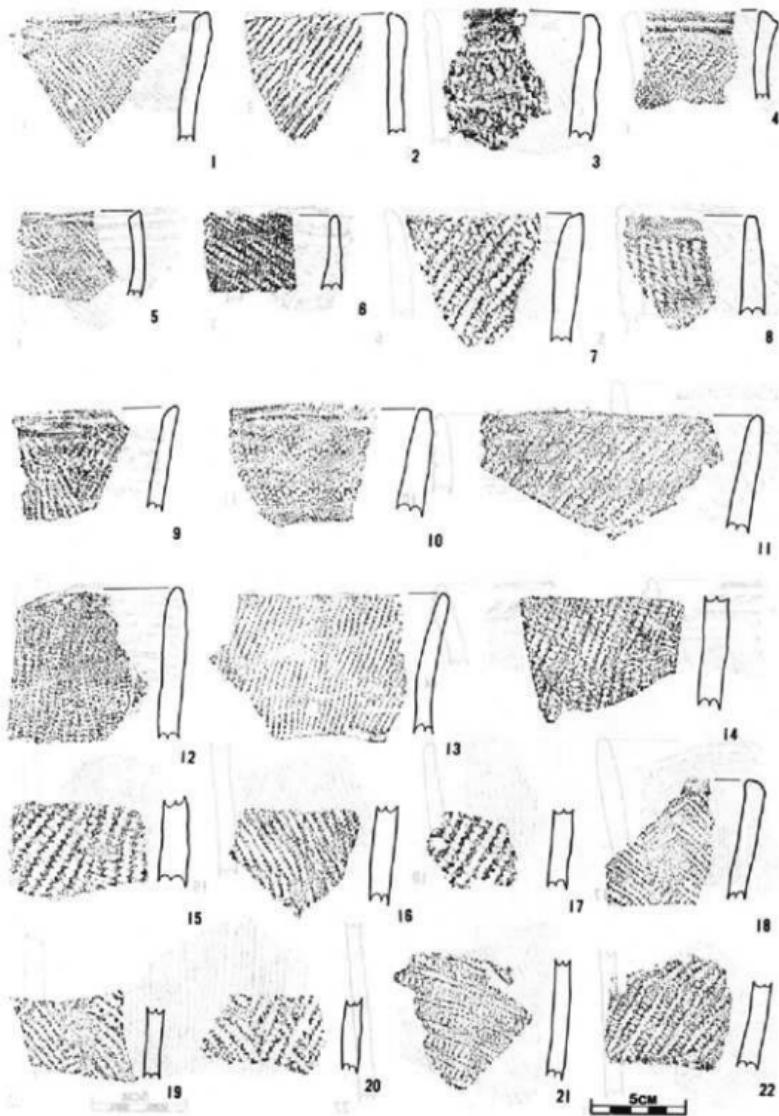


図108 グリット出土遺物(2)

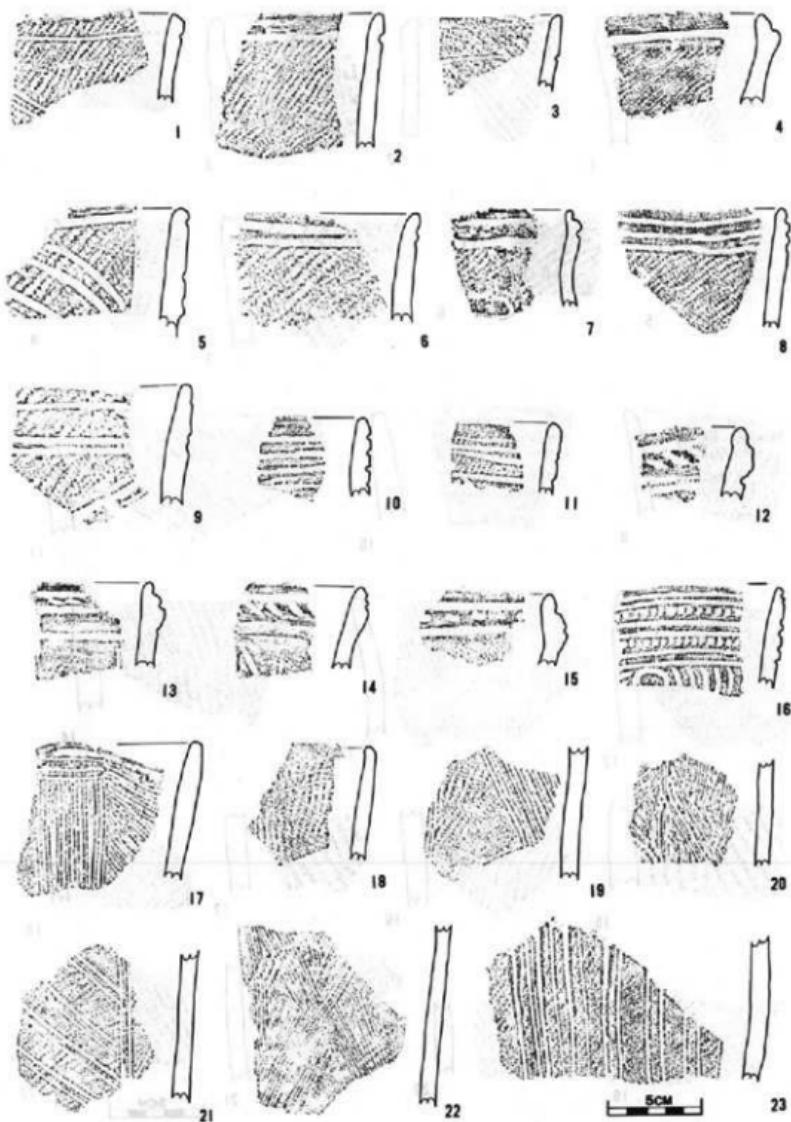


図109 グリッド出土遺物(3)

a. (図109, 1~11)

口縁部に1~数本の沈線を横走させるもので、1・3・9は縄文地の上に沈線を配し、2・4~8・10・11は沈線の上部に無文帶を残している。いずれも色調はにふい橙色、褐灰色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

b. (図109, 12~16)

口縁部に横走させる沈線間に列点を配するもので、16は6本の沈線の2本おきに2列の列点を配している。ほとんどが橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。

c. (図109, 17~23)

半截竹管状工具による直線的な文様構成をするものである。ほとんどが褐灰色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

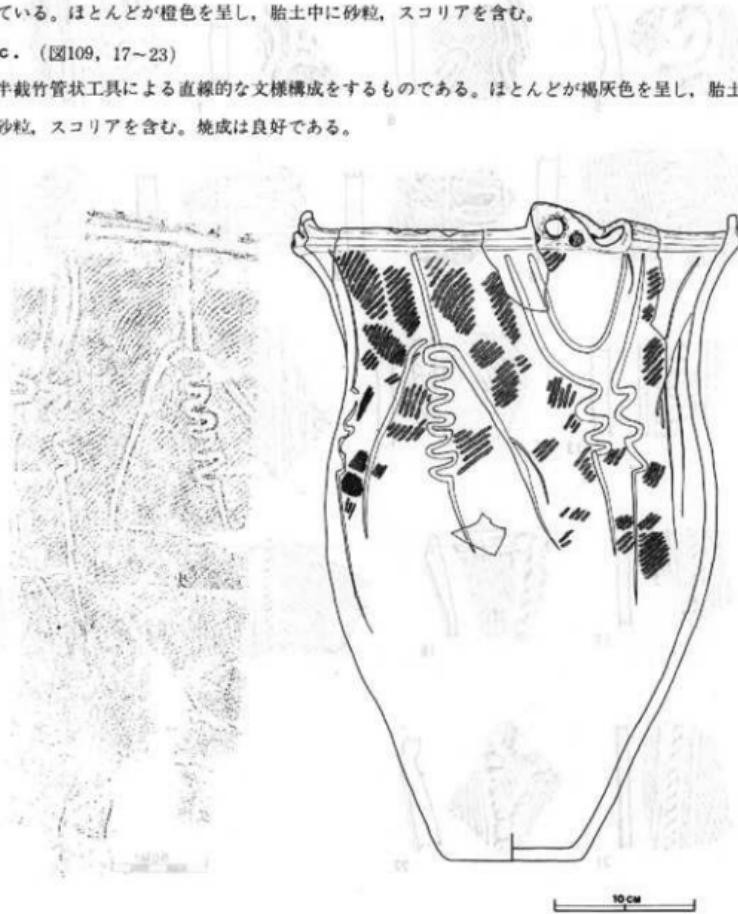


図110 グリット出土遺物(4)

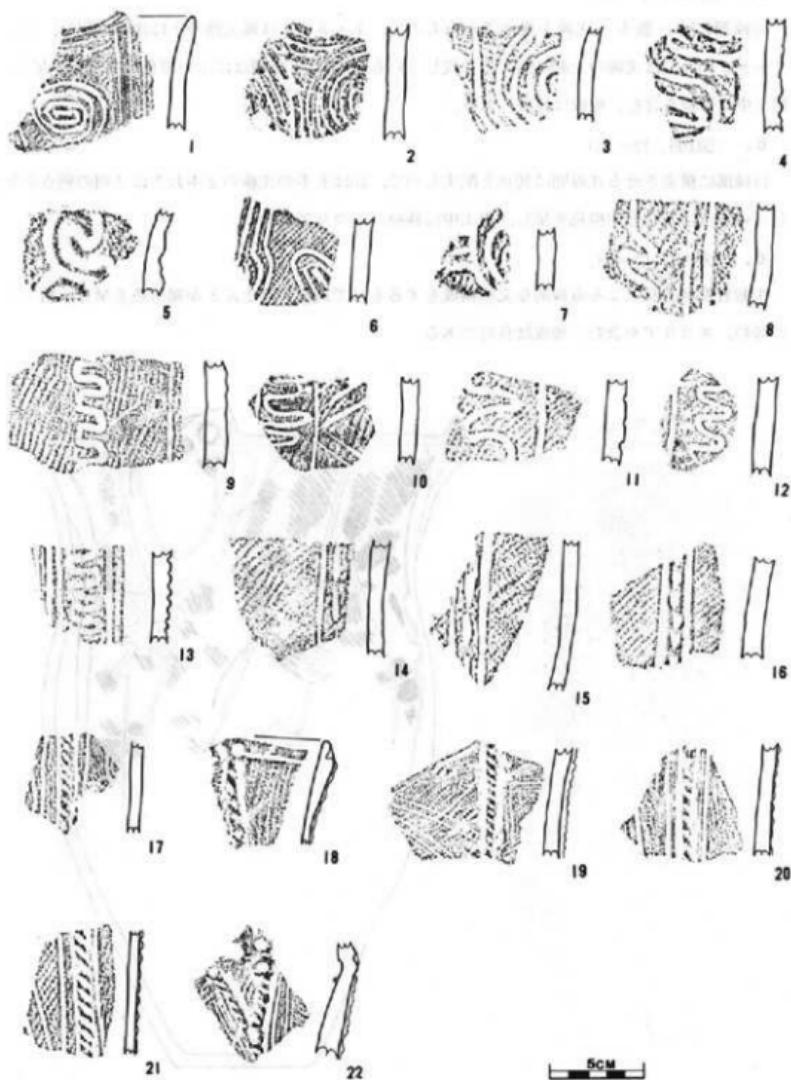


図111 グリット出土遺物(5)

d. (図111, 1~13・図110)

曲線的な文様構成をするもので、いずれも比較的太い沈線で施文されている。

1~3は渦巻文、8~13は蛇行する沈線を縦位に配している。いずれも色調は褐色、にぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好のものが多い。

図110はC 3 ds のII層から出土した深鉢形土器で口縁部と底部の1部を欠損する。口径30.5cm、器高46.5cm、底径9.5cmを測る。胸部上位でくびれ、口縁部は外反する。平底である。口縁部に4つの小突起を有し、口唇部に沿って太い沈線を1本横走させている。

器外面は底部付近を除き全体にR¹の繩文を地文とし、太い沈線により文様構成している。2本にわかれて下降する沈線間に蛇行する1本の沈線を配した文様と蛇行する2本の沈線を下降させた文様を交互に配し、3単位の文様構成がされている。底部付近は2次焼成を受けておりレンガ状を呈する。器内面は横位のけずりである。色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は普通である。

e. (図111, 14~17)

縦位の沈線間に列点を配するものである。色調は褐色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

f. (図111, 18~22)

刻み目を有した紐線を縦位に貼付したものである。いずれも色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

3類 (図112)

クシ描文で文様構成されるものを本類とした。

a. (図112, 1~12)

直線的なクシ描文で文様構成をするもので、1~6は口縁部にクシ描文を横位に配して無文帯を残し、下部に縦位あるいは斜位のクシ描文を施している。7~9は多方向に走らせている。10~11は縦位のみ、12は縦位と横位に走らせ格子目状をなす。ほとんどがにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成はそれほどよくない。

b. (図112, 13~22)

クシ描による波状文で文様構成されるもので、すべて縦位である。14は口縁部に1本の沈線を横位に配して無文帯を残し、その下部に波状文を施している。色調は灰褐色、黄褐色を呈し、胎土中に砂礫を含むものが多い。焼成は良好である。

4類 (図113, 1~13)

2本あるいは3本の沈線で文様を構成し、その区画内や区画外に繩文を充填しているものを本類とした。

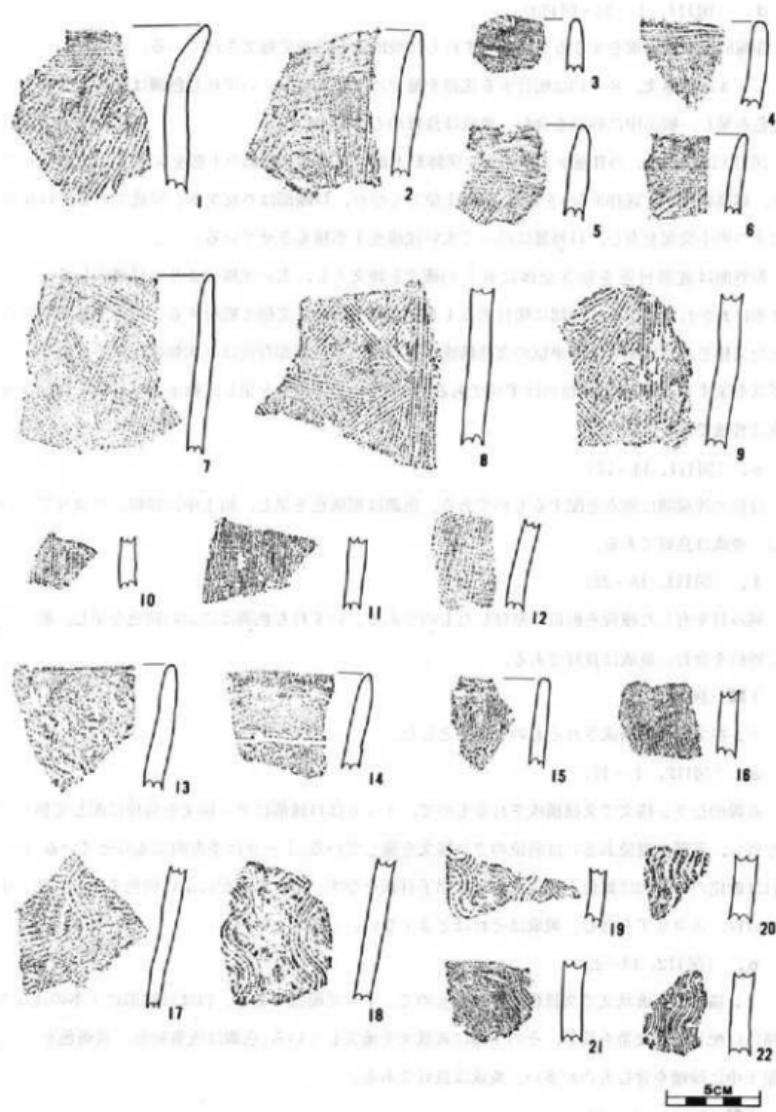


図112 グリット出土遺物(6)

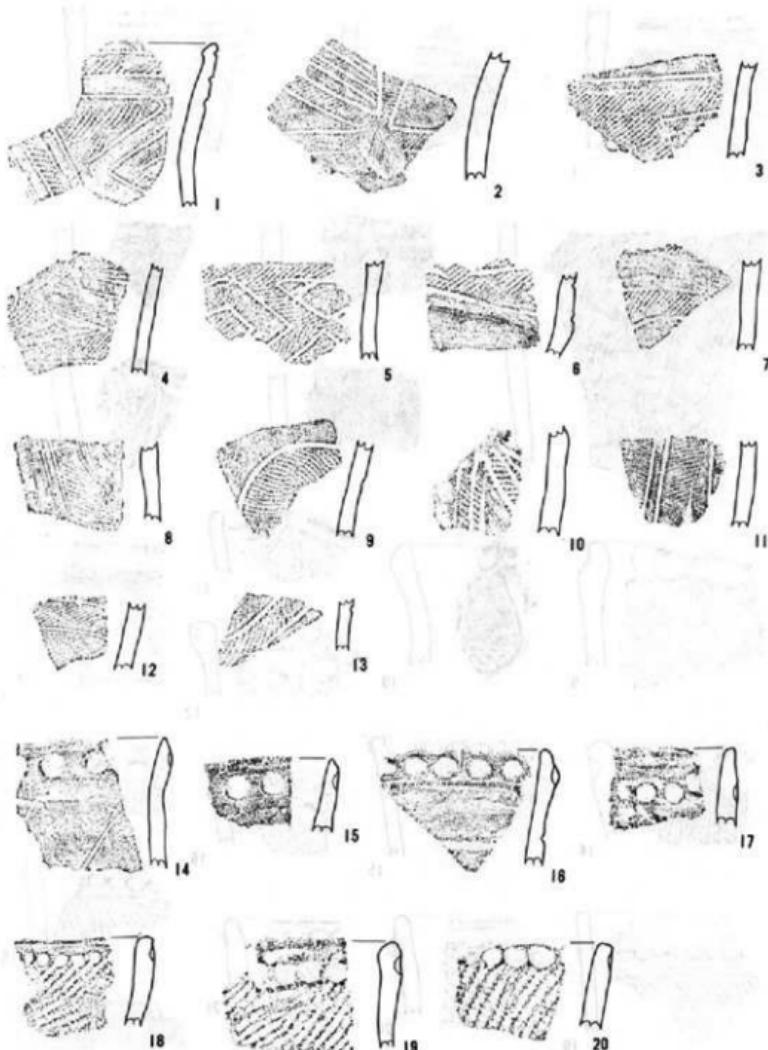


図113 グリット出土遺物(7)

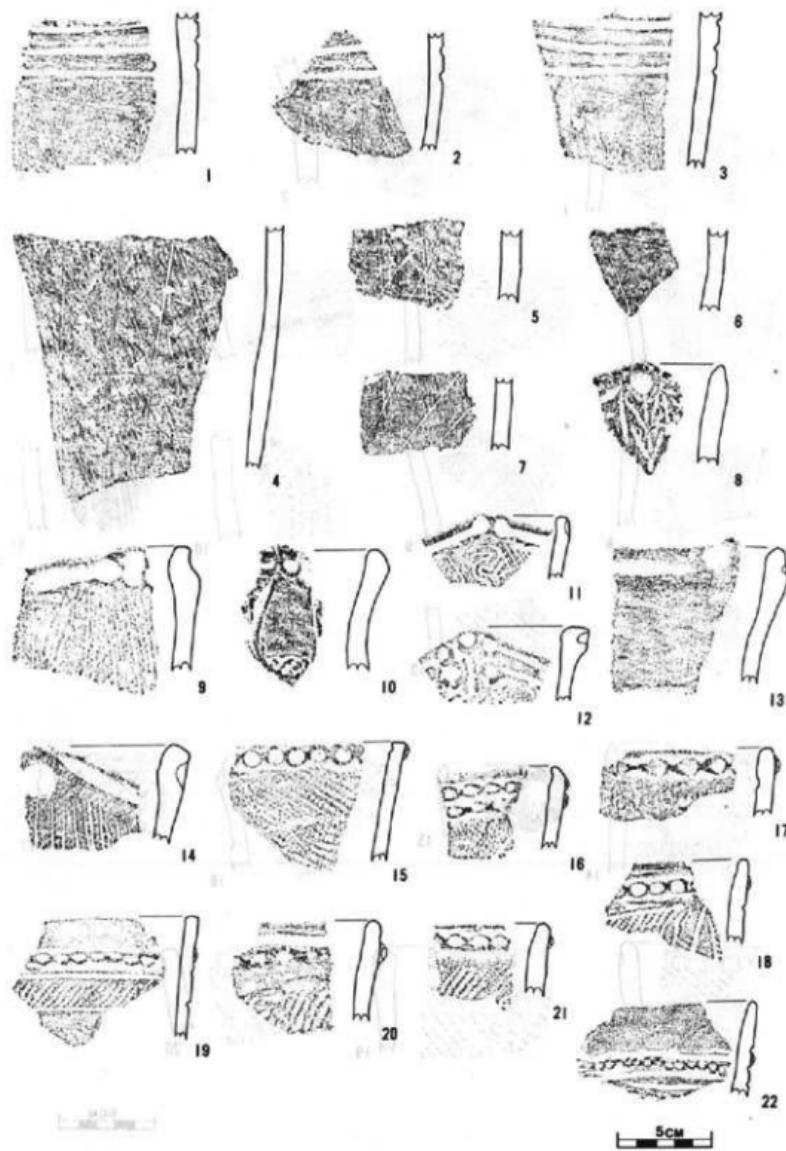


図114 グリッド出土遺物(B)

直線による区画が多く、三角形状の文様を配するもの（1・2・4）や菱形状の文様を配するもの（5）がある。ほとんどがにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

5類（図113、14～20）

口縁部に沿って円形刺突文を配するものを本類とした。

14～20は無文地に円形刺突文を施文している。14はその下部に斜位の沈線を配し、16は横位の太い沈線がみられる。18・19は口縁部の無文帯とその下部の縞文との境に円形刺突文を施文している。色調は浅黄橙色を呈し、胎土中に砂礫、砂粒を含むものが多い。焼成は普通である。

6類（図114、1～7）

格子目状沈線で文様構成されているものを本類とした。

1～3は横位の太い2～3本の沈線の下部に施文している。色調はにぶい橙色や浅黄橙色を呈し、胎土中に砂礫を含む。焼成は良好である。

7類（図114、8～14）

円形刺突文を有する波状口縁部片を本類とした。いずれも口縁に沿って、太い沈線を配している。色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は普通である。

8類（図114、15～22）

口縁部に沿って刺突文や押圧文を有する紐線を貼付したものを本類とした。

14～18は口縁の内面に太い沈線を横走させている。16は紐線文を2本貼付し、17は円形の押圧を施している。ほとんどがにぶい橙色や淡黄橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は普通である。

第3節 まとめ

本遺跡からは13軒の住居址が検出され、そのうち縄文時代のものは1軒（13号）、弥生時代のものは2軒（11・12号）、古墳時代のものは10軒（1～10号）である。縄文、弥生時代の遺構、遺物とも少なく極論を招くことになるため、主に古墳時代の遺構、遺物についてまとめてみたい。

| 遺構番号 | 形態 | 規模(m) | 主軸方向 | 備考 |
|------|----|---------|-----------|-----------|
| 1 | 方形 | 6.2×6.1 | N-43.5°-W | 炉址・貯蔵穴 |
| 2 | 方形 | 5.0×4.0 | N-23°-W | |
| 3 | 方形 | 6.0×6.0 | N-46.5°-W | 炉址・貯蔵穴 |
| 4 | 方形 | 7.4×7.2 | N-51°-W | 炉址・貯蔵穴・壁溝 |
| 5 | 方形 | 7.0×7.0 | N-41.5°-W | 炉址・貯蔵穴・壁溝 |

| 遺構番号 | 形態 | 規模(m) | 主軸方向 | 備考 |
|------|-------|---------|-----------|-----------|
| 6 | 隅丸方形 | 4.6×4.6 | N-39°W | 炉址・壁溝 |
| 7 | 方形 | 7.6×7.3 | N-46.5°-W | 炉址・貯藏穴 |
| 8 | 隅丸方形 | 5.2×4.4 | N-74°-E | 炉址・貯藏穴 |
| 9 | 方形 | 6.5×5.6 | N-60.5°-E | 壁溝 |
| 10 | 方形 | 5.3×5.0 | N-39°-W | 炉址・貯藏穴・壁溝 |
| 11 | 隅丸長方形 | 6.2×4.4 | N-33°-W | 炉址・貯藏穴 |
| 12 | 隅丸長方形 | 6.4×4.4 | N-37°-W | 炉址 |
| 13 | 隅丸長方形 | 4.6×4.0 | N-83°E | 炉址 |

13号は本遺跡で唯一の縄文時代の住居址であり、堀之内式を中心とした後期初頭の土器片が出土している。各グリッドからも同時期の縄文土器片が出土している。

弥生時代の住居址は古墳時代の住居址と離れて遺跡の南端に2軒検出され、いずれも隅丸というよりは橢円形に近い平面形を呈し、中央部にか庇がみられる。出土遺物はほとんどなく、複土上層より縄文土器片が少し出土していたが、その下より後期の弥生式土器が出土している。

古墳時代の住居址は1辺5~6mの方形あるいは隅丸方形を呈す。ほとんどがか庇、貯藏穴をもつ。いずれも複合ではなく、壁の立ちあがりも明瞭で壁高は20~30cmを測る。全般的に遺存状態は良好であり、出土遺物から和泉期のものと推定される。

各住居址からは壺形土器・裴形土器・高坏形土器・堆形土器・楕形土器等が出土している。これらの中では倒的に多いのは高坏形土器で次いで壺形土器・堆形土器である。

高坏形土器は5・6・9号からの出土が多く、特に9号ではほぼ完形のままで出土しているものが多い。6号から出土したものの中に坏部に水平な舌状の凸帯を有する五領期の手法を残すもの(図100,19)が1点あるが、いずれも口縁部がほぼ直線的に開き底部との境に棱をもつ。脚部は裾部との区別がなく大きくラッパ状に開くものと、脚部中位が張り、裾部は「ハ」の字状に開くものと2種類みられ、その割合はほぼ半々である。後者は底部中央に、接合の際脚部にはめ込むための小突起が残っている。全体に整形は入念になされ、口近部と裾部先端に横たて整形がみられ、輪積痕を頭著に残す脚部内面を除いて他はヘラ磨きがなされ、美観な外観を呈している。

壺形土器は大型のものと小型のものがあり、大型のものは4・9号のものに代表させる。8号から折り返しの口縁を残すもの(図101,8)も出土しているが、口縁部は「く」の字状に外反し、脚部はほぼ球形をなし、和泉期の特徴を備えている。口近部は横たて整形、脚部外面はけずり、脚部内面はヘラたて整形であり、4号出土のものは煤の付着が認められる。

壇形土器は3・6号より多く出土している。口縁部はほとんど直線的に外反し、胴部は扁平な球形をなす。底部は丸底とあげ底があり、小さいあげ底が多い。口辺部に横なで整形がみられ、胴部外面はヘラけずり、胴部内面はヘラなどで整形である。

以上、古墳時代の住居址からの出土土器について概観したが、五領期の手法も残す土器が若干みられるが、主体を占めるものは和泉期の範疇に入るものである。

第7章 座庄内遺跡

座庄内遺跡は、守谷町大字座庄内1241に所在する。南より入る小支谷が西側から北側をめぐる。標高20mほどの台地上にある。調査面積は3741m²であり、一面が畑地である。周辺には同台上の東方約800mに大日遺跡、約400mに鈴塚古墳群・南東約400mに鈴塚B遺跡がある。

第1節 調査の経過

- 昭和53年7月 中旬より下草刈り及び焼却に入る。統いてグリッドを設定する。下旬より表土排除を行い花行して遺構確認調査を進める。
- 昭和53年8月 ひきつづき表土排除・遺構確認調査をすすめ25%の表土を排除する。グリッドからの遺物は全く出土せず溝状遺構が1条確認された。この段階で調査を中断する。
- 昭和54年2月 再び遺構確認調査を続けたが、溝状遺構以外に遺構は確認されなかった。下旬より溝状遺構周辺の拡張作業を進める。
- 昭和54年3月 ひきつづき溝状遺構周辺の拡張を進め中旬に尖削・写真撮影を終了し調査を完了する。

第2節 遺構と遺物

1. 遺構

本遺跡からは溝が1条検出されたのみである。

第1号溝（図112）

本溝は大調査区B-2・C-1・C-2で確認され、遺跡の南東端に沿い、主軸方向N-45°-Eで、ほぼ直線的に北東方向へ調査区域外へものびている。また溝の南西端では直角に曲がり、調査区域外へ南東方向にのびている。溝の上幅は1.0~2.0mで、B-2区あたりでは太くC-2区では細い。遺構確認面から底までの深さは30~50cmを測る。断面形は両壁ともゆるやかに立ちあがり、底は皿状を呈し、レベル差はほとんどない。覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主である。

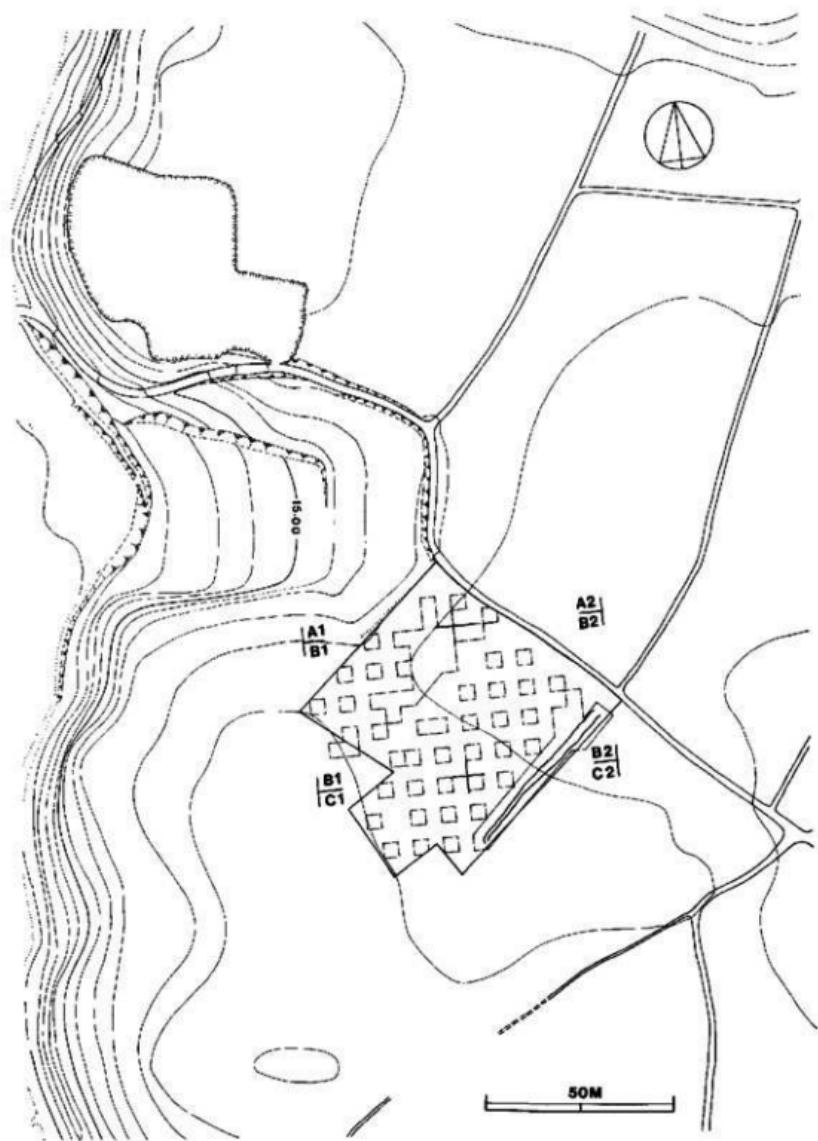
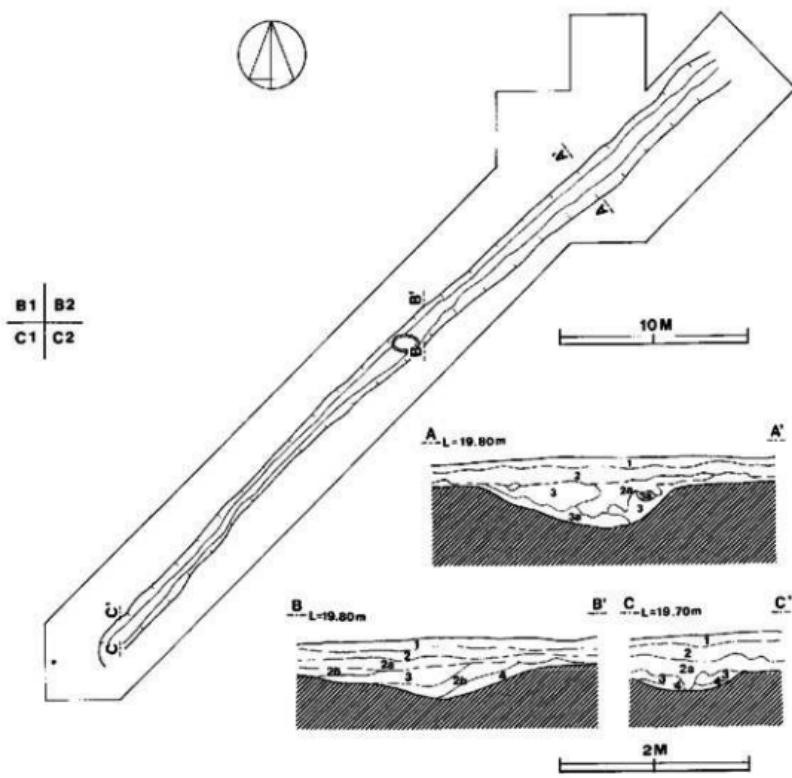


図115 座庄内遺跡全体図



第1号溝土層解説

- 1 黒褐色土、耕作土
- 2 茶褐色土
- 2a 灰褐色土でローム粒子を含む。
- 3 灰褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 3a 黑褐色土で小粒なローム粒子を多量に含む。
- 4 黄褐色土、ソフトローム

図116 第1号溝実測図

2 遺 物

溝からの遺物はほとんどなく、わずかに土師式土器片、陶器片等が数片出土したのみである。各グリッドからも同様で遺物は土師式土器の細片が数点出土しているだけである。

第3節 ま と め

本遺跡から検出された遺構は溝1条のみで他には検出されなかった。遺物もほとんど出土しないといつてもよいほどである。わずかに出土した数片の土師器と陶器片も溝への流れ込みであり、溝の性格、遺跡の時期等については不明である。

第8章 篠根入・仲原遺跡

篠根入・仲原遺跡（C-1～C-5）は、C-1地区が守谷町大字守谷字篠根入甲3117、C-2地区が同105外2筆、C-3地区が守谷町大字高野字仲原395外4筆、C-4地区が同908-1、C-5地区は同911外7筆に所在する。いずれも東側と西側を谷津田の開かれた小支谷が入り込み、南に張り出した舌状台地上にあり標高平均20mを測る。

遺跡の北で台地の奥にC-1地区があり、ほぼ南へ向ってC-2・C-3・C-4・C-5地区が点在する。調査面積はそれぞれ、1,551m²・1,996m²・1,993m²・396m²・4,758m²でいずれも畑地、または稚地である。

周辺には小支谷を隔て南方約200mほどに北今城遺跡・また小支谷を隔て北西600mに大日遺跡がある。

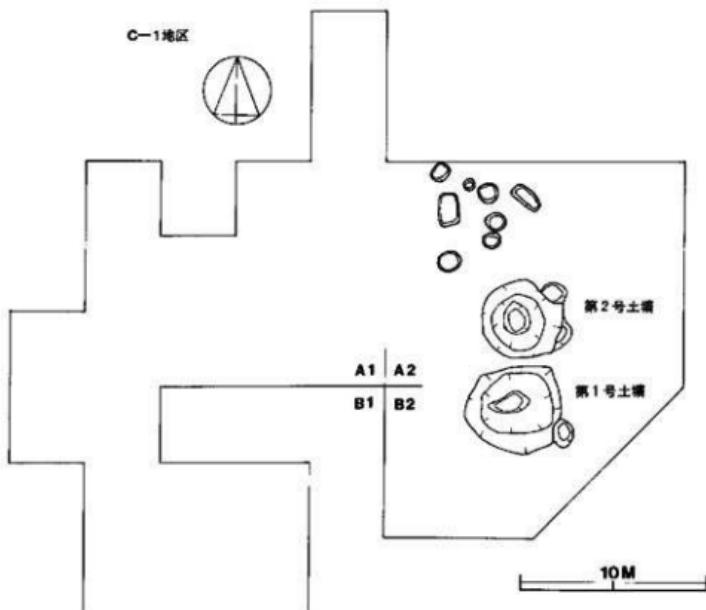
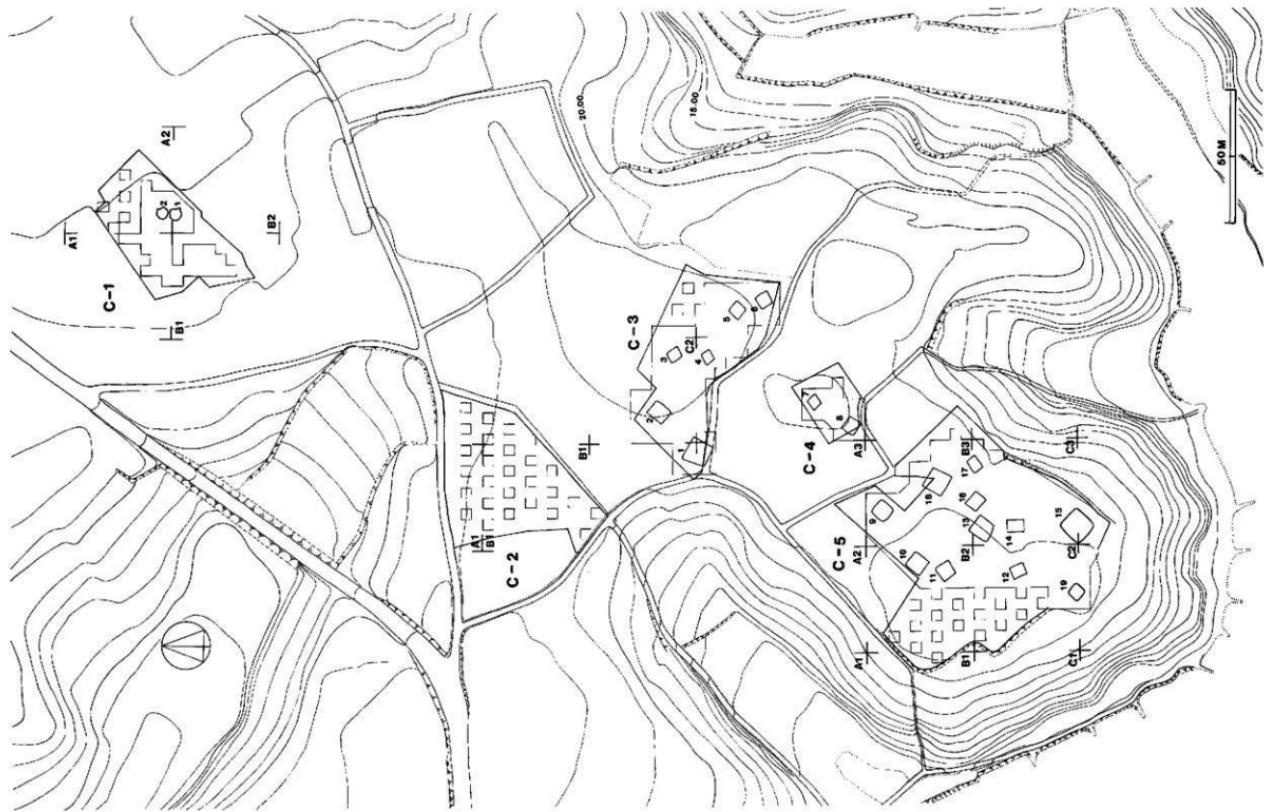


図117 遺構配置図(1)

图118 楼权入·仲原遗址全体图



第1節 調査の経過

- 昭和53年4月 下旬にC-2地区のグリッド設定を行う。
- 昭和53年6月 下旬より調査を開始する。C-2地区の表土排除をし遺構確認調査をする。
- 昭和53年7月 ひき続きC-2地区の遺構確認調査を進め、並行してC-1・C-3・C-4・C-5地区の下草刈り及び焼却を行いグリッド設定をする。中旬より表土排除及び遺構確認をする。C-2地区から遺構は確認されなかった。C-3～C-5にかけて住居址遺構15軒・土壙2基が確認される。下旬よりC-1地区の表土排除に入る。ローム面までが深く、また降雨なく遺構確認が十分できず中断する。
- 昭和53年9月 中旬よりC-1地区の遺構確認調査を再開する。土壙10基が確認される。下旬よりC-3～C-5地区の遺構確認調査を行い、最終的にC-3地区住居址6軒・土壙2基・C-4地区住居址2軒・C-5地区住居址11軒が確認された。
- 昭和53年11月 上旬よりC-3地区の遺構周辺を拡張し住居址・土壙の精査に入る。いずれも遺存状態がよい。遺物は少ないが十師式土器のほか石製模造品・土瓦などが出土する。中旬より実測・写真撮影を始める。並行してC-1地区の土壙の精査を進めたが、第1・2号土壙は深さ4m近くあり作業は難行する。またC-4・C-5地区の遺構周辺を拡張する。
- 昭和53年12月 ひき続きC-1地区の土壙の精査を進める。第1・2号土壙は深さ約4m付近で漏水したため作業を中止し保安設備を強化し、実測・写真撮影をする。中旬にC-1地区的調査を完了し、C-3地区の住居址土壙の実測・写真撮影も終了する。
- 昭和54年1月 中旬より調査開始 C-3地区の残土移動をし全体写真を撮影・統いてC-4・C-5地区の住居址の精査に入る。各住居址より土器のほか石製模造品の出土が目立つ。霜溶けで足もとが悪く苦労する。
- 昭和54年2月 ひき続きC-4・C-5地区の住居址精査を行い、中旬より実測・写真撮影に入る。下旬にC-4地区の調査を終了する。
- 昭和54年3月 C-5地区の住居址実測・写真撮影を継続し中旬に終了する。統いて残土移動をする、全体写真を撮影して調査を完了する。

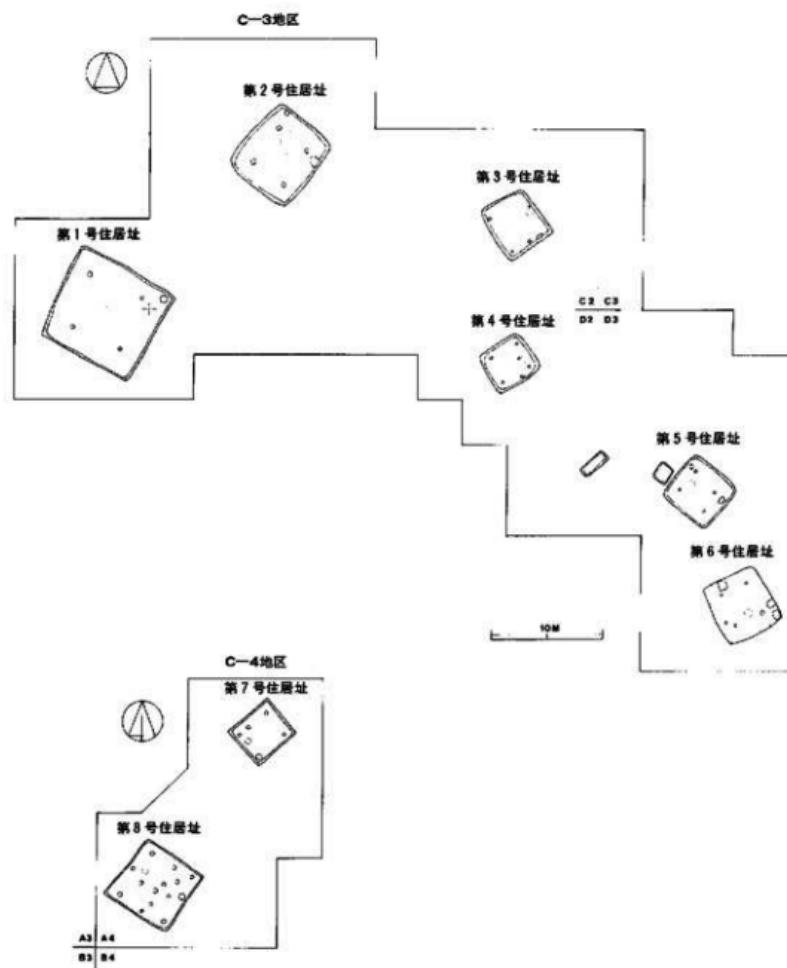


圖119 遺構配置図(2)

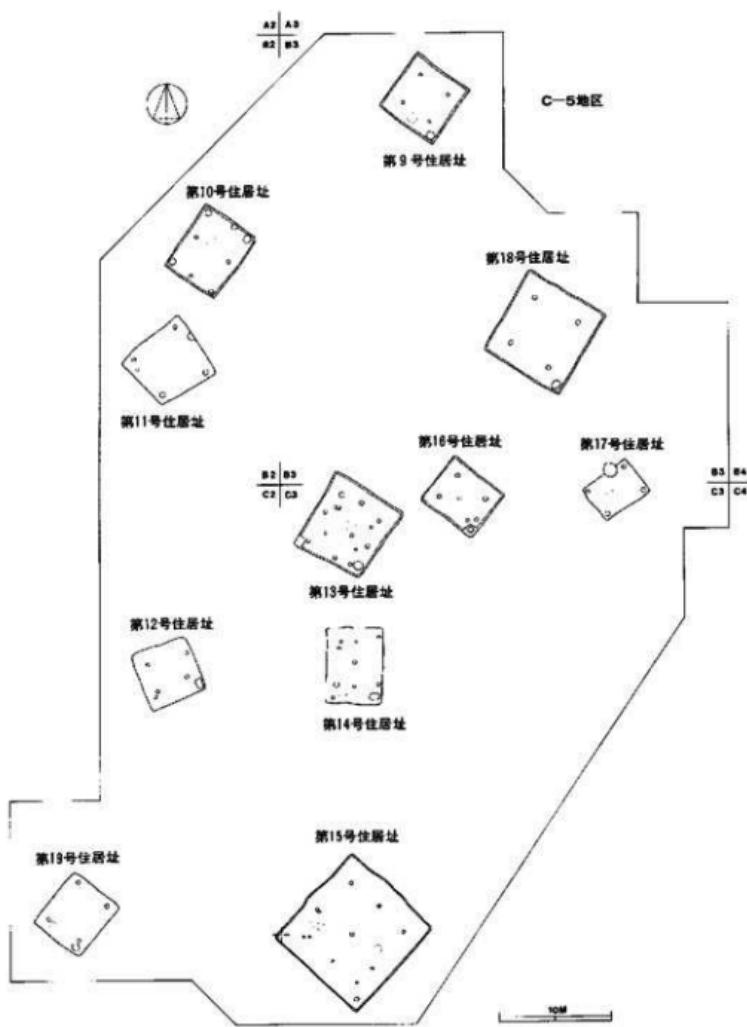


図120 造構配置図(3)

第2節 遺構と遺物

1 遺構

(1) 住居址

住居址遺構は西と東を小支谷にはさまれ南につき出した台地のC-3・C-4・C-5地区にそれぞれ6・2・11軒みられ、台地の奥に入ったC-1・C-2地区ではみられなかった。いずれも複合ではなく、単独で検出されている。同一時期またはそれに近い時期であると思われる。

第1号住居址（図121）

本址はC1_{1a}・C1_{1b}・C1_{1c}・C1_{1d}・C1_{1e}・C2_{1a}・C2_{1b}・D1_{1a}・D1_{1b}・D1_{1c}・D1_{1d}・D2_{1a}に確認され、C-3地区の最も西に位置する。主軸方向はN-65°-Wで、長径9.4m・短径9.0mほどの方形の平面形を呈し、C-3地区最大の規模である。壁はほぼ垂直に立ちあがっており、壁高30~50cmを測る。南北壁は耕作によるカク乱をうけており、立ちあがりが不明瞭である。壁溝は幅30cmぐらい深さ10cmほどで全周している。床はほぼ平坦でやわらかい。炉址は住居のほぼ中央に位置し、90cmほどの円形の平面形を呈し、20cmほど掘り込んでいる。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP1~P5まで確認され、P1・P2・P3・P4は主柱穴、P5は貯藏穴であると思われる。

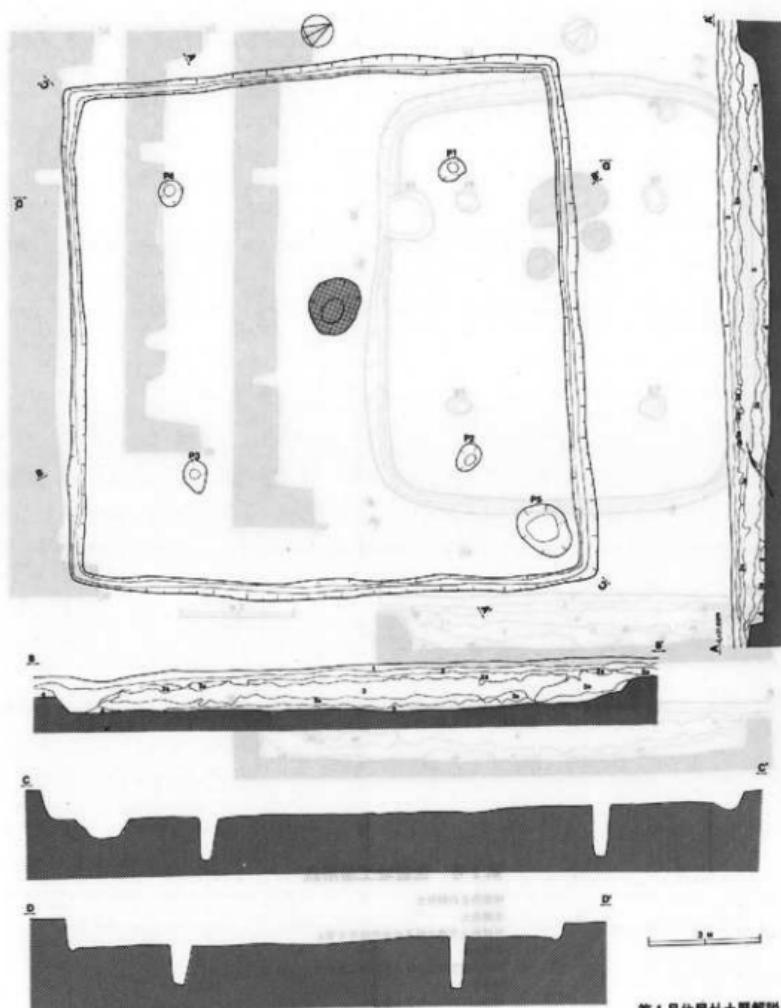
| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 49 | 36 | 75 | 主柱穴 |
| P 2 | 54 | 38 | 72 | " |
| P 3 | 58 | 38 | 82 | " |
| P 4 | 48 | 40 | 93 | " |
| P 5 | 106 | 87 | 92 | 貯藏穴 |

覆土は自然堆積の状態を示し、焼土粒子を含む黒褐色土が主体である。遺物は高杯形土器・壺形土器・楕円形土器・瓶形土器と土製品・石製模造品が出土している。

第2号住居址（図122）

本址はC2_{1a}・C2_{1b}・C2_{2a}・C2_{2b}・C2_{2c}・C2_{2d}・C2_{3a}・C2_{3b}に確認され、C-3地区の最も北で、1号住居址の北東に位置する。主軸方向はN-38°-Eで、長径7.4m、短径6.6mほどの隅丸方形の平面形を呈する。

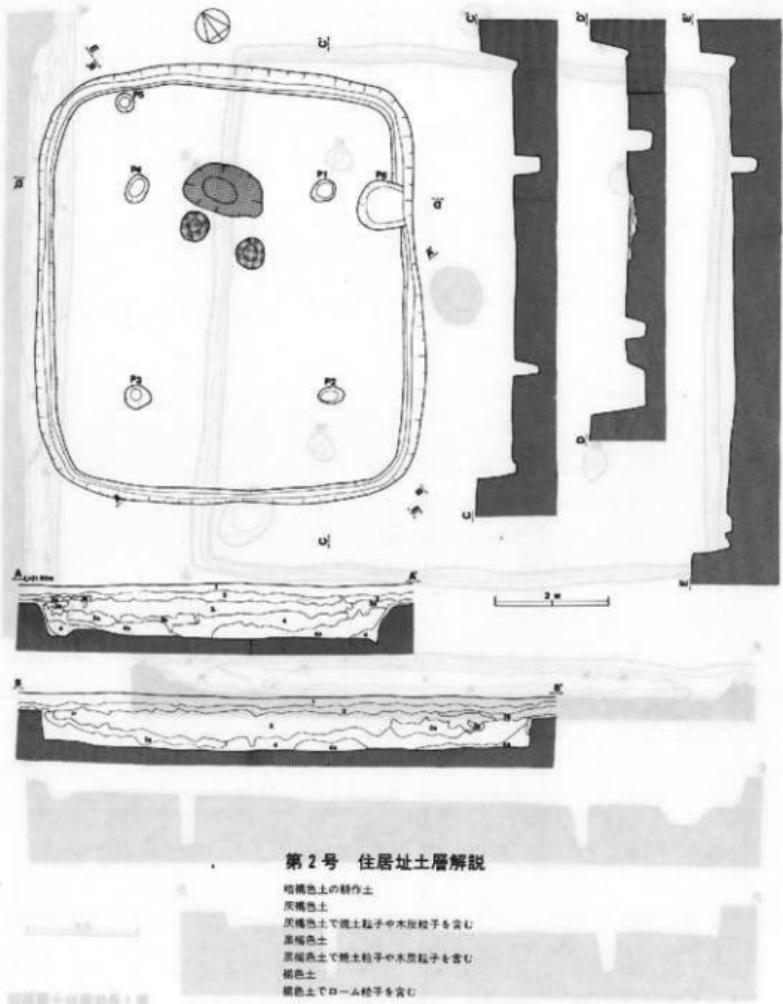
壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高30~60cmを測る。壁溝は幅20~40cm・深さ10cmほどで全周している。床はほぼ平坦で硬いものである。炉址はP4とP1との中间とそのすぐ南に2つある。



第1号住居址土層解説

- 1 地面色土の耕作土
- 2 a 灰褐色土
- 2 a 灰褐色土で焼土粒子や木炭粒子を含む。
- 3 黑褐色土
- 3 a 黑褐色土で焼土粒子を多量に含む。
- 4 暗色土でローム粒子や燒土粒子を含む。

図121 第1号住居址実測図



第2号 住居址土層解説

略
耕作土の耕作土
灰褐色土
灰褐色土で鐵土粒子や木炭粒子を含む
黑褐色土
黑褐色土で鐵土粒子や木炭粒子を含む
褐色土
褐色土でローム粒子を含む

細繊維土試験区分土層

| | |
|-----------|---|
| 上耕作土 | 1 |
| 下耕作土 | 1 |
| 耕作土試験区分土層 | 1 |
| 下耕作土 | 1 |
| 土質試験区分土層 | 1 |
| 毛管水試験区分土層 | 1 |
| 透水性試験区分土層 | 1 |
| 透水性試験区分土層 | 1 |
| 土壤試験区分土層 | 1 |

図122 第2号住居址実測図

北からそれぞれ長径1.5m・50cm・60cm・短径80cm・40cm・50cmほどの楕円形の平面形を呈し、それぞれ20cmほど掘り込まれている。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP 1～P 6まで確認され、P 1・P 2・P 3・P 4は主柱穴・P 6は貯蔵穴と思われる。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 46 | 39 | 42 | 主柱穴 |
| P 2 | 48 | 31 | 46 | " |
| P 3 | 49 | 30 | 46 | " |
| P 4 | 50 | 36 | 45 | " |
| P 5 | 37 | 31 | 13 | |
| P 6 | 100 | 88 | 36 | 貯蔵穴 |

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土と褐色土が主である。遺物は台付變形土器・小形台付變形土器・高環形土器・壺形土器が出上している。

第3号住居址(図123)

本址はC 2hs・C 2hs・C 2is・C 2isに確認され、1号住居址の東に位置し、4号住居址の北に隣接する。主軸方向はN-30.5°-Wで、長径5.3m・短径5.0mほどの隅丸方形の平面形を呈する。壁はいく分外傾して立ちあがり、壁高は50～60cmを測る。壁溝は幅20～30cm・深さ10cmほどで全周している。床はほぼ平坦で硬いものである。炉址はP 1のすぐ南に位置し、長径70cm・短径60cmほどの楕円形を呈し、20cmほど掘り込まれている。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP 1～P 5まで確認され、P 1～P 4は主柱穴かどうか疑わしい。P 5は貯蔵穴であると思われる。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 26 | 22 | 23 | |
| P 2 | 47 | 43 | 35 | |
| P 3 | 27 | 26 | 16 | |
| P 4 | 28 | 27 | 22 | |
| P 5 | 60 | 42 | 33 | 貯蔵穴 |

覆土は自然堆積の状態を示し、上層はローム粒子を含む黒褐色土で、下層はロームである。遺物は台付變形土器・器台形土器が出土している。

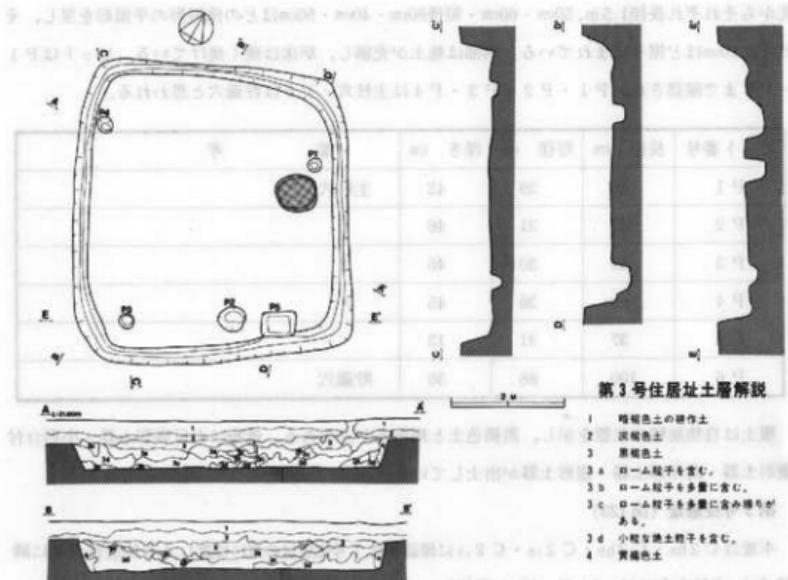


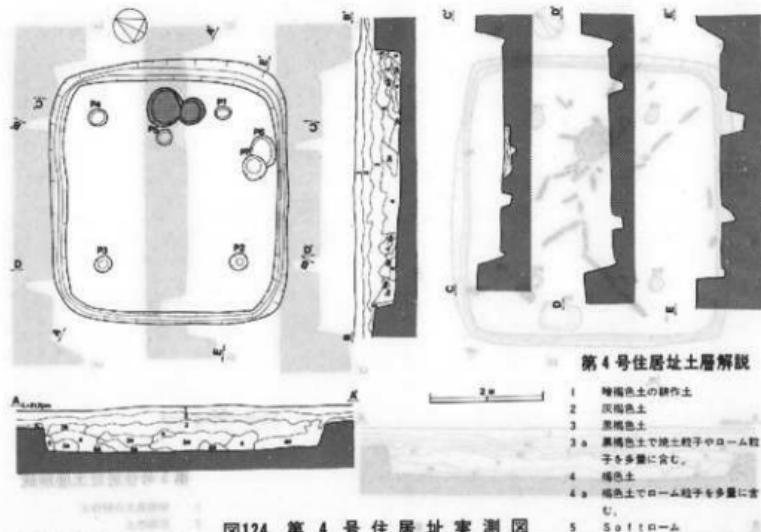
図123 第3号住居址実測図

第4号住居址(図124)

本址は D 2a8・D 2a9・D 2b8・D 2b9に確認され、1号住居址の東に位置し、3号住居址の南に隣接する。主軸方向は N-63°-Eで、長径4.7m・短径4.1mの隅丸方形の平面形を呈する。壁はいくつ外傾して立ちあがり、壁高は50cm~60cmを測る。壁溝は幅20~30cm、深さ10cmほどで全周している。床はほぼ平坦で硬いものである。炉址は P 4とP 1の中間で北東壁寄りに位置し、直徑60cmと40cmほどの円形の平面形を呈するものが切り合っており、それぞれ20cmほど掘り込んでいる。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットは P 1~P 7が確認され、P 1・P 2・P 3・P 4は主柱穴と思われる。

| ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 | ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 |
|-------|------|------|------|-----|-------|------|------|------|--------------|
| P 1 | 28 | 23 | 18 | 主柱穴 | P 5 | 30 | 28 | 13 | |
| P 2 | 32 | 28 | 17 | " | P 6 | 55 | 46 | 15 | |
| P 3 | 32 | 30 | 20 | " | P 7 | 45 | 43 | 45 | |
| P 4 | 32 | 27 | 13 | " | | | | | 貯藏穴(P 6と複合)? |

覆土は自然堆積の状態を示し、上層は黒褐色土・最下層はソフトロームである。遺物は石製模造品が出土している。



第4号住居址土層解説

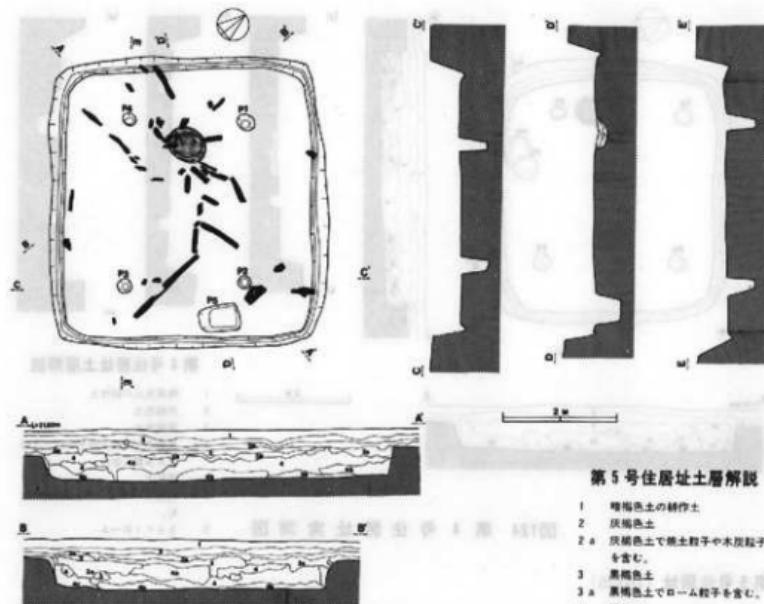
図124 第4号住居址実測図

第5号住居址(図125)

本址はD3d₂・D3d₄・D3e₂・D3e₃・D3e₄に確認され、C-3地区では東寄りにあり、6号住居址の北に隣接する。主軸はN-51°-Wで、長径5.0m・短径4.8mほどの隅丸方形の平面形を呈する。壁はいく分外傾して立ちあがり、壁高50cmほどを測る。壁溝は幅20cm前後、深さ10cmほどで全周している。床はほぼ平坦でやや柔かい。炉址はP4とP1のはば中間に位置し、直径60cmほどの円形の平面形を呈し、20cmほど掘り込まれている。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP1-P5が確認され、P1・P2・P3・P4は主柱穴、P5は貯蔵穴と思われる。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 31 | 29 | 47 | 主柱穴 |
| P 2 | 22 | 21 | 49 | " |
| P 3 | 25 | 24 | 48 | " |
| P 4 | 24 | 19 | 51 | " |
| P 5 | 70 | 46 | 44 | 貯蔵穴 |

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土と褐色土が主である。遺物は壺形土器と土製品が出土している。また、柱状の木炭が床面に多数検出されている。



第5号住居址土層解説

- 1 増粘色土の耕作土
- 2 灰褐色土
- 2 a 灰褐色土で鐵土粒子や木炭粒子を含む。
- 3 黑褐色土
- 3 a 黑褐色土でローム粒子を含む。
- 4 紅色土
- 4 a 紅色土で鐵土粒子や鐵土粒子を含む。
- 4 b 紅色土でローム粒子や鐵土粒子を含む。
- 4 c 紅色土で鐵土粒子を多量に含む。

図125 第5号住居址実測図

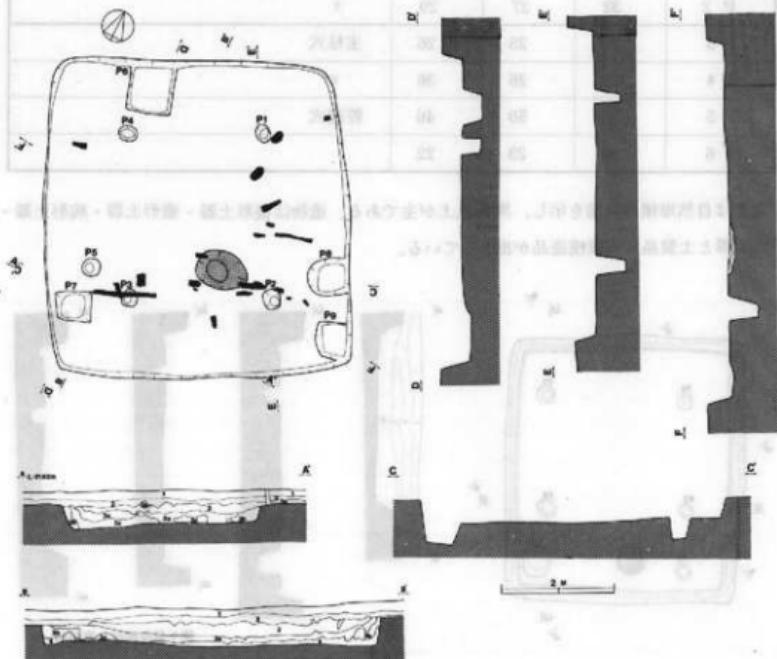
第6号住居址(図126)

本址は D 3 f₃ · D 3 f₄ · D 3 g₃ · D 3 g₄ · D 3 g₅ · D 3 h₃ · D 3 h₄ · D 3 h₅に確認され、C-3地区の最も東に位置し、5号住居址の南に隣接する。主軸方向は N-28°-Wで、長径5.6m、短径5.4mの隅丸方形の平面を呈する。壁はやや外傾して立ちあがり、壁高は50cmほどである。壁溝はない。床はほぼ平坦でやや柔かい。炉址は P 3 と P 2 の中間でやや中央部寄りに位置し、直径70cmほどの円形の平面形を呈し、20cmほど掘り込んでいる。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットは P 1 ~ P 9 が確認され、P 1 · P 2 · P 3 · P 4 が主柱穴と思われる。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 33 | 25 | 46 | 主柱穴 |
| P 2 | 40 | 33 | 53 | 〃 |
| P 3 | 31 | 25 | 56 | 〃 |

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 4 | 32 | 26 | 46 | 主柱穴 |
| P 5 | 33 | 30 | 36 | |
| P 6 | 98 | 80 | 12 | |
| P 7 | 60 | 52 | 36 | |
| P 8 | 75 | 67 | 35 | |
| P 9 | 66 | 64 | 10 | |

覆土は自然堆積の状態を示し、ローム粒子を含む黒褐色土が主で、最下層はソフトロームである。遺物は小型壺形土器・壺形土器、瓶形土器と土製品が出土している。また、火災を受けたと思われ、柱状の木炭が床面に多数検出されている。



第6号住居址土層解説

- | | | | |
|-----|---------------------|-----|-------------------|
| 1 | 黒褐色土の耕土土 | 3 | 黒褐色土 |
| 2 | 黒褐色土 | 3 a | 黒褐色土でローム粒子を含む。 |
| 2 a | 灰褐色土で黒褐色土の粒子を多量に含む。 | 3 b | 黒褐色土でローム粒子を多量に含む。 |
| 2 b | 灰褐色土でローム粒子を多量に含む。 | 3 c | 黒褐色土で洗土粒子を多量に含む。 |
| | | 4 | 黄褐色土でやわらかい。 |

図126 第6号住居址実測図

第7号住居址（図127）

本址はA 4_{e4}・A 4_{f4}・A 4_{f5}に確認され、C-3地区寄りで、8号住居址の北東に位置する。主軸方向はN-49°-Eで、長径4.8m・短径4.1mほどの方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は40cmほどである。壁溝は幅20cm前後、深さ10cmほどで全周している。床はロームであり、ほぼ平坦で柔かい。炉址はP 3とP 2の中間で南西壁寄りに位置し、直径50cmほどの円形の平面形を呈し、15cmほど掘り込まれている。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP 1～P 6が確認され、P 1・P 2・P 3・P 4が主柱穴・P 5が貯蔵穴と思われる。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備 考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 32 | 31 | 30 | 主柱穴 |
| P 2 | 32 | 27 | 29 | 〃 |
| P 3 | 28 | 25 | 26 | 主柱穴 |
| P 4 | 29 | 26 | 36 | 〃 |
| P 5 | 53 | 50 | 46 | 貯蔵穴 |
| P 6 | 30 | 23 | 22 | |

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主である。遺物は変形土器・壺形土器・楕形土器・环形土器と土製品、石製模造品が出土している。

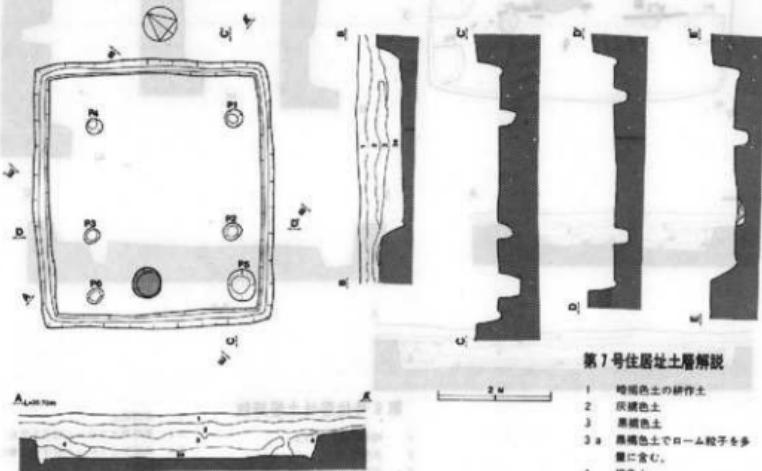
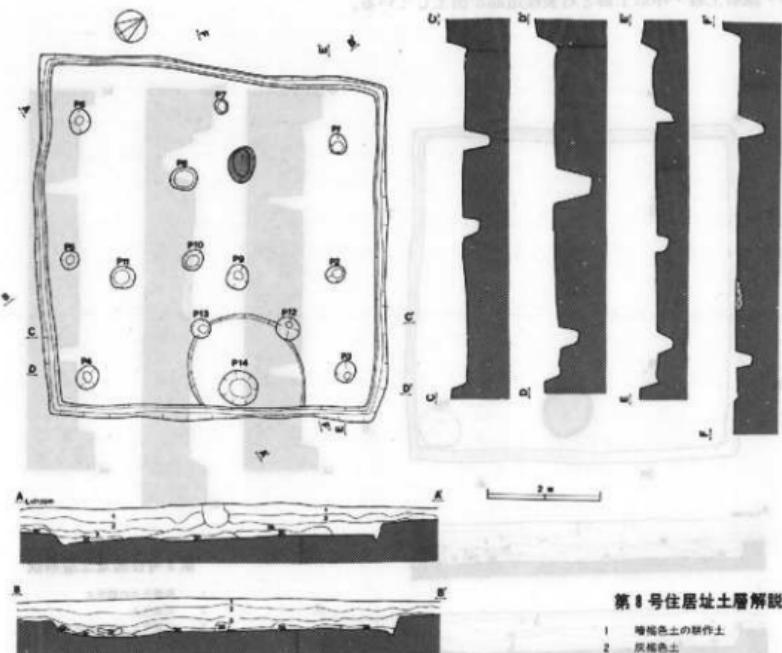


図127 第7号住居址実測図

第8号住居址（図128）

本址はA 4₁₁・A 4₁₂・A 4₁₃・A 4₁₄・A 4₁₅に確認され、C-5地区寄りにあり、7号住居址の南西に位置する。主軸方向はN-57°-Wで、長径6.4m・短径6.0mほどの方形の平面形を呈する。壁はやや外傾して立ちあがり、壁高は15-30cmを測る。壁溝は幅20cm前後、深さ10cmほどで全周している。床はロームであり、ほぼ平坦で柔かい。P14を中心として、半径1.5mの円状の周囲が数cmほど高く踏み固められている。炉址はP 8のすぐ北に位置し、直径30cmほどの円形の平面形を呈し、10cm掘り込まれている。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP 1-P 14があるが、P 1・P 2・P 3・P 4・P 5・P 6が主柱穴・P 14が貯蔵穴と思われる。

上縁跡・廻土壁跡の概略、ある箇所は土壌のままで残る。下縁跡・廻土壁跡の断面図



第8号住居址土層解説

- 1 増粘土の耕作土
- 2 灰褐色土
- 3 黄褐色土
- 3 a 黄褐色土で木炭粒子を含む。
- 3 b 黄褐色土でローム粒子を含む。
- 3 c 黄褐色土で多量のローム粒子を含み柔かい。

図128 第8号住居址実測図

| ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 | ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 |
|-------|------|------|------|-----|-------|------|------|------|-----|
| P 1 | 34 | 32 | 30 | 主柱穴 | P 8 | 47 | 40 | 19 | |
| P 2 | 34 | 31 | 20 | " | P 9 | 45 | 38 | 25 | |
| P 3 | 37 | 35 | 29 | " | P 10 | 40 | 33 | 16 | |
| P 4 | 43 | 37 | 36 | " | P 11 | 42 | 40 | 16 | |
| P 5 | 34 | 30 | 35 | " | P 12 | 42 | 40 | 47 | |
| P 6 | 45 | 37 | 30 | " | P 13 | 34 | 33 | 30 | |
| P 7 | 26 | 23 | 29 | | P 14 | 65 | 59 | 66 | 貯藏穴 |

覆土は自然堆積の状態を示し、ローム粒子を含む褐色土が主である。遺物は壺形土器・楕円形土器・瓶形土器・環形土器と石製模造品が出土している。

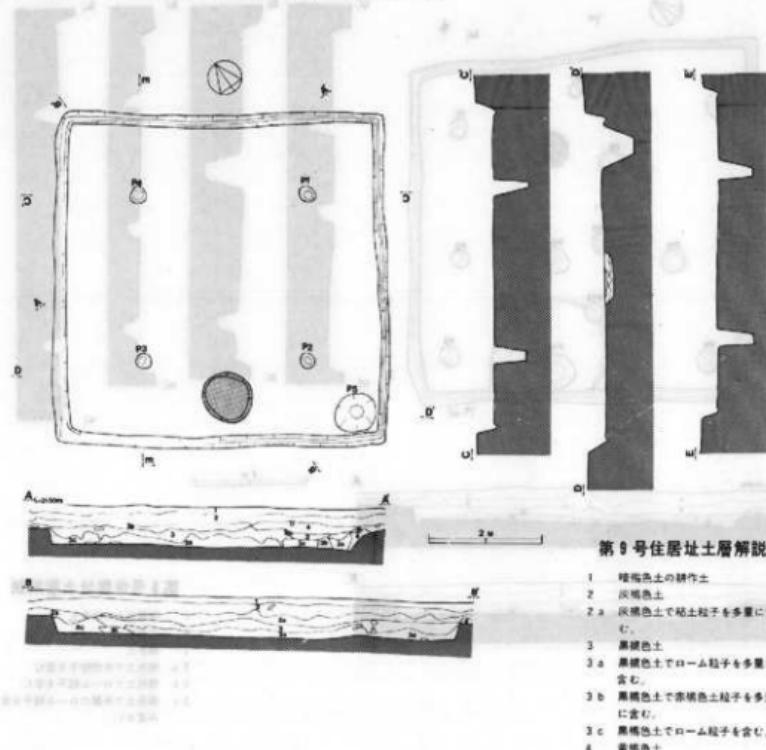


図129 第9号住居址実測図

第9号住居址（図129）

本址はB 3_{a3}・B 3_{a4}・B 3_{b3}・B 3_{b4}・B 3_{c3}・C 3_{c4}に確認され、C-5地区で最も北にあり、10号住居址の北東に位置する。主軸方向はN-36.5°-Eで、長径6.0m・短径5.8mほどの方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は30cmほどである。壁溝は幅20cm前後・深さ10cmで全周している。床はロームのはば平坦で、やや柔かいものである。炉址はP 3とP 2の中間で南西壁寄りに位置し、直径80cmほどの円形の平面形を呈し、20cmほど掘り込んでいる。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP 1～P 5が確認され、P 1・P 2・P 3・P 4が主柱穴・P 5が貯蔵穴と思われる。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 32 | 27 | 58 | 主柱穴 |
| P 2 | 29 | 24 | 70 | " |
| P 3 | 27 | 26 | 61 | " |
| P 4 | 30 | 27 | 63 | " |
| P 5 | 78 | 70 | 55 | 貯蔵穴 |

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主である。遺物は壺形土器・小型壺形土器土製品・石製模造品が出土している。

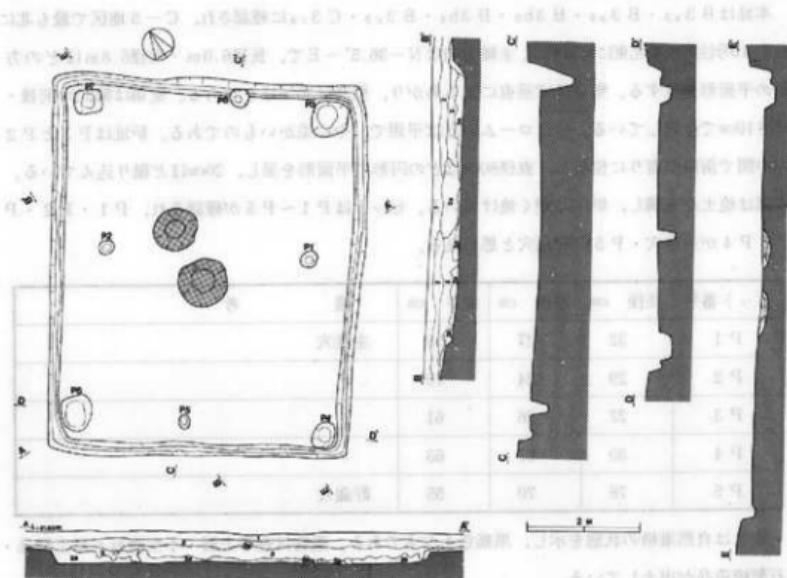
第10号住居址（図130）

本址はB 2d8・B 2d9・B 2e8・B 2e9・B 2e10・B 2f8・B 2f9・B 2f10で確認され、9号住居址の南西で11号住居址の北に位置する。主軸方向はN-35°-Eで、長径6.7m・短径5.6mほどの方形の平面形を呈する。壁はいく分外傾して立ちあがり、壁高は30cmほどである。壁溝は幅20cm前後・深さ10cmほどで全周している。床は平坦で、やや柔かい。炉址は住居中央に2つあり、北からそれぞれ直径70cm・90cmほどの円形の平面形を呈し、どちらも10～15cmほど掘り込まれている。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP 1～P 8が確認され、規則的な配列がみられる。

| ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 | ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 |
|-------|------|------|------|----|-------|------|------|------|----|
| P 1 | 32 | 26 | 22 | | P 5 | 27 | 21 | 33 | |
| P 2 | 27 | 25 | 22 | | P 6 | 62 | 54 | 23 | |
| P 3 | 61 | 60 | 53 | | P 7 | 50 | 42 | 18 | |
| P 4 | 45 | 38 | 51 | | P 8 | 35 | 33 | 60 | |

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主である。遺物は壺形土器・壺形土器と石製模造品が出土している。

(図130) 住居址実測図



第10号住居址土層解説

- 1 緑褐色土の耕作土
- 2 褐褐色土
- 2 a 褐褐色土で焼土粒子や木炭粒子を多量に含む。
- 3 黒褐色土
- 3 a 黒褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 3 b 黒褐色土でローム粒子をわずかに含む。

図130 第10号住居址実測図

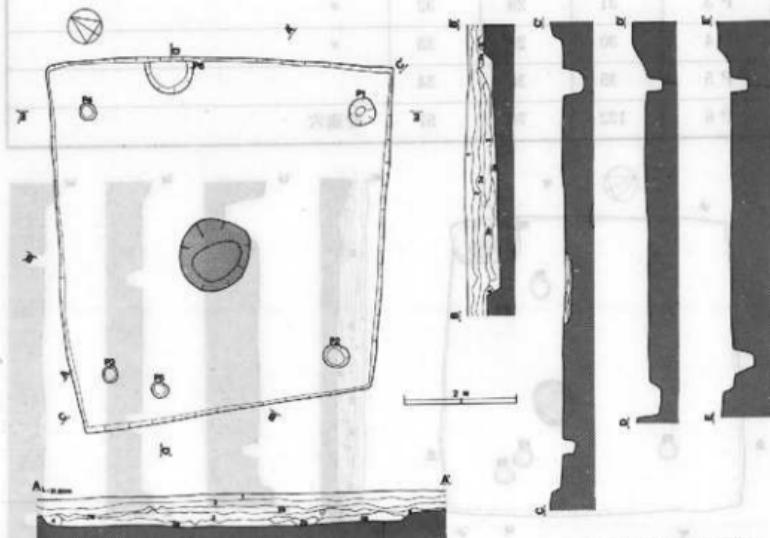
第11号住居址(図131)

本址はB2_{g8}・B2_{g9}・B2_{h7}・B2_{h8}・B2_{h9}・B2_{h10}・B2_{i7}・B2_{i8}・B2_{i9}に確認され、12号住居址の北に位置し、10号住居址の南に隣接する。主軸方向はN-55°-Eで、長径6.2m・短径5.6mほどの方形の平面形を呈する。

壁はいく分外傾して立ちあがり、壁高は20cmを測る。壁溝はない。床はロームのはじ平坦で、やや柔かいものである。炉址はほぼ中央にあり、直径120cmほどの円形の平面形を呈し、10cmほど掘り込まれている。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP1-P6が確認され、P1・P2・P3・P4が主柱穴、P6が貯蔵穴と思われる。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備 考 |
|-------|-------|-------|-------|------|
| P 1 | 53 | 46 | 40 | 主柱穴 |
| P 2 | 45 | 40 | 27 | " |
| P 3 | 30 | 28 | 24 | " |
| P 4 | 30 | 28 | 30 | " |
| P 5 | 30 | 27 | 29 | |
| P 6 | 86 | 60 | 25 | 貯蔵穴？ |

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主である。遺物は壺形土器・楕円形土器・高壺形土器と土製品、石製模造品が出土している。



第11号住居址土層解説

- 1. 黒褐色土の耕作土
- 2. 黒褐色土
- 2 a. 黑褐色土で燒土粒子や木炭粒子を多量に含む。
- 3. 黑褐色土で木炭粒子を多量に含む。
- 3 a. 黑褐色土で燒土粒子を含む。
- 3 b. 黑褐色土でローム粒子を含む。
- 4. 黑褐色土

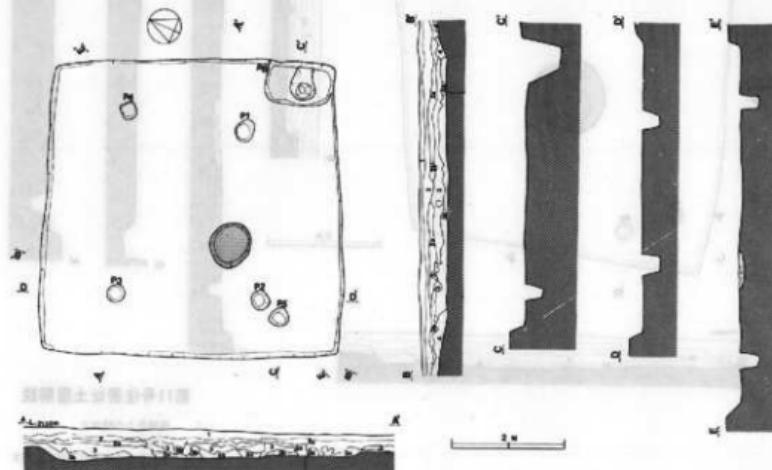
剖面図

図131 第11号住居址実測図

第12号住居址（図132）

本址はC 2d₇・C 2d₈・C 2d₉・C 2e₇・C 2e₈・C 2e₉に確認され、11号住居址と19号住居址の中間で、14号住居址の西に位置する。主軸方向はN-71°-Eで、長径5.3m・短径5.2mほどの方形の平面形を呈する。壁は外傾して立ちあがり、壁高は20~30cmを測る。壁構はない。床は平坦で、やや柔かい。炉址は中央よりやや南西寄りに位置し、直径85cmほどの円形の平面形を呈し、10cmほど掘り込まれている。ピットはP 1~P 6が確認され、P 1・P 2・P 3・P 4が主柱穴、P 6が貯蔵穴と推定される。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備 考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 40 | 35 | 40 | 主柱穴 |
| P 2 | 35 | 29 | 30 | " |
| P 3 | 31 | 29 | 32 | " |
| P 4 | 30 | 27 | 33 | " |
| P 5 | 35 | 30 | 34 | |
| P 6 | 122 | 78 | 57 | 貯蔵穴 |



第12号住居址土層解説

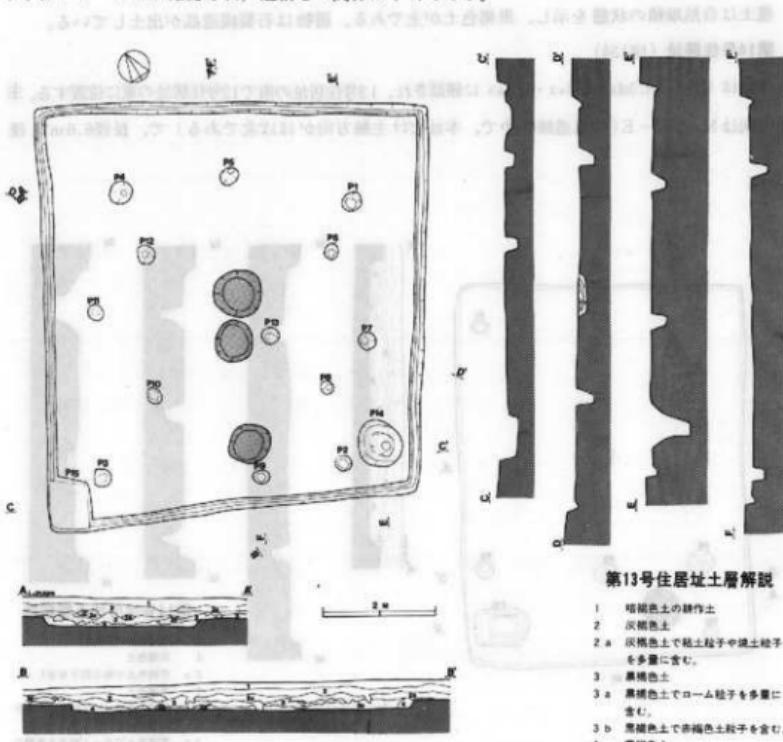
- 1 黒褐色土の堅耕作土
- 2 底褐色土
- 2a 底褐色土でローム粒子を含む。
- 3 黑褐色土
- 3a 黑褐色土でローム粒子を含む。
- 3 b 黑褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 3 c 黑褐色土で赤褐色土粒子を多量に含む。
- 4 黄褐色土で透かす。

図132 第12号住居址実測図

覆土は自然堆積の状態を示し、ローム粒子を含む黒褐色土が主である。遺物は楕形土器・菱形土器・壺形土器と石製模造品が出土している。

第13号住居址（図133）

本址はB 3 j₂・C 3 a₁・C 3 a₂・C 3 a₃・C 3 b₁・C 3 b₂・C 3 b₃に確認されC-5地区のはば中央で、14号住居址の北に位置し、16号住居址の西に隣接する。主軸方向はN-32.5°-Eで、長径7.2m・短径6.8mほどの方形の平面形を呈する。壁はいく分外傾して立ちあがり、壁高は15~20cmを測る。壁溝は幅20cm前後、深さ10cmで全周している。床はロームではば平坦で、いく分柔かい。炉址中央部に2つ、南壁寄りに1つ位置し、それぞれ北から直径90cm・70cm・70cmほどの円形の平面形を呈し、20cmぐらい掘り込まれている。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP 1~P 15が確認され、遺構との関係は不明である。



第13号住居址土層解説

- 1 黒褐色土の耕作土
- 2 灰褐色土
- 2 a 灰褐色土で粘土粒子や燒土粒子を多量に含む。
- 3 黑褐色土
- 3 a 黑褐色土でローム粒子を多量に含む。
- 3 b 黑褐色土で赤褐色土粒子を含む。
- 4 黄褐色土

図133 第13号住居址実測図

| ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 | ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 |
|-------|------|------|------|----|-------|------|------|------|------|
| P 1 | 36 | 31 | 26 | | P 9 | 30 | 25 | 21 | |
| P 2 | 30 | 28 | 20 | | P 10 | 29 | 27 | 23 | |
| P 3 | 32 | 30 | 32 | | P 11 | 30 | 29 | 36 | |
| P 4 | 45 | 40 | 74 | | P 12 | 33 | 32 | 33 | |
| P 5 | 35 | 29 | 30 | | P 13 | 33 | 30 | 51 | |
| P 6 | 28 | 25 | 25 | | P 14 | 85 | 79 | 68 | 貯蔵穴? |
| P 7 | 33 | 30 | 27 | | P 15 | 102 | 78 | 18 | |
| P 8 | 23 | 22 | 26 | | | | | | |

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主である。遺物は石製模造品が出土している。

第14号住居址（図134）

本址は C3d₂・C3d₃・C3e₂・C3e₃ に確認され、13号住居址の南で12号住居址の東に位置する。主軸方向は N-2.5° E（仲原遺跡の中で、本址だけ主軸方向がほぼ北である）で、長径6.6m短径

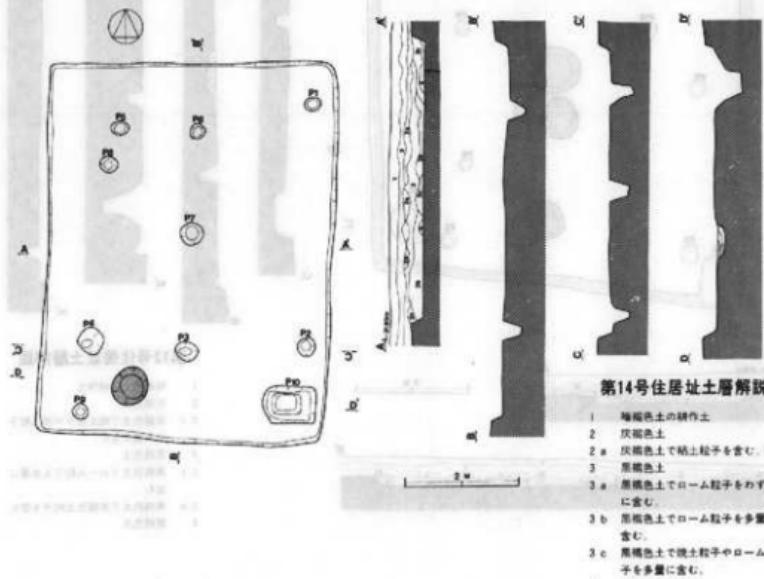


図134 第14号住居址実測図

5.1mほどの方形の平面形を呈する。壁はいく分外傾して立ちあがり、壁高15~20cmを測る。壁溝はない。床はロームあり、平坦でやや柔かい。炉址は南壁寄りのP9とP3の中間に位置し、直径70cmほどの円形の平面形を呈し、15cmほど掘り込まれている。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP1~P10が確認される。

| ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 | ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 |
|-------|------|------|------|----|-------|------|------|------|-----|
| P 1 | 30 | 24 | 20 | | P 6 | 28 | 27 | 30 | |
| P 2 | 35 | 33 | 30 | | P 7 | 43 | 40 | 36 | |
| P 3 | 42 | 35 | 37 | | P 8 | 32 | 30 | 21 | |
| P 4 | 50 | 48 | 36 | | P 9 | 29 | 27 | 43 | |
| P 5 | 35 | 25 | 30 | | P 10 | 96 | 65 | 48 | 貯蔵穴 |

覆土は自然堆積の状態を示し、ローム粒子を含む黒褐色土が主である。遺物は壺形土器・环形土器・椭形土器と石製模造品が出土している。

第15号住居址(図135)

本址はC3hz・C3hs・C3i1・C3i2・C3i3・C3j1・C3j2・C3j3・C3j4・D3s1・D3s2・D3s3に確認され、C-5地区の最も南にあり、19号住居址の東に位置する。主軸方向はN-42.5°-Eで、長径10.2m・短径9.8mほどの方形の平面形を呈する。仲原遺跡で最大の規模をもつ。壁はいく分外傾して立ちあがり、壁高は40cmほどである。壁溝は幅20~30cm、深さ10cmほどで、全周している。床はロームではなく平坦で、やや柔かい。南東壁に接し、南コーナー寄りに1.7m×2.5mほど床が10cmぐらい高くなっている。炉址は中央部寄り西寄りと南東壁寄りにあり、西寄りのものは長径1.4m・短径60~70cmほどの長円形の平面形を呈しており、おそらく2つつながったものであろう。南東壁寄りのものは直径70cmほどの円形を呈し、それぞれ15cmほど掘り込んでいる。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP1~P12が確認され、P1・P2・P3・P4・P5・P6は支柱穴、P12は貯蔵穴と思われる。

| ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 | ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 |
|-------|------|------|------|----|-------|------|------|------|-----|
| P 1 | 35 | 30 | 60 | | 支柱穴 | P 7 | 33 | 27 | 52 |
| P 2 | 36 | 24 | 60 | " | P 8 | 35 | 30 | 55 | |
| P 3 | 32 | 25 | 32 | " | P 9 | 29 | 26 | 47 | |
| P 4 | 31 | 28 | 62 | " | P 10 | 30 | 26 | 50 | |
| P 5 | 32 | 29 | 72 | " | P 11 | 28 | 22 | 50 | |
| P 6 | 33 | 28 | 30 | " | P 12 | 70 | 68 | 50 | 貯蔵穴 |

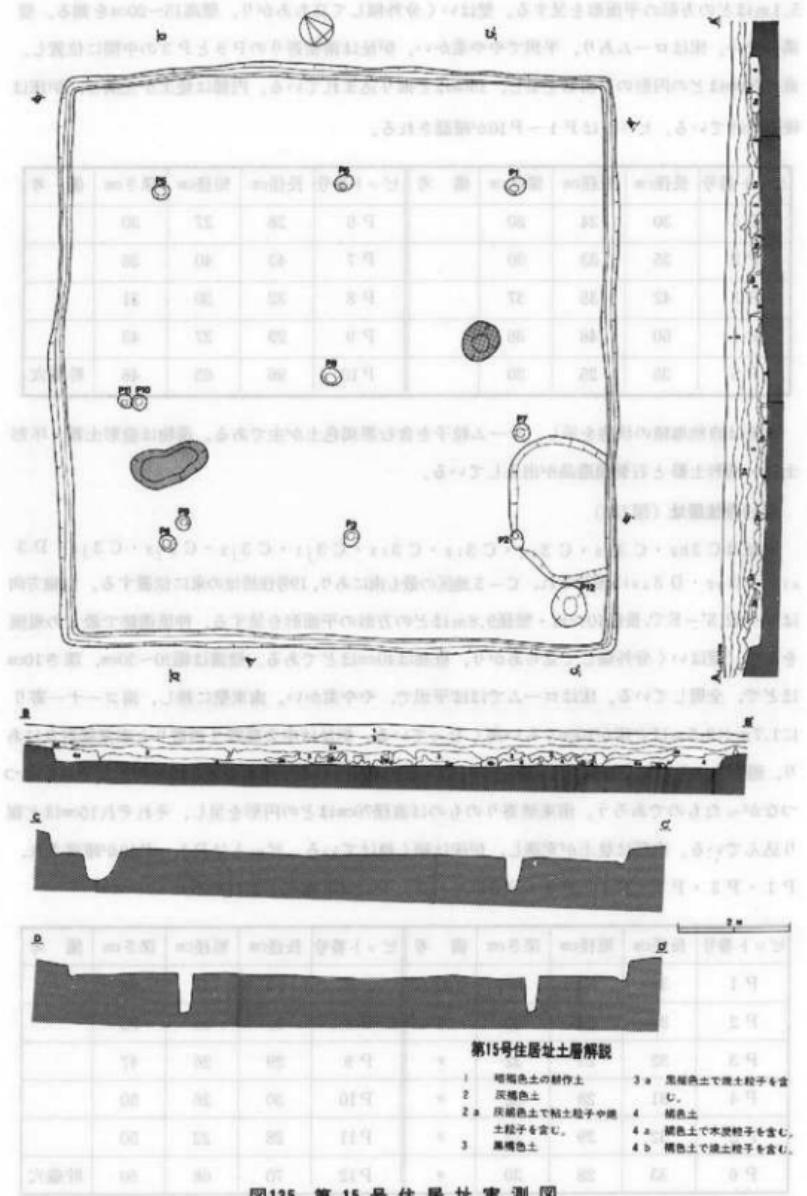


図135 第15号住居址実測図

覆土は自然堆積の状態を示し、上層は黒褐色土で下層は褐色である。遺物は壺形土器・壺形上器・小型壺形上器・杯形土器・小型裝形上器と石製模造品が出土している。

第16号住居址（図136）

本址はB3_{j4}・C3_{s4}・C3_{s5}に確認され、13号住居址と17号住居址の中間に位置する。主軸方向はN-51.5°-Wで、長径5.7m・短径5.0mほどの方形の平面形を呈する。壁はいく分外傾して立ちあがり、壁高は20~30cmほどである。壁溝は幅20cm前後、深さ10cmほどで全周している。床はロームであり、平坦でやや柔かい。炉址はP4とP3の中間に位置し、直径70cmほどの円形の平面形を呈し、10cmほど掘り込んでいる。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP1~P7が確認され、P1・P2・P3・P4は主柱穴・P7は貯蔵穴と思われる。P7は1m×80cmの方形で一段低くなった所にある。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備 考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P1 | 38 | 32 | 41 | 主柱穴 |
| P2 | 40 | 39 | 53 | " |
| P3 | 38 | 30 | 54 | " |
| P4 | 37 | 33 | 64 | " |
| P5 | 28 | 27 | 28 | " |
| P6 | 39 | 35 | 40 | " |
| P7 | 60 | 53 | 54 | 貯蔵穴 |

覆土は自然堆積の状態を示し、上層は黒褐色土で下層は褐色土である。遺物は壺形土器・壺形上器・高壺形土器・杯形土器と石製模造品が出土している。

第17号住居址（図137）

本址はB3_{j7}・B3_{j8}・B3_{j9}・C3_{s7}・C3_{s8}・C3_{s9}に確認され、C-5地区の最も東にあり、18号住居址の南に位置する。主軸方向はN-55.5°-Eで、長径4.7m・短径3.7mほどの不整形の平面形を呈する。壁は外傾して立ちあがり、壁高15~20cmを測る。壁溝はない。床はロームであり、平坦でやや柔かい。炉址は中央部よりやや北にあり、直径60cmほどの円形の平面形を呈し、10cmほど掘り込んでいる。内部は焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP1~P5が確認され、P1・P2・P3・P4は主柱穴で、P5は140×120cm、深さ64cmもあり、貯蔵穴か土壙か不明である。

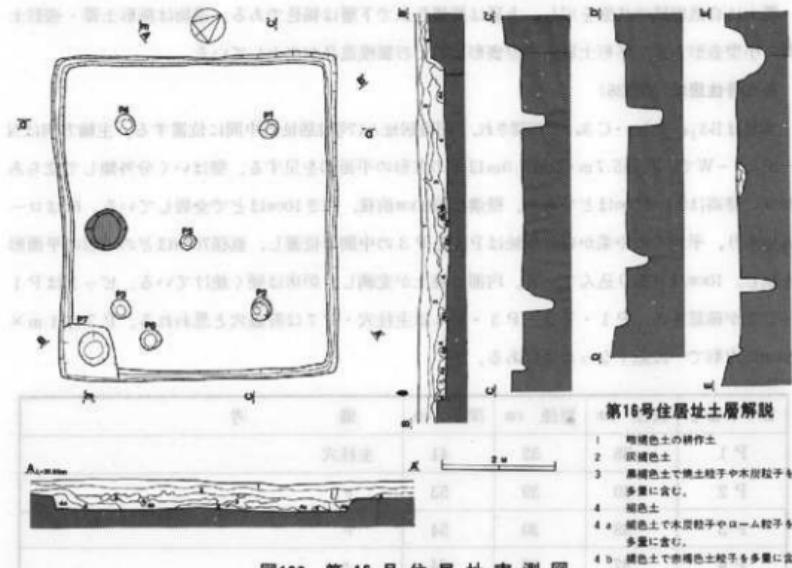


図136 第16号住居址実測図

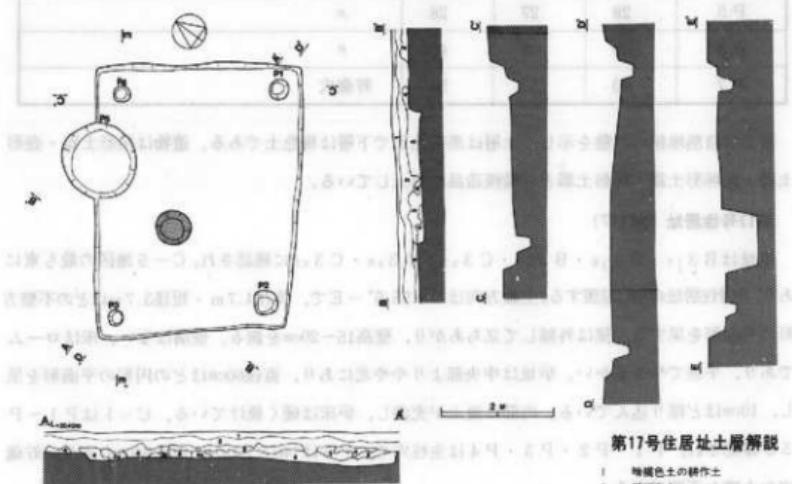


図137 第17号住居址実測図

| ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 | ピット番号 | 長径cm | 短径cm | 深さcm | 備考 |
|-------|------|------|------|-----|-------|------|------|------|----|
| P 1 | 39 | 32 | 25 | 主柱穴 | P 4 | 30 | 28 | 18 | |
| P 2 | 46 | 44 | 30 | " | P 5 | 140 | 120 | 64 | |
| P 3 | 30 | 28 | 29 | " | | | | | |

覆土は自然堆積の状態を示し、上層は黒褐色土で下層は褐色土である。遺物はほとんど出土していない。

第18号住居址（図138）

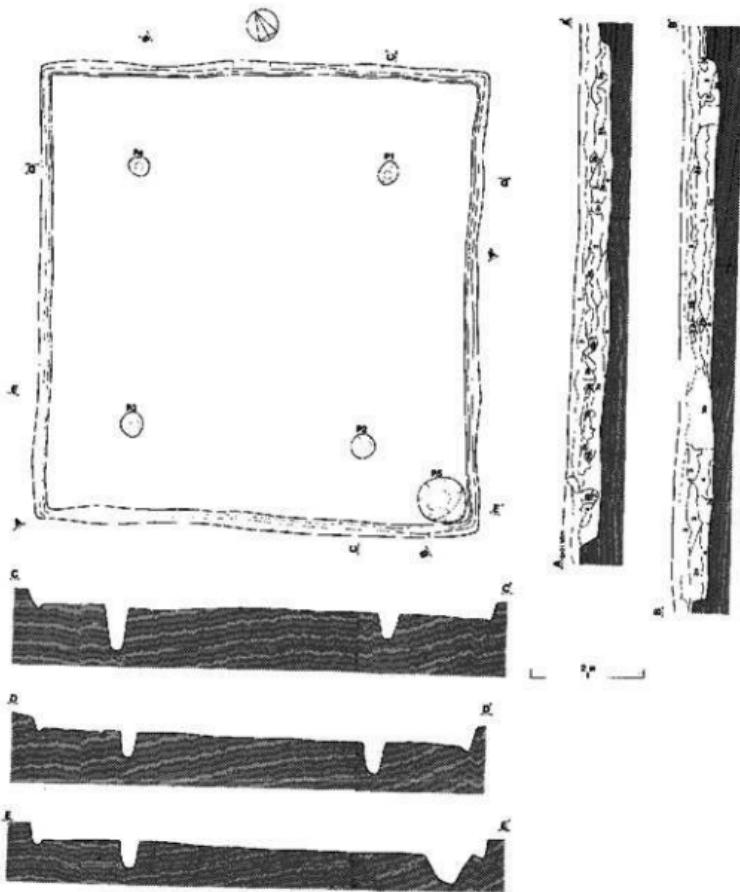
本址はB 3_{f6}・B 3_{f7}・B 3_{g6}・B 3_{g6}・B 3_{g7}・B 3_{g8}・B 3_{h5}・B 3_{h6}・B 3_{h7}・B 3_{h8}に確認され、17号住居址の北で、11号住居址の東に位置する。主軸方向はN-30°-Eで、長径8.2m・短径8.0mほどの方形の平面形を呈する。壁は外傾して立ちあがり、壁高は40cmほどである。壁溝が幅20cm・前後深さ10cmほどで全面している。床はロームであり、ほぼ平坦でそれほど硬くない。炉址は確認されなかった。ピットはP 1～P 5が確認され、P 1・P 2・P 3・P 4が主柱穴、P 5は貯蔵穴と思われる。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備 考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 45 | 33 | 44 | 主柱穴 |
| P 2 | 44 | 40 | 75 | " |
| P 3 | 45 | 29 | 48 | " |
| P 4 | 40 | 34 | 53 | " |
| P 5 | 92 | 82 | 55 | 貯蔵穴 |

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主である。遺物は壺形土器・壺形土器・小型壺形土器・壺形土器と石製模造品が出土している。

第19号住居址（図139）

本址はC 2_{i6}・C 2_{i7}・C 2_{j5}・C 2_{j5}・C 2_{j7}に確認され、C-5地区の最も西で、15号住居址の西に位置する。主軸方向はN-39.5°-Eで、長径5.8m・短径5.2mほどの方形の平面形を呈する。壁はいく分外傾して立ちあがり、壁高は20～30cmを測る。壁溝はない。床はロームであり、ほぼ平坦でいく分柔かい。炉址はP 3とP 2の間でP 3寄りに位置し、直径50cmほどの円形の平面形を呈し、10cmほど掘り込まれている。ピットはP 1～P 5が確認され、P 1・P 2・P 3・P 4が主柱穴、P 5は貯蔵穴と思われる。



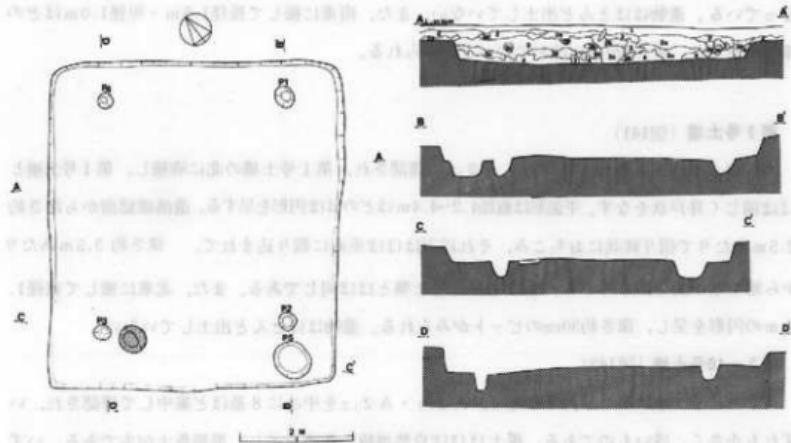
第18号住居址土層解説

1. 初褐色土で耕作土
2. 黑褐色土
- 2.a. 黑褐色土でローム粒子を含む
- 2.b. 反応性土で木炭粒子を含む
3. 黑褐色土
- 3.a. 黑褐色土でシーム粒子を含む
- 3.b. 黑褐色土で多量の黑色鉱質土を含む
4. 青色土

図138 第18号住居址実測図

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 38 | 33 | 25 | 主柱穴 |
| P 2 | 30 | 29 | 32 | " |
| P 3 | 30 | 28 | 27 | " |
| P 4 | 30 | 28 | 30 | " |
| P 5 | 72 | 64 | 30 | 貯藏穴 |

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主で最下層はソフトロームである。遺物は高環形土器と石製模造品が出土している。



第19号住居址土層解説

- 1 黒褐色土で耕作土
- 2 黑褐色土
- 2 a 黑褐色土でローム粒子を含む
- 2 b 黑褐色土で黒褐色土粒子を多量に含む
- 2 c 黑褐色土でローム粒子や黒褐色土粒子を多量に含む
- 3 黑褐色土
- 3 a 黑褐色土でローム粒子や木炭粒子を多量に含む
- 3 b 黑褐色土でローム粒子を多量に含む
- 3 c 黑褐色土でローム粒子を多量に含む
- 4 黑褐色土で柔らかい

図139 第19号住居址実測図

(2) 土 壤

土壤は全体で12基検出され、C-1地区に集中して10基(第1~10号)、C-3地区に2基(第11、12号)である。形態は円形・方形を呈するものが多い。時期、性格等は不明である。

第1号土壤(図140)

本址はA2j₂・A2j₃・B2a₂・B2a₃に確認され、第2号土壤の0.3mほどで南に隣接している。平面形は直径4.7~5.0mほどのほぼ円形を呈する。遺構確認面から深さ約2.5mあたりまで掘り鉢状に落ち込み、それ以下はほぼ垂直にさらに深く掘り込まれ、深さ3.9m付近で地下水が湧き出しており、井戸状をなす。覆土はほぼ自然堆積の様相を呈し、上層から黒褐色土・粘土粒子を含む褐色土・白色粘土や砂質粘土を含む黒褐色土となり、湧水しているあたりからは砂層となっている。遺物はほとんど出土していない。また、南東に接して長径1.5m・短径1.0mほどの椭円形を呈し、深さ約0.9mほどのピットがみられる。

第2号土壤(図141)

本址はA2i₂・A2i₃・A2j₂・A2j₃に確認され、第1号土壤の北に隣接し、第1号土壤とはほぼ同じく井戸状をなす。平面形は直径4.2~4.4mほどのほぼ円形を呈する。遺構確認面から深さ約2.5mあたりで掘り鉢状におちこみ、それ以下はほぼ垂直に掘り込まれて、深さ約3.5mあたりから地下水が湧き出している。覆土も第1号土壤とはほぼ同じである。また、北東に接して直径1.4mの円形を呈し、深さ約30cmのピットがみられる。遺物はほとんど出土していない。

第3~10号土壤(図142)

第3~10号土壤は第2号のはば北で、A2i₁・A2i₂を中心に8基ほど集中して確認され、いずれも小さく、浅いものである。覆土はほぼ自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主である。いずれも遺物は出土していない。

第3号土壤はA2i₁に確認され、長径1.65・短径1.0mの方形を呈し、深さは30cmである。

第4号土壤はA2i₁に確認され、直径1.0mほどの円形を呈し、深さは23cmである。

第5号土壤はA2h₂に確認され、直径0.6mほどの円形を呈し、深さは25cmである。

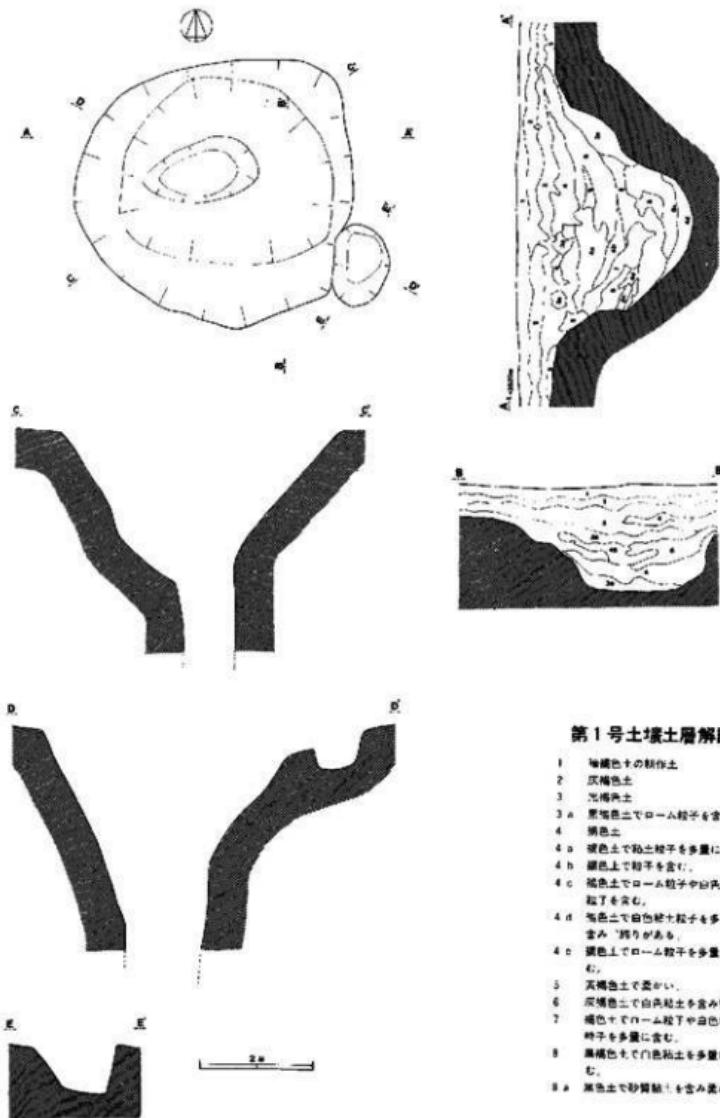
第6号土壤はA2h₂に確認され、直径1.1mほどの円形を呈し、深さは25cmである。

第7号土壤はA2h₂に確認され、直径1.1mほどの円形を呈し、深さは25cmである。

第8号土壤はA2h₂・A2i₂に確認され、直径0.9mほどの円形を呈し、深さは10cmである。

第9号土壤はA2h₂・A2h₃に確認され、長径1.65m・短径0.7mの方形を呈し、深さは30cmである。

第10号土壤はA2i₁に確認され、直径1.1mほどの円形を呈し、深さは15cmである。



第1号土壤土層解説

1. 暗褐色土の耕作土
2. 灰褐色土
3. 光褐色土
3. a 黒褐色土でローム粒子を含む。
4. 黑色土
4. b 褐色土で粘土粒子を多量に含む。
4. c 黑褐色土でローム粒子や白色粘土粒子を含む。
4. d 褐色土で白色粘土粒子を多量に含み、塊状がある。
4. e 黑色土でローム粒子を多量に含む。
5. 黑褐色土で茎かい。
6. 灰褐色土で白色粘土を含み堅い。
7. 褐色土でローム粒子や白色粘土粒子を多量に含む。
8. 黑褐色土で白色粘土を多量に含む。
8. a 黑色土で砂質粘土を含み柔かい。

図140 第1号土壤実測図

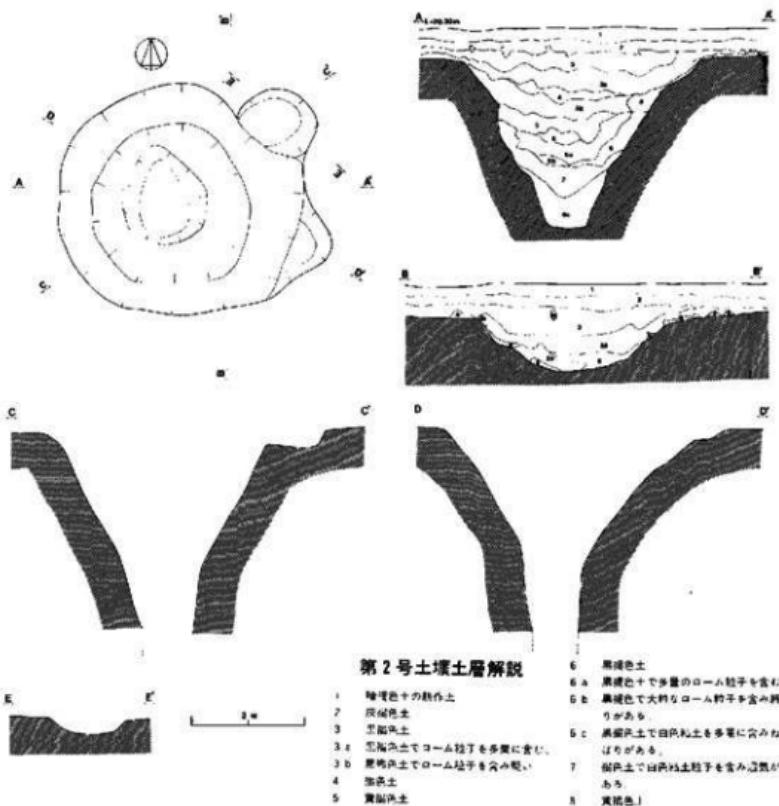


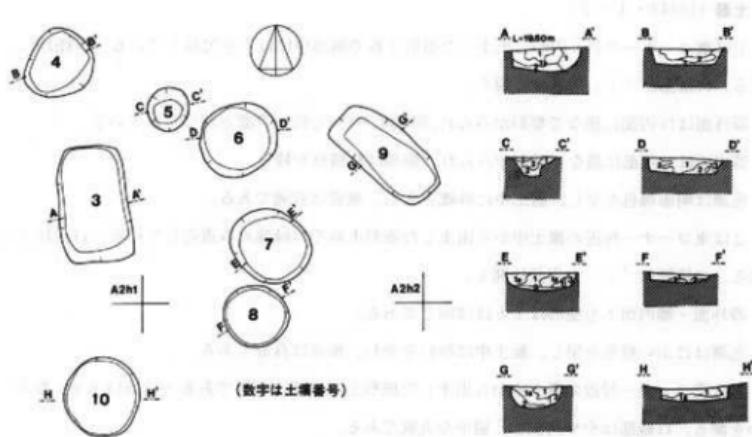
図141 第2号土壤実測図

第11号土壤(図142)

本址はD 3dzに確認され、第5号住居址の北西に隣接する。主軸方向はN-31°-Eで、平面形は長径1.4m・短径1.3mほどのほぼ方形を呈し、深さ20cmを測る。壁は外傾して立ちあがり、床はロームで硬いものではない。覆土は自然堆積の状態を呈し、黒褐色土が主である。遺物は全く出土していない。

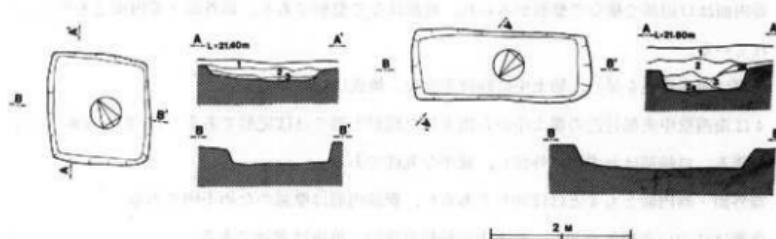
第12号土壤(図142)

本址はD 2dz・D 3dzに確認され、第4号住居址の南東で、第11号土壤のほぼ西約4mに位置する。主軸方向はN-51°-Eで、平面形は長径2.5m・短径1.0mほどの方形を呈し、深さ約30cmを測る。壁はゆるやかに外傾して立ちあがる。床面はローム舟底状をなし、硬いものではない。覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主である。遺物は全く出土していない。



第11号土壤

第12号土壤



第3～10号土壤土層解説

- 1 棕色土
1 a 棕色土でローム粒子を多量に含む
2 黒褐色土
3 黄褐色土

第11号土壤土層解説

- 1 棕色土
2 黑褐色土で多量のローム粒子を含み重たい。
3 黄褐色土

第12号土壤土層解説

- 1 棕褐色土の耕作土
2 灰褐色でローム粒子を多量に含む
2 a 灰褐色土でローム粒子や木炭粒子を含む。
3 黑褐色土でローム粒子や木炭粒子を含み重たい。

図142 第3～12号土壤実測図

2 遺物

第1号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物は比較的多く、土師式土器・土製品、石製模造品が出土している。

土器（図143・1～7）

1は東コーナーのP5内から出土した壺形土器で胴部中位以下を欠損している。口径17.2cmを測る。口縁部が「く」の字状に開く。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はけずった後へラ磨きがなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は輪積痕が残る。

色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂礫を含む。焼成は普通である。

2は東コーナー付近の覆土中から出土した壺形土器で口縁部のみ遺存している。口径15.9cmを測る。口縁部は「く」の字状に開く。

器外面・器内面とも整形は1とほぼ同じである。

色調はによい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

3は北コーナー付近の覆土中から出土した壺形土器ではほぼ完形である。口径13.6cm・器高5.2cmを測る。口縁部はやや内傾し、扁平な丸底である。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、底部は横位のへラけずり整形がなされている。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、底部はなで整形である。器外面・器内面とも丹彩がなされている。

色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

4は南西壁中央部付近の覆土中から出土した壺形土器ではほぼ完形である。口径13.5cm・器高5.4cmを測る。口縁部はわずかに外傾し、扁平な丸底である。

器外面・器内面とも4とは同じであるが、胴部内面は摩滅のため不明である。

色調はによい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は普通である。

5は南西壁中央部付近の覆土中から出土した高環形土器で脚部を欠損する。口径15.0cmを測る。口縁部はほぼ直線的に開き、底部との境に棱を有す。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、底部付近はへラけずりがなされている。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、底部はなで整形である。器外面・器内面とも丹彩がなされている。

色調はによい橙色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

6は南西壁の西コーナー寄り付近の床面から出土した高環形土器で環部を欠損する。口径12.4cmを測る。脚部は太く、中位はわずかにふくらむ。縁部は「八」の字状に開く。

器外面は全体に丹彩がなされ、脚部から胎部上部にかけ縦位のへラ磨き整形がみられる。下部は横なで整形である。

器内面は脚部でなで整形がみられ、縁部は横なで整形である。

色調はによい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

7は北東壁のやや東寄り付近の覆土中から出土した獣形土器ではほぼ完形である。口径21.9cm・器高12.0cm・底径6.3cmを測る。全体に掘り鉢状を呈し、複合口縁である。底部に直径0.8cmの穿孔がみられる。

器外面は口辺部で横なで整形がなされているが、指頭圧痕が頗著に残る。胴部は極位のへらけすりがみられる。

器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部は極位のへらなで整形である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は普通である。

土製品（図149・1～11）

1～11は土瓦で、いずれも指による整形で指頭痕が残る。色調は暗褐色や褐灰色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含む。

| 番号 | 長さ cm | 直径 cm | 孔径 cm | 重量 g | 出土位置 |
|----|-------|-------|-------|------|-----------|
| 1 | 2.2 | 2.6 | 0.6 | 15 | 北コーナー付近覆土 |
| 2 | 2.7 | 2.8 | 0.5 | 17 | " |
| 3 | 3.3 | 3.4 | 0.8 | 33 | 北コーナー一部覆土 |
| 4 | 3.7 | 3.3 | 0.9 | 27 | " |
| 5 | 3.1 | 3.0 | 0.9 | 25 | " |
| 6 | 3.2 | 3.5 | 1.1 | 37 | 北コーナー付近覆土 |
| 7 | 3.4 | 3.3 | 0.8 | 29 | 中央部西寄り覆土 |
| 8 | 3.5 | 3.5 | 0.5 | 36 | 南西壁中央付近覆土 |
| 9 | 3.1 | 3.4 | 0.8 | 31 | " |
| 10 | 2.6 | 2.7 | 0.5 | 13 | 北コーナー付近覆土 |
| 11 | 2.7 | 2.8 | 0.7 | 18 | 北コーナー一部覆土 |

石製品（図150・1）

1は本址中央部よりやや南寄りの覆土内から出土した石製模造品（双孔円板）で滑石製である。両面が平滑に研磨されている直径4.5cm・厚さ3.5mm・孔径1.5mmを測り、本遺跡出土の中では比較的大きい。

第2号住居址内出土遺物（図143・8～14）

本址からの出土遺物は少なく、いずれも破碎した土師式土器である。

8は北コーナー付近の床面から出土した壺形土器で、口縁部を欠損している。最大径15.6cm・底径4.2cmを測る。胴部は大きく張り、中位よりやや下に最大径があり、あげ底である。

器外面は脚部をけずった後に入念な縦位のヘラ磨きがなされ、丹彩がみられる。

器内面は脚部にヘラなどで整形がみられる。

色調は明赤褐色を呈し、胎土中にスコリアを含む。焼成は良好である。

9は北西壁の西コーナー寄り付近の床面から出土した小型台付窓で脚部中位以上を欠損している。台径7.7cmを測る。脚部はほぼ球形をなし、台部は「ハ」の字状に開く。

器外面は脚部にヘラけずり整形がみられ、一部ハケ目痕がある。台部は雑なハケ目がなされている。

器内面は脚部でヘラなどでがなされているが、輪袖痕が残る。台部は上部に輪積痕が残り、下部は横位のハケ目整形がみられる。

色調は黒褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は普通である。

10は南コーナー部の覆土中から出土した高环形土器で脚部と口縁上部を欠損する。口縁部は直線的に開き、底部との境に棱を有す。脚部上位に直径1.3cmの穿孔がみられる。

器外面は坏部全体に縦位の入念なヘラ磨きがみられる。

器内面も全体にヘラ磨きがなされているが、摩滅部分が多い。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好・堅い。

11は北東壁中央部付近の覆土中から出土した高环形土器で脚部と口縁上部を欠損している。口縁部は内唇気味に立ち上がる。

器外面は底部付近はヘラけずりがみられ、脚部のつけ根に縦位のヘラ磨きがなされている。

器内面はなでた後にヘラ磨きがなされている。

色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中にスコリアを含む。焼成は良好である。

12は東コーナー付近の台付窓形土器で台付のみ遺存している。台径9.7cmを測る。台部は直線的に「ハ」の字状に開く。

器外面は縦位・器内面には横位のハケ目整形がみられる。

色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は普通である。

13は北コーナー付近の覆土中から出土した台付窓形土器で底部と台部のみ遺存している。台径10.8cmを測る。台部は直線的に「ハ」の字状に開く。

器外面は雑なハケ目整形がみられる。器内面は底部・台部ともなで整形である。

色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

14は中央部より南東壁寄り付近の覆土中から出土した台付窓形土器で台付のみ遺存している。台径6.8cmを測る。台部は「ハ」の字に開く。

器外面・器内面ともなで整形がなされている。

色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

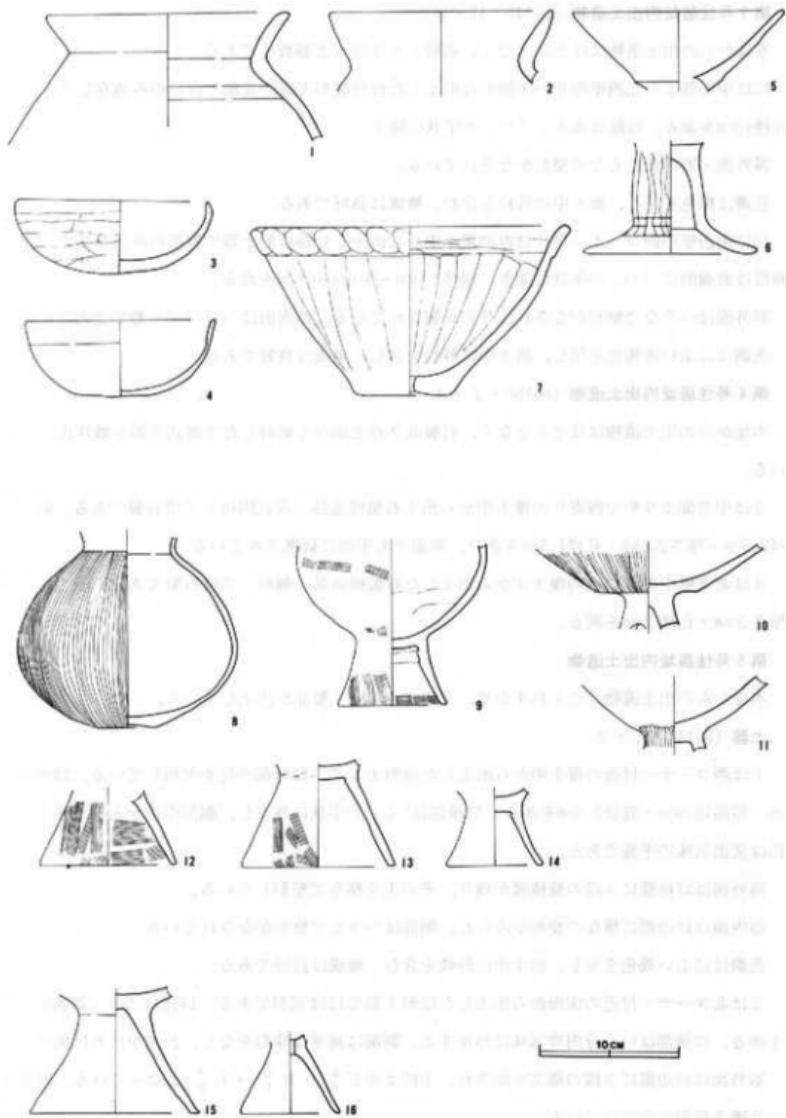


图143 第1·2·3号住居址出土遗物

第3号住居址内出土遺物（図143・15・16）

本址からの出土遺物はほとんどなく、破碎した土師式土器数片である。

15は中央部より北西壁寄りの床面から出土した台付壺形土器で底部と台付のみ遺存している。台径12cmを測る。台部は大きく「ハ」の字状に開く。

器外面・器内面ともなで整形がなされている。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

16は南西壁の西コーナー寄り付近の覆土中から出土した器台形土器で脚部のみ遺存している。脚部は直線的に「ハ」の字状に開き、裾径7.0cm・中央孔0.6cmを測る。

器外面はへラなで整形がなされ、丹影が施されている。器内面はへラけずり整形である。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

第4号住居址内出土遺物（図150・2・3）

本址からの出土遺物はほとんどなく、石製品2点と細かく破碎した土師式土器が数片出土している。

2は中央部よりやや西寄りの覆土中から出土石製模造品（双孔円板）で滑石製である。最大直径2.5cm・厚さ2.5mm・孔径1.5mmを測り、両面とも平滑に研磨されている。

3は北東壁中央部付近の覆土中から出土した石製模造品（剣形）で滑石製である。長さ4.3cm・厚さ3mm・孔径2mmを測る。

第5号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物はごくわずかで、土師式土器と土製品が出土している。

土器（図144・1・2）

1は西コーナー付近の覆土中から出土した壺形土器で、口縁部の劣化を欠損している。口径16.0cm・器高15.9cm・底径7.6cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部中位が大きく張る。底部は突出気味の平底である。

器外面は口縁部に3段の輪積痕が残り、その上を横なで整形している。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部はへラなで整形がなされている。

色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

2は北コーナー付近の床面から出土した壺形土器ではほぼ完形である。口径11.5cm・器高8.2cmを測る。口縁部はいく分内側気味に外反する。底部は扁平な球形をなし、わずかにあげ底である。

器外面は口辺部に3段の縄文が配され、上段よりL^R・R^L・L^Rとなっている。胴部はへラ磨き整形がなされている。

器内面は全体にへラ磨きがなされ、小円形の剥離が多数みられる。

色調は黒褐色を呈し、胎土中に砂粒（細砂）を含む。焼成は良好である。

土製品（図149、12・13）

12・13はいずれも上玉で、指による整形がみられ指痕痕が残る。色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。12は北西壁下や西コーナー寄りの床面から出土し、長さ3.0cm・直径3.2cm・孔径0.6cm・重量30gを測る。13は北コーナー付近の床面から出土し、長さ3.1cm、直径3.3cm・孔径0.6cm・重量32gを測る。

第6号住居内出土遺物

本址からの出土遺物は比較的多い方で、土師式土器・土製品が出土している。

土器（図144・3～10）

3は南コーナーの床面から出土した壺形土器で胴部以下を欠損している。口径19.3cmを測る。口縁部は大きく外反し、折り返しの複合口縁をなす。頸部はいく分外傾して立ち上がり、口縁部との境に稜を有す。

器外面は口辺の折り返し部に横位のヘラ磨きがなされ以下頸部まで縦位の入念なヘラ磨きがみられる。器内面も口辺部から底部まで縦位のヘラ磨き整形である。

色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

4は南コーナーの覆土中から出土した壺形土器で、口縁部を欠損している。底径5.7cmを測る。胴部はほぼ球形をなし、底部は突出気味で平底である。

器外面はヘラけずり整形がみられ、器外面はヘラなで整形である。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂礫を含む。焼成は良好である。

5は西コーナー付近の覆土中から出土した小型の壺形土器で胴部下位以下を欠損する。口径9.3cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、頸部内面に明瞭な稜を有す。胴部は大きく張る。

器外面・器内面とも口辺部は横なで整形がみられ、胴部はなで整形がなされている。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

6は南コーナーの覆土中から出土した壺形土器で完形である。口径18.0cm・器高13.7cm・底径6.4cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部上位が張る。平底で中央に底径3.3cmほどの焼成後の穿孔がみられる。

器外面は口辺部に横位・頸部に縦位のハケ目整形がみられ、胴部はハケ目整形の後に横位のヘラ磨きがなされている。

器内面は口辺部に横位のハケ目整形・胴部はヘラなで整形である。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成はやや軟弱である。

7は東コーナーの覆土中から出土した小型の壺形土器で完形である。口径6.8cm・器高9.0cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、平底である。

器外面は全体になで整形がなされ、器内面は口辺部でなで整形、胴部でヘラなで整形である。

色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

8はP内から出土した小型の壺形土器で口縁部を欠損する。底径2.8cmを測る。胸部はほぼ球形をなし、突出気味の平底である。

器外面は未調整であり、器内面はへらなで整形である。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

9は東コーナーの覆土中から出土した小型の壺形土器で完形である。口径6.0cm・器高8.0cmを測る。口縁部はいく分外傾して立ちあがり、平底である。

器外面は口辺部にへらなで整形がみられ、胸部は未調整である。器内面は全体にへらなで整形がなされている。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

10は南コーナー付近の床面から出土した小型の壺形土器で、口径6.1cm・器高8.4cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、胸部はほぼ球形をなす。やや突出気味の平底である。

器外面は全体に未調整である。器内面は口辺部に横なで整形、胸部はへらなで整形である。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

土製品(図149・14~25)

14~25は土器で、いずれも指による整形がなされ指痕痕が残る。色調はにぶい褐色や暗褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

| 番号 | 長さ cm | 直径 cm | 孔径 cm | 重量 g | 出土位置 |
|----|-------|-------|-------|------|---------------|
| 14 | 3.1 | 3.0 | 0.7 | 28 | 中央部より南西壁寄りの床面 |
| 15 | 3.2 | 3.2 | 0.5 | 34 | " |
| 16 | 3.2 | 3.3 | 0.5 | 32 | " |
| 17 | 3.2 | 3.3 | 0.5 | 33 | " |
| 18 | 3.9 | 3.5 | 0.3 | 44 | " |
| 19 | 3.2 | 3.3 | 0.8 | 33 | 南東壁中央部付近の床面 |
| 20 | 3.4 | 3.5 | 0.7 | 40 | " |
| 21 | 3.1 | 3.3 | 0.6 | 32 | 西コーナーの床面 |
| 22 | 3.3 | 3.3 | 0.5 | 35 | " |
| 23 | 3.7 | 3.8 | 0.6 | 49 | 北コーナー付近の覆土 |
| 24 | 3.5 | 3.4 | 0.7 | 34 | " |
| 25 | 3.2 | 3.5 | 0.7 | 34 | " |

第7号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物は少なく、土師式土器と土製品・石製品が出上している。

土器 (図144・11~14)

11は中央部の覆土中から出土した壺形土器で完形である。口径16.9cm・器高24.0cm・底径5.8cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、胴部はほぼ球形をなす。底部は突出した平底である。

器外面は口辺部に横なで整形、肩部にハケ目整形がみられる。胴部はヘラけずりがなされている。器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はヘラなで整形である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

12は南コーナーの覆土中から出土した壺形土器ではば完形である。口径14.3cm・器高5.9cmを測る。口縁部は器肉が薄くわずかに外傾し、丸底である。

器外面は口辺部に横なで整形・胴部はヘラけずり整形がみられる。器内面は口辺部で横なで、底部はなで整形である。器外面・器内面とも丹彩がなされている。

色調は赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

13は西コーナーの床面から出土した壺形土器で完形である。口径13.2cm・器高6.4cmを測る。口縁部は内側に内側に外反し、扁平な丸底である。

器外面は口辺部に横なで整形、底部はヘラけずり整形である。器内面は口辺部に横なで整形・底部はヘラ磨きがみられる。器外面・器内面とも丹彩がなされている。

色調は赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

14は西コーナーの床面から出土した壺形土器ではば完形である。口径8.1cm・器高11.7cmを測る。口縁部は内側に外反し、扁平な球形をなす。扁平な丸底である。

器外面は口辺部に横なで整形、胴部はヘラけずり整形である。器内面は口辺部に横なで整形・胴部は渦渦しておらず不明である。器外面・器内面とも丹彩が施されている。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

土製品 (図149・26~32)

26~32は土玉でいずれも指による整形がなされ、指頭痕が残る。色調はほとんどが灰褐色、あるいは暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含む。焼成は良好である。

| 番号 | 長さ cm | 直径 cm | 孔径 cm | 重量 g | 出 土 位 置 |
|----|-------|-------|-------|------|---------------|
| 26 | 3.1 | 3.0 | 0.7 | 28 | 中央部より南東壁寄りの床面 |
| 27 | 3.3 | 3.4 | 0.8 | 36 | 〃 |
| 28 | 4.1 | 2.8 | 0.7 | 33 | 中央部の床面 |
| 29 | 3.0 | 3.0 | 0.5 | 20 | 〃 |

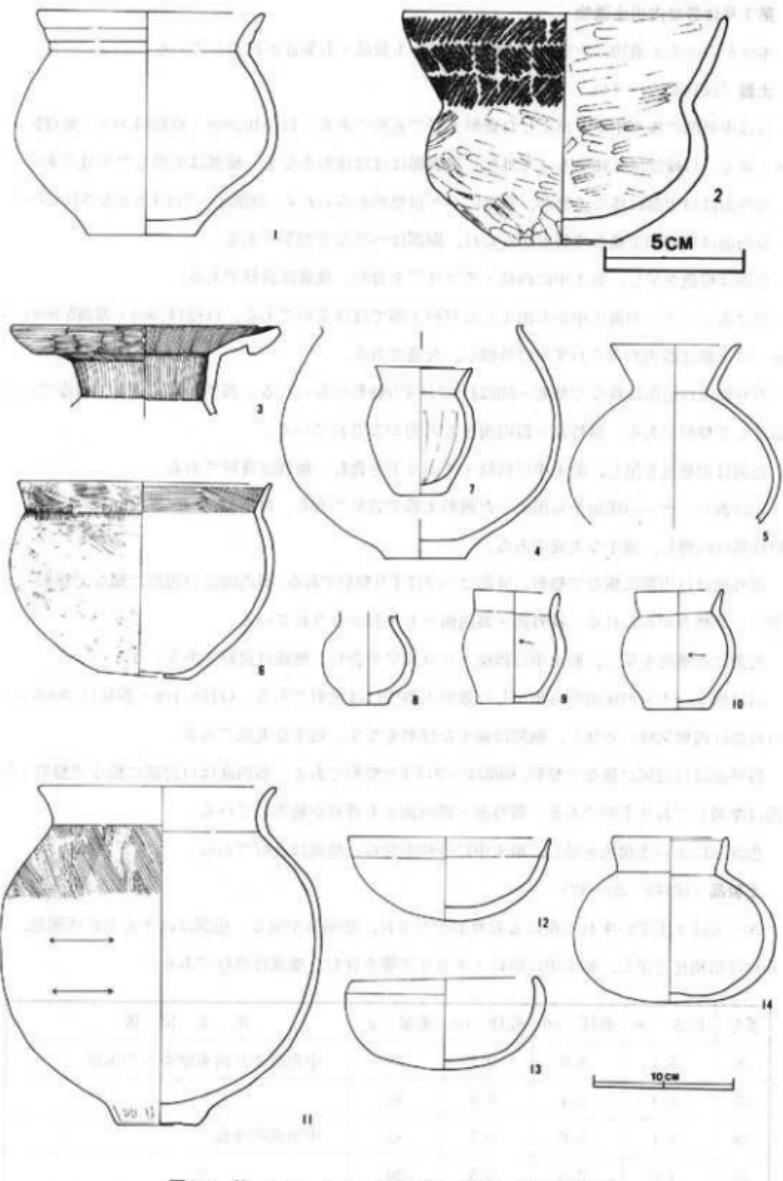


圖144 第5・6・7號住居址出土遺物

| 番号 | 長さ cm | 直径 cm | 孔径 cm | 重量 g | 出土位置 |
|----|-------|-------|---------|------|--------------|
| 30 | 3.1 | 3.4 | 0.9 | 31 | 中央よりやや南寄りの床面 |
| 31 | 3.1 | 3.1 | 0.6 | 25 | 南コーナーの床面 |
| 32 | 3.2 | 3.0 | 1.2~0.6 | 25 | 北西壁寄りの床面 |

石製品（図150・4～6）

4は中央部よりやや西寄りの床面から出土した石製模造品（双孔円板）で滑石製である。最大直径2.0cm・厚さ2mm・孔径1mmを測る。両面とも平滑に研磨されている。

5は西コーナー付近の床面から出土した石製模造品（勾玉）で滑石製である。½を欠損しており、厚さ8.5mmを測る。両面とも研磨されてなく本製品である。

6は西コーナー付近の床面から出土した滑石片で、片面は平滑に研磨されている。

第8号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物は多く、上師式土器と石製品が出土している。

土器（図145・1～12）

1は中央部よりやや北寄りの覆土中から出土した壺形土器で口縁部を欠損する。最大径24.5cm・底径7.0cmを測る。胴部はほぼ球形をなし、底部は突出気味のあげ底である。

器外面は難なへラけずり整形がみられる。器内面はへラなで整形である。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

2は南東壁の東コーナー寄りの覆土中から出土した壺形土器で口縁部と胴部上位のみ遺存する。口径19.5cmを測る。口縁部は丸味をもって外反する。胴部は大きく張る。

器外面は口辺部で横なで整形・胴部はへラけずり整形である。器内面は口辺部に横なで整形・胴部はなで整形である。

色調はにほい橙色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

3は中央部よりやや北寄りの覆土中から出土した壺形土器で口縁部のみ遺存している。口径20.5cmを測る。口縁部は丸味をもって大きく外反する。

器外面・器内面とも口辺部に横なで整形がみられる。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

4は北コーナー付近の覆土中から出土した壺形土器で口縁部のみ遺存している。口径16.1cmを測る。壺形・整形・色調・胎土・焼成とも2とはほぼ同じである。

5は南東壁中央部付近の覆土中から出土した壺形土器で完形である。口径15.2cm・器高6.6cmを測る。口縁部はわずかに外反し丸底である。

器外面は口辺部に横なで、底部はへラけずり整形がみられる。器内面は口辺部に横なで、底部は

なで整形である。器外面・器内面とも丹彩がなされている。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

6は中央部より北寄りの覆土中から出土した楕形土器ではほぼ完形である。口径16.7cm・器高7.4cmを測る。器形・整形・胎土・焼成とも5とはほぼ同じで、色調は明赤褐色を呈す。

7は北コーナー付近の覆土中から出土した楕形土器ではほぼ完形である。口径16.0cm・器高5.4cmを測る。口縁部は内彎して立ちあがり、扁平な丸底である。

器外面は口辺部に横なで、底部にへらけずり整形がみられる。器内面は口辺部に横なで、底部にへらなで整形がみられる。器外面・器内面とも丹彩がなされている。

色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

8は北西壁中央部付近の床面から出土した壺形土器で口縁部上半を欠損している。最大径17.0cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、胴部中位は大きく張り扁平な球形をなす。丸底である。

器外面は口辺部で横なで整形、胴部でへら磨きがなされている。器内面は口辺部で横なで整形・胴部は摩滅で不明である。器外面・器内面とも丹彩がみられる。

色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

9は北西壁中央部付近の床面から出土した壺形土器で完形である。口径11.0cm・器高15.1cmを測る。器形は8とはほぼ同じである。

器外面は口辺部に横なで整形・胴部はへらけずり整形がみられる。器内面は口辺部にけずった後へら磨きがみられ、胴部はへらなで整形である。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

10は北西壁中央部付近の覆土中から出土した壺形土器で器部下位以下を欠損している。口径9.2cmを測る。器形は9とはほぼ同じである。

器外面は口辺部で横なで整形・胴部でへらけずり整形がなされている。器内面は口辺部と横なで整形・胴部はへらなで整形である。器外面・器内面とも丹彩がなされている。

色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

11は南東壁の東コーナー寄り付近の床面から出土した小型の壺形土器で完形である。口径14.2cm・器高13.4cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、胴部上位が張る。平底である。

器外面は口辺部で横なで整形・胴部はへらけずり整形であり、肩部にへら状用具の圧痕がみられる。全体に煤が付着している。器内面は口辺部で横なで整形、胴部でへらなで整形である。

色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

12は南東壁の東コーナー寄り付近の覆土中から出土した壺形土器で口縁部の一部を欠損する。口径15.9cm・器高19.7cmを測る。口縁部はやや外反し、底部に直径1.6cmの穿孔がみられる。

器外面・器内面とも口辺部は横なで整形がみられ、胴部は未調整で輪穂痕が頭者に残る。

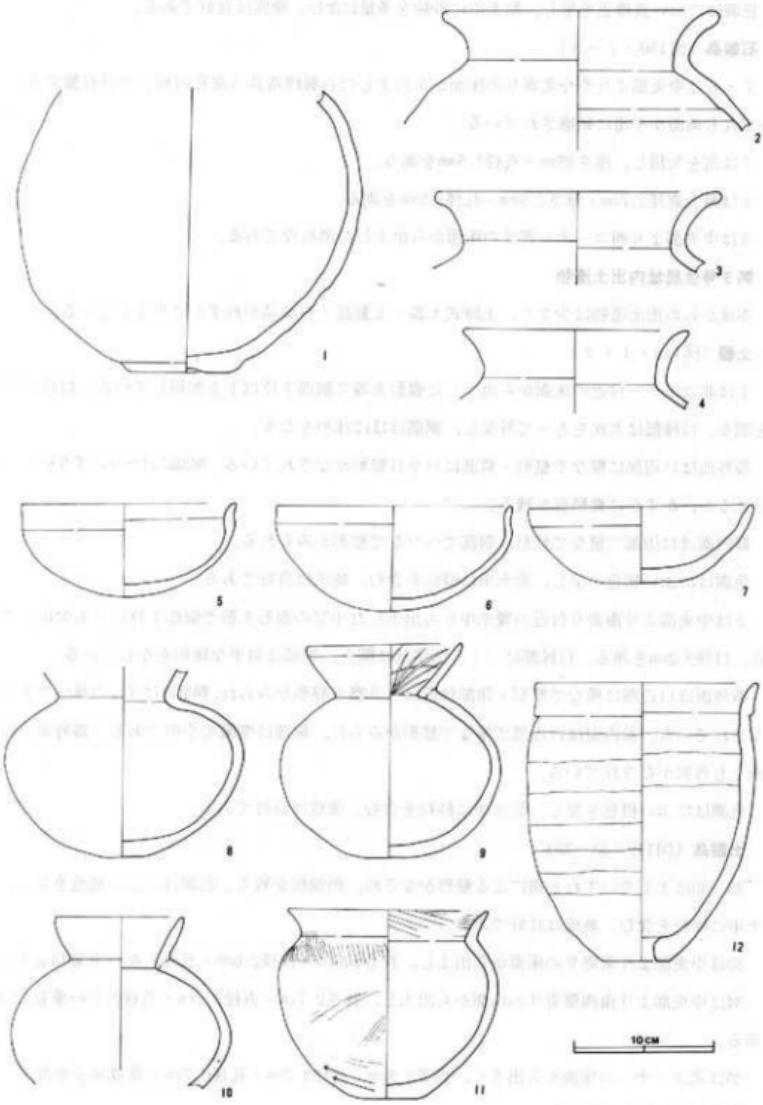


圖145 第8號住居址出土遺物

10 CM

色調はによい黄橙色を呈し、胎土中に砂粒を多量に含む。焼成は良好である。

石製品（図150・7～9）

7・8は中央部よりやや北寄りの床面から出土した石製模造品（双孔円板）で滑石製である。いずれも両面が平滑に研磨されている。

7は%を欠損し、厚さ35mm・孔径1.5mmを測る。

8は最大直径2.7cm・厚さ2.5mm・孔径1.5mmを測る。

9は中央部より西コーナー寄りの床面から出土した滑石片である。

第9号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物は少なく、土師式土器・土製品・石製品がわずかに出土している。

土器（図146・1・2）

1は北コーナー付近の床面から出土した壺形土器で胴部下位以下を欠損している。口径17.3cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、胴部はほぼ球形をなす。

器外面は口辺部に横なで整形・肩部にハケ目整形がなされている。胴部にはへラけずり整形がみられるが、かすかに輪積痕が残る。

器内面は口辺部で横なで整形、胴部でへらなで整形がみられる。

色調はによい褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

2は中央部より南寄り付近の覆土中から出土した小型の壺形土器で胴部下位以下を欠損している。口径9.2cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、胴部は扁平な球形をなしている。

器外面は口辺部に横なで整形・頸部付近はへラ磨き整形がみられ、胴部はけずった後へラ磨きがなされている。器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部は摩滅で不明である。器外面・器内面とも丹彩がなされている。

色調はによい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

土製品（図149・33～35）

33～35は上玉でいずれも指による整形がなされ、指頭痕が残る。色調はによい褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

33は中央部より東寄りの床面から出土し、長さ2.6cm・直径2.6cm・孔径0.4cm・重量14gを測る。

34は中央部より南西壁寄りの床面から出土し、長さ2.7cm・直径3.2cm・孔径0.7cm・重量23gを測る。

35は北コーナーの床面から出土し、長さ3.3cm・直径3.7cm・孔径0.7cm・重量36gを測る。

石製品（図150・10～14）

10、11はいずれも北東壁寄りの床面から出土した石製模造品（双孔円板）で滑石製である。

10は両面とも研磨され、最大直径2.8cm・厚さ4.5mm・孔径2mmを測る。

11は一部欠損し、片面のみ研磨されている。最大直径2.0cm・厚さ5mm・孔径2mmを測る。

12~14は石製模造品(剣形)で滑石製である。いずれも両面とも平滑に研磨されている。

12は中央部よりやや北の床面から出土し、長さ4.4cm・厚さ4mm・孔径1.5mmを測る。

13は中央部よりやや東の床面から出土し、長さ4.0cm・深さ2.5cm・孔径2mmを測る。

14は北コーナーの床面から出土し、長さ3.4cm・厚さ3mm・孔径1.5mmを測る。

第10号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物は少なく、土師式土器と石製品が出土している。

土器(図146・3~5)

3は北コーナー付近の覆土中から出土した壺形土器で胴部下位以下を欠損している。口径17.2cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は上位で少し張り、そのままほぼ垂直にさげる。

器外面は口辺部で横なで整形、胴部は上位に目の荒いハケ目痕がみられ、以下へラけずりである。

器内面は口辺部で目の荒い横位のハケ目整形、胴部はヘラなで整形である。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

4は東コーナー付近の覆土中から出土した壺形土器で胴部中位以下を欠損する。口径17.4cmを測る。口縁部は丸味をもって外反する。

器外面は口辺部に横なで整形、以下目の荒い斜位のハケ目整形がみられ、胴部はヘラけずり整形である。

器内面は口辺部に横なで整形、胴部には輪積痕が残る。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

5は東コーナー付近の覆土中から出土した壺形上器ではほぼ完形である。口径15.6cm・器高4.9cmを測る。口縁部は底部との境に棱を有して外傾し、丸底である。

器外面は口辺部で横なで整形、底部はヘラけずり整形がみられる。器内面は口辺部で横なで整形、胴部はヘラなで整形がみられる。器外面・器内面とも丹彩がなされている。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

石製品(図150・15~19)

15・16は石製模造品(双孔円板)で滑石製である。いずれも両面は平滑に研磨されており、16は15を欠損している。

15は北コーナー寄りの床面から出土し、最大直径4.3cm・厚さ4mm・孔径2mmを測る。

16は南コーナー寄りの床面から出土し、最大直径4.3cm・厚さ3mm・孔径2mmを測る。

17は北西壁の北コーナー寄りの床面から出土した石製模造品(剣形)で石製品である。長さ5.6cm、厚さ4mm、孔径1.5mmを測る。

18・19はいずれも滑石片である。18は南コーナー寄りの床面、19は西コーナー寄りの床面から

出土している。

第11号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物は石製品が多く、土器は少ない。いずれも石製模造品で、ほとんどが床面出土である。土器は土師式土器である。

土器（図146・6～8）

6は中央部より東寄り付近覆土中から出土した橢形土器で完形である。口径15.0cm・器高7.0cmを測る。口縁部はわずかに外傾をなし、丸底である。

器外面・器内面とも口辺部に横なで整形・底部はなで整形である。器外面・器内面とも丹彩がなされている。

色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

7は東コーナー付近の覆土中から出土した橢形土器でほぼ完形である。口径15.0cm・器高6.7cmを測る。口縁部はいく分内弯し、扁平な丸底である。

整形・胎土・焼成は6とほぼ同じで、色調はにぶい橙色を呈す。

8は中央部より北西壁寄り付近の覆土中から出土した高環形土器で脚部下半のみ遺存している。幅径12.0cmを測る。脚部はほぼ垂直に立ちあがり、裾部は大きく外反する。

器外面は脚部にへラけず整形・裾部で横なで整形がみられ、丹彩がなされている。

器内面は脚部にへラけず整形がみられ、裾部は未調整である。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

石製品（図151・1～14）

1～9は石製模造品（双孔凹板）で滑石製である。ほとんどが両面研磨されている。

| 番号 | 最大直径cm | 厚さ mm | 孔径 mm | 出上位置 |
|----|--------|-------|-------|---------------------|
| 1 | 4.1 | 4.0 | 2.0 | 中央部よりやや北西壁寄りの床面 |
| 2 | 3.7 | 3.0 | 2.5 | 中央部より南コーナー寄りの床面 |
| 3 | 2.8 | 4.0 | 2.0 | 中央部より北コーナー寄りの床面 |
| 4 | 3.0 | 2.5 | 1.5 | 中央部より北東壁際北コーナー寄りの覆土 |
| 5 | 2.6 | 3.5 | 1.5 | 中央部より北西壁寄りの床面 |
| 6 | 2.2 | 3.5 | 1.5 | # |
| 7 | 2.0 | 3.0 | 1.5 | 中央部より北東壁寄りの覆土 |
| 8 | 1.85 | 3.5 | 1.5 | 中央部より北東壁寄りの床面 |
| 9 | 2.1 | 3.0 | 2.0 | 北西壁北コーナー寄り付近の床面 |

10～12は石製模造品（刺形）で滑石製である。

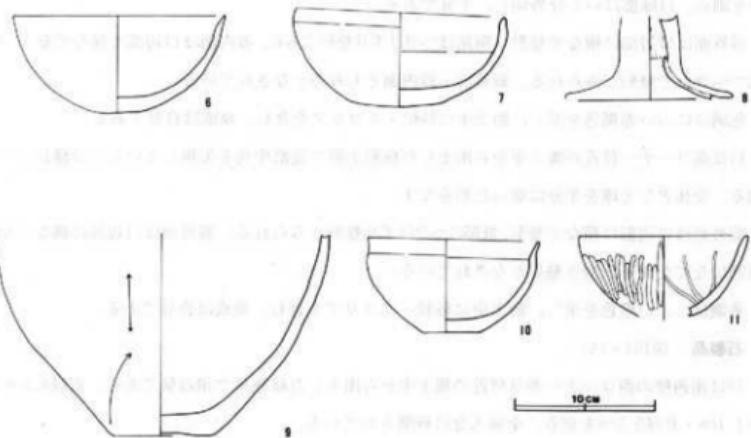
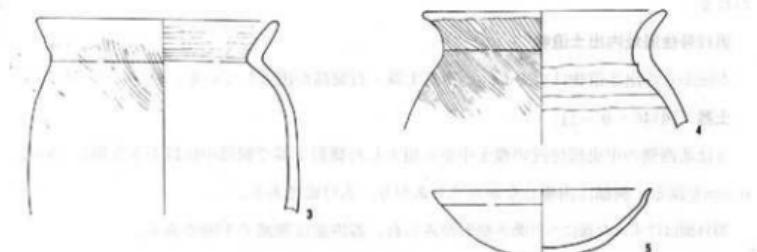
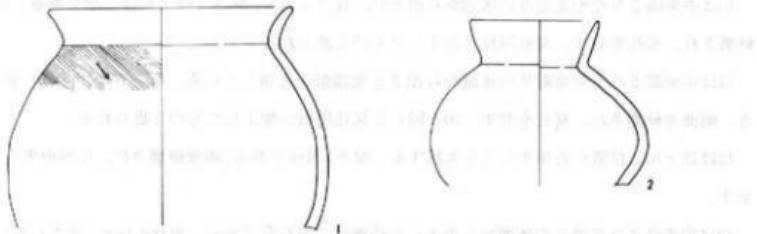


圖146 第9·10·11·12號住居址出土遺物

Figure 146 shows four pieces of pottery from residential site numbers 9, 10, 11, and 12. The pieces are depicted as line drawings. Item 9 is a wide, shallow vessel with a flared base and a curved rim. Item 10 is a wider vessel with a flared base and a curved rim. Item 11 is a narrow vessel with a flared base and a curved rim. Item 12 is a narrow vessel with a flared base and a curved rim. A scale bar at the bottom right indicates 10 cm.

10は中央部よりやや北寄りの床面から出土し、長さ3.2cm・厚さ3mm・孔径1mmを測る。両面研磨され、双孔を有す。双孔円板を加工したものと思われる。

11は中央部よりやや東寄りの床面から出土し先端部を欠損している。厚さ3mm・孔径1.5mmを測る。両面を研磨され、双孔を有す。10と同じく双孔円板を加工したものと思われる。

12は10と同じ位置から出土し1%を欠損する。厚さ3.5mmを測る。両面研磨され、片面中央に縦を有す。

13は中央部より北寄りの床面から出土した紡錘車で滑石製である。直径4.6cm・厚さ1.3cm・孔径6.5cmを測る。明瞭に面取りされ全面入念に研磨されている。

14は中央部の床面から出土した滑石片で厚さ5mmを測る。両面が研磨されており、未製品と思われる。

第12号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物は少なく、土師式土器・石製品が出上している。

土器（図146・9～11）

9は北西壁の中央部付近の覆土中から出土した變形土器で胴部中位以下を欠損している。底径6.8cmを測る。胴部は内側しながら立ちあがり、あげ底である。

器外面はけずった後にヘラ磨き整形がみられ、器内面は摩滅で不明である。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂砾を含む。焼成は良好である。

10は南コーナー付近の覆土中から出土した楕形土器でほぼ完形である。口径12.2cm・器高6.6cmを測る。口縁部はいく分外傾し、平底である。

器外面は口辺部に横なで整形、胴部はヘラけずり整形である。器内面は口辺部で横なで整形、胴部でヘラなで整形がみられる。器外面・器内面とも丹彩がなされている。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

11は南コーナー付近の覆土中から出土した楕形土器で底部中央を欠損している。口径12.1cmを測る。全体として球を半分に切った形をなす。

器外面は口辺部に横なで整形、底部にヘラけずり整形がみられる。器外面は口辺部に横なで整形、底部はなでた後ヘラ磨き整形がなされている。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

石製品（図151・15）

15は南西壁の西コーナー寄り付近の覆土中から出土した紡錘車で滑石製である。直径4.9cm・厚さ1.1cm・孔径5.5cmを測る。全面入念に研磨されている。

第13号住居址内出土遺物（図151・16～18）

本址からの出土遺物はごく少なく、わずかに石製品が出土し他は細かく破碎した土師式土器で

ある。

16は北コーナー寄りの床面から出土した石製模造品（双孔円板）で滑石製である。比較的大きく最大直径3.8cm・厚さ3.5mm・孔径1.5mmを測る。両面とも平滑に研磨されている。

17は中央部よりやや北寄りの床面から出土した滑石片で長さ3.5cm・厚さ4mmを測る。全体として勾玉形をなし、未製品かと思われる。

18は北コーナー付近の床面から出土した滑石片である。

第14号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物は多い方であるが、土器はほとんどが破碎した土師式土器であった。また、石製品（白玉）が床面から多数出土している。

土器（図147・1～4）

1は南東コーナー寄りの南壁付近覆土中から出土した壺形上器で胴部中位以下を欠損している。口径15.2cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、折り返し痕が残る。胴部はけずった後へラ磨きがなされている。器内面は口辺部で横なで整形、胴部は横位のへラなで整形である。

色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土中に砂粒、スコリアを含む。焼成は良好である。

2は南西コーナー付近の覆土中から出土した壺形上器で底部を欠損する。口径13.2cmを測る。口縁部は丸味をもって外反し、胴部上位は大きく張る。

器外面は口辺部で横なで整形、胴部は縦位のへラけずり整形である。器内面は口辺部に横なで整形、胴部はへラなで整形がみられる。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は普通である。

3は南壁中央部付近の覆土中から出土した壺形上器ではば完形である。口径15.3cm・器高5.1cmを測る。口縁部は外傾し、あげ底である。

器外面・器内面とも口辺部は横なで整形、胴部は摩滅のため不明である。器外面・器内面とも丹彩がみられる。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成はやや軟弱である。

4は南東コーナー付近の床面から出土した壺形土器で底部を欠損している。口径12.8cmを測る。口縁部は内側する。

器外面は口辺部で横なで整形、胴部は横位のへラけずり整形がみられる。器内面は口辺部・胴部とも横なで整形がみられる。器外面の口辺部と器内面全体に丹彩がなされている。

色調はにぶい褐色を呈し、胎土中にスコリアを含む。焼成は良好である。

石製品（図151・19・図152・1～13）

第95図の19は北壁中央部付近の覆土中から出土した石製模造品（劍形）で滑石製である。厚さ

3mmを測り、底を欠損する。両面とも平滑に研磨されている。

第96図の1~13は白玉でありいずれも滑石製である。よく研磨され輪切りを思わせる。1・2は北西コーナー寄りの西壁下の床面、3~13は北西コーナー付近の床面から出土している。

| 番号 | 長さ mm | 直径 mm | 孔径 mm | 番号 | 長さ mm | 直径 mm | 孔径 mm |
|----|-------|-------|-------|----|-------|-------|-------|
| 1 | 3.0 | 5.0 | 1.5 | 8 | 3.7 | 4.5 | 1.5 |
| 2 | 2.6 | 4.0 | 1.3 | 9 | 3.0 | 4.3 | 1.2 |
| 3 | 3.0 | 4.5 | 1.7 | 10 | 3.0 | 4.0 | 1.2 |
| 4 | 2.5 | 4.2 | 1.3 | 11 | 2.5 | 4.7 | 1.5 |
| 5 | 2.5 | 4.5 | 1.5 | 12 | 2.3 | 4.7 | 1.5 |
| 6 | 2.3 | 4.3 | 1.2 | 13 | 4.0 | 4.5 | 1.7 |
| 7 | 2.0 | 4.7 | 1.3 | | | | |

第15号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物は多く、土師式土器・石製品が出土している。

土器(図147・5~16)

5は南コーナーの覆土上から出土した壺形土器ではば完形である。口径16.6cm・器高28.5cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し、折り返しの複合口縁をなす。胴部はほぼ球形をなし、いくぶんあげ底である。

器外面は口辺部で横なで整形、胴部でへラけずり整形がみられる。器内面は口辺部で横なで整形、胴部はへラなで整形がある。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

6は南コ・ナ・の覆土中から出土した小型の壺形土器で底部を欠損する。口径11.5cmを測る。口縁部はいく分外傾して立ちあがり、胴部はほぼ球形をなす。

器外面は口辺部で横なで整形、胴部にはけずった後へラ磨きがなされている。器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は摩滅のため不明である。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

7は北西壁中央部付近の覆土中から出土した小型の壺形土器で底部を欠損している。口径13.6cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、胴部中位が張る。

器外面は口辺部で横なで整形、胴部は粗雑なへラけずりがなされている。器内面は口辺部に横なで整形、胴部はへラなで整形であるが輪積痕が残る。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

8は南コーナー付近の覆土から出土した小型の壺形土器で胴部約1/2を欠損する。口径8.6cm

器高12.4cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、胴部は扁平な球形をなす。いく分あげ底である。

器外面は口辺部に横なで整形・胴部にへラけずりがみられる。器内面は口辺部に横なで整形、胴部にへラなで整形がみられる。器外面・器内面とも丹影がなされている。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

9は東コーナー付近の覆土中から出土した壺形土器で完形である。口径4.8cm・器高6.5cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、胴部は扁平な球形をなす。丸底である。

器外面・器内面とも口辺部は摩滅のため不明であり、腹部外面は未調整・内面はなで整形である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成はやや軟弱である。

10は南コーナー付近の覆土中から出土した壺形土器で完形である。口径13.6cm・器高6.2cmを測る。口縁部は外反し、内面で胴部との境に棱を有す。平底である。

器外面は口辺部に横なで整形・胴部になで整形がみられる。器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は摩滅のため不明である。器外面・器内面とも口辺部に丹影がなされている。

色調は褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成はやや軟弱である。

11は南コーナーの覆土中から出土した壺形土器ではば完形である。口径13.3cm・器高6.3cmを測る。口縁部は垂直に立ちあがり、胴部との境に棱を有す。平底である。

器外面は口辺部で横なで整形、胴部はへラけずり整形がみられる。器外面は口辺部で横なで整形・胴部はへラなで整形がなされている。器外面・器内面とも丹影が施されている。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

12は南コーナー付近の覆土中から出土した壺形土器で口縁部を一部欠損している。口径14.3cm・器高6.6cmを測る。口縁部は内側しながら立ちあがり、やや突出気味の平底である。

器外面・器内面とも丹影がなされ、整形は11とほぼ同じであるが、内部は摩滅のため不明である。色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を多量に含む。焼成はやや軟弱である。

13は南コーナー付近の覆土中から出土した壺形土器で完形である。口径14.7cm・器高7.4cmを測る。口縁部は内傾し、丸底である。

器外面・器内面とも丹影がなされ、整形は11・12とほぼ同じである。

色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成はやや軟弱である。

14は南コーナーの覆土中から出土した壺形土器で完形である。口径14.0cm・器高7.2cmを測る。口縁部はいく分丸味をもって外反する。

器外面・器内面とも丹影がなされ、整形は11~13とはば同じである。

色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成はやや軟弱である。

15は南コーナー付近の覆土中から出土した壺形土器で約殆どを欠損している。口径13.6cm・器高

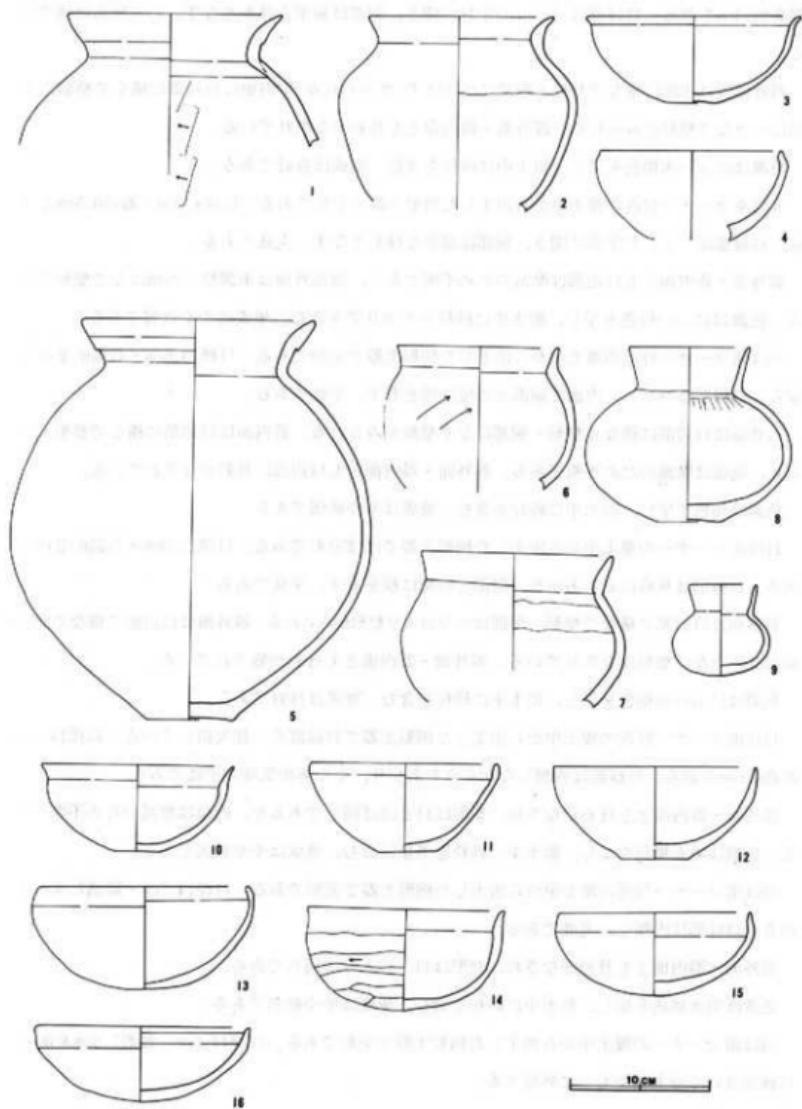


圖147 第14·15號住居址出土遺物

6.0cmを測る。口縁部は内傾し、丸底である。

器外面は口辺部に横なで整形・底部にヘラけずり整形がみられる。器内面は口辺部に横なで整形・底部にはなで整形がなされている。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

16は南東壁の南コーナー寄り付近の覆土中から出土した壺形土器ではば完形である。口径15.3cm・器高5.4cmを測る。口縁部はや外傾し、丸底である。整形、胎土、焼成とも15とはほぼ同じであるが器外面・器内面に部分的に月影がなされている。色調はにぶい赤褐色を呈する。

石製品（図151・20～22・図152・14～19）

第95図の20・21は石製模造品（双孔円板）で滑石製である。21は両面とも研磨されている。

20は北西壁中央部付近の覆土中から出土し直径3cm・厚さ7mm・孔径1.5mmを測る。

21は南コーナー付近の覆土中から出土し、直径2.9cm・厚さ2.5mm・孔径1.5mmを測る。

22は南東壁中央部付近の床面から出土した紡錘車で滑石製である。よく研磨され、直径4.2cm・厚さ8mm・孔径6.5mmを測る。

第96図の14～19は東コーナー付近の床面から出土した石製模造品（白玉）である。いずれも滑石製でよく研磨されている。

| 番号 | 長さ mm | 直径 mm | 孔径 mm | 番号 | 長さ mm | 直径 mm | 孔径 mm |
|----|-------|-------|-------|----|-------|-------|-------|
| 14 | 3.8 | 4.5 | 1.7 | 17 | 3.2 | 4.7 | 1.5 |
| 15 | 3.3 | 4.5 | 1.3 | 18 | 3.2 | 5.0 | 1.5 |
| 16 | 2.2 | 4.5 | 1.5 | 19 | 3.5 | 5.0 | 1.5 |

第16号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物は多い方であり、土師式土器と石製品が出土している。

土器（図148・1～10）

1は北コーナー付近の覆土中から出土した壺形土器で口縁部を欠損する。底径3.0cmを測る。胴部は扁平な球形をなし、小さい平底である。

器外面は胴部上位にヘラ磨き整形がみられ下位は未調整である。器内面は摩滅のため不明である。

色調は淡黄橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は普通である。

2は南西壁中央部付近の覆土中から出土した壺形土器で胴部を欠損する。口径12.3cmを測る。口縁部はほぼ垂直に立ちあがる。

器外面は口辺部に横なで整形、胴部にヘラけずり整形がみられる。器内面は口辺部に横なで整形、胴部にヘラなで整形がみられる。

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

3は南コーナー付近の床面から出土した壺形土器で口縁部のみ遺存している。口径12.5cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、中位に棱を有す。

器外面、器内面とも口辺部は横なで整形がみられ、外面頸部付近は縦位のヘラ磨きがなされている。色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

4は南西壁中央部付近の覆土中から出土した高壺形土器で壺部を欠損している。口径13.1cmを測る。脚部から裾部にかけて大きくラッパ状に開く。

器外面は脚部でヘラ磨きがみられ、裾部は横なで整形である。器内面は脚部でへうけずり、裾部は横なで整形である。器外面に丹彩がなされている。

色調は明赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

5はP.7付近の床面から出土した壺形土器で完形である。口径12.2cm・器高4.7cmを測る。口縁部はわずかに内傾し、平底である。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は末調査である。器内面は口辺部で横なで整形・胴部はなで整形である。器内面に丹彩がなされている。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を多量に含む。焼成はやや軟弱である。

6は南コーナーの床面から出土した壺形土器ではば完形である。口径12.4cm・器高5.9cmを測る。全体に器肉が薄く平底である。

器外面は口辺部に横なで整形、胴部にへうけずりがみられる。器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は摩滅して不明である。器外面、器内面とも片彩がなされている。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は軟弱である。

7は南西壁の南コーナー寄り付近の覆土中から出土した壺形土器ではば完形である。口径13.2cm・器高6.0cmを測る。口縁部は内脣しながら立ちあがり、あげ底である。

器外面はけずった後ヘラ磨きがなされている。器内面はなで整形である。器外面・器内面とも片彩がなされている。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は普通である。

8は南コーナー付近の床面から出土した壺形土器で約半欠損している。口径11.8cm・器高8.3cmを測る。口縁部は内脣し、小さい平底である。

器外面は口辺部で横なで整形・胴部でへうけずりがみられる。器内面は口辺部で横なで整形・胴部はなでた後ヘラ磨き整形がなされている。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

9は西コーナーの覆土中から出土した壺形土器ではば完形である。口径13.5cm・器高6.5cmを測る。口縁部はわずかに外傾し、丸底である。

器外面は口辺部で横なで整形、底部でへラけずり整形がみられる。器内面は口辺部で横なで整形、底部でへラなでがみられる。器外面の口辺部と器内面全体に丹彩がなされている。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は良好である。

10は南西壁の西コーナー寄り付近の覆土中から出土した椀形土器ではほぼ完形である。口径14.8cm・器高7.0cmを測る。器形・整形・月影の部分・色調・胎土とも9とはほぼ同じであり、焼成はやや軟弱である。

石製品（図151・23）

23は中央部より北コーナー寄りの床面から出土した石製模造品（勾玉）で滑石製である。両面とも平滑に研磨され、長さ2.7cm・厚さ3mm・孔径1.5mmを測る。

第17号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物はほとんどなく、わずかに細かく破碎した土師式土器が数片出土したのみである。

第18号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物は多い方ではなく、土師式土器と石製品が出土している。

土器（図148・11～15）

11は西コーナー付近の覆土中から出土した壺形土器で底部と胴部が欠損している。口径16.4cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はほぼ球形をなす。

器外面は口辺部に横なで整形、胴部はへラけずり整形である。器内面は口辺部で横なで整形がみられ、胴部はへラなで整形であるが一部摩滅している。

色調は灰黄褐色を呈し、胎土中に砂礫を多量に含む。焼成は良好である。

12は西コーナー付近の床面から出土した小型の変形土器で完形である。口径12.8cm・器高13.3cmを測る。口縁部はほぼ垂直に立ちあがり、胴部はいく分歪み、平底である。

器外面は口辺部に横なで整形、胴部にへラけずり整形がみられる。器内面は口辺部に横なで整形、胴部にへラなで整形がみられる。

色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成は普通である。

13は北東壁中央部付近の覆土中から出土した壺形土器で完形である。口径6.6cm・器高9.5cmを測る。口縁部は「く」の字状に開き、腹部は肩平な球形をなす。いく分あけ底である。

器外面は口辺部に横なで整形、胴部にへラけずりがみられ、外面全体に丹彩がなされている。

器内面は口辺部に横なで整形、胴部にへラなで整形がみられる。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成はやや軟弱である。

14は南コーナー付近の覆土中から出土した壺形土器で約半分を欠損している。口径14.5cm・器高5.7cmを測る。口縁部は丸味をもってわずかに外傾し、平底である。

器外面は口辺部に横なで整形、胴部にヘラけずり整形がみられる。器内面は口辺部に横なで整形、胴部にヘラなで整形がみられる。器外面・器内面とも丹彩がなされている。

色調はにぶい赤褐色を呈し、胎上中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

15は南コーナーの覆土中から出土した壺形土器ではば完形である。口径12.3cm・器高5.3cmを測る。口縁部は短かく垂直に立ちあがり、胴部との境に棱を有す。わずかにあげ底である。

整形・胎上・焼成とも14とはほぼ同じであり、色調はにぶい黄褐色を呈する。

石製品（図151・24・図152・20～39）

第95図の24は中央部よりやや北寄りの床面から出土した石製模造品（双孔円板）で滑石製である。梢円形をなし両面とも研磨されている。最大直径2.7cm・厚さ3mm・孔径1.5mmを測る。

第96図の20～39は第95図24の双孔円板と同地点から出土した石製模造品（臼玉）で滑石製である。

| 番号 | 長さ mm | 直径 mm | 孔径 mm | 番号 | 長さ mm | 直径 mm | 孔径 mm |
|----|-------|-------|-------|----|-------|-------|-------|
| 20 | 3.7 | 4.0 | 1.2 | 30 | 3.0 | 4.5 | 1.2 |
| 21 | 3.3 | 4.3 | 1.5 | 31 | 3.5 | 3.7 | 1.2 |
| 22 | 2.7 | 5.5 | 1.7 | 32 | 3.0 | 4.5 | 1.3 |
| 23 | 3.2 | 4.3 | 1.3 | 33 | 3.0 | 4.2 | 1.2 |
| 24 | 3.5 | 4.8 | 1.5 | 34 | 2.7 | 4.5 | 1.2 |
| 25 | 3.2 | 4.2 | 1.2 | 35 | 3.2 | 4.2 | 1.2 |
| 26 | 2.5 | 4.2 | 1.3 | 36 | 2.2 | 4.5 | 1.3 |
| 27 | 2.7 | 4.3 | 1.5 | 37 | 2.5 | 5.0 | 1.3 |
| 28 | 4.5 | 5.0 | 1.2 | 38 | 2.5 | 5.0 | 1.5 |
| 29 | 2.5 | 4.5 | 1.3 | 39 | 2.0 | 5.0 | 1.5 |

第19号住居址内出土遺物

本址からの出土遺物はほとんどなく、わずかの土師式土器片・石製品が出土している。

土器（図148・16）

16は北コーナー付近の覆土中から出土した高壺形土器で脚部を約3%欠損している。口径18.2cm・器高14.2cmを測る。口縁部は口脚気味に立ちあがり、底部との境に棱を有す。胴部はほぼ垂直で裾部は「く」の字状に開く。

器外面は口辺部で横なで整形がみられ、以下裾部までヘラけずりの後ヘラなでかなされている。裾部先端は横なで整形である。

器内面は口辺部で横なで整形底部でなで整形がみられ、裾部で横なで整形がみられる。

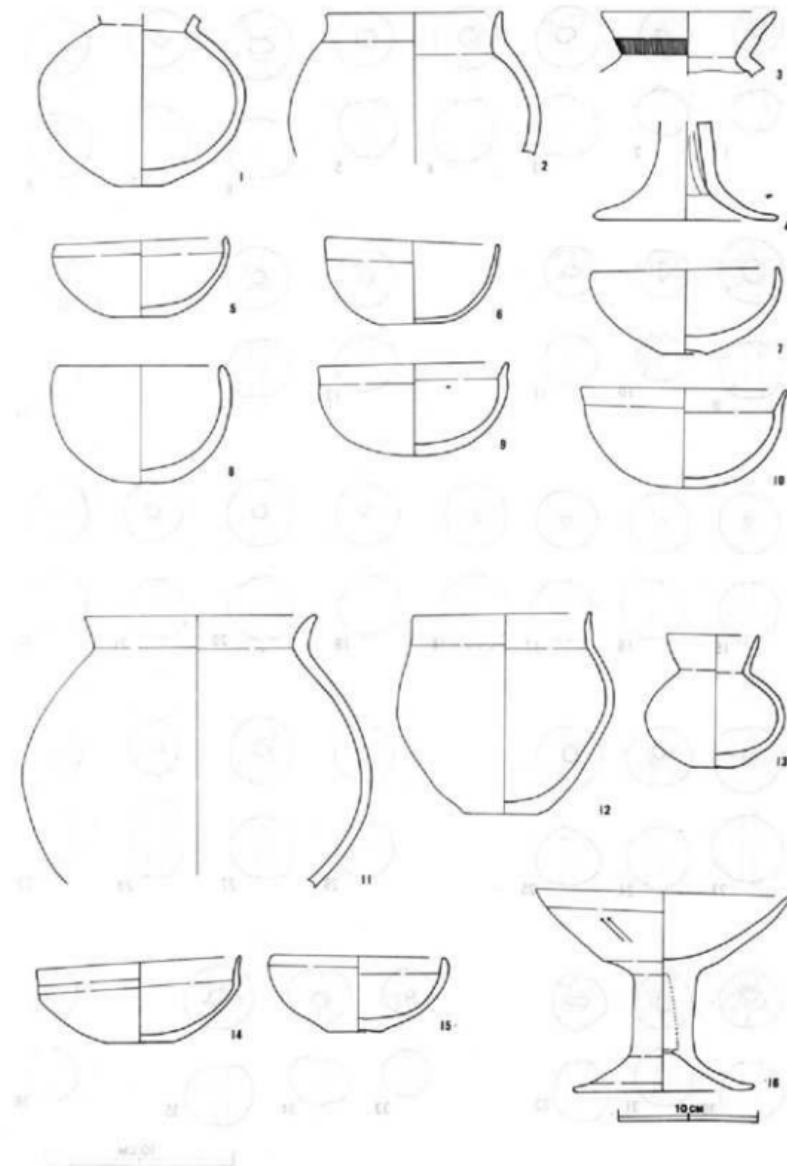


图148 第16·18·19号住居址出土遗物

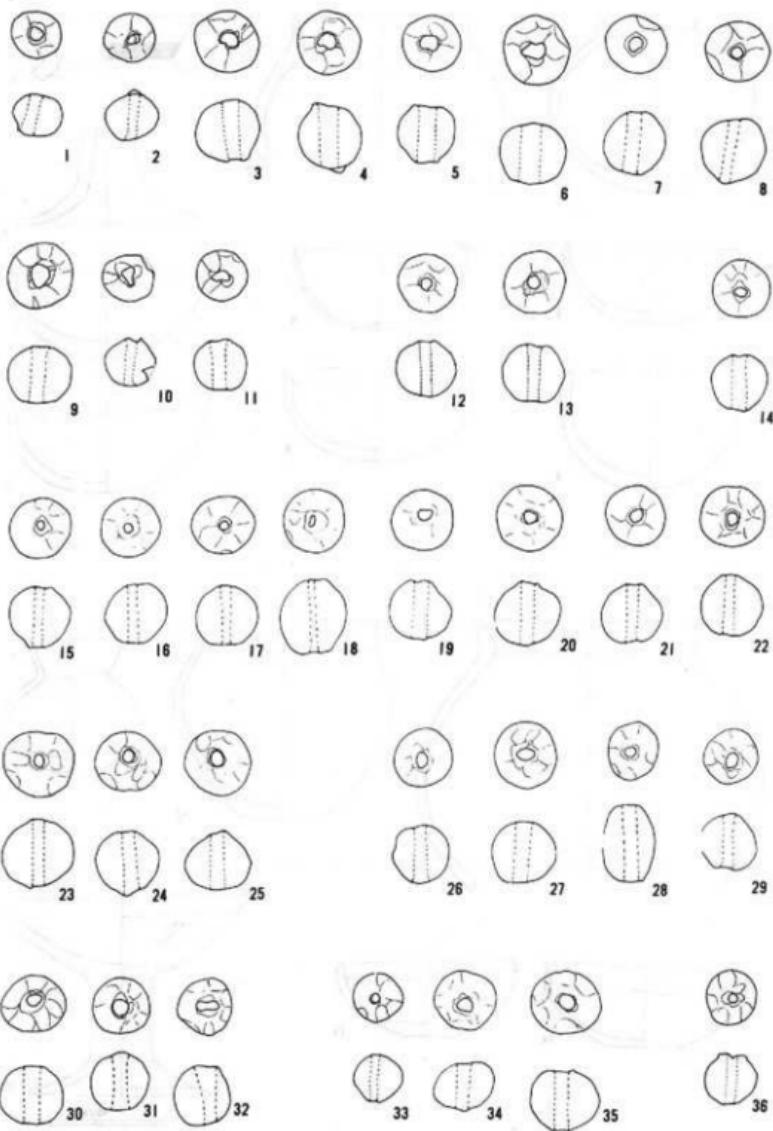


圖149 各住居址出土土玉

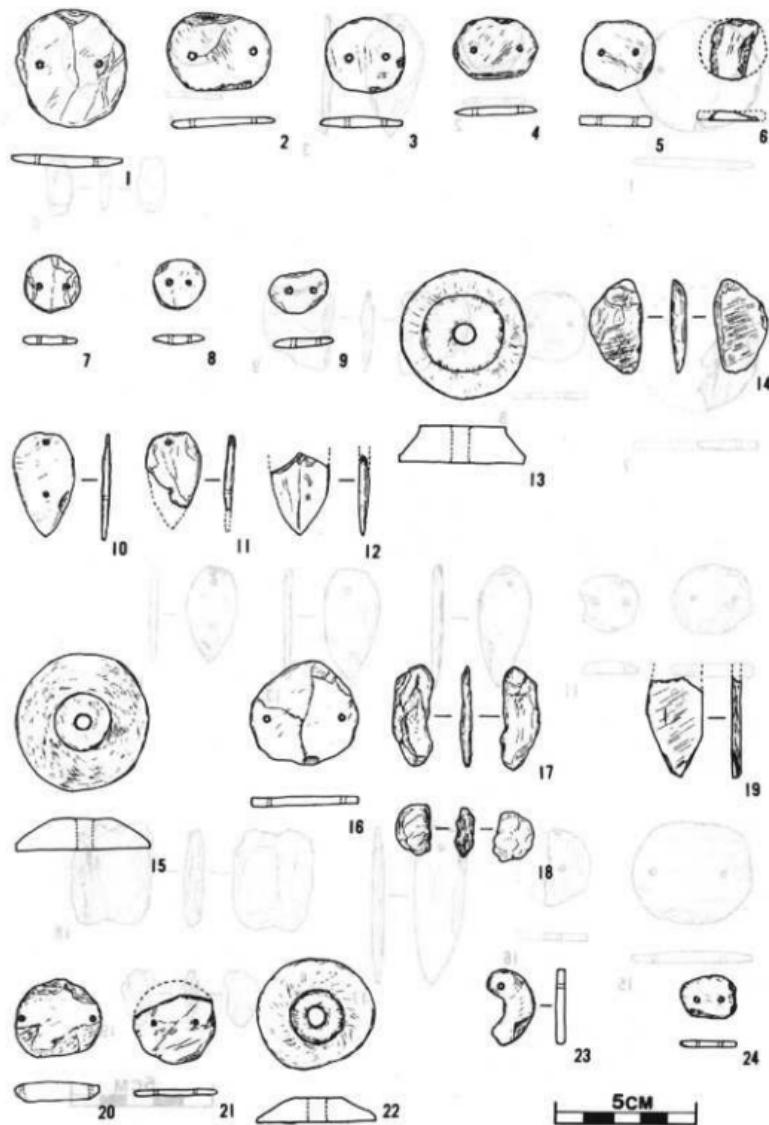


図150 各住居址出土石製模造品(1)

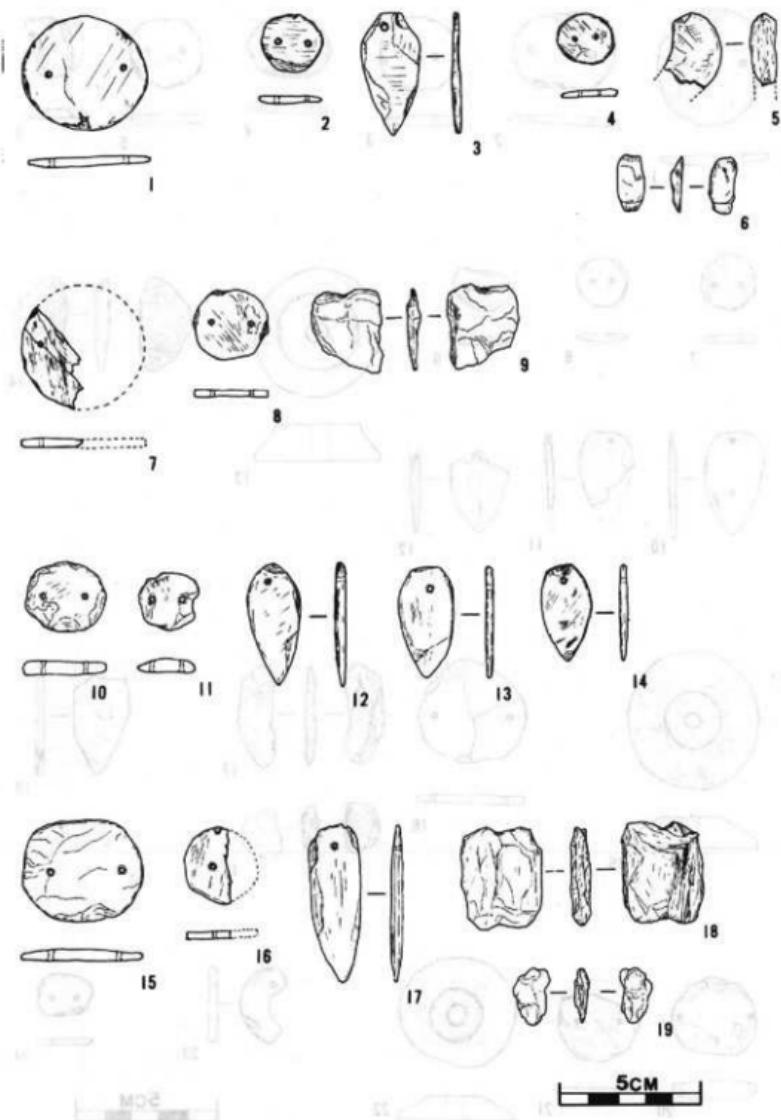


図151 各住居址出土石製模造品(2)

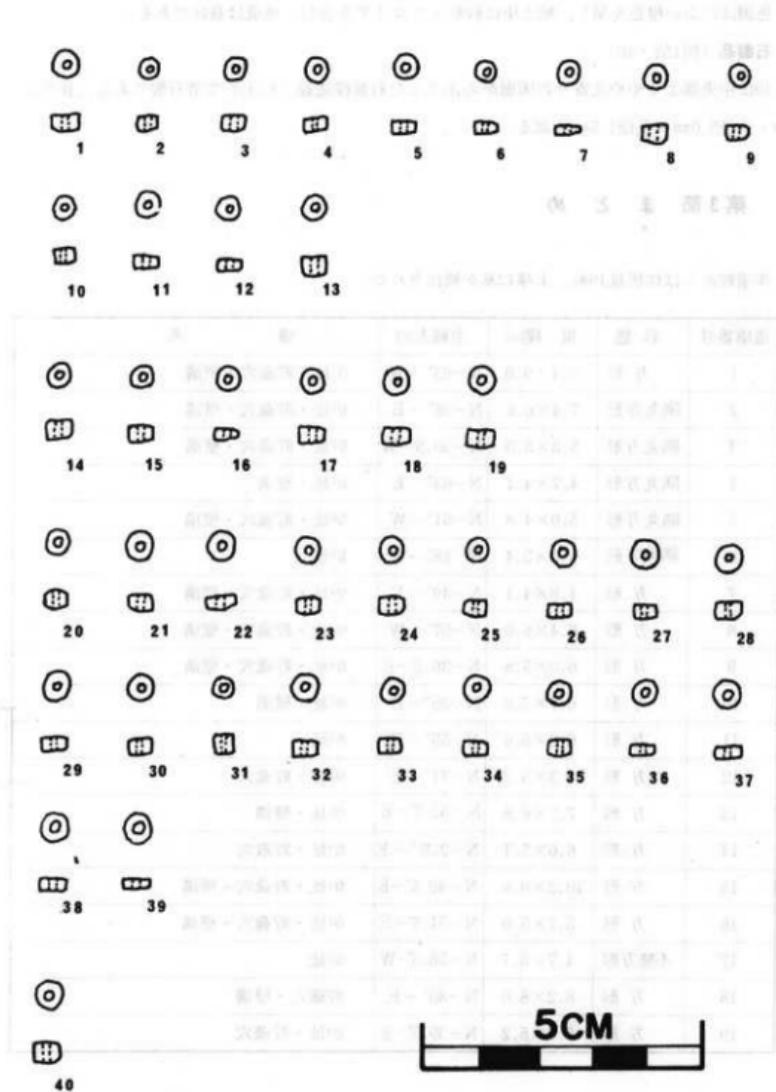


図152 各住居址出土石製構造品(3)

色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。

石製品 (図152・40)

40は中央部よりやや北寄りの床面から出土した石製模造品(白玉)で滑石製である。長さ3.8mm・直径5.0mm・孔径1.5mmを測る。

第3節 まとめ

本遺跡からは住居址19軒、土塙12基が検出された。

| 遺構番号 | 形態 | 規模(m) | 主軸方向 | 備考 | |
|------|------|----------|-----------|-----------|--------|
| | | | | 炉址 | 貯藏穴・壁溝 |
| 1 | 方形 | 9.4×9.0 | N-65°-W | 炉址・貯藏穴・壁溝 | |
| 2 | 隅丸方形 | 7.4×6.6 | N-38°-E | 炉址・貯藏穴・壁溝 | |
| 3 | 隅丸方形 | 5.3×5.0 | N-30.5°-W | 炉址・貯藏穴・壁溝 | |
| 4 | 隅丸方形 | 4.7×4.1 | N-63°-E | 炉址・壁溝 | |
| 5 | 隅丸方形 | 5.0×4.8 | N-51°-W | 炉址・貯藏穴・壁溝 | |
| 6 | 隅丸方形 | 5.6×5.4 | N-28°-W | 炉址 | |
| 7 | 方形 | 4.8×4.1 | N-49°-E | 炉址・貯藏穴・壁溝 | |
| 8 | 方形 | 6.4×6.0 | N-57°-W | 炉址・貯藏穴・壁溝 | |
| 9 | 方形 | 6.0×5.8 | N-36.5°-E | 炉址・貯藏穴・壁溝 | |
| 10 | 方形 | 6.7×5.6 | N-35°-E | 炉址・壁溝 | |
| 11 | 方形 | 6.2×5.6 | N-55°-E | 炉址 | |
| 12 | 方形 | 5.3×5.2 | N-71°-E | 炉址・貯藏穴 | |
| 13 | 方形 | 7.2×6.8 | N-32.5°-E | 炉址・壁溝 | |
| 14 | 方形 | 6.6×5.1 | N-2.5°-E | 炉址・貯藏穴 | |
| 15 | 方形 | 10.2×9.8 | N-42.5°-E | 炉址・貯藏穴・壁溝 | |
| 16 | 方形 | 5.7×5.0 | N-51.5°-E | 炉址・貯藏穴・壁溝 | |
| 17 | 不整形方 | 4.7×3.7 | N-55.5°-W | 炉址 | |
| 18 | 方形 | 8.2×8.0 | N-30°-E | 貯藏穴・壁溝 | |
| 19 | 方形 | 5.8×5.2 | N-39.5°-E | 炉址・貯藏穴 | |

住居址は舌状に張り出した台地の南東面に多く、C-3地区で6軒・C-4地区で2軒・C-5地区で11軒検出された。台地の奥に入るC-1・C-2地区では住居址は検出されていない。いずれも複合ではなく方形あるいは隅丸方形を呈している。規模は平均すると1辺6~7mのもの

が多いが、1辺8m以上のものが3軒もあり、最大のもの（15号）は約10mもある。最小のもの（17号）は4.7m×3.7mである。18号住居址を除いていずれも炉址がみられ、中央部または主柱穴間に位置しているものが多い。

土壙は12軒検出されたが、いずれも遺物がなく、性格・時期等については不明である。第1・2号土壙は井戸のようにも思われるが推定の域を脱しない。

各住居址の遺物は壺形土器・甕形土器・楕形土器が多くそのほか环形土器・台付甕形土器・瓶形土器・石製模造品、土玉等が出上しており五領期から和泉期のものと思われる。

壺形土器は小型のものと大型のものがあり、小型のものは壺形土器に近く、口縁部がやや長く直線的に外傾し、胴部は扁平な球形を呈している。底部は丸底と小さいあげ底があり、器外面全体と口邊内面に丹彩されているものが多い。大型の壺形土器は甕形土器とはっきりと区別しにくいうるものが多く、いずれも口縁部はいく分丸味をもって「く」の字状に外反し、胴部はほぼ球形を呈している。口邊部は横なで整形で、胴部外面はけずり、胴部内面はへらなで整形されているものが多いが、頭部や肩部にハケ目整形されているものが若干みられる。また図144・3や図147・5のように折り返し口縁や量的には少ないが台付甕形土器・器台もみられることから五領期の手法を残しているものと思われる。

楕形土器も环形土器との区別がしにくいものが多い。いずれも口縁部は内側するものと外傾するものがあり、胴部は半球形あるいはそれに近いものが多い。底部は丸底が多く、平底は少ない。また大部分が丹彩がなされている。

高环形土器はすべて破碎したもので数も少ない。大日遺跡出土のものとほぼ同じであるが、脚部はほとんど強らず円筒に近く太いものと細いものがあり、脚部内面に輪積痕はみられない。

瓶形土器は鉢形と甕形のものがあり、いずれも粗製で、折り返し口縁を有し、底部に小孔を穿っている。（図143・7・図145・12）

住居址からの石製模造品の出土は少ないとされているが、本遺跡では石製模造品の出土が目立つ。大半の住居址から出土し、特に11号住居址が多い。いずれも滑石製で大部分床面から出土している。全般的に粗造で、特に双孔円板が多く、勾玉は少ない。

石製模造品については祭祀が考えられるが、今後の課題としたい。

出土石製模造品内訳

| 住居址番号 | 双孔円板 | 勾玉 | 劍形品 | 臼玉 | 紡錘車 | 滑石片 |
|-------|------|----|-----|----|-----|-----|
| 1 | 1 | | | | | |
| 4 | 1 | | 1 | | | |
| 7 | 1 | 1 | | | | 1 |
| 8 | 2 | | | | | 1 |
| 9 | 2 | | 3 | | | |
| 10 | 2 | | 1 | | | 2 |
| 11 | 9 | | 3 | | 1 | 1 |
| 12 | | | | | 1 | |
| 13 | 1 | | | | | 2 |
| 14 | | | 1 | 13 | | |
| 15 | 2 | | | 6 | 1 | |
| 16 | | 1 | | | | |
| 18 | 1 | | | 20 | | |
| 19 | | | | 1 | | |
| 計 | 22 | 2 | 9 | 40 | 3 | 7 |

〈参考文献〉

- 財團法人茨城県教育財團「南守谷地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告Ⅰ」
—昭和52年度 乙子遺跡、北今城遺跡— 昭和53年3月
- 〃 「同 II」—昭和53年度 大日遺跡、座庄内遺跡、篠根入、仲原遺跡— 昭和54年3月
- 財團法人茨城県教育財團「松葉遺跡」 昭和54年3月
- 瓦吹堅他「石畳遺跡」茨城県猿島郡五霞村教育委員会 昭和52年3月
- 駒宮史朗他「木郷・愛宕」埼玉県遺跡発掘調査報告書第7集 埼玉県教育委員会 昭和50年11月
- 小久保徹他「鶴ヶ丘」〃 第8集 埼玉県教育委員会 昭和50年12月
- 大金宣亮他「井頭」栃木県教育委員会 昭和49年3月
- 鈴木定明他「千葉市東寺山・戸張作遺跡」財團法人千葉県文化センター 昭和52年3月
- 八王子市中田遺跡調査会「八王子市中田遺跡資料編Ⅱ・Ⅲ」 昭和43年
- 茂木雅博他「小沢野」茨城県東海村教育委員会 昭和53年4月
- 茨城県北守谷遺跡調査会「北守谷遺跡」 昭和51年3月
- 「土師式土器集成本編Ⅰ・Ⅲ」東京堂 昭和47年

第9章 鈴塚B・C遺跡

第1節 調査の経過

1. 鈴塚B遺跡

- 昭和54年4月 中旬よりグリッド設定の坑打ちを始める。その後全景写真撮影をする。
- 昭和54年5月 下旬よりグリッド発堀を始める。
- 昭和54年6月 グリッド拡張をし、唯一の遺構・第1号土壙を調査する。また平面図作成、全景写真撮影をして調査を完了する。

2. 鈴塚C遺跡

- 昭和54年4月 中旬よりグリッド設定の坑打ちを始める。少し遅れて全景写真撮影後、北側より遺構確認のためのグリッド発堀を始める。
- 昭和54年5月 4月から引き継いでグリッド発堀をする。各グリッドとも土器片が数点出土した。B 2 区からは石鐵を、B 3 区より炉址と思われる焼土を確認した。
- 昭和54年6月 遺構確認後、遺構のかかっているグリッドの拡張を始める。上旬に溝状遺構1条を確認し、掘り込みを始める。遺物は少なく、土器片が数点立在しているだけである。覆土はよくしまっていて堅い。

また、上壙の1・2号を確認し掘り始める。同時に拡張したグリッドのベルトを除去する。続いて、土壙3・4・5・6号を確認し、掘り込む。

中旬より、土壙1～6号の精査にはいる。

下旬には、住居址1～2号の遺構確認を行い、掘り始めた。25日には住居址1・2号の精査と他の各遺構の平面図作成及び全景写真撮影を進める。

- 昭和54年7月 住居址1・2号の平面図作成と写真撮影を進め、7月3日にすべてを終えた。

第2節 遺構と遺物

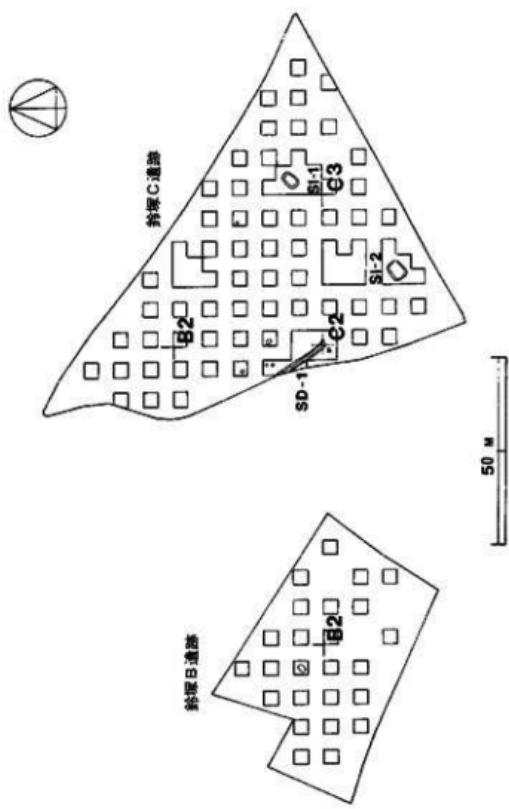
1. 遺構

(1) 住居址

鈴塚C遺跡第1号住居址(図154、写1、2)

本址はB 3_{hs1}・B 3_{hs2}・B 3_{hs3}・B 3_{hs4}の4個のグリッドに確認され、遺跡の中央よりやや東

图153 钻探B、C 选择配置图



南に位置する。長辺4.58m、短辺3.03mの長方形を呈する。主軸はN-52°-Eで、壁高は最深のところ10cmと浅い。床はほぼ平坦で、覆土は4層あり、表土から黒褐色土(1層)、暗褐色土(2層)、褐色土(3層)、明褐色土(4層)の順で、自然的な地積をしている。中央よりやや北西部に、長辺1.16m、短辺0.7mの椭円形の炉址を持っている。深さは14cmで、遺構確認面まで焼土の塊が浮き出て認められた。ピットは11本で次の表のとおりである。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 主柱穴 | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|----|
| P 1 | 2 6 | 2 2 | 2 0 | ○ | |
| P 2 | 2 4 | | 2 4 | ○ | |
| P 3 | 3 0 | 2 8 | 3 0 | ○ | |
| P 4 | 3 4 | 2 6 | 1 2 | ○ | |
| P 5 | 2 8 | 2 6 | 1 6 | ○ | |
| P 6 | 3 6 | 2 8 | 1 4 | ○ | |
| P 7 | 2 6 | 2 0 | 1 4 | | |
| P 8 | 2 2 | 1 6 | 1 8 | | |
| P 9 | 2 4 | 2 2 | 1 6 | | |
| P 10 | 3 4 | | 2 2 | | |
| P 11 | 1 8 | 1 6 | 8 | | |

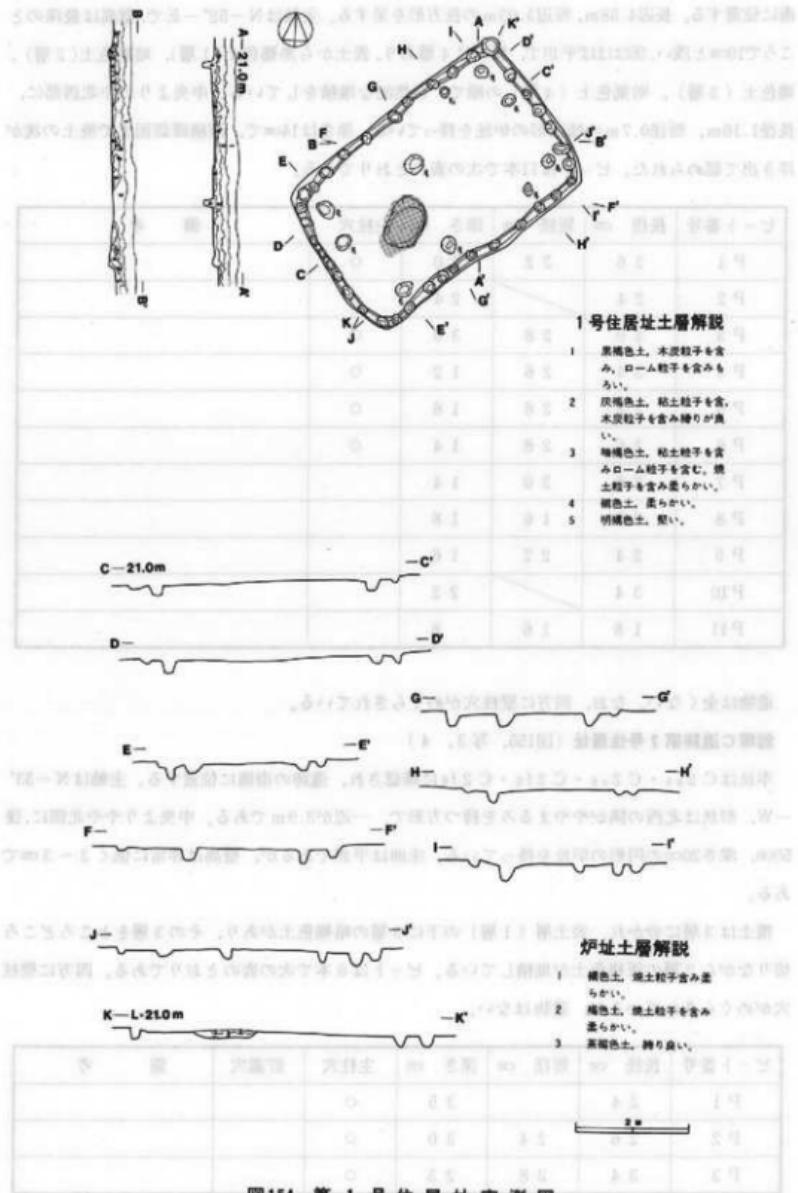
遺物は全くない。なお、四方に壁柱穴がめぐらされている。

鈴塚C遺跡第2号住居址(図155、写3、4)

本址はC 2_{±5}・C 2_{±6}・C 2f₅・C 2f₆に確認され、遺跡の南側に位置する。主軸はN-33°W、形状は北西の隅がややまるみを持つ方形で、一辺が3.9mである。中央よりやや北側に、径50cm、深さ20cmの円形の炉址を持っている。床面は平坦であるが、壁高は非常に低く2~3cmである。

覆土は3層に分かれ、表土層(1層)の下に3層の暗褐色土があり、その3層をところどころ切りながら2層の灰褐色土が堆積している。ピットは6本で次の表のとおりである。四方に壁柱穴がめぐらされているが、遺物はない。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 主柱穴 | 貯藏穴 | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|-----|----|
| P 1 | 2 4 | | 3 5 | ○ | | |
| P 2 | 2 6 | 2 4 | 3 0 | ○ | | |
| P 3 | 3 4 | 2 8 | 2 3 | ○ | | |



| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 主柱穴 | 貯藏穴 | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|-----|----|
| P 4 | 3 0 | | 2 5 | ○ | | |
| P 5 | 2 6 | 2 4 | 2 8 | | | |
| P 6 | 7 2 | 6 6 | 1 6 | | ○ | |

(2) 土塙

鈴塚B遺跡第1号土塙 (図157、写11)

本塙はB 1₁₉に確認された。鈴塚B遺跡の中ではただ1つの遺構で、遺跡のほぼ中央部に位置する。長辺が3.05m、短辺が1.88mで、長辺がややふくらみ、短辺がへこみを持つ長方形である。塙底は東から西に向かうほど深くなっている。壁高は15cm程度で、ゆるやかな傾斜を持っている。覆土は1層が褐色土、2層が明褐色土、3層が黒褐色土で、掘り返したように、作為的に交っている。方向はN-28°-Wである。遺物は出土しない。

鈴塚C遺跡第1号土塙 (図156、写6)

本塙はB 2₄₉に確認され、第1号溝の東側に位置する。

長辺0.86m、短辺0.64mの楕円形を呈する。深さは30cm程度で、ほぼ垂直に壁が立ち上がっている。塙底も平坦である。長辺方向はN-51°-Eである。覆土は1、2層がにふい褐色土で3層が明褐色土で、いずれもローム粒子を含んでいる。遺物は出土しない。

鈴塚C遺跡第2号土塙 (図156、写7)

本塙はC 1₄₀に確認され、第1号溝の西側に位置する。長辺1.34m、短辺0.88mの長方形を呈し、壁は垂直な立ち上がりで、深さ54cmを有する。塙底は浅いすりばち型を示している。長辺方向はN-71°-Eである。覆土は、大部分が褐色土で、ロームブロックを含んでいる1層と、底のすりばち型のところに明褐色の2層が堆積されている。遺物は出土しない。

鈴塚C遺跡第3号土塙 (図157、写8)

本塙はB 1₄₉に確認された第1号溝の北側に位置する。長辺1.4m、短辺0.9mの不整形楕円を呈する。壁は垂直な立ち上がりで、深さ26cmを有する。塙底は北側ほど深く坂状をなしている。長辺方向はN-62°-Wである。

覆土は、1層が暗褐色土で焼土を含み、2・3層が褐色土である。遺物はない。

鈴塚C遺跡第4号土塙 (図157、写9)

本塙はB 2₄₁に確認された。長辺1.62m、短辺0.86mの楕円形を呈している。壁は垂直な立ち上がりを示し、28cmの壁高を持っている。塙底は西側ほど深くなっている。坂状をなしている。長辺方向はN-58°-Wである。覆土は、暗褐色土でローム粒子を含んだ1・2層に、たての混入土層(3・4層)がはいっている。遺物はない。

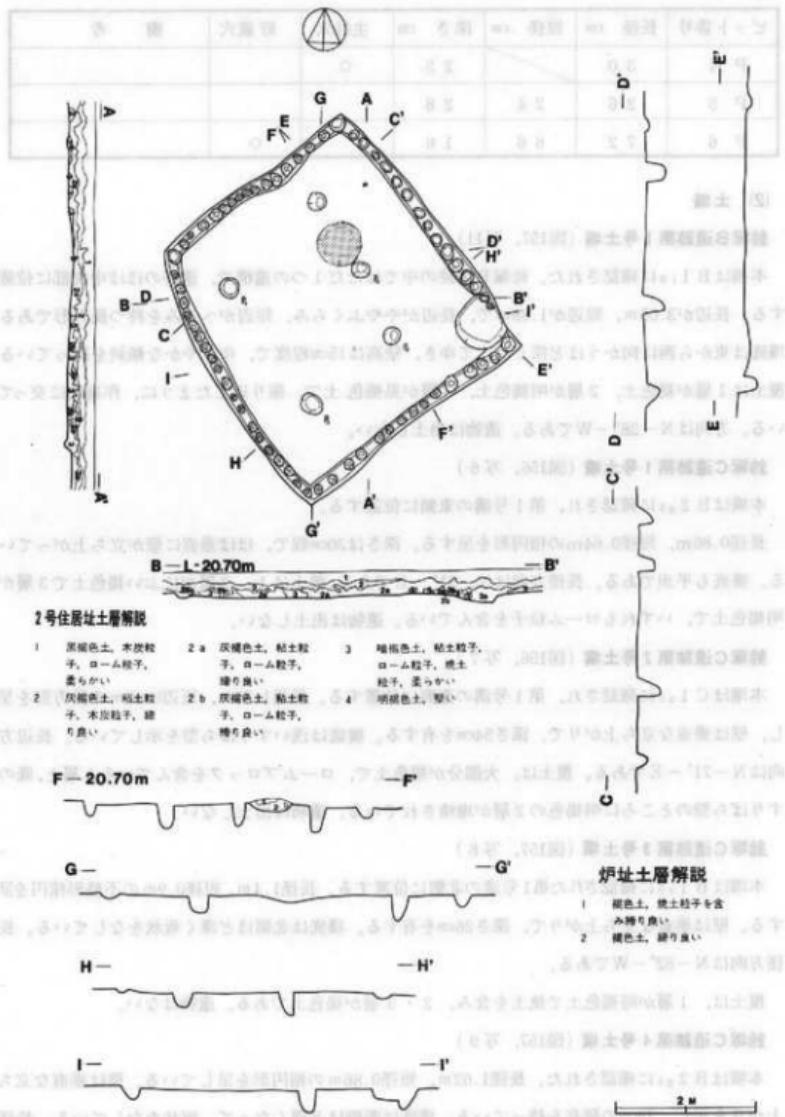


図155 第2号住居址実測図 (アーフィルム撮影)

鈴塚C遺跡第5号土壙（図157、写10）

本壙はC2₂₉に確認された。長径1.08m、短径0.81mで、長辺に小さなくびれや、ゆがみを持つ不整形の長方形で、壁高は10cmである。覆土は、1層の暗褐色土の下に、黒褐色土でローム粒子を含んだ2・3層が堆積している。遺物はない。長径方向はN-0°である。

鈴塚C遺跡第6号土壙（図156）

本壙はB2₂₉に確認され、第1号土壙の南側に位置する。長径0.66m、短径0.58mの楕円形で、壁はやや垂直な立ち上がりに近いすりばち型である。壙底は水平かつ平坦で、深さは28cmを有している。N-7°Eの方向を持つ。覆土は3層で、3層の明褐色土の上部に1・2層のにぶい褐色土が交っている。遺物は出土しなかった。

(3) 溝（図156、写5）

鈴塚C遺跡第1号溝

本溝は、大調査区B1・B2・C1・C2区に確認され、遺跡の西部から北北西に伸び、農道にかかるて消える。遺構の始まりはN-34°Eの方向で6m程伸び、途中からN-31°Eに変わって10m進む。上幅は2.02m～1.46m、深さは最深で0.54m程度である。壁は西側はゆるやかであるが、東側は急な立ち立がりをみせる。覆土は、表土の下に暗褐色土及び黒褐色土の土があり、自然堆積状でよくしまっていた。遺物は土師器片が數片点在していた。

2. 遺 物

(1) 鈴塚C遺跡第1号溝出土土器（写13）

第1号溝内からは土器片が5片出土した。口縁部片が3片で、2片が胴部片である。口縁部片のうち2片は同一個体で、土師器の長方形土器の破片である。ロクロ整形痕が残り、胎土に雲母、螺を含んでいる。色調は内面がにぶい褐色、外面が灰褐色をしている。（1、2）

他の口縁部片はやはり土師器で、口縁と胴部の間に隆帯と沈線を一本持ち、赤褐色である（3）

胴部片は、無紋で焼きぐあいや胎土中の雲母、螺からみて土師器と思われるが、器形その他の正確なところは不明である。色調は4が橙色、5がにぶい赤褐色である。（4、5）

(2) グリッド出土の土器と石器

土器（写13～17）

写13の6～12は鈴塚B遺跡の表土より出土したものである。6、7は砥石片である。8は土師器の口縁部片で、にぶい褐色をし、胎土は砂を含んでいる。9も土師器片でロクロ使用痕を残し

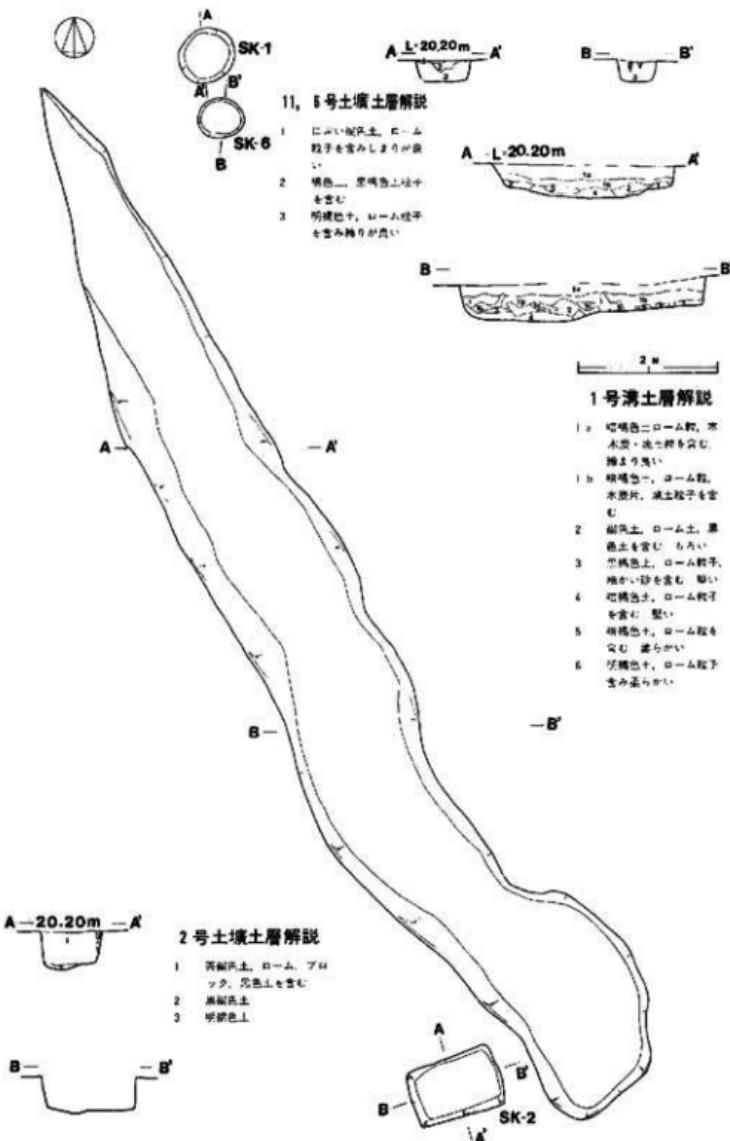


図156 第1, 2, 5号土壤, 1号溝実測図

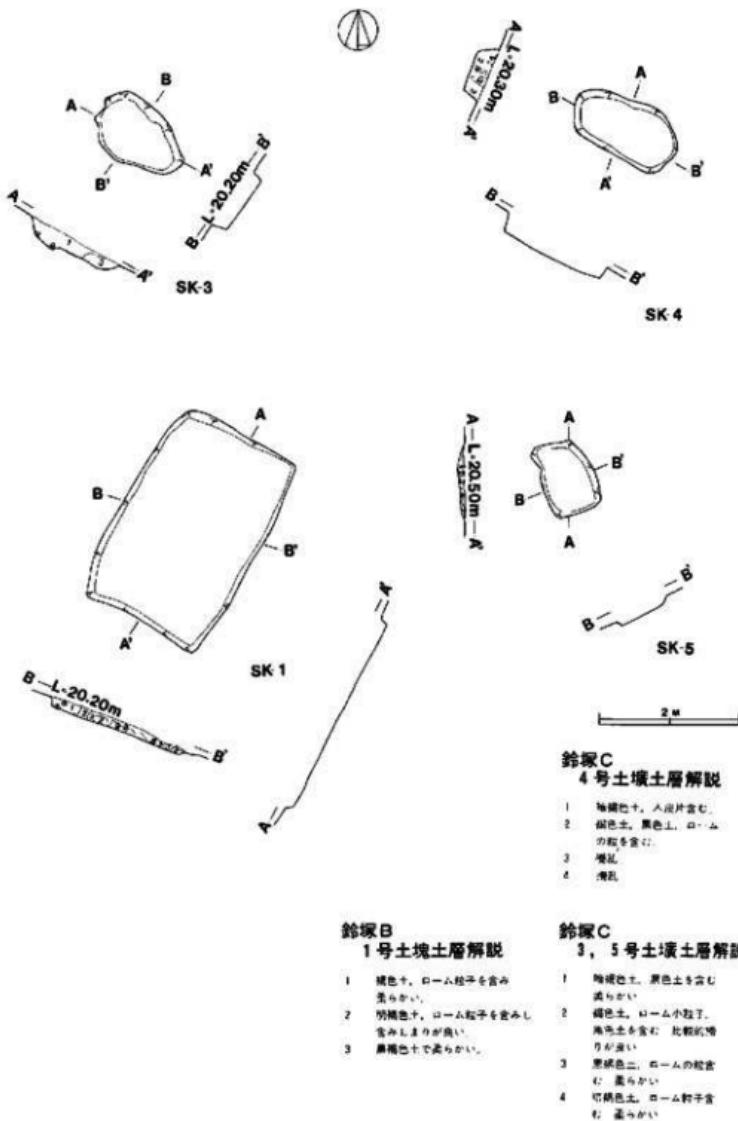


図157 鉱塚B遺跡第1号土壤鉱塚C遺跡第3～5号土壤実測図

ている。にぶい褐色で胎土にスコリアを含んである。10は土師器の底部片である。胎土に礫を含み、赤褐色をしている。11は瓦の破片である。12は陶器片で、内面に釉薬がかかっている。坏の底部と考えられる。写13の13~20は鉢塚C遺跡のB3区表土より出土した。13は陶器の鉢の底部片で、ロクロ使用痕を残し、外面に釉薬を施している。14は陶器の口縁部で、湯呑み茶碗の破片である。内外面に釉薬を施している。15は陶器の鉢の底部片で13と作りは同じであるが別個体である。16は土師器の底部片で、ロクロ使用痕が残っている。外面に回転糸切り離し痕があり、にぶい橙色をしている。17は上師器の鉢の底部片で、やはリロクロ使用痕を残し、外面に糸切り離し痕がある。にぶい橙色である。18は須恵器の胴部片でロクロ使用痕があるが、器形は不明である。19は土師器の口縁部である。斐形土器の破片と思われ、胎土に礫、砂を含んでいる。色調は外側が黒褐色、内面がにぶい赤褐色である。20も土師器の口縁部片である。ロクロ使用痕があり、胎土にスコリアを多量に含んでいる。内外面とも黒色をしている。

写14は鉢塚C遺跡のA1・A2・B1・C2区の表土より出土したものである。1~6はA1・A2区より出土した。1・2は陶器片で、1の内外面、2の外面に釉薬が塗ってある。3・4は繩文土器片で、3はLRの文様を施し内面をヘラなどでしている。4は竹管による渦巻文様を外面に描き、内面をヘラなどでしている。浮島期の土器片である。3・4ともににぶい橙色をしている。5・6は土師器の口縁部片でロクロ使用痕が残っている。5はにぶい橙色、6はにぶい赤褐色をしている。

7~10はB1区より出土した。7は陶器片で内外面に釉薬が施されている。8は土師器の胴部片で、わずかに底部を残し、外面に回転糸切り離し痕が残っている。にぶい黄褐色をしている。9は土師器の口縁部片でロクロ使用痕がある。にぶい褐色で胎土に雲母、スコリアを含んでいる。10は繩文土器片と思われるが、器形、時期等は不明である。にぶい赤褐色である。

11~18はC2区より出土した。11・12は土師器片でロクロ使用痕がある。11は口縁部でにぶい橙色、12は胴部で明灰褐色、ともに胎土にスコリアを含んでいる。13~16は砥石片、17・18は土器片ではあるが、時期、器形は不明である。にぶい赤褐色をしている。

写15は鉢塚C遺跡のB2区表土より出土した。1は土師器の壺形上器の口縁部片でロクロ使用痕を残している。良好な焼きで黒色をしており、胎土にスコリアを含んでいる。2も土師器の口縁部でロクロ使用痕がある。斐形上器の破片と思われ、胎土中に砂、雲母を含んでいる。内面がにぶい褐色、外面が黒色をしている。3は土師器の口縁部片でロクロ使用痕があるが、口縁が若干へこんでいる。胎土中に雲母、砂、礫を含んでいる。外面は黒褐色、内面はにぶい赤褐色をしている。4は土師器の皿形土器の口縁部片で、やはリロクロ使用痕が残っている。にぶい赤褐色で胎土に砂を含んでいる。5は陶器の皿の底部片でロクロ使用痕があり、胎土に礫を含んでいる。6は瓦の破片である。7は土師器の破片でロクロ使用痕があり、にぶい赤褐色であるが器形は不

明である。8は土師器の口縁部片で、丁寧なヘラみがきを施している。色調は褐灰色で胎土にスコリアを含む。9は陶器の裏の胴部片であり、外面に釉薬を施している。内面はロクロ使用痕が残っている。

写16は鈴塚C遺跡のB 3・C 2・C 3区の表土より出土した。1~10はB 3区より出土した。1・2は陶器片で、内外面に釉薬を施している。3は土師器の胴部片でロクロ使用痕が残っている。胎土に砂を含み色調は灰褐色をしている。器形は不明である。4は土師器の坏か窯の底部片と思われる。ロクロ使用痕があり、胎土に砂を含んでいる。にぶい褐色をして、焼きはやや弱い。5は砥石の破片である。6は土師器の底部に近い胴部片である、坏か窯の破片と考えられる。内外面とも丁寧なヘラなどでを行っている。棕色をしており、胎土にスコリアを含んでいる。7・8は縄文土器片である。外面にわずかではあるが縄文が施されている。器形、時期等は不明である。ともににぶい橙色をしている。9・10は土師器片と考えられる。9は外面を丁寧なヘラなどでして、胎土に礫を含んでいる。にぶい褐色である。10は底部に近い胴部で坏の破片と思われる。胎土に砂、スコリアを含み、外面が黒褐色、内面が褐灰色である。

11~20は鈴塚C遺跡のC 2・C 3区の表土より出土した。11は陶器の碗の口縁部片である。内外面に釉薬を施している。12は陶器の体の口縁部片である。

内外面に釉薬を施している。13は陶器の鉢の口縁部片で、やはり内外面に釉薬を施している。内面にはロクロ使用痕が残っている。14・15はかわらけの一部で、接合はしないが同一個体である。ロクロ使用痕、底部外面に回転糸切り離し痕が残っている。にぶい黄褐色で、胎土にスコリアを含む。16は土師器の袋形土器の口縁部片で、ロクロ使用痕を残している。口縁は平たく厚さがあり、内面がにぶい褐色、外面は灰褐色である。胎土に砂、スコリアを含む。17は16と同じであるが同一個体ではない。内外面ともヘラなどで整形をし、内面が明赤褐色、外面がにぶい赤褐色をしている。胎土に礫を含んでいる。18は袋形土器の口縁部片でロクロ使用痕を残している。口縁は平たい。胎土に素母、礫を含む。外面は黒色、内面は褐色である。19は土師器の碗形土器の口縁部片である。ロクロ使用痕があり、胎土に礫を含む。にぶい褐色をしている。20も土師器の袋形土器の口縁部片である。胎土に雲母・砂、礫を含み、にぶい褐色をしている。

写17は鈴塚C遺跡のB 2・C 2・C 3区の表土より出土した。1~10はB 2区より出土した。1は縄文土器片で外面に連続の貝殻腹縁文の文様を付けている。浮島期の土器である。2も縄文土器片でしきの縄文を施し、破片の上部に沈線を三本描いている。内面はヘラなどでしている。浮島期と考えられる。3は縄文土器と考えられる破片であるが、縄文の型体は不鮮明なので器形、時期等は不明である。4は口縁部片であるが時期等正確なところは不明である。胎土に礫を含み、にぶい褐色をしている。5~8は縄文土器の胴部片と考えられる。時期は不明である。5・6は胎土に礫を含む。色調は5~7がにぶい橙色、8が明赤褐色である。9・10は土師器の胴部片で

同一個体である。ともにロクロ使用痕を残し、褐灰色で、胎土に雲母、砂、スコリアを含んでいる。

11～18はC 2区・C 3区より出土した。11は縄文土器の胴部片で、L Rの縄文を施し、破片の上部に沈線を一本描いている。浮島期と考えられる。12は須恵器片である。器形は不明だが、内面には横の、外面にはたてのハケ目がある。13は縄文土器片で外面に薄い沈線を交差させている。色は暗赤褐色であるが時期は不明である。14～18は時期等不明の上器片である。色は14が灰黄褐色、15が灰褐色、16がにぶい褐色でスコリアを含んでいる。17がにぶい橙色、18がにぶい黄褐色で、雲母と礫を胎土に含んでいる。

石器（図158、写18）

写18はB 2区の表土より出土した。黒曜石製で、長さ2.4cm、最大幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ3gの石錐である。各方面より剥離をしている。

（3）その他の遺物（写14）

写14の19はA 2区の表土より出土した。煙管の先端である。



図158 石器

第3節 まとめ

鈴塚B遺跡から1基の土壙、鈴塚C遺跡からは2軒の住居址、6基の土壙、1条の溝が検出された。

住居址は2軒とも長方形で、四方に壁柱穴をめぐらしている。炉は中央より離れて、1号住居址は南に、2号住居址は北側に寄っている。2号住居址だけは東のコーナーに貯蔵穴を持っている。長方形の形状、壁柱穴を有することから2軒とも縄文時代前期の遺構と推定される。

土壙で、鈴塚B遺跡の1号は浅く、深さが10cm程で方形である。鈴塚C遺跡は、円形で深さ50cm程が2基、楕円形で深さ30cmが2基、方形で深さ10cm・60cm程が2基である。全基とも遺物が出せないので時期は不明である。

溝は1条検出されたが、出土遺物は土師器なので、古墳時代以降のものと思われる。遺跡の途中で終わってしまうところから排水溝としての性格が強い。ただ、覆土は踏み固められたように堅い。

遺物は圧倒的に土師器が多い。続いて陶器片、須恵器片、縄文土器片の順である。

縄文式土器では、前期の浮島期に比定される破片が4～5点あった。主なものに、PL5の貝殻腹縁によるジグザグ文がある。近くの遺跡では、取手市井野の除戸遺跡、同市貝塚の向山貝塚が浮島期の土器を出土した遺跡である。ただ、向山貝塚の堅穴住居址は隣接方形で、壁溝を有して

いるところから、当遺跡の住居址の参考にはならない。

参考文献

- 浮島研究会 「常陸浮島古墳群」昭和51年
- 勝田文化研究会 「遠原貝塚の研究(木編Ⅰ)」昭和55年
- 茨城県 「茨城県史料 考古資料編 先土器 繩文時代」昭和49年
- 講談社 「日本の原始美術 1 繩文土器1」昭和54年

第10章 鈴塚古墳群

第1節 調査の経過

- 昭和54年4月 17日より調査用の杭打ち後、木糸をはり、墳丘測量の準備を始め、23日から測量を開始した。
- 昭和54年5月 引き続いて墳丘測量をする。月末に終了したので、発掘前の全景写真撮影を行った。
- 昭和54年6月 1日に1・2号墳に2m幅の十字トレントを組み、東西のトレントから発掘を始める。トレント内は、木の根、竹の根で掘りにくいが表土自体はやわらかい。4日より南北のトレント発掘も始める。7日から3号墳にもトレントを設定して掘り始める。同時に、周溝追求のため、1・2号墳にサブトレントを組み掘り進めた。
- 15日から、4・7号のトレントを設定し、掘り込みを開始する。続いて5・6号のトレントを設定し掘り始める。
- 28日、各墳とも周溝、主体部が発見できないので、トレントベルトセクションの実測、写真撮影にはいった。
- 昭和54年7月 続いてトレントベルトセクションの実測、写真撮影を行い、5日に6号墳の遺物、土器片の取り上げを最後に調査を終了した。

第2節 造構と遺物

1. 造構

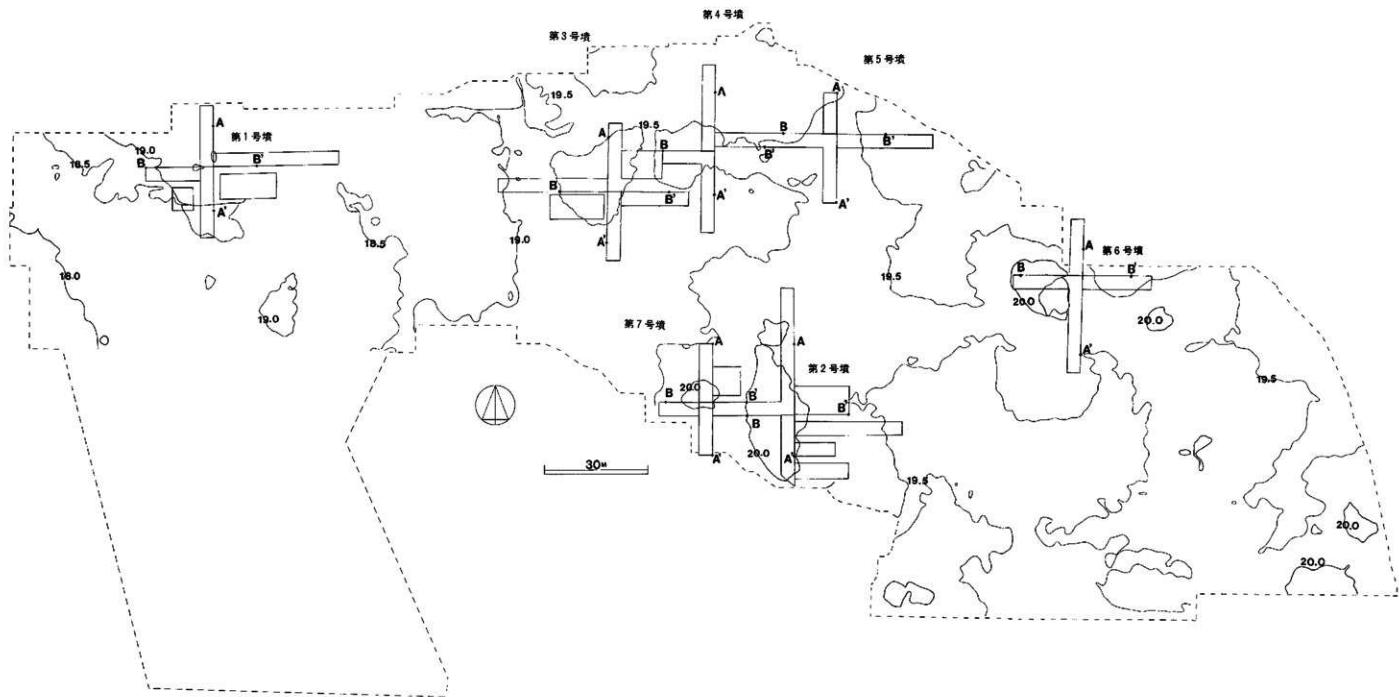
古墳の主体部は検出できなかったので、各墳丘の断面図を掲載する。

(1) 第1号墳(図160、写2)

黒褐色土が旧表土と考えられる。南北約9m、東西約11mに堆積している。塚の周辺部に同土層がないので、この旧表土は人為的に積み上げられたと考えられる。なお、南北のトレント内底より縄文土器片が1片出土した。

(2) 第2号墳(図160、写3)

2および2a層が旧表土と考えられる。南北は周辺部まで堆積しているが、東西は約7mの堆積である。7.5mのところで底面に起伏を持っている。



第159図 造構配図

(3) 第3号墳 (図161, 写4)

2および2a層が旧表土と考えられる。東方向は周辺部まで堆積されているが、他の3方は周辺部までないので積み上げられたと考えられる。なお、南北トレンチの南約3mと6mのところに30~40cm深さの落ち込みが認められた。

(4) 第4号墳 (図161, 写5, 6, 7)

2層の黒褐色土が旧表土と考えられる。南北約5m、東西約9mに堆積されており、周辺部にはない。人為的に積み上げたと考えられる。なお、東トレンチ底より、縄文土器片が1片出土している。

(5) 第5号墳 (図162, 写8)

2層の黒褐色土が旧表土と考えられる。南北約13m、東西約9mに堆積している。人為的に積み上げられたと考えられる。南北の上層内に、北から約4m、12mのところに、立木の根によるカク乱部分が残されている。

(6) 第6号墳 (図162, 写9, 11)

2および2a層が旧表土と考えられる。東西約15m、南北約13mにわたって堆積している。積み上げられたと考えられる。立木の根によるカク乱部分が、南北の土層に4箇所・東西の土層に3箇所残っている。なお、底面は中央が周辺より約35cm程盛り上がりになっている。西トレンチ内底より縄文土器片が6点出土している。

(7) 第7号墳 (図163, 写10)

2層が旧表土と考えられる。南北は約4m、東西は周辺部まで堆積している。底は中央が周辺より約50cm程盛り上がりっている。

2. 遺物

遺物は縄文土器片で、1号墳から1片、4号墳から1片、6号墳から6片出土した。

写12の1は1号墳の南北トレンチ底より出土したもので、縄文土器の底部に近い胴部片である。内外面ともたてのへらなで整形痕がある。外面のなでがより丁寧である。良好な焼きで、胎土中に砂・スコリア・バミスを含む。色調は明褐色である。壺形土器の破片と思われるが、正確には不明である。

2は4号墳の東トレンチ底より出土したものである。縄文時代中期の壺形土器の胴部片と思われる。

れる。内面はヘラなで、外面に繩文が施され、かすかに R I と判断できる。色はにぶい黄褐色、胎土に砂を含む。比較的良好な焼きである。

3～8は6号墳の西トレンチ底より出土した上器片である。接合はできなかつたが同一個体の底部および胴部で、内面にヘラなで、外面に丁寧なヘラなでをしている。色調はすべて外面が赤褐色、内面が赤褐色に褐灰色が交っている。繩文土器の平底の甕の底部、胴部である。

第3節 まとめ

発掘調査の結果は7基とも古墳ではないことが判明した。各塚のトレンチ断面の中には黒色土系の旧表土を検出できたので、ある時期に盛土されたことは明らかである。しかし、それがいつの時期で何のためかは解明できなかった。

また、塚に関連する物として、経塚・庚申塚が考えられるが、経塚は経を、庚申塚は塔を出土するので、当遺跡は両者とは違う。

古老の話では、当遺跡のあたりを「五十塚」と呼んだようで、字名が付けられる時期以前から塚が多数あったことが推定できる。

参考文献

- 茨城県『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』昭和49年

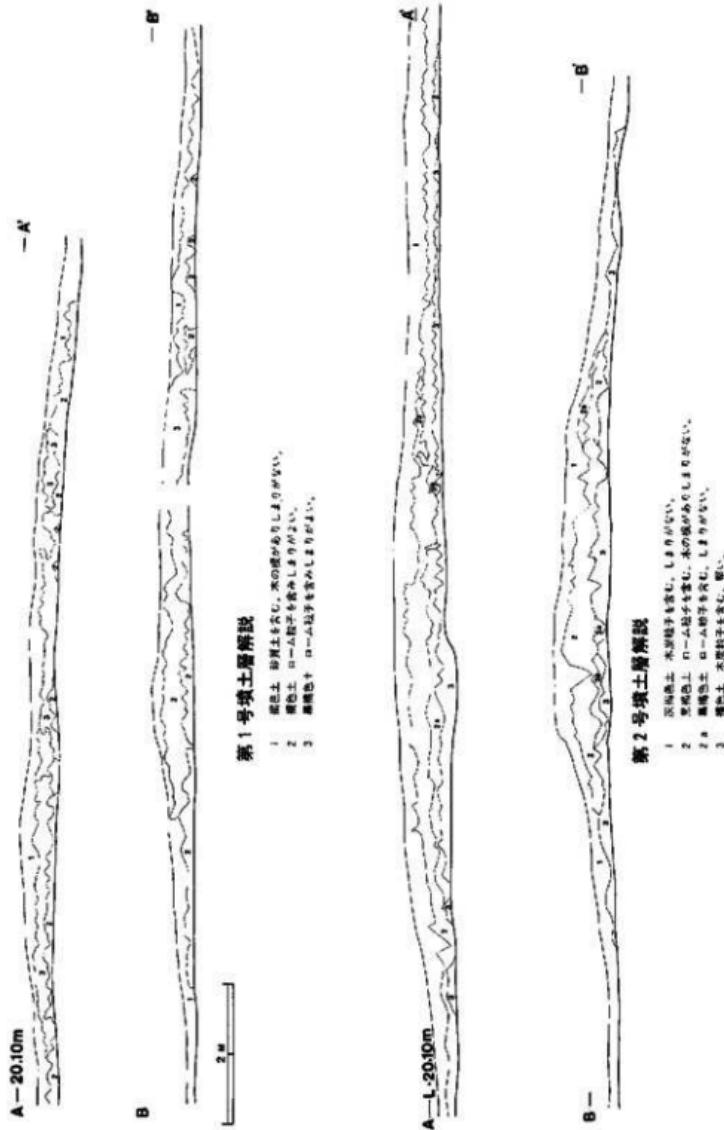
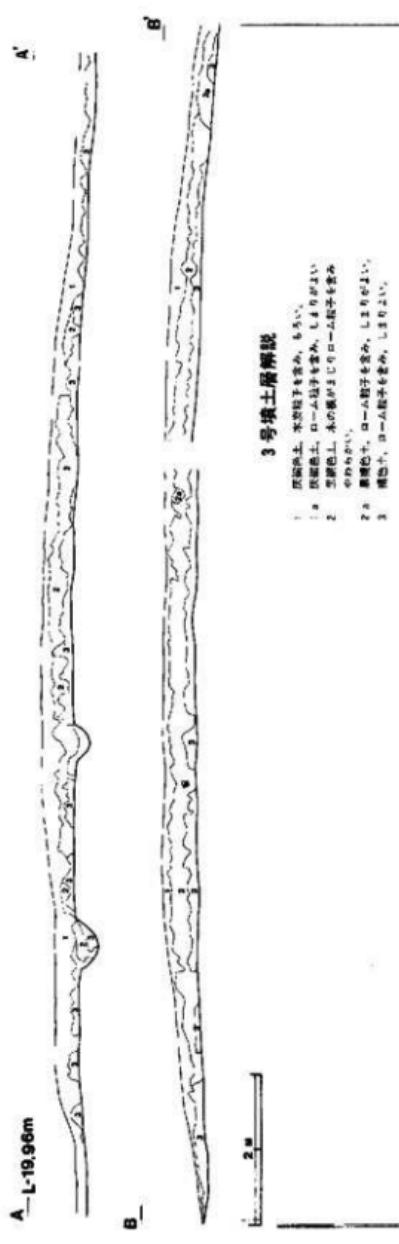
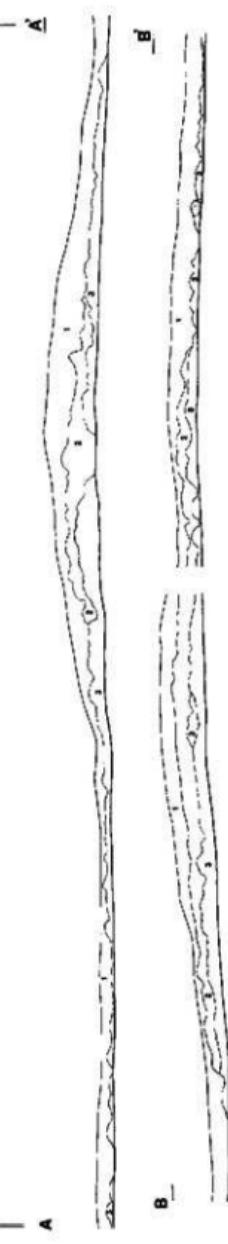


図160 第1,2号墳トレーンチ断面図



3号土壤剖面

- 1 残留土、木の種子を含む、しゃくい。
- 2 無機土、ローム粒子を含む、しゃくい。
- 3 残留土、木の種子を含む、じゆう。
- 4 無機土、ローム粒子を含む、じゆう。
- 5 無機土、ローム粒子を含む、じゆう。



4号土壤剖面

- 1 残留土、木の種子を含む、しゃくい。
- 2 無機土、ローム粒子を含む、じゆう。
- 3 無機土、木の種子を含む、じゆう。

図161 第3、4号 sond trench sections

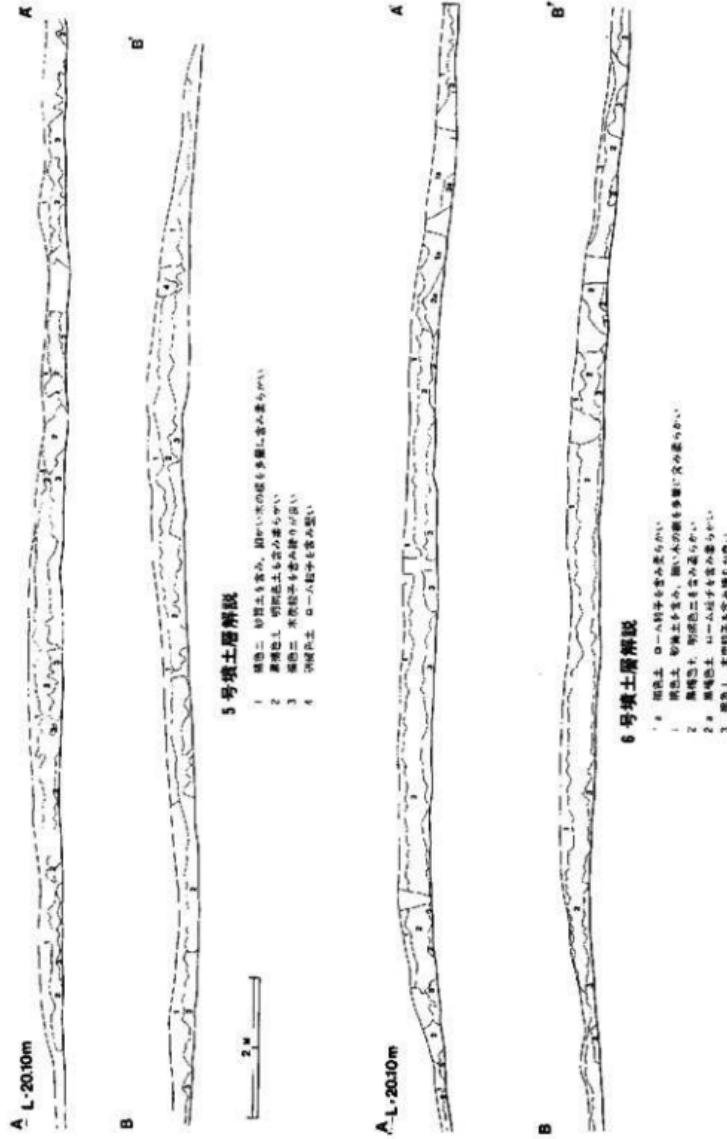
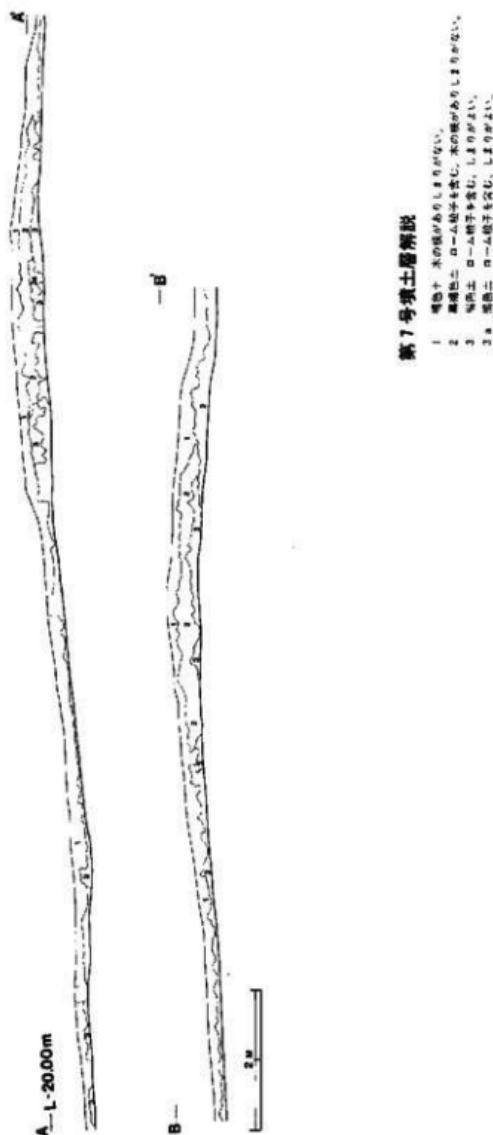


図162 第5・6号墳トレーンチ断面図

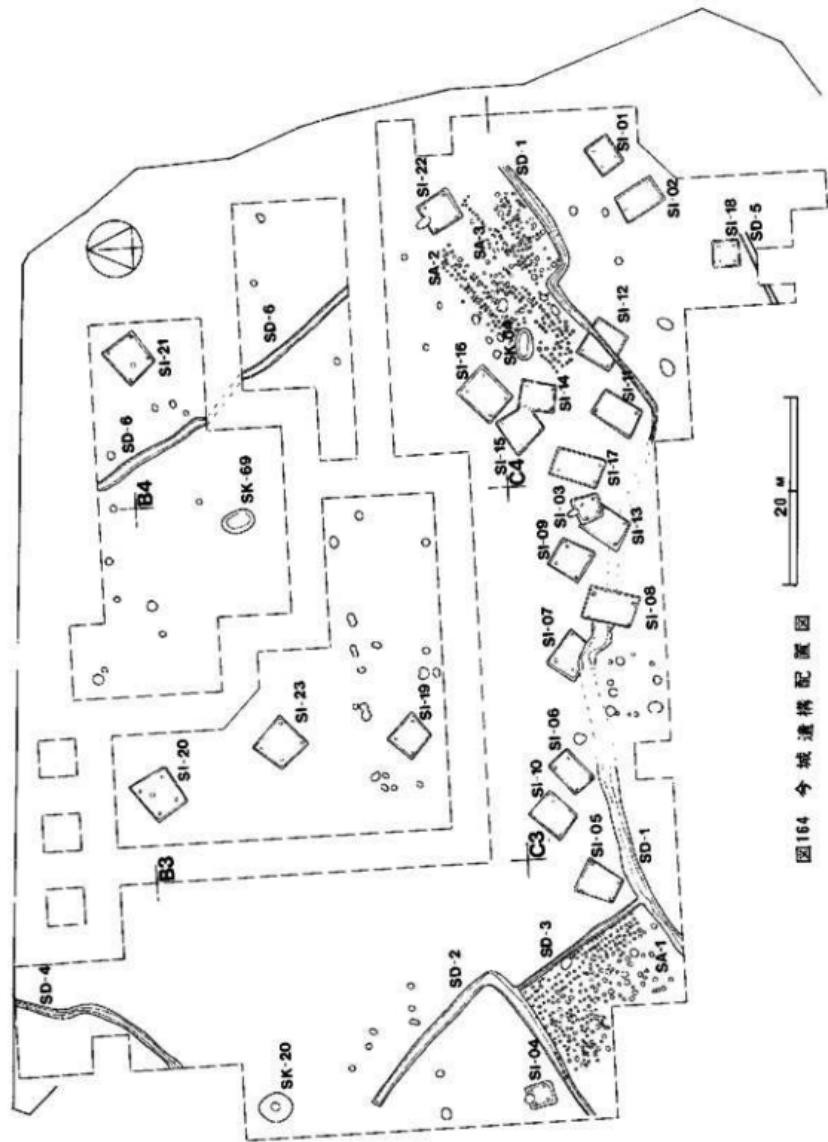
図163 7号墳トレンチ断面図



第11章 今城遺跡

第1節 調査の経過

- 昭和54年6月 27日よりグリッド設定の杭打ちを始める。
- 昭和54年7月 3日より遺構確認のためのグリッド発掘を開始する。グリッド出土内遺物に丸い川原石の多いのが目立つ。
- 昭和54年8月 グリッド発掘を続ける。各グリッドに1~2個の黒色の落ちこみを検出する。中旬より遺構掘りこみのためのグリッド拡張をする。溝を始めとして、住居址、土壙などの遺構を確認する。
月末に遺構にかかったベルトから除去し始める。
- 昭和54年9月 グリッド拡張ならびにC2、C3、C4区のベルト除去を続ける。5日、C2区より棚列状遺構を確認する。
7日より住居址1~4号、8日より土壙1~8号、溝1号を掘り始める。
中旬、掘り込んだ住居址3号より完形の土師器が出土する。また、棚列1・2・3号も掘り込みを開始する。
下旬には住居址1・2号の精査図面作成にはいる。住居址3号より完形品遺物が多数出土する。
- 昭和54年10月 住居址5~12号の掘り込み開始、3・4号の図面作成、写真撮影、溝2~4号掘り込み、土壙1~8号の精査平面図を作成した。
中旬には、住居址の13~17号の掘り込み、5~12号は精査、土壙9~19号の掘り込みをする。棚列1号の精査を行う。
- 昭和54年11月 住居址18~22号の掘り込み、13~17号の精査図面作成、棚列1~3号精査、土壙20~34号の精査平面図作成。35~40号の掘り込み、住居址1~12号のエレベーション実測を行った。
中旬、土壙41~72号の掘り込み、35~40号の精査平面図写真撮影、住居址23号の掘り込み、18~22号の精査、13~17号のエレベーション実測。溝1~4号の精査平面図作成、写真撮影、5・6号の掘り込み、棚列1~3号の平面図作成を行った。
- 下旬、土壙41~72号の精査及び平面図作成、住居址18~23号と溝1~6号のエレベーションと平面図作成、写真、エレベーション実測を行った。
- 昭和54年12月 各地区にある上塙のエレベーション作成、写真撮影、住居址の精査、平面図写真、エレベーション作成を行い13・14日にローリングタワー上より全景写真をとり、調査を完了した。





(1) 住居址

第 1 号住居址 (図 165, 写 1, 2)

本址は C 4_{c9}・C 4_{c0}・C 4_{d9}・C 4_{d0} に確認され、第 2 号住居址の北東、遺跡の最南東端に位置する。主軸方向は、N-60°-W で、長辺 3.8m、短辺 3.7m のほぼ方形を呈している。発掘

前は東西から北東にかけて土壁が築かれていた。壁高は88cmを測り、壁側溝は深さ約6mではほぼ全周している。床は平坦で、径44cm、深さ14cmですりばち形の炉を持つ。遺構の中央部より東側に炉が付設されていたが、カク乱されていた。ピットはP1～P4が認められ、4本とも橢円形をしており主柱穴と考えられる。覆土は、カク乱のため南部と東部に不自然な堆積があったが、大部分は、褐色、暗褐色でロームを少量含んでいる。カク乱を受けた部分はもろい。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 3 6 | 3 1 | 3 4 | 主柱穴 |
| P 2 | 2 8 | 2 2 | 1 8 | " |
| P 3 | 3 3 | 2 5 | 2 3 | " |
| P 4 | 3 2 | 2 8 | 2 7 | " |

遺物は、木の葉痕の半完成の土師器(甕)、鍍釉陶器などが出土している。

第2号住居址(図166、写3、4)

本址はC4e8・C4d8・C4e9に確認され、第1号住居址のすぐ南西に位置する。主軸はN-29°-Wで、長辺4.88m、短辺3.17mの長方形を呈している。南東部から北西部にかけて、床面直線上に溝状の直線のカク乱があり、そのため北西壁ぎわにあった炉址上部の大半が壊されていた。炉址の規模は長さ1.1m、幅40cm、深さ20cmである。壁高は62cmあり、床は平坦である。覆土は5層に分かれており、表土の耕作土の下に、暗褐色土(2層)、黒褐色土(3層)、褐色土(4層、5層)がある。4層を除いて、焼土粒子かローム粒子のどちらかを含んでいた。堆積はほぼ自然な堆積をしている。ピットは5本確認され、1本は橢円形、他の4本はほぼ円形を示しておりいずれも主柱穴と考えられる。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 3 4 | 3 2 | 3 7 | 主柱穴 |
| P 2 | 3 2 | 3 0 | 3 4 | " |
| P 3 | 3 6 | 2 9 | 5 1 | " |
| P 4 | 2 7 | 2 6 | 3 6 | " |
| P 5 | 3 4 | 3 0 | 3 7 | " |

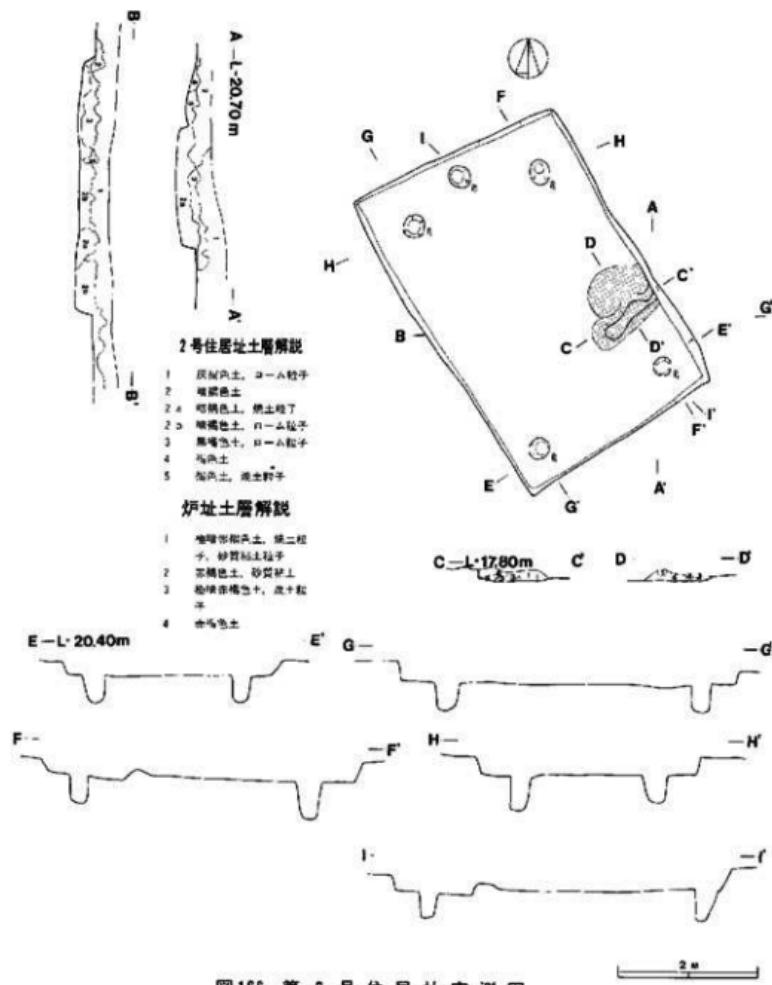


図166 第2号住居址実測図

第3号住居址(図167、写5~8)

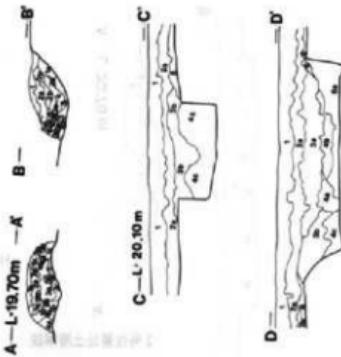
本址は、C 3_{b5}・C 3_{b6}・C 3_{c6}に確認された。9号住居址と17号住居址の間に位置し、13号住居址と切り合っている。主軸方向はN-16°-Wで、方形を呈している。一辺の長さは2.65mを有する。壁高は94cmあり、煙道は北側に伸びていた。

カマド内に、支柱、土器が埋蔵されており、カマド近くにビットが確認された。なお、北西部か



カマド土層解説

- 1 a 墓古褐色土。砂質、燒
土粒子、繩りが良い
1 b 墓古褐色土。砂質、燒
土粒子、木炭粒子、繩り
が良い
1 c 墓古褐色土。燒土粒子、
木炭粒子、繩りが良い
2 a 墓褐色土。砂質、燒土粒
子、繩りが良い
2 b 墓褐色土
3 a 墓褐色土。砂質、燒土粒
子、繩りが良い
3 b 墓褐色土。砂質、燒土粒
子、繩りが良い
3 c 墓褐色土。砂質、燒土粒
子、繩りが良い
3 d 墓褐色土。木炭粒子、燒
土粒子
3 e 墓褐色土。燒土粒子、燒
土粒子
3 f 墓褐色土。砂質、燒土粒
子、繩りが良い
4 a 墓褐色土。砂質、燒土粒
子、繩りが良い
5 明治褐色土。燒
土粒子
6 a 墓褐色土。木炭粒子、
燒土粒子、繩りが良い
6 b 墓褐色土。木炭粒子、
燒土粒子、繩りが良い



3号住居址土層解説

- 1 にぶい褐色土。木炭粒
子、燒土粒子
2 棕褐色土。木炭粒子、燒
土粒子
3 a 黒褐色土。燒土粒子、
木炭粒子
3 b 黒褐色土。燒
土粒子
4 a 棕褐色土。木炭粒子、燒
土粒子
5 明治褐色土。燒
土粒子

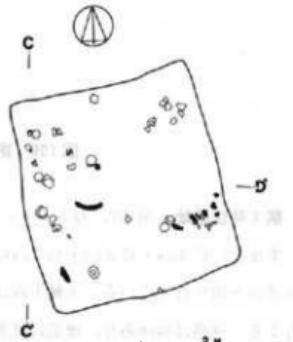
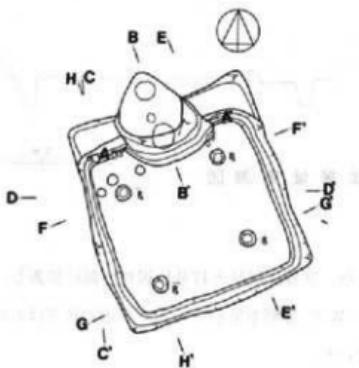
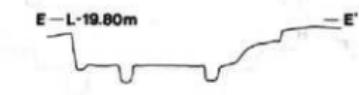
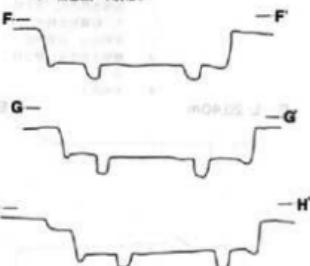


図167 第3号住居址実測図

ら南東にかけて、長さ約3m、太さ約15cmの炭化物が横たわっていたので、火災により、住居址の柱が炭化したものと考えられる。カマドは北側の壁に付設され、長径1.4m、短径1.2mを持ち煙道が北側につき出ている。焼土粒子、木炭粒子が多量に含まれていた。中には長さ約30cm、太さ約10cmの支柱が付けられていた。北壁に沿って、床より一段高くなつた台が付けられ、壁側溝がカマド址を残しに全周されている。ピットは4本確認されていて、ほぼ円形を示しており次の表のとおりである。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 2 3 | 2 0 | 1 9 | 主柱穴 |
| P 2 | 2 2 | 2 1 | 2 1 | " |
| P 3 | 2 3 | 2 1 | 2 5 | " |
| P 4 | 2 2 | 2 1 | 2 7 | " |

覆土が6層あり、にぶい褐色土(1)、褐色土(2)、黒褐色土(3)、褐色土(4)、暗褐色土(5)、明褐色土(6)の区別がされ、1~5層まで焼土粒子、木炭粒子が含まれている。遺物は、須恵器完形品3個、土師器完形品6個、陶器片1片、他は完形に近いが破片である。

第4号住居址（図168、写9~12）

本址は、B 2₁₄・C 2₁₄・C 2₁₅に確認され、2号溝の西側にあり遺跡の最西南端に位置する。主軸は、N-13°W、形は方形で、一边が2.85mを有する。壁側溝は深さ6.5cm、上幅15.5cmで北側を除く3方向にめぐらされている。北側にカマドが付設されており、長径1.57m、短径1.4m、深さ0.38mの規模を有するが、3号住居址と同じく煙道が北側に伸びていた。壁はすりばち型に立ち上がり、高さは約50cmを有している。床は水平、平坦で、踏み固めたようにしまっていた。ピットは4本確認された。大きさは不ぞろいであるが、すべて主柱穴と考えられる。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 2 2 | 1 9 | 3 1 | 主柱穴 |
| P 2 | 1 5 | 1 2 | 1 6 | " |
| P 3 | 2 5 | 2 0 | 2 0 | " |
| P 4 | 3 0 | 2 7 | 2 3 | " |

覆土は3層に分かれ、1層がにぶい褐色土、2層が黒褐色土、3層が明褐色土である。遺物は、カマド内に須恵器の完形品1個と、床より繩文土器片が出土したが、繩文土器片は埋没される途中で流れこんだと考えられる。



図168 第4号住居址実測図

第5号住居址(図169、写13)

本址は、C2₂₉・C2₃₀・C2₃₁・C2₃₂に確認された。1号溝と3号溝が付き合う地点の北東側に位置する。主軸はN-27°-Eで、上底4.0m、下底3.1m、高さ4.25mで、逆台形の形を呈している。四方の壁際には28~40cmの間隔で50本の竪柱穴がめぐらされている。カマド、炉の類はない。壁はすりばち型に立ち上がり、高さは6cm~13cmを持っている。床は北から南にかけて傾斜を持っている。覆土は3層に分かれ、暗褐色(1層)、褐色(2層)、明褐色(3層)。

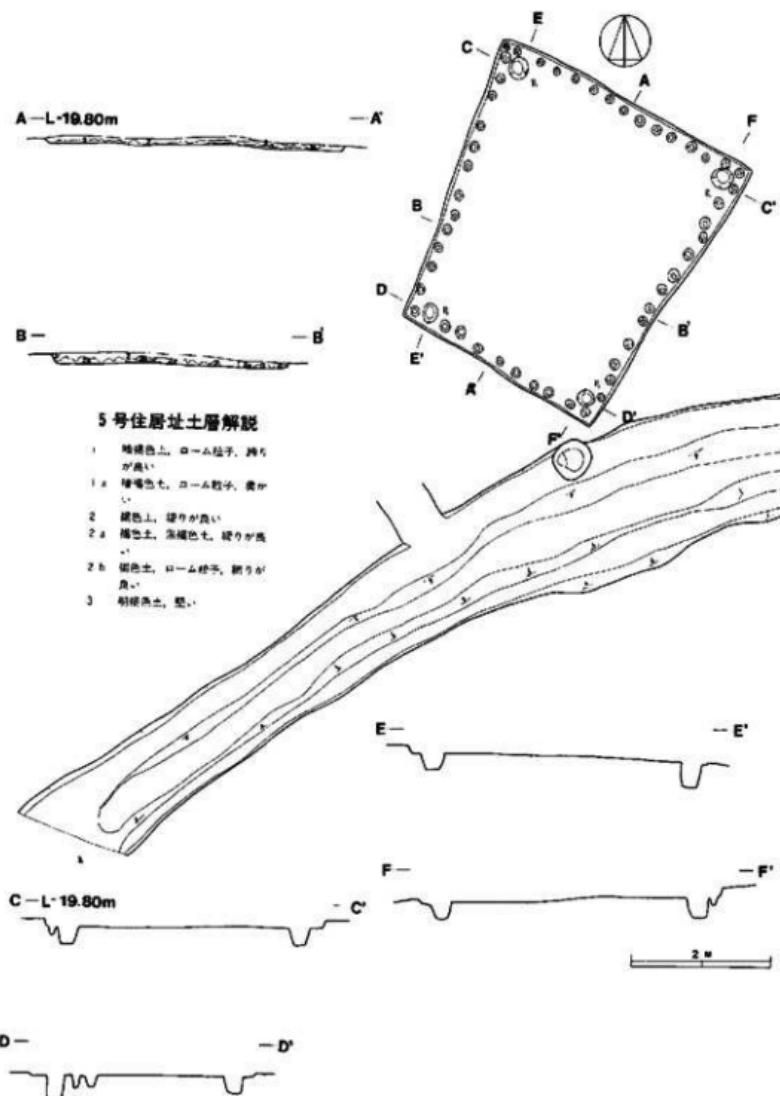
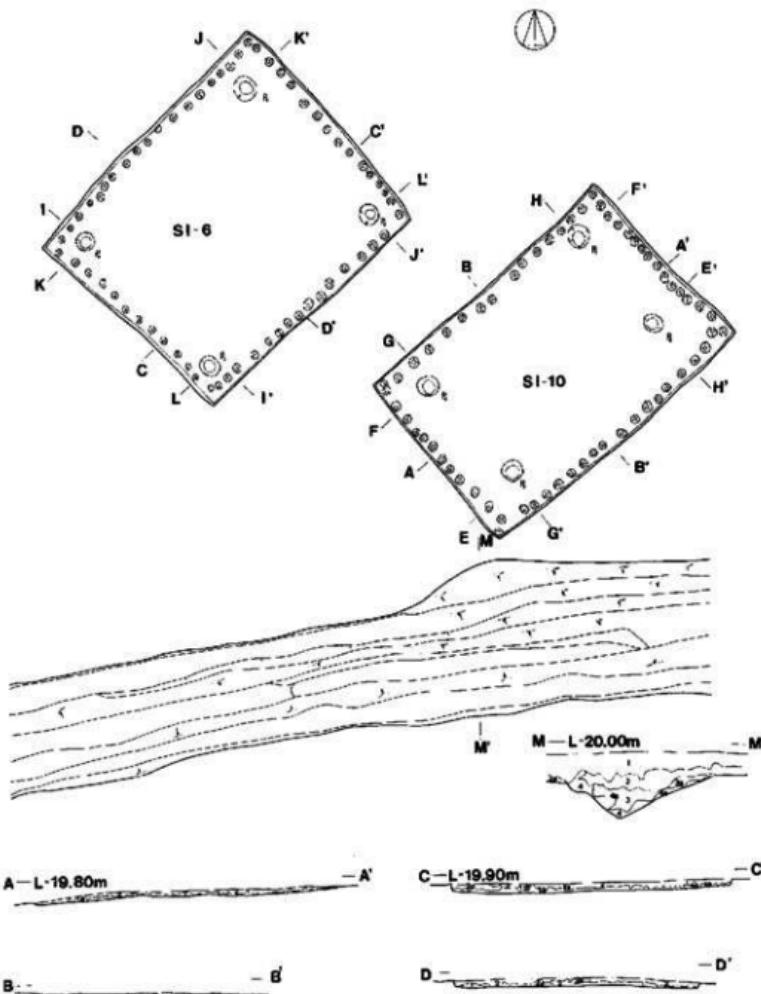


図169 第5号住居址実測図



10号住居址土層解説

- 1. 砂褐色土、柔らかい。
- 2. 塗抹灰土、ローム粒子、
柔らかい。
- 3. 塗抹灰土、堅い。
- 4. 粘土灰土、ローム粒子、
堅い。

5号住居址土層解説

- 1. 砂色土、堅い。
- 2. 砂色土、粘土、
柔らかい。

図170 第6，10号住居址実測図

で、なお2層にローム粒子を含んでいる。ピットは4本確認されその4本とも梢円形で、駆柱穴につき合うように掘られていた。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 3 2 | 2 6 | 2 5 | 主柱穴 |
| P 2 | 3 2 | 2 9 | 2 7 | " |
| P 3 | 2 5 | 2 3 | 2 3 | " |
| P 4 | 2 7 | 2 1 | 3 5 | " |

遺物は、縄文式土器片数10点出ている。

第6号住居址(図170, 171, 写14)

本址はC 2_{a3}・C 2_{b2}・C 2_{b3}に確認され、1号溝の北側第10号住居址の右側に位置している。長辺4.50m、短辺2.95mの長方形をなし、主軸N-48°-Eを示している。深さは確認面より12cmと浅い。覆土は2層あり、1層は褐色でローム粒子を少量含み、2層は暗褐色土である。床は2~3cm程度の起伏を持ちながら、北東から南西にかけて若干の傾斜を示している。ピットは梢円形の4本が確認され次の表のとおりである。壁高は北・東・南壁が垂直に立ち上がり、5~7cmと低く西壁は消滅している。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 3 5 | 3 0 | 2 5 | 主柱穴 |
| P 2 | 3 0 | 2 4 | 2 4 | " |
| P 3 | 3 2 | 3 0 | 2 6 | " |
| P 4 | 3 3 | 2 8 | 2 7 | " |

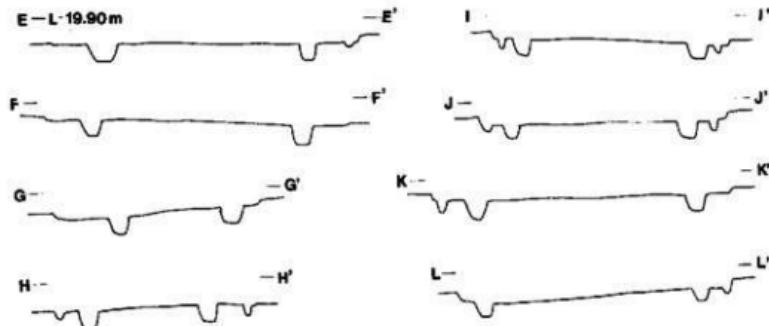
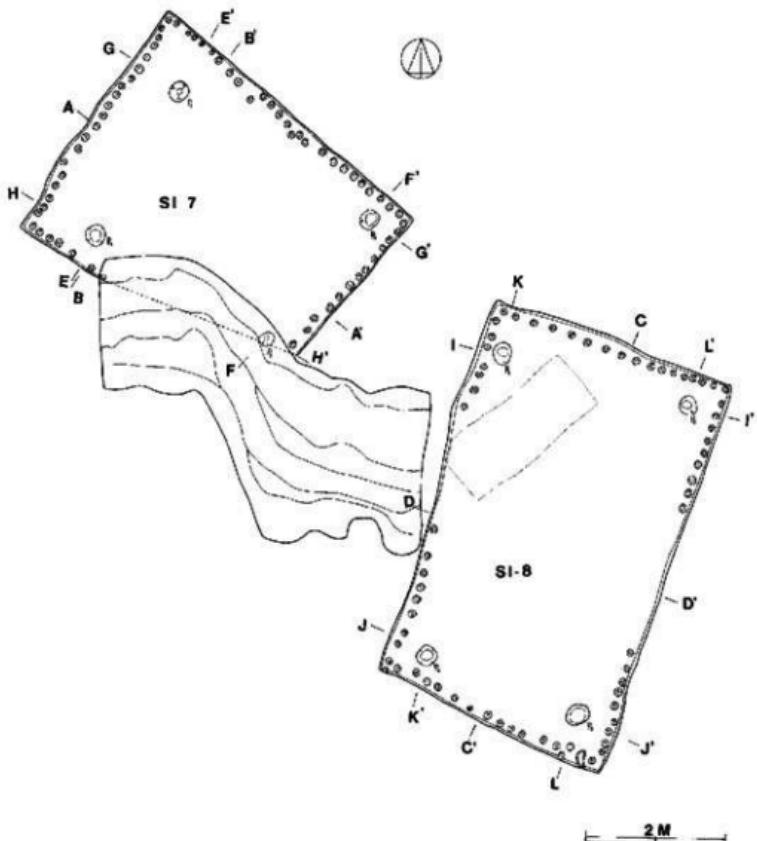


図171 第6, 10号住居址エレベーション



A-L-19.90m

- A'

B

- B'

C-19.80m

- C'

D-

- D'

7号住居址土層解説

- 1 棕色土。ローム粒子。堅い。
- 1a 棕色土。柔らかい。
- 2 棕褐色土。ローム粒子。堅い。

8号住居址土層解説

- 1 棕色土。ローム粒子。堅い。
- 1a 棕色土。ローム粒子。柔らかい。
- 2 棕褐色土。ローム粒子。粘土粒子。柔らかい。
- 2a 棕褐色土。柔らかい。

図172 第7、8号住居址実測図

遺物は縄文土器片が10数点出土している。カマド炉址の類はないが、5号住居址と同じく壁際には62本の壁柱穴が四方にめぐらされている。

第7号住居址(図172、173、写15)

本址は、C3a₅・C3b₅・C3b₆・C3b₇に確認された。6号住居址の東側に位置している。主軸はN-51.5°-Wで、長辺4.43m、短辺3.72mの長方形を呈している。南側は1号溝が走っているため5分の1程消失している。床は北から南へ、東から西へと傾斜をし、1号溝に向かうよう坂状になっている。その差は13cmほどの落差を持っている。壁は浅いながらも垂直に立ち上がり4cm~8cmの高さを持っている。覆土は2層で、1層は褐色土でローム粒子を含む層と含まれない層に分かれ、2層は暗褐色土でローム粒子を含んでいる。ピットは4本確認されたが、内1本は、1号溝に切られ、半分くらいの深さしか残っていない。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-------------|
| P 1 | 2 9 | 2 8 | 3 4 | |
| P 2 | 2 8 | 2 7 | 3 0 | |
| P 3 | 2 2 | 2 0 | 6 | 第1号溝のため半分欠陥 |
| P 4 | 3 1 | 2 8 | 4 6 | |

遺物は縄文土器片10数点出土した。カマド、炉址の類はなく、1号溝に切られながらも、四方の壁に65本の壁柱穴が残っていた。

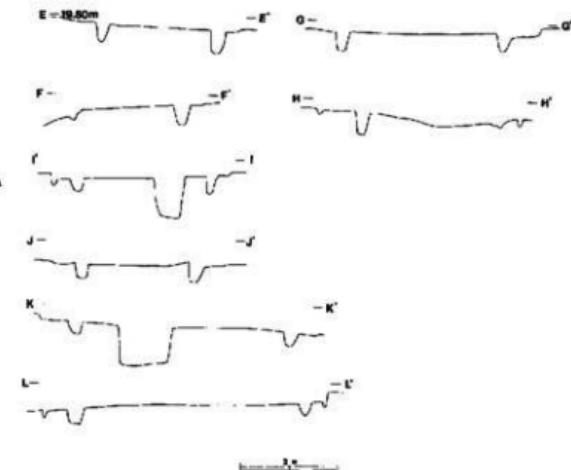


図173 第7、8号住居址エレベーション

第8号住居址（図172、173、写16）

本址は、C3_{b7}・C3_{c7}・C3_{c8}・C3_{d7}に確認され、7号住居址の東側、9号住居址の西側に位置する。形状は長方形を呈し、長辺5.82m、短辺3.70mを有する。土軸はN-26°-Eである。北西部の一辺がややふくらみを持つ。北西から、南東にかけて1号溝が横切り、また、中央の北西部よりに1号土塙が掘りこまれている。覆土は2層で、褐色土の1層と、暗褐色上の2層に分かれともにローム粒子を含んでいる。壁は北側が垂直に立ち上がり、南側は2~3cmほどの高さしか認められず、東西の壁はすりばち型に切ってある。床は北から南にかけて傾斜を示し28cmの差を持っている。ピットは円形、楕円形の4本が確認された次の表のとおりである。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 3.3 | 2.7 | 3.4 | 主柱穴 |
| P 2 | 2.8 | 2.4 | 2.6 | " |
| P 3 | 3.5 | 2.7 | 3.0 | " |
| P 4 | 2.8 | 2.8 | 3.4 | " |

1号溝によって切られながらも、四方に壁柱穴が組まれ4cm~15cmほどの間隔でならんでいる。炉、カマドの跡はない。遺物は縄文器片が數10点出ている。

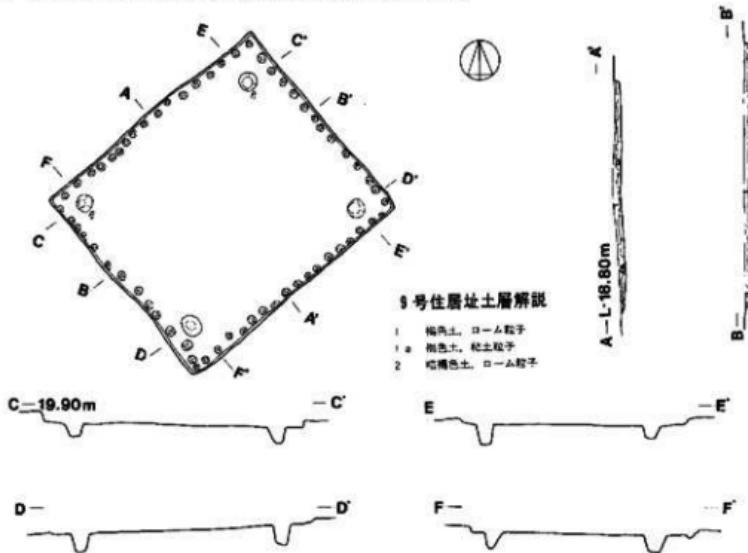


図174 第8号住居址実測図

第9号住居址（図174、写17）

本址は、C3a₁・C3b₁・C3c₁・C3c₂・C3b₂に確認された。8号住居址の東側、13号住居址の西側に位置する。長辺3.78m、短辺3.82mの長方形を呈し、主軸N-32°Eを有している。覆土は、2層に分かれ、褐色土（1層）、暗褐色土（2層）であり、ローム粒子、粘土粒子をそれぞれ含んでいる。ピットは4本あり、形状等は次の表のとおりである。壁は四方とも垂直に立ち上がり4cm～8cmの高さを有している。床は北から南にかけて12cmの落差の傾斜を示し、西から東にかけて6cmの落差を持つ傾斜を示している。若干であるが中央が2～3cm程もり上がっている。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 2.5 | | 1.4 | 主柱穴 |
| P 2 | 2.5 | 2.4 | 2.9 | " |
| P 3 | 3.1 | 2.6 | 2.5 | " |
| P 4 | 2.6 | | 2.3 | " |

遺物は縄文土器片が10箇点出土した。カマド、炉址はなく、四方の壁際に61本の壁柱穴を有している。

第10号住居址（図170、171、写18）

本址は、C3a₁・C3a₂・C3b₁・C3b₂に位置し、5号住居址、6号住居址の間にはさまれて確認された。形状は台形状で、上底3.85m、下底4.24m、高さ3.35mを有し、主軸はN-45°Eである。覆土は2層で、1層は暗褐色土、2層は明褐色土である。1・2ともローム粒子を含む層と含まない層にそれぞれ分けられる。4本ともほぼ円形の形状を示している。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 3.6 | 3.2 | 2.7 | 主柱穴 |
| P 2 | 3.0 | 2.7 | 1.9 | " |
| P 3 | 3.0 | 2.7 | 2.1 | " |
| P 4 | 2.7 | 2.7 | 2.4 | " |

遺物は縄文土器片数10点である。壁は、北側が垂直であるが他はすりばち型に立ち上っている。高さは6cm～10cmである。床は中央から南側にかけて坂状に傾斜している。四方の壁際に沿うように、63本の壁柱穴が、20cm～40cmの間隔で並んでいる。

第11号住居址（図175、176、写19）

本址は、C4c₂・C4c₃・C4d₂・C4d₃に確認された。東側の12号住居址と西側の7号住居址にはさまれた形に位置している。形状は台形状で、上底4.76m、下底5.3m、高さ3.16mを有し、主軸は

N-32.5°-Eである。床はほぼ平坦である。壁はすりばち型で、高さは北壁が22cmと高く他は10cm前後の高さである。覆土は耕作土よりベルトを残してあるので1層あり1層は、耕作上の褐色上でローム粒子、木炭粒子を含み、2層は明褐色土で、3層が暗褐色土でローム粒子を含み、4層が極暗褐色でローム粒子、焼土粒子を含んでいる。ピットはほぼ円形の4本確認され、次の表のとおりである。

| ピット番号 | 長 径 cm | 短 径 cm | 深 さ cm | 備 考 |
|-------|--------|--------|--------|-----|
| P 1 | 2 9 | 2 6 | 2 5 | 主柱穴 |
| P 2 | 2 4 | | 1 8 | " |
| P 3 | 3 3 | 2 8 | 1 8 | " |
| P 4 | 3 1 | 2 8 | 2 1 | " |

遺物は縄文式土器片が10数点出土した。四方にも68本の壁柱穴を有している。カマド、炉址の類はない。

第12号住居址（図175、176、写20）

本址は、C4ca・C4cs・C4d4・C4dsに確認され、11号住居址の左側に位置する。形状は方形で、1辺約4.1mを有する。主軸はN-36°-Eである。北東から南西にかけて、1号溝が走り、本址を斜めに2分した形になっている。覆土は3層あり、1層褐色土、2層暗褐色土でローム粒子を含む。3層褐色土である。壁は垂直で20cm前後の深さを持つ。床は微小の起伏を持ちながらも平坦に近く、中央が1号溝構築のためくぼんでいる。ピットは円形、梢円形の4本が確認された。

| ピット番号 | 長 径 cm | 短 径 cm | 深 さ cm | 備 考 |
|-------|--------|--------|--------|-----|
| P 1 | 3 3 | 2 5 | 2 8 | 主柱穴 |
| P 2 | 2 4 | 3 3 | 2 0 | " |
| P 3 | 2 6 | | 2 2 | " |
| P 4 | 2 1 | 2 4 | 2 2 | " |

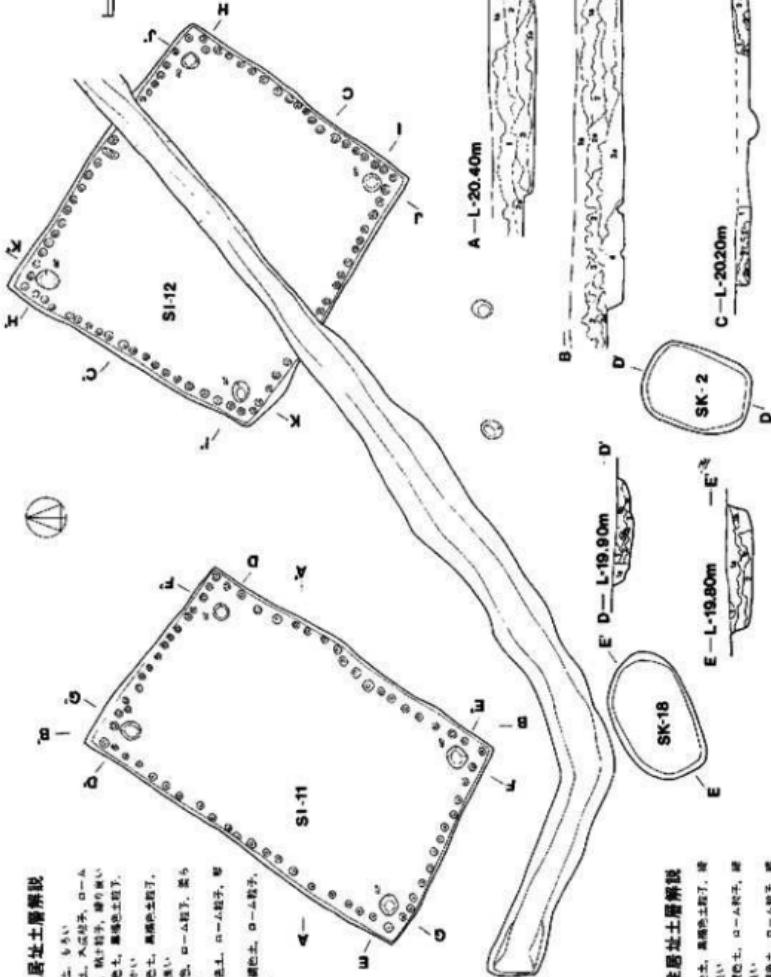
遺物は縄文土器片10数点出土した。四方の壁に74本の壁柱穴が築かれている。

第13号住居址（図177、写21）

本址は、C3ba・C3ca・C3cc・C3de・C3doに確認された。9号住居址の東側、17号住居址の西側に位置している。形は長方形を呈しており、長辺5.48m、短辺4.0mを測る。主軸はN-13.5°-Eを指している。北東部で、3号住居址と複合していて、3分の1ほど欠陥している。覆土は3層に分かれているが、1～3層とも褐色土で、1・2層がローム粒子を含んでいる。壁は東側が3号住居址と切り合うため欠損している。他の三方は10cm前後の高さを持っていてすりばち型に立ち上がっている。床は東から西にかけて傾斜しており、落差は21cm程ある。ピットは次の表のとおりである。

11号住居址土壤解説

1. 黄褐色土、砂質土。
1. a. 砂土。大粒砂子、ローム
含む。軟弱地盤、排水不良。
2. 黄褐色土、鐵褐色土斑点。
風化度小。
2. 黄褐色土、鐵褐色土斑点。
3. 铁褐色土、ローマ柱子、灰化
地。
3. a. 铁褐色土、ローマ柱子、灰
化地。
4. 铁褐色土、ローマ柱子、
灰化地。



12号住居址土壤解説

1. 黄褐色土、鐵褐色土斑点、鐵
化地。
2. 黄褐色土、ローマ柱子、鐵
化地。
2. a. 黄褐色土、ローマ柱子、鐵
化地。
3. 黄褐色土、鐵化地。

図175 第11、12号住居址第2、10号土壤実測図

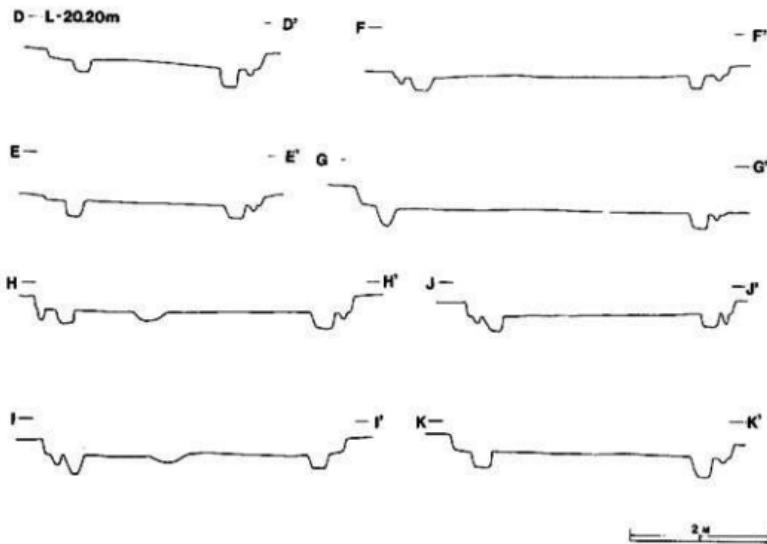


図178 第11, 12号住居址エレベーション

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 2.5 | 2.3 | 1.7 | 主柱穴 |
| P 2 | 3.7 | | 2.0 | 半円 |
| P 3 | 2.5 | 2.2 | 3.0 | " |
| P 4 | 2.5 | 2.4 | 2.4 | " |

ピット2は、3号住居址複合のため、半分を切られ半円となって露呈した。3号住居址のが深く、本址よりも後に築かれたと考えられる。西・南・東の三方に38本の壁柱穴が築かれている。南北壁の一部が消えているのは1号溝が走っているためである。遺物は縄文上器片が10箇点出土している。壁は四方ともすりばち型を呈し、壁高約30cm前後を測る。床は中央から東北にかけて、ゆるやかな起伏を持っている。差は、5cmほどである。

第14号住居址（図178, 179, 写22）

本址は、C4aa-C4ba-C4baに確認された。4号土壙の西側に位置する。

主軸はN-10.5°-Eで長方形を示し、長辺4.43m、短辺3.33mを有している。北西部が15号住

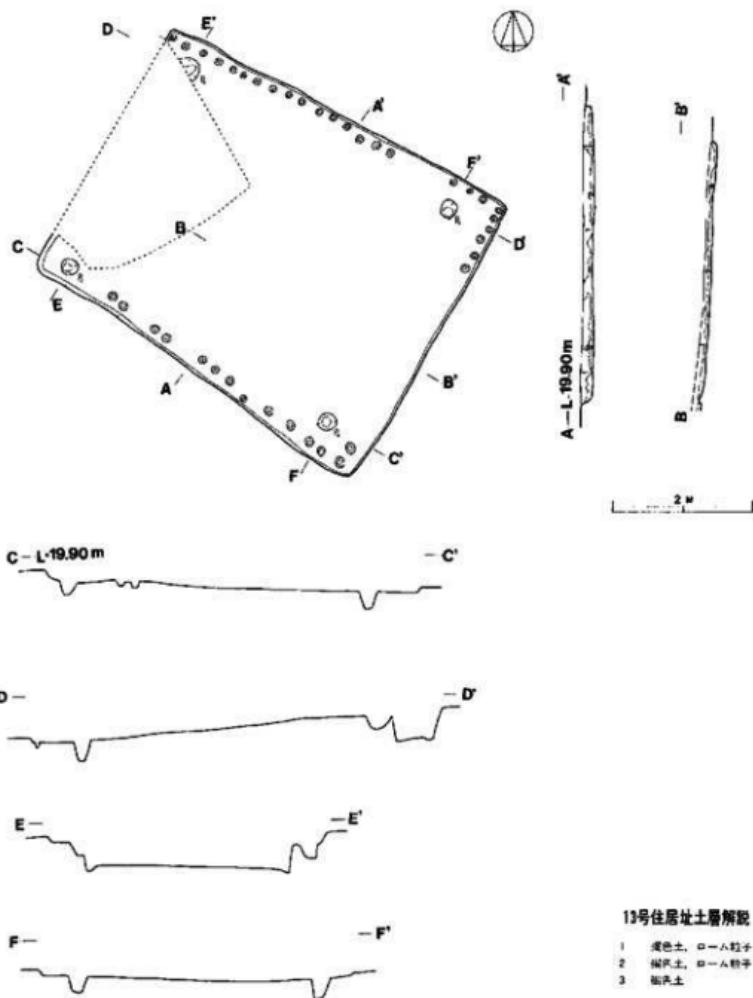
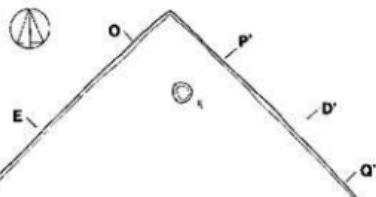


图177 第13号住居址实测图

14号住居址土層解説

- 1 塗褐色土。□—ム粒子
- 1-a 塗褐色土。□—ム粒子
- 1-b 塗褐色土
- 2 漆色土
- 2-a 漆色土。□—ム粒子



15号住居址土層解説

- 1 塗褐色土。□—ム粒子
- 1-a 塗褐色土。□—ム粒子
- 2 塗褐色土
- 2-a 塗褐色土。■—ム粒子

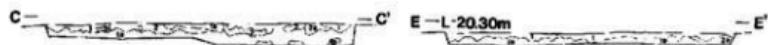
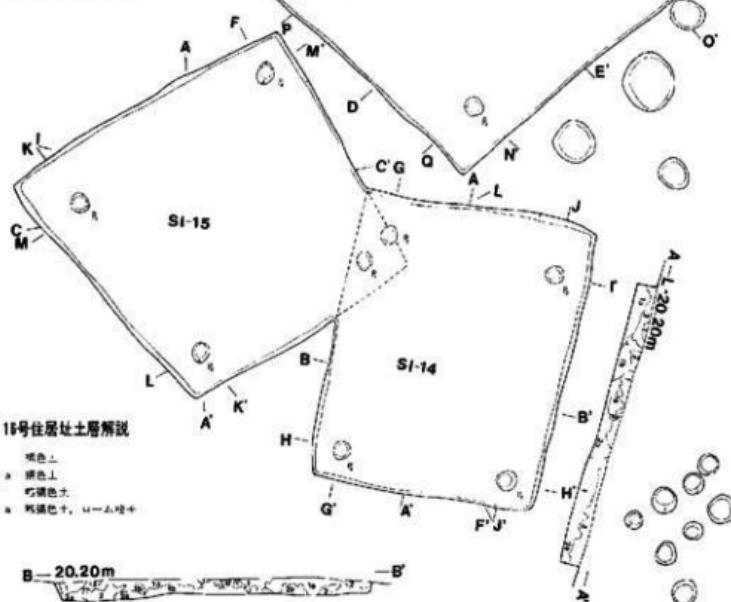


図178 第14, 15, 16号住居址実測図

居址と接続している。覆土は2層で1層は暗褐色土でさらにローム粒子を含む層と含まない層に分かれる。2層は褐色土で、これも、ローム粒子を含む層と含まない層に分かれる。ピットは4本確認された。

| ピット番号 | 長 径 cm | 短 径 cm | 深 さ cm | 備 考 |
|-------|--------|--------|--------|-----|
| P 1 | 2 7 | 2 4 | 2 0 | 主柱穴 |
| P 2 | 2 6 | 2 4 | 1 9 | 〃 |
| P 3 | 3 0 | 2 8 | 2 2 | 〃 |
| P 4 | 2 6 | 2 5 | 2 3 | 〃 |

遺物は縄文土器片が数10点出土している。炉、カマドの類はない。

第15住居址(図178、179、写22)

本址は、B4je・B4aa・B4az・B4aaに確認された。17号住居址の北東部に位置している。台形状を呈し、上底3.60m、下底4.36m、高さ4.09mを測り、主軸はN-59°-Eを示している。東南部は14号住居址と接している。壁高は東側で最も高く28cmを、西側が最低で20cmを測る。北部が垂直な立ち上がりを示し、他の三方はすりばら型を示す。床も北側から南側にかけて傾斜をしている。覆土は2層に分かれ、1層は暗褐色土でローム粒子を含む層と含まない層に区別され、2層は褐色土でやはりローム粒子を含む層と含まない層に分けられる。ピットは4本検出された。

| ピット番号 | 長 径 cm | 短 径 cm | 深 さ cm | 備 考 |
|-------|--------|--------|--------|-----|
| P 1 | 2 6 | 2 5 | 2 0 | 主柱穴 |
| P 2 | 3 0 | 2 5 | 2 1 | 〃 |
| P 3 | 2 6 | 2 4 | 2 2 | 〃 |
| P 4 | 2 9 | 2 3 | 1 9 | 〃 |

遺物は縄文土器片数10点と、石鎚を中心とする石器が出土した。炉、カマドの類はない。

第16号住居址(図178、179、写23)

本址は、B4ia・B4ja・B4je・B4ja・C4aaに確認され、14号住居址、15号住居址の北側に位置する。主軸はN-44.5°-Eで、形は長辺4.95m、短辺3.98mの長方形であるが、東北の一辺が外側にややふくらみを持っている。壁高は16cm~20cm程度ですりばら型に立ち上がり、床は、西北から南東にかけて傾斜を示している。ピットは4本確認され、次の表のとおりである。

| ピット番号 | 長 径 cm | 短 径 cm | 深 さ cm | 備 考 |
|-------|--------|--------|--------|-----|
| P 1 | 2 8 | 2 8 | 2 2 | 主柱穴 |
| P 2 | 2 6 | 2 3 | 2 0 | 〃 |
| P 3 | 2 8 | 2 7 | 2 1 | 〃 |
| P 4 | 2 6 | 2 6 | 2 1 | 〃 |

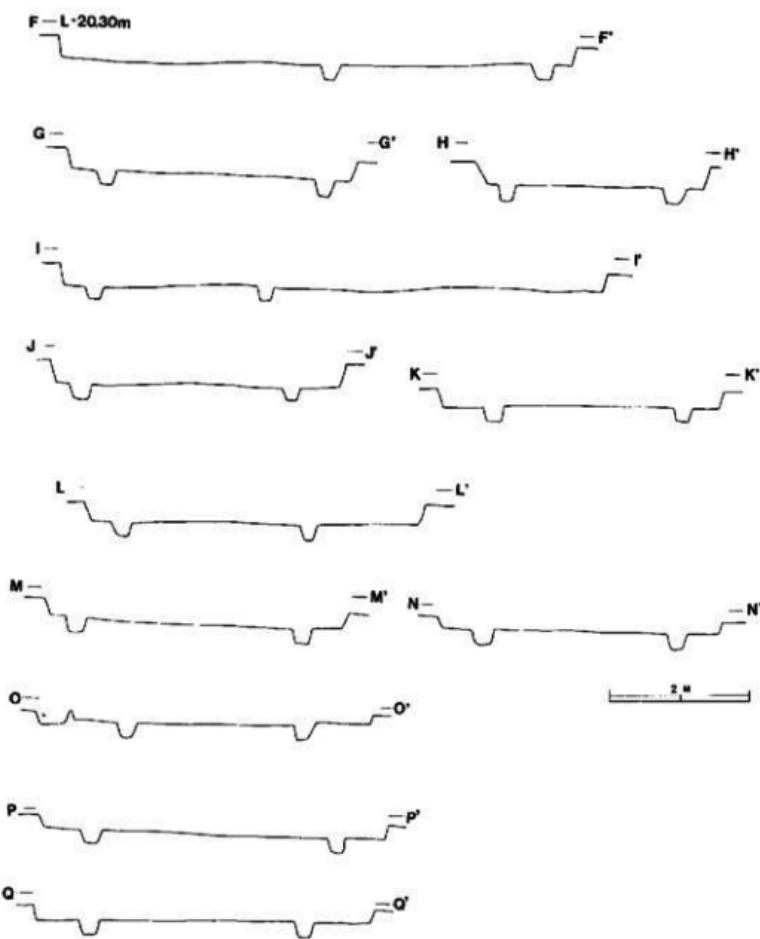


図179 第14, 15, 16号住居址エレベーション

覆土は2層に分かれ、1層は褐色土、2層は暗褐色土で、ローム粒子を含む層と含まない層に分かれている。遺物は、織文土器片10数点と石錐を中心とする石器が出た。

第17号住居址(図180、写24)

本址は、C4b₁・C4b₂・C3c₁・C4c₁に確認された。3号住居址と11号住居址の中間に位置する。形状は長方形で、長辺5.18m、短辺3.03mである。主軸はN-22°Eである。壁の高さは10cm程度で壁はすりばち型に立ち上がっている。床は北から南にかけてなだらかな坂状になっている。覆土は、褐色土で、ローム粒子を含む。しまりの違いで3層に分けられる。ほぼ円形を示すピットが4本確認された。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 25 | 23 | 24 | 主柱穴 |
| P 2 | 27 | | 18 | # |
| P 3 | 25 | 21 | 20 | # |
| P 4 | 25 | 24 | 26 | # |

遺物は織文土器片10数点出土した。壁柱穴が四方の壁際に付けられているが、東南の1部分が欠落していた。

第18号住居址(図181、写25)

本址は、C4f₆・C4f₇・C4g₆・C4g₇に確認され、5号溝のすぐ北側に位置する。形状は方形で、一辺が約2.70mと比較的小さな住居址である。主軸はN-0°で北側に向いている。壁は、北側だけがすりばち型であるが、他はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は、北側が51cm、他は44cm程度である。床は中央より北西側が一段低くなっている、その差は5cm程度である。1・2号住居址と同様に表土の中央に、溝、土壘状のあとがあり、覆土が移動しているとともに見られる。覆土は3層に分かれ、1層が褐色土、2層が黒褐色でローム粒子、焼土粒子を含む。3層は明褐色土である。ピットは4本確認された。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 25 | 21 | 19 | 主柱穴 |
| P 2 | 23 | 20 | 26 | # |
| P 3 | 28 | 20 | 24 | # |
| P 4 | 29 | 21 | 40 | # |

カマド、ガレの類はない。遺物は土師器の内面が黒色に研磨された皿が出土している。

第19号住居址(図182、写26)

本址は、B3g₃・B3g₄・B3g₅・B3h₂・B3h₃にまたがって確認された。23号住居址の南側に位置する。形状は長方形で、長辺4.05m、短辺3.51mを有するが、北西の一辺が、外側にやや

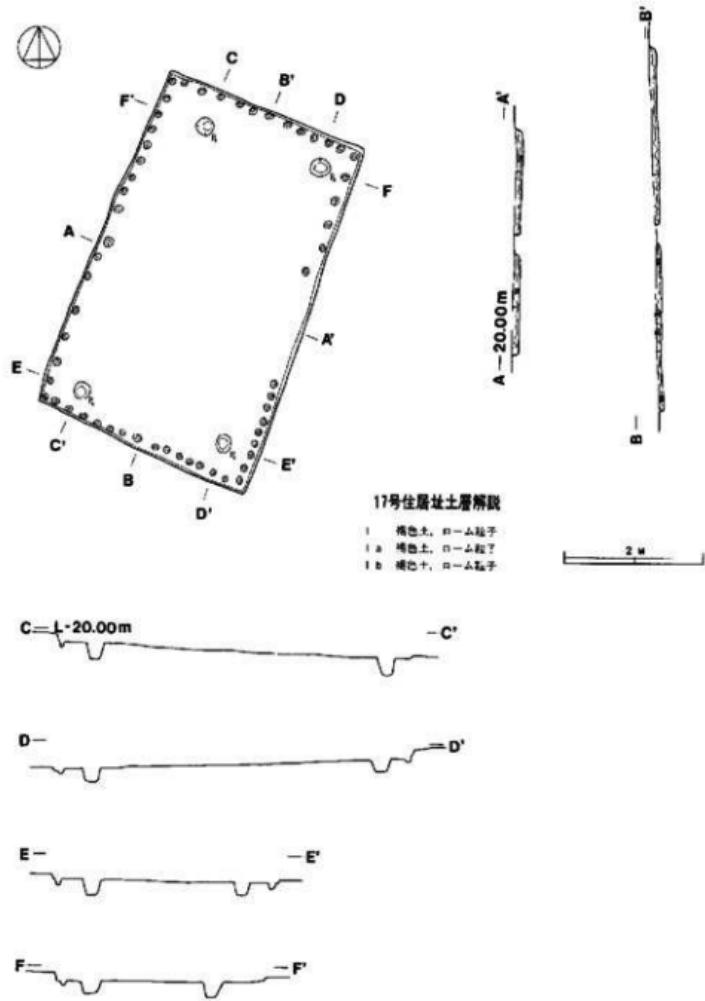
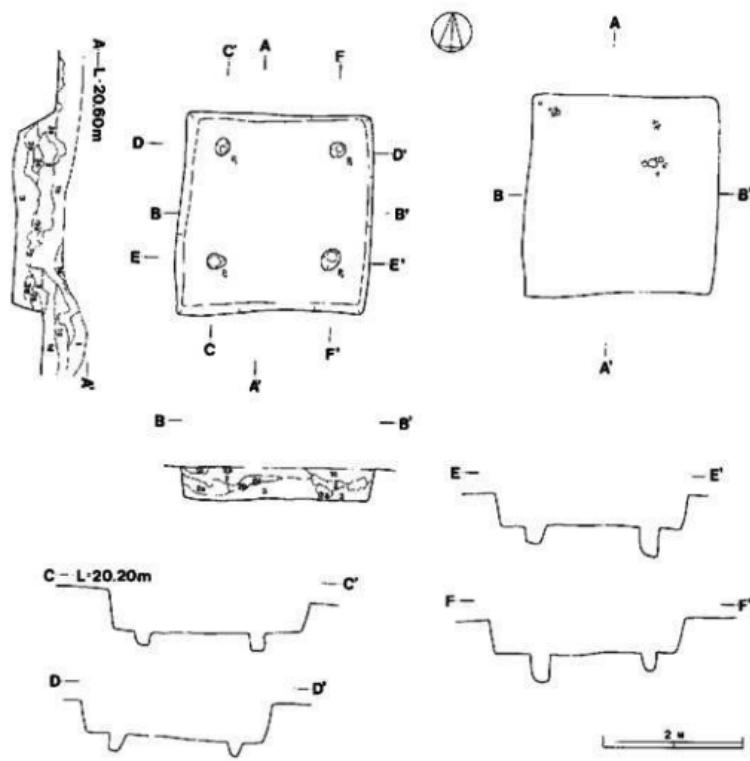


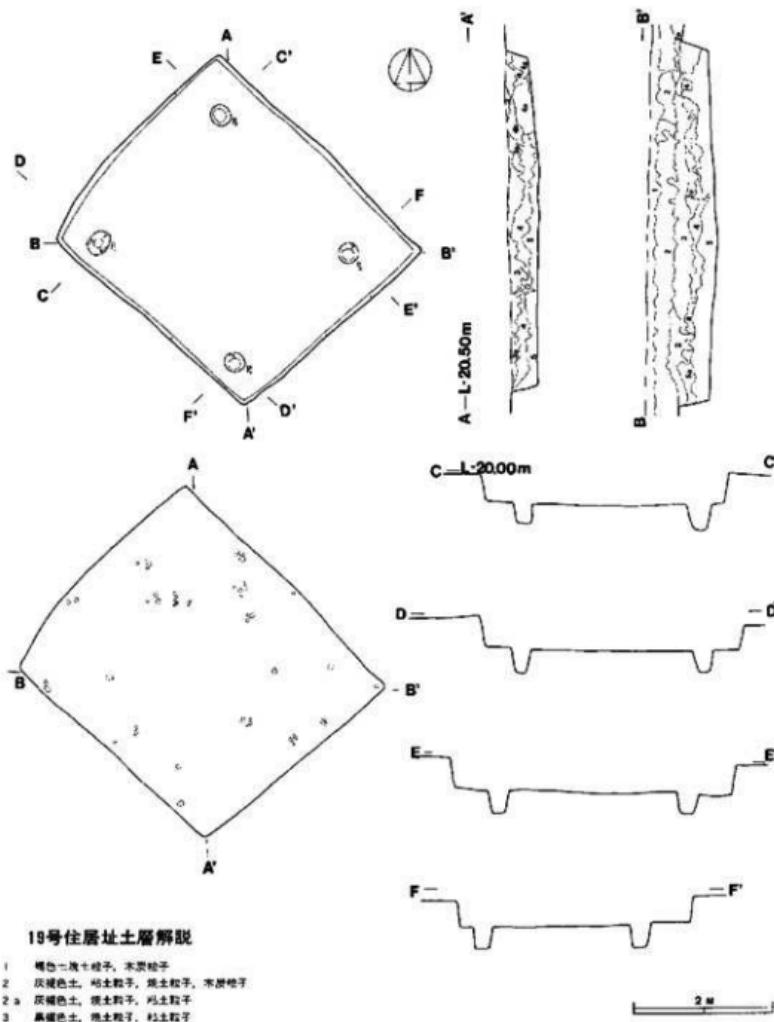
図 180 第 17 号 住居 址 実測 図



18号住居址土層解説

- 1 暗色土、黒褐色土粒子
- 1 a 暗色土
- 1 b 黑褐色土
- 1 c 灰黑色土
- 2 黑褐色土
- 2 a 明褐色土、ローム粒子
- 2 b 明褐色土、粘土粒子
- 3 明褐色土

図181 第18号住居址実測図



19号住居址土層解説

- 1 棕色土塊土粒子，木炭粒子
- 2 底褐色土，粘土粒子，灰土粒子，木炭粒子
- 2-a 底褐色土，粘土粒子，灰土粒子
- 3 黑褐色土，粘土粒子，粘土粒子
- 3-a 黑褐色土，粘土粒子，ローム粒子
- 4 灰褐色土
- 5 棕色土，木炭粒子
- 5-a 棕色土
- 4-a 棕色土，ローム粒子
- 4-b 棕色土，地壳粒子

図182 第19号住居址実測図

ふくらみを持っている形をしている。主軸はN-47°-Wを示している。壁の高さは東西側で40cm前後、南北側30cm~34cmですりばち型に立ち上がっている。床はゆるやかな坂をなし、遺構の中央で10cm程度のくぼみを生じている。覆土は5層に分かれ、褐色土(1層)、灰褐色土(2層)、黒褐色土(3層)、褐色土(4~5層)で、それぞれ、焼土粒子、木炭粒子、粘土粒子、ローム粒子などを含んでいる。ピットはほぼ円形で次のとおり4本確認された。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 3 6 | 2 8 | 3 7 | 主柱穴 |
| P 2 | 3 0 | 2 8 | 3 0 | 〃 |
| P 3 | 3 0 | 2 8 | 3 2 | 〃 |
| P 4 | 2 9 | 2 8 | 3 2 | 〃 |

遺物は上器片10数点出土している。カマド、炉址の類はない。

第20号住居址(図183、写27)

本址は、A3j- A3ja- B3a- B3as に確認され、23号住居址の北側、遺跡の最北東端に位置する。台形の形状をしており、大きさは上底3.86m、下底4.68m、高さ4.97mで、主軸方向はN-58°-Eである。壁は北部と東部は垂直に立ち上がっているが、南部と西部はすりばち型を呈している。壁高は44~48cmである。床は北東から南西にかけて傾斜しており、落差は4cmである。覆土は4層に分かれて、1層が灰褐色土、2層が黒褐色土、3層が暗褐色土、4層が明褐色土で、1~3層までが、ローム粒子を含んでいる。ピットは梢円形のピットが4本確認されたが、南側のピットのまわりが長方形状に掘りこまれている。

| ピット番号 | 長径 cm | 短径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|-----|
| P 1 | 2 9 | 2 9 | 3 4 | 主柱穴 |
| P 2 | 2 8 | 2 8 | 3 3 | 〃 |
| P 3 | 3 9 | 4 2 | 5 9 | 〃 |
| P 4 | 3 4 | 3 0 | 3 8 | 〃 |

遺物は土師器完形の碗が出土している。遺構の中央から北側にかけて、長径56cm、短径50cmの梢円の炉が掘りこまれ、深さは8cmで、すりばち型をしている。覆土は4層あって、上部の2層だけ、焼土粒子が含まれていた。

第21号住居址(図184、写28、29)

本址は、A4j- A4js- B4a- B4as に確認され、6号溝の北側、遺跡の最北東端に位置している。長辺4.85m、短辺4.02mの長方形を呈し、南西の辺がゆがみを持っている。主軸はN-52°-Eである。中央よりやや南西側に炉を持つ。炉の大きさは長径75cm、短径73cm、深さ13cmである。レンズ状の形を示し、暗赤褐色土、にぶい赤褐色土の2層が堆積していた。覆土は4層に分かれ、

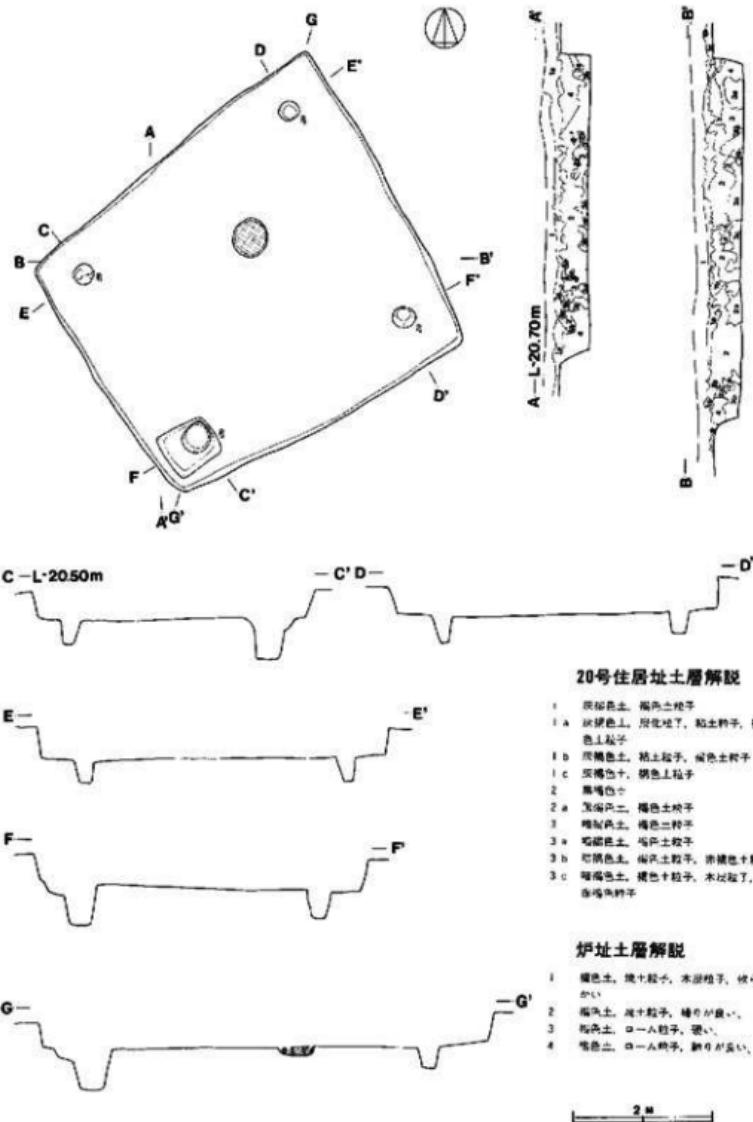


図183 第20号住居址実測図

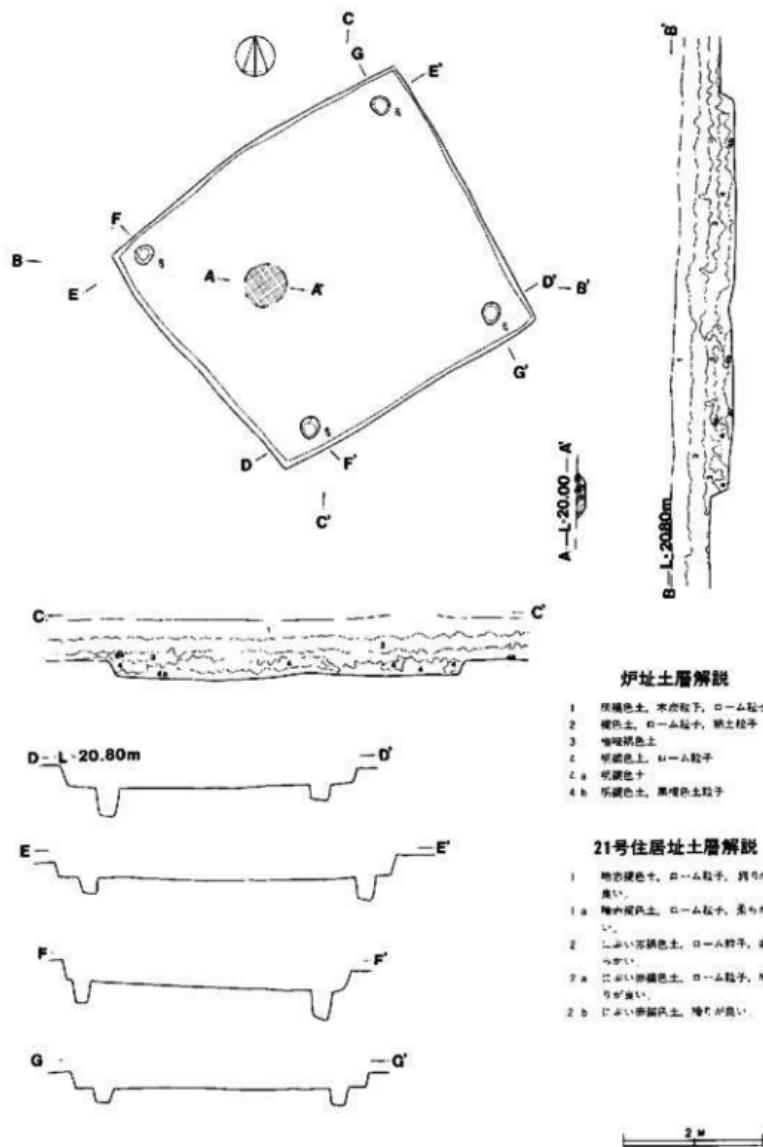


図184 第21号住居址実測図

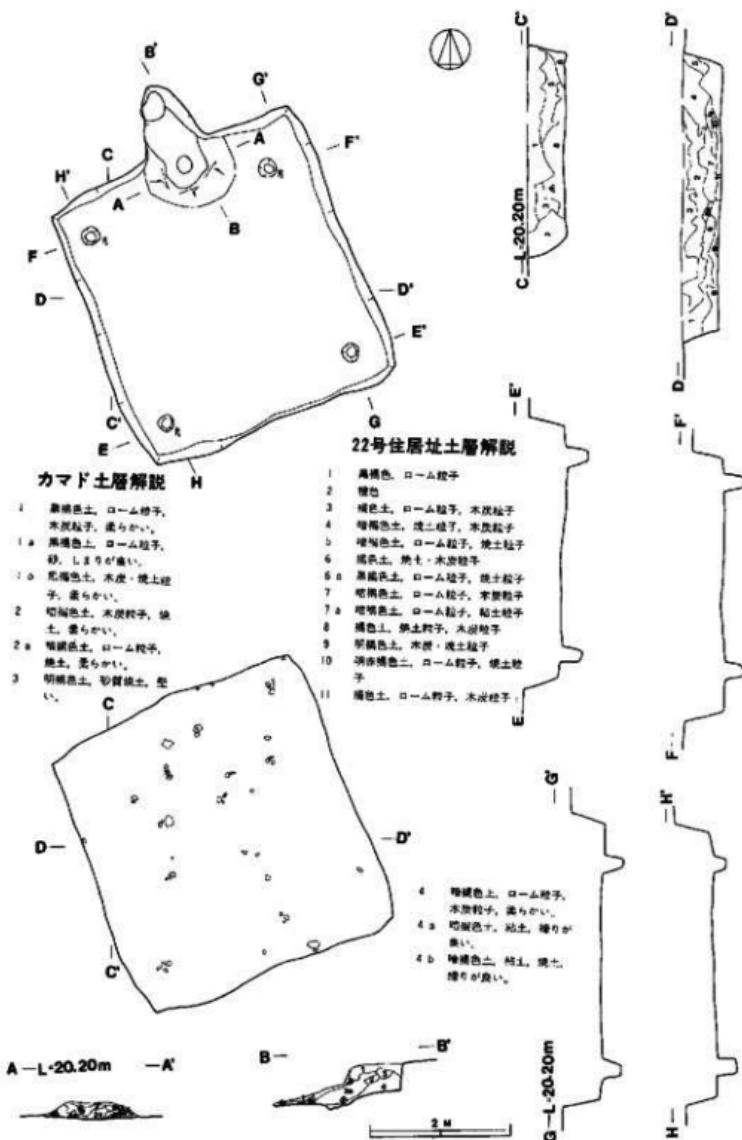


図 185 第 22 号 住居址 実測図

1層が灰褐色土、2層が褐色土、3層が暗褐色土、4層が明褐色土で3層を除いて木炭粒子、コーム粒子、粘土粒子のいずれかを含んでいる。自然堆積状をしている。ピットはほぼ円形の4本が確認された。

| ピット番号 | 長 径 cm | 短 径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|--------|--------|-------|-----|
| P 1 | 27 | 26 | 35 | 主柱穴 |
| P 2 | 28 | 25 | 24 | # |
| P 3 | 30 | 26 | 43 | # |
| P 4 | 31 | 26 | 20 | # |

遺物は縄文土器片10数点出土している。壁は四方ともすりばら型に立ち上がり20cm~24cmの高さを持つ。床はレンズ状を示しており、中央がもり上がりしている。高さは12cmの差を持っている。

第22号住居址（図185、写30~32）

本址は、B4ha・B4i7・B4i8・B4is・B4jsに確認された。遺跡の東側に位置する。形状は長方形で、長辺4.1m、短辺3.8mを持つ。主軸はN-34.5°-Wである。北側の壁にカマドを付設してある。壁はすりばら型に立ち上がり、52cm~54cmの深さを持つ。床は西から東にかけて坂状をしている。なお、駆溝が北側を除いて三方に設けられている。覆土は11層に分かれ、複雑に入り組んだ堆積をしている。ピットは4本出土している。

| ピット番号 | 長 径 cm | 短 径 cm | 深さ cm | 備考 |
|-------|--------|--------|-------|-----|
| P 1 | 26 | 25 | 28 | 主柱穴 |
| P 2 | 26 | 25 | 28 | # |
| P 3 | 25 | 25 | 28 | # |
| P 4 | 22 | | 17 | # |

遺物は、土師器、須恵器の完形、及び完形に近い土器片が出土している。カマドは、長径1.86m、短径1.26mの大きさで、煙道が北側の壁から外に突き出ている。

第23号住居址（図186、写33）

本址は、B3c4・B3d4・B3d4・B3ds・B3e4に確認された。19号住居址の北、20号住居址の南側に位置する。形状は台形で、上底3.89m、下底4.51m、高さ4.24mの大きさを持つ。主軸はN-45°-Wである。壁はすりばら型に立ち上がっており、高さは北側が28cm、南側が22cmと差がある。床にはほぼ平坦である。覆土は2層に分かれ、1層が暗褐色で、木炭粒子を含む部分があり、2層は覆土上は2層に分かれ、1層が暗褐色で、木炭粒子を含む部分があり、2層は褐色で、やはり木炭粒子を含む部分があった。自然堆積状をしている。ピットの数は4本で次の表のとおりである。褐色で、やはり木炭粒子を含む部分があった。自然堆積状をしている、ピットの数は4本で次の

表のとおりである。

| ピット番号 | 長 径 cm | 短 径 cm | 深 さ cm | 備 考 |
|-------|--------|--------|--------|-----|
| P 1 | 2 6 | 2 2 | 3 0 | 主柱穴 |
| P 2 | 3 0 | 2 9 | 2 7 | " |
| P 3 | 2 9 | 2 7 | 2 7 | " |
| P 4 | 3 4 | 2 9 | 2 9 | " |

遺物は縄文土器が数点出土した。炉、カマド、壁溝、壁柱穴の類はない。

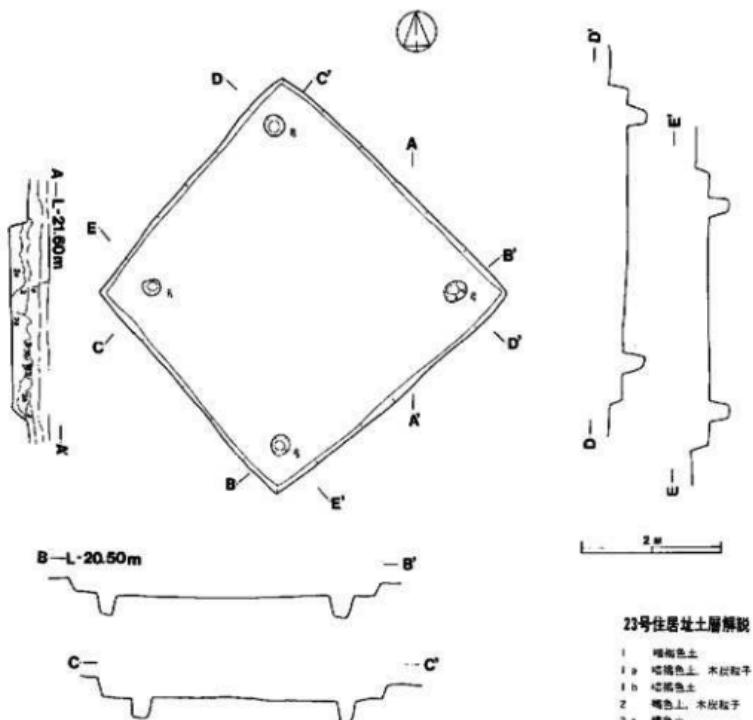


図186 第23号住居址実測図

(2) 土壌(図7、12、24~30、33~37、写34~53)

| 番号 | 位置 | 形状 | 横径
長径×短径 | 方 向 深さ | 底 | 覆上 | 出土遺物 | 備考 |
|-----|------------------------------------|-----|-------------|-----------------|-------|----|--------------|--------|
| 1 | C3a _n 、C3a _s | 長方形 | 2.27×0.93 | N-51°-E
43cm | 水平・平坦 | 4周 | なし | |
| 2 | C4c _a | 楕円形 | 1.55×1.16 | N-18°-E
23.5 | レンズ状 | 3 | 縄文小片 | |
| 3 | C2a _n 、C2b _s | 楕円形 | 1.58×0.53 | N-28°-W
46 | 水平・平坦 | 4 | なし | |
| 4 | C4a _s 、C4a _s | 楕円形 | 3.42×1.75 | N-90°
36 | 坂状・平坦 | 5 | 尖底工具
縄文小片 | 中段を有す。 |
| 5 | C3d _s | 楕円形 | 0.5×0.42 | N-48°-W
74 | 坂状・平坦 | 3 | なし | |
| 6 | C3d _s | 楕円形 | 0.99×0.87 | N-52°-W
70 | 水平・平坦 | 2 | なし | |
| 7 | C3d _a 、C3d _s | 楕円形 | 1.5×1.22 | N-27°-W
66 | 水平・平坦 | 3 | なし | 中段を有す。 |
| 8A | C3c _a 、C3d _a | 楕円形 | 0.22×0.16 | N-16°-W
45 | 水平・平坦 | 2 | なし | |
| 8B | C3c _a 、C3d _a | 楕円形 | 0.64×0.46 | N-69°-E
45 | 水平・平坦 | 2 | なし | |
| 9A | C3c _a | 楕円形 | 1.26×1.16 | N-0°
40 | 坂状・平坦 | 2 | なし | |
| 9B | C3c _a | 楕円形 | 0.40×0.36 | N-43°-W
35 | 坂状・平坦 | 2 | なし | |
| 10A | C3c _s | 楕円形 | 0.87×0.84 | N-5°-W
63 | レンズ状 | 2 | なし | |
| 10B | C3c _s | 楕円形 | 0.77×0.66 | N-48.5°-W
25 | 坂状・平坦 | 2 | なし | |
| 11A | C3c _s | 楕円形 | 1.09×0.91 | N-27°-E
66 | 木平・平坦 | 2 | なし | |
| 11B | C3c _s | 円形 | 0.39 | N-55.5°-W
30 | 水平・平坦 | 2 | なし | |
| 12 | C3c _a | 楕円形 | 0.47×0.36 | N-0°
66 | 水平・平坦 | 2 | なし | |
| 13 | C3c _a | 不規則 | 1.49×1.27 | N-24°-E
39 | レンズ状 | 2 | なし | |
| 14 | C4c _a | 不規則 | 1.49×1.29 | N-18°-W
40 | レンズ状 | 2 | 縄文小片 | |
| 15 | C4c _a 、C4c _s | 不規則 | 1.0×0.85 | N-17°-W
30 | 起伏あり | 2 | なし | |
| 16 | C4c _s | 楕円形 | 0.88×0.86 | N-70°-E
25 | 水平・平坦 | 3 | なし | |
| 17 | C4c _a 、C4d _s | 不規則 | 1.5×0.65 | N-69°-E
27 | 水平・平坦 | 1 | なし | |
| | C4c _s | | | | | | | |
| 18 | C4c _a 、C4c _s | 楕円形 | 1.82×1.15 | N-55°-E
37 | 水平・平坦 | 2 | 縄文小片 | |
| 19 | C4c _a 、C4c _s | 不規則 | 0.8×0.64 | N-61°-E
22 | レンズ状 | 2 | なし | |
| | C4d _a 、C4d _s | | | | | | | |
| 20 | B2c _a 、B2e _s | 楕円形 | 3.41×3.34 | N-46°-E
230 | レンズ状 | 10 | 土器高杯 | |
| | B2d _a 、B2d _s | | | | | | 縄文小片 | |
| 21 | C4b _s | 楕円形 | 1.32×0.84 | N-50°-E
22 | レンズ状 | 2 | なし | |
| 22 | B4h _a | 楕円形 | 1.13×1.09 | N-90°
128 | 水平・平坦 | 2 | なし | 中段を有す。 |

| 番号 | 位 | 震 | 形 | 状 | 規模 | 長径×短径 | 方 | 向 | 深さ | 底 | 覆土 | 出土遺物 | 備考 |
|----|------------|---|-----|-----------|-----------|-------|-------|----|------|---|----|------|----|
| | | | | | | | | | | | | | |
| 23 | B2aa | | 楕円形 | 1.0×0.66 | N-15°-W | 47 | 坂状・平坦 | 2層 | なし | | | | |
| 24 | B2fa | | 楕円形 | 0.85×0.53 | N-6°-E | 50 | レンズ状 | 2 | なし | | | | |
| 25 | C4bs, C4be | | 楕円形 | 0.93×0.7 | N-39°-E | 32 | レンズ状 | 2 | なし | | | | |
| 26 | C4au, C4bz | | 楕円形 | 0.62×0.55 | N-18.5°-W | 21 | レンズ状 | 2 | なし | | | | |
| 27 | C4ca | | 楕円形 | 0.93×0.86 | N-54.5°-E | 26 | 坂状・平坦 | 3 | なし | | | | |
| 28 | C4ca, C4da | | 楕円形 | 0.75×0.7 | N-90° | 23 | 坂状・平坦 | 2 | 鐵文小片 | | | | |
| 29 | C4de | | 楕円形 | 0.78×0.72 | N-64°-E | 30 | 坂状・平坦 | 2 | なし | | | | |
| 30 | B2gr | | 楕円形 | 0.69×0.58 | N-0° | 78 | レンズ状 | 1 | なし | | | | |
| 31 | B2gr | | 楕円形 | 0.73×0.65 | N-90° | 41 | 坂状・平坦 | 1 | なし | | | | |
| 32 | B2ge | | 楕円形 | 1.02×0.54 | N-21°-E | 128 | 起伏あり | 2 | なし | | | | |
| 33 | A4jz | | 楕円形 | 0.95×0.82 | N-42°-E | 66 | レンズ状 | 3 | なし | | | | |
| 34 | B4aa | | 楕円形 | 0.83×0.67 | N-86°-E | 39 | 坂状・平坦 | 3 | なし | | | | |
| 35 | B4aa | | 楕円形 | 0.77×0.58 | N-86°-E | 38 | 起伏あり | 2 | なし | | | | |
| 36 | B3bs | | 楕円形 | 0.86×0.73 | N-80.5°-E | 32 | 水平・平坦 | 3 | なし | | | | |
| 37 | B3bn | | 楕円形 | 0.71×0.57 | N-52°-W | 40 | 坂状・平坦 | 3 | なし | | | | |
| 38 | B3fs, B3gs | | 楕円形 | 1.08×0.7 | N-31°-W | 32 | 坂状・平坦 | 2 | なし | | | | |
| 39 | B3ga | | 楕円形 | 0.92×0.52 | N-34°-E | 33 | 水平・平坦 | 3 | なし | | | | |
| 40 | B3gs | | 楕円形 | 0.96×0.87 | N-64°-E | 38 | 水平・平坦 | 2 | なし | | | | |
| 41 | B3g3 | | 楕円形 | 0.60×0.56 | N-72°-E | 36 | 水平・平坦 | 2 | なし | | | | |
| 42 | B3fz | | 楕円形 | 0.73×0.7 | N-43°-E | 31 | 坂状・平坦 | 3 | なし | | | | |
| 43 | B3fz | | 楕円形 | 1.27×1.11 | N-61°-W | 45 | 坂状・平坦 | 4 | なし | | | | |
| 44 | B3fs | | 楕円形 | 0.59×0.48 | N-9°-W | 45 | 坂状・平坦 | 4 | なし | | | | |
| 45 | B3he | | 楕円形 | 0.85×0.73 | N-38°-E | 24 | 起伏あり | 4 | なし | | | | |
| 46 | B3he | | 楕円形 | 1.0×0.83 | N-0° | 42 | 坂状・平坦 | 4 | なし | | | | |
| 47 | B3ga, B3gt | | 楕円形 | 0.78×0.66 | N-14°-E | 66 | 起伏あり | 4 | なし | | | | |
| 48 | B3fe, B3fz | | 楕円形 | 0.88×0.58 | N-2.5°-E | 58 | 坂状・平坦 | 3 | なし | | | | |
| 49 | B3fr | | 楕円形 | 1.43×0.72 | N-71°-E | 72 | 坂状・平坦 | 2 | なし | | | | |
| 50 | B3hs | | 楕円形 | 1.27×0.74 | N-80°-E | 36 | 坂状・平坦 | 4 | なし | | | | |
| 51 | B3hs | | 楕円形 | 0.92×0.76 | N-32°-E | 20 | レンズ状 | 2 | なし | | | | |
| 52 | B3fw | | 楕円形 | 1.3×1.26 | N-28.5°-W | 34 | 起伏あり | 4 | なし | | | | |

| 番号 | 位置 | 形状 | 規模
長径×側径 | 方 向 | 底 底面形状 | 出土遺物 | 備 考 |
|----|--------------------------------------|-----|-------------|-----------|-----------|-------|------------|
| 53 | B3fe, B3go | 楕円形 | 1.36×0.96 | N-76.5°-W | 47m 坂状・平坦 | 5個 | なし |
| 54 | B4f ₄ | 楕円形 | 0.88×0.72 | N-83.5°-W | 25 | 坂状・平坦 | 2 なし |
| 55 | B4f ₄ | 楕円形 | 0.8 × 0.72 | N- 42°-E | 24 | 坂状・平坦 | 2 なし |
| 56 | B4d ₈ | 楕円形 | 0.67×0.63 | N- 0° | 29 | レンズ状 | 3 なし |
| 57 | B4d ₈ | 楕円形 | 1.16×0.9 | N- 43°-E | 27 | 起伏あり | 2 なし |
| 58 | A3 ₁ e, A4 ₁ i | 楕円形 | 0.72×0.66 | N- 81°-E | 56 | 水平・平坦 | 3 なし |
| 59 | B3je | 楕円形 | 0.87×0.74 | N- 10°-W | 27 | 水平・平坦 | 2 なし |
| 60 | B3ja | 楕円形 | 0.7 × 0.6 | N-64.5°-W | 29 | 坂状・平坦 | 2 なし |
| 61 | B3as | 楕円形 | 1.05×1.04 | N- 51°-E | 24 | 坂状・平坦 | 2 なし |
| 62 | A3ie | 楕円形 | 0.76×0.74 | N-7.5°-E | 86 | 水平・平坦 | 2 なし |
| 63 | A3is | 楕円形 | 1.47×1.39 | N- 49°-W | 88 | レンズ状 | 2 大型石斧 |
| 64 | B3az | 楕円形 | 0.66×0.61 | N-55.5°-E | 34 | 水平・平坦 | 2 なし |
| 65 | B2fe | 楕円形 | 0.73×0.57 | N- 25°-E | 30 | 水平・平坦 | 2 なし |
| 66 | B2gs, B2ge | 楕円形 | 0.8 × 0.57 | N- 46°-E | 33 | レンズ状 | 2 なし |
| 67 | B2es, B2fs | 楕円形 | 0.87×0.55 | N-27.5°-E | 28 | 水平・平坦 | 2 なし |
| 68 | B3bi | 楕円形 | 0.61×0.58 | N- 7°-E | 38 | 坂状・平坦 | 2 なし |
| 69 | C3ca, C3do | 楕円形 | 3.43×2.31 | N- 1°-W | 100 | 起伏あり | 3 なし 中段を持つ |
| 70 | B4bs, B4is | 楕円形 | 0.78×0.7 | N- 83°-W | 60 | レンズ状 | 1 なし |
| 71 | B4is, B4ie | 楕円形 | 0.84×0.74 | N- 82°-E | 54 | 水平・平坦 | 1 なし |
| 72 | B4hz | 楕円形 | 0.76×0.74 | N- 35°-W | 28 | 水平・平坦 | 1 なし |

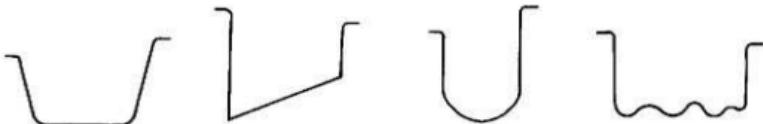
注：底形状は次の略図のとおりである

水平・平坦。

坂状・平坦。

レンズ状。

起伏あり



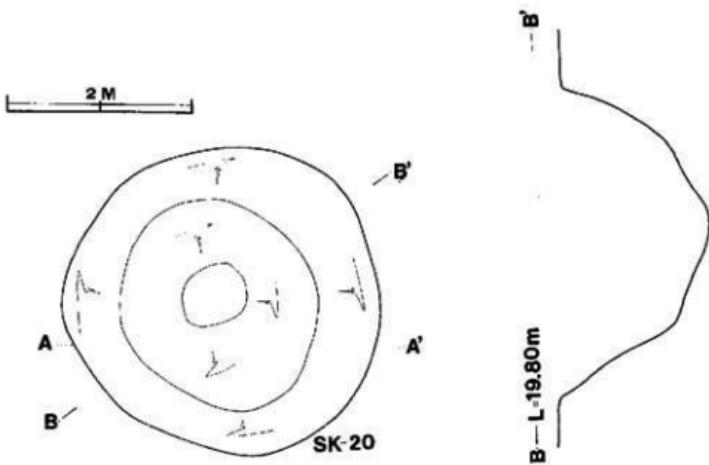
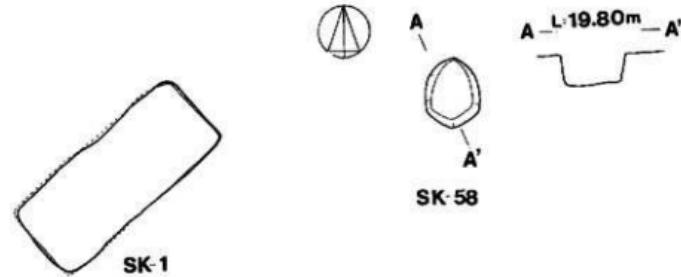


図187 第1, 20, 58号土壤実測図

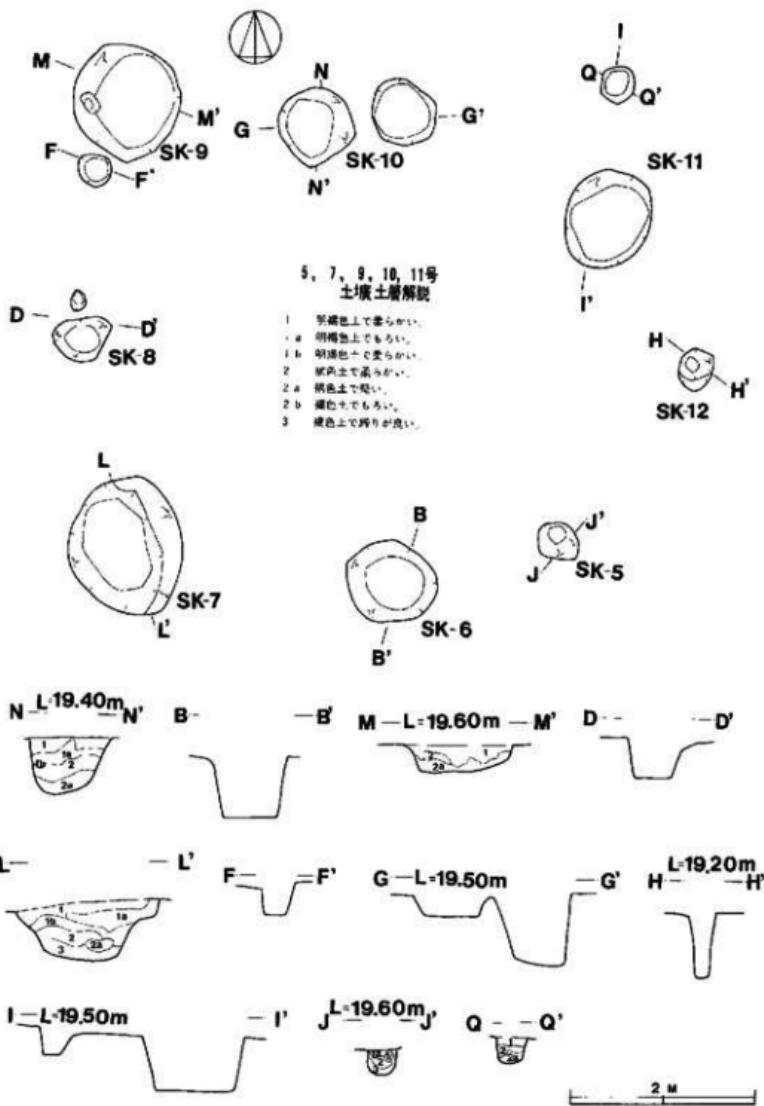
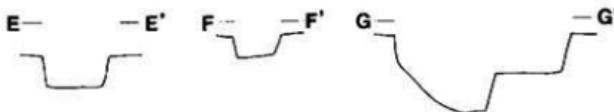
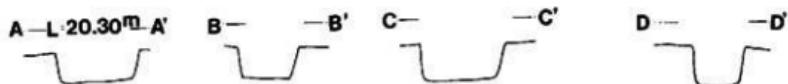
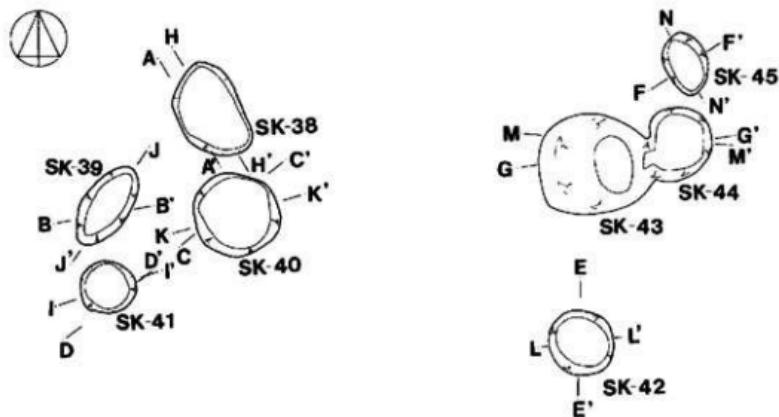


図168 第5～12号土壤実測図



38~42号土壤土層解説

1. 黄褐色土、重りがない。
2. 灰褐色土、研ぎが良い。
- 2 a. 灰褐色土、ローム粒子、研ぎが良い。
3. 灰褐色土、研ぎが良い。



43~45号土壤土層解説

1. 切端色土、ローム粒子、及七粒子、研ぎが良い。
2. 灰褐色土、ローム粒子、研ぎが良い。
- 2 a. 灰褐色土、ローム粒子、研ぎが良い。
3. 灰褐色土、研ぎが良い。
- 3 a. 灰褐色土研ぎが良い。
- 3 b. 灰褐色土、ローム粒子、研ぎが良い。
4. 灰褐色土、研ぎが良い。

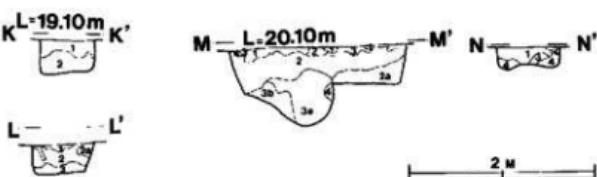


図189 第38~45号土壤実測図

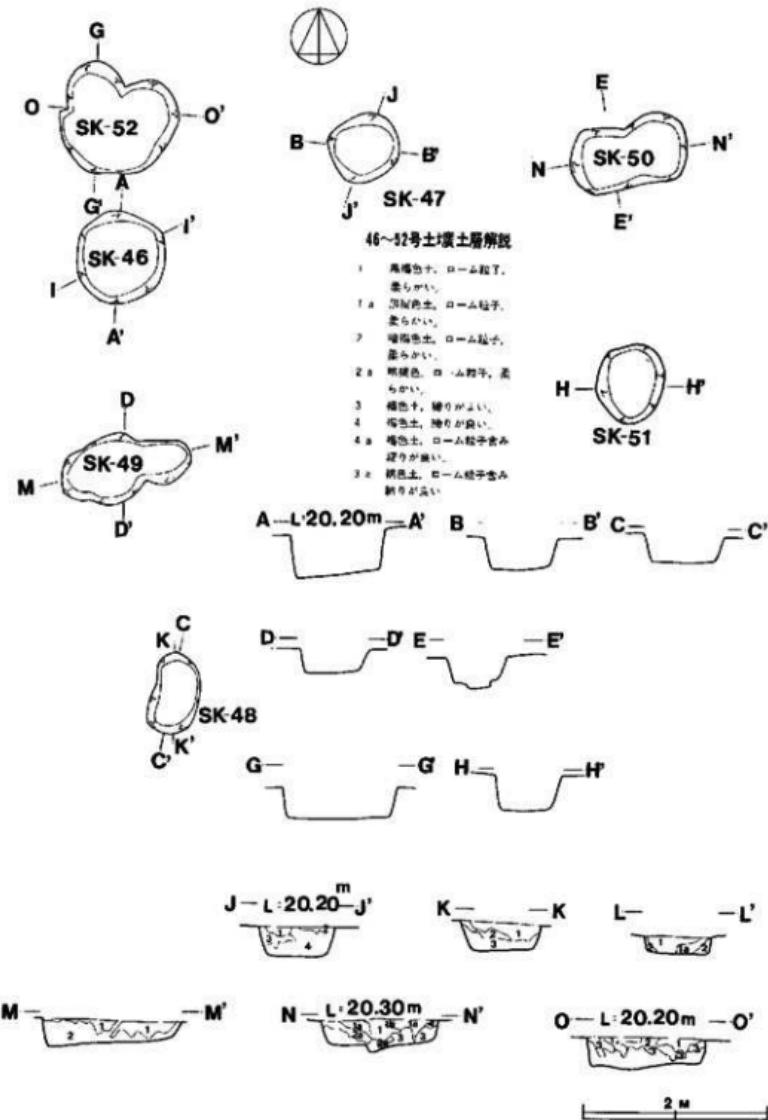


図190 第46～52号土壤実測図

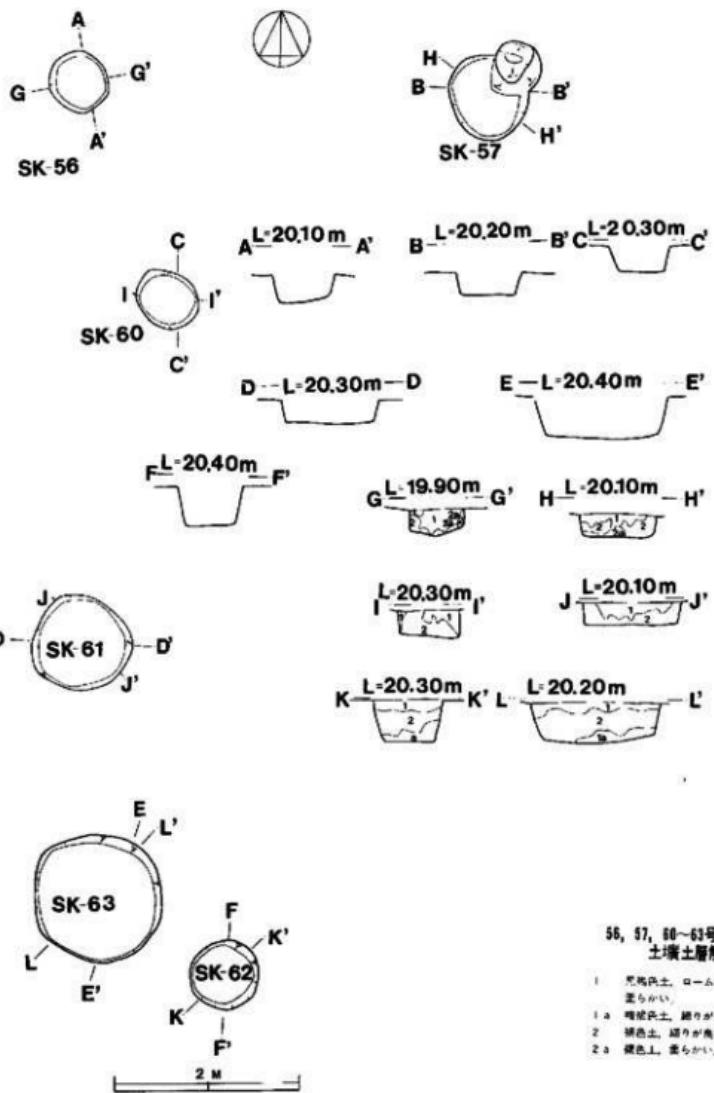


図181 第56, 57, 60~63号土壤実測図

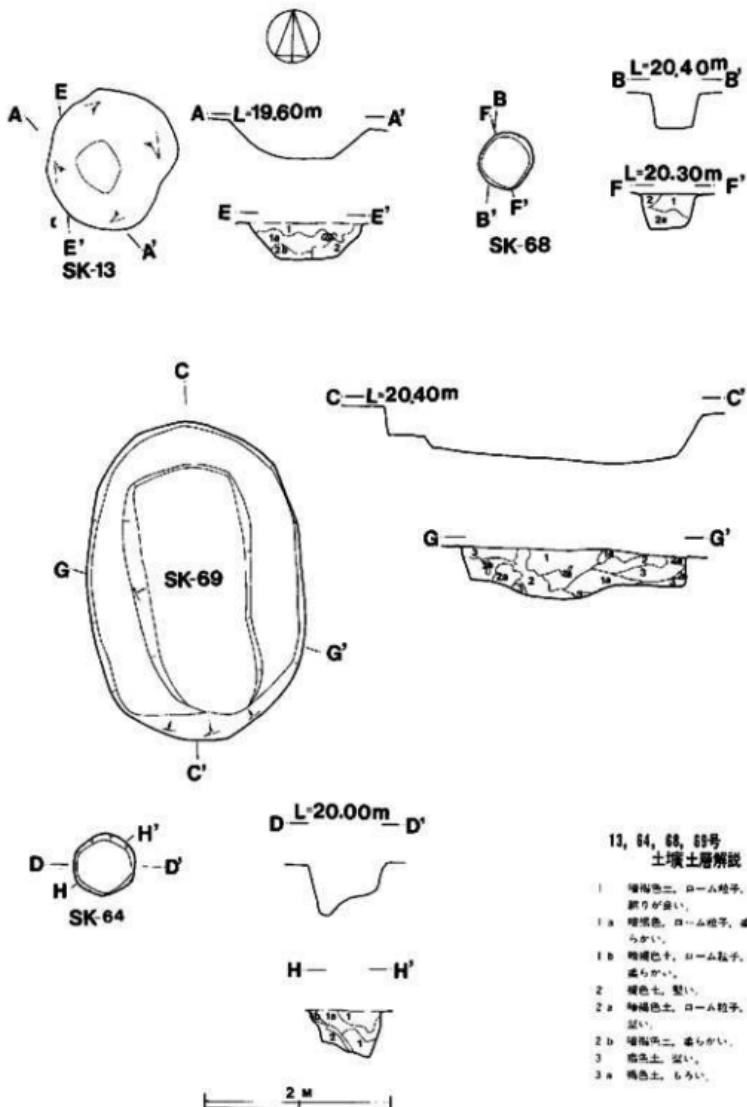


図182 第13, 64, 68, 69号土壤実測図

(3) 溝状遺構

第1号溝（図170、172、175、177、199、201、写54）

本溝は大調査区C2・C3・C4区に確認された。遺跡の南から始まり、C2baを通ってN-56.5°-Eの方向で8m進み、方向が変わってN-78.5°-Eで12.4m進む。C3ds区からN-69.5°-Eで2m、N-56°-Wで3.2m南下してほぼ直角に曲っている。C4d₁区から上幅が狭くなつて、N-73.5°-Wで2m、N-82.5°-Eで2mと湾曲する。更に、N-53°-Eで15.7m、N53°-Wで3m、N-69.5°-Eで5m、N-53.5°-Eで7.7mと樹形に曲って伸びており、総長約91mである。溝の上幅は約2mと広い部分が多いが、上記のようにC4d₁区から約19.7mの間は、上幅が10cmと狭い。また、C4d₁・C4d₂区で7号住居址の南一部を切りC4d₁・C4d₂で12号住居址を南北から北東の方向で横切っている。溝の始まりはすりばち型の壁を有し、20cm深さのところで中段を有しているが、C4d₂区から溝の終わりまでは、すりばち型の壁と水平な底を持って単純な形狀の溝に変わっている。覆土は4層堆積し、表上から順に褐色上（1層）、暗褐色上（2層）、褐色上（3層）、明褐色上（4層）で、1・2層にローム粒子を含む部分がある。遺物は繩文土器片を数10点出土している。

第2号溝（図193、198、写55）

本溝はC2baから始まり、B2j₇で大きく湾曲して、B2feで消える。位置は遺跡の西端にあり総長約37mで中央部で逆くの字形に曲っており、その方向は出点からN-59°-E（19m）、N-46°-W（18m）である。上幅は73cm～1.67mである。C2as～B2j₇区まで11.6mが南側がゆるくなつて幅が広くなる。深さは最深で25cm程度で浅い溝である。断面は、上記のC2as～B2j₇区を除けば、すりばち型の壁と、水平平坦な底を持っている。覆土は3層で、1層が褐色上で、焼上粒子、木炭粒子、粘土粒子を含む部分に分かれ、2層がローム粒子を含む部分と含まない部分に分かれ、3層が暗褐色上である。遺物は上層から、石器を始めとして、石器類、繩文式土器片などを出土している。

第3号溝（図198、写56、61）

本溝はB2j₇、C2esに確認され、5号住居址の西側、1号櫛列の東側に位置する。北西から南東に向かって伸び、ほぼ直線で、約17mあり、1号櫛列と並行して走り、主軸N-26°-Wを指す。溝の両端は1号溝、2号溝で、両溝をつなぐような形を呈している。上幅は45cm程度であるが、C2a₇区付近の約1.6mは上幅にふくらみを持ち、92cmを測る。断面形は逆台形で、ほぼ垂直の壁面を持ち、底も水平、平坦である。ただし、B2j₇、C2a₇区では、1号櫛列と複合し、4柱穴ほど含んでいる。覆土は2～3層で自然堆積状である。

第4号溝（図194、写58）

本溝は遺跡の最北西端に位置し、調査区域外よりA2ge区に表われ、B2aeから西端の区域外に

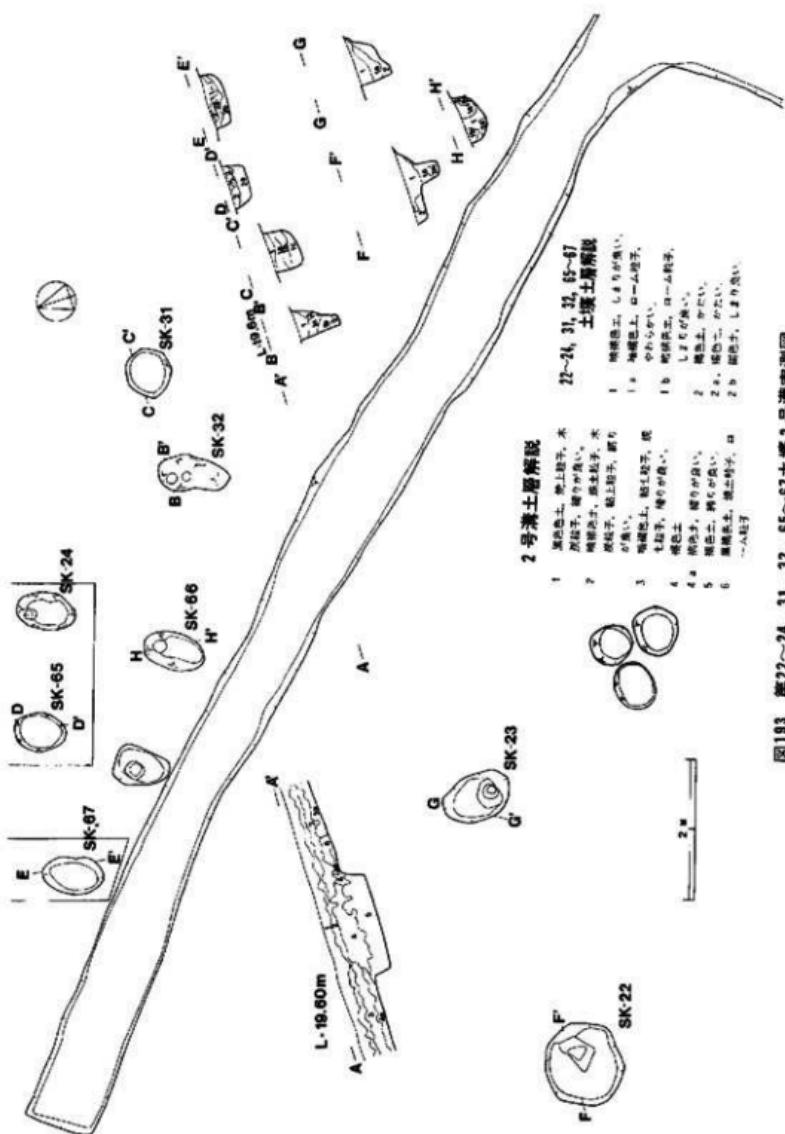


図193 第22～24、31、32、65～67土壤2号溝測定図

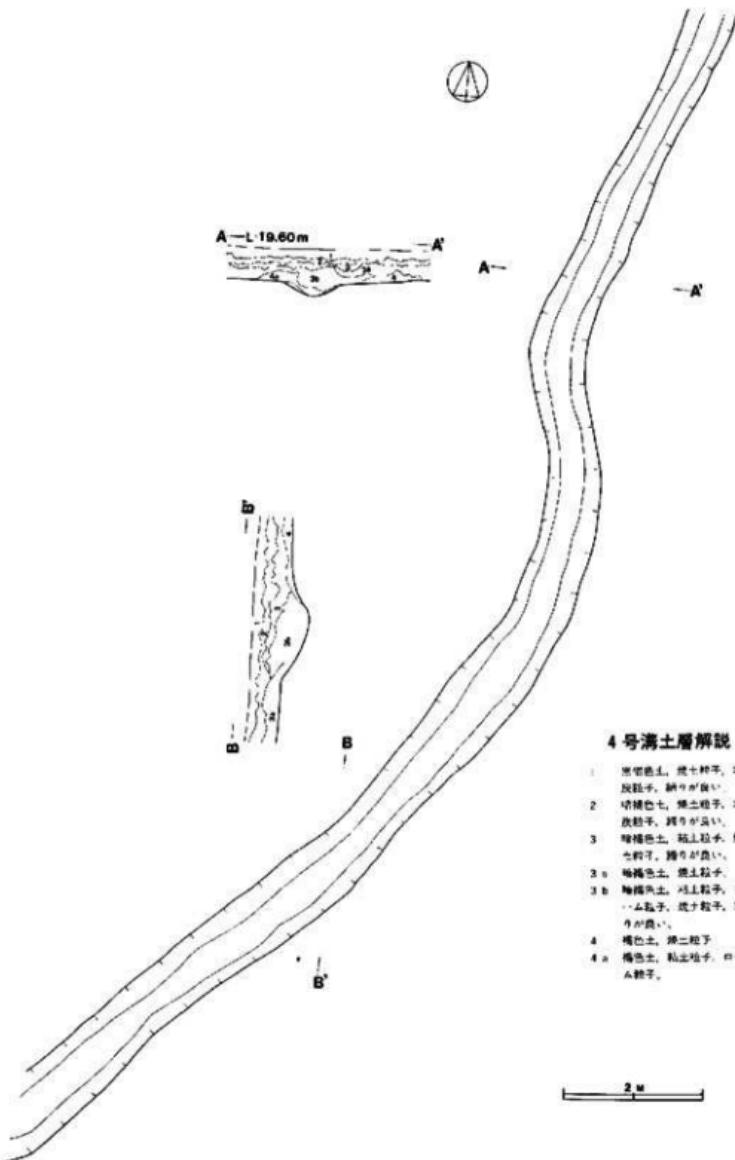


図194 第4号溝実測図

消える。始まりはN-19°Eで5.1m南下し、N-0°で1m、N-21°Wで1mと蛇行しながら下り、またN-0°で1.5m南下し、N-31.5°Eで5m進み、少し湾曲しながらN-45°Eで6m伸びる。上幅は溝の始まりが狭く70cm程あり、更に59cmまで狭くなってくる。そこから徐々に広がり1mほどになってくる。壁は、すりばち型で、底はレンズ状に中央がくぼんでいる。深さは最深で32cm程ある。覆土は3層～4層で自然堆積状である。遺物は出土しなかった。

第5号溝（図195、写57）

本溝はC4区に確認された。C3jsからC3hsと北東から南西にはほぼ直線に走っている。遺跡の南東部に2本のトレンチを入れて確認し調査発掘したため、溝の中央部は発掘していない。主軸はN-60°Eを指し規模は上幅が70cm～91cm、深さが約50cmである。断面形は、北東部がすりばち状の壁面を持ち、南西部はほぼ垂直な立ち上がりを示す。底はすべて平坦水平である。覆土は3層で、1層が褐色土、2層も褐色土、3層が暗褐色土で、しまりやあいにより、1層が4部分に、2層が3部分に分けられる。此の溝の南側は、1・2・18号住居址の表土と同じく、土壌に盛土がなされ、盛上の内側は一段低い落ちこみがあったので、この溝構築の際に築かれた痕跡と考えられる。遺物は出土しなかった。

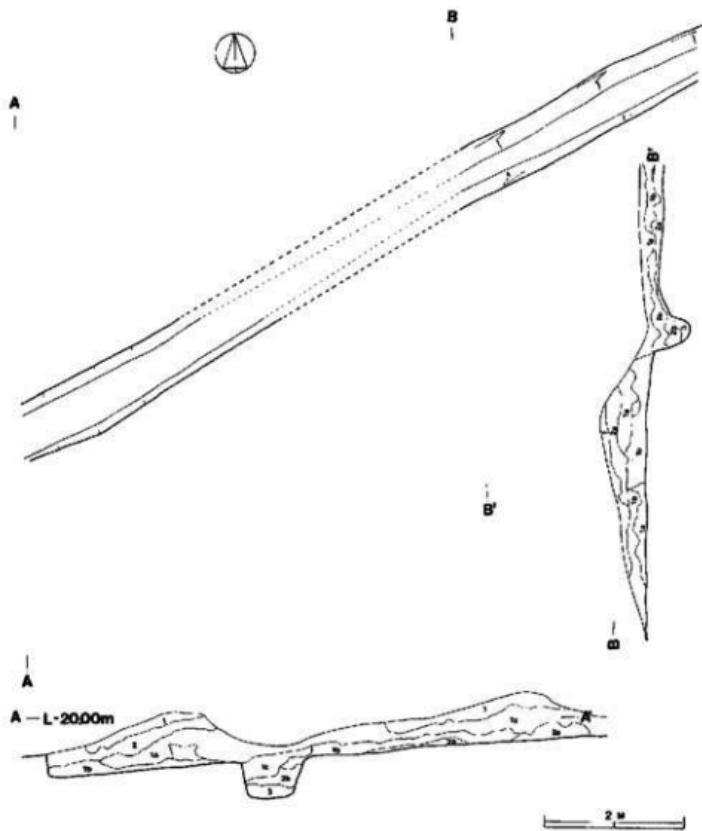
第6号溝（図197、197、写59、60）

本溝は21号住居址の西側、A4j1～B4f1に確認された。溝の中央が調査用道路のために発掘調査をしていない。北側の調査区域外より始まり、曲折しながら南へ延び、その長さは26.1mである。C4区では溝の痕跡が認められないので、2本目の調査用道路下で、消滅すると考えられる。上幅は、溝の始まり、調査用道路近く、溝の終末で狭まり、65cm程度の幅になるが、他の地域では、1.1mとほぼ一定している。深さは20cm～26cmと浅く、断面はすりばち状の壁、水平、平坦な底なので、逆台形の形状を呈している。覆土は2層である。暗褐色土（1層）と褐色土（2層）である。遺物は、B4区の上層より大型の尖底土器底部が出土している。

（4）構造状造構

第1号構造（図198、写61）

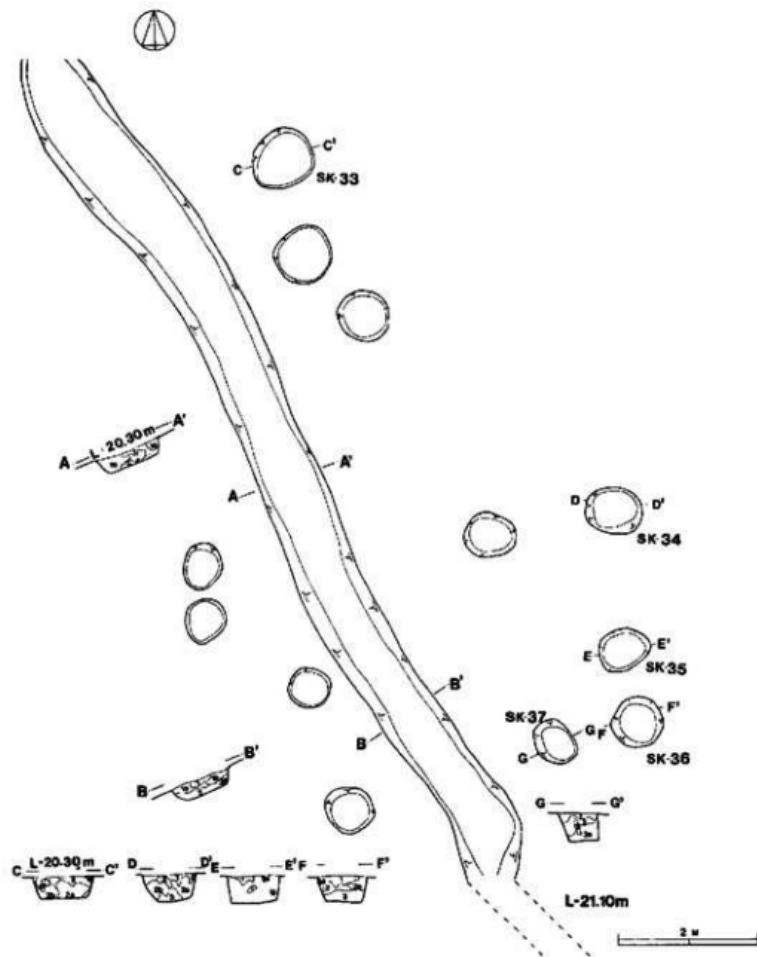
本遺構はB2ge～C2caに、北西から南東に直線的に確認された。3号溝の西側、1号溝と2号溝の中間に位置し3号上塙を間に含んでいる。全長14.48mあり、1～5列で1列が25本の柱穴が並んでいる。3号土壙より北西側6.8mは5列になり、内4柱穴は3号溝と接している。どの列もほぼ直線的に並び、N-23.5°W程の方向を持っている。柱穴は8cm～66cmの間隔で並び、总数114本で、円形または橢円形の形を呈している。ほぼ垂直な柱穴角度を示して、深さは28cm～70cmとまちまちである。覆土は2～4層に分かれ、大部分が自然堆積の様子を呈している。遺物は、繩文土器片を出土した柱穴が10本程あった。



5号溝土層解説

- 1 棕色土。柔らかい。
- 1 a 棕色土。柔らかい。
- 1 b 棕色土。やや硬り重い。
- 1 c 棕色土。硬め良。
- 2 棕色土。ローム粘土。柔らかい。
- 2 a 棕色土。ローム粘土。柔らかい。
- 2 b 棕色土。ローム粘土。もう少し。
- 3 黄褐色土。柔らかい。

図105 第5号溝実測図



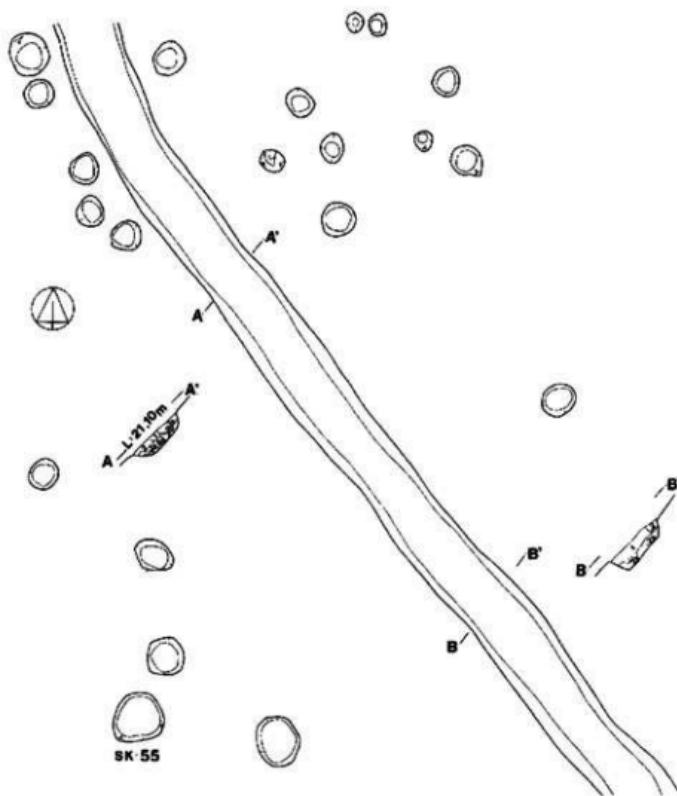
16号溝土層解説

- 1 黒褐色土。ローム粒子、柔らかい。
- 1 z 黒褐色土。ローム粒子、柔らかい。
- 1 o 黑褐色土。ローム粒子、柔らかい。
- 2 棕色土。硬りが良い。
- 2 z 棕色土。柔らかい。

22~37号土壤土層解説

- 1 黒褐色土。ローム粒子、柔らかい。
- 1 a 黒褐色土。硬りが良い。
- 2 硬褐色土。ローム粒子、硬りが良い。
- 2 a 棕色土。硬い。
- 3 棕褐色土。柔らかい。
- 3 a 棕褐色土。やわらかい。

図196 第33~37号土壤6号溝実測図(1)



6号溝土質解説

- 1 喀斯特土、盛りかい。
- 1 a 喀斯特土、盛りが良い。
- 1 b 喀斯特土、ローム粒子、堅い。
- 2 喀斯特土、ローム粒子、盛りかい。
- 2 a 喀斯特土、盛りが良い。
- 2 b 喀斯特土、ローム粒子、少しよい。

図197 第55号土壤6号溝実測図(2)

2号、3号溝土層解説

- 1 にじや褐色土、木炭粒子・粘土粒子、しりりがい
- 2 反覆色土、ローム粒子・木炭粒
- 3 a 褐色土、ローム粒子・粘土粒
子、しりりがい
- 3 a 褐色土、ローム粒子、しりりが
い
- 3 b 反覆色土、ローム粒子、しりりが
い
- 4 褐色土、しりりがい
- 5 a 褐色土、ローム粒子、しりりが
い

1号排列柱穴土層解説

- 1 a 褐色土、ローム粒子、しりりが
い
- 1 b 褐色土、ローム粒子、しりりが
い
- 1 c 褐色土、ローム粒子、しりりが
い
- 2 a 反覆色土、地土粒子・ローム粒
子
- 3 a 褐色土、ローム粒子、しりりが
い
- 3 a 褐色土、ローム粒子、しりりが
い
- 3 b 反覆色土、ローム粒子、しりりが
い
- 4 褐色土、ローム粒子、しりりが
い

3号土壤土層解説

- 1 褐色土、ローム粒子、しりりがい
- 2 褐色土、ローム粒子、しりりがい
- 2 a 反覆色土、ローム粒子、しりりが
い
- 3 褐色土、黒褐色土・粘土粒子、しり
りがい
- 3 a 黑褐色土、黒褐色土・粘土粒子、し
りりがい
- 3 b 褐色土、ローム粒子、しりりが
い
- 4 黑褐色土、しりりがい

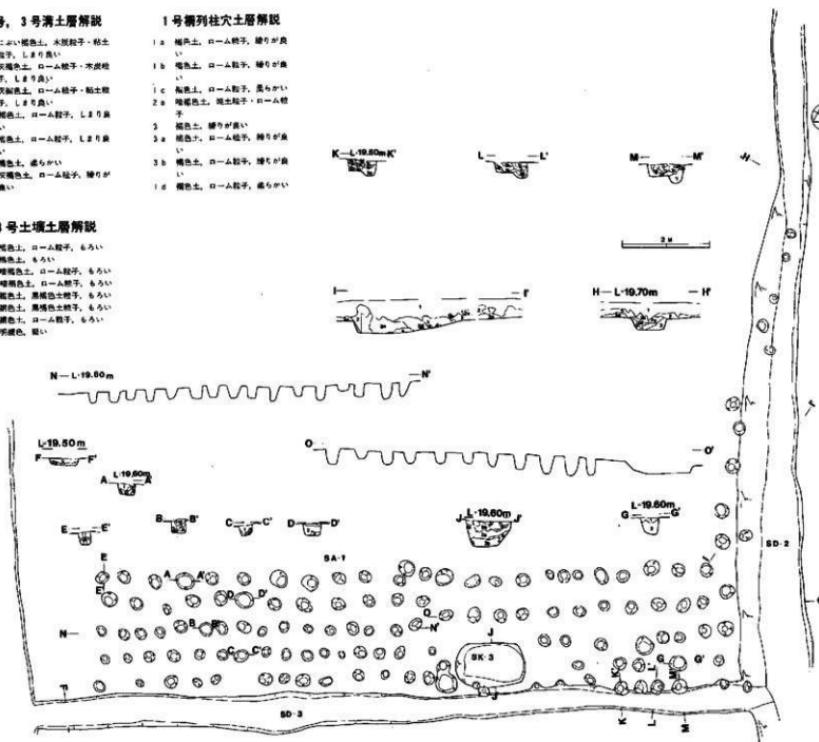


図198 第2・3号溝3号土壤1号排列実測図



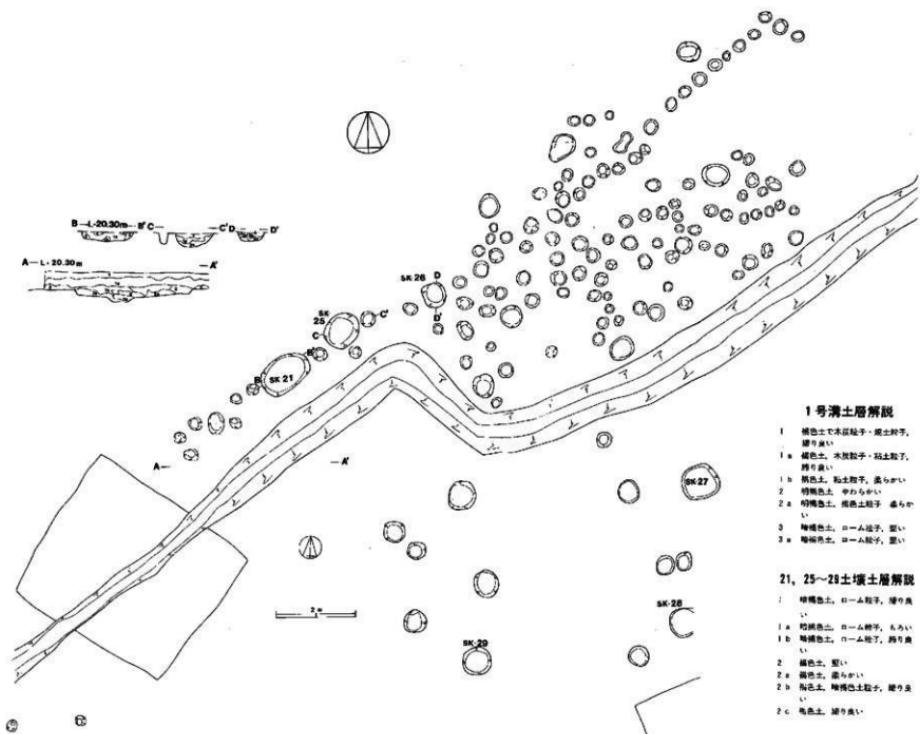


図199第21, 25~29土壤第1号溝第2号横列第2号ピット郡実測図



第2号柵列(図199)

本遺構はB4ja～C4baに、北東から南西に確認された。22号住居址の南西約7mから、12号住居址の北東にかけて、1号溝と並行して位置する。21号土壙、25号土壙、26号土壙を間に含んでいる。全長は12.4mで、始めは4列で2.5m伸び、3列で4.3m、5列で5.6m伸びている。方向はおおよそN-50°-Eであり、幅も1.6m～2.75mとまばらである。1列につき約18本の柱穴が10cm～90cmの間隔で並んで、柱穴总数74本である。各柱穴は、円形及び楕円形を示しており、径27cm～57cm、深さ20cm～35cmを有し、ほぼ垂直に掘られているのが多い。覆土は2～3層で、自然堆積状が大部分である。遺物は数本の柱穴から縄文土器片が出土した。

第3号柵列(図200)

本遺構はB3ia～C4baに、2号柵列と同じく北東から南西に確認された。22号住居址の西より、14号住居址の南東に、2号柵列と並行して位置している。4号土壙と17号土壙を間に含んでいる。直線上に並んでいるが、ほぼN-48°-Eの方向を指している。柵列の始まりは4列であるが、11mをこえて、4号土壙の南西側になると2列になり、総長18mを測る。幅は4列並びが2.3m、2列側が1m前後である。長い列で、約25本、短かい列で20本程の柱穴が並べれている。各柱穴は円形及び楕円形をしており、6cm～1.4mの間隔で並んでいる。ほぼ垂直に掘りこまれ、深さ20cm前後である。柱穴总数は92本である。覆土は2～3層で、自然堆積状が多い。遺物は縄文土器片を出土した柱穴が10本程あった。

(5) ピット群

第1号ピット群(図201、写61)

本遺構はC2aa～az、C2bb～bs、C2cc～cs、C2dd～deに確認された。1号溝の北、2号溝の南、3号溝や1号柵列の西側に位置する。円形、楕円形のピットが不規則な配列で144本並んでいる。各ピットは垂直な掘られ方をしており、深さは20.2cm～34.0cmの範囲内にある。覆土は1号柵列と同じく2～4層で、自然堆積状である。遺物は縄文土器片を出土したピットが数本であった。

第2号ピット群(図200)

本遺構はB4ja、C4aa～az、C4ba～bzに確認された。22号住居址の南内、1号溝と2号柵列の間に位置している。北部にだけ、23本のピットがほぼ直線上に並ぶほかは、2号柵列と同様の大きさの円形、楕円形のピットが不規則に並んでいる。南西部には26号土壙がある。ピット总数は129本である。各ピットはほぼ垂直な掘り込みがなされ、深さ20.5cm～26.8cmを測る。覆土も2号柵列と同様に自然堆積状が多い。遺物は数本のピットから縄文土器片や石器が出土した。

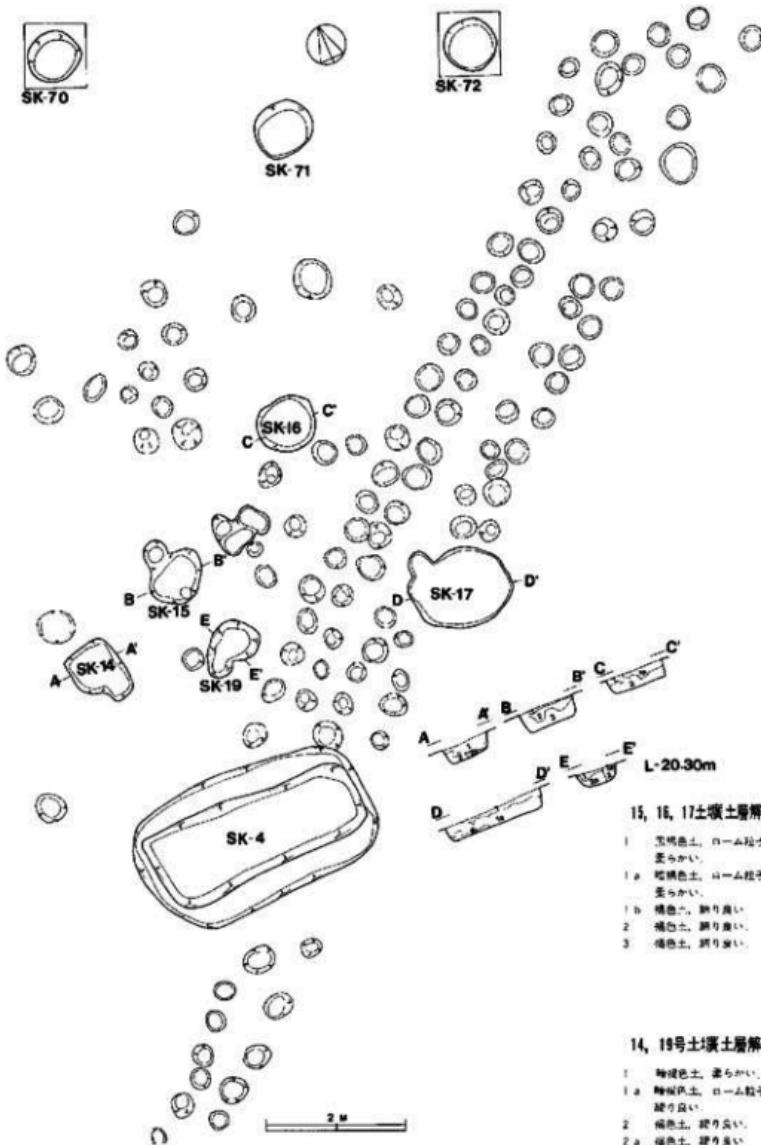


図200 第4, 14~17, 19, 70~72号土壤第3号構列実測図

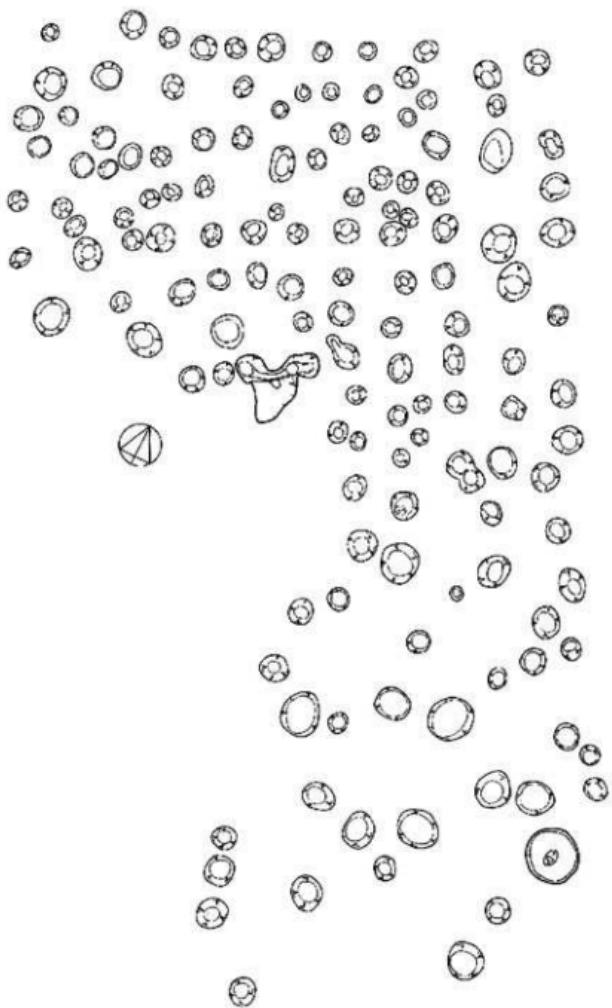


図201 第1号ビット群実測図

2. 遺物

(1)住居址内出土の遺物

第1号住居址内出土遺物

土器 (図203、写63・64・76)

1は南部の端に出土した副部以下が完全の喇叭形上器で最大径16cm、現存器高9.4cm、底径8.2cmである。器外面はなで整形かなされ、底部外面に葉脉痕が残っている。器内面は胴部がへらなで、底部がなで整形である。色調は外面が灰褐色、内面が明褐色で、胎土に雲母・長石・石英を含んでいる。国分期と考えられる。

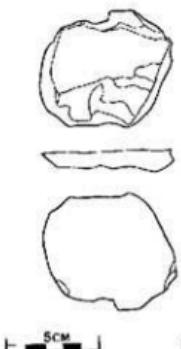
2は南東部に出土した喇叭形土器である。胴部以下が完全で最大径13.5cm、現存器高7.3cm、底径7.2cmである。器外面はなで整形後、底部にかけてへラけずりがされている。器内面はロクロ使用痕が残っている。色調は外面が褐色、内面が明褐色で、胎土に石英・長石を少量含んでいる。

3は西部の端に出土した、大型須恵器の壺の底部片である。現存器高は4.8cm、底径15.8cmである。器外面は底部近くの胴部を横のへラけずりをしてある。器内面も底部近くの胴部を横なでしている。底部は比較的薄く、5mm程のへこみを持っている。国分期と考えられる。

4は覆土より出土した。須恵器の壺の底部である。現存器高4cmである。ロクロ使用痕が残り、色調は褐灰色で、胎土に砂・礫を含んでいる。国分期と考えられる。

5は南壁の上部に付くように覆土から出土した陶器である。縁袖が施され、器高2.7cmで「奈良三彩」の壺の蓋の破片と考えられる。

土器片 (図204)



4は床より出土し、他は覆土より出土した。

1・2・6・7は外面に貝殻条痕があり胎土に纖維を含んでいる。

1・2は明褐色、6はにじい橙色、7は明赤褐色であり、胎土に砂・バミスを含んでいる。

3は内面をへらなでし、胎土に纖維を含んでいる。赤褐色である。

4は明褐色をしており、外面をへラけずりをし、胎土にバミスを含んでいる。

5は外面をへらなでし、内面をやはりへらなでしている。明褐色で胎土にバミスを含んでいる。

1～3、6・7は矛山期の上器と考えられる。4・5は時期不

図202 第1号住居址出土石器 明である。

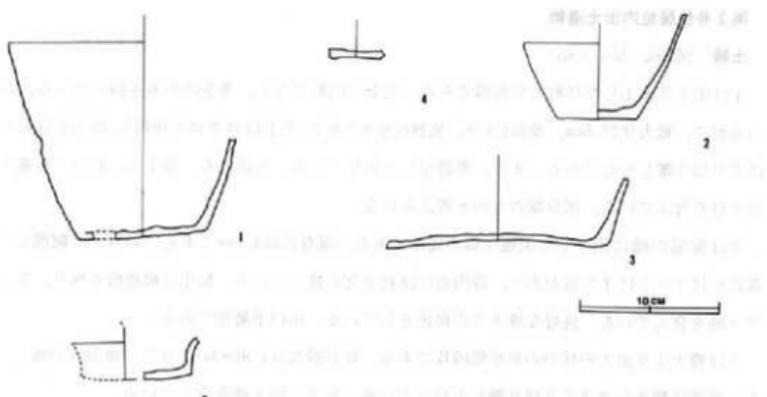


図203 第1号住居址出土遺物

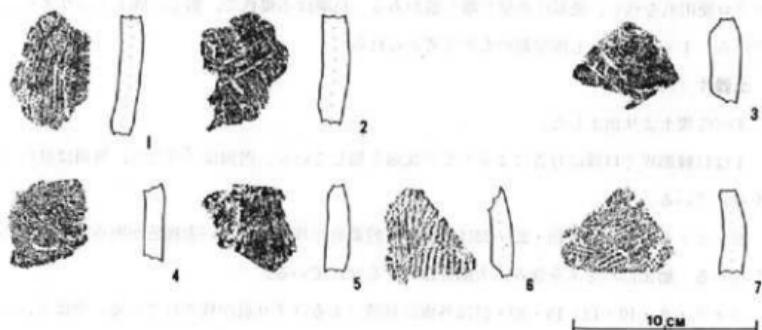


図204 第1号住居址出土土器拓影

石器（図202, 写85）

1は西壁の下の床より出土した。長さ6.8cm、最大幅6.2cm、厚さ1cm、重さ65gである。中央に、上下ともへこみがあって、おもりに使用したと考えられる。

第2号住居址内出土遺物

土器（図205、写65・83）

1は床より出土した環形の須恵器である。完全な円形でなく、多少ゆがみを持っている。70%の完形で、最大径13.5cm、器高4.6cm、底径6.6cmである。整形はロクロを使用し、底部を回転ヘラけずり切り離しをしてある。また、墨書きしてあり「三万」と読める。胎土に、長石・石英・雲母・砂を含んでいる。国分期のものと考えられる。

2は南部の壙に出土した尖底土器の底部である。現有器高4.9cmである。器外面は胸部から底部にかけてヘラけずり痕があり、器内面には刺突文が残っている。胎土は纖維痕が残り、スコリア・砂を含んでいる。良好な焼きで赤褐色をしている。田戸下層期である。

3は覆土より出土の環形の須恵器破片である。現有器高は1.8cmあり、ロクロ使用痕が残っている。底部は静止ヘラけずり切り離しを行っている。胎土に砂・礫を含んでいる。

4は覆土より出土の環形土師器片である。現有器高は3.9cmあり、外面をなで彫形をしている。胎土に、雲母・石英・長石を含み、黒褐色をしている。国分期のものと考えられる。

5は覆土より出土の環形須恵器片である。器高4.2cmでロクロで整形している。底部はヘラけずり切り離しを行っている。胎土に砂・礫を含んでいる。

6は中央の床より出土した土師器である。環形土器の一部で50%の完形率である。器高は3.6cm、ロクロ使用痕を残し、底部は糸切り離し痕がある。色調は赤褐色で、胎土に砂・スコリアを含んでいる。4・5・6とも国分期のものと考えられる。

土器片（図206）

すべて覆土より出土した。

1は口縁部分で口縁に竹管によるたての沈線を施している。内面はヘラなどで、外面は貝殻条痕をなしている。

2・4・6・11・18・19・22・23は外面に貝殻条痕を残し、にぶい赤褐色か明赤褐色の色調をしている。胎土にバミスを含み、大部分は砂をも含んでいる。

3・5・9・10・12・15・20・21は外面に貝殻によるけずり痕が残されている。やはり、にぶい赤褐色、明赤褐色をしている。

7は内外面とも指によるなでを施している。褐色の色調である。

8・13・14は外面をヘラなどでしている。13がにぶい褐色で、8と14はにぶい赤褐色をしている。

16は糸文を施している。にぶい赤褐色をしており、胎土に礫を含んでいる。

17は内面に貝殻条痕を残し、外面はかるいなでを行っている。にぶい赤褐色で、バミスを含む。

1～6、9～12、15、17～23は茅山期である。8・13・14・16は時期不明である。

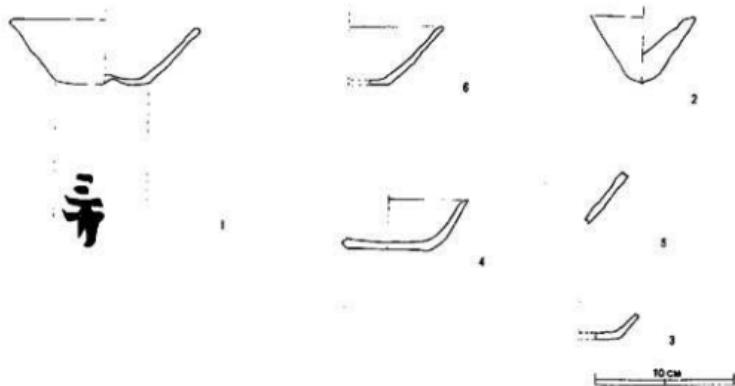


図205 第2号住居址出土遺物

第3号住居址内出土遺物

土器（図207・208、写68～75、80・81）

1は中央より南西部に寄った床で出土した。完形の土師器の环形土器である。最大径14.2cm、器高4.7cm、底径6.2cmである。器外面の底部に近いところでへラけずりがある。底部は静止へラ切り離しをしている。器内面はロクロ使用痕が残り、黒色に研磨している。色調は内面が黒褐色、外面がぶい褐色をしている。胎土に雲母・長石・石英・砂を含んでいる。国分期の土器である。

2は中央より東部へ寄った床で出土した。完形の环形須恵器である。最大径13.7cm、器高4.3cm、底径6cmである。ロクロ使用痕があり、内面の底部が少し盛り上がりをみせている。外面は底部に近いところでへラけずりをし、底部もへラけずり切り離しをしている。外面が半分ほど2次焼成を受けて黒褐色をしている。他は灰褐色、内面は橙色とぶい褐色である。胎土に、スコリア・砾を含んでいる。国分期と考えられる。

3は中央より北西約50cmと1mの位置に破片で出土した环形土器である。接合して80%の完形の土師器になった。ロクロ使用痕があり、最大径13.6cm、器高4.6cm、底径7cmである。外面はロクロのため起伏が多く、底部に近いところでへラけずりを行っている。色調は2次焼成を受けて半分程灰褐色をしている。残りは褐灰色で、砂・スコリア・バミスを胎土に含んでいる。国分期の土器である。

4は西部の壁際で出土した土師器の大型甕の底部で、現存器高は4.6cmである。外面は底部に

近いところでへラけずりがあり、内面は底部の中程から胴部まで横のへラなでが残っている。外面ともすこし2次焼成を受けている。色調は内外面とも黒色と明褐色が交わり、胎土に雲母・石英・長石・砂などが含まれている。

5は中央より南東約50cm離れた床に出土している。やはり上師器の大型腹の底部片であり、現存器高は4.6cmである。外面の胴部から底部にかけて横のへラなでが施されている。胎土に砂・スコリアを含み、底部が2次焼成を受けて黒色をしている。他の色調はにぶい褐色である。4・5とも国分期と考えられる。

6は北東の壁際と北面の壁際で出土した环形土器である。接合して60%の完形の土器器になった。ロクロ使用痕があり、内面に朱を塗って研磨してある。最大径14.6cm、器高4.5cm、底径6.6cmである。外面は底部近くにへラけずりを行い、底部に糸切り痕がある。内面はロクロ整形後、一定方向にへらなでをし、朱を塗っている。色調は内面が明赤褐色、外側が明褐色である。胎土に砂・スコリアを含んでいる。国分期の土器である。

7は中央より北東部に約50cmと70cmに破片で出土した环形の上器である。接合し80%の完形で、ロクロ使用痕を持つ土器器である。最大径14.8cm、器高5cm、底径7.3cmである。外面は底部に近いところをへラけずりをして、底部はへラけずり切り離してある。内面は漆を塗って研磨してある。色調は外側が明褐色、底部がにぶい橙色、内面が黒色である。胎土は砂を多量に含み、他にスコリア・石英を含んでいる。国分期の土器である。

8は中央の北部よりの床で出土した。台付きの环形土器である。最大径14.6cm、器高6.1cm、底径7.8cmである。内外面ともロクロ使用で、底部は回転糸切り離し痕を残している。台の部分は整形後に付けられ、接合部をなでている。内面は朱を塗っているので赤褐色をしているが、外側は橙色である。底部は2次焼成のため黒色をしている。胎土中に雲母・スコリア・石英・砂を含んでいる。国分期の土器である。

9は中央から北西部約1m離れた床で出土した。土器器の大型腹の底部である。現存器高は4.7cmである。外面の底部近くをへラけずり、胴部にタタキ目を残している。内面は底部から胴部立ち上がりまで、指による横なでをしている。色調は外側がところどころ2次焼成を受けているため黒色、明褐色、明赤褐色が交っている。胎土中に、砂・スコリア・礫を含んでいる。4・5と同様に国分期と考えられる。

10は中央より北西部約1.2mの床で出土した。完形の环形土器である。ロクロ使用痕があり、最大径14.6cm、器高3.5cm、底径7.4cmである。器内面は一定方向にへらなでをしている。色調は内外面とも2次焼成を受けているので、黒褐色、橙色、にぶい褐色が交っている。胎土中に砂・スコリア・礫を含んでいる。国分期の土器である。

11は北西の壁際で出土した完形の环形土器である。器内面はロクロ使用痕、器外側はロクロ

使用後胴部をなで整形をしている。底部はヘラけずり切り離しをしている。内外面とも大部分が2次焼成を受け、色調はほとんどが黒色、その中に橙色、にぶい橙色を交えている。胎土中に石英・長石・砂を含んでいる。国分期の土器である。

12は北西部の壁際、カマドの西に破片で出土した。全破片は接合しなかったが、陶器の「淨瓶」と呼ばれるものである。最大径は胴部で18.1cm、器高は推定で35cm程度であろう。ロクロを使用し、全面に縁輪がかかっている。2次焼成のためか、胴部その他に釉が解けている部分がある。内面はロクロ使用痕が明確に残っている。胎土中に砂・礫を含んでいる。10世紀ごろの作品である。

13は西壁の壁際に出土した。完形の环形の須恵器である。最大径13cm、器高4.3cm、底径6.4cmである。器内面はロクロ使用痕の外、底部に指によるなで整形をしている。外面もロクロの他底部近くをヘラけずりをしている。底部はヘラけずり切り離しを行っている。色調はにぶい褐色、灰褐色をしており、胎土に長石・砂・スコリアなどを含んでいる。国分期の土器である。

14は北西部のピット4と北壁の間の床より出土した。完形の环形土器である。最大径は14.2cm、器高4.2cm、底径6.4cmである。外面はロクロ使用後底部に近いところをヘラけずりをしており、底部は糸切り離しをしている。内面は漆を塗って研磨している。色調は内面が黒色、外面は橙色であるが、底部だけが赤褐色をしている。胎土にスコリア・砂・石英を含んでいる。国分期の土器である。

15はカマドの南東部の床より出土した。土師器の皿形土器である。完形率は90%で最大径13.8cm、器高3.3cm、底径が6.2cmである。形状はゆがんでいるがロクロ使用をしており。底部に糸切り痕を残し、その後に台を付けたと見られる。胎土中に雲母・砂・石英・長石等を含み、赤褐色をしている。焼きは比較的弱い。国分期と考えられる。

16はカマドの西壁の下の床より出土した。土師器で环形墨書き土器である。最大径10.8cm、器高3.3cm、底径6.7cmである。完形率は90%である。器の内外面にはロクロ使用痕がある。外面の胴部には「本」の墨書きが付いている。底部は糸切り離し後、ヘラけずりがなされている。色調は橙色で胎土に砂を含む。国分期の土器である。

17はカマド内より出土した。上師器で完形の环形土器である。最大径14.4cm、器高4.1cm、底径5.8cmである。外面はロクロ使用の後、底部に近いところをヘラけずりをしている。底部は回転糸切り離し痕を残している。内面にもロクロ使用痕がある。色調は内面がにぶい赤褐色、外面が灰褐色で、底部だけが2次焼成のため黒色をしている。胎土に、砂・スコリアを含む。国分期の土器である。

18はカマドの東側から出土した。大型の要の口縁部・胴部・底部である。それぞれ破片で出土したが、胴部と底部は接合しない。現存で推定器高は25~30cm、底径は12.5cmである。器外向の

口縁部にロクロ使用痕が残り、胴部から口縁の下までタタキ目、胴部下方から底部までハケ目が残されている。ロクロで整形し、その後、ハケ目、タタキ目で完成させたと考えられる。また底部付近に2次焼成を受けている。色調は2次焼成部分が黒褐色、胴部が明褐色と橙色、口縁部赤褐色をしている。国分期と考えられる。

19は中央より内部約50cmの床に出土した。須恵器の大型甕の胴部の破片である。胴部が切れて口縁部のように見えるが実際はさらに統いてその上に口縁部があると考えられる。器の内外面にロクロ使用痕があるが、外面はほとんどタタキ目が施されている。胎土中にスコリア・砂を含んでいる。国分期と考えられる。

20はカマド内に出土した。須恵器で大型甕の胴部・口縁部の破片である。現存器高は14.8cmである。器内面に輪積み痕とヘラなで、器外面上にはタタキ目、タタキ目の間にヘラなでが残されているので、輪積み上げの製法後、ヘラなでをし、その後タタいて整形したと考えられる。胎土中にスコリア・礫が含まれている。国分期と考えられる。

21はカマド内に出土した大型甕の胴部片である。土師器で現存器高は21.2cm、最大径は26.5cmである。底部は出土していないが推定で径11cm程である。典型的な積み上げ式の製法で、その後なで整形を行っている。器外面上には化粧粘土を施し、なでている。色調は外面が明赤褐色、内面はにぶい褐色をしている。胎土中に雲母・長石が含まれている。国分期と考えられる。

22は覆土より出土した須恵器で壺形の胴部・底部片である。器高は3.9cmでロクロ使用痕がある。褐灰色で、胎土に砂・スコリアを含んでいる。

23は覆土より出土した須恵器片である。壺形の胴部・底部で、器高3.9cmである。胴部の口縁近くにロクロ使用痕を残している。褐灰色をしており、胎土に雲母・石英・長石・スコリア等を含んでいる。22・23とも国分期のものと思われる。

24・25は覆土より出土した。別個体であるが、土師器で、壺形土器の口縁部・胴部片である。ロクロ使用痕があり、胎土に砂・スコリアを含んでいる。24は器高が3.3cm、色調が内面は橙色、外面は暗褐色をしており、25は器高3.1cm、色調はにぶい褐色である。どちらも国分期である。

26はカマド内に破片で出土した。接合して器高31.3cm、底径は推定で13.2cm、最大径は胴部で23.1cmである。須恵器の壺でロクロ使用痕、タタキ目からロクロ整形し、外面をたたいたと思われる。なお、第22号住居址より同個体の破片が出上している。胎土に砂を含む。国分期のものである。

土製品（写69）

27はカマド内に垂直に立って出土した。これは長さ18.7cm、外径8cm、内径3.6cmの土管状のものである。胎土には砂・スコリアを含み、下部の約半分に鉄錆などが付着した状態であり、色は橙色であるが、鉄錆付着の部分は灰褐色、黒色をしている。フィゴの羽口と考えられる。

(註1)

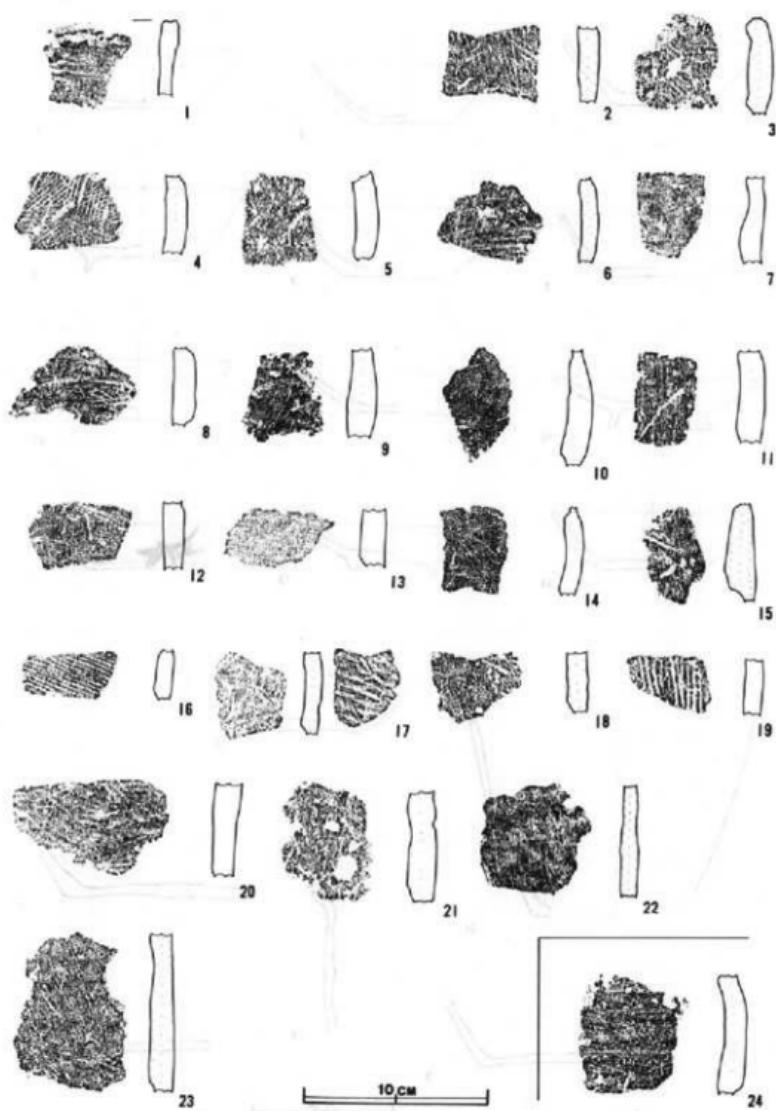


图 206 第 2 · 4 号住居址出土土器拓影

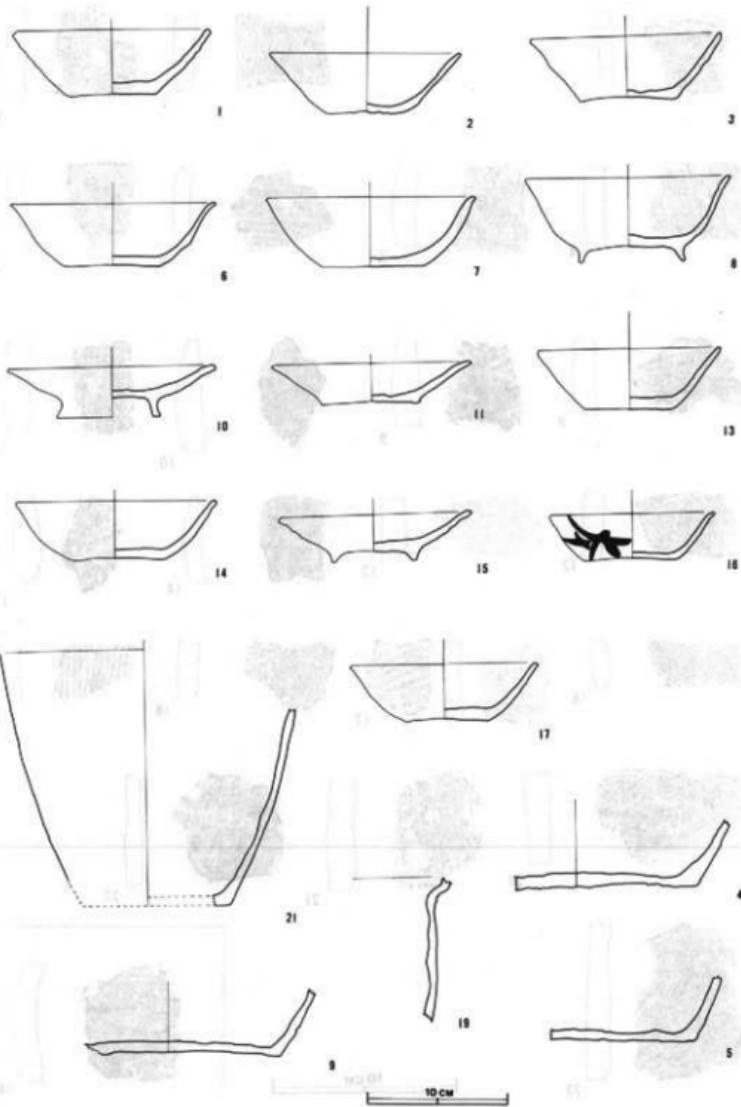


図207 第3号住居址出土遺物(1)

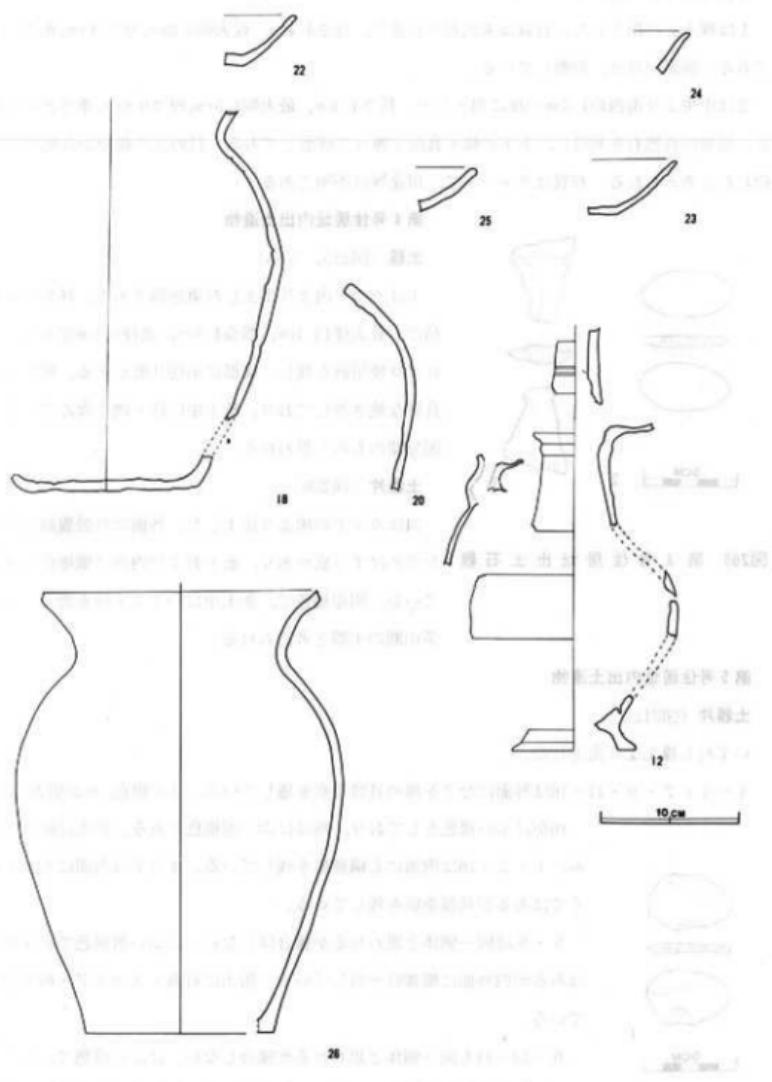


图208 第3号住居址出土遗物(2)

骨多孔器
红陶
陶片

石器 (図209, 写85)

1は覆土より出土した。石質は玄武岩の石鉈で、長さ4.4cm、最大幅3.2cm、厚さ1cm、重さ10gである。側面を打点、剥離している。

2は中央より南西約1.5mの床に出土した。長さ4.3cm、最大幅2.5cm、厚さ0.6cm、重さ20gである。川原の自然石を利用し、上下の縁と裏面を擦って研磨してある。斜め上の部分から使用中に折れたと考えられる。石質はチャートで、用途等は不明である。

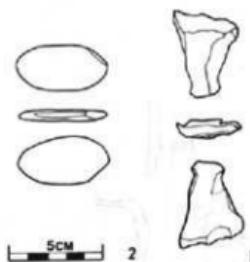


図209 第3号住居址出土石器

第4号住居址内出土遺物

土器 (図215, 写66)

1はカマド内より出土した須恵器である。環形の完形品で、最大径13.4cm、器高4.3cm、底径8.1cmである。ロクロ使用痕を残し、底部に糸切り痕がある。褐灰色で良好な焼きをしており、胎土中に砂・礫を含んでいる。国分期のものと思われる。

土器片 (図206)

24はカマドの床より出土した。外面は貝殻腹縁によるたてのけずり痕があり、胎土および内面に繊維痕を残している。明赤褐色で、胎土中にバミス・砂を含んでいる。茅山期の土器と考えられる。

第5号住居址内出土遺物

土器片 (図211)

いずれも覆土より出土した。

1~4・7・9・11・16は外面にたてか横の貝殻条痕を施している。2が橙色、9が明黄褐色、16がにぶい褐色をしており、他はにぶい赤褐色である。胎土に繊維を含み、1・2・16は内面にも繊維痕を残している。また7は内面にもごく薄くではあるが貝殻条痕を残している。

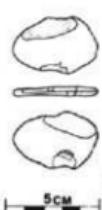


図210 第5号住居址出土石器

5・8は同一個体と思われるが接合はしない。にぶい黄褐色でわずかではあるが内外面に繊維痕を残している。胎土に石英・スコリア・砂を含んでいる。

6・13・14も同一個体と思われるが接合しない。にぶい橙色で、バミス・砂・雲母を含んでいる。ヘラによる横の沈線、竹管によるたての条線を描いている。

10は灰黄褐色で、砂・礫を含み、竹管による沈線の間にR Lの繩文を

施している。

12は竹管による渦巻や直線の沈線を施している。内面は丁寧にヘラなでをし、にぶい黄褐色で胎土にパミス・砂を含んでいる。

15は橙色で、胎土に砂・礫・パミスを含んでいる。内外面ともヘラなでをしている。

1~5、7~9、11~15・16は茅山期、6・13・14は田戸下層期である。10・12は不明である。

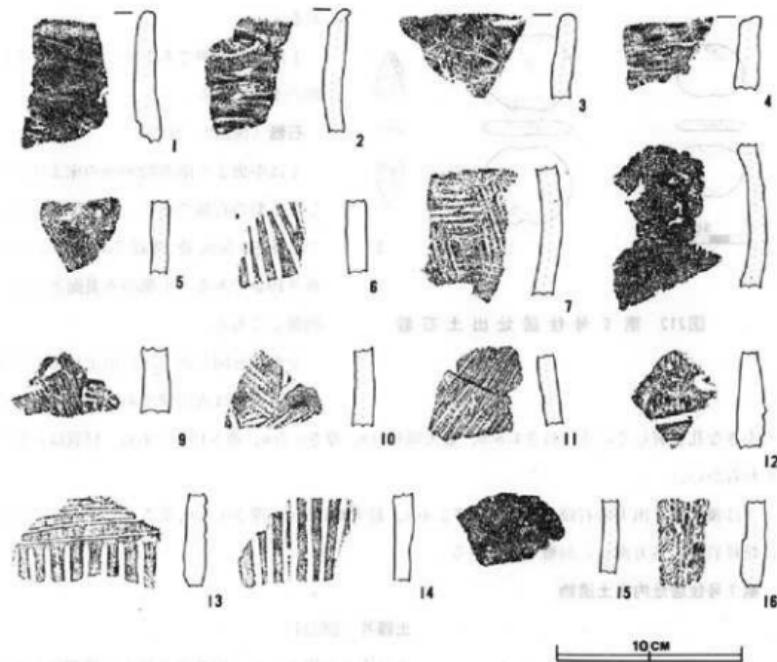


図211 第5号住居址出土土器拓影

石器（図210、写85）

1は覆土より出土した。自然石を利用した石錐である。長さ4.4cm、最大幅3.8cm、厚さ0.5cm、重さ5gで、石質は頁岩である。表裏面とも一部剥離されている。

第6号住居址内出土遺物

土器片（図214）

1・3・5～7は床より、2・4・8は覆土より出土した。

1は外面に、竹管による横の沈線、クシによる斜め条線を描き、内面を丁寧にヘラなどでいる。橙色で、胎土に砂・バミスを含む。

2・3～6、8は外面に貝殻条痕が施されている。3だけがにぶい黄褐色で、他はにぶい赤褐色をしている。胎土に砂・バミスを含み、内外面と胎土に纖維痕を残している。8にはごくわずかであるが内面にも貝殻条痕を残している。

7は明赤褐色で、内外面とも纖維痕を残している。胎土に砂・バミスを含み、やはり纖維痕がある。

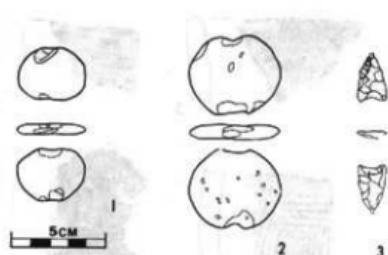


図212 第6号住居址出土石器

1は時期不明であるが、2～8は茅山期の土器である。

石器（図212、写85）

1は中央より南西約50cmの床より出土した小型の石鎌である。石質は石英班岩で、長さ3.5cm、最大幅2.7cm、厚さ0.5cm、重さ10gである。上部の表面とも打点剝離してある。

2も1と同じ地点から出土した石鎌である。石質は火山彈である。表面に無数の小さな孔を有している。長さ4.8cm、最大幅4.1cm、厚さ0.7cm、重さ15gである。材質は比較的やわらかい。

3は覆土より出土した石鎌である。長さ2.4cm、最大幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ2gである。石質は蛇紋岩で、各方面から剝離されている。

第7号住居址内出土遺物

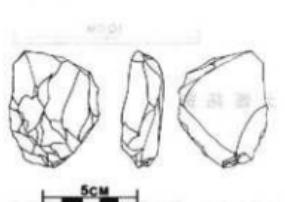
土器片（図214）

9は床より出土した。内外面と胎土に纖維痕を残している。にぶい赤褐色をし。胎土にスコリアを含んでいる。茅山期の土器と考えられる。

石器（図213、写87）

1は中央より南西約70cmの床から出土した。チャートの礫で長さ6.1cm、幅4.7cm、厚さ2.1cm、重さ65gである。

図213 第7号住居址出土石器



神奈川県立歴史博物館蔵

写87 石器

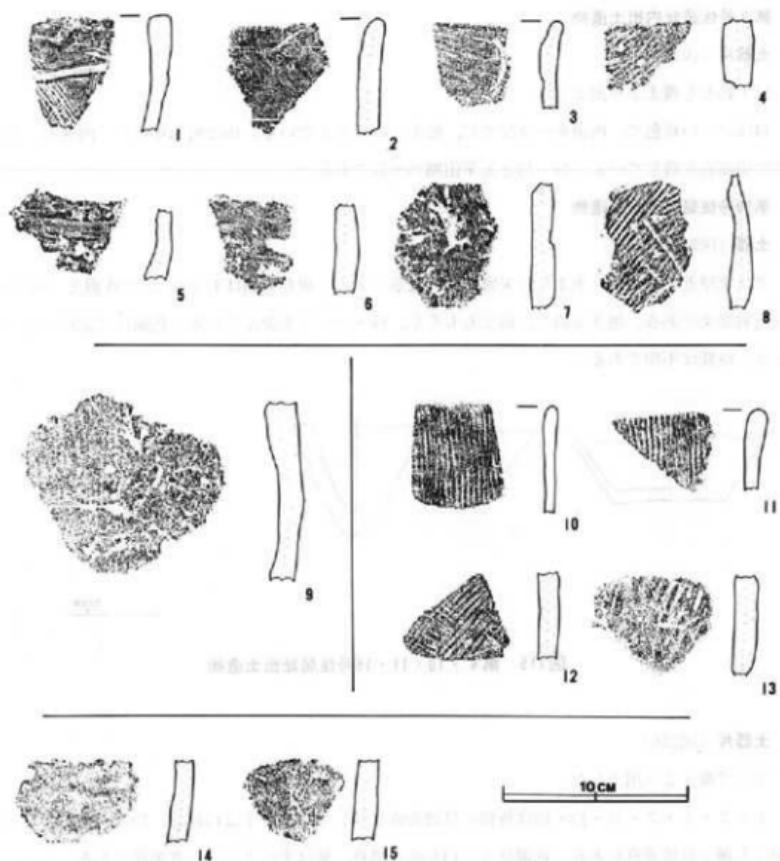


図214 第6・7・8・9号住居址出土土器拓影

第8号住居址内出土遺物

土器片(図214)

10と12が床、11と13が覆土より出土した。

10・11は口縁部で外面にたての撚糸文を施している。10は橙色、11は明褐色をして、どちらも胎土に砂を含んでいる。

12・13は外面に貝殻条痕を残している。内面にはともに繊維痕があるが、13だけ胎土にも繊維痕を残している。12はにぶい黄褐色、13はにぶい褐色である。

10・11は夏島期、12・13は茅山期の土器である。

第9号住居址内出土遺物

土器片 (図214)

14・15とも覆土より出土した。

14はにぶい褐色で、内面をヘラなでし、胎土に砂を含んでいる。15は明赤褐色で、内外面と胎土に繊維痕を残している。14・15とも茅山期の土器である。

第10号住居址内出土遺物

土器 (図215, 写83)

2は東壁近くの床より出土した尖底土器の底部である。現存器高は3.5cmで、内外面とも繊維痕、刺突文がある。焼きは弱く、胎土もろく、砂・バミスを含んでいる。色調はにぶい褐色である。時期は不明である。

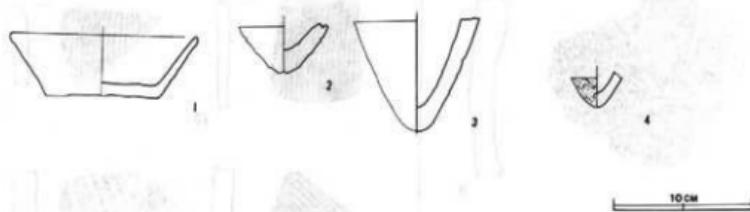


図215 第4・10・11・16号住居址出土遺物

土器片 (図216)

すべて覆土より出土した。

1・3・4・7・8・13・19は外面に貝殻条痕を残している。1は口縁部、13はわずかだが内面にも薄く貝殻条痕がある。色調は3・13が明赤褐色、他はすべてにぶい黄褐色である。胎土に砂・バミスを含む。

2・5・6・10・14~16・18・21は内面と胎土に繊維痕を残している。14がにぶい黄褐色、16が灰褐色、21がにぶい褐色である。他の6片はすべて明赤褐色をしている。胎土に砂・スコリアを含んでいる。

9は内外面とも丁寧なヘラなでし、外面に竹管による沈線を一本施している。灰褐色をし、胎土に砂・スコリアを含む。

11・12・17は内面に繊維痕を残している。いずれも明赤褐色で、胎土に砂・スコリアを含んでいる。

20はにぶい褐色をし、胎土に雲母を含んでいる。内面をヘラなでしている。

1~8・10~19・21は茅山期の土器である。9・20は時期不明である。

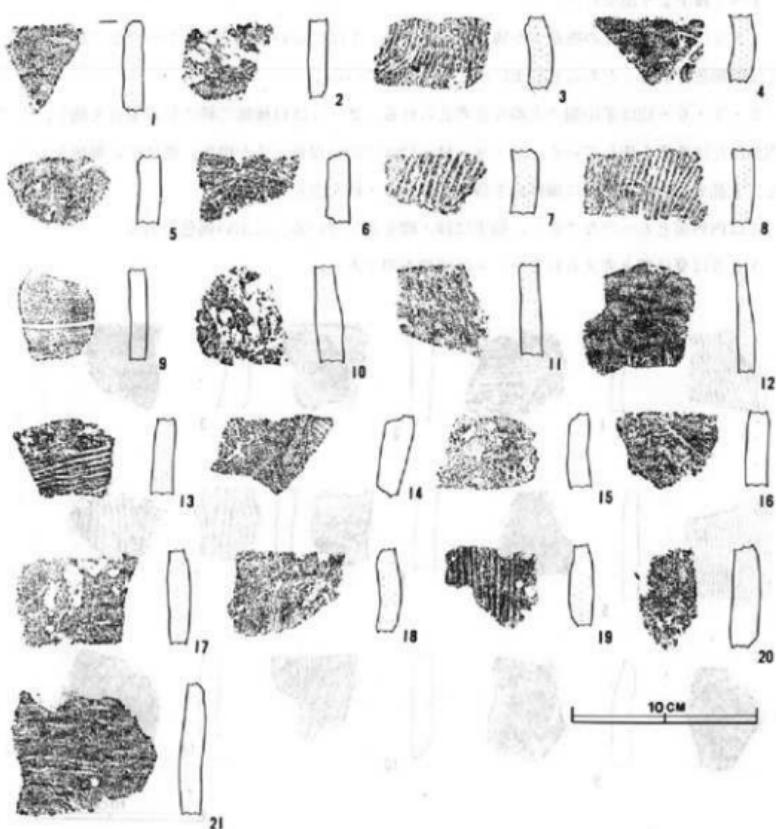


図216 第10号住居址出土土器拓影

第11号住居址内出土遺物

土器 (図215、写83)

3は覆土より出土した尖底土器の底部である。現存器高は8.1cmである。器外面に刺突文、繊維痕があり、器内面には繊維痕、横のなでが残っている。胎土には繊維痕が残り、砂・スコリア

を含んでおり、色調はにぶい橙色をしている。田戸下層期の土器である。

土器片（図217）

すべて覆土より出土した。

1と5は外面にたての燃糸文が施文されている。1はにぶい褐色で内面をヘラなでしている。5は明褐色である。どちらも胎土にバミスを含んでいる。

2・3・6～12は茅山期の土器片と考えられる。2・3は口縁部で横の貝殻条痕を施し、7は内面にだけ条痕を施している。2・9・11・12はにぶい褐色、3が橙色、他は明赤褐色をしている。大部分、内面と胎土に繊維痕を残し、バミス・砂を含んでいる。

4は内外面ともヘラなでし、胎土に砂・礫を含んでいる。にぶい褐色である。

1と5は夏島期と考えられるが、4は時期不明である。

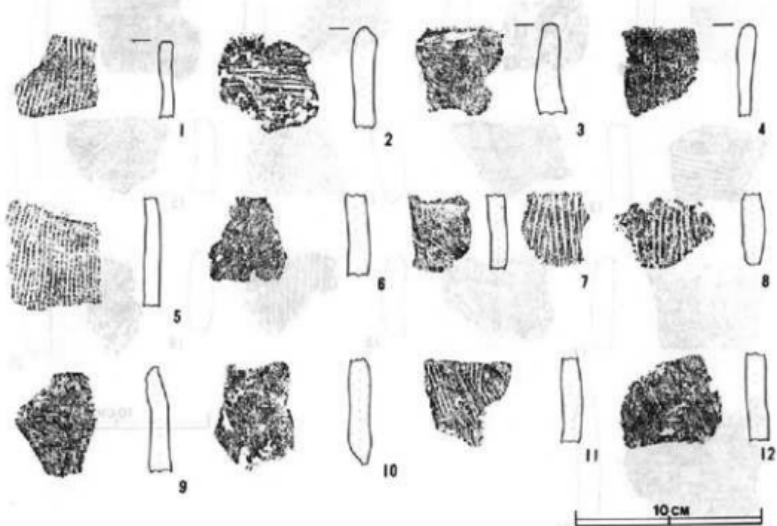


図217 第11号住居址出土土器拓影

第12号住居址内出土遺物

土器片（図218）

17のみ床より出土、他はすべて覆土より出土した。

1・7・9・10・12・13は胎土に繊維痕を残している。1が口縁部片で口縁は1cmの厚さがありしかも平たい。13のみにぶい褐色で、他はすべて赤褐色である。胎土に砂・バミスを含んでいる。

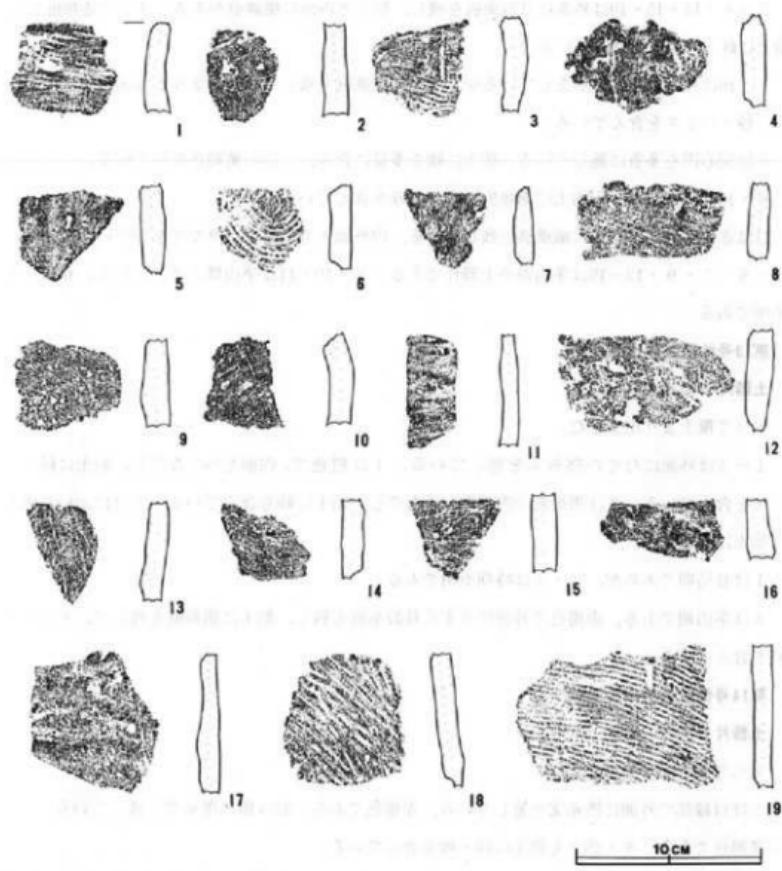


图218 第12号住居址出土土器拓影

2~4・14・15・19は外面に貝殻条痕を残し、胎土と内面に纖維痕がある。すべて赤褐色をし、胎土に砂・バミスを含んでいる。

5・16は外面をなで整形をしているが、胎土に纖維痕を残している。2片とも赤褐色をし、胎土に砂・バミスを含んでいる。

6は同心円を多重に施している。胎土に礫を多量に含み、にぶい黄褐色をしている。

8・10は灰褐色をし、胎土に纖維痕を残し、砂を含んでいる。

11は赤褐色をし、胎土に纖維痕を残している。内外面とも丁寧なヘラなでをしている。

1~5・7・9・12~19は茅山期の土器片である。8・10・11は茅山期と考えられる。6は時期不明である。

第13号住居址内出土遺物

土器片（図219）

すべて覆土より出土した。

1~3は外面にたての捺糸文を施している。1は橙色で、内面をヘラなでし、胎土に砂・バミスを含んでいる。2は黒褐色で内面をヘラなでし、胎土に砂を含んでいる。3はにぶい黄褐色で胎土に礫を含む。

1は夏島期であるが、2・3は時期不明である。

4は茅山期である。赤褐色で外面にうすく貝殻条痕を残し、胎土に纖維痕を残して、バミス・砂を含んでいる。

第14号住居址内出土遺物

土器片（図219・220）

すべて覆土より出土した。

5は口縁部で外面に捺糸文を施している。赤褐色である。25は横の捺糸文を残している。にぶい黄褐色である。5・25とも胎土に砂・礫を含んでいる。

6~8・10・11・15・19・40・41・47・48は胎土に纖維痕を残し、バミスを含んでいる。色調は2・8がにぶい褐色、7がにぶい黄褐色、他はすべてにぶい赤褐色をしている。

9・12~14・16・21・23・24・27~39・43・44~46・49~52は外面に貝殻条痕を残している。胎土には纖維痕を残し、バミス・砂を含んでいる。18・27・50~52は内面にも貝殻条痕がある。

12・23・52がにぶい黄褐色であり、16がにぶい褐色、他はすべてにぶい赤褐色をしている。

17は外面がヘラなで、内面は纖維痕を残している。赤褐色で胎土にバミス・砂を含んでいる。

20は褐色で、内外面になでを残している。色は褐色で胎土にバミスを含んでいる。

22は外面に貝殻条痕を残しているが、条痕が曲線になっている。胎土にも纖維痕を残し、バミスを含んでいる。赤褐色をしている。

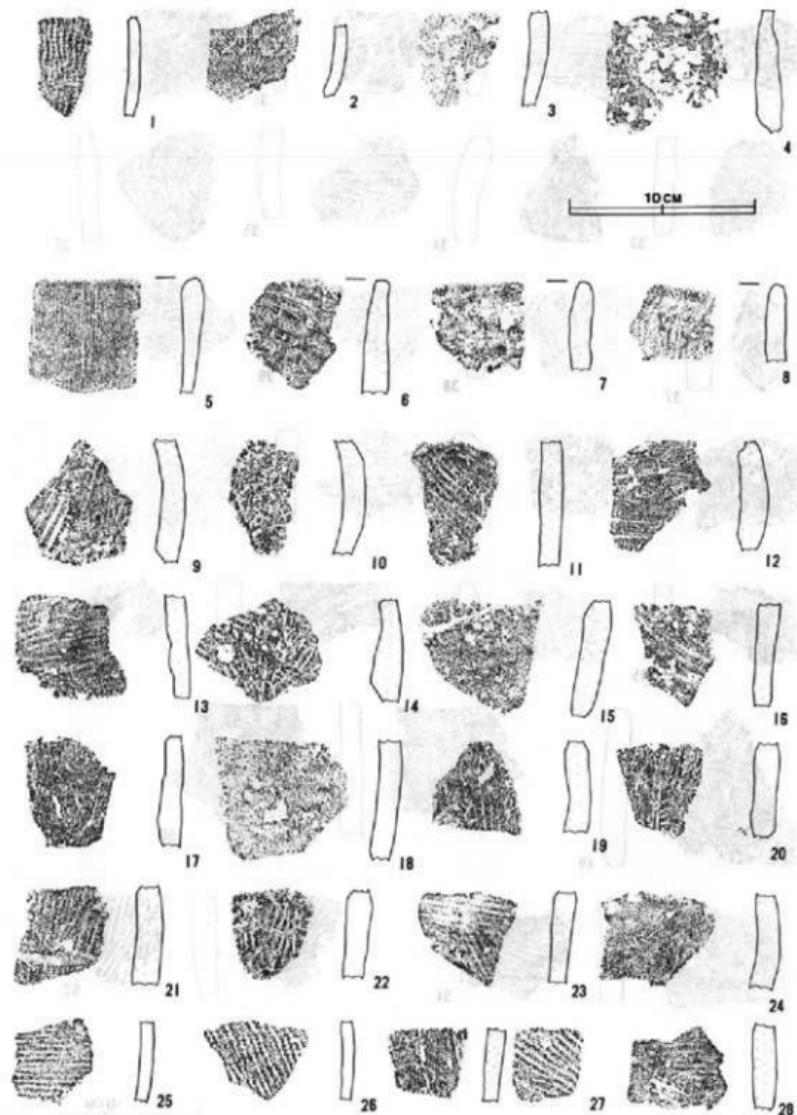


图218 第13·14号住居址土器拓影(1)

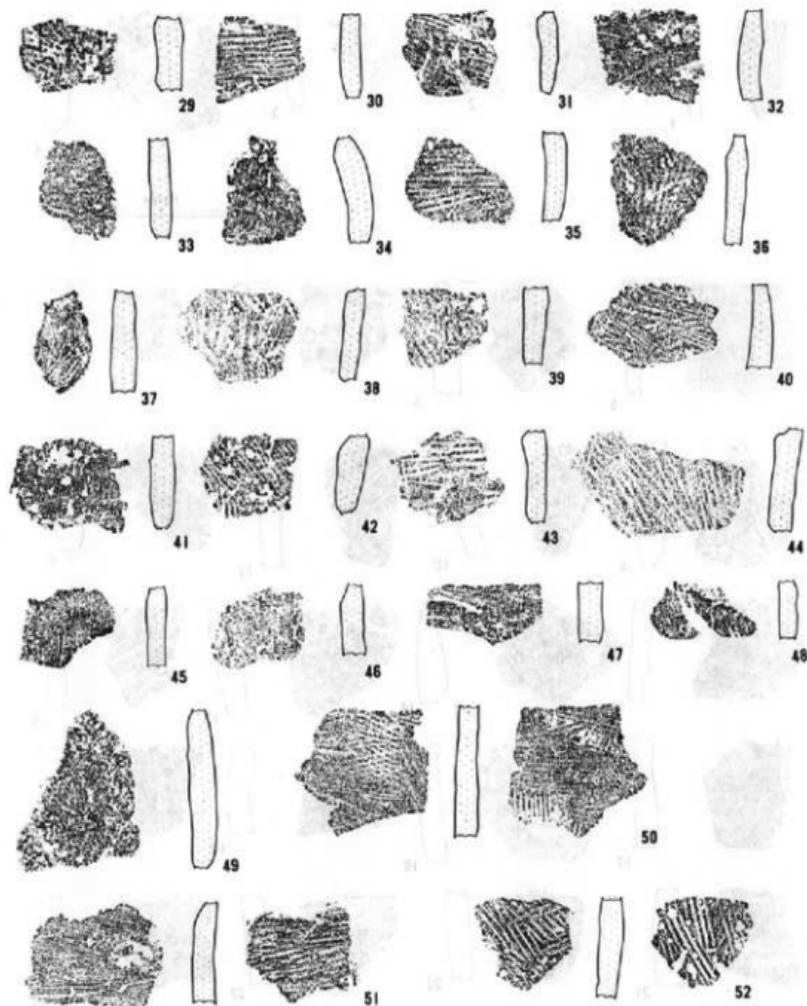


图220 第14号住居址出土土器拓影(2)

26は外面にR Lの縦文を施している。赤褐色をしていて胎土にバミスを含む。

5・25・26は夏島期の土器。6・16・18・19・21・23・24・27~52は茅山期の土器である。

17・20・22は時期不明である。

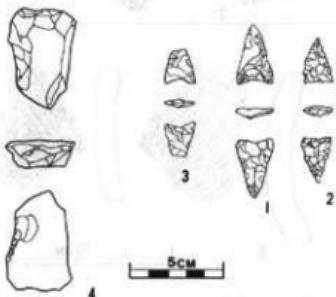


図221 第14号住居址出土石器

石器 (図221、写86・87)

1は中央より南東約40cmの床より出土した石鎌である。長さ3cm、最大幅2cm、厚さ0.5cm、重さ3gで、石質はチャートである。各方面から剥離されている。

2は1より北約5cmの床より出土した。黒曜石製の石鎌である。各方向より剥離されているが、先端が少し曲っていて、1よりも厚手で長さ2.3cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ2gである。

3は中央から南へ約1m離れた床に出土している。石質がチャートの石鎌である。各方面より剥離されてしまも先端が行程消失して

いる。長さ1.7cm、最大幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ2gである。

4は覆土より出土した。石核で、長さ5.2cm、最大幅3.4cm、厚さ1.4cm、重さ35gである。上・左右の三方向から打点を加え、剥離している。石質は頁岩、舟底型の形をしている。

第15号住居址内出土遺物

土器片 (図222・223)

すべて覆土より出土した。茅山期の土器片が大部分である。

10は外面に撚糸文を施している。灰黄褐色で胎土に砂・礫を含む。内面はヘラなでである。

14はR Lの縦文を外面に施している。にぶい褐色をしていて、胎土に砂を含んでいる。

11は外面にハケ目を残している。内面はヘラなでし、橙色で胎土にバミス・礫を含んでいる。

33は外面にたての撚糸文を施している。にぶい褐色をして、胎土に砂を含んでいる。

10・11・14・33以外はすべて茅山期の土器片と考えられる。外面に貝殻条痕を残しているのが多いが13・18・25・28は内面にも条痕を付けている。また、8・16・29・42は内面にのみ貝殻条痕を付けている。色調は19・34・41がにぶい橙色、21が橙色で、他はすべてにぶい赤褐色である。

なお、33は夏島から稻荷台までの期間の土器片と考えられる。10・11・14は時期不明である。

石器 (図224、写85)

1は中央より南東約80cmの床より出土した。石棒の先端で、長さ5.7cm、最大幅2.9cm、厚さ1.2cm、

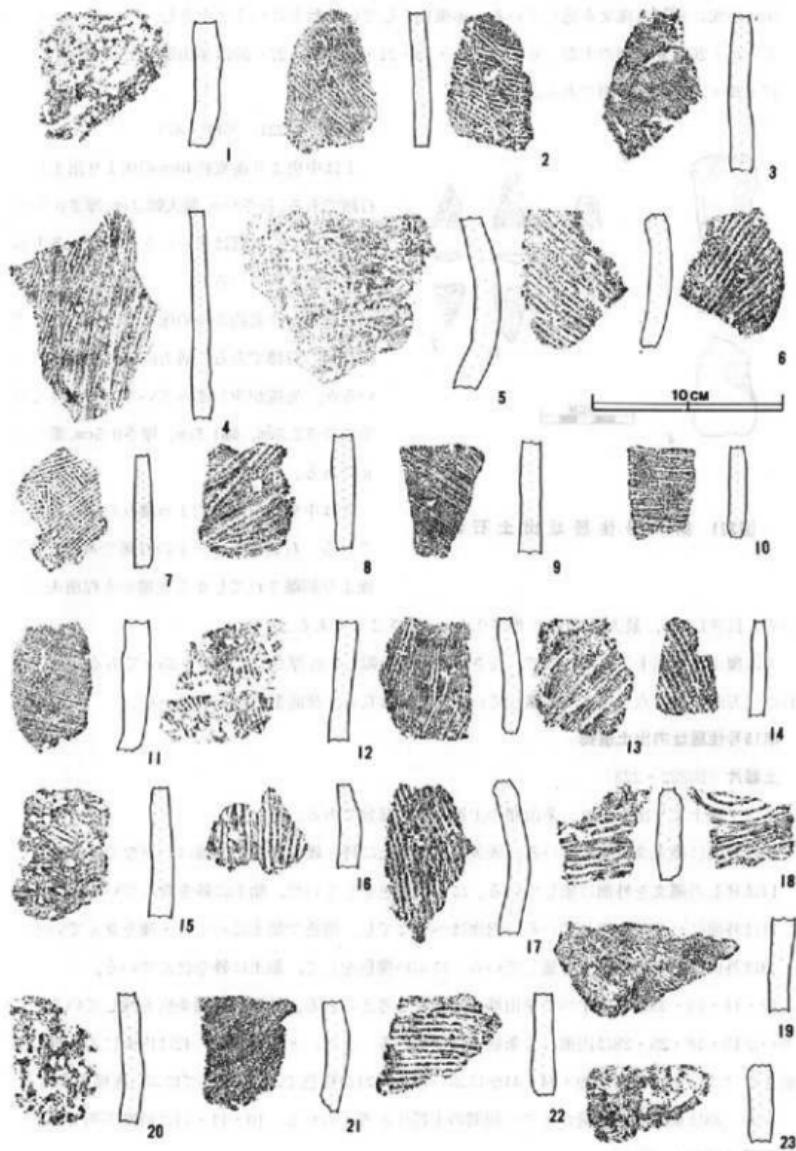


图222 第15号住居址出土土器拓影(1)

重さ35gである。石質は砂岩である。

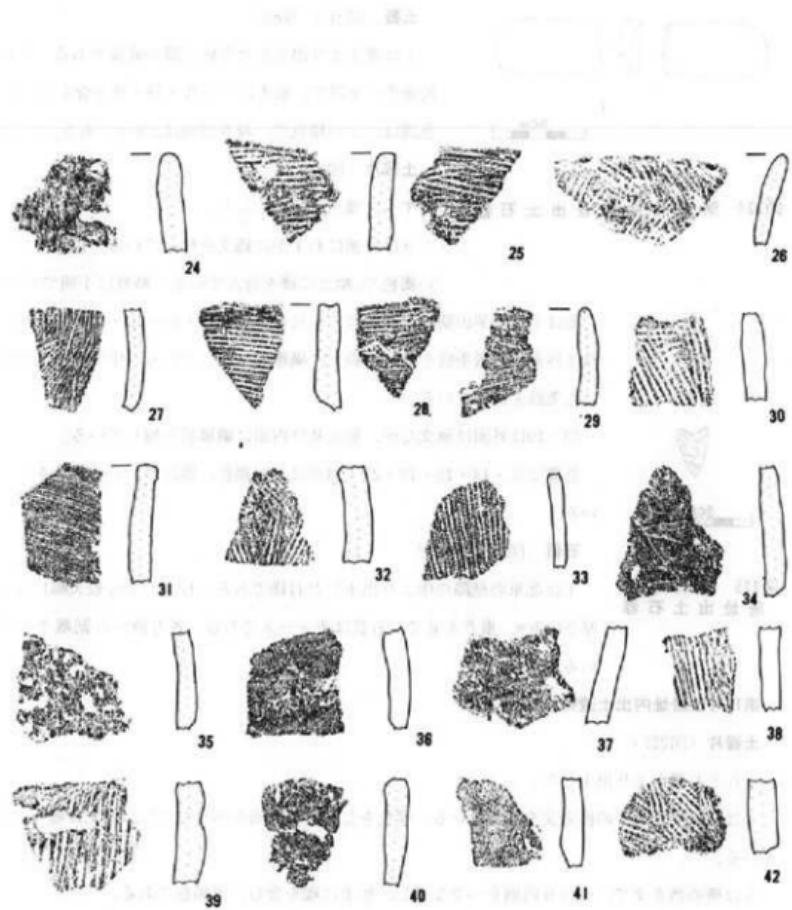


図223 第15号住居址出土土器拓影(2)

第15号住居址内出土遺物



図224 第15号住居址出土石器

土器 (図215, 写83)

1は覆土より出土した尖底土器の底部である。比較的薄手の土器で、胎土にバミス・砂・礫を含んでいる。色調はにぶい橙色で、現存器高は2.6cmである。

土器片 (図226)

すべて覆土より出土した。

9は外面にわずかに縄文を残している。色調はにぶい褐色で、胎土に礫を含んでいる。時期は不明である。



図225 第16号住居址出土石器

他はすべて茅山期の土器と考えられる。1~8・10~12・14~17・20~24は外面に貝殻条痕を施し、胎土に纖維痕を残している。中でも1は内面にも条痕を付けている。

13・19は外面は無文だが、胎土及び内面に纖維痕を残している。

色調は3・14・15・19・22・24がにぶい褐色、他はにぶい赤褐色をしている。

石器 (図225, 写87)

1は北東の壁際の床より出土した石鎌である。長さ2.3cm、最大幅1.7cm、厚さ0.3cm、重さ4gで、石質はチャートである。各方面から剥離されている。

第17号住居址内出土遺物

土器片 (図227)

4片とも覆土より出土した。

1は口縁部でたての撚糸文を施している。橙色をしていて内面をヘラなでし、胎土に礫を含んでいる。

3は横の撚糸文で、やはり内面をヘラなでし、胎土に礫を含む。灰褐色である。

2と4は外面に貝殻条痕、胎土に纖維痕を残している。砂を含んでいる。2が褐色、4が橙色である。

1は鶴ヶ島期、2と4は茅山期の土器片である。3は時期不明である。

第18号住居址内出土遺物

土器 (図228, 写67)

1は中央より西側約50cmの床に出土した。70%の完形で、土師器の皿形土器である。最大径は13cm、器高2.5cm、底径6.4cmである。ロクロを使用し、器内面を黒色に研磨している。器外表面は

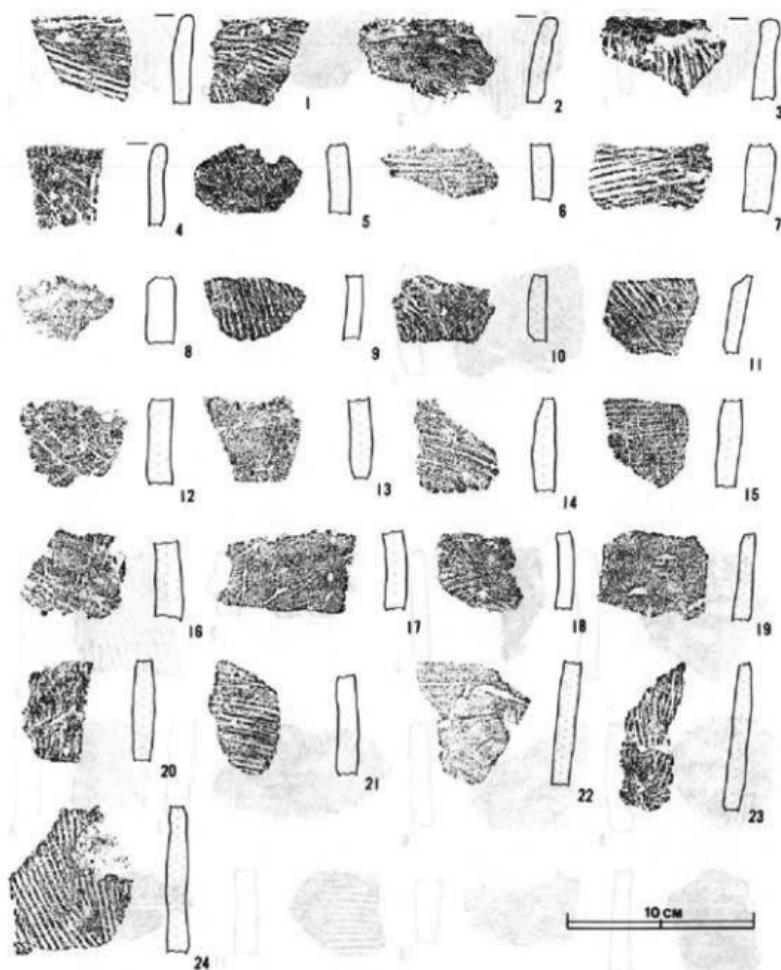


图226 第16号住居址出土土器拓影

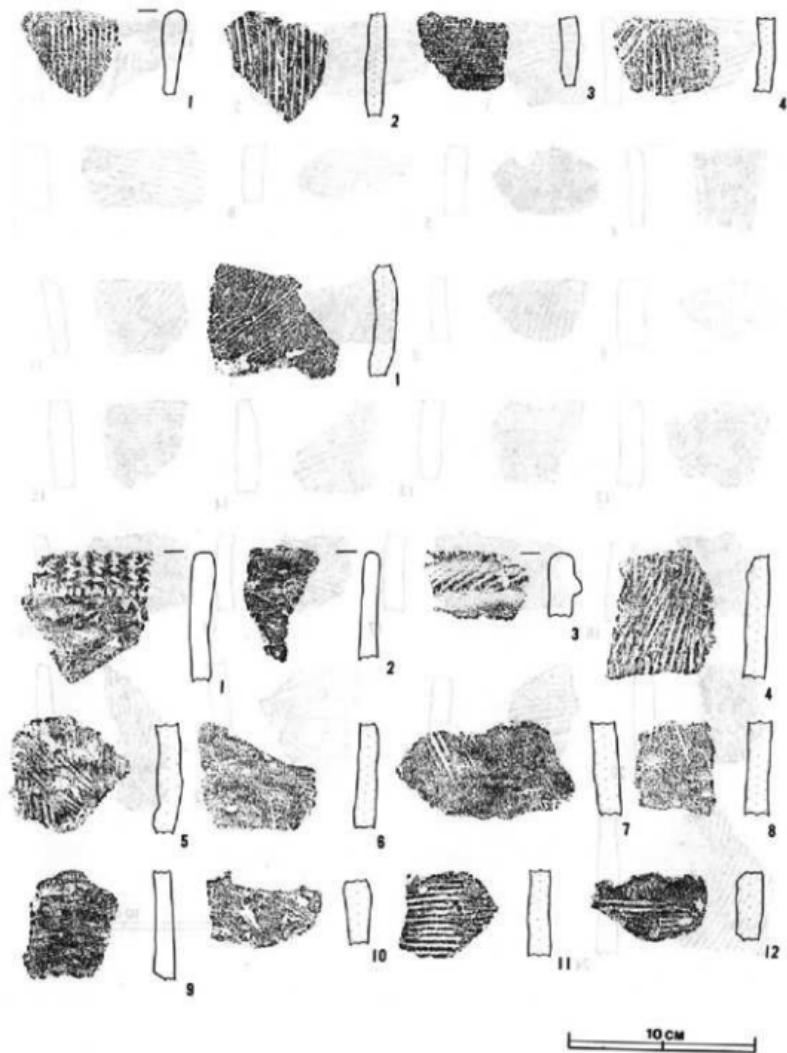


图227 第17·18·19号住居址出土土器拓影

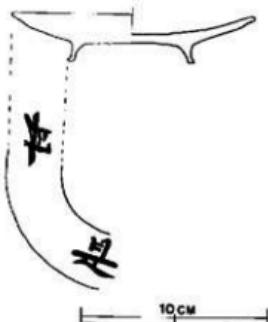


図228
第18号住居址出土遺物

台を整形の後にはり合わせている。また外面には「足」、「舟」あるいは「具」と読める墨書きがしてある。色調は内面が黒色、外面が明褐色と明赤褐色が交っている。胎土には砂が含まれている。同分期の土器である。

土器片（図227）

1は茅山期の上器片で明赤褐色である。外面に貝殻条痕を付け、内面と胎土に纖維痕を残している。また、胎土にはバミス・砂を含んでいる。

第18号住居址内出土遺物

土器片（図227）

すべて覆土より出土した。3以外は茅山期の土器片と考えられる。

3は口縁部で口縁直下に降帯を付け、降帯にヘラによる連続斜線文を施している。にぶい橙色であるが時期は不明である。

1・2は口縁部で、1はヘラによる連続文を口縁から口縁下まで続けている。色調は1が橙色、5・6が褐色で、他はすべてにぶい赤褐色をしている。また、すべて胎土にバミスを含んでいる。なお、2と9は外外面にヘラなどで残している。

石器（図229、写85）

1は中央より東約1.5mの床より出土した。石質が石灰質砂岩の石斧である。長さ7.8cm、最大幅4.8cm、厚さ1.7cm、重さ80gである。柄の部分から両左右に剥離してある。先端の裏面を約5mmの幅で横に研磨してある。

2は中央より北約70cmの床より出土した石鎌である。長さ3.3cm、最大幅2.3cm、厚さ0.7cm、重さ7gである。石質はチャートで、各方面より剥離している。

3は覆土より出土した石鎌である。長さ2.8cm、最大幅2.4cm、厚さ0.9cm、重さ6gである。各方面より剥離をしているが、先端は鋭利ではない。

4は中央より南東約1mの床に出土した。長さ2cm、最大幅2.3cm、厚さ0.7cm、重さ6gである。他の石器からの剥離片で、下方を刃部にして使用したものと考えられる。

5は覆土より出土した。長さ2.4cm、最大幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ4gでチャート質の剥離片である。

6は覆土から出土した。長さ1.5cm、最大幅1.1cm、厚さ0.2cm、重さ1g、石質はチャートである。

7も覆土出土である。長さ0.7cm、最大幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ0.5g、6と同様にチャートである。

6・7も剥離片と考えられる。

第20号住居址内出土遺物



図229 第19号住居址出土石器

土器 (図230, 写77・78)

1は中央より南側の床から出土した。完形の楕円土器である。最大径は口縁直下で14.1cm、器高は5.4cm、底径3.3cmである。器内面はロクロ使用痕があり、朱を塗っている。器外表面はロクロ使用後、底部近くをヘラけずりをし、口縁直下にカキ目を残している。底部はヘラけずり切り離しの後、3mm程けずり取っている。色調は外面が赤褐色、胎土中に砂・スコリアを含んでいる。良好な焼きである。国分期の土器と考えられる。

2は中央の床より出土した。90%完形で、1と同じ製法・色調・胎土をしているが、器外表面の胴部から口縁部にかけて2次焼成を受けている。

最大径13.5cm、器高6.1cm、底径3.3cmである。

土器片 (図231)

すべて覆土より出土した。

1・2・4～15は外面に貝殻条痕を付け、胎土と内面に纖維痕を残している。12だけは内面にも条痕を残している。色調は2・4がにぶい黄橙色、11が橙色で他はすべてにぶい赤褐色である。胎土には4に多量に砾を含んでいるほかは、パミスと砂である。茅山期の土器片である。

3は口縁部で、たての燃糸文を外表面に施している。にぶい橙色で、内面をヘラなでしている。胎土に雲母・砂を含んでいる。夏島期の土器片と考えられる。

第21号住居址内出土遺物

土器片 (図232)

すべて覆土より出土した。

1・2・5・22は同一個体である。灰褐色をしており、外表面でた後竹管による直線・曲線文様を描いている。内面をヘラなでし、胎土にスコリアを含んでいる。

6・18も外面に同様な文様を描いているが別個体である。6は内面を丁寧なヘラなでし、胎土にバミスを含む。色はにぶい褐色である。18はにぶい褐色で、胎土に砂を多量に含んでいる。

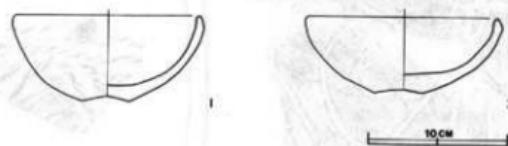


図230 第20号住居址出土遺物

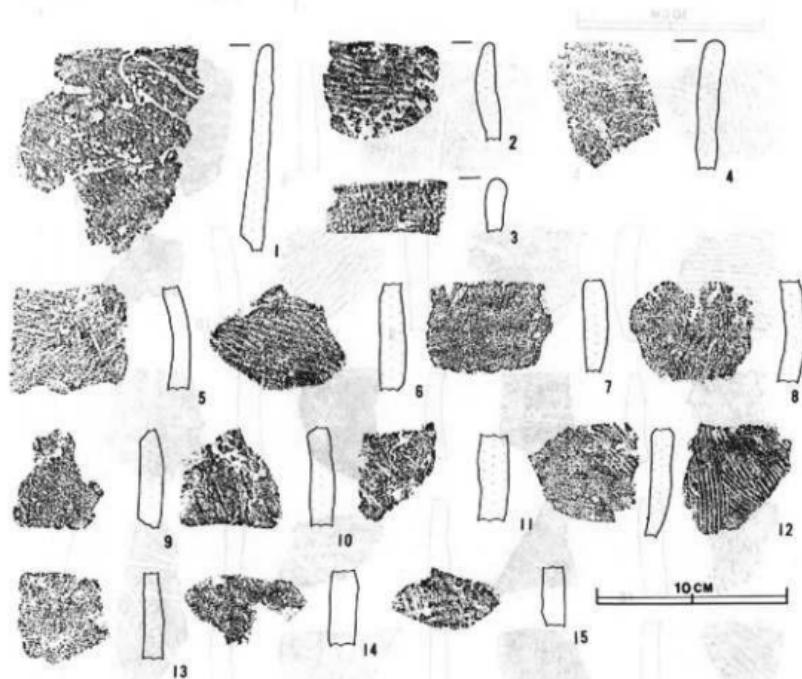


図231 第20号住居址出土土器拓影

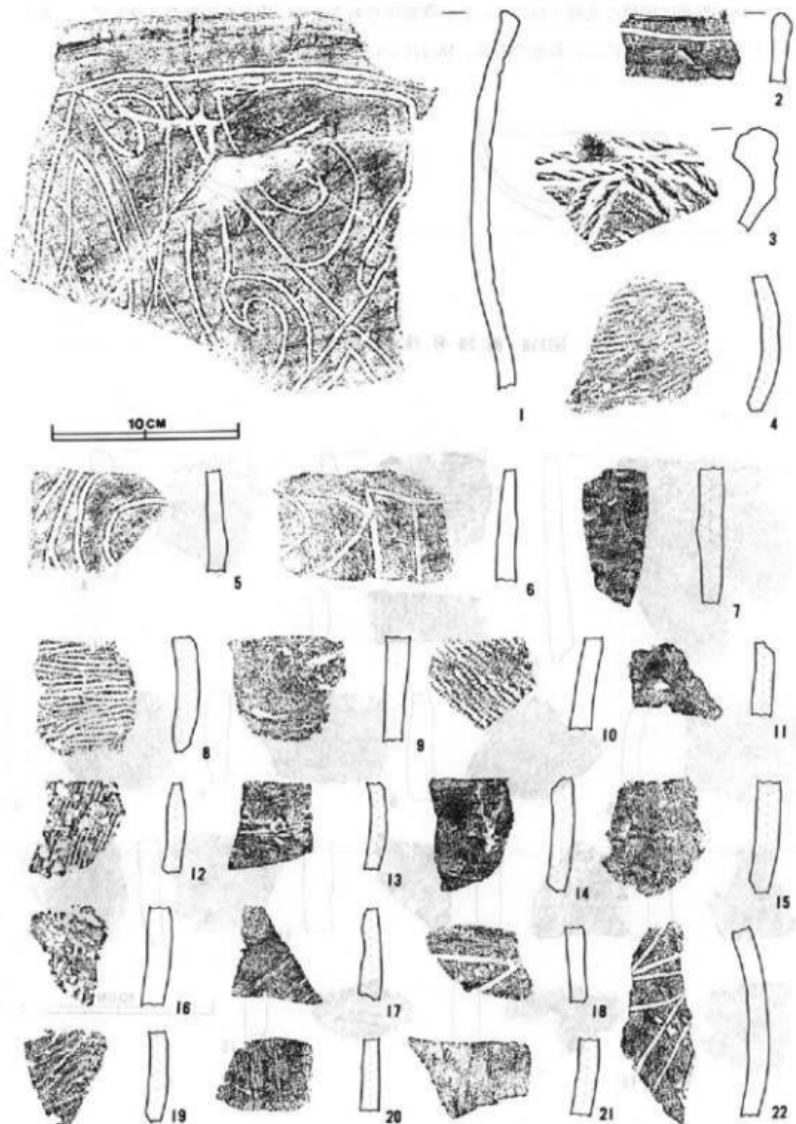


图232 第21号住居址出土土器拓影

1・2・5・6・18・22は称名寺期の土器片である。

3は外面にR.Lの縦文を施し、その後粘土ひもを付けてその上にヘラによる連続斜線文を付けている。また中央に1cm程度の突起を付けている。

10はにぶい黄褐色をして、外面にR.Lの縦文を施している。内面をヘラなでし、胎土に礫を含んでいる。

16は赤褐色をしており、外面にうすくクシ目を残している。胎土にスコリア・バミスを含む。

3は諸磯期の土器片であるが、10・16は時期不明である。

4・8・9・12・15・17・19・20は外面に貝殻条痕、または繊維痕を残し、一部には内面にも薄くわずかではあるが条痕を残している。色は赤褐色で、胎土にバミスと砂を含んでいる。茅山期の土器片である。

7・11・13・14・21は外面をヘラけずり、内面をヘラなでていて、胎土に繊維痕を残し、バミス・砂を含んでいる。色はすべて灰黄褐色をしている。茅山期の土器片と思われるが、正確には不明である。

第22号住居址内出土遺物

土器（図233、写82・83）

1は南壁際の覆土より出土した。90%完形の壺形土師器である。最大径は口縁部で13.8cm、器高4.6cm、底径5.6cmである。ロクロを使用している。器内面は底部が若干起伏を持っている。器外面はロクロ使用痕が残り、底部はヘラけずり切り離しを行っている。また内面は2次焼成を受けている。色調は黒褐色、明褐色であり、胎土に砂・長石・石英が多量に交っている。国分期の土器である。

2はカマド内より出土した須恵器である。80%の完形の壺形で、最大径12.7cm、器高3.6cm、底径6cmである。ロクロ使用痕があるが、器外面の底部近くをヘラなでている。底部はヘラけずり切り離しである。胎土中に砂・礫が多量に含まれている。国分期の土器と考えられる。

3は中央より50cm程北西に寄った床で出土した。70%完形の壺形の土師器である。最大径12.6cm、器高2.2cm、底径4.4cmである。器の内外面にロクロ使用痕が残り、外面の台の部分はあとから取り付けたようだが、台ははがれて出土している。色調は黒褐色で、胎土中に砂・礫・バミス等が含まれている。国分期の土器である。

4は中央より北約20cmの床で出土した。完形率50%で、壺形の土師器である。最大径16.2cm、器高4.8cm、底径7.8cmである。器の内外面にロクロ痕を残している。内面は黒色に研磨しており、外面は底部にヘラけずり切り離し痕を残している。また胴部に墨書きがあり、「ろ」と読める。色調は内面が黒、外表面は明赤褐色で、胎土に砂・バミス・スコリア等を含んでいる。国分期の土器である。

5はカマドより出土した土師器の壺の口縁部・胴部破片である。現存器高は10.5cmである。外面にタタキ目、口縁部にロクロ使用痕を残している。また口縁部に薄い沈線を4本施し、内面にクシ目が付けられている。低い温度で焼かれたためかもろく、色調は黒色である。胎土に砂・スコリア・礫等が含まれる。

6は覆土より出土した尖底土器の底部で現存器高は4.4cmである。外面には、胴部から底部にかけてたてのへらけずり、刺突文を残し、内面には多数の繊維痕がある。胎土中に砂・スコリアを含んでいる。

7は覆土より出土した壺形の上師器である。器高は4.8cmで、器の内外面にロクロ使用痕を残している。また、底部を静止へらけずり切り離しを行っている。色は内面が赤褐色、外面が明褐色で、胎土に砂・バミス・雲母を含む。国分期の土器である。

8・9は覆土より出土した。同一個体であるが接合はしない。壺形上師器の口縁部片である。内外面にロクロ使用痕があり、外面の底部近くを横のへらなでをしている。にぶい赤褐色で、胎土に砂を含む。現存器高は8が3.1cm、9が3.5cmである。国分期と考えられる。

10は覆土より出土した。上師器で壺形の底部片である。現存器高は1.5cmである。ロクロ使用痕があり、内面の底部から胴部立ち上がりまでへらなでをしている。内面が赤褐色、外面が橙色で、胎土にバミスを含む。時期は不明である。

11・12は覆土より出土した。内面を黒色に研磨しているが、同一個体ではない。11は器高1.8cm、底部から胴部にかけてへらけずりを行っている。12は器高4cmで、ロクロを使用している。ともに内面が黒褐色、外面が褐灰色で、胎土にバミスを含む。国分期の上師器である。

13は床より出土した上師器片である。壺形土器の口縁部で、外面にロクロ使用痕があり、内面を丁寧なへらなでをしている。色は内面が明赤褐色、外面が橙色で、胎土にバミスを含む。現存器高は3.7cmである。

14は覆土より出土した土師器片である。壺形土器の口縁部・胴部で、内外面にロクロ使用痕がある。現存器高は3.4cm、色はにぶい橙色で、胎土に砂・バミスを含んでいる。時期は不明。

15はカマド内に出土した。壺形土器で内外面にロクロ使用痕を残している。底部は静止糸切り離しを行っている。国分期の土器で色調は明赤褐色で胎土にバミスを含む。現存器高は3.9cm。

土器片（図234）

3・4・8・11・12・15は床より、他は覆土より出土した。

1・6・9・11・13は茅山期の上師器で外面に貝殻条痕、あるいは繊維痕を付けている。大部分が内面と胎土中に繊維痕を残している。色調は1・11がにぶい橙色、4が黒褐色をしており、他はすべて赤褐色である。胎土に砂・バミスを含んでいる。

7は黒褐色で外面に横の押型文を付け、その後たてのへらけずりを行っている。胎土にスコリ

ア・碟を含む。

8・14は内外面にハケ目を残している。色はにぶい褐色で、胎土にバミスを含んでいる。

10はにぶい橙色で、外面に直線の交差文様を付け、内面を丁寧なヘラなでをしている。

7・8・10・14は時期不明である。

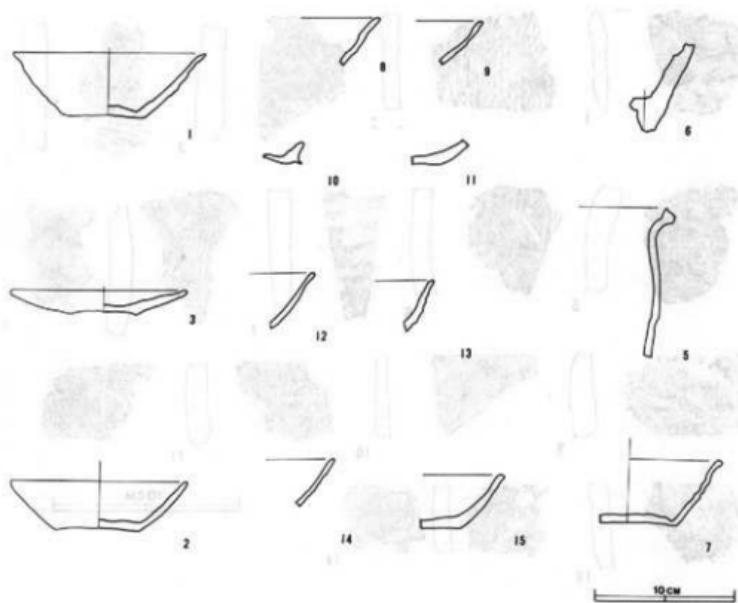


図233 第22号住居址出土遺物

第23号住居址内出土遺物

土器片(図236)

すべて覆土より出土した。

1・2・5~10・12~26・28~31は茅山期の土器片である。外面に貝殻条痕、あるいは纖維痕を付け、大部分、内面と胎土に纖維痕を残している。バミスと砂を含んでいる。色調は2・20がにぶい橙色、9がにぶい褐色、16が灰黄褐色で、他はすべてにぶい赤褐色をしている。

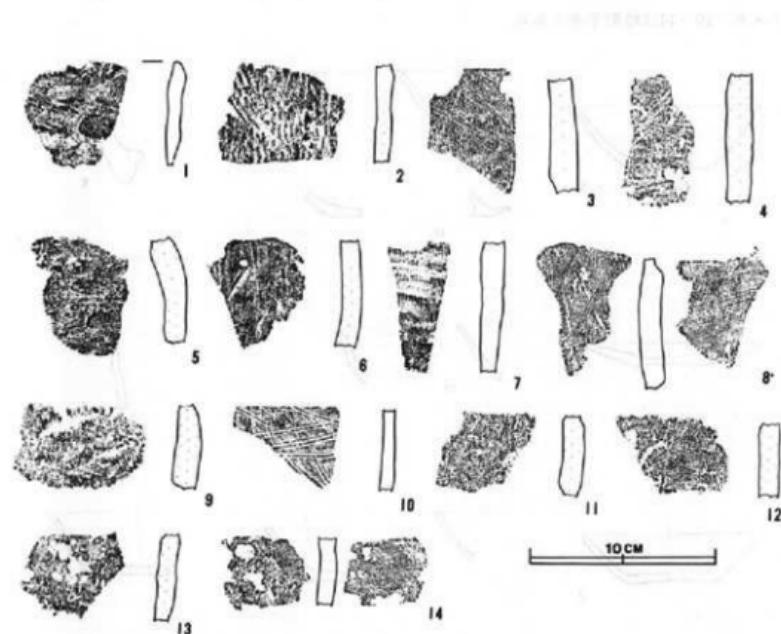


図234 第22号住居址出土土器拓影

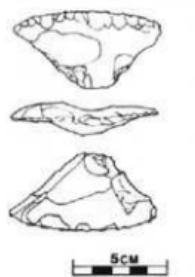


図235
第22号住居址出土石器

11は内外面ともへらなでをしているが、胎土に纖維痕を残し、バミス・砂を含んでいる。色は赤褐色で茅山期と考えられる。

3・4は外面にたての撚糸文を施している。3は内面をへらなで、4は胎土に礫を含む。ともににぶい褐色をしている。夏島期の土器と考えられる。

27は外面に竹管による太い斜の直線を描いている。内面はへらなでをし、赤褐色をしている。時期は不明である。
石器（図235、写86）

1は中央より西約2mのコーナー床より出土した、サイド

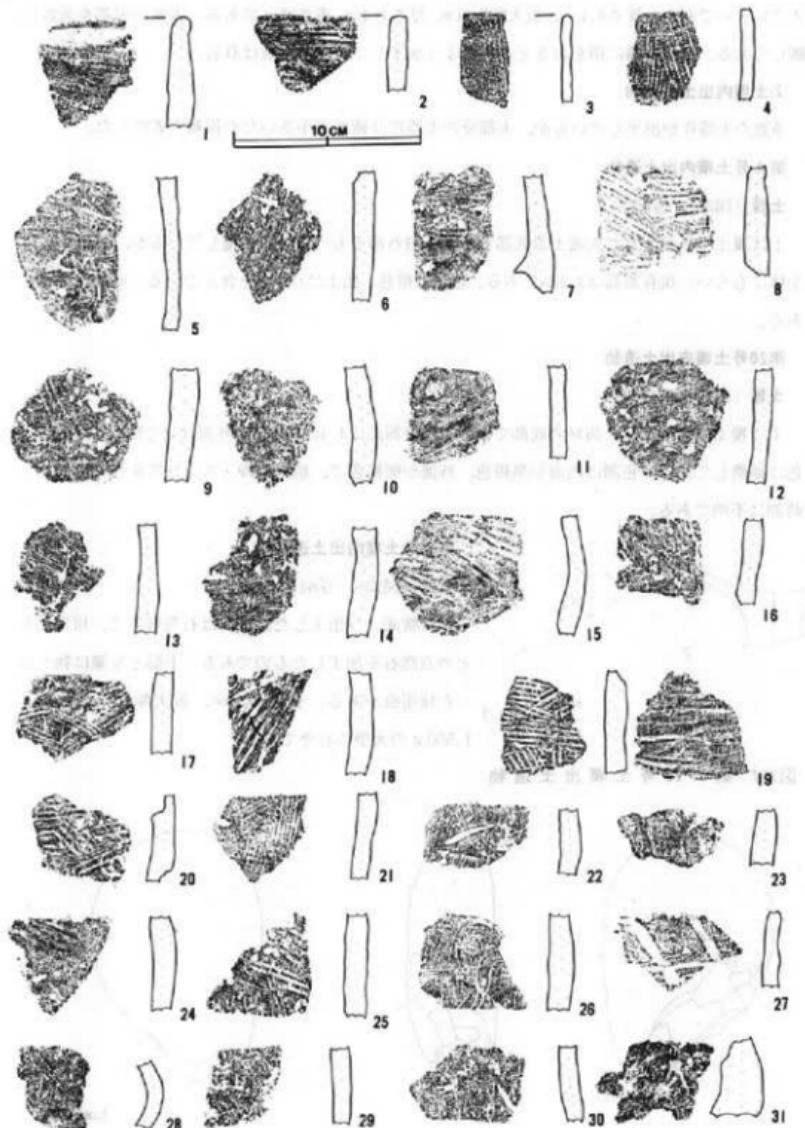


图236 第23号住居址出土土器拓影

スクレーパである。長さ4.1cm、最大幅7.8cm、厚さ1.4cm、重さ35gである。表面の刃部を多数削離してある。中央左端に指をおさえられるよう加工してある。石質は頁岩。

(2) 土壌内出土の遺物

多数の土器片が出土しているが、大部分の土器片は極めて小さいため掲載を省略した。

第4号土壌内出土遺物

土器（図237、写83）

1は覆土より出土した尖底土器底部である。内外面ともヘラなでを施しているが、焼きは弱く全体にもろい。現存器高は3.2cmである。色調は橙色、胎土にバミスを含んでいる。時期は不明である。

第20号土壌内出土遺物

土器（図237、写73）

1は覆土より出土した高坏の底部である。現存器高は4.4cmである。外面はなで整形、内面を黒色に研磨してある。色調は内面が黒褐色、外面が明褐色で、胎土に砂・スコリアを含んでいる。時期は不明である。

第63号土壌内出土遺物

石器（図238、写84）

1は壙底より出土した。石質は石英班岩で、川原石などの自然石を加工したものである。上部と左側に物を擦った使用痕がある。長さ17.4cm、最大幅12.1cm、重さ1,500gの大型の石斧である。

図237 第4. 20号土壌出土遺物

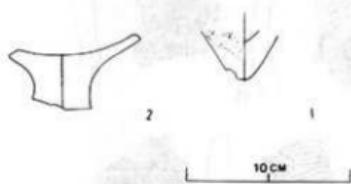


図238 第63号土壌石器

(3)溝内出土の遺物

第1号溝内出土遺物

土器 (図239, 写83)

1はC2ca区内の覆土より出土した尖底土器の底部である。現存器高は4.8cmである。全体にもろく、焼成時の温度が低いと考えられる。色調は内面が黒褐色、外面が橙色および明褐色である。胎土には砂・スコリアを含み、繊維痕を残している。

第2号溝内出土遺物

石器 (図240, 写87)

1はB2hr区内の覆土から出土した。チャート製の石鏃である。長さ2.2cm、最大幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ2gで各方向から剥離されている。基部の左端が消失している。

第6号溝内出土遺物

土器 (図239, 写83)

3はB4区内の覆土より出土した尖底土器の底部である。現存器高は12.2cmである。外面は繊維痕があり、ところどころたてのヘラなでを行っている。内面は低い温度焼成のためか黒褐色をしており、外面と同様、繊維痕、たてのヘラなでがある。外面の色調は明褐色で胎土に砂・スコリアを含んでいる。田戸下層期の土器である。

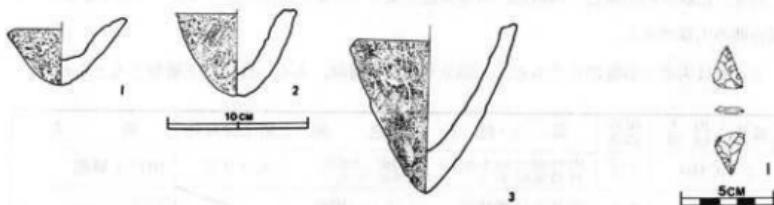


図239 第6号溝その他の出土遺物

図240
第2号溝出土石器

(4)その他の遺構(横列状遺構・ピット群)内出土の遺物

多数の縦文土器片を出土したが、大部分は極めて小さいため掲載を省略した。

土器 (図239, 写83)

2はピット群No.2の柱穴の覆土から出土した尖底土器の底部である。現存器高は6.1cmである。外面の胴部に貝殻条痕、繊維痕が残っている。内面は刺突文、繊維痕がある。橙色をし、胎土に砂・礫を含んでいる。田戸下層期の土器である。

石器 (図241, 写84・85)

1は南東のピット群No.2の1柱穴より出土したものである。花崗岩であるがちろく、くずれやすい。確認面から約20cmの深さに、2つ並んで出土している。重さは1個あたり約1kg程度である。

用途等については不明である。

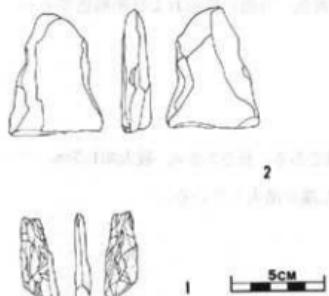


図241 その他の遺構出土石器

1はA1jaの表土より出土した土師器である。台付きで、壺か皿の底部片である。底部外面に「ろ」の墨書きがある。現存器高は2.3cm、底径は6.7cmである。色調は明赤褐色、赤褐色、明赤褐色と交っている。胎土に砂・スコリアを含んでいる。

国分期の土器である。

2~26は尖底土器底部片である。大部分が田戸下層期、あるいは田戸下層期と考えられる。

| 番号 | 出土位置 | 現存器高 | 器の特長 | 色調 | 胎土含有物 | 備考 |
|----|------|------|-------------------|---------------------|-------------|--------------------|
| 2 | C4b4 | 7.3 | 内外面にかすかに貝殻条痕あり | 内面-黒褐色
外面-褐色 | スコリア | 田戸下層期 |
| 3 | C3bs | 4.6 | 内外面に繊維痕 | にぶい橙色 | | もろい
田戸下層期と考えられる |
| 4 | C4aa | 4.5 | 内面に繊維痕
外面に貝殻条痕 | 内面-にぶい褐色
外面-明赤褐色 | | 胎土に繊維痕
" |
| 5 | B3d4 | 4.6 | 外面になで | 灰黄褐色 | 砂 | 内外面に繊維痕
" |
| 6 | B2fs | 4.0 | 内外面に繊維痕 | 内面-黒褐色
外面-にぶい黃褐色 | 多量の砂 | " |
| 7 | B2ho | 4.3 | 外面にヘラなで | にぶい黄褐色 | 砂・礫 | 内面に繊維痕
" |
| 8 | B3ba | 6.2 | 外面に貝殻条痕 | 明赤褐色 | | 内面に繊維痕
田戸下層期 |
| 9 | C4d3 | 4.7 | 内面に繊維痕、横なで | 内面-褐色
外面-にぶい褐色 | | 比較的薄手
" |
| 10 | C3c9 | 4.0 | 内外面に繊維痕 | 赤褐色 | 砂・礫
スコリア | 田戸下層期と考えられる |
| 11 | B2ja | 2.2 | | 明赤褐色 | バミス | " |
| 12 | B4h4 | 6.3 | 内外面に繊維痕 | 橙色 | 礫 | 胎土中に繊維痕
" |

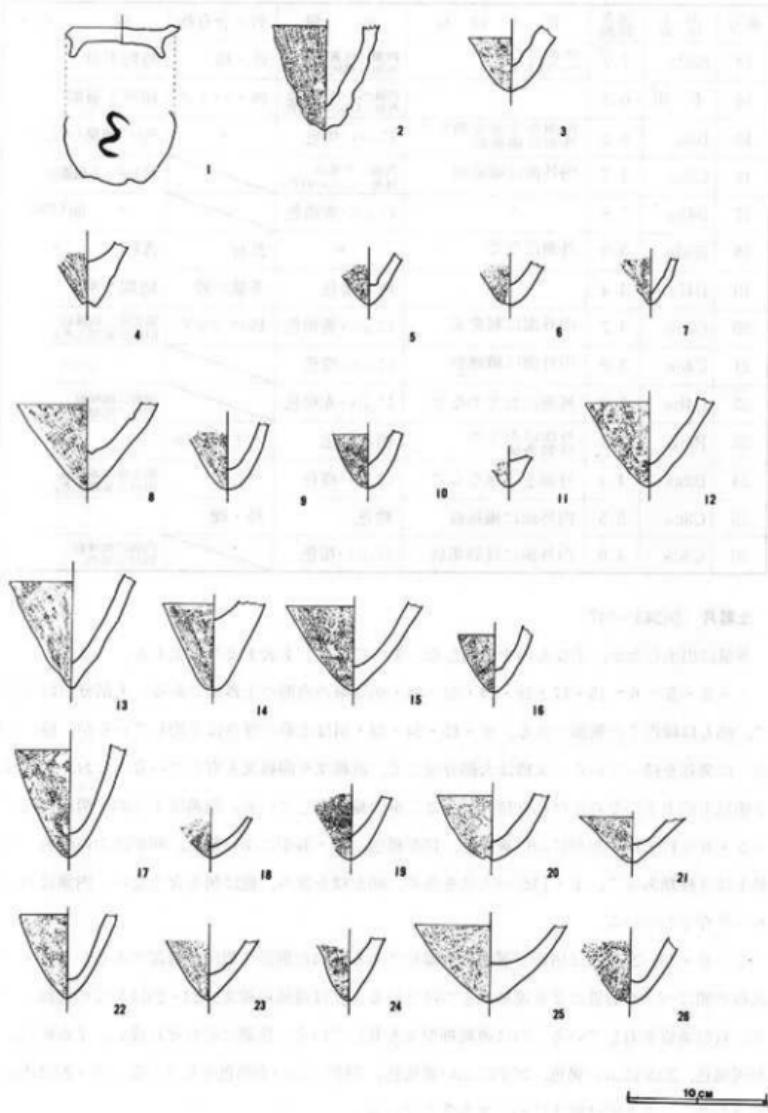


図242 グリッド出土遺物

| 番号 | 出上位 | 現存 | 器の特長 | 色調 | 胎土含有物 | 備考 |
|----|------|-----|---------------------|----------------------|--------|------------------------|
| 13 | B3d2 | 7.9 | 外面にたての
ヘラけすり | 内面一灰褐色
外面一褐色 | 砂・礫 | 時期不明 |
| 14 | 不明 | 6.3 | 〃 | 内面にぶい赤褐色
外面にぶい黄褐色 | 砂・バミス | 田戸下層期 |
| 15 | B3i1 | 6.2 | 内面を丁寧な横なで
外面に織維痕 | にぶい褐色 | 〃 | 田戸下層期と考えられる |
| 16 | C3e3 | 4.7 | 内外面に織維痕 | 内面一黒褐色
外面にぶい褐色 | 〃 | 器上にも織維痕〃 |
| 17 | B4ha | 7.8 | 〃 | にぶい黄褐色 | 〃 | 田戸下層期 |
| 18 | B3ds | 3.9 | 外面になで | 〃 | 長石 | 器手〃 |
| 19 | B4fe | 4.4 | 明赤褐色 | 多量の砂 | 時期不明 | |
| 20 | C2ao | 4.7 | 内外面に刺突文 | にぶい黄褐色 | 砂・スコリア | 器上中に織維痕
田戸下層期と考えられる |
| 21 | C4ce | 3.0 | 内外面に織維痕 | にぶい橙色 | 〃 | もろい〃 |
| 22 | C4be | 5.9 | 外面にたてのなで | にぶい赤褐色 | 〃 | 内面に織維痕
田戸下層期 |
| 23 | B3io | 4.1 | 外面にたての
貝殻条痕 | 明赤褐色 | バミス・砂 | 〃 |
| 24 | B2ga | 4.4 | 外面を丁寧ななで | にぶい橙色 | バミス | 胎土中に織維痕
田戸下層期と考えられる |
| 25 | C3cs | 5.5 | 内外面に織維痕 | 橙色 | 砂・礫 | 〃 |
| 26 | C3ca | 4.6 | 内外面に貝殻条痕 | にぶい褐色 | 〃 | 内面に織維痕
田戸下層期 |

土器片 (図243~247)

多量に出土したが、主なものを掲載した。すべてグリッド表土より出土する。

1・3・5・6・15・17・18・24・32~34・86は壺の内期の土器片である。大部分が口縁部片で、86も口縁近くの調部である。5・15・24・33・34は十器の厚さは平均しているが、他は口縁近くに突起を持っている。文様は大部分同じで、直線文や曲線文を有している。なお、1・6は2個以上の上下にならんだ孔を持ち、3は二重の輪を有している。色調は1と33が明赤褐色、3・5・6・17・18・32がにぶい黄褐色、15が褐色、24・34がにぶい褐色、86がにぶい橙色である。胎土は3種類あって、1・15がバミスを含み、86が礫を含み、他は何も含まない。内面は大部分がヘラなでしている。

7・9・23・25・74は田戸下層期の土器片である。74が調部で他は口縁部である。7は沈線と沈線の間にヘラか竹管による連続文をつけており、9は連続斜線文、23・25はたての沈線とその下に貝殻条痕を有している。74は連続押型文を有している。色調はそれぞれ違い、7が橙色、9が灰褐色、23がにぶい褐色、25がにぶい黄褐色、74がにぶい赤褐色をしている。7・23は内面をヘラなでし、9と25は胎土にバミスを含んでいる。

16・78・79・85・87は諸中期の土器片である。横およびたての沈線を何本かまとめて施している。色は16が赤褐色、78・79が橙色、85・87がにぶい黄褐色である。78・79は内外面に織維痕を



図243 グリッド内出土土器拓影(1)

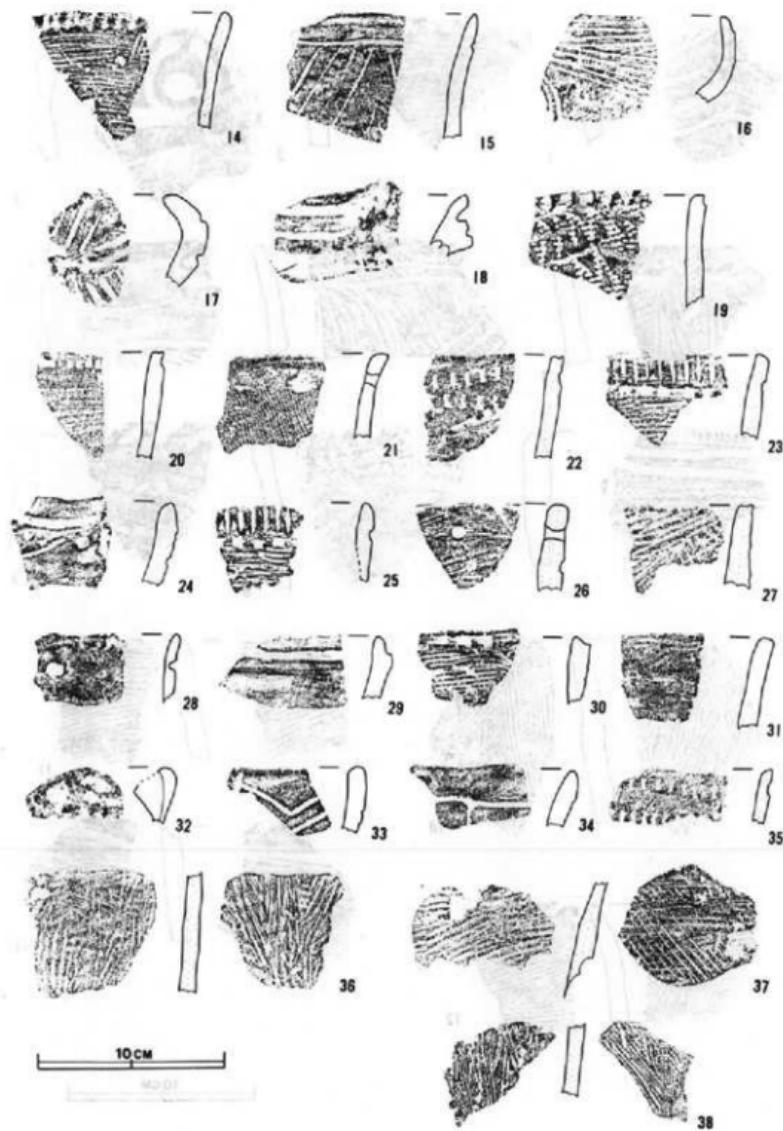


図244 グリッド内出土土器拓影(2)

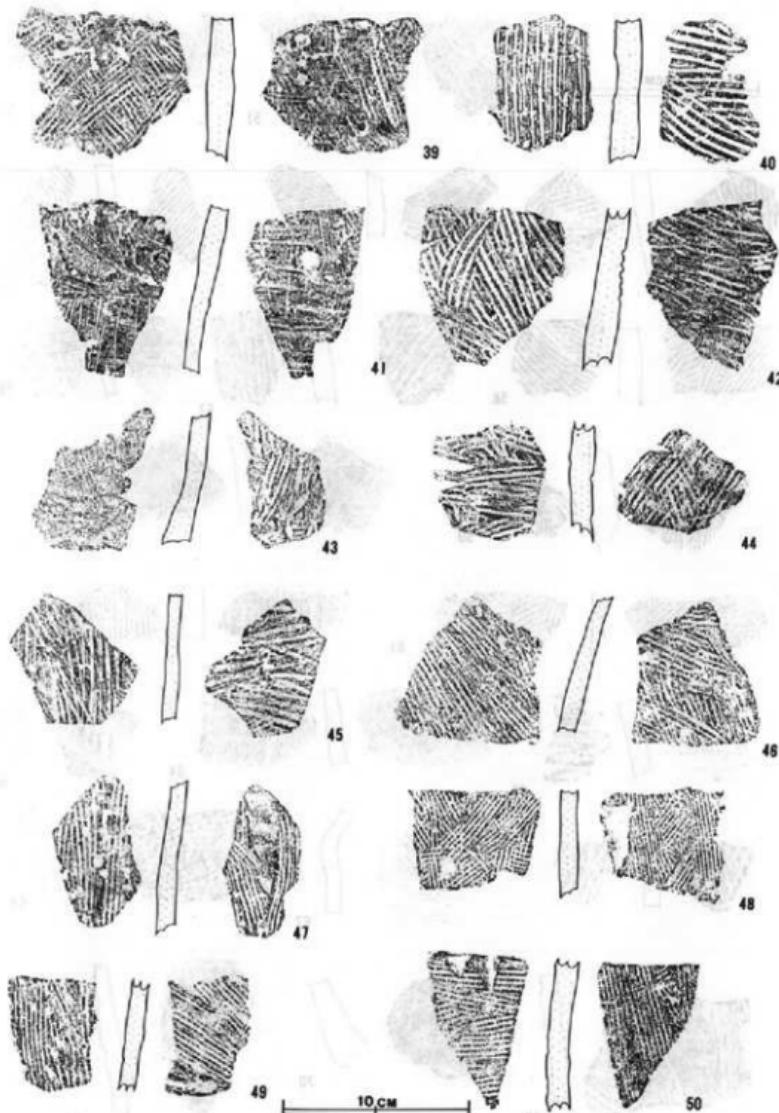


図245 グリッド内出土土器拓影(3)

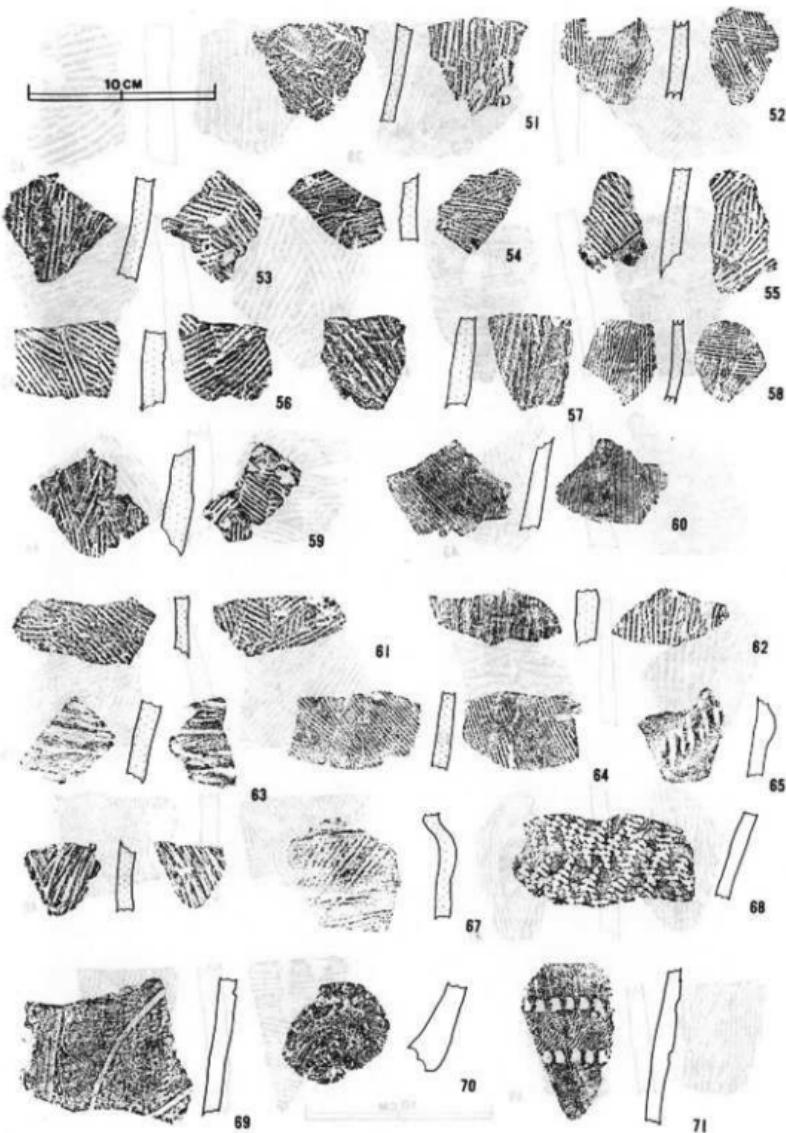


図246 グリッド内出土土器拓影(4)

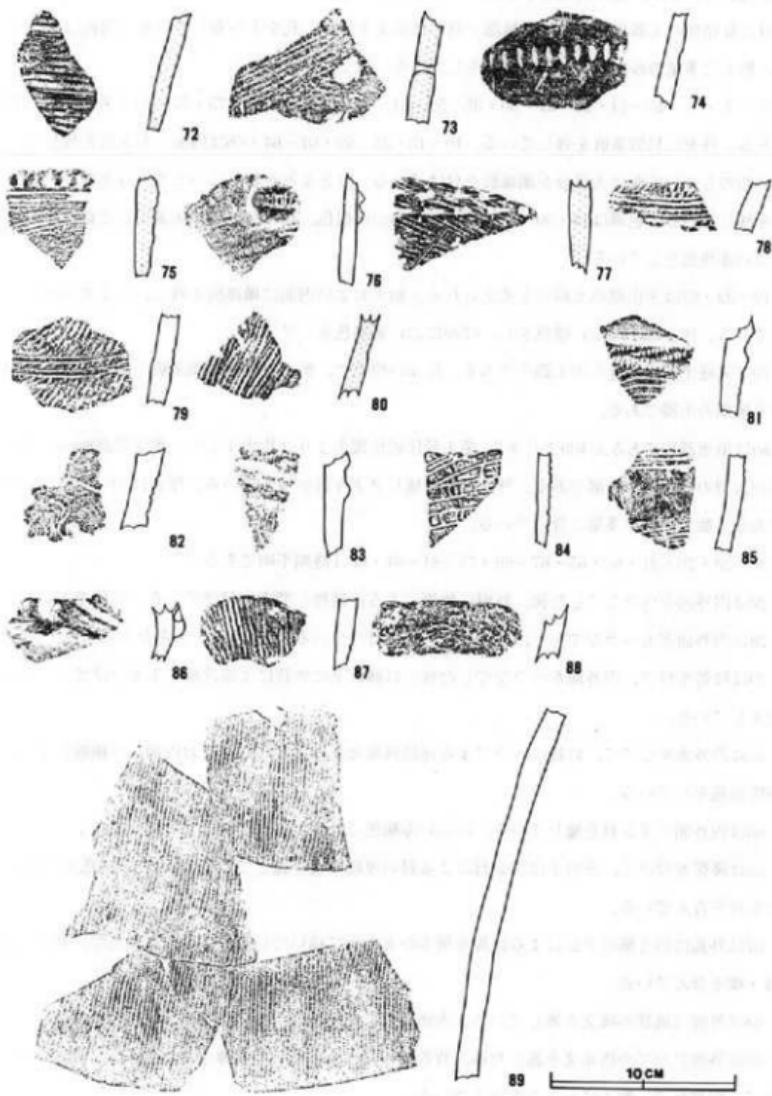


図247 グリット内出土土器拓影(5)

少し残しているが、他は内面をヘラなどでしている。

21は夏島期の土器片である。口縁部に斜の撚糸文を付け、孔を1つ有している。内面はヘラなどで、胎土に多量の砂を含み、灰黄褐色をしている。

2・4・8・10~14・26・27・30・35~59・61~64・66・72・73・75・77・80は茅山期の土器である。外面に横縞条痕を残している。10~13・35~59・61~64・66は内面にも条痕を残している。他のものの内面は大部分が横縞条痕を付けている。ほとんどが胎土にバミス・砂を含み、横縞条痕を残している。色調は14・30・42・45・46・66が灰褐色、10・26・40が灰黄褐色で他はすべてに赤褐色をしている。

19・22・67は茅山期の土器片と考えられる。胎土および内面に横縞条痕を残し、バミス・砂を含んでいる。19・22がにじい橙色をし、67がにじい黄褐色をしている。

70は尖底土器底部近くの上器片である。にじい橙色で、胎土と内面に横縞条痕を残している。田ノ下層期の土器である。

89は須恵器片である。C4c9より8片、第1号住居址覆土より3片出土した。推定器高80cm~1m程の大型の壺か甕の一部である。外面は稚を施しタタキ目を残している。厚さは均一ではなく1cmである。胎土に礫を多量に含んでいる。

20・28・29・31・60・65・67~69・71・81~84・88は時期不明である。

20は内外面をヘラなどでし、外面に竹管による連續押し型文を付けている。橙色である。

28は内外面ともヘラなどでし、外面に穴を1つ付けている。胎土にバミスを含み褐灰色である。

29は陰帯を付け、内外面をヘラなどでし、口縁直下に竹管による沈線を1本付けている。褐色をしている。

31は内外面をなでて、口縁にヘラによる連続斜線文を施している。なお内面には横縞条痕を残し、明赤褐色をしている。

60は内外面にクシ目を施している。にじい赤褐色で、胎土にバミスを含んでいる。

65は陰帯を付け、その上にクシ目による新の連續線文を施している。にじい黄褐色をし、胎土に雲母を含んでいる。

67は外面に斜と横のクシによる沈線を何本かまとめて描いている。にじい黄褐色で、胎土に砂・礫を含んでいる。

68は外面に波状の繩文を施している。内面はヘラなどでし、にじい黄褐色をしている。

69は外面にたての撚糸文を施した後、竹管とヘラによる直線、曲線を描いている。内面はヘラなどで、明褐色で、胎土にバミスを含んでいる。

71は内外面をなでた後、外面に竹管による連續押し型文を2列付け、その列の間に撚糸文を施している。にじい黄褐色である。

81は隆帯を付け、内外面をなでた後、隆帯に繩文を施し、隆帯の下に竹管による沈線を何本か付けている。色は灰黄褐色で胎土に礫を含んでいる。

82は内外面をなでた後、外面に連続爪型文と、ヘラによる曲線を描いている。灰黄褐色で、胎土にパミスを含んでいる。

83は隆帯を2列付け、隆帯の部分に繩文を施し、隆帯の下をヘラによる曲線2本を描いている。

81と同時期の上器片と考えられる。色は灰黄褐色で、胎土に礫を含んでいる。

84は内外面を丁寧にヘラなでた後、外面に竹管による沈線を付け、沈線の間を竹管による連續押し型文を施している。にぶい黄褐色をしている。

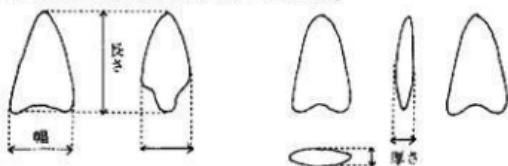
88は平底型の上器の底部に近い觸部片である。にぶい橙色で胎土に礫を含んでいる。

石器(図248~251、写84~87)

| 番号 | 器種 | 出土地 | 石質 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 備考 |
|----|--------|------|--------|------|------|-----|-------|-----------------|
| 1 | 石斧 | B2hs | 花崗岩 | 17.2 | 11.3 | 4.7 | 1.600 | 刃部に使用痕あり |
| 2 | " | B4ea | 白雲母花崗岩 | 10.1 | 6.6 | 2.1 | 140 | 両脇、刃部を剥離している |
| 3 | " | C4a7 | 砂岩 | 8.3 | 3.9 | 3.0 | 250 | 自然石利用、先端の一部消失 |
| 4 | " | C3bs | 花崗岩 | 7.5 | 3.4 | 1.2 | 50 | 刃部を研磨 |
| 5 | " | C3hz | 頁岩 | 7.7 | 5.0 | 2.3 | 65 | |
| 6 | " | B3ho | 砂岩 | 3.3 | 2.7 | 0.9 | 15 | 刃部を表裏面とも研磨 |
| 7 | 石棒 | B4h7 | " | 10.6 | 3.1 | 2.9 | 235 | 裏面に使用痕あり |
| 8 | " | B4j8 | 石灰質砂岩 | 6.7 | 3.3 | 1.9 | 75 | |
| 9 | " | B4f4 | 玄武岩 | 6.4 | 2.6 | 1.2 | 30 | 使用痕あり |
| 10 | " | C3i8 | 砂岩 | 8.4 | 3.2 | 1.7 | 60 | |
| 11 | " | C2a4 | " | 6.8 | 2.7 | 1.1 | 20 | |
| 12 | " | 不明 | " | 9.1 | 3.3 | 1.5 | 70 | |
| 13 | " | 不明 | " | 5.5 | 3.0 | 1.1 | 50 | |
| 14 | " | B4in | " | 6.3 | 2.9 | 2.9 | 30 | |
| 15 | 擦石 | C3az | 粘土質石灰岩 | 10.5 | 7.6 | 3.8 | 475 | 下部に使用痕あり |
| 16 | スクレーパー | C4ci | 頁岩 | 5.0 | 4.3 | 1.6 | 30 | |
| 17 | 石鍤 | C3i4 | 溶結凝灰岩 | 4.5 | | 1.1 | 35 | 打点を入れてくぼみを作っている |
| 18 | " | 不明 | 砂岩 | 4.5 | 5.7 | 0.9 | 25 | 磨擦によりくぼみを入れている |
| 19 | 石槍 | C3ds | チャート | 5.0 | 2.0 | 0.9 | 10 | |
| 20 | 石匙 | B3j4 | 黒曜石 | 4.0 | 1.9 | 0.7 | 5 | 先端部が消失 |
| 21 | 石鏃 | C3a4 | チャート | 3.2 | 1.7 | 0.5 | 4 | |

| 番号 | 器種 | 出位置 | 石質 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 備考 |
|----|----|------|------|-----|-----|-----|----|-------------|
| 22 | 石鑿 | B2h7 | 蛇紋岩 | 2.0 | 1.6 | 0.4 | 2 | 先端はさほど鋭利でない |
| 23 | " | B3j3 | 黒曜石 | 1.6 | 1.3 | 0.3 | 1 | 左の柄の部分が消失 |
| 24 | " | B4b2 | " | 2.1 | 1.7 | 0.7 | 2 | やや厚手である |
| 25 | " | C4a3 | " | 1.9 | 1.4 | 0.6 | 2 | 厚手 |
| 26 | " | B3d8 | " | 2.4 | 1.7 | 0.4 | 2 | 上部半分が消失 |
| 27 | " | B3j3 | " | 2.5 | 1.7 | 0.3 | 3 | |
| 28 | " | B4f2 | チャート | 2.0 | 1.4 | 0.3 | 2 | 先端部が消失 |
| 29 | " | B3d8 | 黒曜石 | 1.5 | 1.3 | 0.4 | 5 | 先端部が消失 |
| 30 | " | C4b7 | " | 3.3 | 2.4 | 1.4 | 10 | |
| 31 | " | C4a4 | チャート | 3.8 | 2.9 | 1.3 | 5 | |
| 32 | " | C4a4 | " | 3.6 | 2.2 | 0.8 | 10 | |
| 33 | " | 不明 | 黒曜石 | 1.8 | 1.4 | 0.3 | 2 | |
| 34 | " | " | " | 2.0 | 1.4 | 0.3 | 2 | |
| 35 | " | " | " | 1.5 | 1.6 | 0.3 | 2 | 先端部が消失 |
| 36 | " | " | " | 1.4 | 1.2 | 0.4 | 2 | 右柄部が消失 |
| 37 | " | " | " | 3.4 | 3.0 | 0.9 | 9 | |
| 38 | " | " | " | 2.5 | 2.5 | 0.8 | 6 | |
| 39 | 剥片 | C4a4 | 砂岩 | 2.7 | 2.6 | 1.0 | 10 | |
| 40 | " | B3f4 | チャート | 1.9 | 1.7 | 0.3 | 3 | |
| 41 | " | 不明 | 黒曜石 | 1.6 | 1.7 | 0.3 | 1 | |
| 42 | 礫 | B4j8 | 頁岩 | | | | | |
| 43 | 石斧 | C4a3 | 緑色頁岩 | 8.9 | 5.5 | 1.6 | 70 | |
| 44 | 礫 | C4ca | 頁岩 | | | | | |
| 45 | " | C4e6 | 砂岩 | | | | | |
| 46 | " | C4b6 | チャート | | | | | |
| 47 | 剥片 | C4a4 | 頁岩 | 4.6 | 2.8 | 1.0 | 10 | |
| 48 | 石鑿 | C4c9 | " | 3.9 | 2.9 | 0.9 | 4 | |
| 49 | 剥片 | C4a4 | 黒曜石 | 3.3 | 3.1 | 0.6 | 5 | |
| 50 | " | 不明 | チャート | 3.3 | 2.8 | 0.5 | 2 | 左端が鋭利 |
| 51 | " | " | 頁岩 | 4.0 | 1.6 | 0.7 | 5 | |
| 52 | 石鑿 | " | " | 3.3 | 2.0 | 0.7 | 5 | |
| 53 | 剥片 | " | " | 2.8 | 1.0 | 0.6 | 3 | |

註1 石器の長さ、幅、厚さは次のように測った。



註2 石質は、保育社「標準原色図鑑全集第6巻岩石鉱物」昭和49年に寄った。

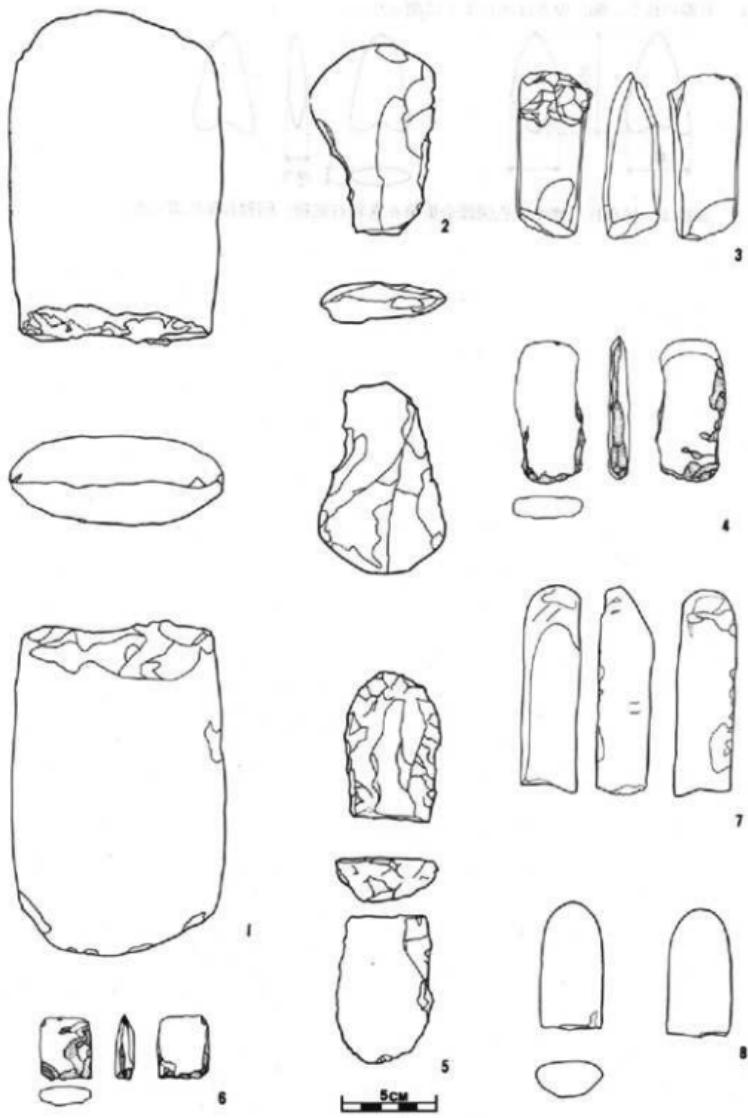


図248 グリッド石器(1)

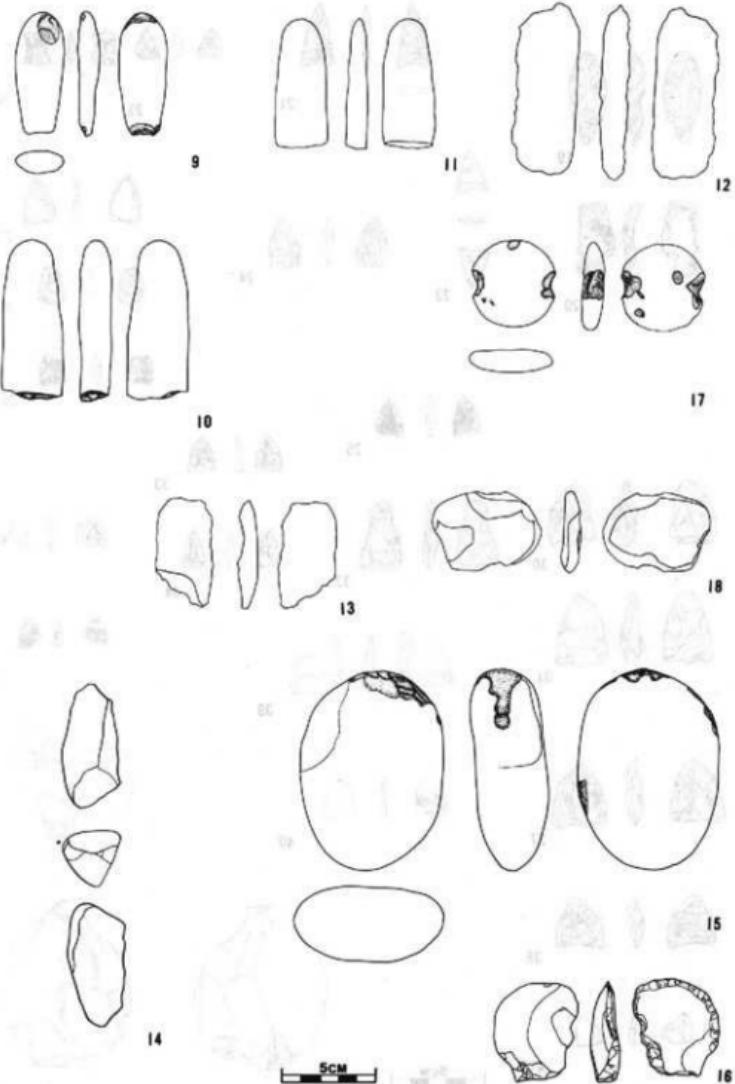


図249 グリット石器(2)

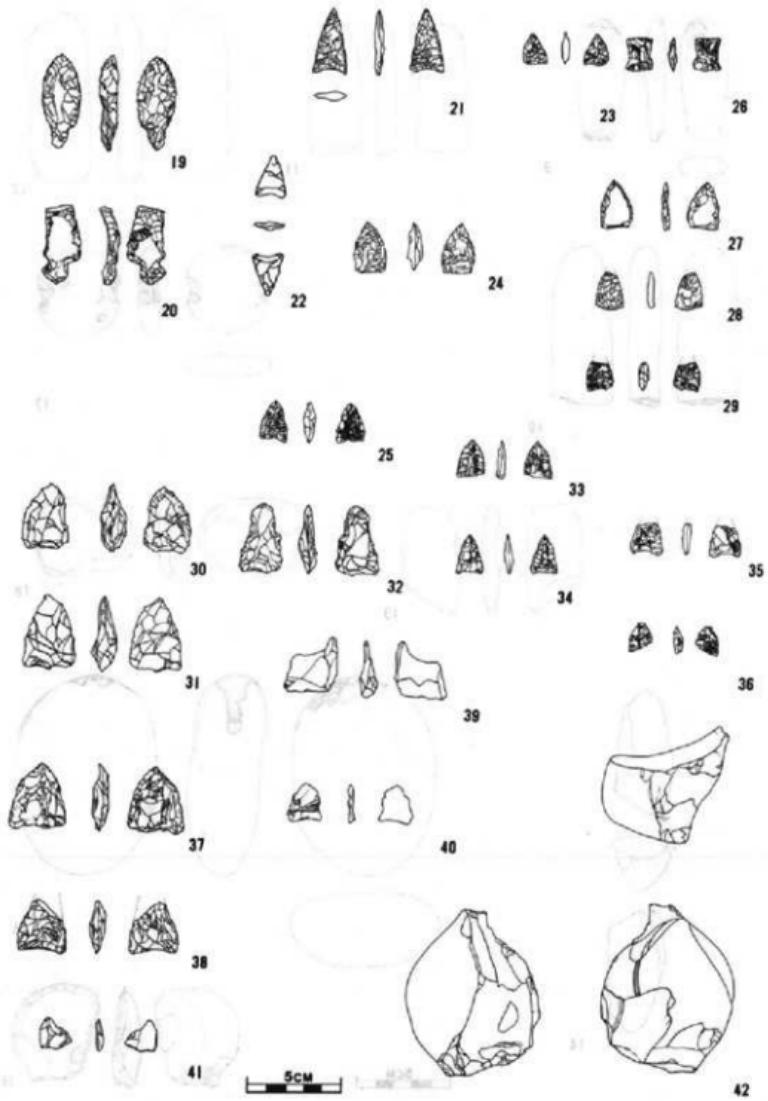


図250 グリッド石器(3)

「過渡的山貝形器」(上)と「山貝形器」(下)の部分は日本海側の「山貝形器」(上)と「山貝形器」(下)の部分を示す。

は図版(4)

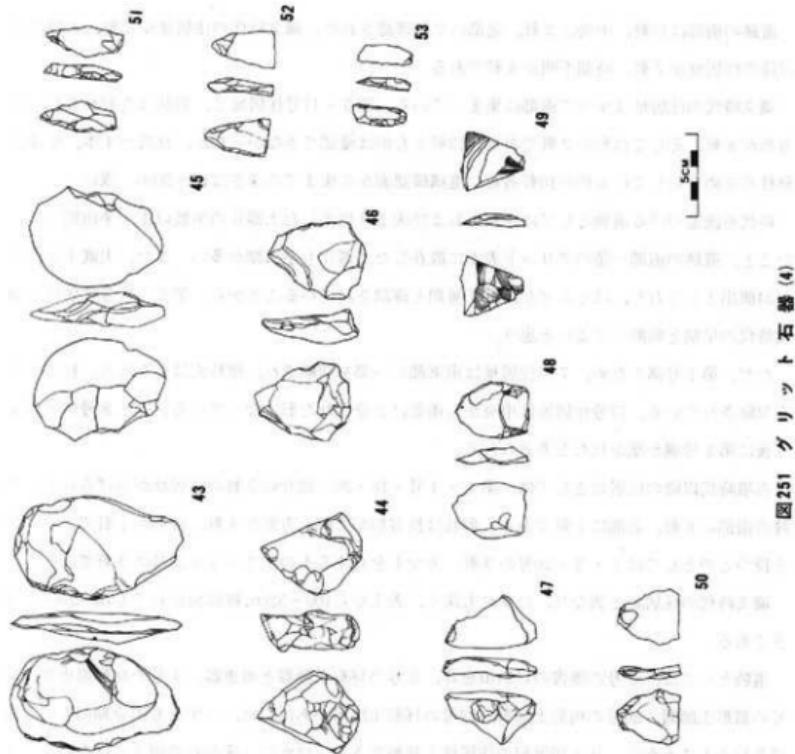


図251 グリット石器(4)

第3節 まとめ

今城遺跡において確認された遺構は住居址23軒、土塙72基、溝6条、柵列状遺構3列、ピット群2基である。

1. 住居址

遺跡の南部に19軒、中央に2軒、北部に2軒確認された。縄文時代の住居址が13軒、古墳時代以降の住居址が7軒、時期不明が3軒である。

縄文時代の住居址はすべて南部に集まっている。第5～17号住居址で、形状は方形が3軒、長方形が8軒、そして台形が2軒である。13軒とも炉は確認できなかったが、柱穴が4本、壁際に壁柱穴をめぐらしているのが10軒ある。遺構確認面から床までの深さは10～20cmと浅い。

時代を決定づける遺物としては、覆土および床より出土した土器片の半数以上が茅山期であったこと、遺跡の南部一帯のグリッド表土に散在した土器片も茅山期が多い。また、尖底土器底部が34個出土しており、ほとんどが田戸下層期と確認されていることから、第5～17号住居址は縄文時代の早期と判断してよいと思う。

ただ、第1号溝のため、7号住居址は南東部の一部を切断され、壁柱穴はもちろん、柱穴1本を欠除されている。12号住居址は中央から南北に2分された形になっている。7・8号住居址より後に第1号溝が整かれたと考えられる。

古墳時代以降の住居址としては、第1～4号・18・20・22号の7軒の住居址があげられる。遺跡の南部に6軒、北部に1軒である。形状は長方形が2軒、方形が4軒、台形が1軒である。がを持つものとしては1・2・20号の3軒、カマドを有するものが3・4・22号の3軒である。

縄文時代の住居址と異なり、いずれも深く、表土から100～52cm、確認面からでも70～30cmの深さである。

遺物としては、2号の墨書きの环形須恵器、3号の环形土師器と須恵器、4号の环形須恵器、18号の皿形土師器、20号の椭形土師器、22号の环形土師器があげられ、いずれも国分期のものと確認されるところから、9～10世紀の住居址と判断できる。ほかに、床からの出土ではないが、1号住居址の奈良三彩、3号住居址の綠釉の淨瓶があるが、前者は8世紀、後者は横投古窯の出土（註3）時期から考えても10世紀まで下るであろう。（註4）

時期不明の住居址は第19・21・23号住居址の3軒で、いずれも台形の形状をしている。19・23号が中央部、21号が北部に位置している。深さは50cm程度である。

1～4号・18～23号の10軒の住居址は、形状・炉・カマド・位置から二組ずつに分けられる。

1・2号は南東部の端に接近して存在し、同規模の炉を持っている。遺物も、土師器の長袋形土器が双方の住居址より出土しているので、同時期かと思われる。

20・21号は50m近く離れているが、どちらも遺跡の北部にあり、形状も同じ台形をしている。炉は20号が径約50cm、21号が約70cmであるが、20号は中央より北部に、21号は中央より西部に離れている点が違うところである。遺物は20号が完形の土師器を出土しているが、21号は覆土より縄文土器片を多数出土している。覆土より出土しているので、住居址廃絶後流れ込んだとも考えられ、時期を決定づける資料ではない。

19・23号は遺跡の中央に位置し、同じ台形の形状をしている。ともに炉・カマドの類はなく、同時期かと考えられる。

3・4・22号はそれぞれ50m程離れているが、方形で、カマドを有し、壁高や壁構を持つところで、形状・付属設備が似ている。またカマドの向きも、3軒とも北西を向いている。

遺物は国分期の土師器・須恵器が出土している。

3号と18号は、出土遺物が類似していて、特に墨書きの土師器を出土している。

このように、1号と2号、3号と4号、22号・18号、19号と23号、20号と21号が同時期の住居址2軒ずつ存在しているように思われる。

ほかに特記することは、3号住居址の出土遺物に22号住居址の破片が接合できたことで、確實に同時期と判断できる。また3号のカマド支柱がフイゴの羽口であること、22号から鉄滓が出していることから、両住居址は製鉄址および工房址に関連あるものと考えられる。さらに、3号住居址は、柱に使用した丸太の炭化物が出土していること、遺物に2次焼成を受けているのが多いことから、火災に遇って廃絶されたと判断できる。

当遺跡の近くには、同町内にかおすA遺跡。城内遺跡があった。両遺跡とも国分期の住居址が確認され、同時代の遺物を出土している。少し離れるが、当財団調査課が昭和52~53年に調査し(註5)

た外八代遺跡がある。やはり、国分期の土師器・須恵器の环形土器を出土している。また、笠間市所在の石井台平安時代集落跡からはヘラ書きをしてある环形土師器、福島県の国造遺跡からは

猪俣古窯系の灰釉瓶を出土し、11世紀前半の住居址を確認している。長野県の福島遺跡からは、内面黒色研磨の环形土師器、墨書き器、灰釉の陶器を出土し、9~10世紀の住居址を検出した。(註6)

当遺跡も地理的考察、時代的考察から、縄文時代早期に居住され、その後9世紀の前半から10世紀の中頃まで居住されたと考えてほんに人道ないと思う。(註7)

2. 土 壤

土壤は72基確認された。遺跡のA3・A4・B2・B3・C3・C4区に集中している。形状は第1号が長方形、5・14・15・17・19・20・26・27・32・48・49・50・52・66号が不整形をしているほか

は円形および椭円形である。横底は、水平・平坦の形状が最も多く、次に平底ではあるが、いくぶん坂底をなしているもの、レンズ状に中央がくぼんでいるもの、中段を形成しているもの、二重の底になっているものの順で多い。

1号土壙は農作物の貯蔵に利用されたためか覆土より生姜の皮が多量に出た。5～12号土壙が一集団を形成し、堀立柱建築状を呈しているが、正確に判断することはできない。4号・69号土壙が比較的大きなもので、横底が中段を形成して、規模・形状等が似ており、出土遺物も小さな織文土器片を出土しているので、両土壙は同時代のものと判断される。20号土壙は、径3mを越し、深さも2.9mと大規模な土壙である。遺物は覆土から高环の基部が出土している。底部近くの覆土出土なので一応古墳時代以降と考えることができる。

以上から、1号は近代のもの、4号・69号が織文時代、20号土壙が古墳時代以降のものと考えられるが、他の土壙は時期不明である。

3. 溝

溝は6条確認された。遺跡の南部を南西から南東に走る1号、南西から北西に大きく曲がる2号、1号と2号を結ぶ3号、北西から南西に走る4号、南東を斜に横切る5号、北東から南東に向かう6号と、遺跡の中央をとり囲むように確認された。しかし、前述の住居址群とは関係はないようである。

1～3号は相互に接している関係、レベルも同じ高さで同時期と考えられる。

4号と6号は調査区の北側から始まっていて、溝の断面形状が似ている。4号は調査区外に伸びている可能性があるが、6号は途中で切れている。

5号溝は遺跡の最南端に位置し、しかも、トレーナーを入れて表土を排除した際に確認されたものである。

1～6号のいずれも時期を決定する遺物が出土しないので時期不明であるが、1・2・6号の溝は途中で切れている点から排水溝として使用されたと考えられる。また、5号は位置する場所断面形状より根切り溝の性格が強い。

4. 横列状造構

横列状造構は3条確認された。遺跡の南西部に1条、南東部に2条である。1号横列は北西から南東の方向に配列しているが、2・3号横列は位置も接近し、北東から南西に向かって配列しているのでこの2条は同じ時期と考えられる。柱穴の数は平均20本前後で、3～5列並んでいる。

3条とも時期は不明であるが、1号横列は第1～3号溝に開まれているので、この造構との関連がある。

参考文献

- 註 1 奈良国立文化財研究所『よみがえる奈良—平城京』昭和53年
- 註 2 平凡社『陶磁大系5 三彩 織輪 灰釉』昭和48年
- 註 3 石川県美術館『猿投古窯』昭和49年
- 註 4 東京堂出版『上師式土器集成1・3』昭和46年
- 河出書房『日本の考古学V 古墳時代下』昭和41年
- 註 5 茨城県『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』昭和49年
- 註 6 財団法人茨城県教育財團『外八代遺跡』昭和54年
- 註 7 笠間市教育委員会『うら山古墳・石井台平安時代集落跡』昭和47年
- 註 8 国造遺跡発掘調査会『国造』昭和53年
- 註 9 国立大学考古研究室『福島遺跡』昭和43年

